岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 (11)

中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査

6

1976年3月

岡山県教育委員会

中国縦貫自動車道
建設に伴う発掘調査

6

序

大阪府下吹田インターチェンジを起点として西走する中国縦貫自動車道は，昭和50年度岡山県落合インターチェンジまで開通のはこびとなりました。この道路建設事業にかかる埋蔵文化財発掘調査は，文化庁と日本道路公団との間で締結された埋蔵文化財の取り扱いに関する「覚書」にもとづき，岡山県教育委員会の直営事業として昭和43年度以来実施してまいったところであります。

本書はこの発掘調査に係る報告の第６分冊目にあたり，落合町以西のいわゆる第二整備区間に所在する須内遺跡・谷尻遺跡をふくむ７遺跡について収録したものであります。

本報告書は限られた整理期間のなかで執筆，収録したもので内容的には不十分な点があるかと思いますが，これが県北の歴史に新たな一頁を書き加えるための素材として御活用いただけるならば望外の喜びとするところであります。末筆ながら本発掘調査の実施にあたって，日本道路公団並びに中国縦貫自動車道埋蔵文化財保護対策委員会をはじめ関係地元教育委員会，その他関係各位のひとかたならぬ御協力と御指導をいただいたことに対し厚くお礼申しあげます。

昭和51年３月

岡山県教育委員会

教育長　小　野　啓　三

例　　言

1. 本調査報告書は，日本道路公団の委託により，岡山県教育委員会が実施した中国縦貫自動車道建設用地にかかる埋蔵文化財の緊急発掘調査の概要である。
2. 岡山県内の発掘調査は，第一次整備区間と，第二次整備区間に分れ，第一次整備区間では，25遺跡あった。昭和44年３月久米郡久米町久米廃寺に着手して以来，昭和48年６月30日英田郡作東町高本遺跡の調査終了まで，じつに４年３カ月を要した。この調査に係る報告書は５分冊に分け刊行された。第二次整備区間の発掘調査は進行中であるが，発掘調査の終了したものから逐次刊行していくことになり本調査報告書はその第６分冊である。現在発掘調査が進行中である。
3. 中国縦貫自動車道埋蔵文化財保護対策委員会の設置については，昭和42年５月，岡山県考古学研究者の会からの申し入れに基づいて，昭和51年３月現在対策委員に下記の諸氏を委嘱している。

勝央中学校教諭	浅野克己	（昭和47年11月～）
岡山大学教授	近藤義郎	（昭和47年11月～）
津山みのり学園	植月壮介	（昭和44年４月～）
院庄小学校教諭	土居・徹	（昭和44年４月～）
津山高等学校教諭	宗森英之	（昭和47年11月～）
津山市文化財保護委員	渡辺健治	（昭和44年４月～）

4. 調査は，岡山県教育委員会文化課（昭和44年度は社会教育課）が，埋蔵文化財保護対策委員会の助言をうけて実施した。

以下，年次ごとに構成員と，調査遺跡名をあげる。なお，昭和44年度～昭和47年度の構成員調査遺跡名については既刊第１～５分冊を参照されたい。

昭和48年度

担当調査員は津山教育事務所兼務であった。

文化課

教育次長（文化課長事務取扱い）	岡田政敏
参事	富岡敬之
課長補佐	水川富貴男
文化財主幹	浅原健
文化係長	守屋明
主任	渡辺武彦
文化財二係長	岡本明郎
主任	大山行正
文化財保護主事	河本清（７月10日付　津山市教育委員会へ出向）
〃	栗野克己　橋本惣司

主　事　新東晃一（6月16日付　鹿児島県教育委員会へ転出）
〃　田仲満雄　松本和男　井上　弘
〃　岡田　博　山磨康平　高畑知功
〃　二宮治夫　浅倉秀昭

津山教育事務所

所　長　宮島久夫
次　長　赤木　茂
庶務係長　田中篤周
主　事　清輔脩身　難波友弘

調査遺跡名

高本遺跡・小中遺跡・下市瀬遺跡（いずれも前年度より継続調査，報告書既刊），旦原遺跡，須内遺跡，宮の前遺跡，備中平遺跡，谷尻遺跡（第一次），桃山遺跡（第一次），植木遺跡，空古墳（第一次）

昭和49年度

本年度は，中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査を，津山教育事務所が担当することになり，調査員は文化課から津山教育事務所へ配置換となった。

文化課

文化課長　小林孝男
参　事　富岡敬之
課長補佐　（文化財二係長事務取扱）西口秀俊
主　任　光吉勝彦
文化財保護主事　葛原克人　伊藤　晃
主　事　枝川　陽　下沢公明　樋口啓子

津山教育事務所

所　長　菱川　豪
次　長　赤木　茂
庶務係長　田中篤周
主　任　大山行正
主　事　難波友広　山本政昭
文化財保護主事　栗野克己　（社会教育課）橋本惣司
主　事　田仲満雄　井上　弘　山磨康平
〃　高畑知功　二宮治夫　浅倉秀昭
〃　竹田　勝（3月1日採用）

須内遺跡・宮の前遺跡（共に48年度より継続），谷尻遺跡（第二次），桃山遺跡（第二次），戸

谷遺跡，塔の畝遺跡，青地遺跡，岩倉古墳群，岩倉遺跡

昭和50年度

中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査は，本年度から新見市以西の各遺跡についても着手することになり，距離的に見ても行政上から見ても津山教育事務所が担当することは困難となった。文化課，津山・高梁両教育事務所が協議した結果，48年度からの継続調査中の遺跡については津山教育事務所で，岩倉遺跡以西については高梁教育事務所でそれぞれ担当することとなった。なお，旦原遺跡から青地遺跡までの報告書作成のための整理は津山収蔵庫で行なった。このため，調査員は文化課に配置換え（高梁教育事務所兼務）となり，48年度から継続調査中の遺跡担当調査員は終了するまでおよび報告書作成担当調査員は一定期間（1～3ケ月）津山教育事務所兼務となった。

文化課

文化課長	小林孝男		
参事	富岡敬之		
〃	西口秀俊（課長補佐二係長事務取扱）		
主任	光吉勝彦		
文化財保護主事	葛原克人	山磨康平	正岡睦夫
	下沢公明	岡田博	高畑知功
	井上弘		
主事	田仲満雄	二宮治夫	浅倉秀昭
〃	竹田勝	福田正継	友成誠司

津山教育事務所

所長	菱川豪
次長	吉田賢吾
主幹	田中篤周（庶務係長事務取扱）
主任	大山行正
主事	山本政昭

高梁教育事務所

所長	田井治太郎
次長	小林克己
主幹	守屋明
庶務係長	小野茂正
主事	丸尾洋幸　藤井守雄

調査遺跡名

谷尻遺跡・桃山遺跡（共に48年度より継続），空古墳，岩倉遺跡，岩倉古墳群（共に前年度より継続），宗金遺跡，横見古墳，横見古墳群，新見庄関連遺跡（二日市庭址・祐清塚），谷内遺

跡，迫古墳群，新市谷遺跡，岩屋城址，安信古墳群，塚谷古墳群，山根屋遺跡，中林遺跡，野田畝遺跡，西江遺跡，二野遺跡，光坊寺古墳群，土井遺跡，土井城址，塚の峰古墳群

協　力　者

各遺跡調査地周辺の地元の人々，また，北房町・大佐町・新見市・神郷町・哲西町の各教育委員会には，有形無形の協力を得た。

宮の前遺跡・谷尻遺跡・桃山遺跡出土の種子分析は，岡山大学農業生物研究所笠原安夫教授の手をわずらわした。

5. 本書に用いたレベル値は，海抜高である。
6. 本書に用いた地形図は，国土地理院承認済である。$\frac{1}{1000}$の地形図は，日本道路公団の Express plan をトレースしたものである。
7. 本報告書で用いる時代区分は一般的な政治的区分に準拠し，それを補うために文化史区分と世紀を併用する。

埋蔵文化財発掘調査契約書

1　委託事務の名称

2　委　託　期　間　昭和　年　月　日から　昭和　年　月　日まで

3　委　託　金　額　金　　円

4　委託金支払場所　日本道路公団

日本道路公団大阪支社長山川尚典（以下「甲」という。）は，岡山県知事加藤武徳（以下「乙」という。）に頭書の発掘調査の実施を次の条項により委託する。

第1条　甲は，別紙発掘調査計画書に基づき頭書の委託金額の範囲内で，頭書の発掘調査の実施を乙に委託する。

第2条　甲又は乙の都合により，委託期間を延長し，若しくは発掘調査計画を変更し，又は発掘調査を中止するときは，事前に協議して書面により定めるものとする。

第3条　乙は，委託契約締結後，遅滞なく作業予定表及び資金使用計画書を作成し，甲に提出しなければならない。

第4条　乙は，第3条の資金使用計画書に基づき，頭書発掘調査を実施するために必要な経費の概算払を甲に請求することができる。

2　甲は，前項の請求のあったときは，頭書の発掘調査の推捗状況を勘案して，請求書を受理した日から15日以内に乙に所要の額を支払うものとする。

第5条　甲は，必要と認めるときは，頭書の発掘調査の処理状況について調査し，又は報告書及び作業調査日誌の提出を求めることができる。

2　乙は，甲が期限を指定して中間報告を求めたときは，これに応じなければならない。

3　乙は，発掘調査の実施にあたり，作業箇所に作業表示旗をかかげ，発掘調査関係者には腕章等を着用させなければならない。

4　乙は，頭書の発掘調査が完了したときは，すみやかに頭書の発掘調査の実施結果に基づく報告書（B5版30部）を作成し，委託期間内に甲に提出しなければならない。

5　乙は，費用精算調書を作成し，委託期間満了1カ月以内に甲に提出しなければならない。

第6条　この契約に基づく報告書，費用精算調書その他の関係書類の作成事務の取扱は，甲が特に指定しない限り乙の本来の事務取扱に準じて処理するものとする。

第7条　乙がこの委託契約に基づき甲の費用をもって取得した購入物件等は，すべて甲に帰属するものとする。ただし，甲は，発掘され又は発見された埋蔵告化財に関する甲の権限を放棄するものとする。

第8条　発掘調査に関する文化財保護法及び遺失物法等に関する諸手続については，乙が代行するものとする。

2　甲及び乙は，相互に協力して土地使用承諾書の取付けにあたるものとする。

第9条　乙の責めに帰する事由により頭書の期限内に第5条第4項に規定する報告書を提出しないときは，甲は，遅滞損害金として期限満了日の翌日から起算し提出当日までの遅滞日数につき，頭書の委託金額に対して日歩2銭7厘の割合で計算した金額を徴収することができる。

2　甲の責めに帰する事由により第４条の規定による委託料の支払いが遅れた場合には，乙は，甲に対し日歩２銭７厘の割合で遅延利息の支払を請求することができる。

第10条　乙の責めに帰すべき事由により甲が契約を解除したときは，乙は，頭書の委託金額の10分の１を違約金として，甲の定める期限までに納付しなければならない。

第11条　この契約を変更する必要が生じたときは，甲乙協議して定めるものとする。

上記契約の証として本書２通を作成し，当事者記名押印のうえ，各自１通を保有する。

昭和44年２月１日

委託者　日本道路公団大阪支社
支社長　○　○　○　○

受託者　岡　山　県
知　事　○　○　○　○

中国縦貫自動車建設に伴う埋蔵文化財発掘調査実施遺跡一覧表

（昭和48年７月～昭和49年11月現在）

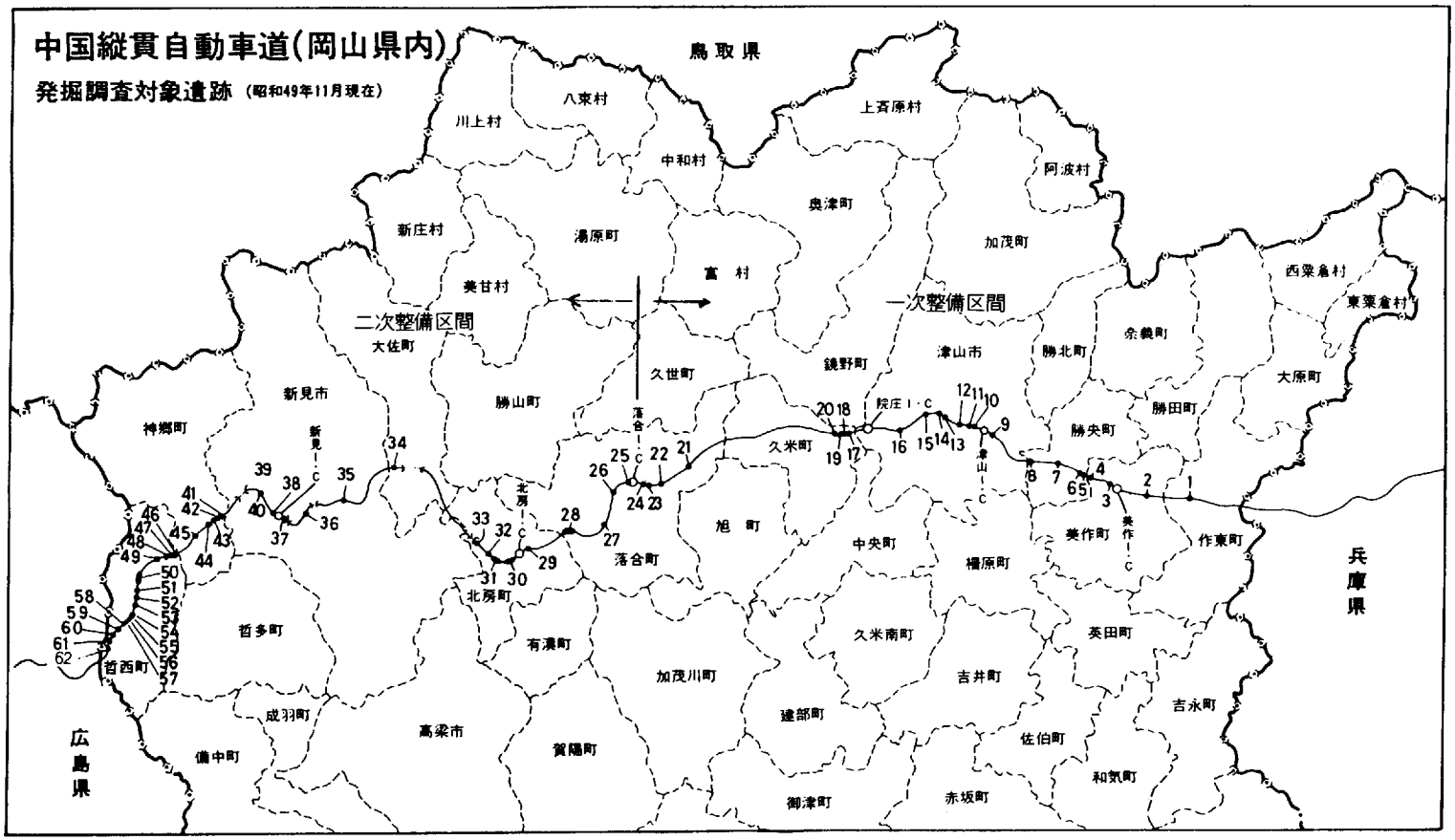
	遺跡名	所在地	契約調査期間 開始年月日 終了年月日	月数	契約面積	主な調査員	概要
26	旦原（だんのはら）遺跡	落合町 西河内	48. 7.17 48.12.31	5.5	2,000㎡	高畑・山磨	①弥生時代中期後半～後期・住居址７，袋状土壙８，柱穴上器溜り　②古墳時代後期古墳３，土壙墓２，土玉刀子　③奈良～平安時代，火葬土壙１・骨蔵器２（壺，杯）建物１・柱穴④その他土壙，溝
27	須内（すのうち）遺跡	落合町鹿田	49. 1. 8 49. 6.30	6	2,000	橋本・松本 浅倉	①縄文時代後期，晩期土器片，黒曜石片　②弥生時代中期末～後期の住居址２弥生式土器多数太型蛤刃石斧２・扁平片刃石斧２，石鏃５（サヌカイト）・サヌカイト片・ドリル１（サヌカイト）・石匙１　③中世・建物４・柱穴・土壙７・溝・墳墓（骨壺10・五輪塔40以上・宝篋印塔３以上，須恵器・土師器・青磁片・緑釉陶器片２・灯明皿・平瓦片・鉄滓・鉄釘・銅製印（財）・刀子・骨片・炭・砂利敷
28	宮の前遺跡	落合町一色	48. 4.23 49. 9.30	17	7,500	橋本・二宮 浅倉	①縄文中期・晩期・土器片・貯蔵穴40・ドングリ・クルミ・木の葉　②弥生時代前期・中期・後期住居址16・炉址１・周溝墓８（円形，方形・土壙墓・石蓋土壙墓６・箱式石棺５・土器・石鏃数十・黒曜石製石鏃１・石包丁７・石皿・たたき石・スリ石・打製石斧・磨製石斧１・太型蛤刃１・石錐10数本・石匙11・石槌２・管玉３・勾玉１・土錘・土器片紡錘　③古墳時代６世紀頃の溝・須恵器・土師器・鉄滓・炉跡　④平安時代～中世・土壙・須恵器・古銭・白磁・柱穴列３
29	備中平遺跡	北房町五名	48. 7.17 49. 3.31	9	2,500	栗野・井上 岡田	①縄文時代円形土壙１・早期土器片，乳棒状石斧２・石鏃　②弥生時代，方形土壙・土器片・石鏃　③古墳時代前期の住居址，方形土壙・古墳・横穴式石室のこわれたもの，須恵器杯・土師器　④奈良～平安時代，建物溝状遺構７・井戸３・須恵器，墨書土器，（吉祥），緑釉陶器片１・鉄鏃状鉄器１・鉄製円盤１　⑤中世，窯跡・鍛冶炉状遺構３・ピット・溝・炭・鉄滓・須恵器・土師器・青磁・白磁
30	谷尻遺跡	北房町 上水田	48.10.20 48.12.27 49. 1. 1 50. 3.31	15	4,500	高畑・山磨 栗野・井上	①縄文時代早期・後期・晩期包含層・石鏃・石斧・サヌカイト片　②弥生時代土壙墓29以上住居址４・住穴・溝・紡錘車・ニワトリ形土製品・太型蛤刃石斧・石鏃　③古墳時代，住居址３包含層・須恵器・土師器　④奈良～平安建物・柱穴・溝・土器溜り　⑤中世～近世土壙墓・井戸・建物・古銭・青磁・須恵器・土師器・備前焼・瓦器・鉱滓・土錘・陶器・水晶片
31	桃山遺跡	北房町 下呰部	48. 7.17 48. 9.26 49. 4. 1 50. 3.31	15	2,800	田仲・二宮	①縄文時代，後期・土器片・黒曜石　②弥生時代，中期・後期，住居址・建物・袋状ピット・太型蛤刃石斧・石鏃・石包丁（打製・磨製）・砥石・分銅形土製品　③古墳時代，古墳１（横穴式石室）・土壙墓２・須恵器・土師器　④平安時代，土壙墓・鍛冶炉・建物・溝・須恵器・土師器・鉱滓　⑤中世～近世，墳墓

	遺跡名	所在地	契約調査期間 開始年月日 終了年月日	月数	契約面積	主な調査員	概要
32	植木(えき)遺跡	北房町植木	48.10.20 49. 3.28	6	1,280	田仲	①弥生時代末～古墳時代初頭，水路 ②室町時代～鎌倉時代，館跡・建物11・池２・井戸１・鉄鏃15本・たがね５本・短刀１・刀子１・火打鎌・備前焼・須恵器・宋銭28枚（永楽１枚・北宗19枚）・青磁・白磁・砥石４・硯１・鉄滓・炉壁・ふいごの羽口・漆椀５・曲物２・井戸枠
33	空(そら)古墳	北房町下呰部	48. 9.22 48. 9.25	1	20	田仲	①古墳時代，円墳，横穴式石室，古墳の墳端が一部かかる。地形測量を行なった
34	戸谷遺跡	大佐町田治部	49. 9. 1 49. 9.30	1	300	橋本	①縄文時代，前期，土器片 ②奈良末～平安時代，住居址１・須恵器・土師器
35	塔の畝遺跡	新見市上熊谷	49. 9. 1 49. 9.30	1	100	井上	①平安末～中世，石積遺構（方形），須恵器・瓦質土器・五輪塔
36	青地(あおじ)遺跡 (旧史跡七人塚)	新見市下熊谷	49. 8. 1 49.11.12	6	1,400	井上・浅倉	①縄文時代，早期・前期，土壙・土器片・サヌカイト片・黒曜石片・チャート片②弥生時代，中期・後期，土壙墓・住居墓・住居址２・柱穴・土器片・提砥 ③古墳時代，前期・後期，円墳（周溝のみ）・住居址１・須恵器・土師器
37	岩倉(いわくら)古墳群	新見市高尾	49.11.14 50. 6.30			浅倉・岡田	①弥生時代中期，土器・住居址 ②古墳時代，前方後円墳１（箱式石棺）・横穴式石室・須恵器・土師器・鉄鏃
38	宗金遺跡	新見市西方					平地よりより一段高い平坦部に土師器の散布がみられる。未調査
39	新見庄跡	新見市西方～高尾					平安～室町時代の遺跡で，荘園を治めた当時の資料が東寺に保存されている。調査中
40	横見古墳	新見市西方					尾根の斜面に横穴式石室が残存する。未調査
41	迫古墳群	神郷町下神代					山麓に横穴式石室墳が残存しまた周辺に径10m前後の円墳状のものが認められる。未調査
42	新市谷遺跡	神郷町下神代					丘陵斜面上に須恵器・土師器の散布がみられまた数本の段が等高線に平行して認められる。未調査
43	岩屋城址	神郷町下神代					丘陵上に中世の山城が知られている。未調査
44	門前中屋遺跡	神郷町下神代					緩斜面上に土器片の散布がみられトレンチ調査が必要である。未調査
45	塚谷古墳群	神郷町下神代					山麓に２基の横穴式石室墳の存在が予想される。
46	佐藤遺跡	哲西町上神代					山根屋遺跡の東方平坦地に弥生土器の散布がみられる。
47	山根屋遺跡	哲西町上神代					緩斜面を削って作られた町道の崖に住居址の断面やピットがみられる。
48	中林遺跡	哲西町上神代					山復に人工的な構築があるが性格不明，岩磐へ通じる参道かも知れない。

	遺跡名	所在地	契約調査期間 開始年月日 終了年月日	月教	契約面積	主な調査員	概要
49	野田畝遺跡	哲西町上神代					長光寺裏山の緩斜面でサヌカイト打製石包丁が採取されたことより弥生時代の遺構が考えられる。未調査
50	西江遺跡	哲西町矢田～西江					神代川の西半台地に弥生式土器，須恵器が散布し，弥生～古墳時代の集落址が予想される。未調査
51	二野遺跡	哲西町矢田					畑に破壊された横穴式石室が残存する。尾根上にも２基の円墳が所在する。未調査
52	土井遺跡	哲生町土井					舌状に延びる台地上で須恵器を採集したが遺跡の存在は明らかでない。トレンチ調査が必要である。
53	土井城址	哲西町矢田					丘陵の尾根を４本の溝で切断し独立をさせた中世の山城である。未調査
54	横田遺跡	哲西町矢田横田					丘陵の谷部分より平坦面にかけて弥生式土器，須恵器が散布し柱穴もみられ弥生時代の集落址が予想される。未調査
55	荒神畝遺跡	哲西町畑木					尾根上に長方形の平坦面があり，周囲は斜面になっていることから中世の出城が予想される。未調査
56	大倉遺跡	哲西町畑木					低丘陵の平坦に須恵器，土師器の散布がみられる。
57	忠田山遺跡	哲生町畑木四日市					丘陵末端の緩斜面に青磁・須恵器・鉄滓の散布がみられ，中世の集落址が予想される。未調査
58	御供川遺跡	哲西町畑木四日市					丘陵頂上に墳丘状のものが認められ周辺で，弥生式土器片を採集していることより，弥生時代の墓地の存在が予想される。未調査。
59	四日市古墳	哲西町畑木					尾根上に径約10mの円墳が存在する。未調査。
60	清水谷遺跡	哲西町住吉					神代川の左岸緩斜面に弥生式土器・サヌカイト・チャート片が採集され弥生時代の集落址が予想される。未調査。
61	塚の峯古墳群	哲西町大竹					尾根上に２基の円墳が存在する。未調査。
62	岸本城址	哲西町大竹					尾根上に中世の山城が存在し，用地内に土るいの一部がかかる。未調査。

- 中国縦貫自動車道一次整備区間のNo.１～25までの各遺跡については，「中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告１～５分冊」を参照されたい。
- 本表は，昭和49年11月現在のものであり，昭和49年度・50年度調査実施の各遺跡の概要については，近刊の「中国縦貫道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告７」にて補正する予定である。
- 新見以西では49年７月に再度分布調査が実施された時に追加補正された。
- 昭和49年12月から昭和51年３月末までに調査を実施した遺跡は次の通りである。

  谷尻遺跡（継続），桃山遺跡（継続），山ノ城古墳群（縦貫道関連土取場），空古墳，宮の鼻古墳（工事中発見）岩倉古墳群，岩倉遺跡，宗金遺跡，新見庄関連遺跡（二日市庭址，祐清塚），横見古墳，横見古墳群，谷内遺跡，安信古墳群，迫古墳群，新市谷遺跡，岩屋城址，塚谷古遺群，山根屋遺跡，中林遺跡，野田畝遺跡，西江遺跡，光坊寺古墳群，土井遺跡，土井城址，清水谷遺跡，塚の峰古墳群



62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34 33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

岸本城址 | 塚の峯古墳群 | 清水谷遺跡 | 四日市古墳 | 御供川遺跡 | 忠山遺跡 | 大倉遺跡 | 荒神畝遺跡 | 横田遺跡 | 土井城址 | 土井遺跡 | 二江遺跡 | 西野遺跡 | 野田畝遺跡 | 中林遺跡 | 山根屋遺跡 | 佐藤遺跡 | 塚谷古墳群 | 門前中屋遺跡 | 岩屋城址 | 新市谷遺跡 | 迫古墳群 | 横見古墳 | 新見庄遺跡 | 宗金遺跡 | 岩倉古墳群 | 青地遺跡 | 塔の畝遺跡 | 戸谷遺跡 | 古墳 | 空木遺跡 | 植山遺跡 | 桃尻遺跡 | 谷平遺跡 | 備中前遺跡 | 宮内遺跡 | 須原遺跡 | 旦市遺跡 | 下瀬遺跡 | 西原古墳 | 穴塚遺跡 | 赤野遺跡 | 下河内遺跡 | 領家遺跡 | 久米廃寺 | 宮尾遺跡 | 日南遺跡 | 二宮大成遺跡 | 美作国府跡 | 沼古墳群 | 志戸部調査区 | 野介代遺跡 | 押入西遺跡 | 古墳群 | 押入飯綱神社 | 天神原遺跡 | 梶原遺跡 | 平遺跡 | 小中遺跡 | 小中古墳群 | 上相遺跡 | 北山古墳群 | 狼谷遺跡 | 高木遺跡

総　目　次

序

例　言

目　次

Ⅰ　調査の経緯と問題点 ……12

Ⅱ　備中中北部の地理的環境 ……17

Ⅲ　発掘調査の概要 ……22

1. 須内遺跡 (27)……23

2. 谷尻遺跡 (30)…… 105

3. 植木遺跡 (32)…… 341

4　空古墳 (33)…… 419

5. 戸谷遺跡 (34)…… 489

6. 塔の畝遺跡 (35)…… 505

7. 青地遺跡 (36)…… 521

I　調査の経緯と問題点

調査上の問題点

1. 調 査 体 制

今回報告する大部分の遺跡は，従来からの文化庁・日本道路公団間の「覚書」協定にしたがい公団側と県文化課との間において数次にわたりその個々の遺跡の取り扱いを協議したのち，発掘調査にとりかかかったものであるが，発掘調査に要する人的体制についてはかならずしも満足すべき条件整備ができなかった。従前は，本庁文化課において発掘調査に必要な一切の業務を所掌してきたのであるが，この度は，本庁の分掌としては予算的措置・発掘工程など主として契約事務に関することにとどめ，他の作業員雇用・賃金支払・物品購入など現場と直接的な実務に関することは津山教育事務所において対応する形態に事務分掌を改めたことである。

このことは，本庁事務の繁雑な事務量を軽減し，物品調達の迅速化をもたらした反面，各現場の発掘調査の技術面や突発的に起きる種々の問題を，行政全体として吸収しえないという欠陥を生じ，調査員個々の苦悩を増大したきらいがある。

なかでも特記しなければならぬことは，一現場一調査員制を敷いたところに起因する諸問題である。一現場三調査員制の原則をあえてくずし，上記の体制へ踏み切った理由には幾つかの状況の推移が考えられるが，まず第一点は，昭和42年度以来もっとも深くかかわってきた山陽新幹線の建設が完了したこと，第二には，中国縦貫道の新見市以西の遺跡がわずかに８ケ所であると認識していた点で，以上の発掘調査事務量の見透しのうえにたって，調査員の削減を，県独自の責任においてやらなければならないという重要課題に直面した事実をあげることができよう。したがって，県教育委員会は，調査員の希望を聴取しつつ，市町村派遣主事として，あるいは県立博物館等関連施設の職員に，または他府県への転出を勧めるなど，漸次，調査体制縮小への試みをとったのである。換言すれば，本事業の今期における調査体制の不備は偶発的に遺跡数が増大したことによるのではなく，頭初から弱体化した体制でもってのりきらざるをえない状況であったと言わざるをえない。

県段階においては，調査員雇用が非常に困難な状況にある。したがって，国および各自治体では全国的な規模で人的構成と配置などを根本的に検討すべき時期であることを付記しておきたい。

2. 新発見の遺跡への対応

真庭郡落合町鹿田の須内遺跡は，建設工事の着工後，地元文化財保護委員による土器片の採集を契機とし，他の現場で発掘調査中の調査員がその場所へかけつけ夥しい遺物の散乱，地形的条件を検討した結果，急拠，遺跡名を付したところで，直ちに公団と折衝・協議に入り発掘調査に取り組むことになったのである。後述するとおり，調査対象は，大平寺地区・横部地区・上寺地区の３地区，延5,000㎡以上の面積を発掘する結果となり，中世墓群の様相や官衙的建物群の存在などを明らかにすることができた。

当時，公団より業者に対し工事発注がなされ，周囲においては絶えず重機が作動している状況下にあった。建設業者は，地中工から上部工にいたる一貫した建設工程を立て，ロスを極力おさえたその工程は一分の変更を容れる余地もない計画になっている。発掘調査もまたほとんど余裕のない年間計画を立てている。その間にあって調整を図るには，遺跡の部分的破壊を覚悟したうえで短期間に最大限の効果を期待せざるをえないばかりか，その対応によって，他遺跡の調査に与える影響もはかりしれないものがあった。工事工程へ割って入った異常な発掘調査であるから，調査員個人の努力にもかかわらず，的確な遺跡範囲全体の調査，あるいは調査精度の点で不十分さはおおいがたかった。たとえば，工事用道路部分やボックスなど構造物の建設個所，採土場所にあたる北辺丘陵部などはいっさい調査対象外におかざるをえなかった。調査員と調査期間の不足はひとり新発見の遺跡調査に限られた問題ではない。頭初契約時から，一遺跡名を付してくくった範囲内にあって，後日，調査地点または調査地区などと区わけで分離して表現する事実が示すように，この遺跡名は，かならずしも学術的な意味での厳密な遺跡区分にそうものではない。一定の幅で数キロにわたる範囲内には，しばしば複数の遺跡が存在する。しかも遺跡は，単一地域内に重複する例がきわめて多い。つまり密度が高く重層的なあり方を示すものである。したがって，遺跡の発掘は，契約面積を実質的には大きくうわまわることになる。遺跡は，常に無限のひろがりを秘めているといって過言ではないのである。

ここに，事前の分布調査の重要性を再確認するとともに，不時発見に対応できるだけの余裕ある調査工程ならびに人的構成が望まれるのである。

3. 報告書の作成

ここ数年のうちに刊行された本県の報告書は本の厚さが数糎に及ぶものが少くない。その限りでは薄い概報より外見上の体裁は整っている。しかしながら，報告書の紙は薄く，また版組みにおいても行間はつまり，一行の字数は詰めこまれ，実測図の細線はとび，折り込みが多く，外部からは〝総じて田舎作り〟との酷評がある。この点は，編集者のセンスや調査員の技量とともに，原因の大半は主として作成期間が十分にないことにあると考えられる。順次，解決の途を図りたいと考えるが，それ以上に重大なことは，内容の点にある。すでにその点は指摘されてから久しいが，報告書作成のための整理期間の確保が不十分であったとはいえ，遺物の実測図のほとんど欠くもの，遺構説明の意味不明のもの，遺跡の評価ができていないものなど，発掘報告書の最低の条件さえみたしていないものさえあることは，深く反省するところである。

そこで，報告書作成のための新しい試みとして3か月交代制を敷いたが，これは，ある特定の個人だけが報告書作成のための基礎作業に従事し，他の多くの調査員はその恩恵に浴さないところからおこる弊害を排し，全調査員が等しく最低3か月の作成期間を確保しようとしたものである。発掘現場から離れ，たとえ短期間でも報告書作成作業に専念できることは，一時にくらべると大きな前進である。しかしなお，個人に与えられる整理期間の実質的な不均等という問題が生じている。それは遺跡に大小の規模があってその調査期間にはおのづからばらつきがあるからで，小規模遺跡を短期間で完了させたものにとっては，問題は少く，逆の場合，豊富な資料を抱えて筆舌につくしが

たい苦痛のときを過すことになる。後者は先にも触れた一現場一人制のもとで第二次整備区間にある現場小屋を基地として日々の現場処置を果しつつ，他方では，第一次整備区間の調査報告のためになお残された一連の必要作業を併行的にやらなければならないのである。この不均等は，調査員間の人間関係をまずくし，各遺跡のまとめのための討論を十分展開できなかった遠因の一つと指摘できよう。

そればかりではない。永年にわたり，調査員は，個人的能力をはかるかに越えた対象面積を発掘調査する義務を課せられ，その消化に追われてきた。もはや，当然持つべきの歴史資料の保存と活用に対するまっとうな責任をはたせず，ただ単に手仕事をつなぐ作業に従事するだけとなりつつある実情を無視することはできない。

4. 遺跡の保存と遺物の管理

山陽新幹線が県内に建設されようとした昭和42年段階には，公共的建設の錦の御旗の下にどれだけの遺跡が消滅したか。逆に，この開発時代にあたってどれだけの遺跡をどのように保存すべきか。この課題に対して，県内研究者も行政当局も，一様に重大な関心をもちながら個々の具体的対応処置について，同じことを指向しつつも互いに一致することが少なかった。行政は研究者から，とかく開発サイドに立つものと評価されがちであった。その後，公共・民間を問わず，団地・道路・鉄道などの大規模工事が進行するなかで，文化課は，「各保護対策委員会」を設置して，遺跡の保存方法を含め遺跡の発掘に対する指導助言をうけてきた。その間，若干の成果を生み出してはいるが，保存という側面だけをとりだせば，かならずしも十分な成果が実現できたわけではない。通常，大半の遺跡は不十分さを残したままの発掘調査ののち消滅したのである。

このような状況下で，今期整備区間内では二遺跡において部分的な保存策をとることができた。その一つは，宮の前遺跡で検出された縄文晩期の貯蔵穴で，しばしばトチ・ドングリなど堅果類を穴内に残す遺構である。遺物の残り具合や穴の規模に若干大小の差があるにしても，類似の穴が総数40個以上も検出されたのである。県内にあっては，赤磐郡山陽町南方前池遺跡例のそれが著名であるが，この十個以上（未掘を入れるとさらに多い）の遺構は，縄文晩期の食料生活・貯蔵方法その他を解明する学術上重要な意味をにない県指定史跡になっている。それにくらべ実に40個の群集する穴の史的意味をうかつにも見のがすところであったが，研究者各位の指摘によって薄れていた保存問題を覚醒され，公団折衝を重たところ，結果的には，河砂で穴および遺構面を被覆する方法を介入させて，しかるのち土盛工法をとることとなった。他の一つは，北房町地内に所在する桃山遺跡内にある横穴式石室一基の処置についてである。本古墳は，用地北側の近接地にあり，法面仕上げのいかんによって消滅破壊の運命にあったが，対策委員会から現状保存へむけてできるだけ努力するよう要請され，公団との協議結果，幹線道工事そのものよりむしろ付帯工事としての側道と競合することが判明したため，側道および法面の設計変更によって，かろうじて現状凍結できることとなった。

いっぽう，遺物の保管・管理については津山市田邑に建設した仮収蔵庫において一括保存する方式をとっている。ところが，収蔵庫内にある尨大な遺物および資料は，やっと遺跡単位にかためて

いる状況でほとんど未整理段階といって過言ではない。遺跡の記録保存とは，現場における記録処置だけにとどまるものでは決してなく，記録カード類や写真などをふくむいっさいの書類そしてさらに検出遺物の系統的な整理作業が欠落してはまったくその意味がないのである。したがって，遺物の番号を付し照合カードを作成するなど一環した整理が必要であるとともに，収蔵庫の管理が今後の大きな課題であることを特に強調して本項をとじることにしたい。

なお，この「問題点」は，遺跡の調査にたずさわった全調査員の感想ならびに意見と対策委員会議事録をもとに，葛原克人が草案を作成し課内討議を重ねたのち，さらに近藤義郎岡山大学教授をはじめ委対策員各位の意見を聴してまとめたものである。関係各位に謝意を表すとともに，今後，文化財保存問題が論議される際，若干なりとも俎上にあがる部分があるとすれば，望外の幸と感ずるものである。最後に，大山行正氏の手をわずらわした「対策委員会議事録」を掲載しておこう。

月　日	場　所	審　議　事　項	指　摘（要望）そ　の　他
48. 6.24	津　山　分　庁	昭和48年度調査計画について	調査期間不十分 調査体制不備
48. 7.14	落合町・北房町	現場査察（旦原，宮の前，谷尻，桃山，植木）	桃山古墳の保存方法研究 宮の前遺跡の調査方針立案
48. 8.30	津 山 収 蔵 庫	発掘調査状況報告 報告書作成について	調査中途での工事着手は不可 調査員交替時の引継を厳格に
48.10. 8	〃	久米廃寺整備計画について 報告書作成について	調査経過を詳記すること
48.10.16	〃	報告書の作成について	報告書（調査の経過）の討議
48.11.19	〃	発掘調査状況報告 報告書作成について	新規（須内）遺跡の発見報告
48.12. 2	落合町・北房町	現場査察（須内，旦原，宮の前，谷尻，桃山，植木）	須内遺跡の調査期間（49.1～49.6）
49. 1.26	津 山 収 蔵 庫	須内遺跡の調査について 報告書作成について	
49. 2.15	〃	北房町以西の発掘調査について 報告書作成について	
49. 2.23	〃	発掘調査状況報告 報告書作成について	久米廃寺，宮尾遺跡の図面討議 久米廃寺を早急に県指定
49. 3.19	〃	昭和49年度発掘調査計画について 報告書作成について	報告書未記載のものは次分冊以降で附記し挿入
49. 3.26	津山農協会館	大佐町以西遺跡の確認調査	
49. 6. 4	大佐町・新見市	昭和49年度発掘調査計画について 発掘調査状況報告	調査計画の再検討 宮の前（貯蔵穴群）桃山古墳の保存
49. 7.26	津山商工会館	昭和49年度発掘調査計画について 報告書作成状況報告	谷尻遺跡の調査期限延長 宮の前遺跡調査期限49. 9.30
49. 8.27 28	〃	新見市以西遺跡の確認調査 宮の前遺跡の保存方法討議	
49. 9.26	新見市・哲西町	現場査察（宮の前，谷尻，桃山）	宮の前（貯蔵穴群）盛土保存
49.10.20	北房町・落合町	現場査察（戸谷，青地，塔の畝）	
49.11.26	大佐町・新見市	久米廃寺整備計画について 報告書作成状況報告	久米廃寺案内板討議

49.12.22	新　見　市	現場査察（岩倉）	岩倉古墳築造形態検討
50. 2. 4	津山市民寮	発掘調査状況報告 報告書作成について	岩倉古墳の保存困難
50. 2.12		報告書作成について	報告書原稿校正討議
50. 2.26	新見市・北房町	現場査察（岩倉，谷尻，桃山）	桃山遺跡調査期間延長
50. 3.18	北　房　町	現場査察（桃山，谷尻）	桃山遺跡５月末まで延長
50. 5.24	北房町・新見市	現場査察（桃山，横見）	空古墳８月19日終了

Ⅱ　備中中北部の地理的環境

中国縦貫自動車道は岡山県中北部の中国山地の南辺を東西に横切る114.7kmのうち,東半の第一次整備区間の大部分は古代の行政単位の美作国に重なり，その地理的概観はすでにのべた。

第二次整備区間は美作国の西端と備中国の北部にあたる。言い換えれば岡山県の中央を南流する旭川の右岸から高梁川流域の上流部が本章の対象地域である。

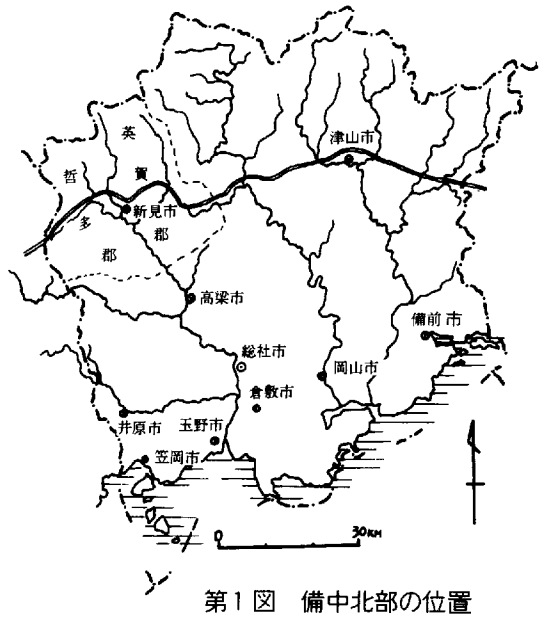
備中北部は北を1000mをこえる中国山地を分水嶺として鳥取県日野郡と接し，地形的にも日本海斜面と瀬戸内斜面に峻別できる。西は広島県比婆郡と接する。分水界と県境が一致するのは西川，神代川流域である。

美作国の西部旭川の右岸は真嶋郡であったが現在は真庭郡落合町，勝山町，美甘村，新庄村，湯原町，川上村である。

備中国は現在は新見市，阿哲郡，上房郡，川上郡，後月郡，小田郡，浅口郡，都窪郡，倉敷市，玉野市，吉備郡，笠岡市，井原市，総社市であるが本文の対象地域は北部の前三者であり，和名抄によると英賀(アガ)郡は中井(ナカツイ)，水田(ミズタ)，呰部(アザイ)，刑部(オサカベ)，丹部(タジベ)，林郷(ムラコソ)の六郷，哲多(テツタ)郡は新見(ニイミ)，石蟹(イシガニ)，神代(コウジロ)，野馳(ノチ)，額部(ヌカタベ)，大飯(オオイ)の六郷で構成されていた。現在は英賀と哲多を合わせて阿哲郡としているが中井，水田，呰部，刑部，丹部，新見，石蟹，神代，野馳は大字名などとして残っている。

旭川右岸

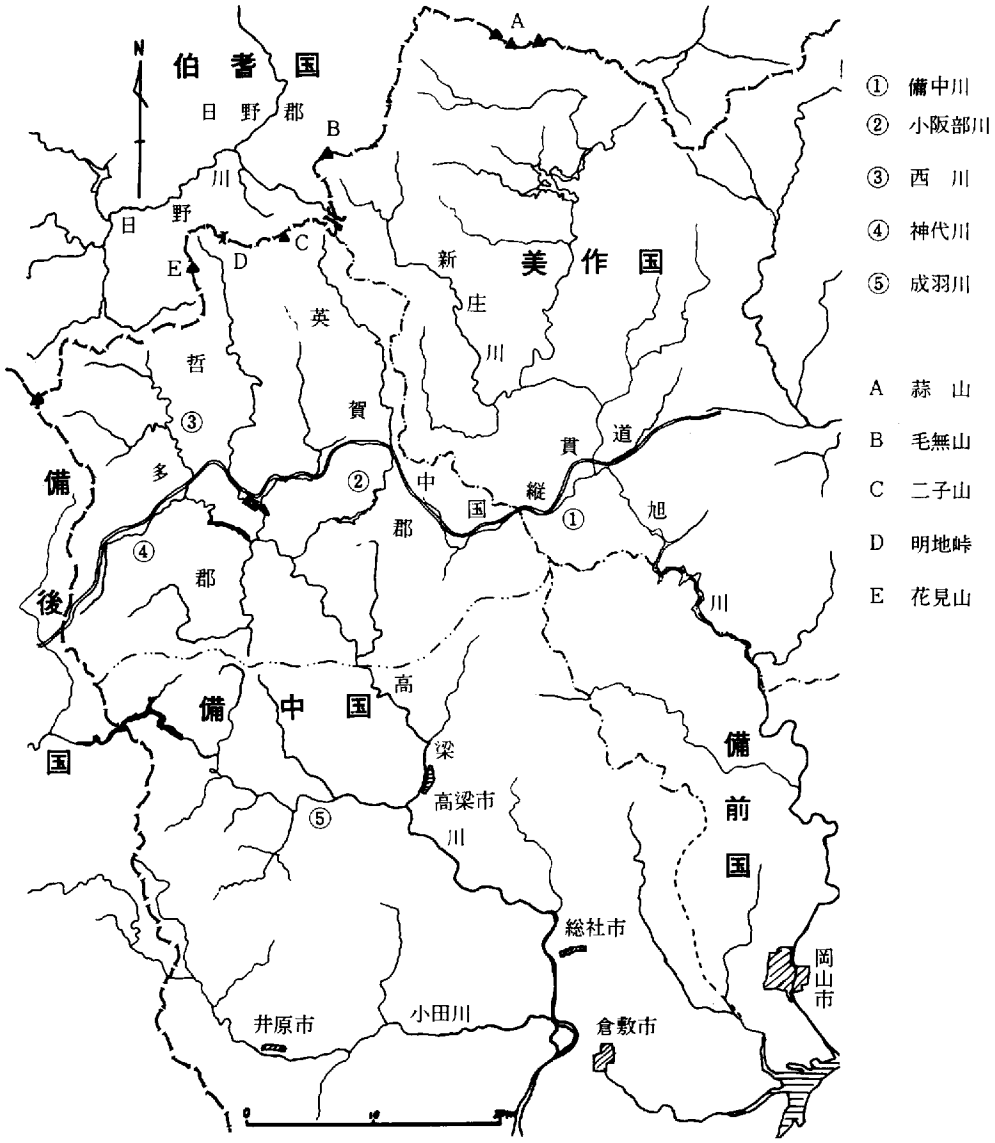
旭川の中流域は標高500～600mの定高性をもつ中位侵食面(吉備高原面)を貫入曲流している。中位侵食面の北辺部あたりを東北東に流れて落合で本流旭川に合流する備中川は流程全長約20kmの河川で準秋吉層群よりなる阿哲台に源を発する。中下流域は千枚岩類を侵食して谷底をひろげている。沖積低地は第三紀中新統が縁どり比高20～30mの丘陵をなしている。それらの丘陵の前面には比高２～３mの沖積段丘がみられる。河床が高く水害がおこることもある。



第１図　備中北部の位置

備中川はその名が示すように備中国より発する河川で古代の行政区でいう英賀郡中井郷，呰部郷，水田郷から美作国真嶋郡栗原郷，鹿田郷を経て垂水郷で旭川に合流することになる。また古くからの備中―美作の交通路として重要な備中街道をめぐって戦国時代の争乱の場ともなった。

歴史的にみると中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査や最近の分布調査によって縄文時代早期の遺物が出土して時代が急激に溯った。弥生



第2図　岡山県西北部説明図

時代についても縄文時代晩期から弥生時代前期への流れを把握できる資料も多く出土した。従来から知られていた古墳については備中北部では唯一の中型前方後円墳などの分布地域がある。また，備北で唯一の白鳳期建立の英賀廃寺が存在し古墳時代以後備北における特異な発展をとげた地域でもある。

高梁川流域

岡山県の三大河川のうち高梁川は最も水量が多く，その流域は下流で広い冲積低地を形成する以外支流の合流地にやや低地をみる程度である。これは高梁川が中流域において中位侵食面（吉備高原面）をハメコミ蛇行しており，現在，平衡状態にはまだほど遠い若い河川であるともいえよう。

さらに阿哲台などに代表される溶食には弱いが侵食には比較的強い石灰岩が分布していることも原因の一つである。

高梁川の主な支流には上流から西川，熊谷川，小阪部川，本郷川，有漢川，成羽川，新本川そして小田川がある。

本流は日本海斜面の日野川の最上流と花見山（1188m）二子山（1075m）で分水界をなしている。支流西川の最上流には標高500m～550mの高瀬の平坦面がひろがり，縄文時代早期の遺物が丘陵上から多く出土している。

西川に神代で合流する神代川は全長約18kmの河川でありながら，上流から比較的広い谷底を形成している。河床は低く，河川勾配は比較的緩やかである。この神代川の流域は現在の行政区で阿哲郡神郷町，哲西町にあたり，中国縦貫自動車道は神代川に沿って左岸の山麓を通るのである。山麓には第三紀層よりなる比高20～30mの丘陵が分布し，河床にも第三紀層を観察できる。

神代川の流域の古代遺跡についてはかなり詳細な分布が知られており，備中北部における最も濃密な地域である。また備後往来の道すじでもあり，現在国鉄芸備線があり，近い将来高速道が通るなど交通路としての重要な地域であるといえよう。

備北地区における地形的特徴には，標高500m前後の定高性を示す中位侵食面の残存と成羽川などにみられる幼年谷地形，阿哲台に代表されるカルスト地形である。標高500m前後の中位侵食面は岡山県，広島県の中央部に顕著にみられるが，備北では本郷川の上流，阿哲郡哲多町田渕，蚊家，成羽川流域の川上郡備中町西山，油野，穴田，成羽町中野の各地にみられる。これらの地区へは，河川の侵食斜面に曲がりくねった坂道を登りつめると視界がひらけ，ゆるやかな起伏の高原を思わせるような景観がひらける。モナドノック（残丘）にのぼると同様な地形が深い幼年谷のむこうにみられる。この侵食面に存在する山砂利層は吉備高原の平坦化と関連があり，洪積世初めの堆積物と考えられている。哲多町田渕，蚊家の侵食面には，荒戸山など多くの玄武岩鐘が散在している。これらはいづれも小型の独立丘で荒戸山，高山，権現山，長松寺山などがある。荒戸山は鍋山ともいわれ，比高260mの鍋を伏せたような形，ドームである。北東一南西方向とそれに直交する構造線に沿って噴出したものと考えられている。噴出した時代は明らかではないが，洪積世以降の時期と考えられている。

高梁川の河谷形態は全体的には壮年期と考えられるが，支流成羽川は吉備高原を深く刻んでV字谷を形成し，幼年期の特徴を呈している。谷壁は急斜面をなし，谷底の巾はきわめて狭く，この谷を堰き止めて新成羽川ダムがつくられている。

こうした標高500m前後の定高性を示す中位侵食面（吉備高原）の中で特異な地質の阿哲台に代表される石灰岩地域がある。山口県秋吉台，広島県帝釈台などと同じ古生代の産物である。中世代三畳紀の秋吉造山運動で陸化し現在標高500m前後の台地となっている。秋吉台とは溶食の程度が異なりドリーネ，ウバーレカレンフェルド，溶食洞などのカルスト地形はみられるがポリエは形成されていない。石灰洞には満奇洞，宇山洞，井倉洞，鐘乳穴（カナチアナ）などがあり，洞内の鐘乳石，石筍，石柱，石灰華の発達がみられる。

（橋本惣司）

阿賀郡・哲多郡の郷名と現在の行政区画

水田郷	備中川・中流両岸	北房町水田・上水田
中井郷	中津井川流域・方谷川流域	北房町中津井・高梁市中井
呰部郷	中川上流域・豊永台地	北房町呰部・上呰部・阿口・新見市豊永
刑部郷	小阪部川上流域	大佐町小阪部・上刑部
丹部郷	熊谷川流域・田治部川流域高梁川上流左岸	大佐町田治部・新見市熊谷・菅生・千屋 (高梁川上流左岸)
林　郷	小阪部川下流域・草間台高梁川左岸	新見市水舟・正田・広瀬・唐松・井倉・草間・土橋
新見郷	高梁川，西川の間・高瀬	新見市新見・上市・千屋・新郷町高瀬
額部郷	油野川流域	神郷町上油野・下油野
野馳郷	神代川中上流域	哲西町矢神・野馳
神代郷	神代川下流域	神郷町下神代・哲西町上神代
大飯郷	本郷川上流の準平原面・本郷川左岸	哲多町田渕・蚊家・哲多町城谷・矢戸
石蟹郷	本郷川右岸と高梁川右岸	哲多町本郷・新見市石蟹・法曽

(田仲満雄氏に教示をいただいた)

参　考　文　献

- 小林　貞一　『日本地方質誌　中国地方』増補版　1962　朝倉書店
- 宗田　克己　『高梁川』岡山教養文庫
- 安藤　信　「野原高原採集の縄文遺物」『倉敷考古館研究集報8』1973
- 『古代の日本　4　中国・四国』　昭和45年　角川書店
- 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　3』　岡山県教育委員会　1973

Ⅲ　発堀調査の概要

1. 須　内　遺　跡 (27) ……23

2. 谷　尻　遺　跡 (30) …… 105

3. 植　木　遺　跡 (32) …… 341

4. 空　　古　　墳 (33) …… 419

5. 戸　谷　遺　跡 (34) …… 489

6. 塔の畝遺跡 (35) …… 505

7. 青　地　遺　跡 (36) …… 521

須内遺跡 (27)

目　　次

第1章　調 査 の 経 過（日誌抄）……29
第2章　遺 跡 の 位 置……31
第3章　調 査 の 概 要……37
A　太 平 寺 地 区……37
(a)　第 1 調 査 区……37
(b)　第 2 調 査 区……40
(c)　第 3 調 査 区……45
B　横 部 地 区……50
C　上 寺 地 区……50
(a)　竪 穴 住 居 址……50
(b)　堀 立 柱 建 物……54
建物Ⅰ　建物Ⅰ柱穴出土遺物……54
建物Ⅱ　建物Ⅱ柱穴出土遺物……54
建物Ⅲ……54
建物Ⅳ……54
建物以外の柱穴出土遺物……58
(c)　井　戸　址……58
(d)　ピ　ッ　ト……58
ピット1・ピット2・その他のピット……58
(e)　鍛　冶　炉……65
炉1・炉2……65
(f)　その他の遺構……65
第4章　遺構に伴わない遺物……68
1　縄 文 式 土 器……68
2　弥 生 式 土 器……68
3　土　師　器……68
4　須　恵　器……75
5　石　　器……75
6　陶　磁　器……79
7　その他の遺物……80
8　銅　　印……80
第5章　まとめにかえて……81

図　目　次

第１図　須内遺跡付近地形図（１/５万）……31
第２図　須内遺跡周辺遺跡分布図（１/１万）……33
第３図　須内遺跡発掘調査区配置図（１/1000）……35
第４図　太平寺１号住居址（１/60）……38
第５図　太平寺建物（１/60）……39
第６図　第１調査区出土遺物……40
第７図　第２調査区遺構図……41
第８図　(1)　第２調査区出土遺物……43
　　(2)　〃　……44
第９図　第３調査区遺構図　P－1　P－2……46
第10図　第３調査区出土遺物Ⅰ……47
第11図　２号住居址（１/60）……49
第12図　２号住居址出土遺物……49
第13図　横部第３・７トレンチ出土遺物……51
第14図　横部第５トレンチ断面図……51
第15図　上寺地区遺構配置図（１/500）……52
第16図　(1)　上寺地区住居址（１/60），平面図・断面図……53
　　(2)　住居址出土遺物……55
第17図　(1)　建物Ⅰ平面図・断面図……56
　　(2)　建物柱穴及びその他の柱穴出土遺物……57
　　(3)　柱穴出土擂鉢……56
第18図　建物Ⅱ平面図・断面図……59
第19図　建物Ⅲ・Ⅳ平面図・断面図……60
第20図　(1)　井戸址平面図・断面図……61
　　(2)　井戸址出土土師器……62
第21図　(1)　ピット１・２平面図・断面図……63
　　(2)　ピット１・２出土遺物……64
　　(3)　その他のピット，溝３出土遺物……65
第22図　炉址１・２平面図・断面図……67
第23図　縄文式土器……69
第24図　土師器　Ⅰ……70
第25図　土師器　Ⅱ……71
第26図　須恵器（杯身）……72

第27図　須恵器（杯蓋）……73
第28図　須恵器（その他）……74
第29図　石　　器　　Ⅰ……76
第30図　石　　器　　Ⅱ……77
第31図　石　　器　　Ⅲ……78
第32図　陶　　磁　　器……79
第33図　その他の遺物……80
第34図　銅　　印……81

図　版　目　次

図版１　１　須内遺跡遠景（南東より）……83
　　２　太平寺地区全景……83
図版２　１　太平寺地区第１調査区１号住居址……84
　　２　〃　建物……84
図版３　１号住居址出土遺物……85
図版４　１　第２調査区（北より）……86
　　２　K―１……86
　　３　K―１骨蔵器……86
図版５　１　K―２……87
　　２　K―２骨蔵器……87
　　３　K―４骨蔵器……87
図版６　K―３の状況と共伴遺物……88
図版７　第３調査区遠景……89
図版８　１　P―２と備前焼……90
　　２　P―８と備前焼……90
　　３　P―１と備前焼……90
図版９　２号住居址と出土遺物……91
図版10　五輪塔・宝篋印塔……92
図版11　横部地区トレンチと出土遺物……93
図版12　１　上寺竪穴住居址（北より）……94
　　２　住居址出土遺物……94
図版13　１　上寺建物Ⅰ・Ⅲ・Ⅵ（東より）……95
　　２　上寺建物Ⅱ（東より）……95
図版14　１　上寺建物群（北東より）……96
　　２　上寺柱穴出土遺物……96

図版15　1　上寺井戸址（東より）……97
　　2　上寺ピット（南より）……97
　　3　上寺炉址２（西より）……97
　　4　上寺井戸址とピットと溝出土遺物……97
図版16　1　縄 文 式 土 器……98
　　2　包含層土器出土状態……98
図版17　土　師　器……99
図版18　須　恵　器……100
図版19　石　　器……101
図版20　陶磁器・紡錘車・羽口・宋銭・鉱滓……102
図版21　銅印（２倍）……103
図版22　1　発 掘 風 景……104
　　2　発掘終了後風景……104

第1章 調 査 の 経 過

昭和48年11月落合町教育委員会から用地内の仮排路掘削中に須恵器などが出土したとの連絡をうけて文化課職員が現地を調査し遺物の採集を行った。直ちに日本道路公団と接渉して協議した結果，事前調査の必要があるとして，新規発見遺跡として契約することになった。遺跡の範囲は上寺地区，横部地区，太平地区で，上寺地区では巾7mの工事用道路を南側に盛土して通すことが決定した。

12月1日には対策委員が現地を見学した。調査期間は6ケ月として1月8日から調査を開始した。

4月からは，当初の両調査員が遺跡を離れ，宮の前遺跡担当の浅倉が本遺跡発掘調査員として調査を引きついだ。この時点で，すでに三地区(太平寺，横部，上寺)のうち，太平寺，横部地区は，調査完了しており，道路建設に重機が激しく動き回っていた。上寺地区は，発掘対象面積の約半分が，遺構検出まで進んでいたが，未調査面積は約2000㎡であった。その上，トレンチで確認したところによると，遺構面までに厚い遺物包含層があり，土質は礫を多く含み固く，調査は，人力のみでは物理的に期間内（4月～5月末ということであった）でとうてい行なえないことが判った。そこで5月に重機を導入した。なお，道路建設工事は調査終了地区のみならず上寺地区の南端から徐々に迫って来ていた。約400㎡の調査が終了すると直ちに盛土が始まり，つぎの調査が終了するとそこも盛土が始まり，つぎの調査が終了するとそこも盛土が行なわれるという状態である。そして，工事用道路（遺跡の東約10m巾）部分及びボックス部分とその両サイド（約20m×60m）は調査対象外にせざるを得なかったし，重機の導入は，遺物の採取をほとんど不可能にした。（遺物包含層の厚さは，最も厚い所で約1mに到するし，10人の人夫さんで1日平均ポリバケツ3杯分の遺物を採集していた。）

結局発掘した面積は，太平寺地区約1,200㎡，横部地区約300㎡，上寺地区約3,600㎡の合計5,100㎡であった。太平寺地区，横部地区は橋本惣司・松本和男，上寺地区は浅倉秀昭が担当した。

遺物は整理箱（75cm×40cm×15cm）に40箱であり，内訳は鉱滓3，柱材2，五輪塔2，残りの箱は土器片で太平寺対上寺は，約1対5，土師器対須恵器，1対1の割り合いである。

発掘延日数は，1月8日～6月27日までの171日であるが，現場発掘実日数は122日である。

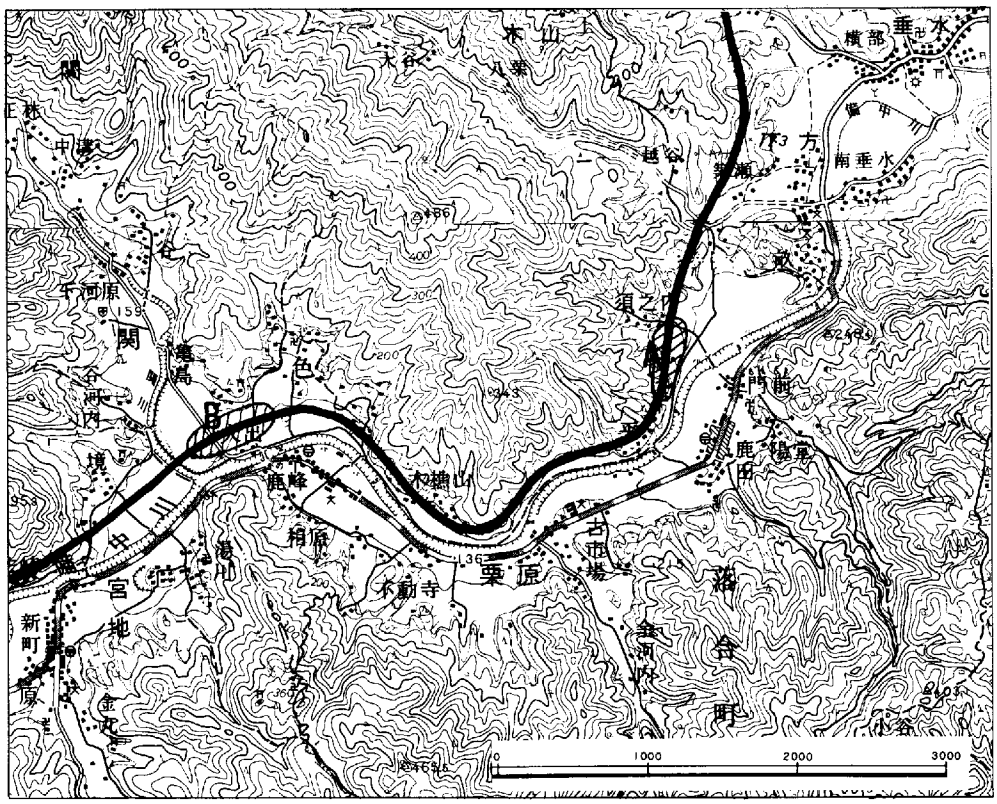
報告書作成は第2章・第3章Bは橋本，第3章C・第4章は浅倉，第1章・第5章は橋本・浅倉が執筆した。

調 査 日 誌 抄

- 1月8日～12日　事務所建設，太平寺地区第4調査区トレンチ設定，住居址検出，掘り上げ。
- 1月14日～19日　太平寺地区第1調査区掘り下げ。第2調査区墳墓検出，掘り上げ。第3調査区砂利敷検出。第4調査区住居址掘り上げ。

・1月21日～27日　太平寺地区住居址掘り上げ，実測，横部地区トレンチ掘り下げ。
・1月28日～2月3日　太平寺地区第2調査区墳墓調査。第3調査区墳墓調査。2号住居址調査。太平寺地区調査完了。上寺地区トレンチ掘り下げ。五輪塔等現太平寺に移動。
・2月4日～9日　上寺地区表土除去，柱穴検出。
・2月11日～16日　上寺地区表土除去，土器洗い。
・2月18日～23日　上寺地区表土除去，遺構検出，土器洗い，11Eより緑釉陶器片出土。
・2月25日～3月2日　表土除去，土器洗い。
・3月4日～9日　表土除去。
・3月11日～16日　表土除去，遺構検出。
・3月18日～23日　遺構検出。土器洗い。11F遺構面より緑釉，黒曜石出土。
・3月25日～31日　遺構検出。土器洗い。
・4月1日～4日　調査員移動期間。
・4月5日　浅倉，調査担当として入る。
・4月8日～13日　11E・F・G，12E・F・G，13E平板実測，レベリング，写真撮影。13・14F表土除々，土器洗い。
・4月15日～20日　石組み遺構実測。ピット実測。遺物実測開始。13・14F包含層掘り下げ。13F包含層より＜財＞字銅印出土。遺構検出。17日11・12E・F明け渡し。
・4月22日～27日　13・14F遺構検出，柱穴，炉掘りあげ，写真撮影，実測，トレンチG，14設定掘り下げ。25日13E明け渡し。
・4月30日～5月4日　13・14F東半分遺構検出，柱穴掘りあげ，写真撮影，実測。2日重機導入，13・14・15G掘り下げ。13・14・15C掘り下げ。4日13・14F明け渡し。
・5月7日～11日　13・14・15G遺構検出。建物I確認。
・5月13日～18日　建物2～4確認。柱穴掘りあげ。建物1～3写真撮影，平板実測。
・5月20～24日　建物4写真撮影，実測。15G包含層掘り下げ。建物4柱穴，その他柱穴，土壙掘り上げ。建物，土壙レベリング。全体写真撮影。15G柱穴掘り上げ。
・5月27日～31日　15Gトレンチ，柱穴掘り上げ。柱穴群平板実測，レベリング完了。ボックス北トレンチ掘り下げ……完形の土師器甕形土器2個体出土。
・6月3日～8日　ボックス北トレンチ，グリッド掘り下げ。縄文式土器片出土。柱穴検出。平板実測。ボックス北調査終了。
・6月10日～14日15Gにて住居址検出，掘り上げ。写真撮影，実測。14H掘り下げ。
・6月17日～22日　14H掘り下げ。柱穴検出，掘りあげ。写真撮影，平板実測，レベリング。
・6月24日～27日　事務所取りこわし。包含層遺物採集。遺物，器材搬出。須内遺跡発掘調査終了。

第2章 遺跡の位置



第1図 遺跡の位置 A－須内遺跡 B－宮の前遺跡

行政的には，岡山県真庭郡落合町鹿田に属する。岡山県の中央部を南流する旭川の中流域は，中国山地の南辺にあたり 標高500m前後の定高性をもつ隆起準平原といわれる吉備高原を侵食した小盆地が形成されている。旭川の支流備中川は全長20数kmの河川で，石灰岩よりなる阿哲台付近に源を発し，千枚岩類を刻んで，狭い谷底平野をつくっている。低地の縁辺部には，比高20～30mの第三紀中新統よりなる丘陵が点在し遺跡周辺では郡(こおり)から畝(うね)部落にかけての仁後山丘陵，郡から須内にかけての山麓丘陵がそれである。これらの丘陵の前面には，比高2～3mの河岸段丘が背後からの扇状地堆積物に おおわれ 緩斜面をなして ややひろがりをもっている。郡(こおり)集落の南側須内集落の東側，対岸では門前集落，鹿田集落の東側などにみられる。緩斜面は急崖をなして備中川氾濫原と接している。

本遺跡は，須内集落の前面にひろがる段丘の上に存在する。遺跡の広がりは南北約400m，東西約200mが考えられる。

遺跡周辺の歴史的環境をのべてみよう。縄文時代の遺物は今回の調査で須内遺跡から後，晩期の

土器片が数片出土していることは低位の段丘面が生活面であったことが考えられる。この他本遺跡より約4㎞上流の宮の前遺跡からは縄文前期，中期の遺物や晩期の貯蔵穴が30数個検出されドングリなども出土した。（注1）

弥生時代の遺跡は須内遺跡の太平寺地区から中期末の土器が出土したほかは，横部地区，仁後山遺跡から後期の土器が出土している。

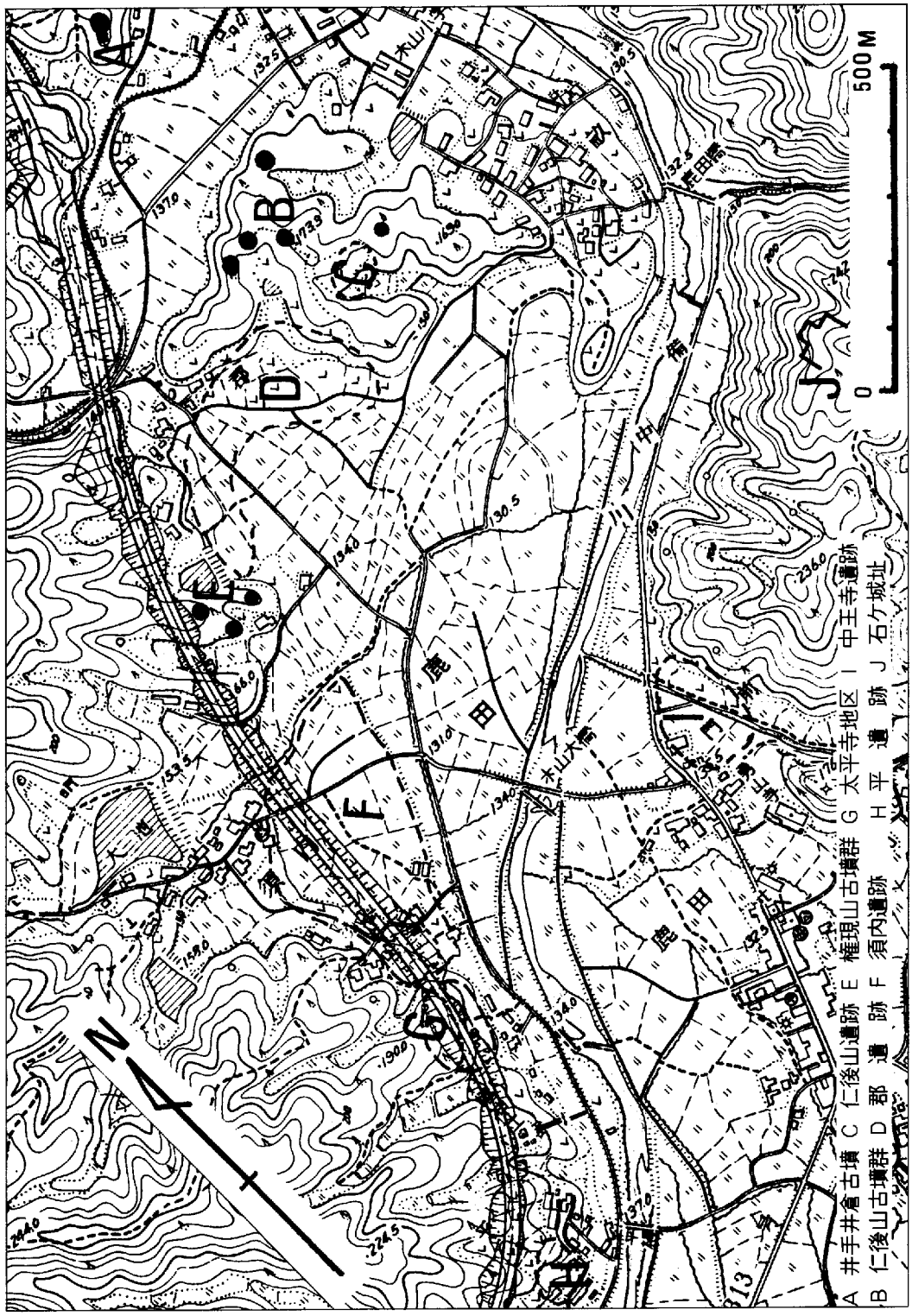
古墳時代になると仁後山古墳群が6基で構成され，1号墳は直径約15m，高さ3mの円墳であるが盗掘孔には竪穴式石室の用材を思わすような板石が散乱している。権現山古墳群は3基で構成され，いずれも小型古墳である。

大池奥古墳は横穴式石室墳である。平遺跡からは窯壁ともに多量の須恵器が出土した。

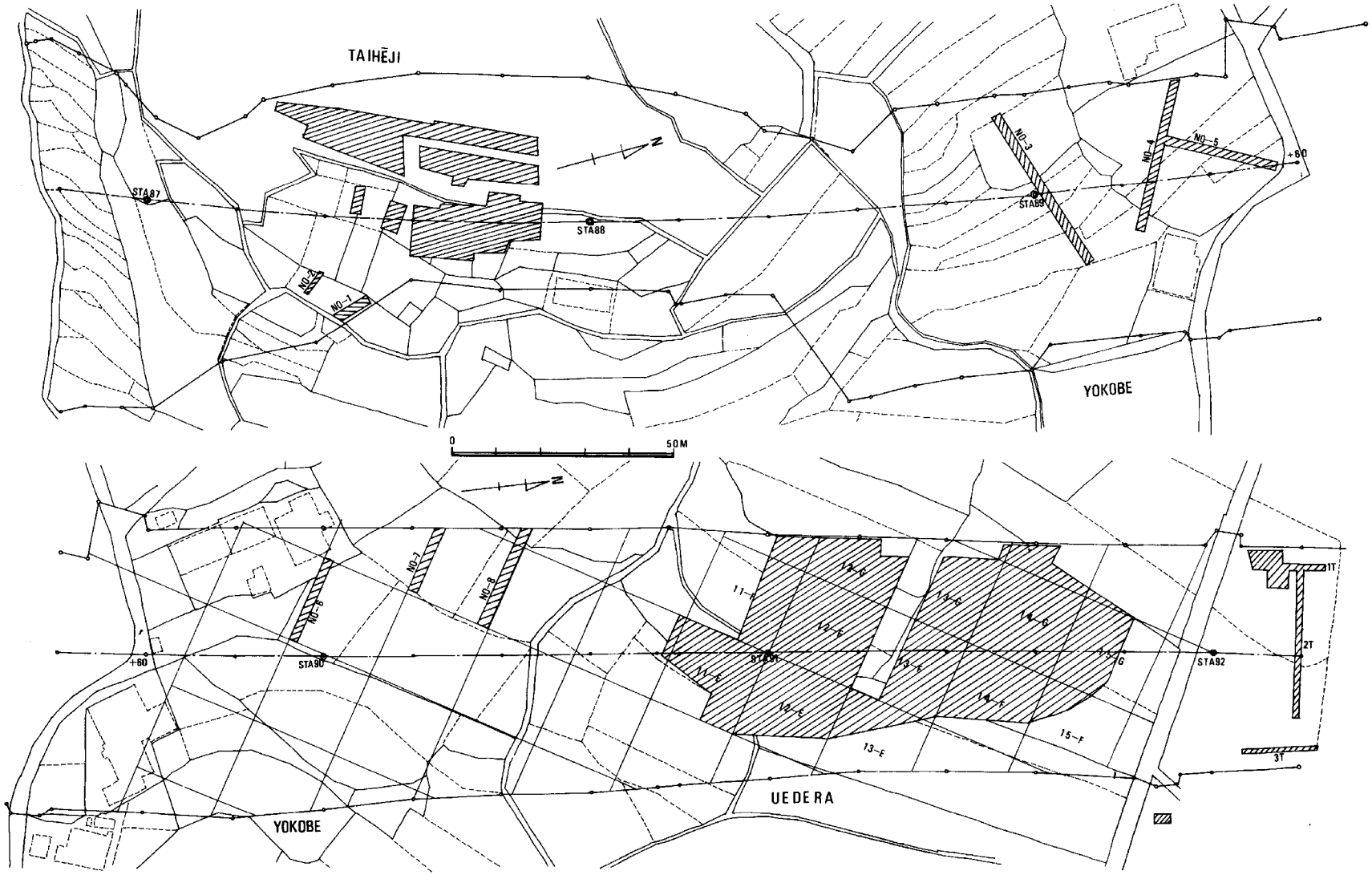
歴史時代では郡遺跡からは奈良時代へ平安時代にわたる多くの須恵器が散布している。円面硯片がみつかっている。条里制の地割が遺存し郡の地名も注目しなければならない。須内遺跡，中王子遺跡にも奈良，平安期の須恵器が散布している。室町時代以降では標高242.7mの石ケ城跡がある。備中街道の要害に位置する山城で永享11年（1439）に越尾五郎次郎によって築かれた（注2）。越尾氏は久米郡から来て真嶋郡鹿田郷の地頭職であった植木宗十郎を討って，鹿田郷に居館をかまえ石ケ城を築いたのである。植木氏は鹿田村上寺（うえでら）に館を構えたといわれ（注3）須内遺跡の位置と一致するのである。

太平寺地区は便宜上須内遺跡にくみ込んだが「作陽誌」によれば太平寺跡の記事があり，現在の地名にその名がある。

注－1　中国縦貫道建設に伴う発掘調査報告7に掲載予定である。
注－2　美作古城史一，寺阪五夫，昭和30年
注－3　作陽誌（元禄年間長尾勝明によって編纂された地誌）



第2図　遺跡周辺の地形図



第３図　須内遺跡発掘調査区配置図

第3章　調 査 の 概 要

須内遺跡を三区に分け北から上寺地区・横部北区・太平寺地区とした。上寺地区は本遺跡発見の端緒となった地区で，現在水田になっているが，明治の頃は桑畑，畑であったといわれる。これは扇状地堆積物であるため保水力がなかったためと思われる。上寺地区には全面に遺物の散布がみられ段丘の末端には巾1.5～2mの畑が縁どっており，古い道ではないかと考えられる。この地区では20mのグリットを設定し全面調査を行った。調査面積は3.600㎡である。

横部地区は上寺地区の南の山麓斜面と侵食谷を含めた地区で穴田部落付近である。トレンチ調査の地区である。

太平寺地区は横部地区の南にあって，東へのびる支脈の末端部で作陽誌に太平寺跡の記事があること，五輪塔が散在すること，段状につくられていることなどから，中世寺院址の存在が考えられトレンチと部分的拡張による調査を実施した。

A 太 平 寺 地 区

調査前に三ケ所の段状地形がみられ，それを第1～第3調査区とした。第1調査区が畑であった以外は山林であり，第2調査区では五輪塔が散在していた。

(a) 第 1 調 査 区

1号住居址（第4図）

傾斜地に検出されたために東半は消失していた。柱穴が多数でその組み合せが明らかではないが壁溝から考えて3～4回の建て替えが推定できる。

最初は直径6mの円形で第1回の建て替えは約80cm南にずらして直径6.2mの円形となるが，北西部に部分的修正がみられる。

第2回の建て替えは，前2回を抱括する直径約8mに拡張されている。柱穴は壁溝に沿って5本が考えられるので全体では10～12本の柱穴が検出された。

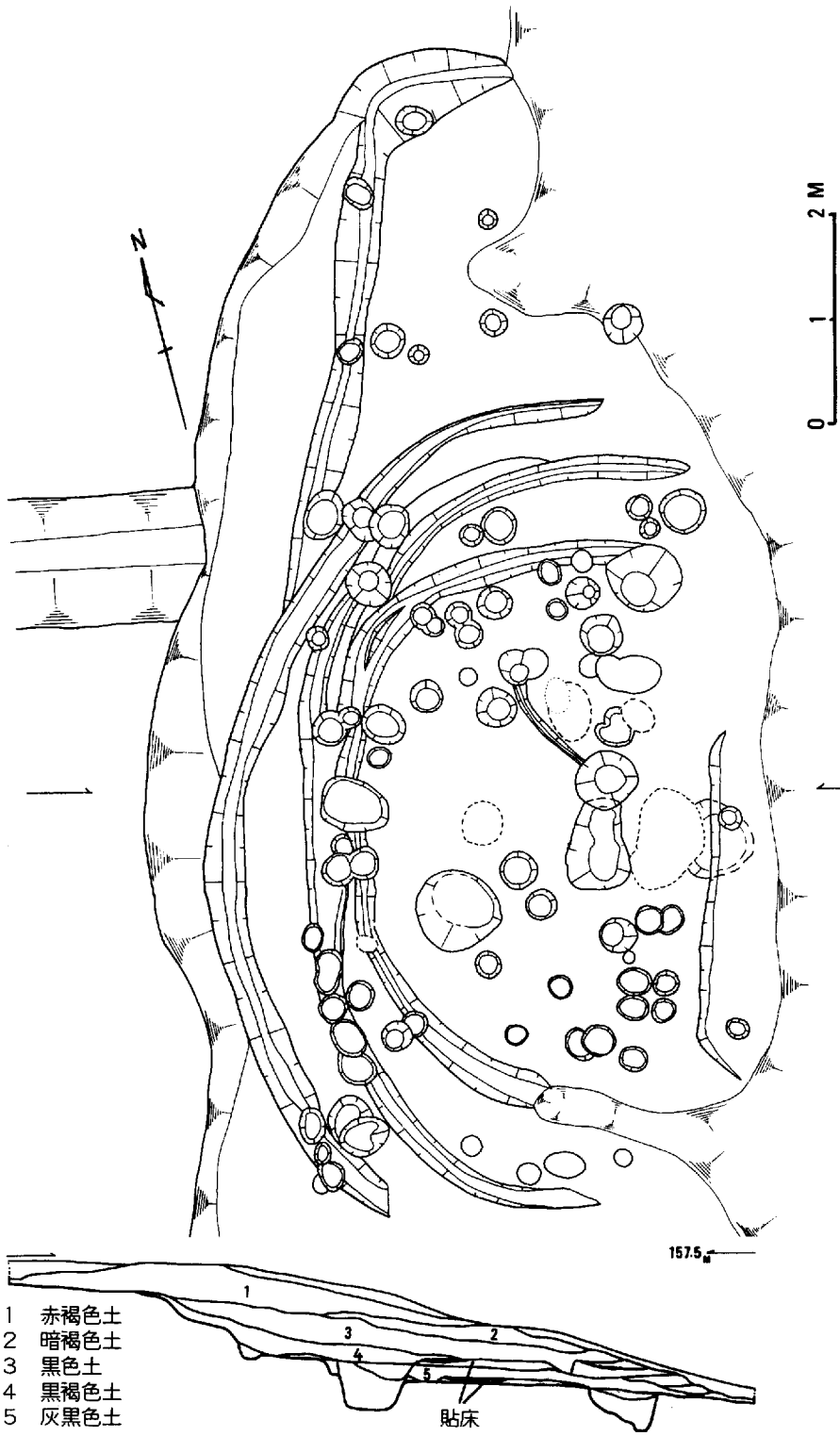
1号住居址出土石器（第6図）

石斧1は長さ12.7cm，巾6cm，厚さ4.5cmの太型蛤刃石斧である。刃部は破損し，再使用のあとがみられる。

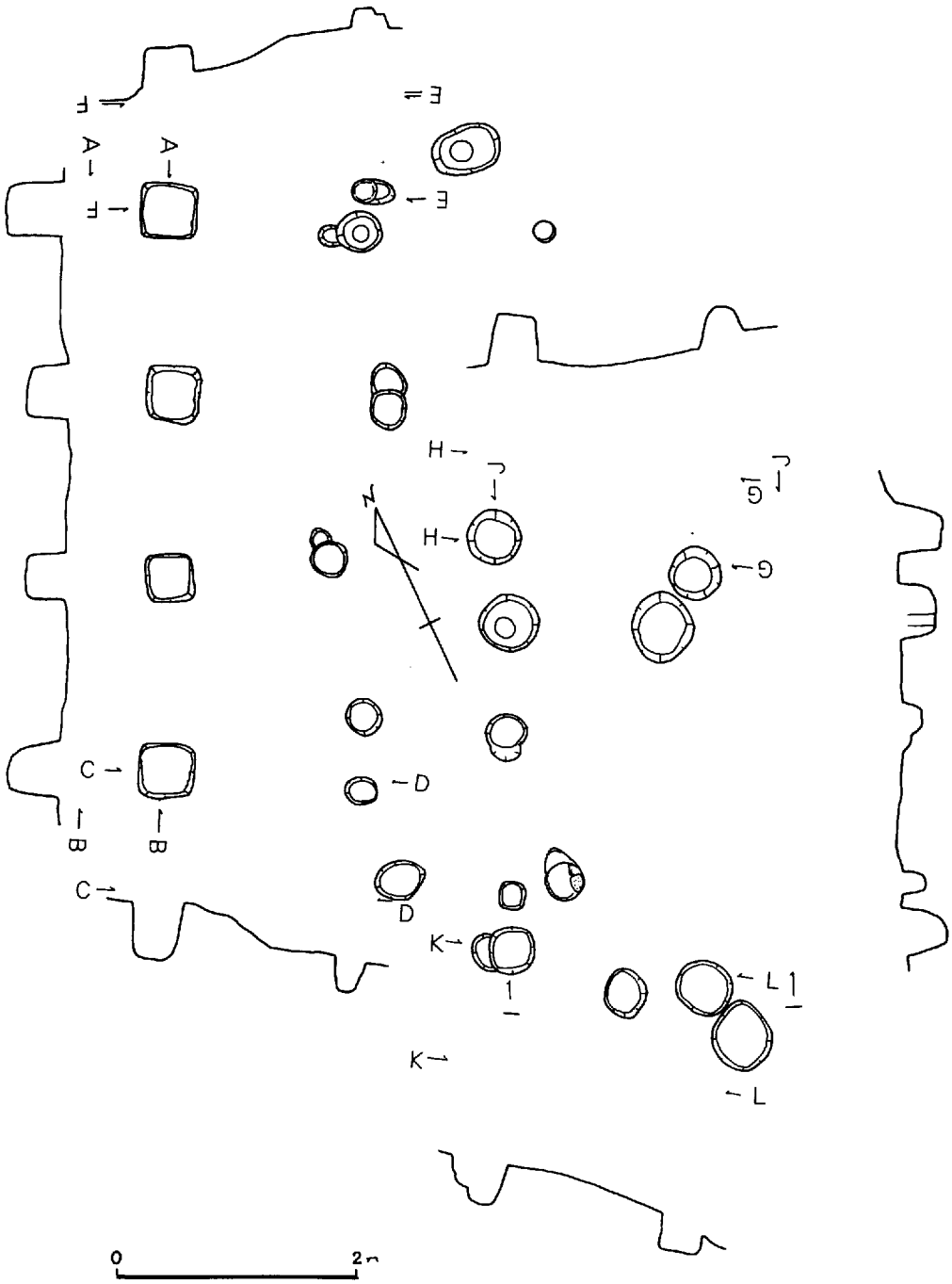
石斧2は約$\frac{1}{3}$を破損した太型蛤刃石斧の刃部である。巾7cm，厚さ4cmの硬砂岩製である。住居址床面出土。

扁平片刃石斧1は長さ7.2cm，巾2.3cm，厚さ1cmである。表面はやや風化しているが，刃部をのぞいては打製である。住居址床面出土。緑色片岩製。

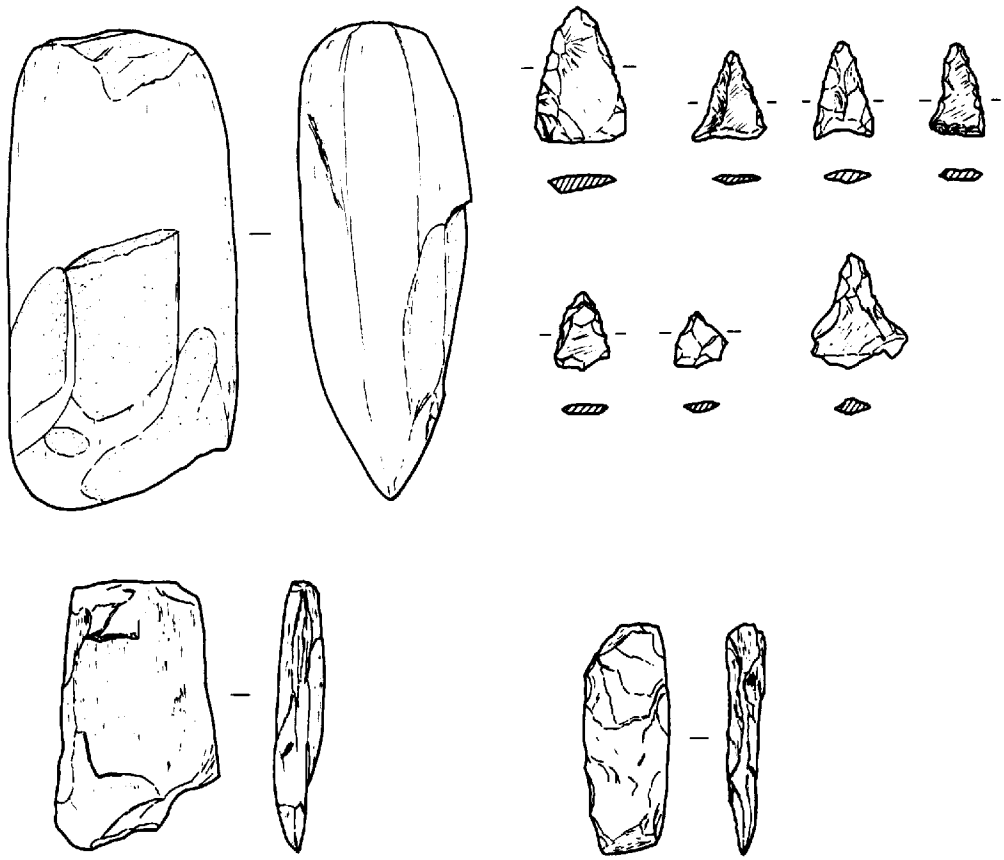
扁平片刃石斧2長さ8.2cm，巾3.5～4.5cmと刃部がやや広い。表面の風化がすすんでいるが，全



第4図 1号住居址



第5図　大平寺地区第1 調査区建物レベル157m



第6図　1号住居址出土遺物（S＝$\frac{1}{2}$）

体に磨製で刃部は両面に研磨が認められる。緑色片岩製

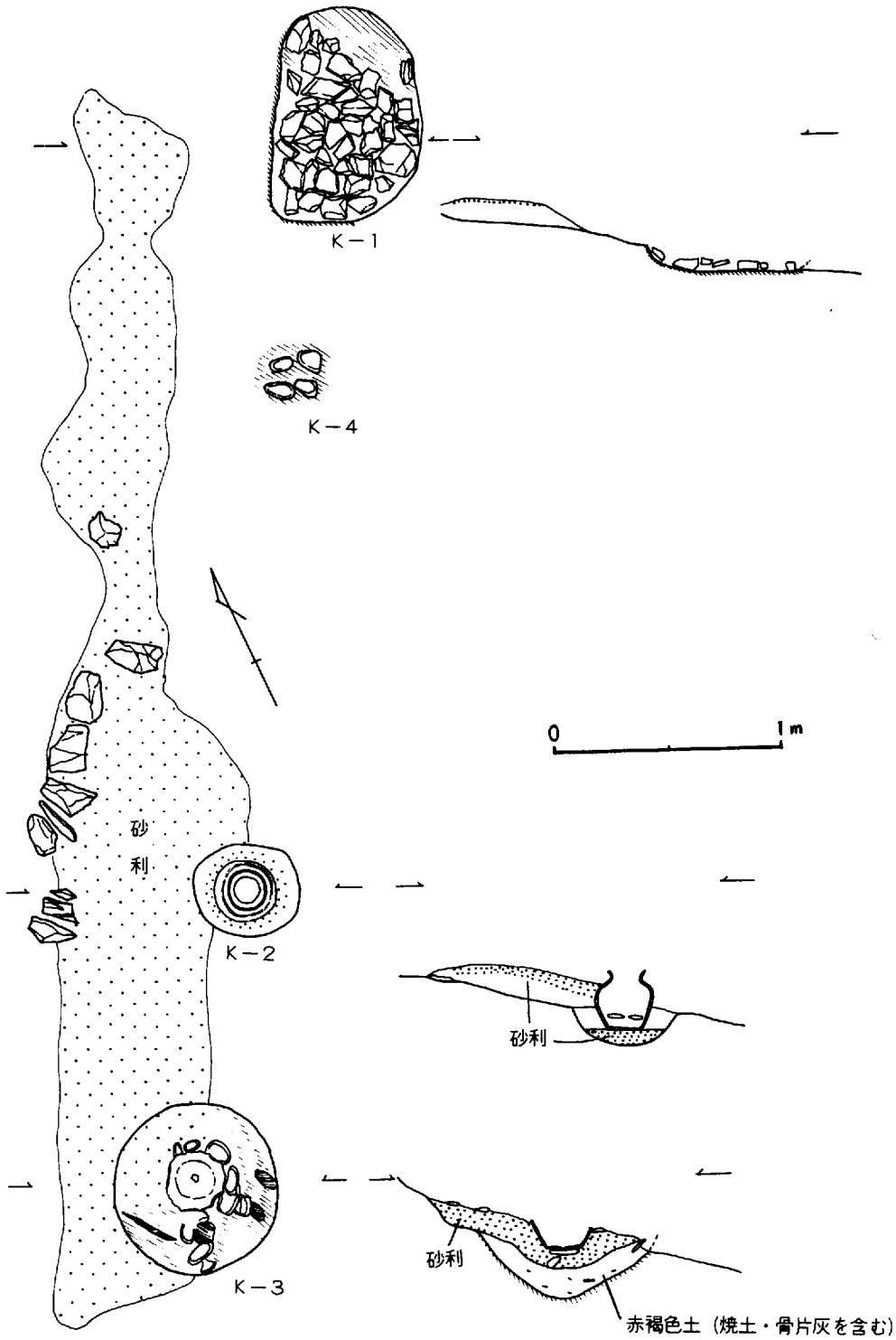
石鏃は7個出土した。いづれもサヌカイト製である。これらの他に未製品，剥片がかなり出土した。

建　　物（第5図）

1号住居址のすぐ北に20数個の柱穴を検出した。その中でほぼ南北にならぶ4本の柱穴は，1辺30～45㎝の方形の掘り方で155㎝～162㎝の柱間隔を測る。しかし，これらに対応する柱穴は削平されて検出できなかった。したがって建物の規模は明らかではない。柱穴内を埋める土はルーズで他の円形の柱穴よりも時期は新しいと思われる。遺物は伴出していないが掘り方が方形であることは一般住居とは考え難い。

(b) 第 2 調 査 区　（第7図）

第1調査区のすぐ上段で巾約3ｍ，長さ7～8ｍの段をなす。



第7図　大平寺地区第2調査区レベル160.8m

表土を除去すると須恵質の骨蔵器が4個出土した。これらをK—1～K—4とした。いずれも小さな河原石でおおっていたと考えられる。

K—1（第8図—1）は95㎝×65㎝の楕円形に近い形で，深さ10㎝前後の皿状の掘り込みに10㎝角の板状の山石を敷きつめていた。山石も壁も赤く焼け，この上に骨蔵器が置かれていたと考えられる。骨蔵器は口径18㎝，高さ25㎝，最大腹径33㎝を測り，須恵質で灰白色を呈する。口縁部がややひらき，端部に凹線を施こし器壁は約1㎝と厚い。胴部外面は小さな格子目のタタキが見られ，内面は青海波をなでて消している。器壁はうすく，底部に焼成後の穿孔がある。

K—2（第8図—1）は直径45㎝，深さ18㎝のピットに，厚さ8㎝の砂利を敷いて，その上に骨蔵器を置き，少くとも口縁部附近まで河原石を敷いていたと考えられる。骨蔵器の中には火葬骨と平たい河原石が入れられていた。骨蔵器は灰白色を呈し須恵質であるが，口縁部がやや歪んでいる。口縁径18㎝，高さ約26.5㎝を測り，口唇部は玉縁をなし，肩部には二条のヘラ描き沈線を施こしている。全体的な器形は備前焼きの壺に類似している。器面は内外とともになでで仕上げている。底部に焼成後の穿孔がある。

K—3（第8図—2）は直径約70㎝で深さ30㎝の擂鉢型のピットを掘り，ピット内は赤く焼けて固く，赤褐土の中には灰や，焼土の他に，骨片が含まれ，焼けた土師器と直刀1が出土した。ピットを埋めた赤褐色土の凹んだ中央部に砂利を入れ，平たい河原石を敷いて，骨蔵器を置いている。このピットは火葬の場であり，土師器，直刀も同時に焼かれ，火葬骨のみを骨蔵器に入れ，再びそのピットに埋葬したと考えられる。骨蔵器は，口径24㎝，推定器高30㎝を測る。器面は灰黒色を呈し，細かな格子目のタタキが見られ，内面は青海波を消している。全体に器壁はうすく，底部に焼成後の穿孔がある。

口縁部が強く外反し，K—1出土の骨蔵器に器形は似ている。土師器皿は直径11㎝，高さ2.8㎝で底部は糸切で，再度火を受けて黄褐色を呈する。

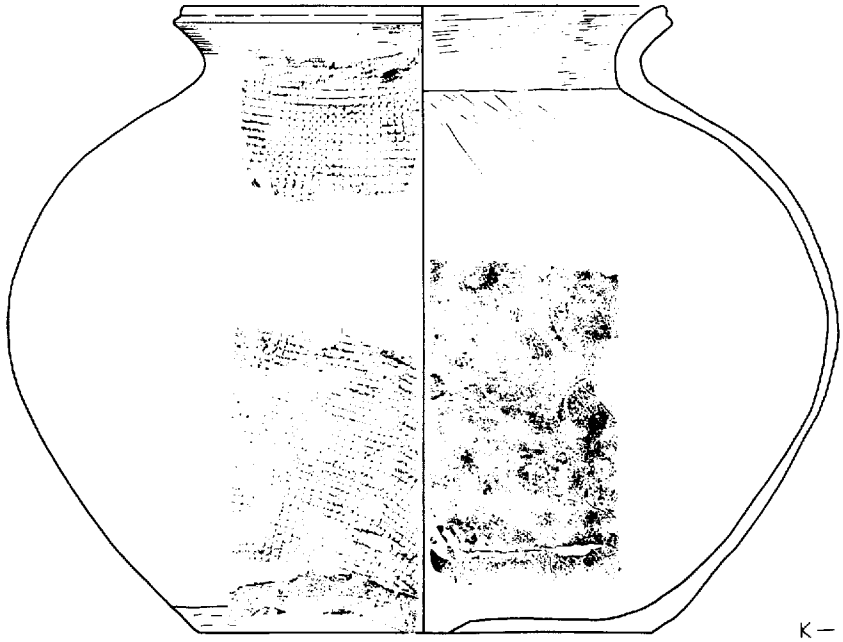
直刀は全長30㎝，刃部19㎝，反りはむしろ内反り気味である。柄は11㎝で，柄頭の方へ巾も厚さも減じている。はばきより約2㎝に目釘が残っている。火葬時に火を受けて，全体に赤褐色を呈する。

K—4（第8図—2）は直径約30㎝の範囲が赤く焼けており，その上に，4個の平たい河原石を敷き，骨蔵器が置かれていたようである。

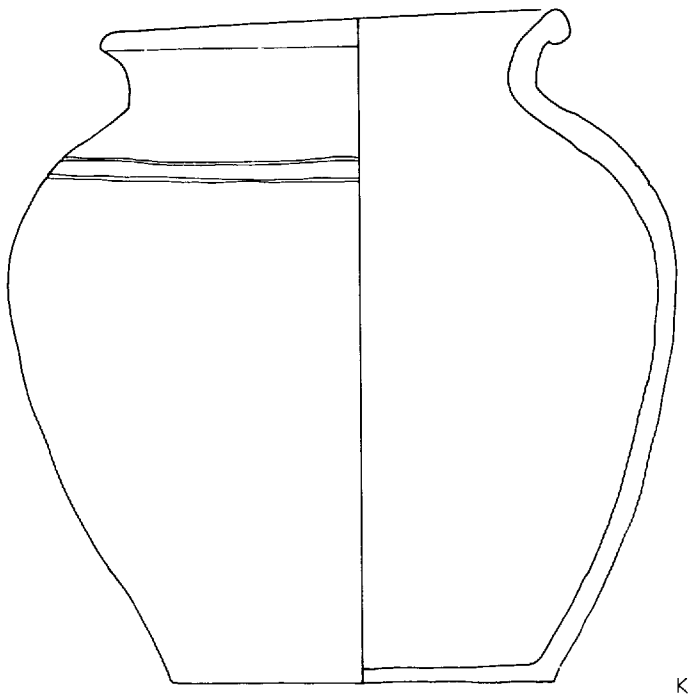
骨蔵器は口径21㎝，器高26㎝を測り，表面は黒色，内面は灰白色を呈する。格子目のタタキは口縁部までおよび，器壁は全体に均一でやや厚い。内面に輪づみのあとがみられる。口縁部はやや外傾するが，頸部はゆるやかなカーブである。

第2調査区について

骨蔵器のうちK1・K—3・K—4については器面に施こされた格子のタタキ目や内面の青海波は須恵器の手法であっても焼成温度は須恵器ほど高くはなく，器壁の中心は黒色を呈する。またK—3から出土した土師器皿は糸切底であることなどからこれらの墳墓は平安時代後期～鎌倉時代初期の時期に比定できる。

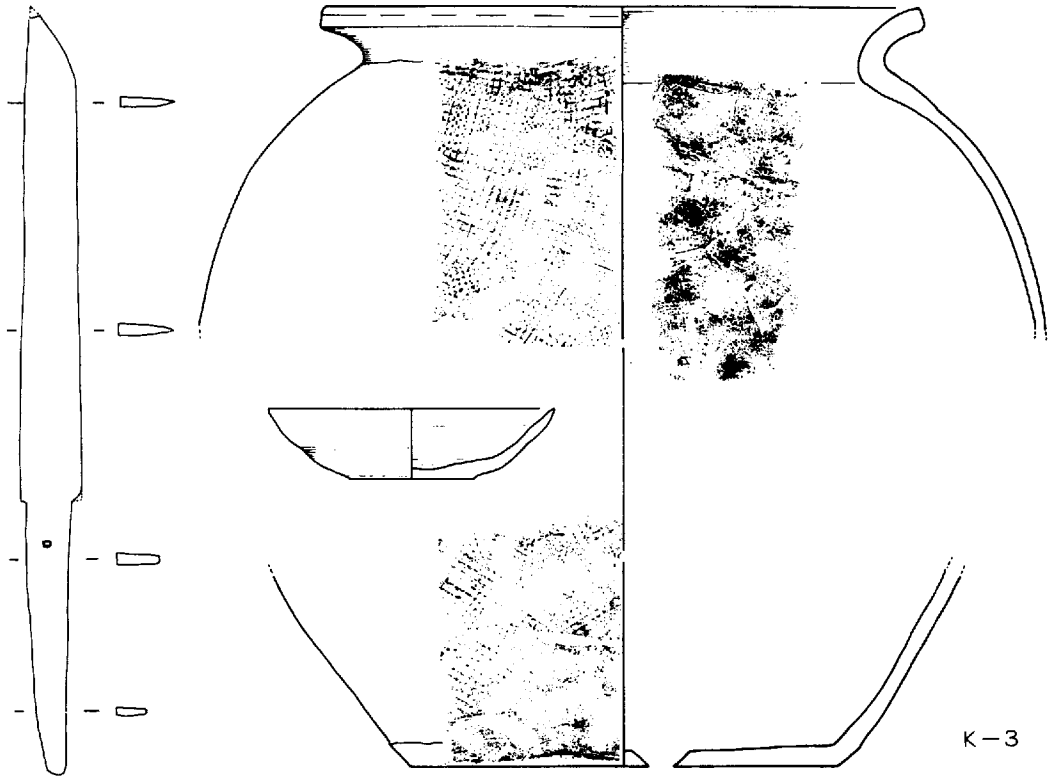


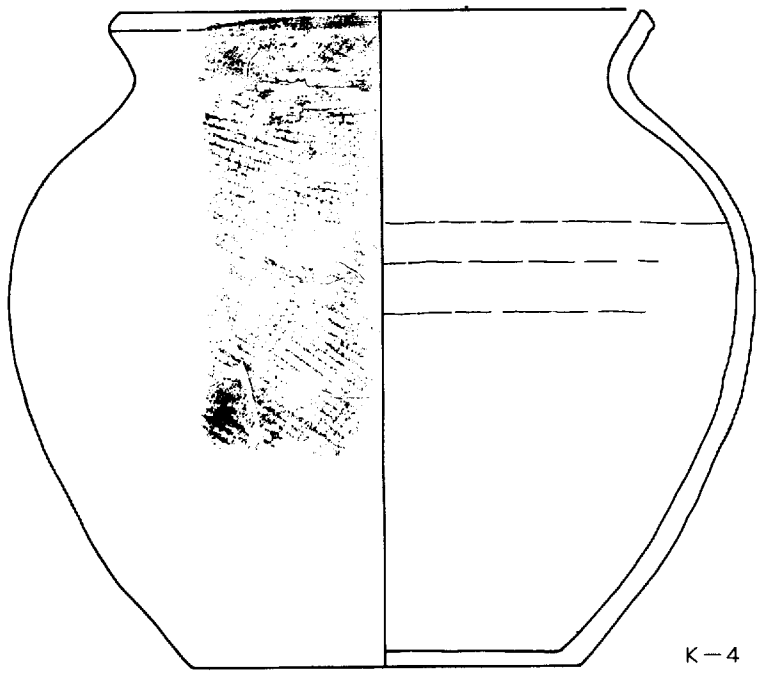
K－1



K－2

第8－1図　第2調査区出土骨蔵器（S＝$\frac{1}{3}$）





第8－2図　第2調査区出土骨蔵器（S＝$\frac{1}{3}$）

墳墓は火葬骨を入れた骨蔵器を石や砂利の上に置き，更に骨蔵器を砂利で被うという形をとっている。そのなかでK－１・K－３・K－４に共通することは焼けた石，すりばち状の焼けたピットの上に骨蔵器を置いていることである。このことは火葬場即埋葬の場であることを示している。こうした例は，奈良時代と考えられる備中真備町市場にある。それによると直径1.4m深さ0.7mのピット内は火をうけており，ピット内の木炭・焼土・火葬骨を含む層の上に有蓋角櫃形須恵質土器を置きその中に火葬骨を入れた骨壺を納めた状態であった。また，鉄斧を副葬している。（注1）

この他に火葬墓の例は近隣では，真庭郡久世町上野から平安時代と考えられる四基が発見されているが，いづれも小さな石室をつくって骨蔵器を安置する形をとっており，鉄製鋤を伴出している。（注2）

また，苫田郡加茂町公郷から奈良時代と考えられる火葬墓が発見されている。１辺約60cmの石室をつくって小型陶棺，有蓋骨壺，直口壺を納めている。（注3）

更に久米郡中央町打穴出土の小型陶棺なども火葬墓であるが，（注4）真備町以外の例はいずれも石組みのに骨蔵器を安置する形をとっており本遺跡や真備町の例とは異なっている。その原因は葬者の社会的地位などとあるいは深いかかわりをもつことも考えられる。本調査区の墳墓は五輪塔などの墓標が地方において出現する以前の一つのタイプを示すと考えられる。

(c) 第３調査区（第９図・第10図）

第２調査区の南に位置する段状地形で，小さくは三段につくられている。調査前から五輪塔や古備前焼の破片が散乱しており，中世の墓地であろうと考えられた。

P－１　上段に検出された墳墓で石灰岩製の五輪塔の地輪が置かれ，備前焼の骨蔵器がすぐ脇に埋められていた。本調査区から出土した多くの五輪塔のうち原位置を保っていたのはこの地輪のみである。

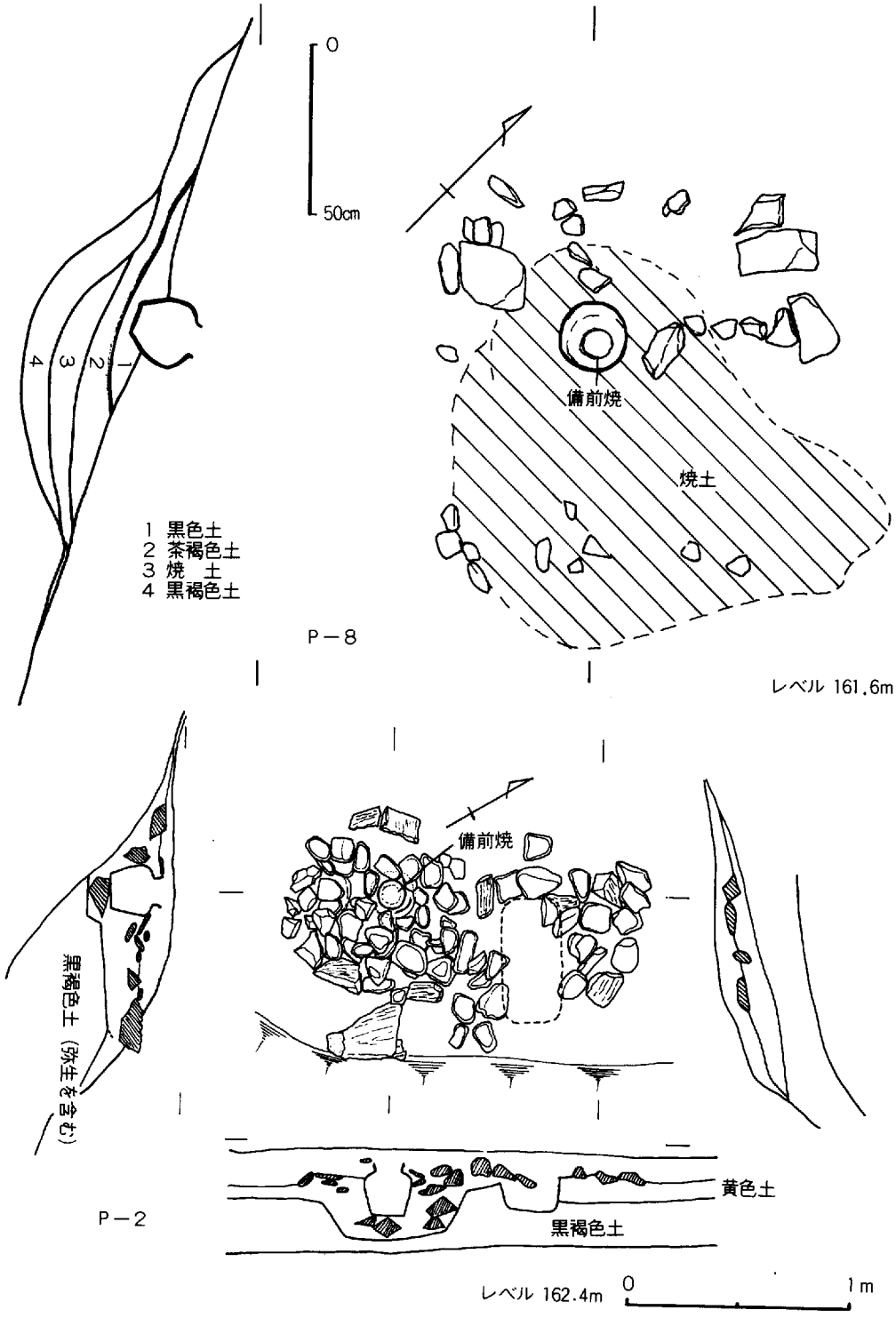
P－２　中段に検出された。平たい河原石を敷きつめた面に備前焼の口縁部がのぞいていた。東西約１m，南北約65cm，深さ18～20cmの掘り方の中に角張った山石を入れ火葬骨を納めた古備前の壺を置き，黄褐色の土を肩部～口縁部ぐらいまで埋め平たい河原石を90cm×60cmの範囲に敷きつめている。

備前焼　口径10cm，器高22.3cmを測り，口縁部はほぼ垂直に3.2cm立ち玉縁をなす。肩部に四条の沈線がめぐり，肩部に灰がかかって，自然釉は黄色を呈する。全体に安定感のあるつくりである。

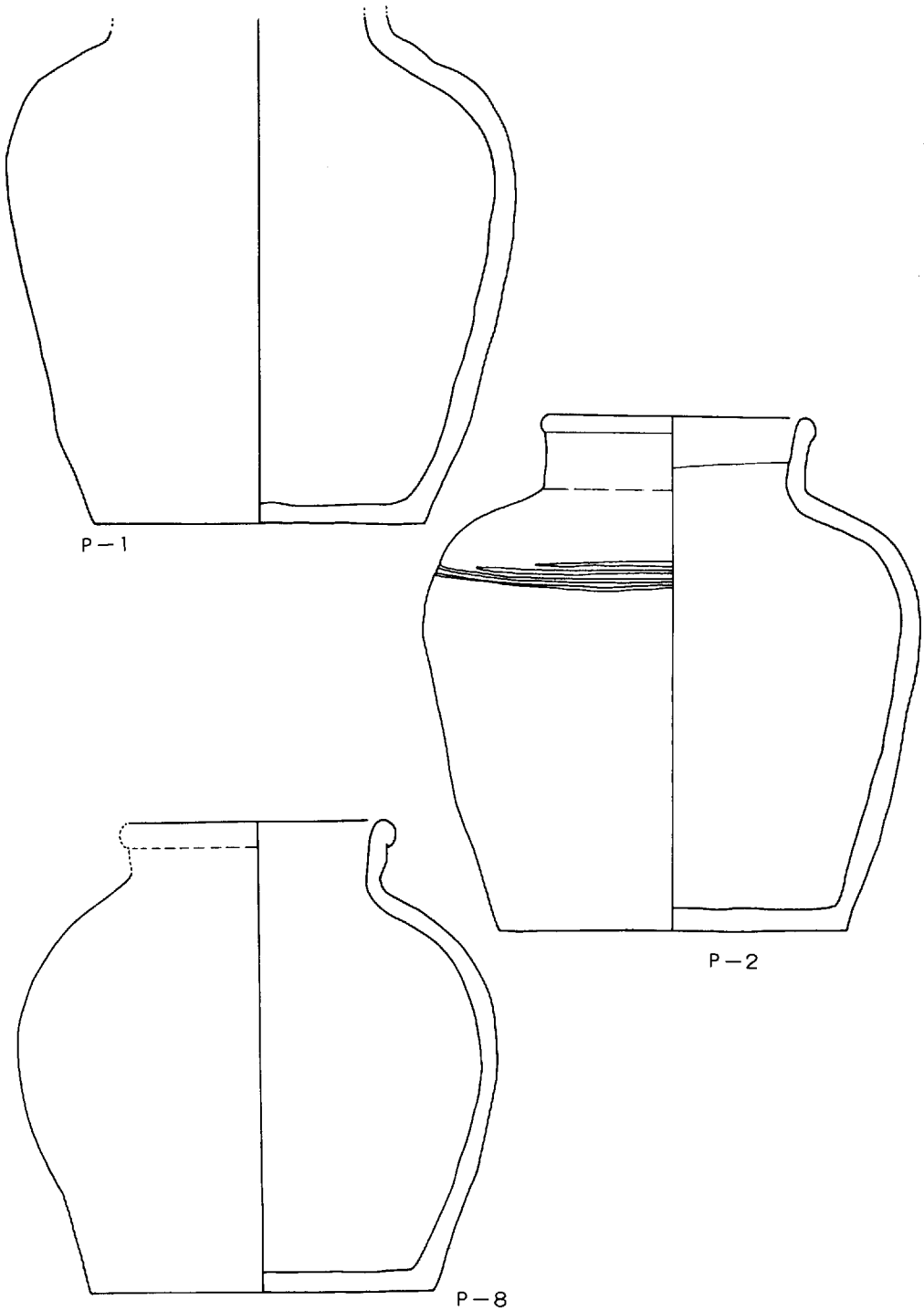
P－８　備前焼の壺がやや傾いて出土した。壺は黒色土の中に立てて埋められたと思われる。図中にみられる焼土などは古い時期の土層と考えられる。

備前焼は口縁部をほとんど消失しているが，推定口径10cm，器高20.5cmを測り，口縁部は高さ３

注１　中田啓司「備中真備町市場の一火葬墳墓」古代吉備　第３集
注２　松本和男「久世の夜あけ」久世町史
注３　橋本惣司「加茂谷の夜あけ」加茂町史
注４　間壁葭子「岡山県久米郡中央町出土の小型陶棺」考古学雑誌第54巻第３号



第9図　第3調査区P－2，P－8平面図，断面図



第10図　第３調査区出土備前焼（S＝$\frac{1}{3}$）

cmでややひろがり気味であり玉縁をなす。胴部は球形に近く，直径15cmの安定した底部がこれにつく。色調は備前焼独得の赤褐色を呈する。

2号住居址（第11図・第12図）

第2調査区の中段にあたるP－2をさらに掘り下げて検出した。P－2は黒褐色の弥生式土器の包含層を切ってつくられており，弥生中期～後期の土器片が出土していた。2号住居址は傾斜下面にあたる南東半分は消失しているが，やや胴張りの隅丸方形の平面プランを呈する。一辺4.4mで浅い壁溝がめぐる。柱穴は大小8本を検出したが，住居址の中心軸に位置するやや大きめのものが2本これにともなうと思われる。直径40cm，深さ20cmと直径30cm，深さ34cmを測る。西辺の壁溝から中央に二条の床溝がある。中央ピットまではとどかないが巾15cm，深さ10cmである。なお床には拡張前の壁溝が検出された。一辺3.5mの隅丸方形をなす。

高　杯　脚

高さ12cm，杯部とのとりつけ部分で直径4.5cm，ラッパ状にひらいた端部で直径15cmを測る。二条一対の凹線が8対，裾部には9－10本の線が方射状に描かれ，それらの間に二孔一対の円孔が4対穿たれている。内面はヘラ削りが施され，外面は丹塗りである。弥生後期前葉に比定できる。

台　付　壷

住居址のやや上層から出土した。復元口径24cm，胴部最大径約36cmを測る。口縁部は上にのび，外面に浅い凹線がめぐる。肩が張り，屈折部に浅い凹線が二条めぐり，ていねいにヘラ磨きが施されている。内面は肩部，胴部ではヘラ削りの手法がみられる。

小型甕形土器

住居址上面から出土した。器高16cm，口縁径13cmを測る。口縁部は鋭角にひろがり端部がやや厚い。底部は不安定な平底を呈し，器表面は縦位のヘラ磨きが底部まで施され，内面は口縁部以外はかきあげのヘラ削りの手法がみられる。胎土は細かな砂粒を含み，全体に茶褐色を呈する。

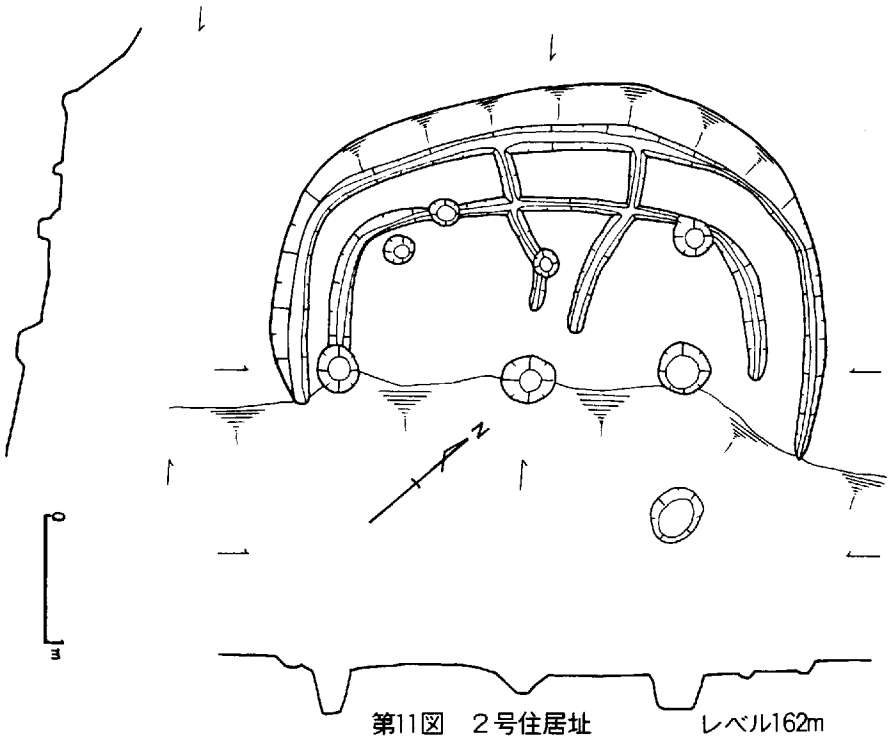
第3調査区の墳墓について

この調査では5～6個体の備前焼と30数基の五輪塔，宝篋印塔が出土した。備前焼についてはその特徴などからみて，鎌倉時代後半から室町時代前半と考えられる。また，五輪塔はそのほとんどが石灰岩製で花崗岩製は全体の1割強である。石灰岩の供給地は本遺跡の西約10kmに求められる。

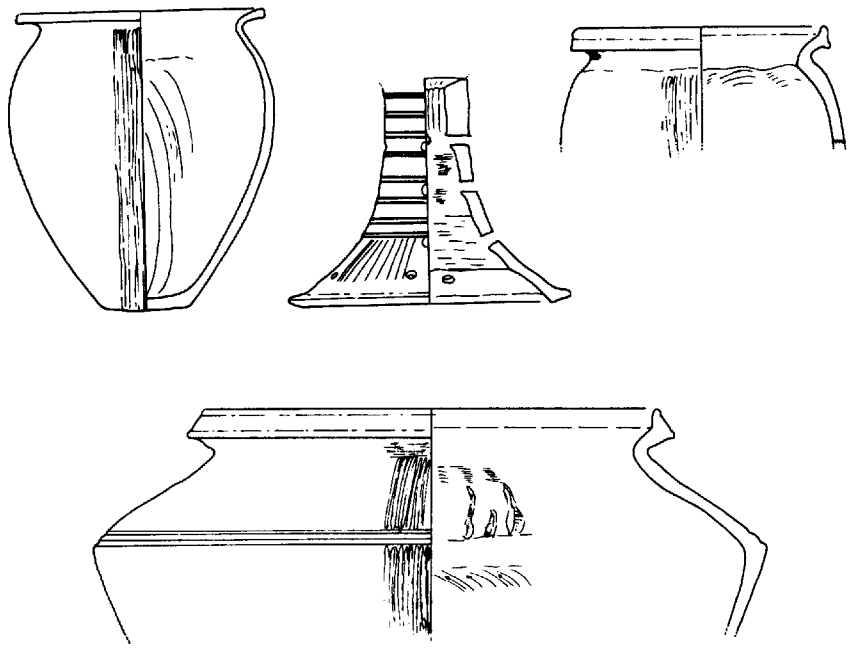
五輪塔は各輪が正しい組み合わせでもなく，大きさも様々であるが，宝珠の先端は長く，空風輪のくびれは小さく火輪は丈があまり高くないし，溶食によって稜は明瞭でないが両端の反りもほとんどない。水輪は最大径を胴上部にあって，尻すぼみの形を呈する。地輪の丈は高くない。石灰岩製の五輪は60～70cmのものがほとんどで全体に小型である。

墓塔としての五輪塔が時代や被葬者の階層によって形や大きさに差異が生じることは当然であるが，室町時代になって一般庶民にまで墓塔建立が広がりをみたといわれている。しかし，彼らの経済的事情から小形のものが造られた。（注5）

注5　川勝政太郎「墓塔の成立」新版　考古学講座6　雄山閣　昭和45年



第11図　２号住居址　　レベル162m



第12図　２号住居址出土遺物（S＝$\frac{1}{4}$）

宝篋印塔は三基分が出土したが完全なものはなく，写真に示したものが相輪を欠くが，ほぼ完全なものと考えられる。

屋根は五段の段形をなし隅飾はやや外に反りをもつ。軸部には四面に仏像が刻まれている。基礎は二段の段形をもつ安定感のあるもので文様等はない。

以上のことから，五輪塔の形態からみて鎌倉時代末～室町時代前半と考えたい。したがって本調査区の形成は備前焼の時期と矛盾はないように思われる。

B 横 部 地 区

第３トレンチ～第８トレンチを設定した。第３トレンチは谷に直交するもので湧水で壁面が崩壊したために地表下約１ｍの青灰色粘土層まで掘り下げるに留めた。

青灰色粘土からは弥生式土器片が出土した。いづれも流れ込みであったが図示し得たものは少ない。

壺形土器は口径14㎝で口縁端部は上下に肥厚し，外面に三条の凹線を施こしている。頸部は短かく垂直に立ち胴部との境はヘラによる明瞭な段をもつ。外胴部外面はていねいなヘラ磨き，内面はヘラ削りの手法がみられる。（第14図）

第４・５トレンチは東にのびる尾根に設定した。第４トレンチは畑の耕土を除くと変成岩の岩盤があらわれた。第５トレンチは傾斜に直交する南北方向に設定した。

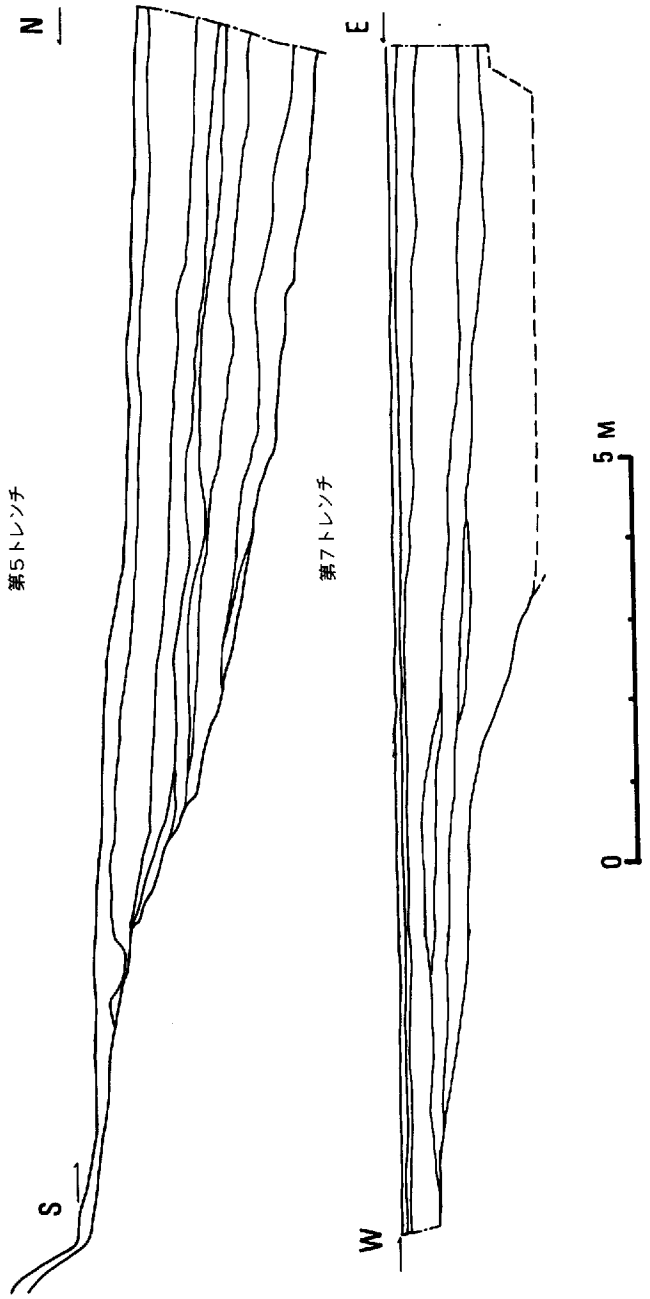
C 上 寺 地 区

この地区で検出された遺構を大別するとａ竪穴住居址，ｂ掘立柱建物，ｃ井戸址，ｄピット，ｅ鍛冶炉，ｆその他の遺構に分類できる。竪穴住居址は，共伴の出土土器によって古墳時代前期に比定できる。掘立柱建物，井戸址，ピット，鍛冶炉，その他の遺構は，本地区（本遺跡）の中心的時期を示す鎌倉～室町時代の遺構である。これら遺構の在り方と，時期は，赤野遺跡（注）と極めて類似している。

(a) 竪 穴 住 居 址 （第16図(1)）

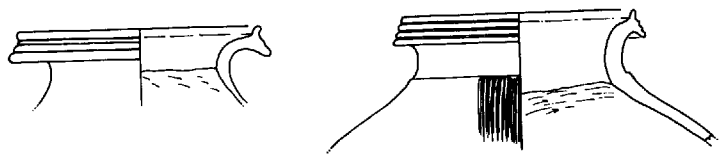
この住居址は，ボックスの南約８ｍの所で検出された。長辺5.0ｍ一短辺4.5ｍのほぼ方形で，長軸が東西方向である。北西隅がやや変形している。深さは残りのよい北西隅で33㎝，東側で壁帯溝がやっと残っている程度である。壁帯溝は，全部回っており，巾10～18㎝，深さ２～８㎝で，断面はU字形を呈している。柱穴は４本で，直径20～25㎝，深さ９～15㎝を測る。炉址は，北東隅の柱穴をおおうように位置し，直径80㎝の円形を呈し，中央部に直径25㎝の凹みが見られる。埋土上層は，淡黄褐色土層で，土師器，須恵器を包含し，たたき石，須恵器杯身２個体も出土した。埋土下層は，黒褐色土で，木炭を多量に包含し，土師器片を含み，砥石が出土した。

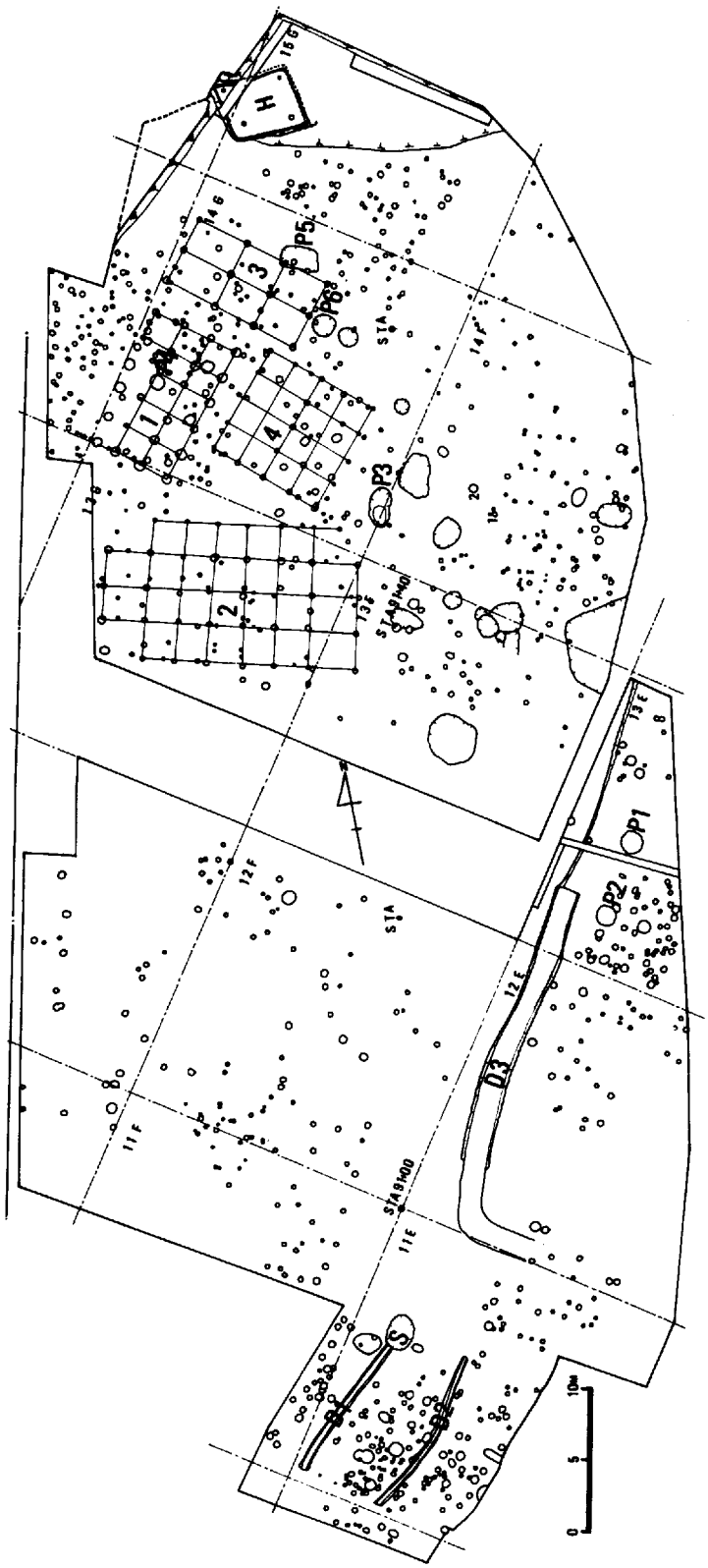
注 岡山県教育委員会「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」３



第13図　横部地区トレンチ土層断面図

第14図　横部地区　第３トレンチ出土土器





第15図　上寺地区遺構配置図（S＝$\frac{1}{500}$）

竪穴住居址出土遺物　（第16図―２）

須恵器杯身（１～２）

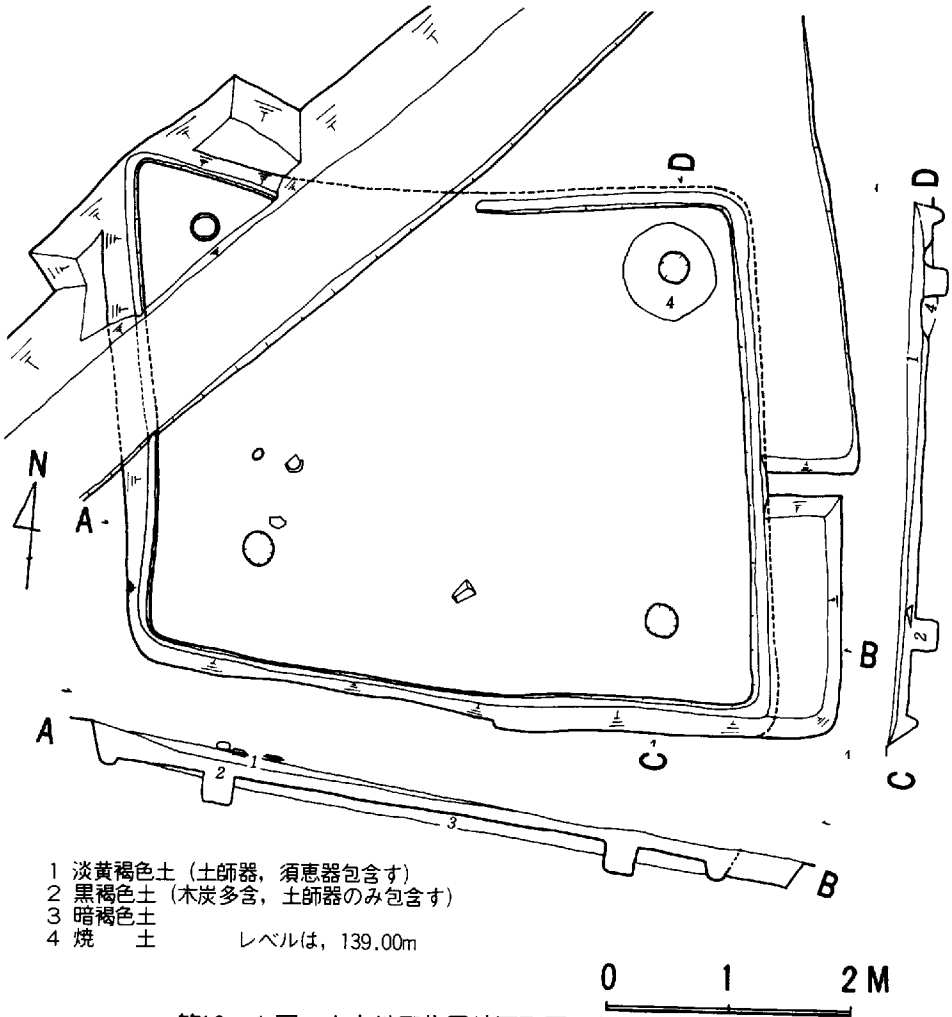
1は，立ち上りが1.8㎝と高く，やや内傾している。口縁端部に面を有す。器面は，なめらかで砂粒も少ない。底部はヘラ削り，他はナデで仕上げられている。焼成は良好で灰色または灰褐色を呈している。**2**は，立ち上り1.4㎝で，やや内傾している。口縁端部は丸い。粗砂を多く含み，底部内面に青海波のタタキが残っている。

土師器高杯（**3**）

杯部だけが残っていた。口縁部は，ひらきながら上方へ伸びる。外面にはクシ目がみられる。

石器（**4**～**6**）

4は，タタキ石と思われる。円礫の両端を使用し，最も広い面に凹みを作って持ち易くしている火成岩製である。**5**もタタキに使用されたものと思われ，花崗岩製である。**6**は，住居址床面より



第16―１図　上寺地区住居址平面図，断面図

出土した硬砂岩製の砥石である。

以上の遺物は，いずれも上層出土で，この住居址の切っている包含層にも見られるもので，住居址に伴うか否かは明らかではない。埋土下層には，土師器しか含まないということから，この住居址の時期は，古墳時代前期に比定したい。

(b) 掘立柱建物

建物Ⅰ（第17図 (1)）

住居址から約10m南側に検出された梁行２間（40m）×桁行５間（10.0m）の長方形掘立柱建物である。北西隅に１間の張り出しがみられる。建物の棟方向は磁北より42度東に振っている。柱穴は，大きなもので直径60cmあり，小さなもので直径40cmある。柱穴の深さは，平均50cmである。柱痕跡は，確認できなかったが，柱間は，梁行，桁行とも１間2.0mと一定している。

建物Ⅰ柱穴出土遺物（第17図 (2)）

遺物は，土師器灯明皿２点が出土している。**1**は，口径7.5cm，器高1.1cmを測る。底部は，糸切り後ヘラおこししている。灯心油痕はない。**2**は，口径7.9cm，器高1.3cmを測る。底部は，１と同じである。灯心油痕もない。

建物Ⅱ（第18図）

建物Ⅰの南側に検出された梁行２間（4.6m）×桁行５間（11m）で，四方に「ひさし」のつく建物である。建物の棟方向は磁北より75度西に振っている。柱穴は直径50～25cm，北側「ひさし」の柱穴は30～10cmと若干小さい。深さは10～20cmと浅い。柱痕は確認できなかったが，柱穴の芯心距離は梁行方向で北から2.3・2.3・2.3・2.6mを測り合計長9.5m，桁行方向で西から2.9・2.2・2.2・2.2・2.2・2.2・3.2mで全長17.9mを測る。梁行の１間の方が桁行１間より若干長い。

建物Ⅱ柱穴出土遺物（第10図 (2)）

柱穴出土の遺物は，土師器碗（**3**）の完形品１点だけである。口径12.5cm，器高5.4cmを測る。粗雑に作られており，粗砂を多く含み，底部ヘラ削り整形が認められる。茶褐色を呈している。

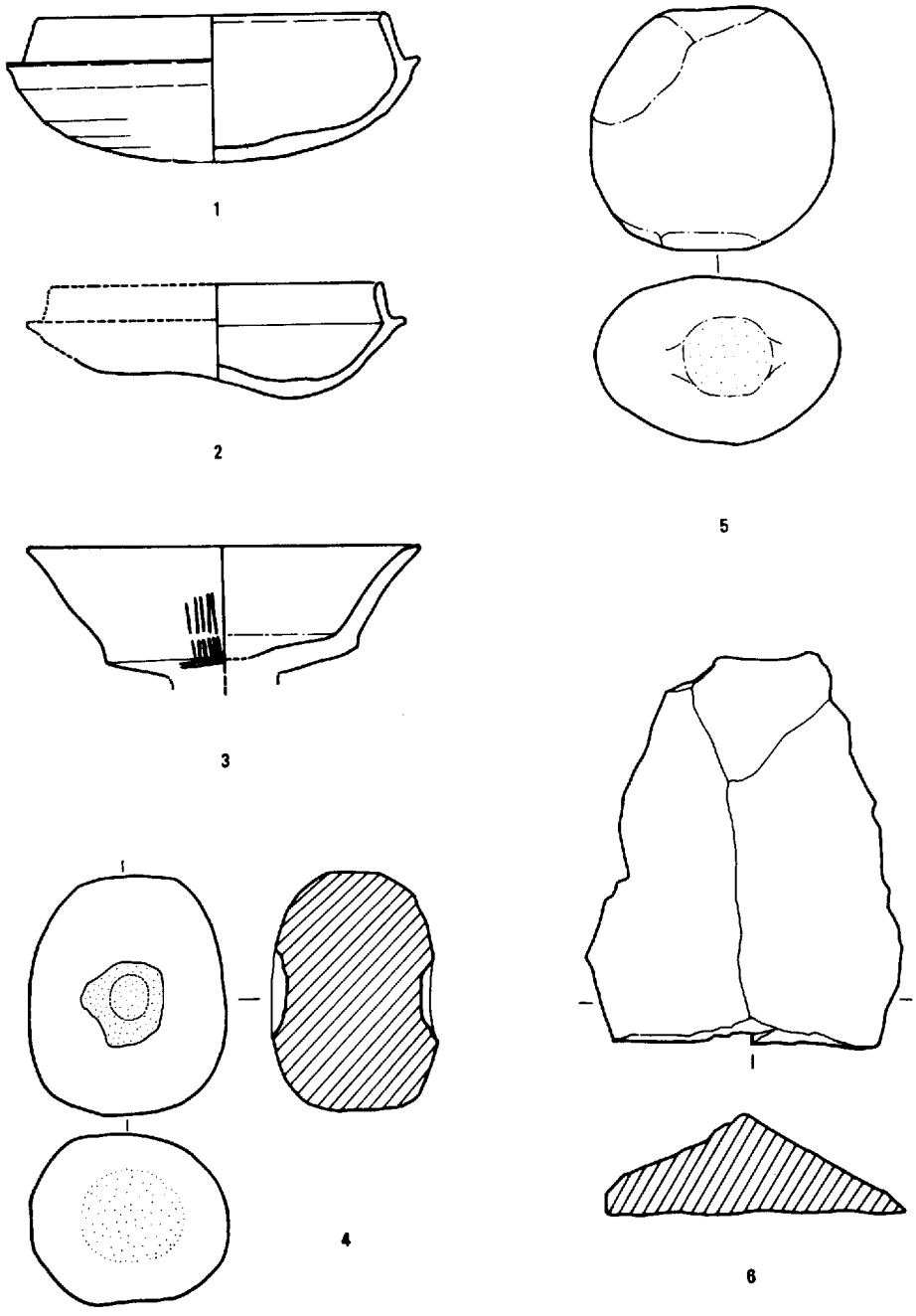
建物Ⅲ（第19図）

建物１の北側に接して検出された梁行２間（5.0m）×桁行３間（9.5m）の長方形建物である。棟方向は磁北から50度西に振っている。建物１とほぼ直交する。梁行は，等しく2.5mで，桁行は西から3.5・3.0・3.0mである。柱穴は直径50～30cmの円形，深さは60～40cmを測る。柱痕は確認できなかった。柱穴出土の遺物は全くなかった。

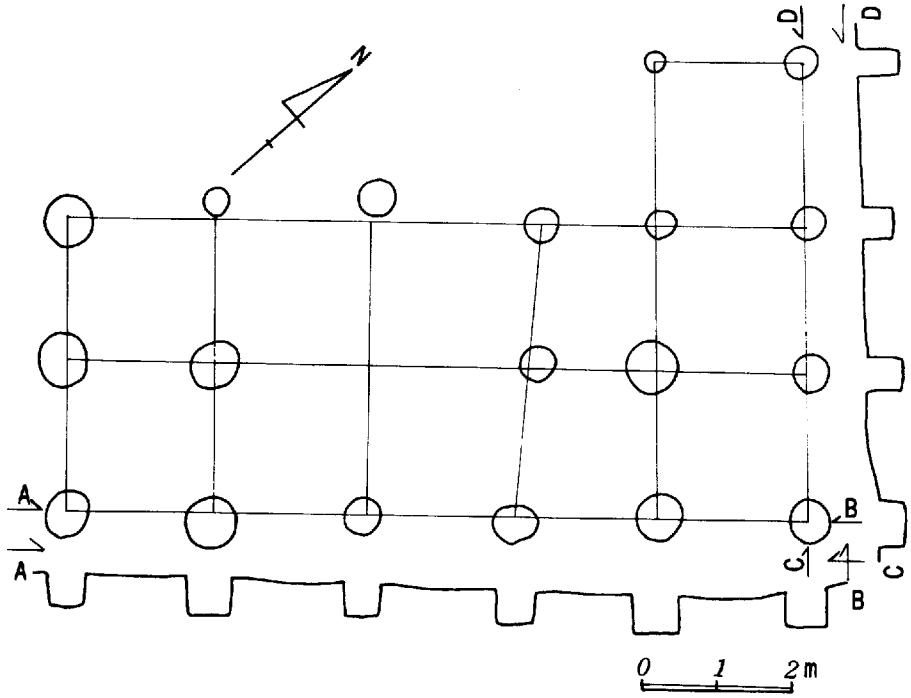
建物Ⅳ（第19図）

建物Ⅰの南東に検出された梁行４間×桁行４間の正方形建物である。建物Ⅰの壁と建物Ⅳの壁はほぼ平行する。建物１との柱の距離は北側で2.0m，南側で1.7mある。柱間寸法は１間2.0mと一定である。柱穴は直径20～30cm，深さ10～15cmである。建物Ⅳ柱穴出土の遺物は全くなかった。

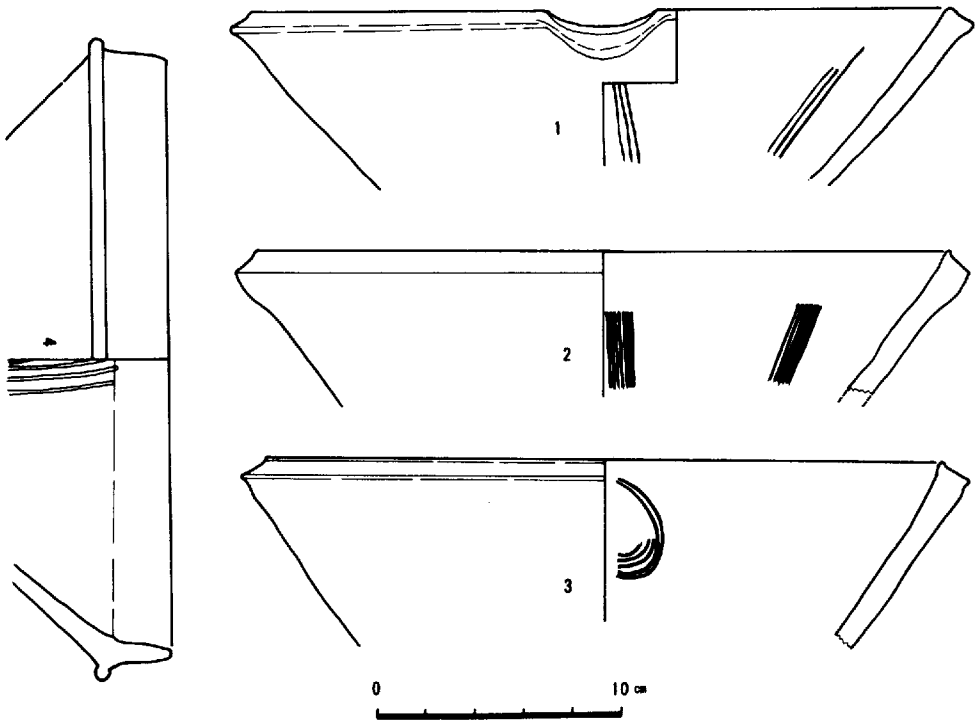
以上各建物の説明を加えてきたが，建物の時期は，建物柱穴出土の遺物及び，その他の周辺建物，土壙から出土した遺物等を考えあわせると鎌倉から室町時代に比定することができるが，同時に４棟が並び建っていたと言えるだけの資料は出てない。柱間寸法を比較して見ると，建物Ⅰは



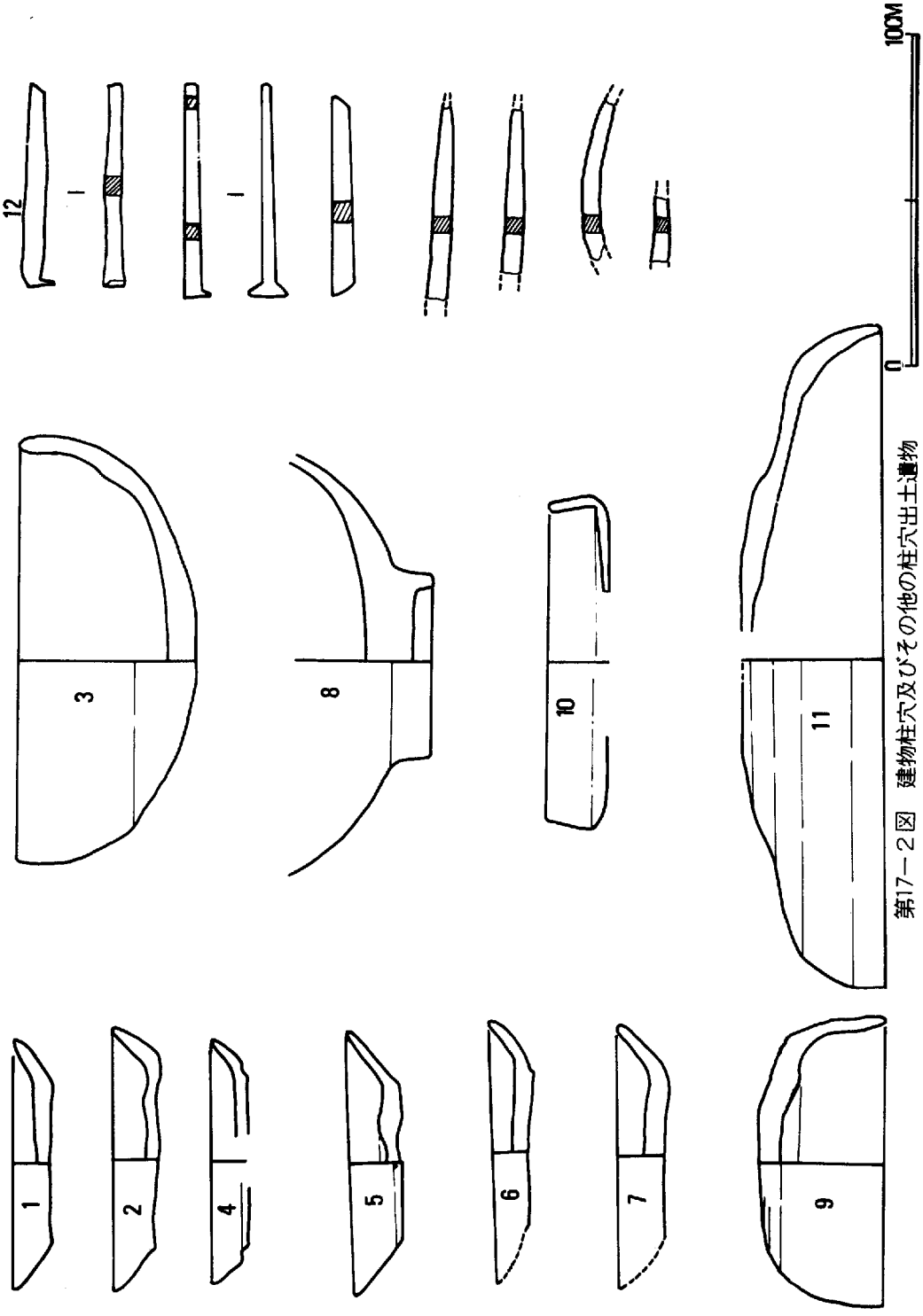
第16－２図　住居址出土遺物



第17－１図　建物Ｉ平面図，断面図レベル139.00m



第17－３図　柱穴出土擂鉢



第17－2図　建物柱穴及びその他の柱穴出土遺物

2.0m，建物Ⅱは2.2～2.3m，建物Ⅲは2.5～3.0m，建物Ⅳは2.0mである。柱間寸法を見る限りでは，建物Ⅰと建物Ⅳは同一数値を示し同時に建っていた可能性が大きいと言える。

その他，上寺地区では建物にまとまらない多くの柱穴が検出された。以下それらの柱穴から出土した遺物について述べる。

建物以外の柱穴出土遺物（第17図(2)）

柱穴出土の遺物は土師器灯明皿，須恵質擂鉢，備前焼擂鉢，須恵器杯，須恵器皿，青磁片，鉄釘，木器，柱などである。

4は土師器灯明皿片で口径8.0cm，器高2.5cm，やや焼きの悪い淡黄茶色を呈する。**6**・**7**も土師器灯明皿片，いずれも糸切り底である。**8**は青磁椀で，釉薬は淡緑色を呈し，薬の厚さは0.8mmを測る。14～15世紀代のものといわれる。**9**は須恵器杯蓋と思われる。口径8.5cm，器高3.8cmで灰白色を呈する。天井部ヘラ削り仕上げである。**10**は須恵器皿片と思われ焼成良好で内外面ナデ仕上げ，底部ヘラ削りである。**11**は生焼けの須恵器杯蓋片で推定口径20cmを測る。**12**は，鉄釘で，すべて断面は正方形である。長さは6cm前後である。

須恵質擂鉢（第17図(3)―1～3）の**1**は推定口径28cm，内面には櫛目状の3本の沈線を施し，口縁部に片口を作っている。胎土に砂粒を少量含み，黄褐色の焼きの悪い土器である。**2**は推定口径28cmの須恵質擂鉢で，内面には櫛目状の7本の沈線を施し，口縁端部は1と同様で，胎土に5mm大の粗砂を含み，淡黄褐色で1よりやや焼成が良い。**3**は内面に5本の渦巻状の櫛目が見られる須恵質擂鉢で推定口径27cmである。**4**は備前焼擂鉢で推定口径24cm，胎土に粗砂を多量に含み，外面赤褐色，内面灰白色の焼きの非常に硬い土器である。内面には太い沈線が櫛目状に数条施されている。時期は，鎌倉～室町時代に比定できる。

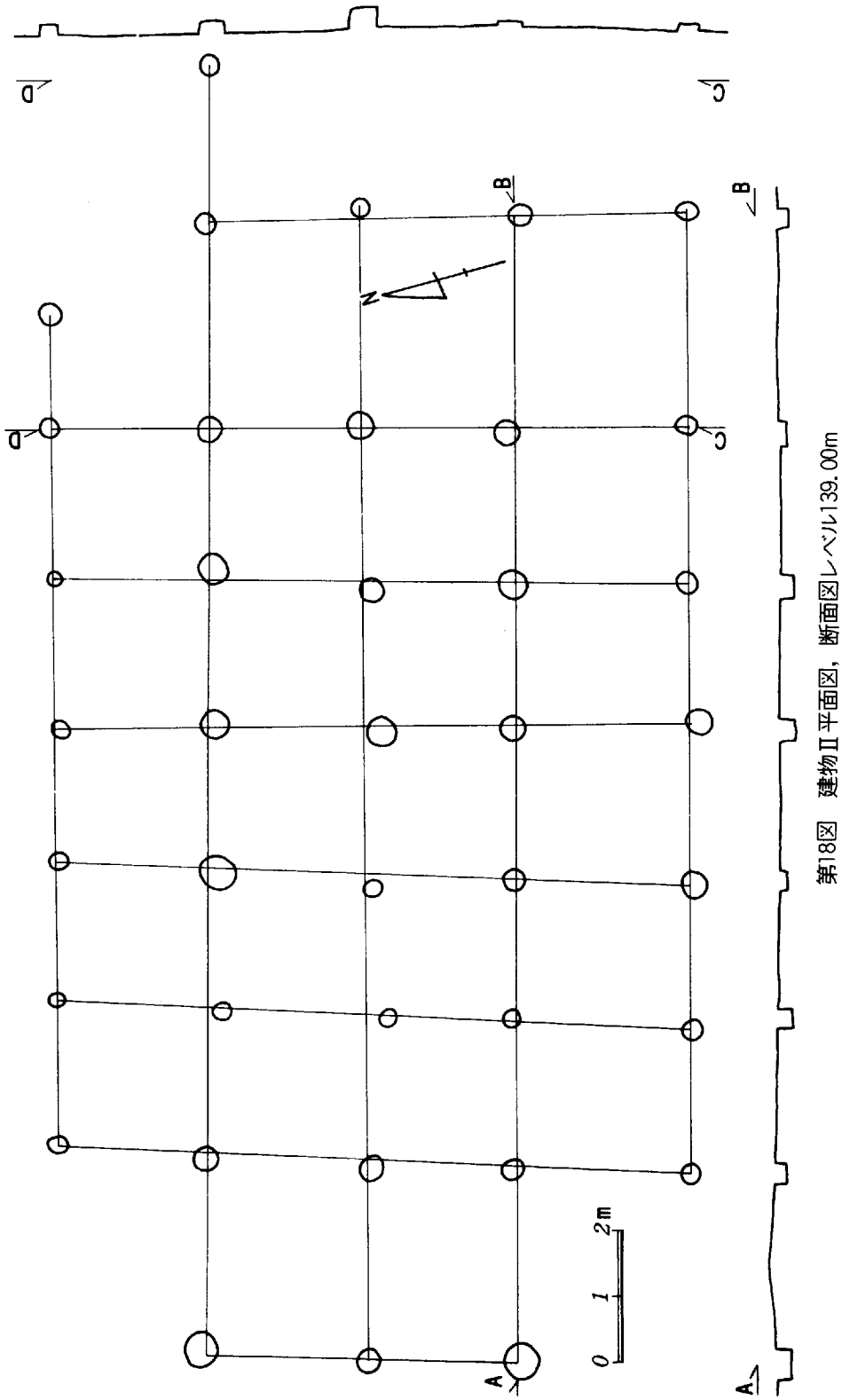
(c) 井 戸 址

上寺地区発掘区の南端に検出した長径2.2m×短径1.7mの楕円形を呈し，その底部及び斜面には人頭大ないし拳大の角礫がぎっしりつまっている。上部は削平されて，深さ45cmを測るにすぎない。底には8枚の板石を敷いている。その他の礫は現位置をとどめず，すべり落ちた状態である。最下層の灰色粘土からは，須恵器片，土師器片，青磁片が出土しているが，図示できるのは土師器小皿の3点だけである。建物と同時期，すなわち鎌倉～室町時代の遺構と考えられる。**1**は口径9.8cm，器高2.5cmの土師器皿で，胎土は良質粘土を使用し，淡黄茶色の焼成の良い土器である。底部は糸切りとヘラ切りが見られる。**2**は口径6.5cm，器高1.2cmの土師器小皿で胎土は良質粘土を使用し，淡黄褐色の焼成の良い土器である。**3**は口径8.0cm，器高1.5cm，微砂多含，淡黄茶色，焼成良の土師質小皿である。

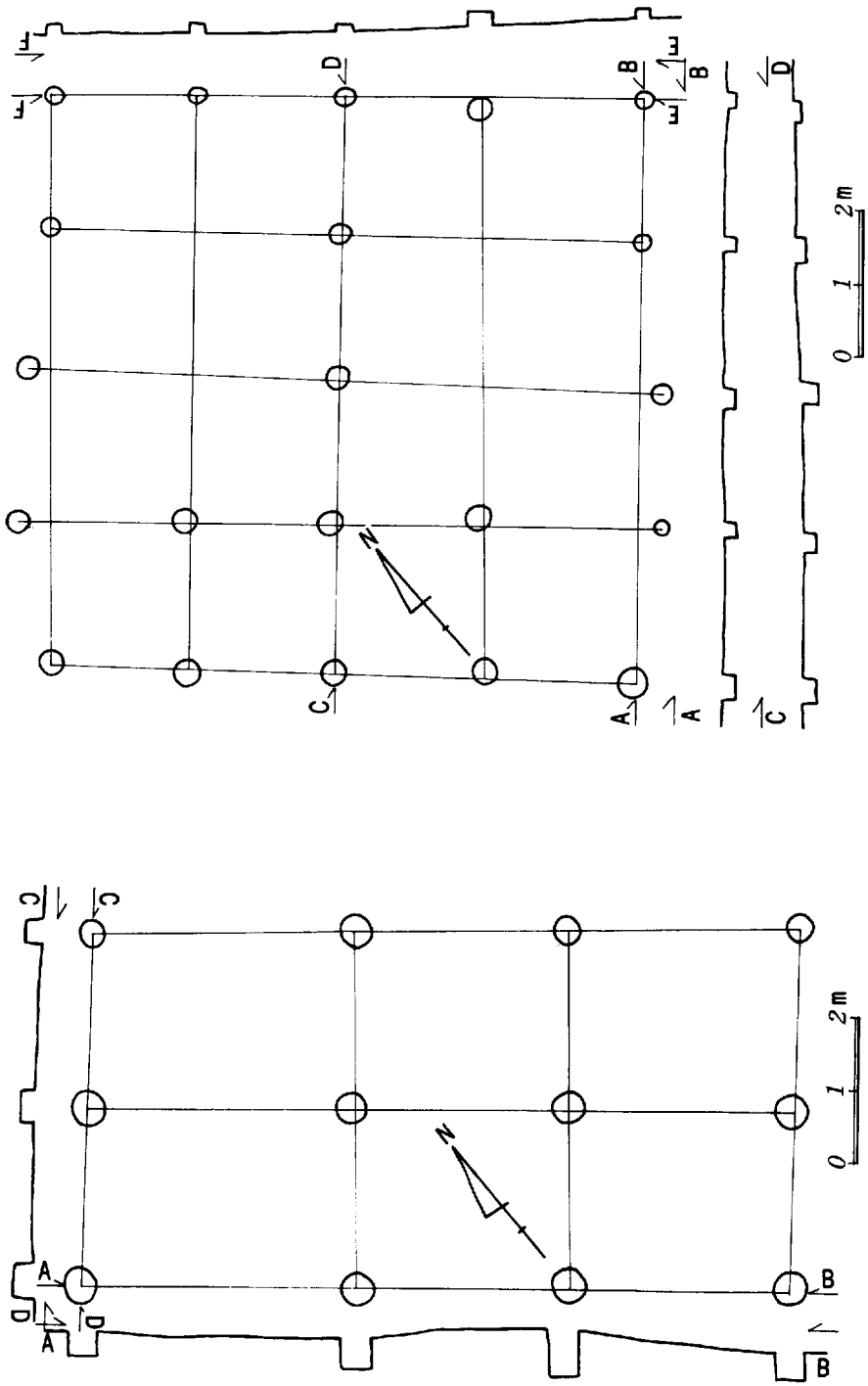
(d) ピ ッ ト

この地区では10個のピットが検出された。これらのピットは掘立柱建物と同時期すなわち鎌倉～室町時代に比定できる。

ピット1（第21図(1)・(2)）

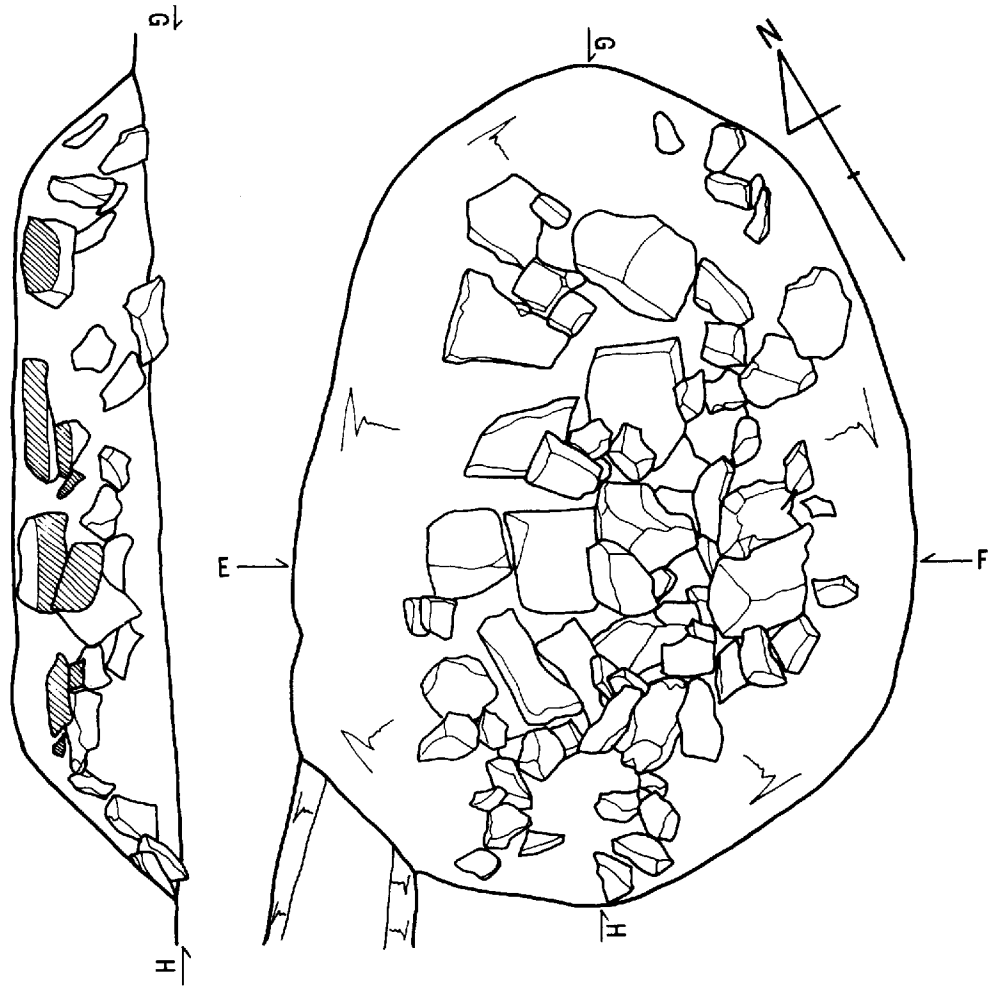


第18図　建物Ⅱ平面図，断面図レベル139.00m



レベルは，139.00m

第19図　建物Ⅲ(左)建物Ⅳ(右)平面図，断面図



1 耕　　土
2 茶褐色床土
3 灰褐色，砂混り粘土
4 灰色粘土

レベルは，137.65m

第20－1図　井戸址平面図，断面図

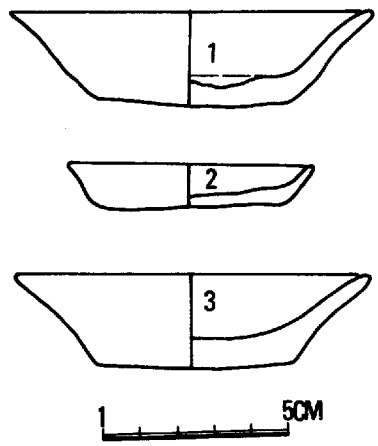
グリッド13—Eで検出された1辺1.5mの隅丸方形のピットである。深さ35cmを測り，埋土は第1層暗褐色土，第2層黒褐色土，第3層暗黄褐色土である。土師器，須恵器が出土したのは第2層である。ピットの用途，性格は不明である。図14(2)の**1**は瓦質の甑で，推定口径30cm，器高25cm，表面は非常に磨滅している。やっと確認できる程度ではあるが，外面格子目，内面青海波の叩きが見られ，内外面に櫛目も確認できる。把手は欠損しているが，割れ口から推定すると，厚さ2.2cm，巾4.5cmの偏平なものである。胎土はやや良質の粘土で，白灰色の焼成不良な土器である。**2**は瓦質鍋で，推定口径36cm，胎土に少量の粗砂粒を含み，外面全体にススが付着し，内面白色の焼成良好な土器である。**3**は須恵器三耳壺で口径10.5cm，推定器高26cm，胎土に0.5～1.0cm大の小石を含み，灰色の焼成の良い土器である。耳は2個しか見られないが，肩部推定径と耳の位置間隔から3個が推定できる。**4**は完形品の土師器埦で，ピットの肩部に出土した。口径15.3cm，器高3.8cmで，胎土は良質粘土，淡茶色の焼きの良い土器である。**5**も土師器埦である。**6**はピットの肩部に出土した貼付け高台を有する皿である。内面はヘラによるナデが見られ，ほぼ完形で口径14.5cm，器高2.3cm，胎土は良質粘土を使用し，明褐色の焼成の良い土器である。

ピット2（第21図(1)・(2)）

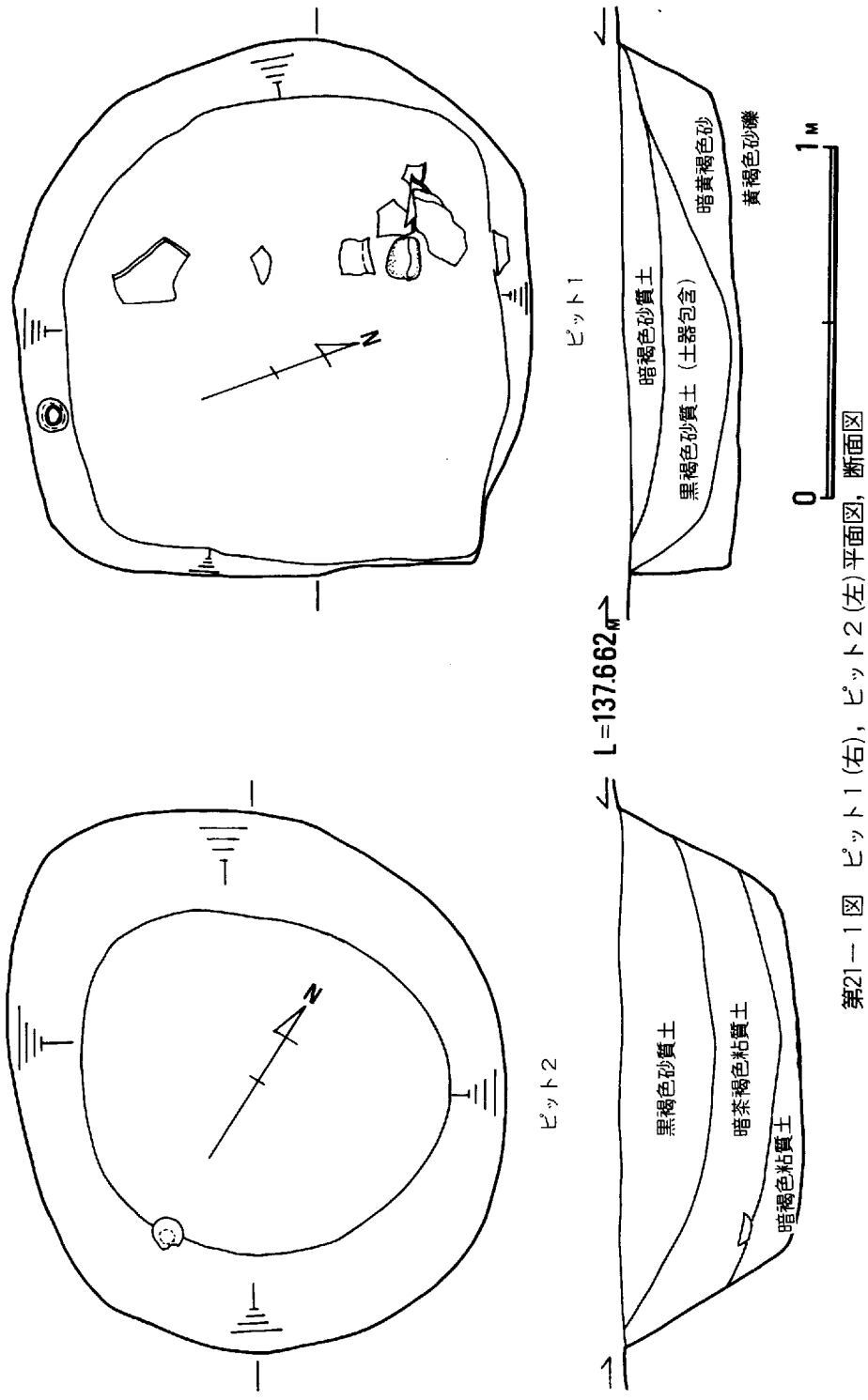
ピット1の南5mの所に検出されたが，径1.5mの円形で深さ50cmを測る。埋土は3層に分かれ第2層暗茶褐色土層にほぼ完形の土師器埦を包含している。このピットの用途，性格は不明である。**8**がその土師器埦で，口径11cm，器高3.5cmを測り，胎土に粗砂粒を少量ふくみ淡黄土色の焼きの悪い土器である。

その他のピット及び出土遺物（第15図，第21図(3)）

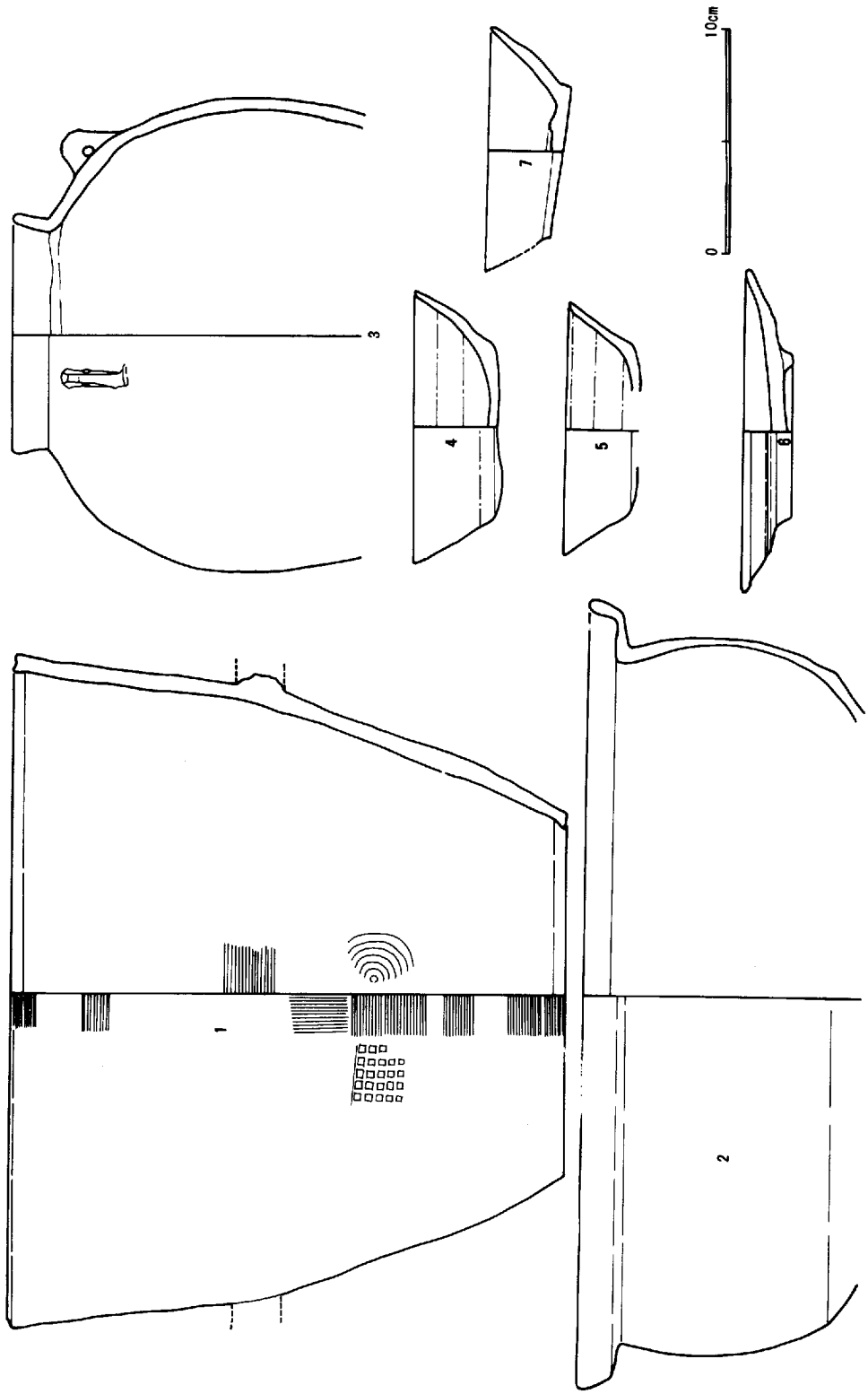
ピット3は建物Ⅳの東に検出した長径2.7m，短径1.2m，深さ25cmの楕円形ピットで，6世紀代土師器片，須恵器片が出土している。単なる地山の窪みとも考えられる。**1**～**3**は須恵器，**4**は砥石である。**1**の杯蓋は，天井部と体部の境に明瞭な段をもち，口縁部内面に稜線が認められる。**2**の杯蓋は，天井部と体部の境に段をもつが，**1**ほど鋭くなく，口縁端部内側にも稜線が認められるが鈍い。**3**の杯身は，たちあがりが1cmと低く，内傾している。底部はヘラ削り仕上げである。**4**砥石は破片であるが，白色のきめ細かい硬砂岩で，大きく2面を使用し角も使用痕が見られる。ピット4は，建物Ⅰ内で検出した径1m，深さ0.5mの円形ピットで，柱穴の可能性もある。内部から土師器，須恵器が出土した。**5**・**6**は土師器灯明皿で底部に糸切りが認められる。**7**は須恵器小皿で底部にヘラ切りが認められる。**8**は土師器埦で底部に糸切りが認められる。ピット5は長辺2.5m，短辺1.5m，深さ25cmの長方形ピットで，建物Ⅲの柱穴に切られている。内部から土師器灯明皿が出土している。**9**はその土師器灯明皿で，底部に糸切りが認められる。ピット6は径1.5m，深さ34cmの円形ピットで，建物Ⅲの東に接して位置する。内部から土師器



第20—2図　井戸址出土土師器



第21－1図　ピット1（右），ピット2（左）平面図，断面図



第21－2図 ピット1，ピット2出土遺物

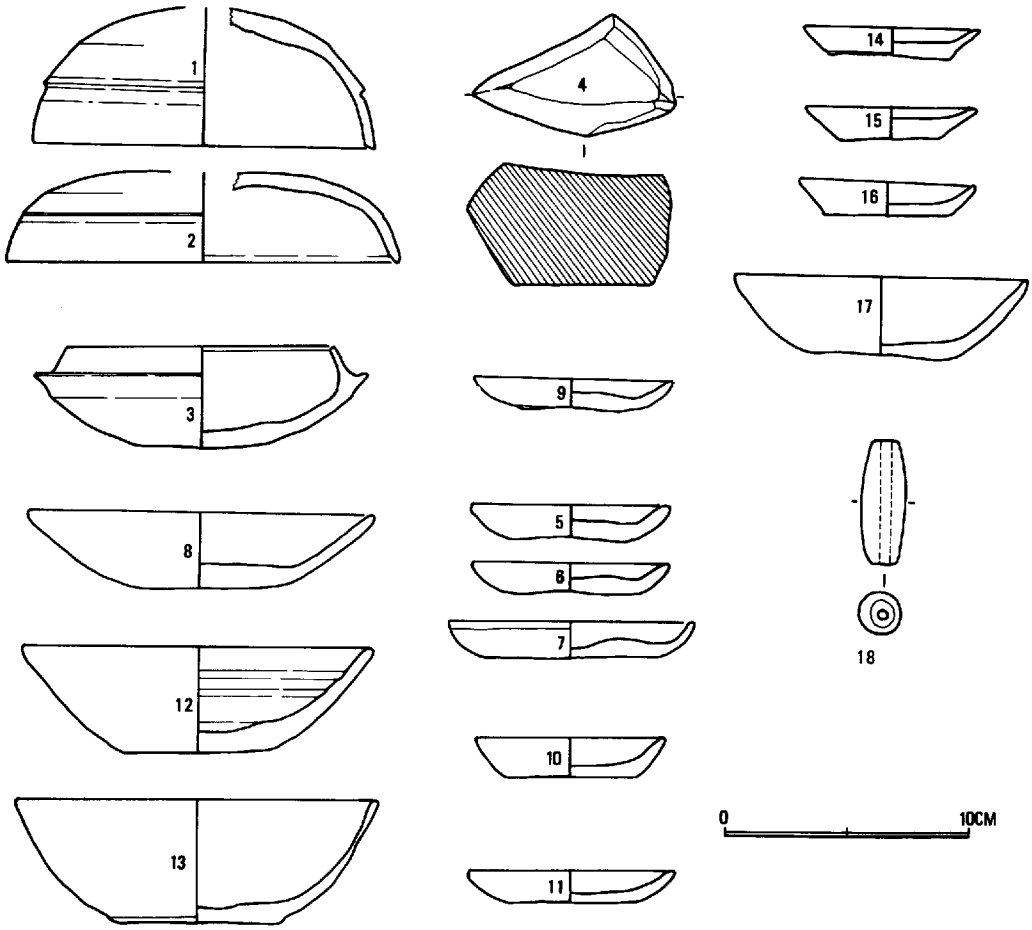
・須恵器が出土している。**10**，**11**はいずれも底部が糸切りの土師器皿である。**12**は糸切り底の土師器埦で，**14**は底部糸切りの須恵器碗である。ピット６出土の土器は，須恵器，土師器に関係なく糸切り底である。

(e) 鍛　冶　炉　（第22図）

グリッ14—Ｆで焼土面が２個所検出された。いずれも極めて硬く焼きしまっており，中央部に窪みが認められた。同一面で多量の鉄滓と十数片の羽口が出土した。以上の点から鍛冶炉と判断した。鉄滓に伴って７世紀初頭の須恵器片が出土している。したがってこの鍛冶炉の時期は古墳時代後期に比定できる。

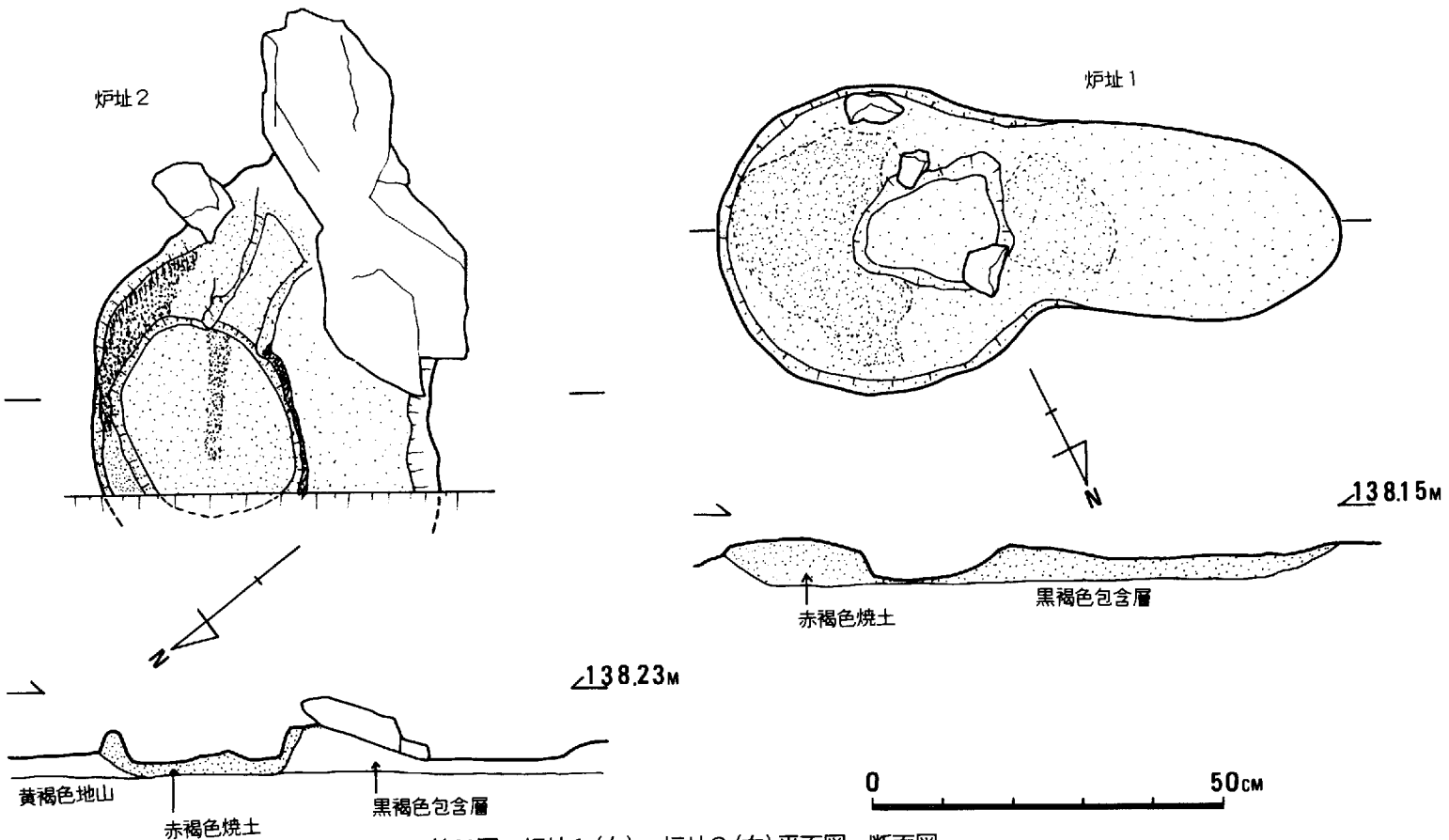
炉１は長さ85㎝，巾45～25㎝の瓢箪形に焼けている。中央部の窪みの深さは，５㎝を測る。窪みの周囲は，最も良く焼けて非常に硬い。炉２はトレンチで一部破壊されているが，長さ50㎝，巾50㎝，窪みの深さ５㎝を測る。やはり窪みの周囲が良く焼けて硬い。偏平な礫は赤く焼けている。

(f) その他の遺構　（第15図）



第21—３図　その他のピット，溝３出土遺物

この地区では，他に溝状遺構が３本検出された。溝１はグリッド11—Eで検出され，長さ10m，巾60cm，深さ13cmを測り，井戸に接続する。地形から考えると水は井戸址から流出すると思われる。遺物は土師器片，青磁片が出土しているが，図化できるものはない。溝２は，溝１の東に平行して検出され，長さ12m，巾40cm，深さ11cmを測り，底面のレベルは北から南へ下っている。遺物は，土師器片が出土しているが細片である。溝３は，グリット12—Eで検出され，長さ28m，巾２m，深さ25cmを測り，断面は，逆台形であり，L字状に伸びている。埋土は灰色粘土で，遺物（第21図(3)）は，土師器と土師質土錘が出土してる。この溝は，建物の雨落溝の可能性もある。**14**，**15**は糸切り底の土師器皿，**16**はヘラ切り底の土師器皿，**17**は糸切り底の土師器埦，**18**は土師質土錘である。



第22図　炉址1（右），炉址2（左）平面図，断面図

第4章　遺構に伴わない遺物

1　縄文式土器　（第23図）

当遺跡では少量の縄文式土器片が出土している。すべて上寺地区の包含層より出土し，大半が現在須内部落へ通じるボックス地点，すなわち上寺地区住居址周辺である。いずれも縄文時代後期と思われる。以下個々について若干説明を加える。

1　ヘラ描き沈線文土器である。胎土中の砂粒は大きいが，雲母，石英を多量に含み，焼成は良好で硬い。色調は暗褐色を呈する。

2　ヘラ描きの沈線文土器で，石英砂粒を多量に含み，焼成は良好で硬いが，表面の風化が著しく，色調は内外面とも白色に近い。内面はヘラ削りである。

3　条痕文土器で，長石，石英の砂粒を多く含み，焼成良好で，茶褐色を呈する。

4　条痕文土器で，石英を多量に含み，焼成良好で，色調は外面褐色，内面明黄褐色を呈する。

5　4とほとんど同様である。

6　内外面条痕を有する土器で，石英・長石を多く含み焼成は良好で硬く，外面褐色，内面白色を呈する。

7　内外面条痕を有する土器で，長石・石英粒を多く含み，焼成良好，外面暗褐色，内面明黄褐色を呈す。

8　内外面条痕を有する土器で，外面の条痕は非常に明瞭である。石英，長石を多く含み，外面は明褐色，内面暗褐色を呈する。焼成は良好である。

9　浅鉢の口縁部と思われる。口縁端部は平で，口縁部外面には凹線が2本施こされている。胎土中には長石，石英を多量に含み，焼成は良好で，外面明褐色，内面黒色を呈する。

10　口縁部破片である。皿か鉢と考える。胎土中には石英，長石の微砂粒を含む。焼成は良好で色調は暗褐色である。

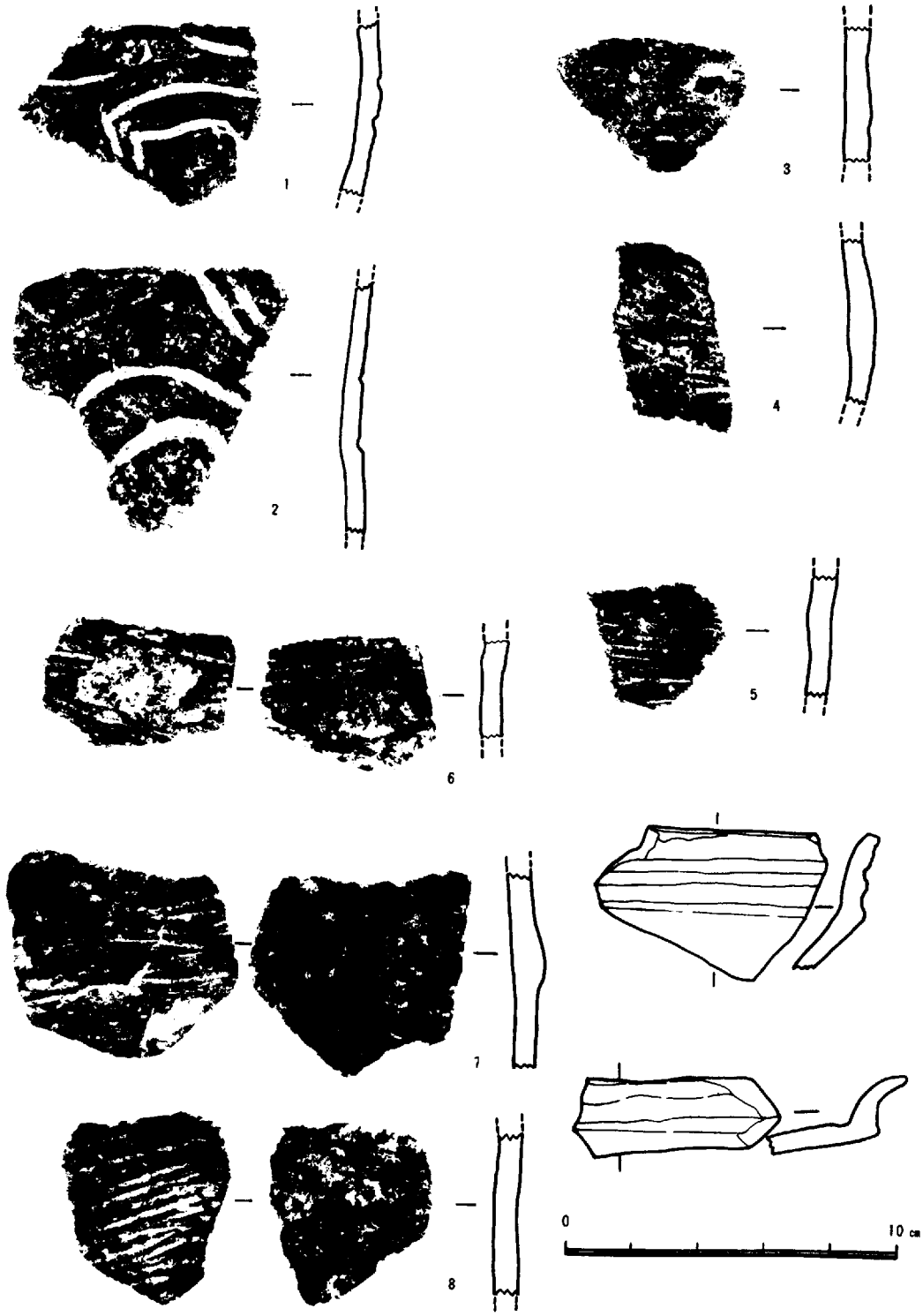
2　弥生式土器

上寺地区では数片出土しているが，細片のため図示できない。

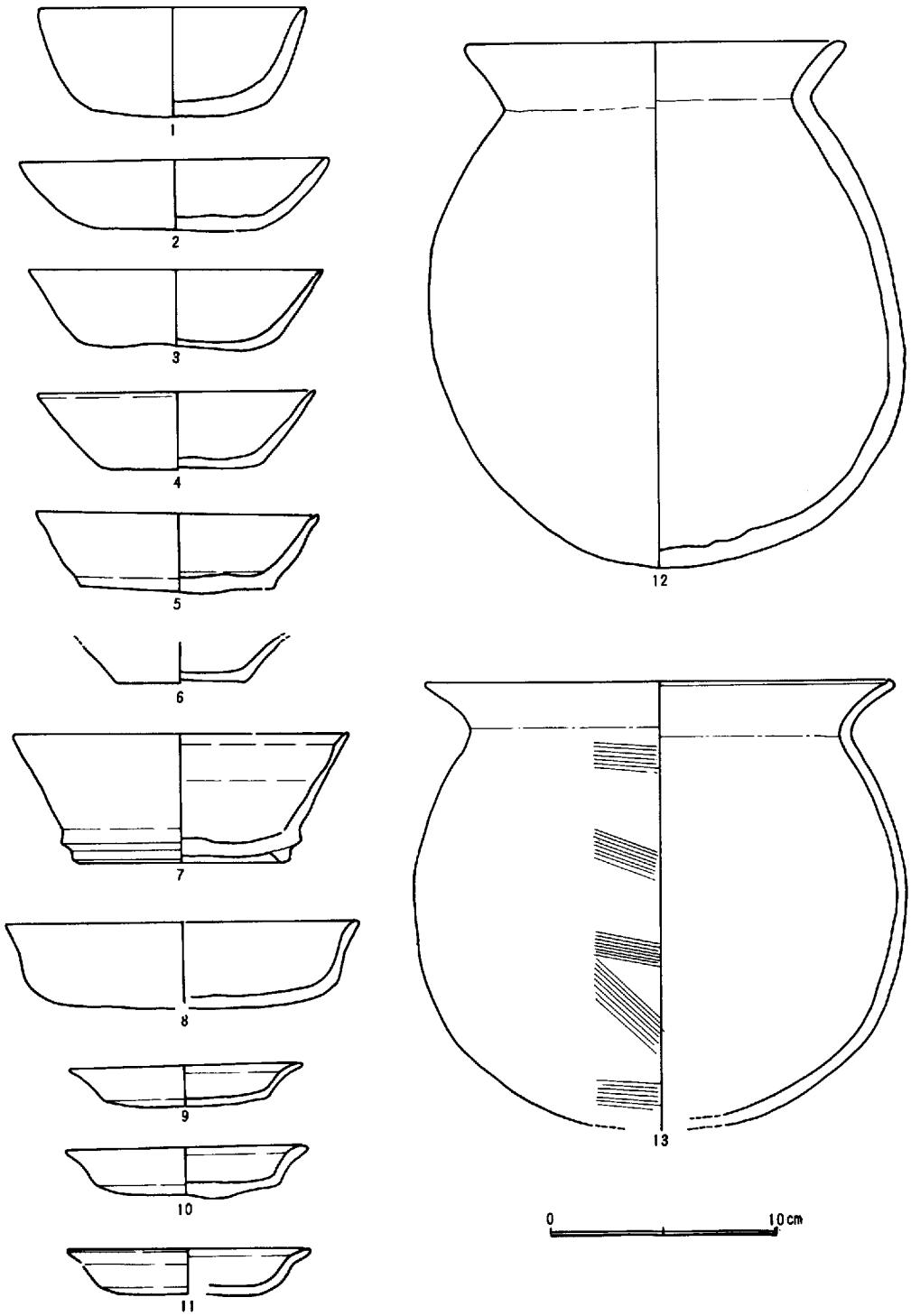
3　土師器　（第24図，25図）

上寺地区では多量の土師器が包含層から出土している。図示できたものは23点である。包含層出土遺物の中には，柱穴出土の遺物も多量に含まれているので，遺物の時期は古墳時代前期のものから室町時代のものまである。器形は，壺，甕，碗，杯，高杯，坩，皿，支脚等である。以下若干の説明を加える。

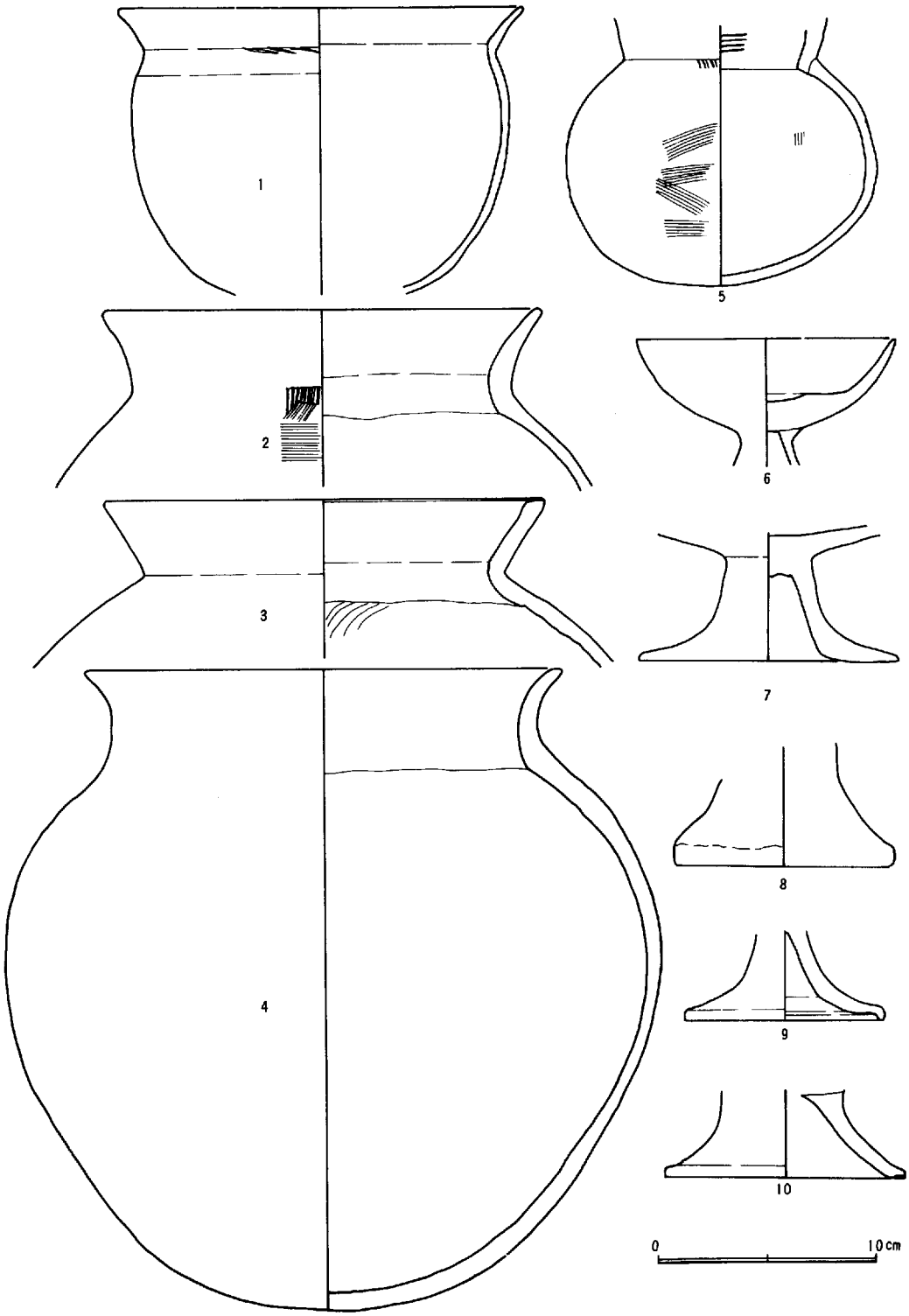
第24図—1　碗形土器で，胎土に粗大砂粒を含み，明褐色の焼きの悪い土器である。



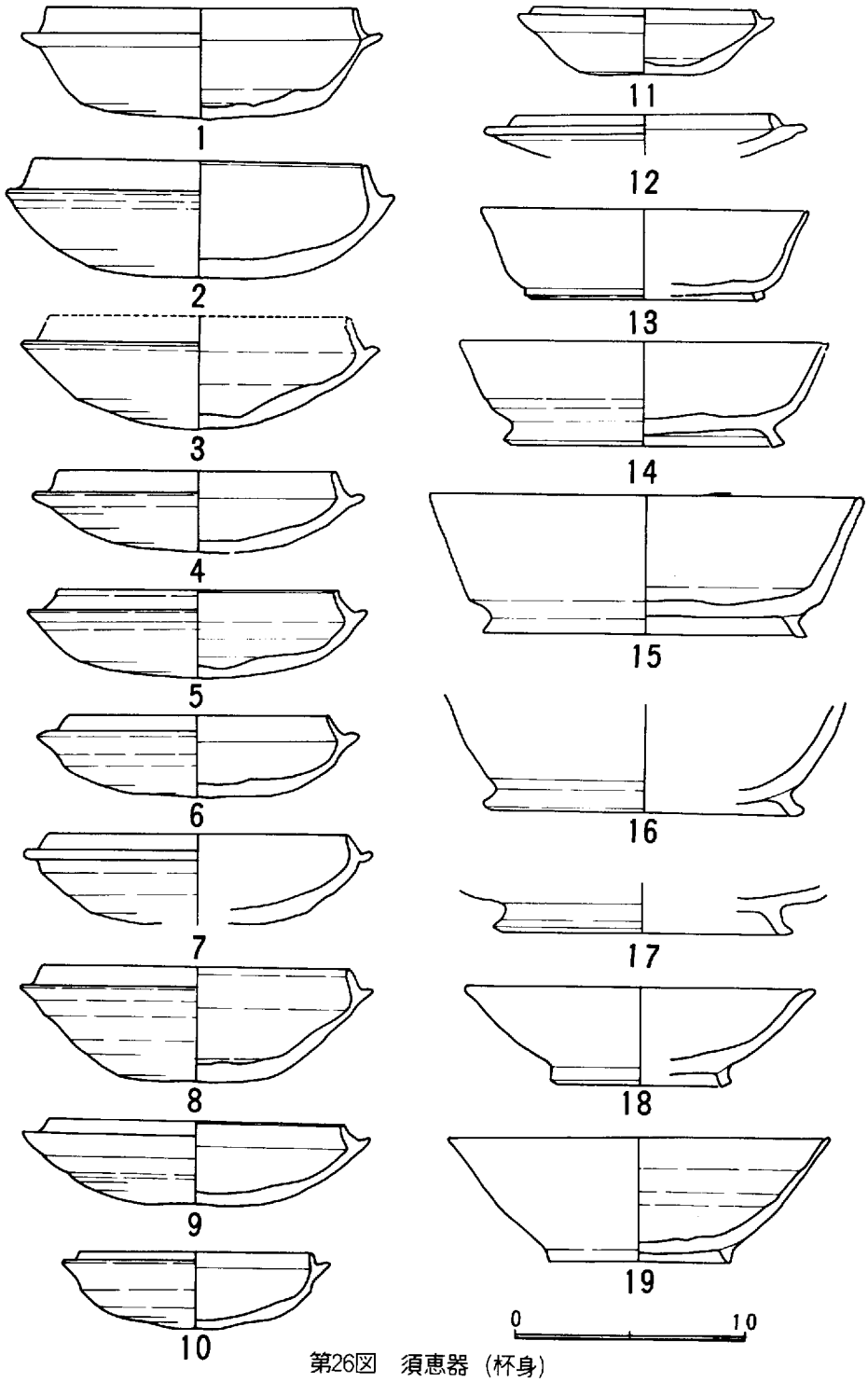
第23図　縄文式土器



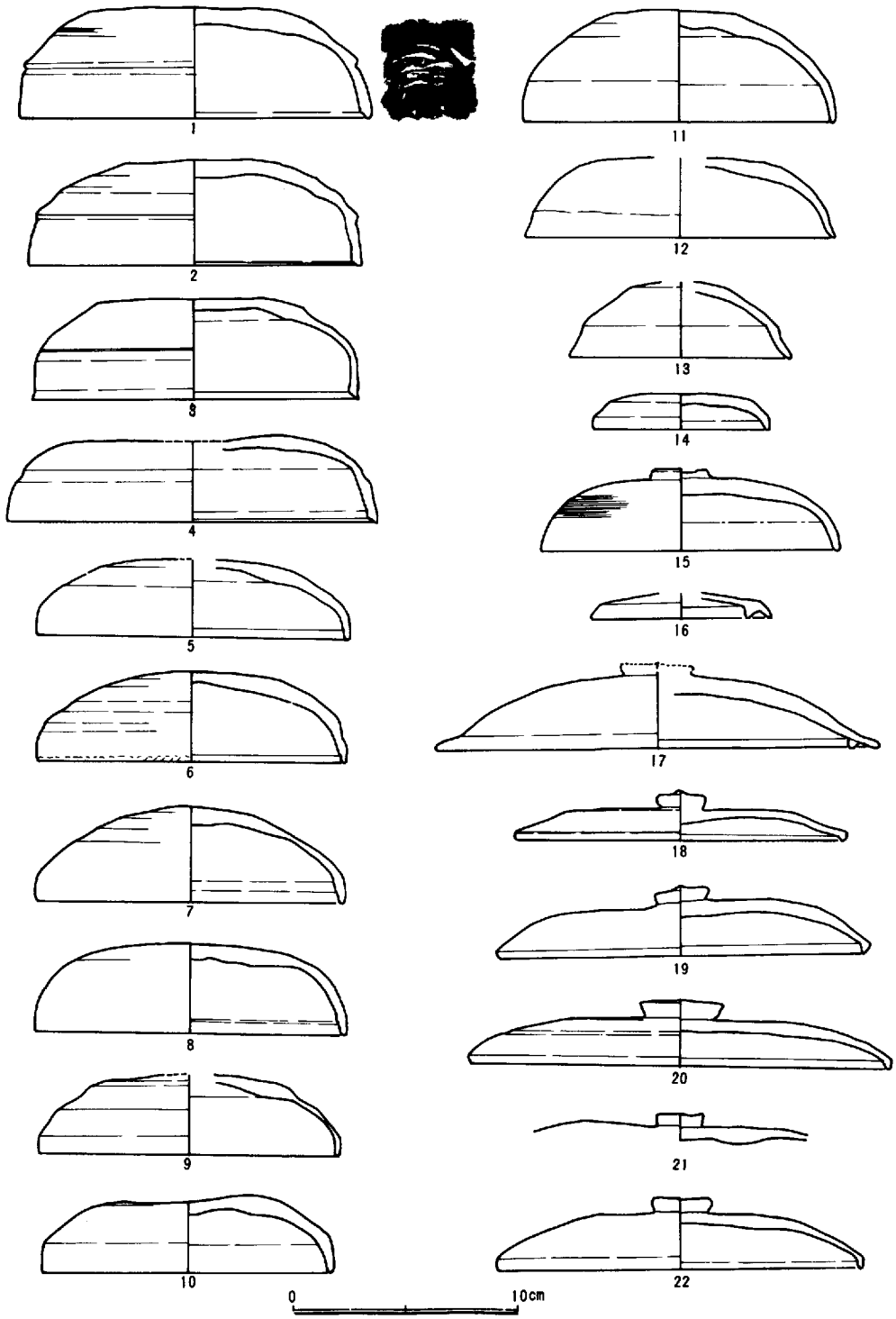
第24図 土 師 器 I



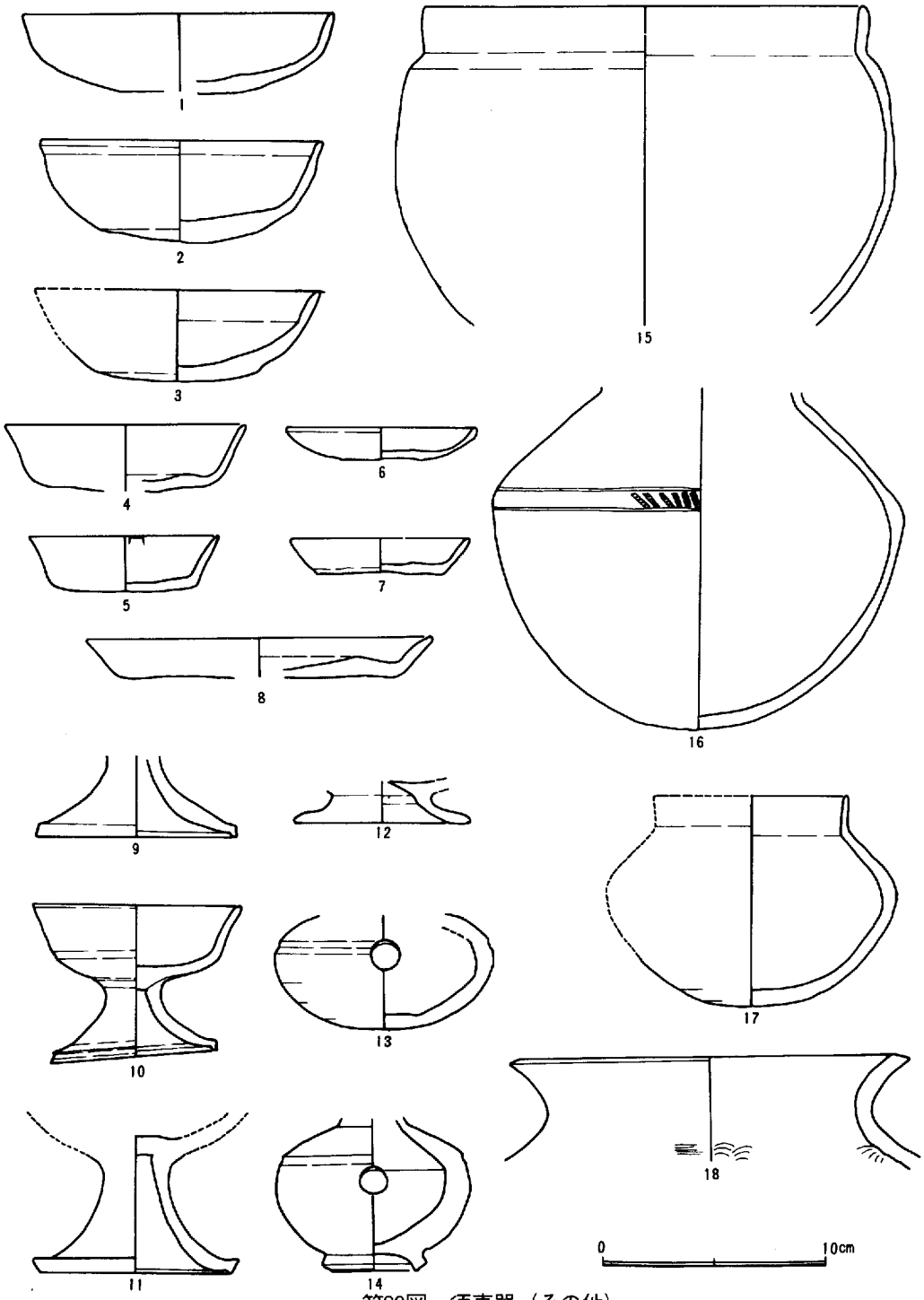
第25図 土 師 器 Ⅱ



第26図　須恵器（杯身）



第27図　須恵器（杯蓋）



第28図　須恵器（その他）

第24図—7　この杯は，薄手に作られ，貼り付け高台で，胎土はやや良質粘土，赤褐色の焼成のやや良い土器である。

第24図—9～11　遺構面で出土した皿で，赤野遺跡A—5号ピット出土の皿と類似している。

第24図—12　復元して完形品となった甕形土器で，粗砂を多く含み，明褐色で焼きは悪い。

第24図—13　丹塗りの甕形土器で，粗砂を多く含み，赤色で焼成は良い。外面に櫛目が施こされている。

第25図—1　深鉢形土器で，口縁部はナデ仕上げ，体部は内外面ヘラ削り整形である。

第25図—4　完形の甕形土器である。底部にススが付着している。

第25図—5　丹塗りの坩で，櫛目が見られる。胎土は良質粘土で焼成良好。

第25図—8　支脚と思われる。

第25図—10　高坏の脚であるが，灰白色を呈している。

4 須 恵 器 （第26図～28図）

圧倒的に多いのが杯身，杯蓋で，その他皿，碗，高杯，壺，など数点が図示できた。

第26図は杯身である。**1**～**9**は口径12～14cmで立ち上がりは約1cmある。**10**～**12**は口径10～11cmで立ち上りは約0.5cmと短い。**13**～**17**は高台付坏で口縁部は直線的である。**18**，**19**も高台付杯であるが口縁部は外反し曲線的である。

第27図は杯蓋である。**1**，**2**は口径約15cmで体部がほぼ垂直で，天井部との境は極めて明瞭で，口縁端部に稜線が入る。**3**，**4**は体部と天井部との端がやや不明瞭になり，口縁端部には稜線が入る。**5**～**8**は体部と天井部の境が明瞭でなく，口縁端部内側に，浅い凹線を有する。**9**～**11**は口縁端部が丸く作られている。**12**～**14**は口縁端部がやや外反する。**15**以下はつまみがつき，**16**，**17**にはかえりも付く。**18**～**22**はかえりがなく，口縁端部はやや内側へ短く屈曲する。

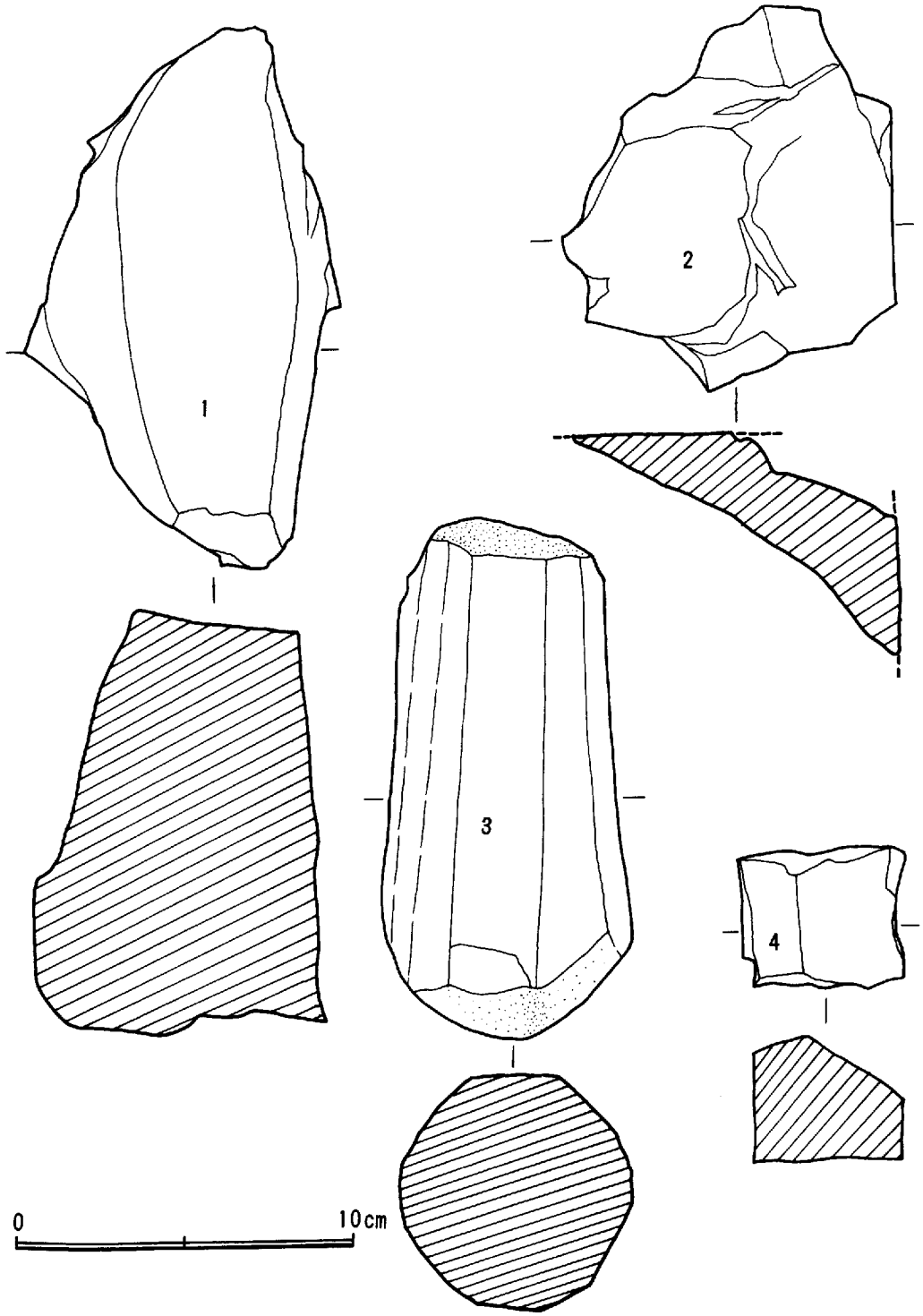
第28図は杯以外の須恵器である。**1**～**3**は碗か杯蓋か不明である。**5**は灯心油痕を有する灯明皿である。**7**は糸切り底の小皿である。**10**は完形の小形高杯である。黒緑色（部分的に水色）の自然釉が認められる。

14は台付壺で，緑色の自然釉がかっている。**16**は壺で，体部の径が最大となる所に2本の沈線を有し，その沈線間に櫛状工具による連続刺突文を施こしている。

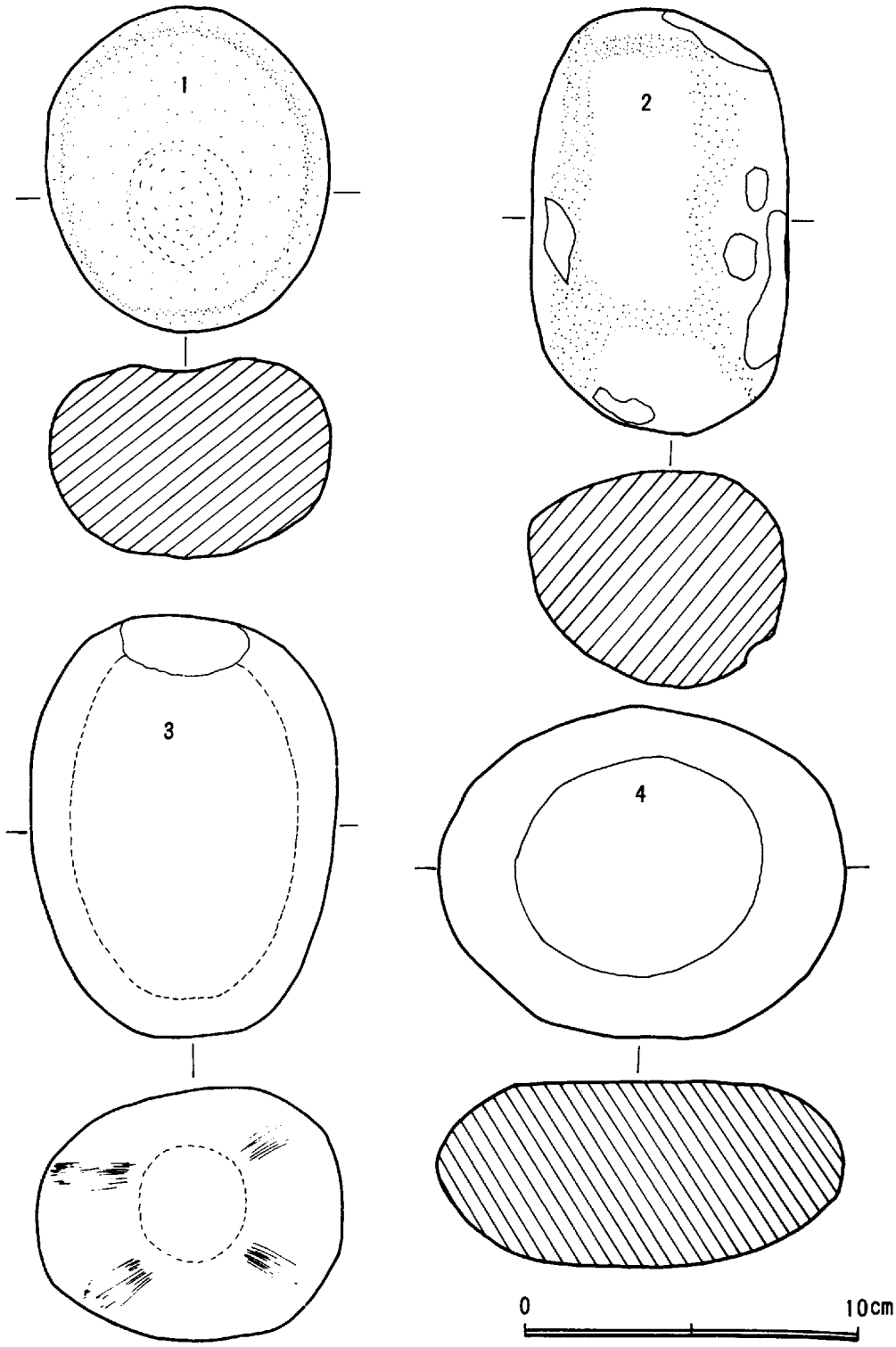
5 石 器

第29図は包含層出土の砥石である。**1**は荒砥に使用できる灰褐色の砂岩製砥石である。**2**は仕上げ砥に使用できる硬砂岩製である。二面使用痕のある赤褐色の石である。**3**は暗灰色の斑岩で，面が13もある。**4**は二面使用痕のある褐色の砂岩製砥石である。

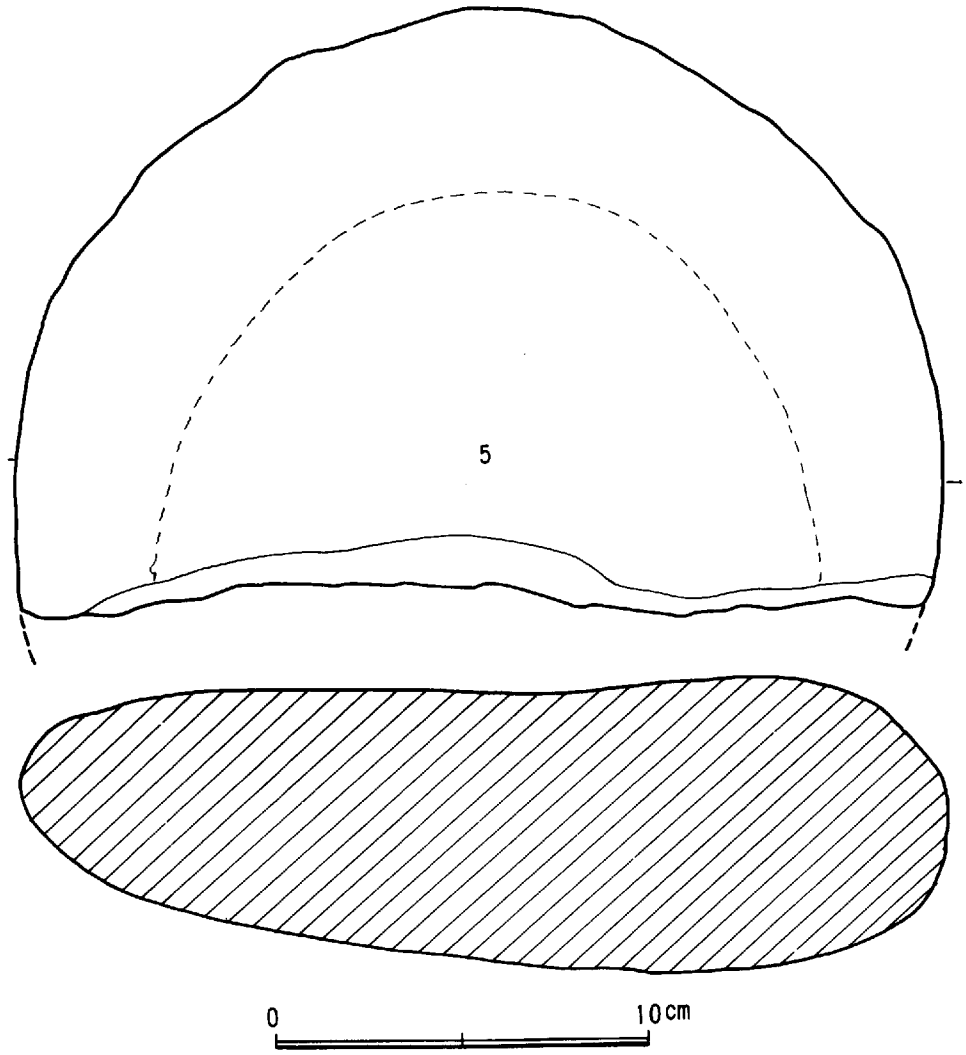
第30図の**1**は花崗岩の凹石である**2**は淡灰色で表面が磨かれて光沢がある砂岩で，石器かどうか不明である。**3**は淡灰色で表面が磨かれ，図の上端は叩き，下端はスリ痕が見られる斑岩製である。**4**は黄褐色の花崗岩で磨石と思われる。**5**は花崗岩で石皿の可能性がある。

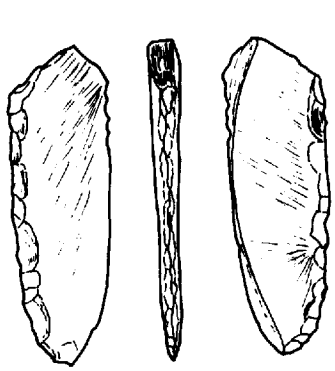


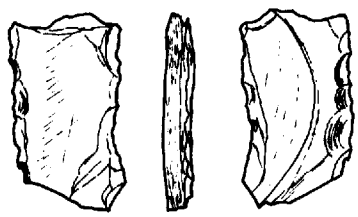
第29図 石 器 Ⅰ



第30図 石 器 Ⅱ







サヌカイト

黒曜石

第31図 石 器 Ⅲ

6 陶 磁 器 （第32図）

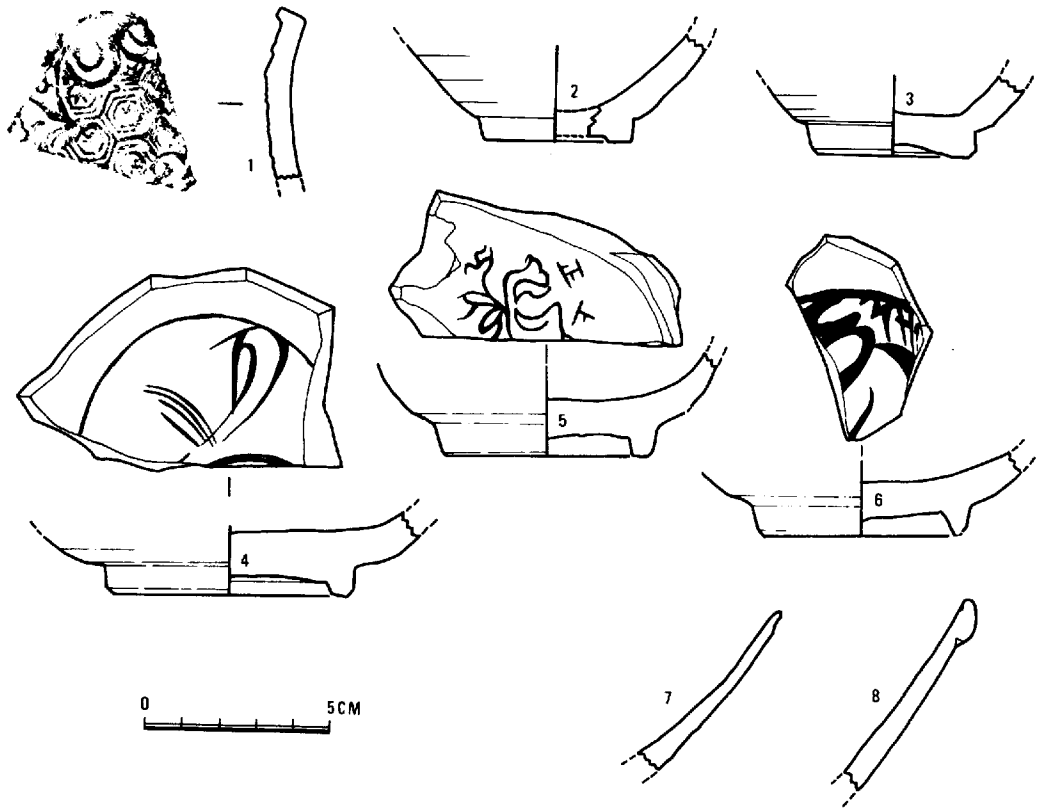
緑釉陶器 1 の口縁部が１点出土しているが，器形は不明である。文様は型押しによる六角形の幾何学文様を主体とする。胎土は非常に精選された粘土で白色を呈している。焼成良好で硬い。緑釉は両面に施こされ½ほど剝離しているだけである。

天目は10点出土しているが，図示できたのは２点だけである。明代のものといわれ（注），胎土は白色の精選された粘土を使用し，焼成良好で硬く，釉は黒色ないし黒褐色を呈している（**2**・**3**）。

青磁は数十点出土しているが，図示できたのは２点のみである。12—13世紀福建者洞安窯で焼かれたものといわれ（注），断面の色は灰色を呈し，釉の厚みは極めて薄い。**4** は釉が緑色で「上正」と読める文字が内面に見られる。**5** は釉が淡青緑色である。

白磁は数片出土している。図示できたのは３点である。**6** は碗で内外に青色の染め付けが施こされている。**7** は埦の口縁部である。**8** は口縁端部に特徴がある。いずれも断面は白色で，白色釉が施こされている。

（注）東京国立博物館東洋課長長谷部楽爾氏御教示

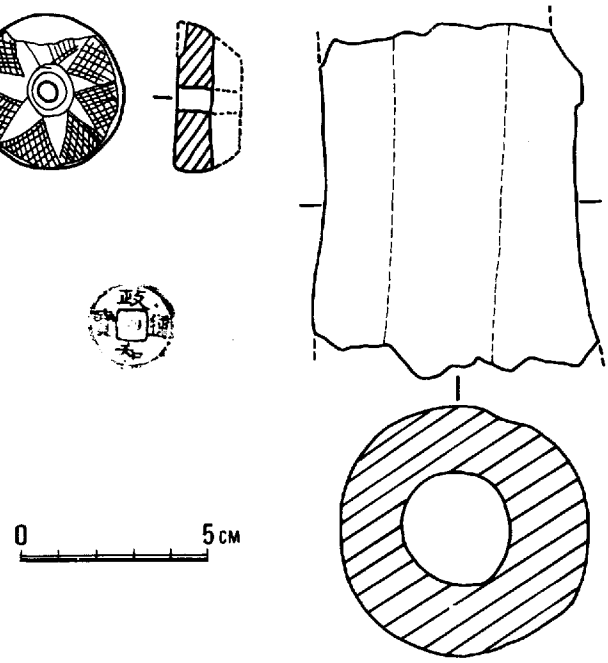


第32図 陶 磁 器

7 その他の遺物 （第33図）

古銭は，「政和通宝」（北宋1111年）が柱穴から出土している。須の内遺跡の縦貫道用地外ではあるが，次の4枚の古銭が発見されているので参考資料として上げておく。「永楽通宝」（明1408年）「仙台通宝」（日本1784年）「元豊通宝」（宋1078年）「熙寧元宝」（宋1067年）

羽口は，かなり多く出土しているがほとんど破片である。最も残りのよいもの1点を図示した。胎土中には径0.8㎜の小石まで含み，色は赤褐色で先端と思われる部分には鉱滓が付着し黒色を呈している。



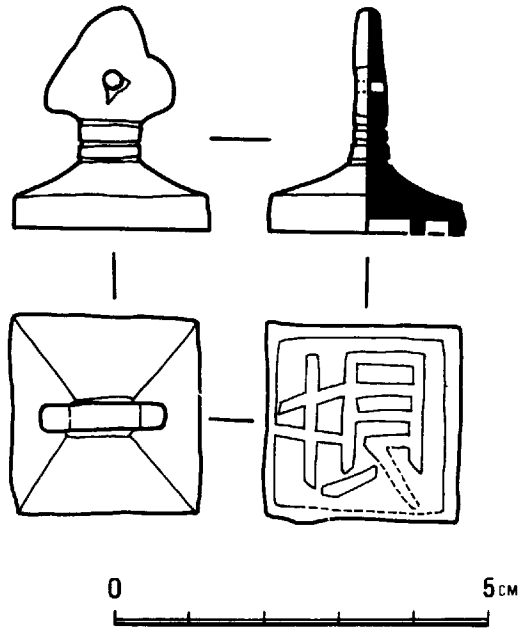
第33図 紡錘車，古銭，羽口

滑石製紡錘車が，1点出土している。断面は台形で，表には，細線による鋸歯文が施こされている。褐色を呈する。柱穴出土の小型木器片は，えぶり形をしている。長さ6㎝，巾1㎝，厚さ5㎜である。柱材（写真参照）も柱穴から数本出土した。大きなもので，長さ60㎝，太さ径25㎝もある。

8 銅　　印

本遺跡出土遺物中最も注目されるもので，遺跡の性格を考える基礎資料となると思われる。銅印は，「財」と刻まれている。色はサビで緑色を呈する。大きさは，文字面が1辺2.6㎝の正方形，全体高3.0㎝である。鈕は莟鈕（カンチョウ）に作り，鈕孔を有する。即ち頭部はクローバ状で，その中央に径2㎜の円孔を有している。頸部には三条の沈線が回る。この銅印と同じ「財」字を有する銅印は，日本では他に数例ある。（「日本の古印」木内武男編）「日本の古印」に例示された2例の「財」印の大きさは，1つは縦・横2.7×2.8㎝・高さ2.6㎝，他は縦横方3.0㎝，高さ2.7㎝である。形は本遺跡出土の銅印とほとんど差はないが，2例とも縦横の方が高さよりも数値が大きい。この点で2例は共通している。逆に本遺跡出土の銅印は縦横は高さよりも数値が小さく，スマートである。その他「財寺」・「財印」も知られている。この2例も縦横は高さよりも数値が小さくスマートである。2例の「財」印は鎌倉時代とされ，他の2例は江戸時代とされている。この形状に流れがあるとすれば，本銅印はこの中間の時期に位置するものと考えられ，遺跡の中心的時期（建物

・柱穴の時期），即ち鎌倉～室町時代に比定でき。なお本銅印の出土したものは，柱穴からなのか純粋にその下層の包含層からなのかはっきりしない。包含層の遺物は先述したように，古墳時代～奈良時代のものが中心となっているが柱穴はその包含層を切っており，包含層上面で検出できにくかったため，柱穴出土遺物と共に採集している。



第34図　銅　　印

第5章　まとめにかえて

本遺跡から検出した遺構・遺物については各章で記述した。これらは縄文時代後期から室町時代までのきわめて巾広い時代に亘り，本遺跡は我々の祖先に生活面を提供してきたことを物語っている。

縄文時代の遺物は備中川流域では数少ない例で後晩期の土器片である。また黒曜石片も出土している。近年美作の沖積低地の縁辺の低位段丘から縄文時代の遺物の出土例が増加している。弥生時代の遺物は上寺地区ではきわめて少なく，横部地区で後期，太平寺地区では後期初頭の住居址２と土器・石器を検出した。

古墳時代は１辺約６ｍの方形住居址が検出された。５世紀後半～６世紀前半に比定できる須恵器，土師器が伴出した。明らかに古墳時代に比定できる遺構は他には検出されなかったが，遺物には滑石製紡錘車・土師器・須恵器などが，包含層から出土した。遺構を伴わない遺物のなかには高台付の須恵器杯身がある。奈良～平安時代の遺物散布地は近くに郡遺跡が存在することと相俟って本遺跡にも奈良・平安時代の遺構が存在したことが考えられる。しかし，これらの遺構は本遺跡の中心的時代をなす鎌倉時代後半～室町時代の遺構が刻まれる時削平をうけたのではなかろうか。

本遺跡の遺構，遺物は，各項で述べた通りである。したがって本遺跡は単純な１時期の遺跡では

なく，縄文時代，弥生時代，歴史時代と時間的巾をもつものといえる。縄文時代は後期に，弥生時代は中期に，古墳時代前期―奈良時代に，鎌倉時代～室町時代にそれぞれ生活の跡を残している。中でも最も多い遺物は，古墳時代から奈良時代のもので，これを見るかぎりこの遺跡はこの時期が中心になるかのように思われるが，遺構は住居址１軒だけであり，遺物の量に比して遺構は少ない。これでは発掘範囲内での中心的時期とは言えない。また弥生時代の遺構は，太平寺地区すなわち低い丘陵上にあって本遺跡の端でしかない。縄文時代の土器は量的には問題にならない。つまり本遺跡の中心的時期は発掘区内では，中世ということである。上寺地区の建物群び太平寺地区の建物・墓等は，この時期の一連の遺構である。建物の規模は，現在と比べれば小さいが，当時としては比較的大さなものであっただろう。遺物も，陶磁器がかなり多量に出土し，宋銭など，普通手に入り難いものが多く，「財」字銅印の出土は，その意味が財産管理上のものか，名字を表わすものか不明であるが，かなり有力な豪族の存在を想像させるものである。上寺地区に「植木構」という字名が残っていることも，この建物柱穴が，地方豪族の館を構成するものではないかと思わせる理由の１つである。

太平寺地区で検出した墳墓群は鎌倉時代後半から室町時代中頃までに形成された可能性があることはすでに述べた。

これらの墳墓は作陽誌にみられる太平寺跡と関連があるように思われる。もちろんその規模も建立時期も詳かではないが，第１調査区で検出した建物跡は一連の建物と考えられないであろうか。

以上，須内遺跡を概観したが，作陽誌と美作古城史などの文献史料からみると次のような事態をうかがうことができる。（注１，注２）

植木構は鹿田村上寺にあって，曽って植木惣十郎は鹿田郷の地頭職で彼の居館がここにあった。それを永享11年（1439）越尾五郎次郎が討って鹿田郷を領し石ケ城を築いた。ということである。この事件は毛利氏などの新興勢力が荘園領主として地方に君臨していた旧勢力（旧体制）の地頭職を放逐したことを意味している。

そして，その相剋は山城などの防禦施設の建設をうながすという，いわゆる戦国時代への大きな動きの中でとらえられるものである。

このような文献と発掘調査の資料を重ねて考えるとき，上寺地区検出の建物は植木構と伝えられる居館の一部であり太平寺地区検出の墳墓も同時期に存在したものと推定できよう。

また，太平寺は植木氏が滅んでほどなく対岸の山麓に移され玉伝寺と称して建立されたようである。太平寺地区検出の墳墓が室町時代中頃を最後に消えていることに関わりがあるかもしれない。

以上のように本遺跡は文献との照合ができ中世における一地域史の資料となり得る。

（注１） 作陽誌　真嶋郡古跡部　抜粋
植木構　在二鹿田村上寺一曽植木惣十郎者領二鹿田郷地頭職一宅レ此越尾五郎次郎撃而殺レ之其霊成二野狐一毎詣二越尾家一（以下略）

（注２） 寺阪五夫著美作古城史㈠昭和30年のなかで，植木構の項がある。鹿田辻氏系図に越尾五郎次郎は公命をうけて永享11年植木惣十郎を討ち鹿田郷を領し，石井ケ城を築いた云々。

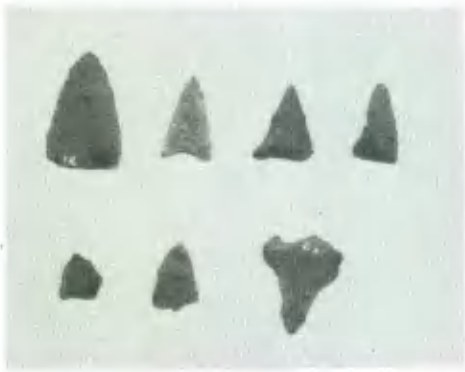
1．須内遺跡遠景（南東より）

2．太平寺地区全景

図版2

1．太平寺地区第1調査区1号住居址

2．第1調査区建物跡



1号住居址出土遺物

図版４

１．第２調査区（北より）

２．Ｋ－１

３．Ｋ－１ 骨蔵器

1．K－2

2．K－2骨蔵器

3．K－4骨蔵器

図版6

K－3検出状態

K－3　刀子

K－3火葬ピット

K－3　土師器

K－3

第３調査区（南より）

第３調査区（北より）

図版8

1．P－2と備前焼

2．P－8と備前焼

3．P－1と備前焼　　P－1

2号住居址と出土遺物

図版10

五輪塔 などの寄せ場

五輪塔 宝篋印塔

第３トレンチ出土土器

第５トレンチ（南より）

第７トレンチ（南より）

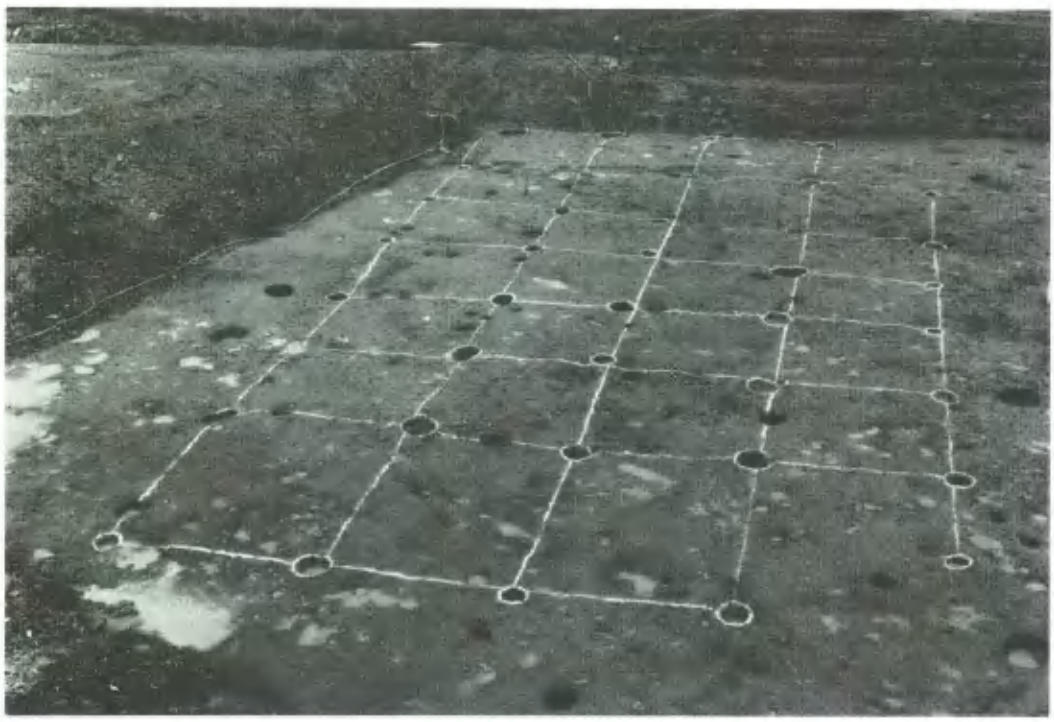
第７トレンチ出土瓦片

図版12

1．上寺竪穴住居址（北より）

2．住居址出土遺物（$\frac{1}{3}$）

1．上寺建物Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ（東より）



2．上寺建物Ⅱ（東より）

図版14

1．上寺建物群（北東より）

2．上寺柱穴出土遺物

1．井戸址（東より）

2．ピット（南より）

3．鍛冶炉2（西より）

(1/3)

(1/3)

(1/2)

(1/2)

(1/3)

(1/3)

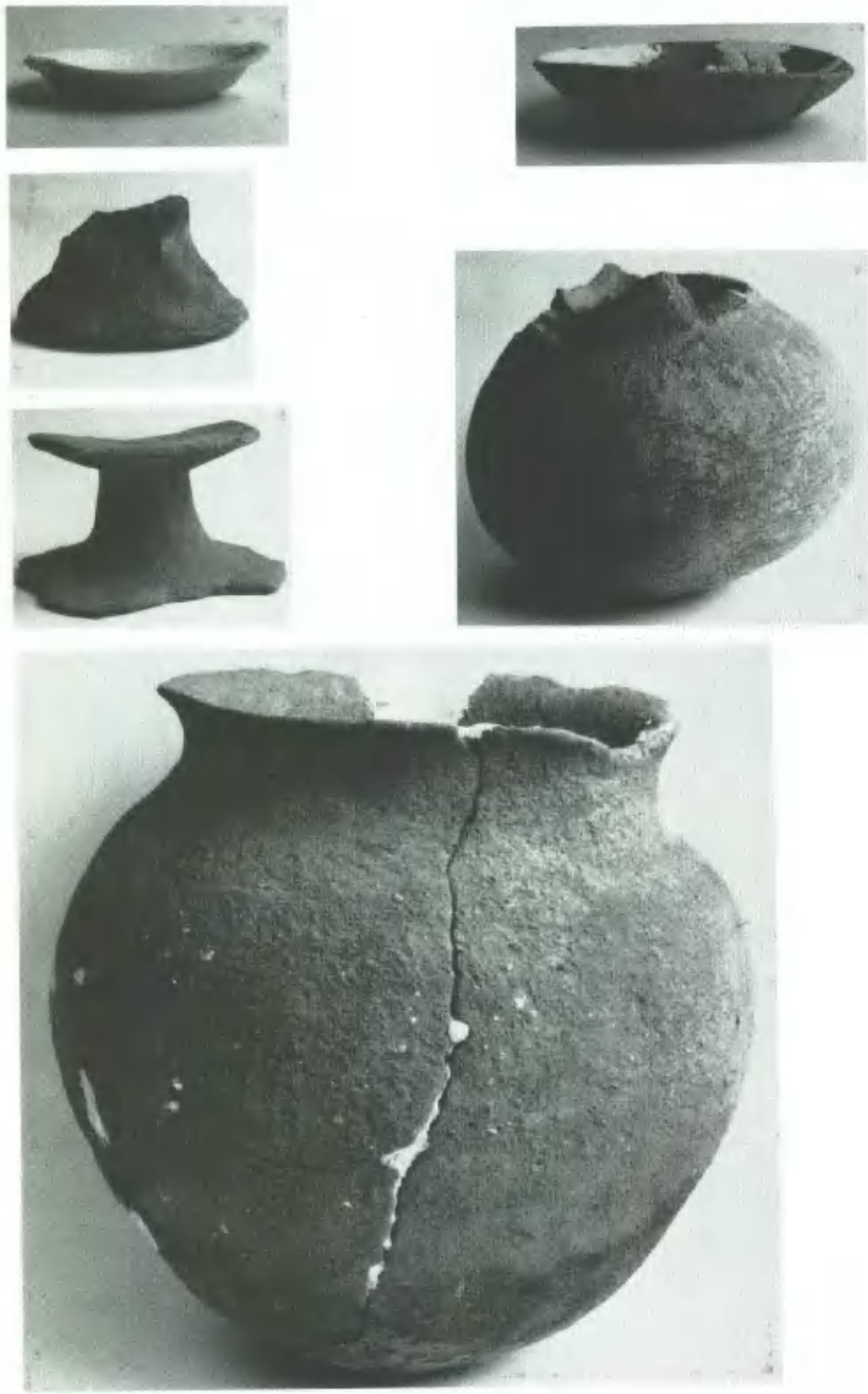
(1)

4．井戸址・ピット・溝出土遺物

図版16

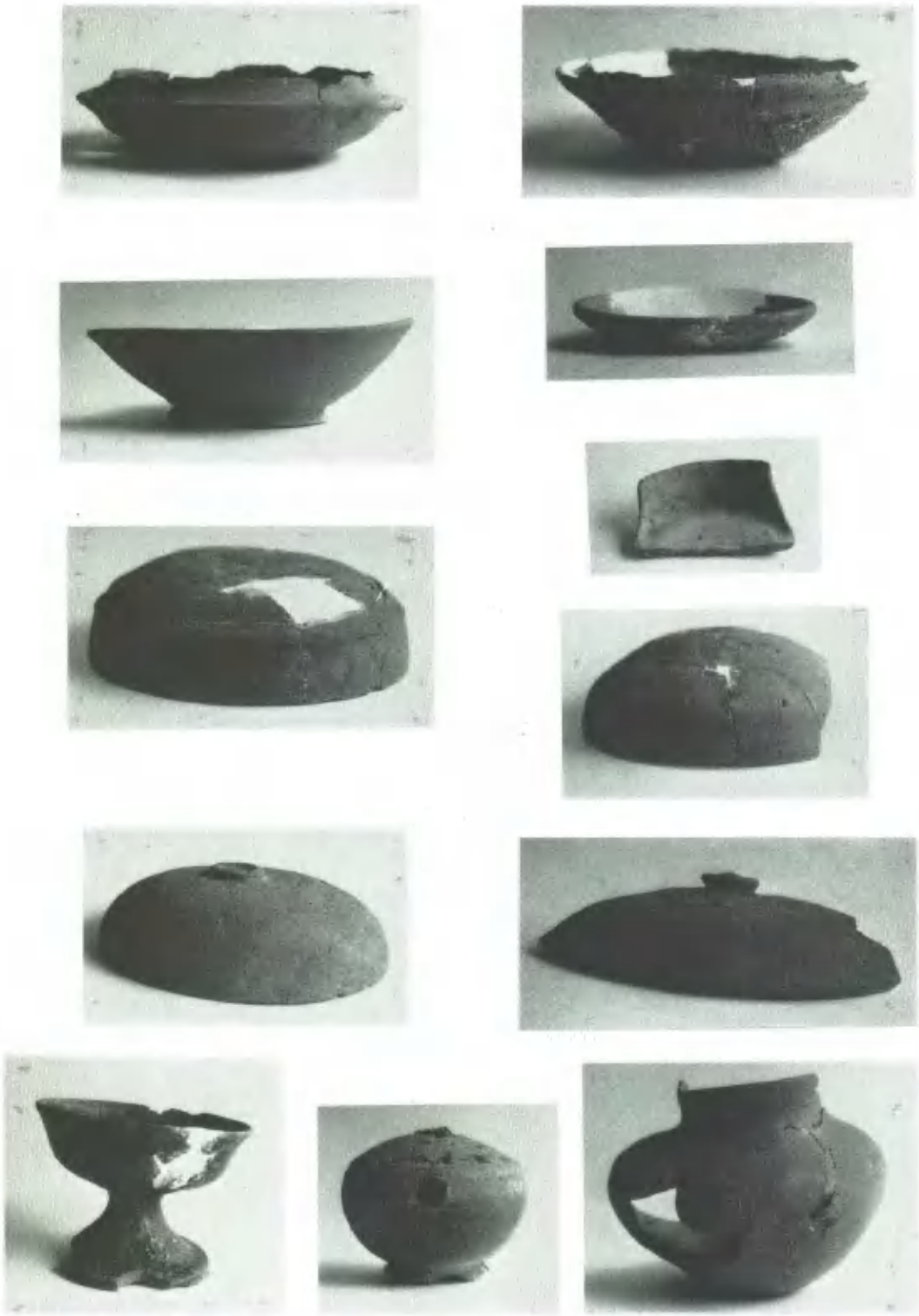
1．縄文式土器

2．包含層土器出土状態



土師器（$\frac{1}{3}$）

図版18



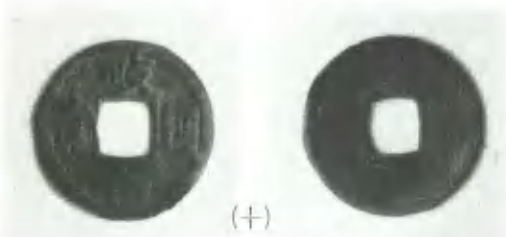
須恵器（$\frac{1}{3}$）

石 器（$\frac{1}{2}$）

図版20

(十)

(½)


(十)

(½)

陶磁器・紡錘・羽口・宋・鉱滓

銅　印（2倍）

図版22

1．上寺地区発掘風景

2．発掘終了後風景

谷尻（たんじり）遺跡 (30)

総 目 次

執筆者

第1章 はじめに……（高畑知功）…… 114
第2章 調査の経過……（高畑知功）…… 116
第3章 歴史，地理的環境……（井上 弘）…… 121
第4章 第一次調査の概要……（高畑知功）…… 130
第1節 6区の概要…… 130
第5章 第二次調査の概要……（高畑知功）…… 137
第1節 遺跡の概要……（高畑知功）…… 137
遺構，遺物の概要……（各担当者）…… 138
第6章 第三次調査の概要……（高畑知功）…… 226
第7章 植物種子分析について……（笠原安夫）…… 231
第8章 まとめにかえて……（高畑知功）…… 249
第1節 縄文式土器について…… 249
第2節 土師器について…… 250
第3節 須恵器について…… 253
第4節 住居址について…… 257
第5節 おわりに…… 259

表 目 次

表1 谷尻遺跡発掘調査要員一覧表（作成：高畑）…… 117
表2 谷尻遺跡作業工程表（作成：高畑）…… 119
表3 谷尻周辺遺跡分布図対照表（作成：高畑）…… 125
表4 谷尻遺跡第一次調査結果一覧表（作成：高畑）…… 135
表5 遺構一覧表（作成：高畑）…… 139
表6 谷尻遺跡建物計測値一覧表（作成：高畑）…… 150
表7 谷尻遺跡住居址計測値一覧表（作成：高畑）…… 151
表8 Ma130土壙出土石器計測値一覧表（作成：高畑）…… 153
表9 谷尻遺跡出土古銭一覧表（作成：高畑）…… 262
表10 須恵器杯身・杯蓋計測値表（作成：高畑）…… 166
表11 須恵器杯身・杯蓋法量表（作成：高畑）…… 254
表12 土壙計測値表（作成：井上）…… 219
表13 須恵器杯身・杯蓋編年表（作成：高畑）…… 254
表14 住居址一覧表（作成：高畑）…… 258
表15 須恵器計測値表（作成：高畑）…… 256

図 目 次

第１図　谷尻遺跡，周辺遺跡分布図（作成：高畑）…… 222
第２―１図　谷尻遺跡，周辺地形図，路線図（作成：高畑）…… 134
第２―２図　谷尻遺跡第１次調査トレンチ，グリッド配置図…… 134
第３図　谷尻遺跡遺構全体図（作成：高畑）…… 156
第４図　第一次調査22線トレンチ内出土遺物（実測・製図：高畑）…… 132
第５図　谷尻遺跡１区遺構配置図（作成：高畑）…… 157
第６図　№102住居址出土遺物（実測・製図：高畑）…… 159
第７図　№104住居址出土遺物（実測：竹田・製図：高畑）…… 159
第８図　№100，№106方形周溝？出土遺物（実測・竹田・高畑，製図：高畑）…… 160
第９図　№107，108住居址（実測・製図：高畑）…… 161
第10図　№107住居址出土遺物（実測・竹田・高畑・製図：高畑）…… 162
第11図　№107住居址（１～４）№109住居址（５～11）１区谷（12～14）
　　出土遺物（実測・製図：高畑）…… 163
第12図　№108住居址出土遺物（実測・製図：高畑）…… 164
第13図　№109住居址出土遺物（実測・製図：高畑）…… 165
第14図　№115住居址出土遺物（実測・製図：高畑）…… 167
第15図　№120住居址出土遺物（実測・製図：高畑）…… 167
第16図　№130土壙出土遺物（実測・製図：高畑）…… 168
第17図　№130土壙出土遺物（実測・製図：高畑）…… 169
第18図　№130土壙出土遺物（実測・製図：高畑）…… 171
第19図　№140住居址出土遺物（実測・製図：高畑）…… 171
第20図　№146住居址出土遺物（実測・製図：高畑）…… 172
第21図　谷尻遺跡２区遺構配置図（作成：高畑）…… 173
第22図　№149住居址出土遺物（実測・製図：高畑）…… 175
第23図　№153建物（実測・山磨・製図：高畑）…… 176
第24図　№155建物（実測・山磨・製図：高畑）…… 177
第25図　№174土壙（実測・製図：高畑）…… 178
第26図　№174土壙出土遺物（実測・製図：高畑）…… 179
第27図　№176土壙（実測・製図：高畑）…… 180
第28図　№176土壙出土遺物（実測・製図：高畑）…… 182
第29図　№176土壙出土遺物（実測・製図：高畑）…… 183
第30図　№176土壙出土遺物（実測・製図：高畑）…… 184
第31図　№176土壙出土土器（実測・製図：高畑）…… 185

第32図 №190住居址（実測・製図：高畑） …… 186
第33図 №190住居址出土遺物（実測・製図：高畑） …… 188
第34図 №190住居址出土遺物（実測・製図：高畑） …… 189
第35図 №177溝出土遺物（実測・製図：高畑） …… 191
第36図 №177溝下層出土遺物（実測・製図：高畑） …… 190
第37図 №191住居址（実測・製図：高畑） …… 193
第38図 №191住居址出土遺物（実測・製図：高畑） …… 195
第39図 №192溝出土遺物（実測・製図：高畑） …… 196
第40図 №192溝出土遺物（実測・製図：高畑） …… 197
第41図 №192溝出土遺物（実測・製図：高畑） …… 198
第42図 巴形銅器実測図（実測・製図：高畑）…… 192
第43図 谷尻遺跡３区遺構配置図（作成：高畑）…… 201
第44図 №178住居址（実測・製図：山磨） …… 203
第45図 №178住居址出土遺物（実測・製図：山磨） …… 204
第46図 №179住居址（実測・製図：山磨） …… 205
第47図 №179住居址出土遺物（実測・製図：山磨） …… 206
第48図 №198土壙（実測・製図：山磨） …… 207
第49図 №198土壙出土遺物（実測・製図：山磨） …… 208
第50図 №213土壙（実測・製図：山磨） …… 207
第51図 №213土壙出土遺物（実測・製図：高畑） …… 208
第52図 №223土壙出土遺物（実測・製図：山磨） …… 209
第53図 №180住居址実測図（実測・製図：山磨） …… 209
第54図 №180住居址出土遺物（実測・製図：山磨） …… 210
第55図 谷尻遺跡５・６区遺構配置図（作成：高畑）…… 211
第56図 №67住居址出土遺物（実測・製図：高畑）…… 218
第57図 №２，６，16土壙墓（実測：高畑・製図：井上）…… 213
第58図 №４，15，62，68，91，93土壙墓（実測・高畑・井上・製図：井上）…… 214
第59図 ５区土壙墓出土遺物（実測・製図：井上）…… 216
第60図 ６区西拡張区東断面図実測図（実測：中野・製図：高畑）…… 222
第61図 ９区西拡張区出土，土器（１～27）東拡張区出土，土器（28～45）
（実測：中野・江見・高畑・製図：高畑）…… 223
第62図 第３次調査５区遺構分布図（作成：高畑）…… 227
第63図 №１（１，２）№４（３・４）№７（５）№12（６～14）№14（16～20）
№15（21～26）土壙墓出土遺物，６区西拡張区弥生溝（31～35）
（実測・製図：福田）…… 229

第64図　6区24線東拡張区東断面図（実測：中野・江見・製図：高畑）…… 222
第65図　№94住居址出土土器（実測・製図：高畑）…… 230
第66図　№30土壙出土土器（実測・竹田・製図：福田）…… 217
第67図　6区22線トレンチ東断面図（実測・製図：栗野）…… 239
第68図　6図22線トレンチ西断面図（実測・製図：栗野）…… 239
第69図　6区24線トレンチ東壁断面図（実測・製図：栗野）…… 241

図 版 目 次

図版1　谷尻遺跡調査前全景（西より）　（撮影：高畑）…… 263
図版2　谷尻遺跡全景（南西より）　（撮影：仁木英輔氏）…… 264
図版3－1　1区調査前全景（北東より）　（撮影：高畑）…… 265
図版3－2　1区谷部（旧台地先端）　（西より）　（撮影：高畑）…… 265
図版4－1　1区西部掘り上げ全景（東より）（撮影：高畑）…… 266
図版4－2　1区東部掘りあげ全景　（東より）（撮影：高畑）…… 266
図版5－1　1区№102，104住居址（東より）（撮影：高畑）…… 267
図版5－2　1区№104住居址付属土壙内（南より）（撮影）…… 267
図版6－1　1区№107住居址遺物出土状態（南西より）（撮影：高畑）…… 268
図版7－1　1区№107カマド（南東より）（撮影：高畑）…… 269
図版7－2　1区№107カマド横断面（南東より）（撮影：高畑）…… 269
図版8－1　1区№107住居址（南西より）（撮影：高畑）…… 270
図版8－2　1区№106方形周溝遺物出土状態（東より）（撮影：高畑）…… 270
図版9－1　1区№109住居址（南東より）（撮影：高畑）…… 271
図版9－2　1区№109住居址遺物出土状態（撮影：高畑）…… 271
図版10－1　1区№120住居址（西より）（撮影：山磨）…… 272
図版10－2　1区，谷部（旧台地先端）（北より）（撮影：高畑）…… 272
図版11－1　1区№115，住居址（南東より）（撮影：高畑）…… 273
図版11－2　1区№140，141住居址（南より）（撮影：高畑）…… 273
図版12－1　1区№140住居址（南より）（撮影：高畑）…… 274
図版12－2　1区№146住居址（北西より）（撮影：高畑）…… 274
図版13－1　1区№130土壙（南西より）（撮影：山磨）…… 275
図版13－2　1区№130土壙（北より）（撮影：山磨）…… 275
図版14－1　1区№130土壙内遺物出土状態（撮影：山磨）…… 276
図版14－2　1区№130土壙内遺物出土状態（撮影：山磨）…… 276
図版15－1　1区№130土壙内遺物出土状態（撮影：山磨）…… 277
図版15－2　1区№130土壙内遺物出土状態（撮影：山磨）…… 277

図版16—1　1区№130土壙内遺物出土状態（撮影：山磨） …… 278
図版16—2　1区№130土壙内遺物出土状態（撮影：山磨） …… 278
図版17—1　1区，柱穴内土師質皿出土状態（撮影：高畑） …… 279
図版17—2　1区№145土壙遺物出土状態（北より）（撮影：高畑） …… 279
図版18—1　2区，3区調査前全景（南西より）（撮影：高畑） …… 280
図版18—2　2区，3区掘り上げ全景（南西より）（撮影：高畑） …… 280
図版19—1　2区，№149住居址（南西より）（撮影：高畑） …… 281
図版19—2　2区№152住居址（北西より）（撮影：高畑） …… 281
図版20—1　2区№190住居址炭化材（地西より）（撮影：高畑） …… 282
図版20—2　2区№190住居址遺物出土状態（南西より）（撮影：高畑） …… 282
図版21—1　2区№191，192遺構（東より）（撮影：高畑） …… 283
図版21—2　2区№191住居址（南東より）（撮影：高畑） …… 283
図版22—1　2区№192遺構（北東より）（撮影：高畑） …… 284
図版22—2　2区№192溝状遺構遺物出土状態（北東より）（撮影：高畑） …… 284
図版23—1　2区№192住居址遺物出土状態（北東より）（撮影：高畑） …… 285
図版23—2　2区№192溝状遺構遺物出土状態（北西より）（撮影：高畑） …… 285
図版24—1　2区№192溝状遺構遺物出土状態（南東より）（撮影：高畑） …… 286
図版24—2　2区№192住居址上面巴形銅器出土状態（北より）（撮影：高畑） …… 286
図版25—1　2区№176土壙（西より）（撮影：高畑） …… 287
図版25—2　2区№176土壙（北西より）（撮影：高畑） …… 287
図版26—1　2区№174，176遺物出土状態（北より）（撮影：高畑） …… 288
図版26—2　2区№174遺物出土状態（南東より）（撮影：高畑） …… 288
図版27—1　2区№177溝（北より）（撮影：高畑） …… 289
図版27—2　2区№177溝（北より）（撮影：高畑） …… 289
図版28—1　2区№177遺物出土状態（東より）（撮影：高畑） …… 290
図版28—2　2区№177遺物出土状態（東より）（撮影：高畑） …… 290
図版29—1　2区№160～164土壙墓（南より）（撮影：山磨） …… 291
図版29—2　2区№165溝状遺構（西南より）（撮影：高畑） …… 291
図版30—1　2区№153，155，157，158建物（南より）（撮影：高畑） …… 292
図版30—2　2区№157，158建物（南西より）（撮影：高畑） …… 292
図版31—1　3区№179住居址（南西より）（撮影：山磨） …… 293
図版31—2　3区№179住居址出土遺物（北東より） …… 293
図版32—1　3区№178住居址（北東より）（撮影：山磨） …… 294
図版32—2　3区№178住居址出土遺物（撮影：山磨） …… 294
図版33—1　3区№207住居址（南東より）（撮影：山磨） …… 295

図版33—2　3区№204，205，206住居址（南東より）（撮影：山磨） …… 295
図版34—1　3区№181住居址（南西より）（撮影：山磨） …… 296
図版34—2　3区№212，221住居址（北東より）（撮影：高畑） …… 296
図版35—1　3区№188，180住居址（南東より）（撮影：山磨） …… 297
図版35—2　3区№180住居址（南東より）（撮影：山磨） …… 297
図版36—1　3区№183を中心に全景（南東より）（撮影：山磨） …… 298
図版36—2　3区№183溝（南東より）（撮影：山磨） …… 298
図版37—1　3区№185溝の断面（南西より）（撮影：山磨） …… 299
図版37—2　3区№185，186溝（南西より）（撮影：山磨） …… 299
図版38—1　3区№198土壙遺物出土状態（撮影：山磨） …… 300
図版38—2　3区№203，袋状ピット土層断面（撮影：山磨） …… 300
図版39—1　3区№219土壙（南東より）（撮影：山磨） …… 301
図版39—2　3区№202袋状ピット(南西より)（撮影：山磨） …… 301
図版40—1　3区№209配石の土壙（北西より）（撮影：山磨） …… 302
図版40—2　3区全景（南東より）（撮影：高畑） …… 302
図版41—1　5区調査前状態（北東より）（撮影：高畑） …… 303
図版41—2　5区調査終了（北西より）（撮影：高畑） …… 303
図版42—1　5区西側全景（西より）（撮影：高畑） …… 304
図版42—2　5区東側全景（南東より）（撮影：高畑） …… 304
図版43—1　5区№33住居址（南より）（撮影：高畑） …… 305
図版43—2　5区№36土壙（西より）（撮影：高畑） …… 305
図版44—1　5区№67住居址（北東より）（撮影：栗野） …… 306
図版44—2　5区№67住居址（北東より）（撮影：栗野） …… 306
図版45—1　5区№338住居址（南より）（撮影：井上） …… 307
図版45—2　5区№99住居址（北北東より）（撮影：井上） …… 307
図版46—1　5区№301住居址（南東より）（撮影：井上） …… 308
図版46—2　5区№89住居址（南東より）（撮影：井上） …… 308
図版47—1　5区№9住居址（西より）（撮影：高畑） …… 309
図版47—2　5区発掘終了時点（西より）（撮影：高畑） …… 309
図版48—1　5区№4土壙（北東より）（撮影：高畑） …… 310
図版48—2　5区№305土壙（東より）（撮影：井上） …… 310
図版49—1　5区№30土壙墓（西より）（撮影：高畑） …… 311
図版49—2　5区№11床面焼土（南より）（撮影：高畑） …… 311
図版50—1　5区№6，2土壙墓（南東より）（撮影：高畑） …… 312
図版50—2　5区№6土壙墓（南東より）（撮影：高畑） …… 312

図版51—1　6区第1次調査グリッド（西より）（撮影：高畑）…… 313
図版51—2　6区22線トレンチ土層断面（西より）（撮影：高畑）…… 313
図版52—1　6区24線トレンチ流木（西より）（撮影：高畑）…… 314
図版52—2　6区22線トレンチ土層断面（西より）（撮影：高畑）…… 314
図版53—1　6区，弥生時代溝（撮影：栗野）…… 315
図版53—2　6区西端拡張区溝土層断面（西より）（撮影：高畑）…… 315
図版54—1　6区22線トレンチ土層断面（西より）（撮影：栗野）…… 316
図版54—2　6区22線トレンチ土層断面（西より）（撮影：栗野）…… 316
図版55—1　6区西端拡張区溝土層断面（西より）（撮影：高畑）…… 317
図版55—2　6区24線トレンチ溝土層断面（東より）（撮影：高畑）…… 317
図版56—1　6区24線トレンチ土層断面（南より）（撮影：栗野）…… 318
図版56—2　6区東端拡張区北壁断面（南より）（撮影：高畑）…… 318
図版57—1　6区24線トレンチ内遺物出土状態（撮影：栗野）…… 319
図版57—2　6区24線トレンチ内流木出土状況（南より）（撮影：栗野）…… 319
図版58—1　第1次調査22線トレンチ出土遺物（撮影：高畑）…… 320
図版58—2　第1次調査22線トレンチ出土遺物（撮影：高畑）…… 320
図版59—1　№130土壙出土打製石斧（撮影：高畑）…… 321
図版60—1　№130土壙出土打製石斧，スクレーパー，石鏃（撮影：高畑）…… 322
図版61—1　№130土壙出土凹石，磨石（撮影：高畑）…… 323
図版61—2　№130土壙出土石皿，砥石（撮影：高畑）…… 323
図版62—1　№176土壙出土遺物（撮影：高畑）…… 324
図版63—1　№176土壙出土遺物（撮影：高畑）…… 325
図版64—1　№176土壙出土遺物（撮影：高畑）…… 326
図版65—1　№176土壙出土遺物（撮影：高畑）…… 327
図版66—1　№176土壙出土遺物（撮影：高畑）…… 328
図版67—1　№190住居址出土遺物（撮影：高畑）…… 329
図版68—1　№192周溝出土遺物（撮影：高畑）…… 330
図版69—1　№192周溝出土遺物（撮影：高畑）…… 331
図版70—1　№191住居址出土遺物，巴形銅器（撮影：高畑）…… 332
図版71—1　№107住居址出土須恵器（1—4），№109住居址出土須恵器（6～11），
　　1区谷部出土須恵器（12～14）（撮影：高畑）…… 333
図版72～1　№67住居址出土遺物（撮影：高畑）…… 334

第1章 はじめに

本報告は中国縦貫自動車道路建設に伴い記録保存を目的として行った埋蔵文化財発掘調査概要である。

遺跡名	谷尻遺跡（上房郡北房町上水田谷尻）〔国№1720〕	合計	備考
発掘期間	◦第一次調査一昭和48年10月20日より12月27日まで 2½ケ月（実動日数52日） ◦第二次調査一昭和49年4月より昭和50年4月まで 13ケ月（実動日数292日） ◦第三次調査一昭和50年6月2日より6月28日まで 1ケ月（実動日数20日）	16½ケ月（364日）	1.調査開始と同時に工事用道路進入の話あり。（公団の発注，昭和48年11月） 2.地区終了時点にて，ボックス用地を切り売りしてゆく。 3.路線巾変更により，第三次調査となる。
発掘作業員	◦第一次調査 男148人 女356人 計504人 1日平均10人 ◦第二次調査 男2,945人 女3,665人 計6,610人 1日平均30人 ◦第三次調査 男86人 女112人 計198人 1日平均10人	7,312人	1.北房町内の農家の人達が主体となる（農繁期6，10月） 2.12月より作業員新に15名雇用 3.3月20日以後作業員無しで作業
調査担当者	◦高畑知功（S48.10.20～S48.12.27）（S49.4.8～S50.4.20）（S50.6.2～S50.6.30） ◦山磨康平（S49.10.1～S50.3.31） ◦栗野克己（S50.1.6～S50.3.31） ◦井上 弘（S50.1.17～S50.3.31） ◦福田正継（S50.6.1～S50.6.31） ◦江見正己（S50.4.4～S50.4.20） ◦中野雅美（S50.4.4～S50.4.20）		1.S50年3月後半には，予算面で作業員を打ち切りとなる。 2.S50年3月後半より葛原克人，橋本惣司，下沢公明，柳瀬昭彦，福田正継，江見正己，友成誠司，中野雅美各調査員による応援体制を組む。
実質発掘面積	全体STA6+80～STA7+20(640m) ◦1区4,000㎡ ◦4区110㎡ ◦2区3,200㎡ ◦5区3,700㎡ ◦3区1,320㎡ ◦6区2,081㎡	14,411㎡	1.1区谷部ユンボ使用 2.2，3，4，6区谷部分，トレンチ，グリッド調査 3.平坦部分は全面調査
遺構	◦1区 48遺構 ◦4区 — ◦2区 37遺構 ◦5区 158遺構 ◦3区 38遺構 ◦6区 1遺構	283遺構	◦遺構一覧表参照
遺物（40×70×15の箱）	◦第一次調査（10箱） ◦第二次調査 1区(62箱) 2区(24箱) 3区(26箱) 5区(19箱) 6区(13箱) ◦第三次調査（6箱）	260箱	◦津山収蔵庫（津山市田邑）に保管（760203 現在）
実測図（S=1/20） 50×80ケント紙 40×55 方眼紙			1.測量レベルは日本道路公団の設定したものを利用した 2.方位はすべて磁北を基準に行った。

写　　真 4×5トヨヴィユー 小型ミノルタ　2台	白黒　4×5判——660枚（12枚×55本） 白黒　35㎜——2,232枚（36枚×62本） スライド——1,656枚（36枚×46本）	4,548枚	1.各遺構担当者が撮影を行う
報告書作成期間	昭和50年4月21日～50年5月31日（高畑） 昭和51年2月6日～51年2月21日（〃）	1 1/3ケ月	1.栗野，井上，山磨調査員は期間無し 2.水洗い，注記，復元，作図は，日笠月子，日笠栄，高畑春美の各作業員による（収蔵庫）
トレース遺構	№107，108 №190，191 №178，179 180 } 住居址 №155 №153 } 建物址 №174，176 №213，198 } 土壙 №6，16，2，15，4 68，93，91，62 } 土壙墓		1.全体図を作成し，各遺構を省略せざるを得ない状態
トレース遺物	1区　№102，104，100，106，107，108，109，120，130，140，146 2区　№149，174，176，190，177，191，192 3区　№178，179，198，180，213， 4区　— 5区　№27，32，52，51，70，74，115，304，325，329，333，339，66		1.全遺構中より，一括として扱えるものを中心に各時期よりピックアップした。
遺物実測	同　　上		1.全遺構中より，一括として扱えるものを中心に各期期よりピックアップした。
遺構 遺物　文章化	同　　上		同　　上
遺跡の考察			

第2章 調 査 の 経 過

中国縦貫自動車道路の県内ルート114.7㎞のうち52.3㎞落合インターまでが開通しており，現在第二次整備区間落合インターより広島県境まで62.4㎞の発掘調査が行なわれている。谷尻遺跡は，第２次整理区間建設に伴って，昭和48年10月より，昭和50年６月末まで延16½月間（第一次～第三次調査）行った緊急発掘調査である。

◎ **第一次調査**（昭和48年10月20日より～12月27日まで）

トレンチ，グリッド調査による遺跡の範囲及び規模を確認する作業を行なった。従来より萩原工業KK裏（80m×120m）が弥生後期～土師前期土器の出土したことなどから周知の遺跡であった（註１）。しかし，分布調査によりさらに路線内全域にわたり，土器片が散布し地形の上からも広がりが想定できた。そこで20m方眼に設定したグリッドの南北線（第２－１図）に沿って巾２mのトレンチ，グリッドを掘開した。（第２－２図），１－12線までをトレンチにて行なったが，掘開巾２mでは遺構の確認が困難であったため４区，14線よりグリッド（４×４m）に変更して行なった。路線内は調査前まで水田，畑地，宅地に利用されており，遺構面であった黒ボク堆積土は耕作時に削平された部分が多く，遺構の確認は表土下約30㎝の第３紀層（３，５区）にて行なった。この年より発掘調査と報告書作成が併用して行なわれ，一人一人遺跡，３ケ月交代（註２）という計画が実施された。この第一次調査も旦の原遺跡の担当区残務処理とあわせて行なわざるを得なかった。不充分ではあったが，谷尻遺跡は低位台地部（１区，２区，３区，５区）の全面調査の必要性と，低地部（６区）の調査を報告した。（表－４）。又，４区にあたってはグリッド調査の結果，西谷の扇状地と備中川の氾濫原から成ることを確認し，グリッド調査のみにて終了した。

◎ **第二次調査**（昭和49年４月より50年４月まで）

第一次調査をもとに，調査員２名１ケ年の期間があてられた。本遺跡の場合は，すでに公団の発注（昭和48年11月）が終了しており調査開始と同時に遺跡東側より工事用道路を進入させたいという公団の要求があった。調査現場は毎年，希望とはうらはらに発掘調査体制が粗悪になりつつある現実の中でいることを痛感せざるを得なかった。

とりあえず，工事用道路進入を考慮し北側６mの道路敷を残して５区より表土剝ぎを開始した。５区東半分が終了し，西半分遺構検出にとりかかったところで，工事用道路は「構造物優先」であることを聞く。すなわち，町道谷尻線，又丸線，農道ナベクナ線のBox ３本，排水管（直径１m）４本の具体化に伴って調査計画を変更し，急拠１区に中心を移し，５区の残務処理を行った。工事工程にからんで西部より東部に向って調査してゆくことを決定した。１区低地（谷）においてはユンボを利用し，低位台地先端部が削平された部分と備中川氾濫原であったことを認めた。そし

谷尻遺跡発掘調査要員一覧表 （表1）

○は本遺跡（報）報告書作成

	栗 野	井 上	山 磨	高 畑	竹 田	福 田	江 見	中 野
48年10月	(報)久米廃寺	(報)押入西	旦 原	○(第一次調査)				
11月	〃	備 中 平	〃	○				
12月	〃	〃	〃	○				
1月	〃	〃	(報)宮 尾	(報)小 中				
2月	〃	〃	〃	〃				
3月	〃	〃	〃	〃				
49年4月	(報)西 原二宮大成	(報)国 府	(報)二宮大成	○				
5月	〃	〃	〃	○	○			
6月	(報)小 中	(報)高 本	(報)高 本	○	○			
7月	〃	〃	〃	○	○			
8月	〃	青 地	〃	○	桃 山			
9月	〃	塔 の 畝	〃	○	〃			
10月	(報)領 家	(報) 平	○	○	〃			
11月	〃	〃	○	○	〃			
12月	〃	〃	○	○	〃			
1月	○	○	○	○	〃			
2月	○	○	○	○	〃			
3月	○	○	○	○	〃			
50年4月	文化課異動	安 信	文化課異動	○(報)○	安 信	桃 山	○	○
5月		〃		(報)○	〃	〃	川 入	川 入
6月		〃		○	〃	○	〃	〃
7月		〃 新市谷		二野遺跡 光坊寺古墳群	〃 新市谷	二野遺跡 光坊寺古墳群	〃	〃
8月		〃		〃	〃	〃	〃	〃
9月		〃		〃	〃	〃	〃	〃
10月				土井遺跡		土井遺跡	〃	〃

て Box 1を明渡す。調査の中心は低位台地部にしぼられ，表土剝ぎと遺構実測を並行して進める。しかし，調査員一名故に，表土剝ぎ，遺構実測等の作業がうまく組合わず遺構検出は二度手間になることが多かった。10月より山磨康平が報告書を一応終えて現場に入る。1区№120遺構より開始した。作業の工程が工事工程にのらず期間内終了不可能の判断より，12月からさらに15名の作業員を増員し，計45名で一挙に表土剝ぎを行なった。1月より栗野克己，井上弘，両名が現場に入り，5，6区の調査を中心に，山磨，高畑が2，3区の調査を続行した。それでも遺跡に対応しきれない状況の中で，3月20日以後予算の都合で作業員0名という状態まで追いこまれた。そこで3月後半には7名の調査員による応援体制が組まれた。5区に集中し残務処理にあたる。それでも期限内には終了しきれず新しい年を迎えた。4月に新規採用の江見正己，中野雅美が応援に入り，計3名にて5，6区残務整理にあたる。6区においては，2ケ所（4×4m）のグリッド分層発掘を行ない一応の調査を終了させた。

◎ 第三次調査（昭和50年6月2日～6月28日まで）

第二次調査終了時点で町道中田原線ボックスの設計変更が明確化し，従来より路線が拡張されることになり，公団，日産建設による用地巾杭打ちが行なわれていた。第二次調査終了時より1ケ月半が経過したところで，急拠，拡張区の調査が決定した。報告書作成中の高畑，桃山遺跡終了時点の福田正継，二名の調査員が投入された。おりしも，田植時期にあたり，水田に水が張ってあり路線南側拡張区では，掘開すると水が湧き，そのため調査不可能部分が多く出た。路線北側においては，5区，6区が拡張区へ入り調査は5区が主体に行なわれた。第二次調査時に半分位検出されていた遺溝全体を出すのが中心となり，遺跡がさらに北に延びることを確認した。6区においてはグリッドを設定し溝の西延長部を検出することを目的とした。縄文晩期堆積層上面まで調査し，弥生時代溝等の処理は終了した。しかし，梅雨という条件と，1ケ月半のブランクから日産建設工事の進行状況とあいなって調査部分は泥沼化し調査困難となった。

◎ 報告書作成について（昭和50年4月21日より5月31日まで）（昭和51年2月6日～2月21日）

16ケ月の調査期間が費やされた遺跡も報告書作成の段階では担当者がバラバラになってしまった。栗野，山磨が文化課デスク，井上が現場担当，高畑が3ケ月の報告書作成のため津山収蔵庫に入る。第二次調査事後処理と第三次調査の開始で正味一ケ月の整理期間となった。

毎回のことであるが，期限に制約された発掘調査後，さらに整理期間も制約せざるをえない現状の中で一体，一連して行なう発掘調査のもつ意義を捜しだそうにも捜しだせそうにない状態で報告書作成にとりかかった。遺跡面積，遺構数，遺物量，それを整理する人間のかかわり方等より，基礎的作業である遺物の水洗い，注記を行ない遺構別，区別に整理する第一段階の作業を終了した。実測原図は全てマイクロフイルムに撮り遺物と共に収蔵庫に保管している。遺構については全て消滅してしまっているが，遺物は報告書に載せるもののみピックアップして復元実測したにすぎず，整理箱中に大多数のものが納っている。遺構実測図についても，全体図にとどまり個々遺構につい

谷尻遺跡作業工程表 (表2)

調査	年月	調査員	作業員 男	作業員 女	調査区 (14411㎡) 1区 (4000㎡)	2区 (3200)	3区 (1320)	4区 (110)	5区 (3700)	6区 (2081)
第1次調査	48年 10	1名	9	37						
	11	1	69	121						
	12	1	70	192						
第2次調査	49年 4	1	105	191						
	5	1.5	140	256						
	6	2	102	158						
	7	2	175	234						
	8	1	185	254						
	9	1	166	254						
	10	2	163	228						
	11	2	238	263						
	12	2	399	448						
	50年 1	4	371	390						
	2	4	484	511						
	3	4	299	320						
	4	3	52	43						
第3次	6	2	86	112						
合計	17ヶ月	34.5名	3113	4112	8ヶ月	6ヶ月	4ヶ月	0.6ヶ月	4.5ヶ月	4.5ヶ月

ての詳細には及ばなかった。また，遺跡の検討，考察についても行なっていない。これらの未整理，未発表部分については調査員の能力にあわせて，今後の知見をも加えて我々の責務を果さざるを得ない。

（註１） ◦全国遺跡地図 ◦昭和45年４月分布調査「低地性集落」 ◦三好喜一氏談

（註２） ◦岡山県埋蔵文化財報告 (3) 1973 資料８ P15 ◦岡山県埋蔵文化財報告 (4) 1973 「報告書作成の経過」

調査参加者（五十音順）

浅田栄，伊賀たかよ，池田菊代，畦田巌，畝本貞子，大恵澄代，小田成子（事務），大塚清治，大橋勇，岡崎正一，岡崎玉江，岡本キ志子，岡本美智子，奥山三男，奥山ゆり子，梶田喜美子，梶田鹿野，梶田太郎，梶谷清枝梶原サクヨ，紙谷輝子，木下早一，工藤芳雄，溝元定雄，小林荘一，小林十一，小林芙二子，古林美代，小林義造，三田充興，志田春栄，清水アサヨ，杉本史信，鈴木忠一，滝上喜代三郎，竹原龍治，竹原ひさの，谷口与一，土井泰代（事務），中谷武雄，西川勝太郎，西杉二三子，蜂谷鉄男，花岡毅，久松三郎，平田吉次，福田さちゑ，坊喜美子，坊正男，細川貞治，堀内菊代，堀内松一，増田和子，的場繁子，丸山絹子，南潤，三好浪子，村山きく江，森田春子，山岡浪代，山岡春子，山岡政代，山崎秋恵，山崎光範，山崎芳，山本勲，山本杢治，山本好次，吉原毅，四谷常代，脇田糸代，脇田正男，脇田みどり（事務），江見正己（国学院大学学生），中川正信（立正大学学生），中谷朋子（湯原小学校事務），発掘調査にあたり，地元の方々を始め，北房町教育委員会，文化財専問委員会，縦貫道対策委員の方々には，全期間にわたり御指導，御協力をいただいた。記して謝意を表わしたい。又，報告書作成に関する整理（水洗い・注記・復元・etc）については，日笠月子，日笠栄，高畑春美，各作業員によるところが多大であったことを記して謝意を表わしたい。

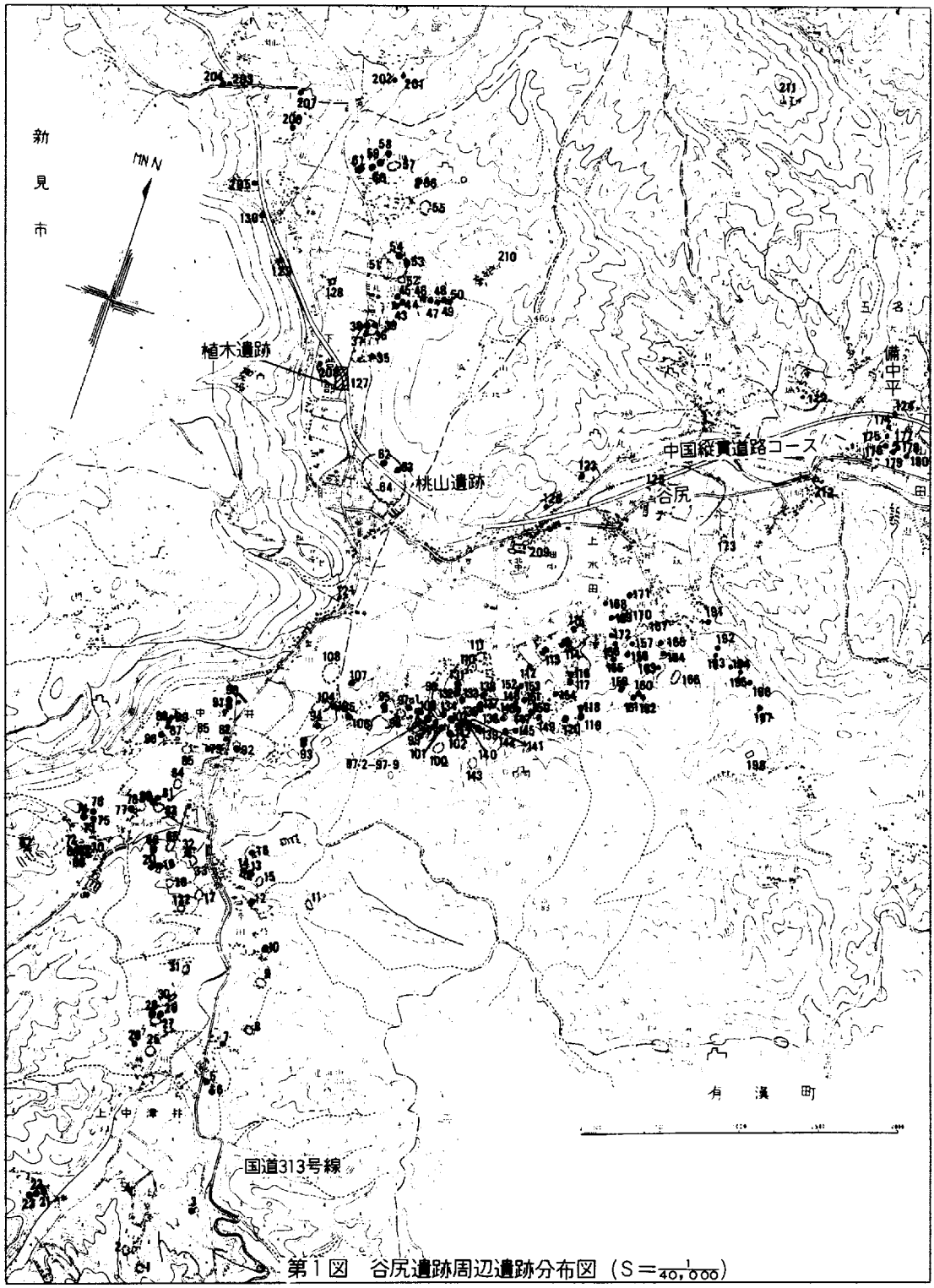
第3章 歴史・地理的環境

谷尻遺跡は，岡山県の中北部にある上房郡北房町上水田に所在する。付近一帯は石灰岩地帯で，北房町，新見市にかけて，石灰岩の採掘場が多く見られる。また，北房町の西，新見市の南部には石灰岩地形が見られる。阿哲台と呼ばれているのがそれである。この阿哲台地の豊永付近にはカルスト台地としての地形が見られる。この石灰岩地帯は，さらに西に広がっており，広島県東城町の帝釈峡へと続く。

この石灰岩地帯の間を流れる川がある。旭川の支流の一つである備中川である。この備中川により開析された平地は，一定の広さと，まとまりを見せている。それは，現在の北房町の中心をなす地域であることからも解るように，この地方にあって注目すべき平地である。備中川により形成された平地は，上呰部，下呰部を中心とする地域，上水田を中心とする地域である。さらに，備中川の支流になる，中津井川により開析された地域とを合せた地域が，この一帯の中心地を形成する。そして北房町内で現在までに知られている遺跡も，その大多数が，この周辺に存在している。そしてそれ等の遺跡は，この平地を生活の場とした人々によって残されたものである。

付近一帯は，石灰岩地帯であるため，井倉洞，満奇洞をはじめとして数多くの洞穴が知られている。帝釈峡においては10数年来岩陰，洞穴遺跡の調査がなされており，その成果も上りつつある。そのような状況のもとで，同じ石灰岩地帯であるこの阿哲地方も最近では注目され始めている。先にも述べたが，この地方は石灰岩地帯であるための洞穴，岩陰を見付けることが多い。このような岩陰遺跡の一つとして地蔵が渕遺跡がある。谷尻遺跡の東方約1kmの位置にある。この遺跡は備中川が大きく流れを変える曲り角にある。そして同遺跡からは縄文式土器が採集されている。この例は，一つの特殊な例ではなく，岩陰，洞穴の精密な調査を実施すれば，さらに同種の遺跡の増える可能性は大きいと考えられる。北房町内の，中国縦貫自動車道関係の遺跡である。備中平遺跡，桃山遺跡からも，縄文式土器の出土をみている。また，北房町との町境にある，落合町宮の前遺跡でも縄文式土器片と縄文時代晩期と考えられる約40個の貯蔵穴とが発見されている。以上の例は，谷尻遺跡の縄文時代の遺物の出土状況と考え合せてみれば，当地方における，縄文時代の停滞性を示すものではなく，むしろその逆が考えられるであろうし，平地を生産，および生活の中心の場とするきざしが見え始めているものとすることができるであろう。

弥生時代の遺跡であるが，それらは，縄文時代の遺跡よりも，数は多く知られている。それ等の立地する位置としては，低丘陵，緩斜面，及び平地にあり，他地域のそれらと変るところはない。ただ，個々の遺跡の様相が判明していない現在では，それ等の遺跡相互の連関を具体的に述べることはできない。また，その地域的発展についても不明とせざるをえない。しかし現在までに知られる遺跡からみて，備中川により開析された平地を中心に展開することは否定できないであろう。つまり遺跡分布図を見ると，それらの多くは，備中川の周辺に見られるのである。それは先に述べた



第１図　谷尻遺跡周辺遺跡分布図（S＝1/40,000）

ようにこの地域にあっては，縄文時代においても，平地が，その生活の中心となりつつあった状況を考慮に入れる必要がある。そのような状況を背景としてこの地域における弥生時代の生産基盤が完成し，弥生時代が展開してゆくものであろう。

これ等，低地に進出した弥生時代の遺跡の発見が少ないのは，発見の機会がないことと同時に，時代的重層が考えられるであろう。つまり，現在この地域に見られる集落の立地する位置は，自然的災害に対して，非常に安定していることからしても，その条件の良さはうかがえるであろうし，その位置に遺跡が立地する可能性は大きい。

古墳時代に入ると，さらに多くの遺跡が知られてくる。そのほとんどは古墳である。それ等のほとんどは備中川，中津井川により形成された平地の縁辺の丘陵上に位置する。知られている多くは横穴式石室墳である。散在する横穴式石室墳の間に，数基ごとのまとまりを見せる前方後円墳，前方後方墳がある。前方後円（方）墳は，それ等が存在する地域の一つの象徴であり，その地域の初期権力者の象徴として，誇示されるものであった。そのことは，それ等古墳の存在する地形からも推測できる。それを，この備中川上流の平地にみると，この地域にあって，もっともまとまりのある平地を一望できる位置に，前方後円墳，前方後方墳がある。荒木城御崎１号墳同２号墳がそれである。荒木城御崎２号墳は，低く，巾のせまい前方部をもつ全長約40mの前方後方墳である。墳丘は二段築成である。これに西接して，同一号墳がある。全長約60mの前方後円墳である。前方部は後円部に比べて約３m低いが，前方部の先端がやや開いている。後円部には，長さ約５mの堅穴式石室がある。この二つの古墳は，この地域にあっては，最も古い時期の古墳と考えられる。この古墳は，地域共同体の象徴として，その共同体の首長を葬るために築造されたものであろうことは，古墳の位置する場所から見わたせる平地の広さにも解るであろう。それだけにその位置は，水田の平地のどの地点からも見ることができる。そして近くにある同じく前方後円墳である。立古墳，御陵古墳と，同一地域において順次造られたものと考えられる。

備中川の上流である呰部の地域にも数基の前方後円墳，前方後方墳がある。それらの規模は，荒木城御崎古墳の半分位の大きさであるが，呰部の小平地を囲む位置に点在してあり，その平地を基盤とする共同体の象徴として存在したものであろう。それ等が築造されたのは，荒木城御崎古墳が造られたと同時期のものはないが，それに続く一連の前方後円墳が築造されたのと同時期頃に造られたものであろう。つまり，両地域において，独自性を保ちつつ，共同体が発展してゆくなかで，順次築造されたと考えられる。

一方，中津井の地域には古い時期の前方後円墳はみられず，先の地域に比べれば最も後発的である。しかし，時期的には遅れるとしても，中津井の小平地を基盤とした，首長墓としての，前方後円墳が出現している。つまり，上定古墳，下定古墳がそうである。それら古墳の出現により，この地域も，独自性をもった共同体の出現を考えることも可能であろう。以上に述べた前方後円（方）墳の存在する地域には，他に多数の古墳がある。それらの古墳群は，前方後円（方）墳を生み出したその基盤を支えるものであり，地域共同体の基盤である。そしてそれらが，その地域の特異性を生み出してゆくものであろう。

谷尻遺跡

備中川の中，上流及び中津井川流域において，縄文時代，弥生時代においては顕著な個性的なものは見られなかった。しかし，古墳時代が展開する間に，地域差が見られる。それは，その地域の生産基盤の差を反映したものと考えられる。いずれにしても，最も早く，古墳文化を成立しえた上水田地区と，それにやや遅れた呰部地区，そして，前方後円墳の築造が最も遅い中津井地区である。その差違は，大きくはないとしても，それ以後，独自の発展をし，律令時代へと続くものと考えられる。そして歴史時代の遺跡として赤茂（英賀）廃寺がある。赤茂廃寺は谷尻遺跡の東方数百米に所在する。廃寺にはかつて心礎が存在したことが知られており，散布する瓦は，白鳳期のものであり，同期の創建と考えられる。また，寺域内と考えられる地点に瓦窯が存在する。

『和名抄』に，この地域の郷名を拾うと，英賀郷の「中井」「水田」「呰部」がそれに相当する。それ等の細かい郷境を求めることは無理としても，現在に，その地名が残っており，その地名の見られる地域にそれ等の郷名を求めることは可能であろう。つまり「中井」は，「奈加都井」と訓み，現在の中津井を中心とした地域とすることができる。「水田」は「美都多」と訓み，現在の上水田を中心とした地域であろう。「呰部」は「安多」もしくは，「安作」と訓み，現在の，上，下両呰部を中心とした地域とすることができる。谷尻遺跡は古代の郷名では水田郷に相当するものである。

参照文献

松尾惣太郎　新見市史
西川　宏　吉備の国　学生社
岡山県遺跡地図　　岡山県教育委員会
正宗敦夫校訂　倭名類聚鈔口風間書房

谷尻周辺遺跡分布図対照表（表３）

番号	遺　跡　名	所　　在　　地	備　　考
1	蓬原遺跡	上房郡北房町大字上中津井小字蓬原	散布地 土師器片
2	向田遺跡	〃　〃	散布地 須恵器片多数，土師器片
3	蓬原古墳	〃　〃	横穴式石室（片袖式）
4	鷺の花遺跡	〃　〃	集落地 須恵器，土師器片
5	古後路古墳１号（山ノ上塚）	〃　小字古後路	横穴式石室
6	古後路古墳（２号）	〃　〃	横穴式石室
7	間久保古墳	〃　小字間久保	横穴式石室
8	間久保遺跡	〃　〃	散布地 弥生式土器片，須恵器片，土師器片
9	千字山遺跡	〃　小字千字山	散布地 弥生式土器片，須恵器片
10	宇根古墳	〃　小字宇根	横穴式石室
11	矢の内遺路	〃　小字矢の内	祭祀遺跡 高林，つぼ完全品多数，破片も多数採取
12	大塚古墳	〃　小字大塚	横穴式石室 須恵器，高林１，平瓶１
13	上定古墳１号(東)	〃　小字上定	横穴式石室 前方後円墳，陶棺，石棺，陶棺の破片
14	上定古墳２号	〃　小字定字上定	横穴式石室 陶棺片
15	上定散布地	〃　小字上定	散布地 土師器片
16	下定古墳	〃　小字定字下定	横穴式石室 亀甲型陶棺片
17	渡り遺跡	〃　小字定字渡り	散布地 須恵器片
18	大谷遺跡	〃　小字定字大谷	散布地 須恵器，土師器片
19	大谷古墳１号	〃　〃	横穴式石室 須恵質家型陶棺，足数３本８列24本，切石
20	大谷古墳２号	〃　〃	横穴式石室
21	新殿１号墳	〃　小字新殿	横穴式石室㊐
22	新殿２号墳	〃　〃	円墳　径８ｍ　高１～1.5未掘
23	新殿３号墳	〃　〃	円墳　径８ｍ　高0.7～１
24	こうじや遺跡	〃　小字こうじや2072	散布地 須恵器片
25	藤田遺跡	〃　小字藤田	円墳経塚か？
26	宇善寺古墳	〃　〃	散布地 須恵器片，土師器片
27	猿ケ市遺跡	〃　小字藤田字猿ケ市1324	散布地 須恵器片，土師器片
28	猿ケ市１号墳	〃　小字猿ケ市	箱式石棺
29	猿ケ市２号墳	〃　〃	円墳　径５ｍ　高0.8
30	名乞遺跡１号	〃　小字名乞	集落址
31	名乞遺跡２号	〃　〃	散布地 土師片（弥生式）
32	大谷古墳３号	〃　小字定字大宰149	横穴式石室
33	大谷住居跡	〃　小字定字大谷	散布地 土師器片
34	福島遺跡	〃　小字薬師堂3552	散布地 金くそ
35	上犬田古墳	上房郡北房町大字下呰部小字上犬田字塚	消滅

番号	遺 跡 名	所 在 地	備 考
36	八幡前遺跡	上房郡北房町大字下呰部小字丸山八幡前	散布地 須恵器片，土師器片
37	八幡前古墳1号	〃 〃	横穴式石室
38	八幡前古墳2号	〃	横穴式石室
39	八幡前古墳3号	〃	横穴式石室
40	草谷遺跡	上房郡北房町大字阿口小字草谷	散布地 弥生式土器片，土師器片，青磁片
41	へき峠ピット群	〃 小字へき峠	ピット（切通し）
42	清明塚古墳	上房郡北房町大字阿口	横穴式石室 須恵器片，つき1，平瓶3個，高塩1，祭器片，金輪1
43	丸山古墳1号	上房郡北房町大字下呰部小字丸山塚畑	高台付平瓶1，高坏3，坏（蓋身）…3点セット，提瓶2，鐙1，坩1，高台付小型壺1，他に破片，鉄刀1，つば1
44	丸山古墳2号	〃 小字丸山	横穴式石室
45	丸山古墳3号	〃 小字丸山1442	横穴式石室
46	丸山古墳4号	〃 小字丸山	横穴式石室
47	丸山古墳5号	〃 〃	未掘
48	丸山古墳6号	〃 〃	横穴式石室
49	丸山古墳7号	〃 〃	横穴式石室
50	丸山古墳8号	〃 〃	横穴式石室
51	大神遺跡	〃 小字丸山字大神	散布地 須恵器，土師器
52	大神古墳	〃 〃	横穴式石室
53	為家鍛治場	〃 小字丸山字為井	屋敷址
54	万福寺経塚	〃 小字丸山	青銅製経筒（現在は所有不明）
55	上合地遺跡	〃 小字上合地	散布地 土師～中世陶器片
56	上合地古墳2号	〃 小字上合地	前方後円墳49m 須恵器，土師器片
57	カゼチ遺跡	〃 小字上合地后	散布地 須恵器，土師器片
58	アゼチ古墳1号	〃 小字上合地後	円墳（盗掘）
59	アゼチ古墳2号	〃 小字上合地アゼチ	円墳（盗掘）
60	アゼチ古墳3号	〃 小字上合地後	円墳（盗掘）
61	上合地古墳1号	〃 小字上合地后	横穴式石室
62	桃山古墳1号	〃 小字桃山	横穴式石室
63	桃山古墳2号	〃	横穴式石室
64	桃山遺跡	〃	土師，スエ片，弥生式土器被片（49年度発掘調査）
65	角尾遺跡	上房郡北房町大字中津井小字角尾	散布地 土師器片，須恵器片
66	角尾古墳	〃	円墳
67	才田城趾	上房郡北房町大字下中津井小字才田	
68	才田古墳1号	〃	横穴式石室
69	才田古墳2号	〃	横穴式石室
70	才田古墳3号	〃	横穴式石室
71	才田古墳4号	〃	横穴式石室

谷 尻 遺 跡

番号	遺 跡 名	所 在 地		備 考
72	鐘方遺跡	上房郡北房町大字下中津井小字才田		散布地 土師器片，須恵器片
73	才田奥遺跡	〃	〃	散布地 土師器，石器
74	願城寺山古墳1号	〃	〃	経塚？（積石）
75	願城寺山古墳2号	〃	〃	経塚？（積石）
76	願城寺山古墳3 号	〃	〃	経塚？（積石）
77	遠近古墳	〃	小字遠近	須恵器坏，須恵器鴟，須恵器壺，石棺
78	遠近遺跡	〃	〃	散布地 土師器片
79	土井古墳1号	〃	小字土井	横穴式石室
80	才室古墳1号	〃	小字才田	経塚
81	才室古墳2号	〃	〃	経塚
82	土井古墳2号	〃	小字貝原	経塚 破壊
83	才室遺跡	〃	小字才田	散布地 土師器片
84	正木遺跡	〃	小字正木	散布地 須恵器片
85	土井遺跡	〃	小字土井	散布地 土師器，須恵器片
86	土井古墳4号	〃	小字土井峠	横穴式石室
87	土井横穴古墳1号	〃	小字土井	横穴
88	土井横穴古墳2号	〃	〃	横穴
89	土井様穴古墳3号	〃	〃	横穴，須恵器，坏蓋，甕破片，土師器片
90	貝原古墳1号	〃	小字土井貝原	円墳
91	貝原古墳2号	〃	〃	円墳
92	土井古墳3号	〃	小字土井丸山	円墳，須恵器片
93	下村古墳1号	〃	小字下村	横穴式石墳 陶棺破片
94	下村古墳2号	〃	〃	円墳
95	御陵古墳	上房郡北房町大字上水田小字小殿御陵		横穴式円墳
96	小殿奥遺跡	〃	小字小殿	散布地 須恵器片，土師器片
97-1	小殿横穴古墳1号	〃	〃	横穴3.25×1.55
97-2	小殿横穴古墳2号	〃	〃	横穴
97-3	小殿横穴古墳3号	〃	〃	横穴
97-4	小殿横穴古墳4号	〃	〃	横穴
97-5	小殿横穴古墳5号	〃	〃	〃
97-6	小殿横穴古墳6号	〃	〃	〃
97-7	小殿横穴古墳7号	〃	〃	〃
97-8	小殿横穴古墳8号	〃	〃	〃
97-9	小殿横穴古墳9号	〃	〃	〃
98	小殿奥古墳1号	〃	小字尾長柴	円墳
99	小殿奥2古墳号	〃	小字小殿	円墳
100	小殿池奥遺跡	〃	〃	散布地 須恵器片，土師器片

谷　尻　遺　跡

番号	遺　跡　名	所　　在　　地	備　　考
101	小殿奥古墳３号	上房郡北房町大字上水田小字小殿	横穴式石室
102	小殿奥古墳４号	〃　　〃	円墳
103	立古墳１号	〃　　小字立	円墳
104	高尾遺跡	上房郡北房町大字下中津井小字高尾	散布地 須恵器，弥生式土器片
105	高尾古墳１号	〃	経塚？
106	高尾古墳２号	上房郡北房町大字上水田小字小殿	経塚
107	三本松古墳	〃　　小字三本松	円墳
108	三本松遺跡	上房郡北房町大字下中津井小字三本松	集落，弥生式土器（中期～後期）石鏃１（サヌカイト製）
109	立古墳	上房郡北房町大字上水田小上字立	円墳
110	立遺跡	〃　　小字立859	散布地 弥生式土器片，須恵器片
111	小松遺跡	〃　　小字小松	散布地 弥生式土器片，須恵器片
112	荒木山古墳	〃　　小字荒木	円墳
113	荒木城御崎古墳1号	〃　　小字荒木城御崎	前方後円墳62m　竪穴式石室
114	荒木城御崎古墳2号	〃　　〃	前方後円墳40m　東西に主軸
115	荒木古墳３号	〃　　小字宮高	円墳
116	宮迫古墳１号	〃　　小定迫	円墳，箱式石棺
117	宮迫古墳２号	〃　　小字宮迫	横穴式石室
118	郷平古墳１号	〃　　小字宮の前	横穴式石室
119	郷平古墳２号	〃　　〃	横穴式石室
120	宮の前古墳３号	〃　　〃	円墳
121	たわ古墳	上房郡北房町大字下呰部小字　44	須恵器の提瓶，平瓶，壺，石棺
122	山之城古墳群	〃　　山之城	箱式石棺，昭和49年調査
123	塚谷古墳群	〃　　上水田又丸	横穴式石室 陶棺片
124			
125	谷尻遺跡	〃　　〃　谷尻	
126			
127			
128			
129			
130			
131	立古墳１号	上房郡北房町大字上水田小字御崎	前方後円墳（49m）
132	立古墳２号	〃　　〃	円墳
133	立古墳３号	〃　　小字立	円墳
134	立奥池横穴古墳1号	〃　　小字立奥池	横穴
135	小松西池遺跡	〃　　小字小松	散布地 須恵器
136	小松古墳１号	〃　　小字長田	横穴式石室
137	小松古墳２号	〃　　小字小松	円墳

谷　尻　遺　跡

番号	遺　跡　名	所　　在　　地		備　　考
138	小松古墳３号	上房郡北房町大字上水田小字小松		横穴式石室 須恵器片
139	小松古墳４号	〃	〃	横穴式石室
140	小松古墳５号	〃	〃	横穴式石室？
141	小松古墳6 号	〃	〃	円墳
142	小松古墳7 号	〃	〃	円墳
143	小松奥遺跡	〃	小字小松奥	須恵器片，金くそ
144	小松東古墳１号	〃	小字小松	横穴式石室
145	小松東古墳２号	〃	〃	横穴式石室
146	小松寺跡	〃	小字池尻	小布目瓦片
147	小松東古墳３号	〃	小字小松	円墳
148	小松東古墳４号	〃	〃	円墳
149	宮の前古墳１号	〃	小字宮の前	横穴式石室
150	宮の前古墳２号	〃	小字宮の前王子荒神	横穴式石室
151	小松東古墳５号	〃	小字小松	円墳
152	小松東古墳６号	〃	〃	円墳
153	小松　古墳７号	〃	〃	〃
154	御崎東古墳	〃	小字宮の前	〃
155	常の池古墳１号	〃	小字赤田	石棺
156	常の池古墳２号	〃	〃	箱式石棺
157	常の池古墳３号	〃	〃	円墳
158	常の池古墳４号	〃	〃	横穴式石室
159	常の　古墳５号	〃	〃	横穴式石室
160	板谷池古墳４号	〃	小字板谷	円墳
161	板谷池古墳５号	〃	〃	横穴式石室
162	板谷池古墳６号	〃	〃	円墳
163	板谷池古墳２号	〃	〃	横穴式石室
164	板谷池古墳１号	〃	〃	横穴式石室
265	板谷池古墳３号	〃	〃	横穴式石室
166	板谷池遺跡	〃	〃	散布地 弥生式後期土器片，須恵器片，窯，壁片
167	福尾城址	〃	小字福尾	円墳
168	畦の山古墳１号	〃	小字畦の山	〃
169	畦の山古墳２号	〃	〃	〃
170	畦の山古墳３号	〃	〃	土師器片，経塚？
171	畦　山古墳４号	〃	〃	横穴式石室
172	常の池古墳６号	〃	小字常池	円，石棺
173	英賀廃寺跡	〃	小字高倉6440	重孤文軒平瓦片，奈良時代より古い青磁器片，円硯破片，布目平瓦蓮華紋軒丸瓦片

第4章　第一次調査の概要

第二次整備区間の中国縦貫自動車道路コースは，上皆部に源を発し，支流をまとめて東流する備中川に沿って走っている。備中川が旭川に合流する落合町落合より，北房町植木までの間に計９遺跡が用地内に存在した。谷尻遺跡は，そのうちの一つである。

遺跡は，北房，有漢両町の境界をなす山々の支脈が，高さを減じながら備中川沿岸におよぶ**低位台地**（海抜158.8～159.9m）と，その台地と備中川の間に形成された氾濫原である**低地**から成っている。

＜調査経過＞

調査経過は前項でのべたように，延長640m巾40～50mの路線内に７本のトレンチ，19グリッドを設定し調査を行った（第２－２図）。総計971㎡・621.9㎡を掘開する。どの掘開部よりも遺構，多くの遺物が検出された。ただ，４区においては西谷よりの旧河川がのびて，扇状地と化しているため遺構の存在は無であった（表１）。ここでは，（表１）を参考にしていただくと伴に，一次調査時点での要所をのべる。まず，低位台地においては，５区萩原ＫＫ裏の畑地16㎡グリッド内より柱穴10本が検出されるなど，著しく遺構の密度が高いこと。１区，２区，３区においても，各トレンチ・グリッドより住居址，溝，土壙等がみられ，４区をのぞき全面調査の必要性があること。また，低地部においても，１区，２区，３区，６区に遺物包含層がみられた。時に６区低地は，５区より北にのびた低位台地の東側にあり，備中川が５区低位台地西側に激突していた時代には，生活の場として利用していた可能性が考えられる。低位台地もしかりであるが，我々が特に注目したのは，６区低地より検出された，多量の晩期縄文式土器片・打製石斧であった。県北にあって，従来の縦貫道調査例の中にもこれだけまとまっての出土はみられなかった。それだけに，低位台地には，これらを残した人々の生活址を想定した。

第1節　6区の概要（図版51・52）

６区の調査は，22線にグリッド・トレンチ，24線にグリッドを設定し，確認調査を行った。22線のトレンチでは，５区低位台地先端部より約3.5mで旧備中川の河岸がみられ，表土下約1.7m付近より河岸傾斜に沿って砂層があらわれ始める。すなわち，ここでみられた砂層は，ある時期の備中川底に堆積したものであることがわかる。砂層より表土までの基礎層序は，数点の縄文晩期土器片を含む砂層，縄文後期，晩期土器片，石器，弥生前期土器片を含む茶褐色粘土層，弥生中期土器を含む層及び弥生式土器，須恵器等の混在する４層に大別できる。ここで掲載した土器は，砂質上面より約80cm上部までに堆積した茶褐色粘土を中心とする層中より検出したものである。

＜遺物＞（第４図）（図版58－１・２）

早期(1)—茶褐色粘土層下部より出土した灰黒色を呈する押型文土器片である。器内外面に小形の楕円文（0.55×0.22㎝）が施されており，外面は横回転，内面には縦回転がみられる。胎土中には白色砂粒を多く含み，器壁は0.61～0.9㎝の薄いものである。５区表土剝ぎの時点では，やや大形（0.6×0.35㎝），（0.76×0.5㎝）の楕円押型文，及び山形押型文が数点出土している。比較的古式に属する部類であろう。（註１）

後期（２・３・４・５・６）—２は，口縁部に逆U字状に巾1.1㎝の粘土紐が貼り付けられ，その左右に巾0.56㎝，２本の凹線を描く深鉢形の土器片である。外面は暗黄褐色，内面は暗灰色を呈し，内面全体に煤(ススが付着している。胎土中には砂粒を多く含む。３は，口縁端部外面を肥厚して，その部分に巾0.27㎝の斜行する沈線文が施された深鉢形の土器片である。外面は明灰色，内面は灰色を呈し，胎土中には白色砂粒，多量の雲母を含む。４は，垂直な口縁部に巻貝による４本の凹線を施している浅鉢形の土器片である。内外面は暗茶褐色を呈し，胎土中には他の土器と同じく多量の白色砂粒を含む。５は，口縁部に巻貝によって，３本の凹線を施している浅鉢形の土器片である。口縁端部平坦面に沈線が１本みられる。内外面は灰色を呈し，胎土中には多量の白色砂粒を含む。６は，沈線により区画され，**擬縄**文が施されている。内外面は灰色を呈し，胎土は比較的精製された感が強く，小砂粒に限られる。７は，口縁部内側に沈線が一本施された壺形土器片である。内外面は暗黄褐色を呈し，胎土中には白色砂粒を多く含む。

晩期（８・９・10・11・12）—８は，口唇部裏面に粘土紐を貼りつけ，断面はまるみをおびた三角形に肥大させている浅鉢形の土器片である。内外面ともに良く研磨されている。内面は黒色，外面は明灰色を呈し，胎土中には白色砂粒を多く含む。９は，頸部に爪形文，口縁端部に刻目文が施された甕形土器片である。頸部爪形文より下位はヘラ削りが行なわれ，頸部内面は明瞭な稜線がみられる。内面黒色，外面は暗灰色を呈し，胎土中には白色小砂粒を多く含む。10は，頸部に巾広の爪形文を有する深鉢形土器片である。内外面は灰茶色を呈し，胎土中に白色小砂粒を多量に含む。11は，いわゆる突帯文土器である。口縁部に断面三角形の貼付け刻目突帯を，端部に刻目を施した深鉢形土器片である。内面は濃青灰色，外面は灰茶色を呈し，胎土中に白色砂粒を多く含む。12は底部より胴部に向い，ヘラ削りが行なわれており，平底をもつ甕形土器片である。内面は淡青灰色，外面は暗黄褐色を呈し，胎土中には白色黒色小砂粒を含む。

弥生時代前期（13.14）—口縁部が，「く」の字状に折れまがる甕形土器である。口縁端部に，規則的な刻目を，口縁下位には４本のヘラ描きによる沈線がみられ，２線と３線間は刺突が施されている。内面は暗黄褐色，外面は淡灰茶色を呈し，一部に黒斑がみられる。胎土中には，白色砂粒の大が多く目立つ。全体的に荒い胎土である。14は，13と同様の甕形土器である。口縁下位は，破損しており不明である。内面は暗灰茶色，外面は暗灰色を呈し，胎土中には白色砂粒が多量に含まれる。

茶褐色粘土層中には，このように縄文文時代早期・後期（中津式・津雲A式・彦崎KⅡ式？・福田KⅢ）・晩期（原下層式・黒土Ⅰ・Ⅱ式）・弥生時代前期の土器片が断片的ではあるが出土している。とりわけ，縄文晩期土器片の出土数が多く，又，突帯文土器と前期弥生式との混在に興味を注

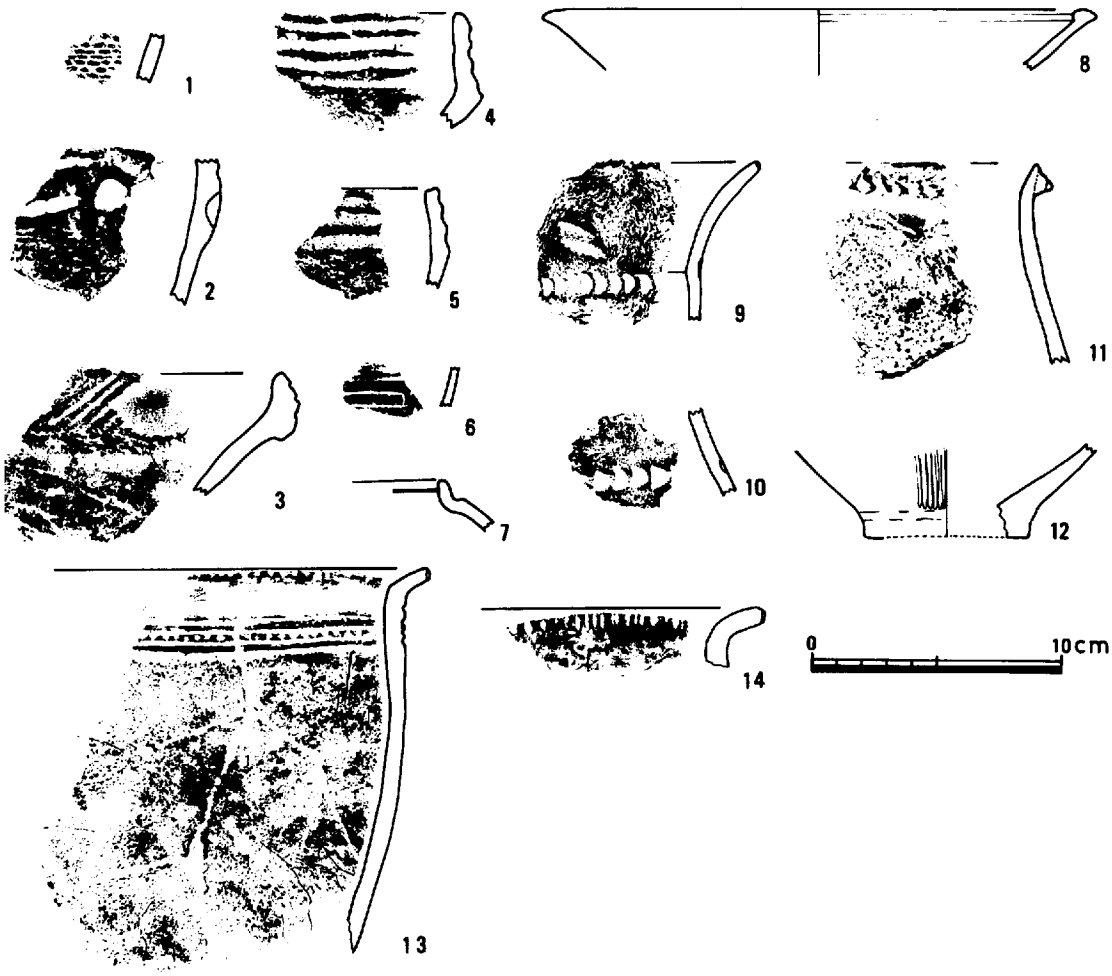
がれた。茶褐色粘土層上面から掘り込まれた溝状遺構も確認され，第二次調査に期待が持たれた。

（註１）間壁忠彦，潮見浩「縄文時代―山陰・中国山地」『日本の考古学Ⅱ』，昭和40年

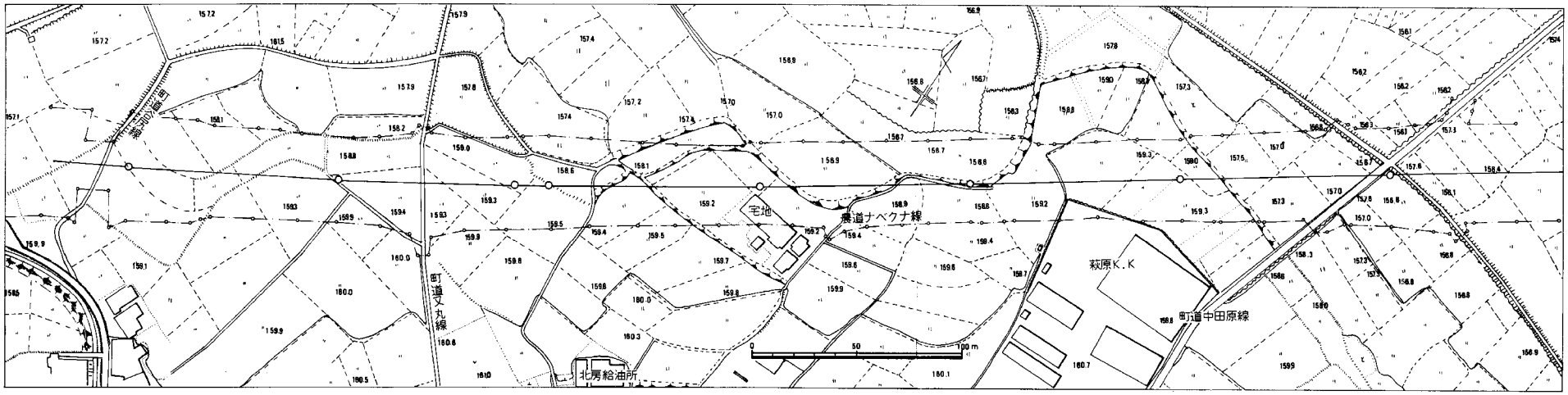
参考文献

鎌木義昌・木村幹夫「中国地方の縄文文化」『日本考古学講座３縄文文化』

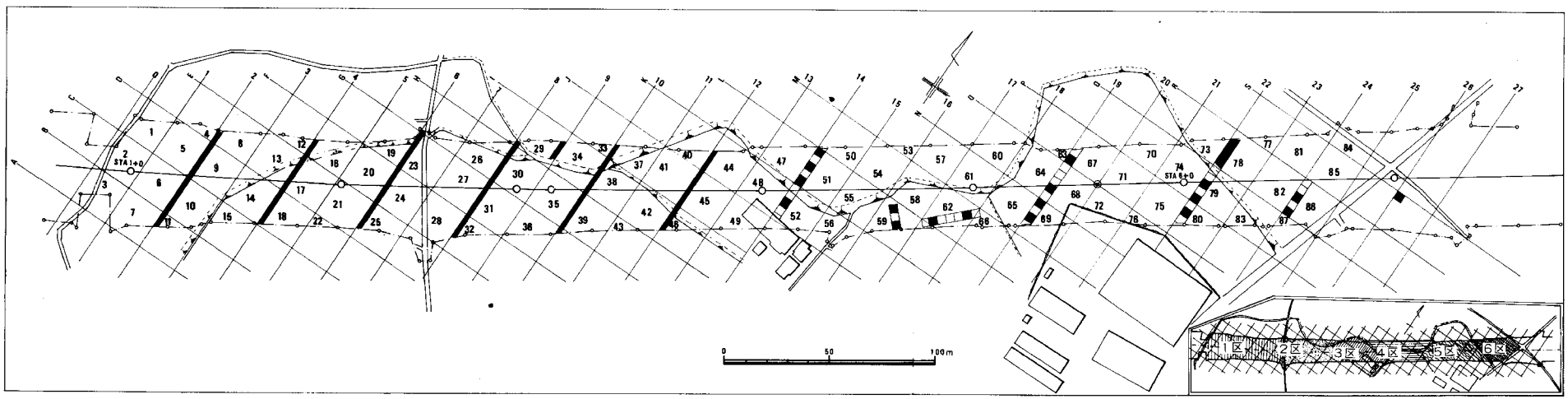
◦土器編年については，県南の型式名をそのまま使用した。一応，形状が類似してる点をとりあげ，地域差，使用時間差については考慮していない。今後，この地域の調査例の増加に伴って考察してゆきたい。



第４図　第１次調査22線トレンチ内出土遺物（S＝$\frac{1}{3}$）



第2－1図　谷尻遺跡周辺地形図，路線図（S＝$\frac{1}{2,000}$）



第2－2図　谷尻遺跡第1次調査トレンチ，グリッド配置図（S＝$\frac{1}{2,000}$）

谷尻遺跡第一次調査結果一覧表（表4）

試掘地	長さ（m）	巾（m）	深さ（m）	面積（m）	備考	遺構	遺物 縄文時代	遺物 弥生時代	遺物 古墳時代	遺物 歴史	その他の遺物	考察
2	55	2	0.65	110	砂利層が多く地表より，1.5m下にて川底が表われており備中川の氾濫と考えられる。 上部台地上は包含層をもっている。			少量	少量	須恵器 擂鉢 土錘		包含層　奈良・平安時代
4	495	2	0.4	99	台地上面は砂利が多い。 地表より35cm下で遺構検出ができる。 （柱穴径約30cm）	柱穴 土壙		壺片 （複合口縁）	壺片	須恵器 杯身（高台） 灯明皿 壺片		古墳時代土拡 奈良，平安期の住穴
6	51	2	0.4	102	台地上面は砂利が多い 土表より40cm下で遺構上面が検出 トレンチ全面に遺構がみられ，台地端においては1m位の巾をもつ包含層がみられる。	土壙（焼土炭） 住居址 包含層 土壙		壺片 （複合口縁）	壺片 須恵器	瓦片 瓦器	昭聖元宝(2)	古墳時代後期の包含層 昭聖元宝をもつ土壙墓（1094）
8	55	2	0.3	110	台地上面は砂利が多い。 地表より30cm下で遺構が検出できる。 トレンチ全面に遺構がみられ，台地端において黒曜石等を含むピット（柱穴）群が集穴している。	柱穴 住居地 包含層 土壙		紡錘	土師器 高坏 コシキ カメ	黒天目 擂鉢	黒曜石 カナクソ	弥生時代の柱穴？ 平安期の住居跡？
9	10	2	0.5	102	氾濫源と考えられる所にトレンチをもうける。 砂利層中に遺物包含。	包含層			古式スエキ 壺杯	備前焼	サヌカイト片	古墳時代後期を含む層
11	4	4	0.2	16	台地上面は砂利が多い。 地表50cm下より遺構面が検出できる。 氾濫源と考えられる所では1m位下で川床砂を検出できる。	溝状遺構 包含層			スエキ片 杯蓋 身，コシキ	灯明皿	サヌカイト片	奈良・平安時代の溝
11	4	4	0.2	16	台地上面は砂利が多い。 グリット設定面では遺構は検出，未確認。	包含層		甕片 少量	須恵器片			弥生時代の包含層
12	46	2	0.4	92	台地上は砂利が多い。 地表40cm下より遺構面が検出できる。 トレンチ全面に遺構がみられる。	土壙 （150×70） 柱穴 包含層		壺片 （複合口縁） ニワトリ形 土製品	須恵器片 杯身 皿	擂鉢	サヌカイト片	古墳時代の土壙
14	48	4	0.3	64	台地上面は砂利が多い。 氾濫源と考えられる所では遺構遺物は未確認。 現在住宅が建っている。	土器だまり 溝状遺構(2) 住穴			高杯脚 杯身	須恵器片 杯身 コシキ（把手）	サヌカイト片	奈良時代土器だまり，建物か？
16～17	12	4	0.8	32	台地レベルは周辺とかわらないが，グリット結果，遺跡北西部西谷よりつづく扇状地と考えられ，下部では常時湧水があり伏流水のようである。 砂利層のみ。	未確認				須恵器 甕片		
17～18	28	4	0.8	32	旧谷端にットがみられる。 砂利層のみ。	ピット(1) （50×50）				須恵器片		北西部より，つづく旧谷部と考えられ遺構は東側岸にみられる。
19	45	4	0.4	64	18～19トレンチ付近より砂利層がみられなくなる。 地表40cm下より遺構上面が検出できる。 グリットの全てより柱穴土壙が密に表われている。	柱穴 土壙 溝状遺構		（複合口縁） 壺	須恵器 杯身	須恵器 杯	サヌカイト片 石鏃	弥生期の建物が考えられる それも密集！　土壙墓？
22	49	4	2	80	台地部は19トレンチと同じく遺構がみられる。 氾濫激，低部には18～20層位がみられ，遺物及び遺構面がある。	溝状遺構 土壙墓 柱穴 包含層	浅鉢 甕 壺形土器	無頚壺 壺	須恵器片 杯蓋	カナクソ 須恵器片 壺片	サヌカイト片多数 黒曜石片 石鏃(5) 石斧（鍬）(1)	低地部において縄文早期，後期，晩期及び弥生前期，中期，後期，土器，石器が層位的にとらえられる。土器，石器の編年の作成が可能と考えられる。 縄文包含層上に溝状遺構がみられる（弥生期）
24	20	4	2	32	22氾濫激と同じ。 3m位下で木が出土している。 非常にねばい土質である。	包含層 木	浅鉢	高杯？	須恵器片		サヌカイト片 石斧（鏃）(1)	
25	4	4	1	16	砂利が多い。 地表1m位下にて遺構が検出できる。 湧水がある。	溝状遺構(3)		高杯？	須恵器片	須恵器片	カナクソ	弥生期の溝

第5章 第二次調査の概要

第1節 遺 跡 の 概 要

遺跡を町道，海抜比高により，便宜上6調査区に別けて調査を行った。低位台地を全面調査，低地はトレンチ調査を実施し，総数283遺構を検出した。住居址49軒，掘立柱建物38軒を数える非常に密度の高い遺構分布を示した。これらを大別すると，縄文時代晩期の土壙，弥生時代後期の土壙墓，古墳時代前半・後半（須恵器を含む）の住居址，そして，中世建物群の展開に及んでいる。

＜1 区＞

遺跡西端の町道谷尻線より，町道又丸線までの間約155m×45mを仮称した。低位台地と備中川氾濫原である低地から成り，かって台地西端は北流してきた備中川が，東に流れを変えて進む屈折部にあたる。台地は北に向かってゆるやかな傾斜をもっている。低地は，第一次調査にしたがい，トレンチ調査にとどめた。遺構は，台地全面に分布し，古墳時代前半・後半の住居址19軒，中世掘立柱建物12棟，灯明皿・古銭を持った土壙3基，土壙墓7基，その他土壙6，中世溝状遺構2，方形周溝状遺構1，縄文時代晩期土壙1と柱穴多数を検出した。古式の須恵器をもつ住居址はこの地区に集中している。

＜2 区＞

町道又丸線よりSTA3＋45付近の遺跡を横断する農道まで約130m×40mを仮称した。

1区と同様に台地と低地からなり，備中川がSTA3＋20センター杭付近まで蛇行し，入りこんだ痕跡をとどめている。この部分が北に開口する浅い谷の谷頭にあたる。台地はこの谷頭より，又丸線北東隅谷頭に向ってゆるやかな傾斜をもっている。低地は，砂層を検出した時点でトレンチ調査にとどめた。

遺構は，1区同様台地全面に分布し，周溝をもつ大形住居址を含めて，住居址6軒，中世掘立柱建物10軒（調査後，図の上で作成6棟），人骨・灯明皿・古銭・刀等を持つ土壙墓5基，土壙10，大形土壙2（1つは池状遺構），弥生時代後期土壙4，古墳時代前半・後半の溝3，焼土面1，縄文時代晩期土壙1，柱穴列1と柱穴多数を検出した。遺物として，縄文時代後期前半土器片が表土中より検出されている。

＜3 区＞

STA3＋45センター杭付近農道より，大きく開口する谷頭STA4＋20センター杭まで，約65m×巾40mを仮称した。

1・2区同様に台地と低地からなる。ここでは2区以上に氾濫原が入り込んでいるが，その蛇行により2区・4区間に残った北に延びる台地部分全面に，遺構が分布している。№221住居址周辺が宅地に利用されていたため，遺構保存度が高く，他は削平を受けている。弥生時代後期，古墳

時代前半・後半住居址10軒，掘立柱建物６棟（奈良期のものを含む），土壙13，焼土をもつ土壙１，石組遺構１基，袋状ピット２，縄文時代晩期土壙１，台地周辺を廻る古墳時代前半・後半の溝２，その溝にそそぐ溝２，と柱穴多数を検出した。掘立柱建物は，比較的規則性をもつのがみられたが，柱穴中に遺物を伴なわず，時期不明のものが多い。この地区では，灯明皿等の１・２区にみられた遺物が検出されてはいない。№212掘立柱建物は，表土剝ぎ時点で，円面硯小破片を採集しており，奈良期の可能性を呈している。

＜4　区＞

ＳＴＡ40＋20農道ナベクナ線付近より，谷の東肩口にあたるＳＴＡ５＋15まで約110m×巾40mを仮称した。４区も外面上は１・２・３区同様の地形を呈していた。備中川氾濫原がセンター杭より南側まで深く侵入しており，下部まで砂利堆積を確認した，第--次グリッド調査にとどめた。台地も，遺構は検出されなかった。これは，北房・有漢両町境をなす分水領より延びた西谷が，さらに延長して，かって北西に開口していた谷であることがわかり，グリッド調査のみにとどめた。すなわち，３区北東部がそれぞれ，西谷の肩口にあたり，扇状地と化しているわけである。調査時も低地は湧水がみられた。

＜5　区＞

ＳＴＡ５＋15の谷肩部より，北にのびた舌状台地が，町道中田原線にぶつかるＳＴＡ６＋15まで約100m×巾35mの台地を仮称した。

調査前にも注目された場所であり，第一次調査でも，しかりであった。東流する備中川が激突し北に流れをかえる台地全面に遺構は分布する。近世の農業用暗渠，排水溝が多く，各所で遺構が分断されていた。台地は北に向ってゆるやかに傾斜している。

遺構は，弥生時代後期・古墳時代前半・後半の住居址24軒，掘立柱建物16棟（２棟は住居址柱穴のみか），弥生時代後期土壙墓60基，灯明皿等を持った土壙10基，水晶剝片・山形押型文を伴出した縄文時代早期土壙１，小口板痕跡をもつ土壙墓８基，近世井戸状遺構２と柱穴多数を検出した。№316・№315・№341建物を囲むＬ字状の溝に柱穴を伴う柵状遺構が出土している。ここでは奈良期の高台付杯が，表土剝ぎ時点で採集されている。

＜6　区＞

ＳＴＡ６＋15付近５区台地裾より，町道中田原線までの間70m×40mを仮称した。５区舌状台地に激突して北流した備中川が，その台地裾にそって移動し，４区以上に東に侵入している。現真庭消防組合北房分駐署付近より，英賀廃寺をのせる台地裾にそって，川崎地蔵ケ渕に至っている。

遺構は，茶褐色粘土層から掘り込んだ東西に走る溝状の遺構が検出された。溝底は，水平を保ち，砂が多く堆積していた。溝中より縄文時代後期・晩期土器片が少量出土している。

№102住居址出土遺物（第６図）

住居内床面には遺物が検出できなかった。№104住居を造る際に削平されたのであろう。遺物は中央ピット内より数点出土したものである。１は，口径15cmを測る壺形土器片である。焼成，胎土ともに良く口縁端部に平坦面を有する。２は，口径15cm，器高約13.5cmを測り，精製された粘土で

遺 構 一 覧 表 （表５）

遺構番号	種類	地区	発掘担当者 ○印は報告書担当	図番号	図版番号	時期	備考
1	土壙	5	高畑				灯明皿
2	土壙墓	5	高畑		50－1		小口板痕跡
3	建物	5	高畑				（２×２）
4	土壙墓	5	高畑		48－1		土壙内中央にピット
5	土壙	5	竹田				備前焼
6	土壙墓	5	高畑		50－1 50－2		小口板痕跡
7	住居址	5	高畑			６Ｃ後半	近世溝に分断
8	建物	5	高畑				柱穴より元豊通宝出土 （５×２）
9	建物	5	高畑		47－1		No.８と通交
10	土壙墓	5	高畑				鉄製品
11	住居地	5	高畑		49－2		カマド？
12	建物	5	高畑				（２×２） No.13と重複
13	建物	5	高畑				（２×２）
14	住居跡	5	高畑			６Ｃ中葉	
15	土壙墓	5	高畑				小口板痕跡
16	土壙墓	5	高畑				小口板痕跡
17	土壙	5	高畑				小口板痕跡
18	住居跡	5	高畑				柱穴なくベッド状遺構
19	土壙	5	高畑				
20	土壙	5	高畑				
21	土壙墓	5	高畑				
22	土壙	5	高畑				
23	土壙	5	高畑				
24	溝状土壙	5	高畑				無遺物
25	溝	5	高畑				
26	住居址	5	高畑			弥生時代中期	
27	土壙	5	高畑				
28	土壙	5	高畑				
29	土壙	5	井上				
30	土壙	5	○竹田		49－1	弥生時代後期	
31	土壙墓	5	高畑				
32	溝状遺構	5	高畑				
33	住居跡	5	高畑		43－1		
34	住居跡	5	高畑				

遺構番号	種類	地区	発掘担当者 ○印は報告書担当	図番号	図版番号	時期	備考
35	土壙	5	高畑			水晶利片出土	
36	土壙（住）	5	高畑		43－2	弥生時代中期	
37	土壙	5	竹田			灯明皿	
38	土壙	5	竹田				
39	土壙	5	竹田				
40	土壙	5	竹田				
41	土壙	5	竹田				
42	土壙	5	竹田				
43	土壙(井戸)	5	高畑				
44	土壙	5	竹田				
45	土壙	5	竹田				
46	炉跡	5	竹田				
47	土壙	5	竹田				
48	土壙	5	井上				
49	土壙	5	井上				
50	土壙	5	栗野				
51	土壙	5	井上				
52	土壙	5	井上				
53	土壙	5	井上				
54	土壙	5	井上				
55	土壙	5	井上				
56	土壙	5	栗野				
57	土壙	5	栗野				
58	土壙	5	栗野				
59	土壙	5	井上				
60	土壙	5	井上				
61	土壙	5	井上				
62	土壙	5	井上				
63	土壙	5	井上				
64	土壙	5	井上				
65	土壙	5					
66	土壙	5					
67	住居跡	5	栗野		44－1 44－2		
68	土壙	5	竹田				
69	土壙	5	竹田				
70	土壙	5	竹田				

遺構			発掘担当者	図	図版	
番号	種類	地区	○印は報告書担当	番号	番号	時期 備考
71	土壙	5	井上			
72	土壙	5	井上			
73	土壙	5	栗野			
74	土壙	5	栗野			
75	土壙	5	井上			
76	住居地	5	栗野			
77	土壙墓(長方)	5	栗野			
78	土壙(円)	5	栗野			
79	土壙	5	栗野			
80	土壙	5	栗野			縄文
81	土壙	5	栗野			
82	土壙	5	栗野			
83	土壙	5	栗野			
84	土壙	5	栗野			
85	凹み	5	栗野			浅い凹み
86	土壙	5	井上			
87	土壙	5	井上			
88	土壙	5	井上			
89	住居址	5	井上		46—2	炉址
90	住居址	5				
91	土壙	5	井上			
92	土壙	5	井上			
93	土壙	5	井上			
94	住居址	5	井上			
95	住居址	5	井上			
96	土壙	5				
97	土壙	5				
98	土壙	5	井上		上	縄文(押型文)水晶片
99	住居址	5	井上		45—1	
100	土器溜り	1	高畑	第8図		
101	溝	1	高畑・竹田			備前焼
102	住居址	1	高畑・竹田	第6図	5—1	No. 104に切られている
103	黒色土溜り	1	高畑・竹田			
104	住居址	1	高畑・竹田	第7図	$\frac{5}{5}-\frac{1}{2}$	
105	土壙	1	高畑			水田により切られている
106	溝状土壙	1	○高畑	第8図	8—2	

遺構番号	種類	地区	発掘担当者 ○印は報告書担当	図番号	図版番号	時期	備考
107	住居址	1	○高畑	第9図 第10図 第11図	6－1 6－2 7－1 7－2 8－1		カマド
108	住居址	1	○高畑	第12図			No107に切られている
109	住居址	1	○高畑	第9図 第11図 第13図	9－1 9－2		4軒の復合か？
110	住居址	1	高畑				
111	土壙	1	高畑				
112	住居址	1	高畑				半分用地外
113	土壙	1	山磨				
114	建物	1	高畑				109北側
1115	住居址	1	山磨	第14図	11－1		半分田により削られている
116	住居址	1	山磨				
117	建物	1	高畑				
118	建物	1	高畑				
119	建物	1	高畑				
120	住居址	1	山磨	第15図	10－1		縄文晩期・土壙を切って造っている
121	建物	1	高畑				
122	建物	1	高畑				
123	建物（柱穴列）	1	高畑				
124	建物	1	高畑				
125	土壙	1	高畑				
126	土壙	1	高畑				
127	土壙	1	高畑				
128	土壙	1	高畑				
129	建物	1	高畑				
130	縄文晩期（土壙）	1	山磨（○高畑）	第16図～18図	13-1.2 14-1.2 15-1.2 16-1.2		原下層類似，より古か
131	建物		高畑				112と方向を同じくする
132	土壙墓	1	高畑				田24，人歯
133	土壙墓	1	高畑				
134	土壙墓	1	高畑				
135	土壙墓	1	高畑				
136	土壙墓	1	高畑				
137	土壙墓	1	高畑				
138	土壙墓	1	高畑				
139	土壙	1	高畑				焼土，臀明皿　灯明

谷 尻 遺 跡

遺構			発掘担当者	図	図 版	
番号	種 類	地区	○印は報告書担当	番 号	番 号	時 期 備 考
140	住 居 址	1	○高 畑	第19図	11－1 12－1	床面２面
141	住 居 址	1	高 畑		11－1	
142	住 居 址	1	山 磨			No.115を切っており 141に切られている
143	溝状遺構	1	高 畑			
144	土壙（墓）	1	高 畑			木質部土師小皿片
145	土 壙	1	高 畑			土師質小皿多，元豊通宝出土
146	住 居 址	1	○高 畑	第20図	12－2	２本柱
147	住 居 址	1	高 畑			No141の床面下より出土
148	住 居 址	1	高 畑			No.115付近下 （中央ピット及び配合ピットをもつもの）
149	住 居 址	2	高 畑	第22図	19－1	焼土，須恵器をもつ
150	土壙（墓）	2	高 畑			土師質坩出土
151	土 壙	2	高 畑			半分削平，備前焼
152	住 居 址	2	高 畑		19－2	
153	建 物	2	山 磨	第23図	30－1	
154	土 壙	2	山 磨			焼土炭　土，炭
155	建 物	3	山 磨	第24図	30－1	備前焼
156	土 壙	2	山 磨			焼土，炭
157	建 物	2	山 磨		30－1 30－2	No158と真交　直
158	建 物	2	山 磨		30－1 30－2	No157と直交
159	土 壙	2	山 磨			備前焼
160	土壙墓	2	山 磨		29－1	
161	土壙墓	2	山 磨			宗寧通宝，人骨，刀
162	土壙墓	2	山 磨			
163	土壙墓	2	山 磨			
164	土壙墓	2	山 磨		29－1	人骨，歯，灯明皿
165	溝	2	山 磨		29－2	甑多
166	土 壙	2	山 磨			
167	土 壙	2	山 磨			
168	土 壙	2	山 磨			
169	土 壙	2	高 畑			
170	土 壙	2	山 磨			
171	土 壙	2	山 磨			
172	土 壙	2	山 磨			
173	焼 土	2	高 畑			
174	土 壙	2	○高 畑	第25図 第26図		
175	土 壙	2	高 畑			

遺構			発掘担当者	図	図版	
番号	種類	地区	○印は報告書担当	番号	番号	時期 備考
176	土壙	2	○高畑	第27図～31図	25—1 25—1 26—1	
177	溝	2	○高畑	第35図 第36図	27—1 27—2 28—1 28—2	
178	住居址	3	○山磨	第44図 第45図	32—1 32—2	方形ベッド付
179	住居址	3	○山磨	第46図 第47図	31—1	
180	住居址	3	山磨		35—1 35—2	カマド有
181	建物	3	山磨		34—1	
182	建物	3	山磨			
183	溝	3	山磨		36—1 36—2	南北溝
184	溝	3	山磨			183に付属する溝
185	溝	3	山磨		37—1 37—2	北端東西溝新
186	溝	3	山磨		37—2	北端東西溝旧
187	溝（状）	3	山磨			
188	建物	3	山磨		35—1	住居址，180建物，181と重復 複
189	建物	3	山磨			建
190	住居址	2	○高畑	第32図～34図	20—1 20—2	火災
191	住居址	2	○高畑	第37図 第38図	21—1 21—2 23—1 24—2	巴形銅器出土
192	溝	2	○高畑	第37図～第42図	21—1 22-1.2 23—2 24—1	
193	溝	2	高畑			
194	溝	2	高畑			
195	住居址	2	高畑			
196	土壙	3	山磨			
197	土壙	3	山磨			
198	土址	3	山磨			
199	土壙	3	山磨			炉に伴うPit
200	土壙（長方形）	3	山磨			
201	土壙	3	山磨	第48図 第49図	38—1	縄文式土器出土
202	袋状ピット	3	山磨		39—2	
203	袋状ピット	3	山磨		38—2	
204	住居址	3	山磨		33—2	新，方形の最小
205	住居址	3	山磨		33—2	中，方形の中間
206	住居址	3	山磨		33—2	旧，方形の外側
207	住居址	3	山磨		33—1	

遺構番号	種類	地区	発掘担当者 ○印は報告書担当	図番号	図版番号	時期	備考
208	土壙	3	山 磨				
209	土壙	3	山 磨		40－1		石組みピット
210	溝	2	高 畑				
211	溝	2	高 畑				
212	建物	3	高 畑		34－2		
213	土壙	3	高 畑				
214	建物	3	山 磨				
215	土壙	3	山 磨				
216	土壙	3	山 磨				長円形217，218と接する
217	土壙	3	山 磨				切り合い 旧
218	土壙	3	山 磨				切り合い 新
219	土壙	3	山 磨	第50図 第51図	39－1		
220	土壙	3	山 磨				
221	住居址	3	高畑・中野		34－2		脇田家下の住居址
222	住居址	3	高畑・中野				
223	土壙	3	高畑・江見	第52図			
301	住居址	5	江見・中野		46－1		
302	住居址	5	井 上				2軒あり（A，B）
303	？	5	井 上				
304	土壙墓	5	井 上				
305	土壙墓	5	井 上		48－2		小口板溝
306	住居址	5	井 上				
307	土壙	5					
308	土壙	5					
309	土壙	5					
310	住居址	5					No.95住居址に切られている
311	建物	5	井 上				
312	建物	5					
313	建物	5	井 上				
314	建物	5	井 上				
315	建上	5	井 上				
316	建物	5	井 上				
317	建物	5	井 上				
318	建物	5	井 上				
319	住居址	5	井上・江見				柱穴4本
320	建物	5	井 上				

遺構番号	種類	地区	発掘担当者 ○印は報告書担当	図番号	図版番号	時期	備考
321	土壙	5					縄文，水晶片
322	土壙	5					
323	土壙	5					
324							
325	土壙	5					
326	土壙	5					
327	土壙洛	5					
328	土壙	5					
329	土壙	5					
330	土壙	5					
331	土壙	5					
332	土壙	5					
333	土壙	5					
334	土壙	5					
335	住居址	5					
336	土壙	5					
337	土壙	5					
338	土壙	5	○栗野		45—1		
339	土壙	5	○井上				
340	建物	5	○井上				
341	建物	5	○井上				
342	建物	5	○井上				
343	建物	5					
344	溝	6					

谷尻遺跡住居址一覧表（表7）

（単位 cm）

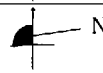
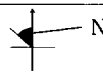
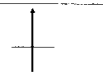
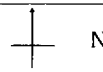
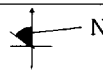
住居址＼細別	種類	形	規模（cm） 長軸	規模（cm） 短軸	床面積（㎡）	主柱穴	距離（cm） 北辺(A)	東辺(B)	南辺(C)	西辺(D)	中央ピット プラン	中央ピット 巾	中央ピット 深 cm	焼土 焼土	焼土 壁	壁体溝	付属施設 ベット状イコウ	付属施設 貯蔵穴	付属施設 カマド	付属施設 位置	柱穴長軸方向	時代	区	遺物
No. 7 (H－1)	竪穴式	正方形	423	423	17.8929	4	210	－	－	275	不明	－	－	○	－	○	－	－	？○	東	N－12.7°－E 167.3W	古墳後半	5	須恵器（高杯） 土師器（カメ）
11 (H－2)	竪穴式	方形	820	670	54.94	4	340	465	366	465	－	－		2カ所○	40×40 中央○	－	－	－	焼土2の1つか？○	北	N－10.05－W	古墳後半	5	須恵器（杯） 土師器（ワン）
14 (H－3)	竪穴式	方形	654	558	36.4932	4	320	270	314	280	不明	－	－	－	－	－	－	－	－	－	N－61.2°－W	古墳後半	5	須恵器（杯身）
18 (H－4)	竪穴式	方形	183	168	3.0744	－	－	－								○	○	－	－	－	N－50°－W	弥生時代	5	石
26 (H－5)	竪穴式	円形	480		480	4	200	255	215	215	長楕円	93×85	27	－	－	○	－	－	－	－	N－13°－E 167°－W	弥生中期～後期	5	弥生式土器（つぼ）
33 (H－6)	竪穴式	方形	360	320	11.52	2	133	－	－	－	－	－	－	－	70×70 ○	○	－	？	？	東	N －5.5°－W	古墳前半	5	土師器
34 (H－7)	H6参照 一部残存 竪穴式	方形	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－			5	無
67 (H－8) A	竪穴式	円形	875		875						○	60×50	52	－	－	○	－	－	－	－	N－46°－W	弥生後期	5	弥生式土器（つぼ）
(H－8) B	〃	円形	660		660		再検訂				○	65×40	55	－	－	－	－	－	－	－				〃（高杯）
89 (H－9)	竪穴式	方形	540	440＋α	23.76＋d	2＋α	－	－	－	300	－	－	－	西○	－	－	－	－	？	－	N－32°－E	古墳時代	5	
90 (H－10) A	竪穴式	方形	636＋α	628？	39.9408＋d	4	－	446	360	－	－	－	－			－	－	－	？	－	N－13.9°－W	古墳後期	5	
(H－10) B	〃	方形	460	470	21.62	4	230	230	220	220	－	－	－	○	－	○	－	－	？	南？	N－13.5°－W	古墳時代		
94 (H－11)	竪穴式	方形	435＋α	175＋α	7.6125＋d	1 (4)	－	－	－	－	不明	－	－	－	－	○	－	－	－	－	－	古墳後半	5	須恵器 土師器
95 (H－12)	竪穴式	方形	480＋α	200＋α	9.68＋d	2 (4)	－	－	240	－	－	－	－	－	－	○	－	－	－	－	不明	古墳時代	5	
99 (H－13) A	竪穴式	方形	460＋α	490＋α	22.54＋d	4	280	286	255	280	不明	－	－	北○西	－	○	－	－	－	－	N－43°－W	不明	5	
(H－13) B	〃	方形	450＋α	430＋α	19.35＋d	4	200	180	190	180	不明	－	－	北○西	－	○	－	－	－	－	N－42.4°－E	不明		
102 (H－14)	竪穴式	隅丸方	560	550＋α	30.8＋d	4	265	273	252	252	長方形○	56×36	35	中央ピット構○	－	○	－	楕円○	－	－	N－38.5°－E 141.5W	古墳前半	1	土師器
104 (H－15)	竪穴式	（大形）方形	570	500	28.5	4	226	250	215	265	－	－	－	－	50×50 円形②	○	－	2 長方形○	－	－	N－3°－E N177W	古墳前半	1	土師器
107 (H－16)	竪穴式	方形	400	360	14.4	2		8 8 185			－	－	－	－	－	－	－	－	○	北西	N－43°－E	古墳後半	1	須恵器 土師器

細別 / 住居址		種類	形	規模(cm) 長軸	規模(cm) 短軸	床面積(㎡)	主柱穴	距離(cm) 北辺(A)	東辺(B)	南辺(C)	西辺(D)	中央ピット プラン	巾	深 cm	焼土 焼土	焼土 壁	壁体溝	付属施設 ベット状イコウ	貯蔵穴	カマド	位置	柱穴長軸方向	時代	区	遺物
No. 108 (H−17)		竪穴式	隅丸方形	500+α	510	25.5+d	4	230	230	230	230	○	50×45	31	—	120×45 (炭拡) ○	○	4辺 ○	—	焼土 北隅 ○	北	N−56°−E	古墳前半	1	土師器
109 (H−18)	A	竪穴式	方				4	300	305	305	300	—	—	—	○		○	—	○	不明			古墳時代		須恵器（杯身蓋）
	B	〃	方												○		○	—	○	不明			古墳後半	1	須恵器（〃）
	C	〃	方				4	230	220	235	235	○	60×35	50	○		○	—	○	不明			〃		須恵器（〃）
110 (H−19)		竪穴式	隅丸方形	60+α	550	33.0+d	4	296	378	312	372	?	—	—	—	—	—	—	—	—	—	N−20°−W	古墳後半	1	須恵器 土師器
112 (H−20)		竪穴式	方形	100+α	460+α	4.6+d	? (4)	—	—	—	—	—					○	—	○	—	—	N−?−W	古墳前半	1	与位調査、用地外
115 (H−21)		竪穴式	方形	490	450	22.05	4	205	205	206	208	○	円 35×35 ○		○		○	2段 ○	? —	—	—	N−?−W	古墳前半	1	主柱穴不明、北半分水田により破壊、土師器
116 (H−22)		竪穴式	円形	730		730	8					○	円 50×50 ○	34	?	?	○	—	—	—	—	N−29°−W	古墳前半	1	
120 (H−23)		竪穴式	方形	330	325	10.725	2	150				炉	—	—	—	30×30 ○	○	—	楕円 ○	—	—	N−42° E W ?	古墳前半	1	
140 (H−24)		竪穴式	方形	460	430	19.78	2	172															古墳後半	1	須恵器（杯蓋） 〃（高杯）
141 (H−25)		竪穴式	方形	820	760+α	62.32+d	4	—	—	446	—	—											古墳前半	1	カメ
142 (H−26)		竪穴式					4	295	258	262	260												古墳前半	1	プラン？ 水田削平により
146 (H−27)		竪穴式	隅丸方形	485	388	18.818	2			205		—	—	—	—	—	○	—	90×75 方 ○	—	—	N−53.5°−E 126.5W	古墳前半	1	粘土
147 (H−28)		竪穴式	方形	560+α	605	33.88+d	(4)	300	300	300	300	—	—	—	—	—	○	—	方形 3	—	—	N−45.5°−W	古墳前半	1	北半分水田削平
148 (H−29)		竪穴式	(台) 方形					246	255	260	265	○	55×45 ○	70 ○	○	—	○	—	—	—	—	?	古墳前半	1	プラン 削平により不明
149 (H−30)		竪穴式	(台) 方形	425	425	18.0625	4	185	195	190	195	—	—	—	—	130×80 ○	○	—	—	○	北辺	N−24.5°−W	古墳前半	2	須恵器 土師器
152 (H−31)	A	竪穴式	方	660	660	43.56	4	370	357	365	380	—	—	—	—	○	○	○	② ○	—	—	N−48°−E 132W	古墳前半	2	
	B	竪穴式	方				4	310	300	310	315	—	—	—	—	○	○	—	○	—	—		古墳前半		
178 (H−32)		竪穴式	方形	500	455	22.75	4	293	290	260	283	上下 方円 ○	35×45 ○	44	—	—	○	周辺 ○	—	—	—	N−49°−E 131W		3	

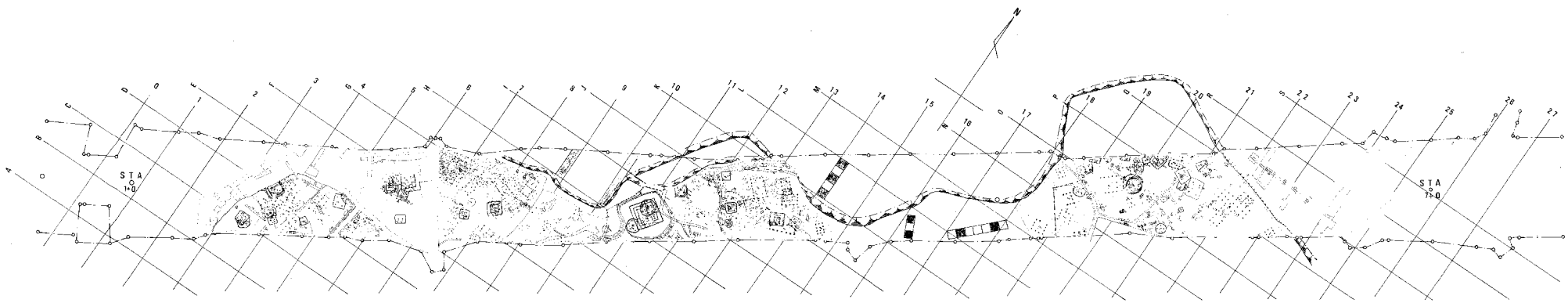
細別 / 住居址		種類	形	規模(cm) 長軸	規模(cm) 短軸	床面積(㎡)	主柱穴	距離(cm) 北辺(A)	距離(cm) 東辺(B)	距離(cm) 南辺(C)	距離(cm) 西辺(D)	中央ピット プラン	中央ピット 巾	中央ピット 深cm	焼土 焼土	焼土 壁	壁体溝	付属施設 ベット状イコウ	付属施設 貯蔵穴	付属施設 カマド	付属施設 位置	柱穴長軸方向	時代	区	遺物
No. 179 (H－33)		竪穴式	卵形 円	365	300	11.68	4	180	165	173	173	くわ形 坊ド円	40×40	35	－	－	○	－	－	－	－	?		3	
180 (H－34)		竪穴式	(長) 方形	373	330	11.89	2	143				－	－	－	－	－	○	－	?	○	北西	N－40°－E	古墳後半	3	須恵器 土師器
190 (H－35)		竪穴式	不整形 円	610	600	36.6	6	284	195	250 180	305 275	○	110×95	35~40	○	焼土盤	○	－	－	－		N－21°－W	古墳前半	2	土師器、カメ壺、器台 低脚杯、鉢
191 (H－36)		竪穴式	方形	12.30	1,140	140.22	4	630	660	660	660	○			○	○	○	○	○	－	－	N－52°－W	古墳前半	2	土師器、カメ、高杯
195 (H－37)		竪穴式	円	765	670	51.253	7	A 240 E 210	B 270 F 280	C 290 G 300	D 210	(7) ○	70×70	60	－	－	○	－	－	－	－	N－5°－E 175W	古墳前半	2	砥石
204 (H－38)		竪穴式	長方形	不明	332	－	－																	3	
205 (H－39)		竪穴式	方形			－																		3	
206 (H－40)	A	竪穴式	円	580																				3	
	B	〃	方																						
207 (H－41)		竪穴式	正方形	398	398	13.8404	不明 ?								○	○								3	
221 (H－42)		竪穴式	方形	644	555	35.742	4	240	208	254	189	中央 くぼみ	－	－	－	－	○	－	上方 下円 ○	?		N－36.5°－E 116.5W	古墳	3	
222 (H－43)		竪穴式	方形	400+α	480+α	19.2+d	4	252	275	236	257	○	50×60	32	－	－	○	－	－	－		N－4°－E 176W	古墳?	3	
301 (H－44)		竪穴式	方形	324	295	9.5580	2	75				－	－	－	－	－	○	－	－	－	－	N－45°－E 135W	古墳前半	5	
302 (H－45)	A	竪穴式	方	605	577	34.9085	3+(1)		366	349		○ (2)	84×58	32	○	－	○	○	?	－	－	N－97°－E 83W			H－1参照
	B	〃	方	472	350	16.46	3+(1)		125	232	－	－	－	○	○	○	－	－	坊 ○	－	－	N－76°－W	古墳		
306 (H－46)		竪穴式	方形	445	440	19.58	4	211	254	219	253	－	－	－	－	－	不明	－	－	－	－	N－29.2°－W		5	
310 (H－47)																									
319 (H－48)																									
335 (H－49)																									

谷尻遺跡建物計測値一覧表（表6）

建物	規模	柱間寸法（cm） 桁	柱間寸法（cm） 梁	桁行（cm）	梁間（cm）	面積（㎡）	棟方向	柱穴掘方	検出地区	備考
No. 3 T-1	2×2間	166～192	151～162	349～363	307～322	11.3	24.5° 北東 N 24.5° E 南北棟	円形	5区	
8 T-2	5×2	171～216	196～218	948～952	414～416	39.4	9.25° 北々東 N 9.25° E 南北棟	円形	5	柱穴内より古銭出土
9 T-3	6×2	208～283	210～232	1481～1488	440～457	66.6	100° WE N 100° E 東西棟	円形	5	
12 T-4	2×2	270～297	176～196	541～570	368～392	21.1	N-79°-W 東西棟	円形	5	No.13と重複
13 T-5	2×2	163～201	138～179	342～371	303～340	11.5	N 10° E 南北棟	円形	5	
114 T-6	3×2	161～173	223～241	507～514	462～460	23.1	N 75° W 東西棟	円形	1	No.118と切り合う
117 T-7	2×2	264～282	194～217	532～548	406～422	22.9	N 30° E 南北棟	円形	1	
118 T-8	2×2	310～315	215～220	620～625	435～445	27.4	N 95° W (N85° E) 東西棟	円形	1	No.114, No.119と切り合う
119 T-9	2×2	304～306	262～269	607～611	524～536	32.2	N 97° W 東西棟	円形	1	No.118, N 1230と切り合う
121 T-10	2×2	171～176	150～171	345～352	315～326	11.0	N 6.5° W 南北棟	円形	1	
122 T-11	2×2	250～254	247～248	500～506	491～495	24.8	N 9° E 正方形	円形	1	No.120と切り合う
123 T-12	2×1	213～234	220～226	441～447	220～226	9.9	N 8° E 南北棟	円形	1	No.119と切り合う
124 T-13	2×1	318～347	282～295	656～668	282～295	19.1	N 50° E 東西棟	円形	1	不明僚

建物	規模	柱間寸法（cm）		桁行（cm）	梁間（cm）	面積（㎡）	棟方向	柱穴掘方	検出地区	備考
		桁	梁							
No.129 T-14	2×2間	249～256	198～210	502～505	402～408	20.4	0° 東西棟	円形	1区	
131 T-15	3×2	200～210	200～210	600	400＋α	24＋α	東西棟	円形	1	用地外に入る
153 T-16	3×2	222～310	189～202	827～830	388～397	32.5	N 96.5W 東西棟	円形	2	
155 T-17	3×2	240～315	177～305	797～799	478～482	35.9	 N 91.5°W 東西棟	円形	2	
157 T-18	5×2	200～300	204	1060～1080	400	42.8	N 22.5°E 南北棟	円形	2	No.158と組合
158 T-19	4×3	200～300	205	1400	450	63	N 119 °E	円形	2	No.157と組合
181 T-21	3×2	156～206	162～174	719～723	486～498	31.9	N 55°E 東西棟	円形	3	No.180，No.188と切合う
182 T-21	3×2	113～163	151～162	432～443	311～313	13.7	 N 45.5°W 北西一南東	円形	3	
188 T-22	6×3				380			円形	3	No.180，No.188と切合う
189 T-23	6×3	128～189	142～283	904～931	574～594	53.6	N 44.5°W 南北棟	円形	3	No.214と切合う
212 T-24	6×2	168～220	140～180	1133～1182	315～344	38.1	N 65°E 東西棟	隅丸方形又は円形	3	本遺跡中規模大
214 T-25	4×3	162～166	112～150	630～650	390～400	25.2	 N 45°E	円形	3	No.189と切合う
311 T-26	2×1	365～379	110～159	365～379	259～269	9.8	 N 55°W 東西棟	円形	5	
312 T-27	1×1	213	176～182	213	176～182	3.8	N 79°E 東西棟	円形	5	

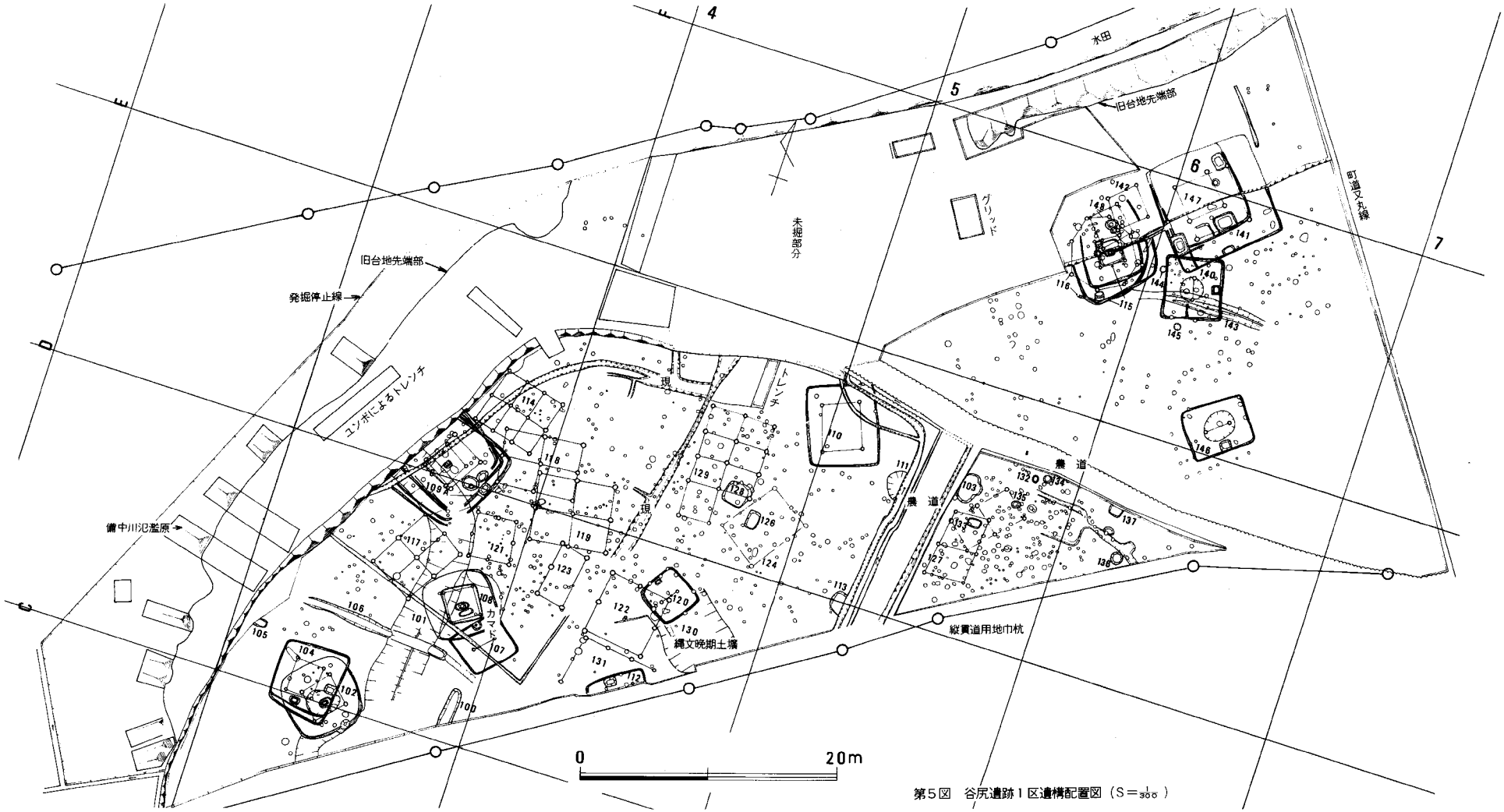
建物	規模	柱間寸法（cm） 桁	柱間寸法（cm） 梁	桁行（cm）	梁間（cm）	面積（㎡）	棟方向	柱穴掘方	検出地区	備考
313 T-28	4×3間	161～202	180～289	730＋α	712＋α		N 49° E 東西棟	円形	5区	4×3＋α
314 T-29	3×2	139～144	146～171	426～428	317～323	13.7	N 54° W 東西棟	円形	5	
315 T-30	3×2	172	142～177	520～525	314～320	16.6	N 53.5° W 東西棟	円形	5	付近で高台付杯が出土 No.317区画内にあり
316 T-31	2×（1＋α）	220～225		450			N 45° E	方形	5	一部用地外にあり未確認
317 T-32		187 ～ 357		2250＋α	1150＋α			円形	5	溝に伴う柱穴列（区画）
318 T-33	1×1	262～272	236～256	262～272	236～256	6.6	方形	円形	5	住居堰か？
320 T-34	（2×2）＋α	120 ～ 150		120 ～ 150				円形	5	
340 T-35	1×1	173 ～ 196				3.3		円形	5	住居堰か？
341 T-35	3×3	150～208	134～167	556～562	460～465	25.9	N 79.5° E 東西棟	円形	5	No.342に類似
342 T-37	3×3	167～205	132～180	549～569	489～491	27.4	N 81° E 東西棟	円形	5	No.341に類似
343 T-38	2×1	205～225	145～186	426～449	145～186	7.2	N 19° E 南北棟	円形	5	



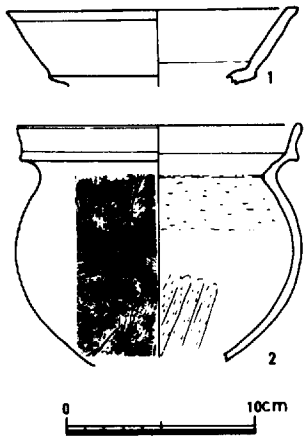
第3図　谷尻遺跡遺構全体図（S＝1/600）

No.130土壙・出土・石器計測値一覧表（表８）

番号	名称	長(cm)	厚(cm)	重量(g)	幅(cm)	備考	番号	名称	長(cm)	厚(cm)	重量(g)	幅	備考
1	打製石斧	11.47	1.12	98.5	5.69	一部欠損,緑色変色	30	打製石斧	4.72	1.41	22.0	3.41	
2	打製石斧	11.16	1.81	155.5	5.67	完形	31	打製石斧	7.60	1.67	54.5	3.98	
3	打製石斧	11.82	2.03	189.0	5.93	完形	32	打製石斧	7.10	1.16	49.0	4.72	
4	打製石斧	13.8	2.385	254.0	5.54	完形	33	スクレーパー	11.90	1.14	67.5	4.62	完影 サスカイト
5	打製石斧	12.98	1.98	142.5	4.41	完形	34	スクレーパー	8.21	0.84	38.7	4.76	サスカイト
6	打製石斧	13.86	2.16	186.0	5.7	完形	35	スクレーパー	6.5	0.8	22.7	4.33	サスカイト
7	打製石斧	13.77	1.85	171.5	5.16	完形	36	スクレーパー	5.05	0.8	16.0	4.4	
8	打製石斧	14.83	1.71	157.5	4.96	完形	37	スクレーパー	7.6	17.0	85.5	5.7	
9	打製石斧	13.03	1.74	159.5	4.89	完形	38	スクレーパー	3.86	0.9	23.9	3.8	
10	打製石斧	12.53	1.6	120.5	4.68	完形	39	スクレーパー	4.7	0.4	6.7	2.9	
11	打製石斧	12.69	1.23	120.5	4.78	完形	40	スクレーパー	3.95	0.48	13.8	5.1	
12	打製石斧	11.52	1.71	168.5	5.98	完形	41	スクレーパー	2.79	0.5	3.4	2.34	
13	打製石斧	8.61	1.66	135.5	6.67	一部欠	42	スクレーパー	3.1	0.72	33.8	2.4	
14	打製石斧	10.11	1.39	125.0	6.36	完形	43	スクレーパー	2.96	0.43	7.0	3.67	
15	打製石斧	10.96	1.76	160.0	6.15	完形	44	?	4.92	0.7	12.5	3.4	
16	打製石斧	9.93	1.26	113.0	6.03	?	45	スクレーパー	3.65	0.8	9.3	2.54	
17	打製石斧	7.69	1.24	92.0	7.30	破片	46	スクレーパー	2.24	0.4	2.1	1.96	
18	打製石斧	7.10	1.69	67.5	4.96	破片	47	スクレーパー	1.9	0.24	1.3	1.9	
19	打製石斧	9.69	0.92	68.0	4.62	完形	48	スクレーパー	1.8	0.5	1.4	1.8	
20	打製石斧	10,00	1.74	100.0	4.80	完形	49	スクレーパー	1.45	0.25	0.8	1.43	
21	打製石斧	13.42	1.42	164.5	5.46	完形	50	石鏃	2.0	0.34	1.1	2.1	
22	打製石斧	13.84	2.46	217.5	5.80		51	石鏃	2.1	0.2	0.8	1.3	
23	打製石斧	12.36	1.29	97.5	4.58		52	石鏃	1.95	0.4	0.8	1.2	
24	打製石斧	11.32	1.37	84.5	3.86		53	石鏃	1.55	0.4	0.8	1.2	
							53′	石鏃	1.0	0.33	0.8	1.8	
25	打製石斧	13.28	2.00	172.5	4.94	完形	54	凹石	10.1	4.5	458.0	7.72	完形，砂岸
26	打製石斧	7.00	1.06	35.5	4.94		55	凹石	13.37	3.4	487.0	7.9	完形，砂岩
27	打製石斧	12.48	0.99	81.5	5.42		56	磨石，砥石	5.95	4.7	327.5	6.7	欠，砂岸
28	打製石斧	9.15	1.77	129.0	4.86		57	磨石	8.9	6.9	710.0	8.14	完形 砂岩
29	打製石斧	14.65	3.24	397.5	7.24		58	石血	20.7	8.26	1,920.0	11.8	砂岩



第５図　谷尻遺跡１区遺構配置図（S＝1/300）

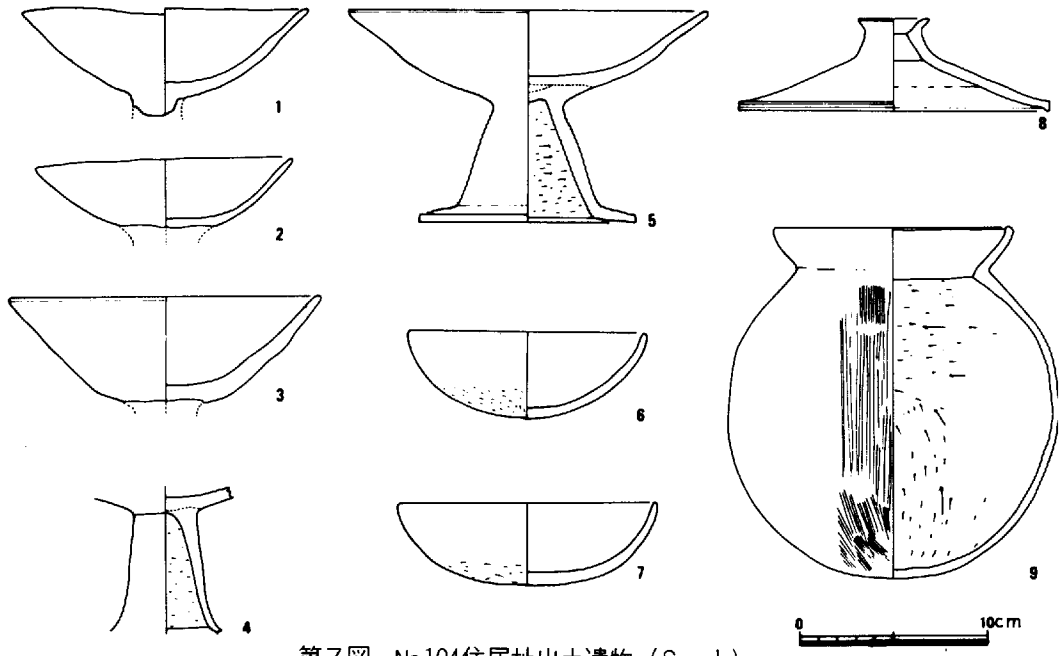


第6図　No120住居址出土遺物
（S＝$\frac{1}{4}$）

焼成も非常によい甕形土器片である。胴部外面を刷毛状工具により，内面をヘラ削りによって仕上げている。

No.104住居址出土遺物（第7図）

東に開いた台形を呈する住居平面を持ち，一回の拡張が行なわれた跡を残す住居址である。壁体溝にそって隅丸方形の土壙を，2軒とも有していた。6・7は古い住居址土壙に伴うものである。口径12.5cm～13.8cm，器高4.7cm～4.4cmを測る丸底の碗形土器である。精製された粘土をもちい，焼成も良好である。外面底は不規則なヘラ削りが行なわれている。内面にはススが付着している。1～5・9は新しい住居址土壙に伴い，8はその床面から出土したものである。高杯形土器は内外面の磨滅が著しく，脚部中空内面のヘラ削り

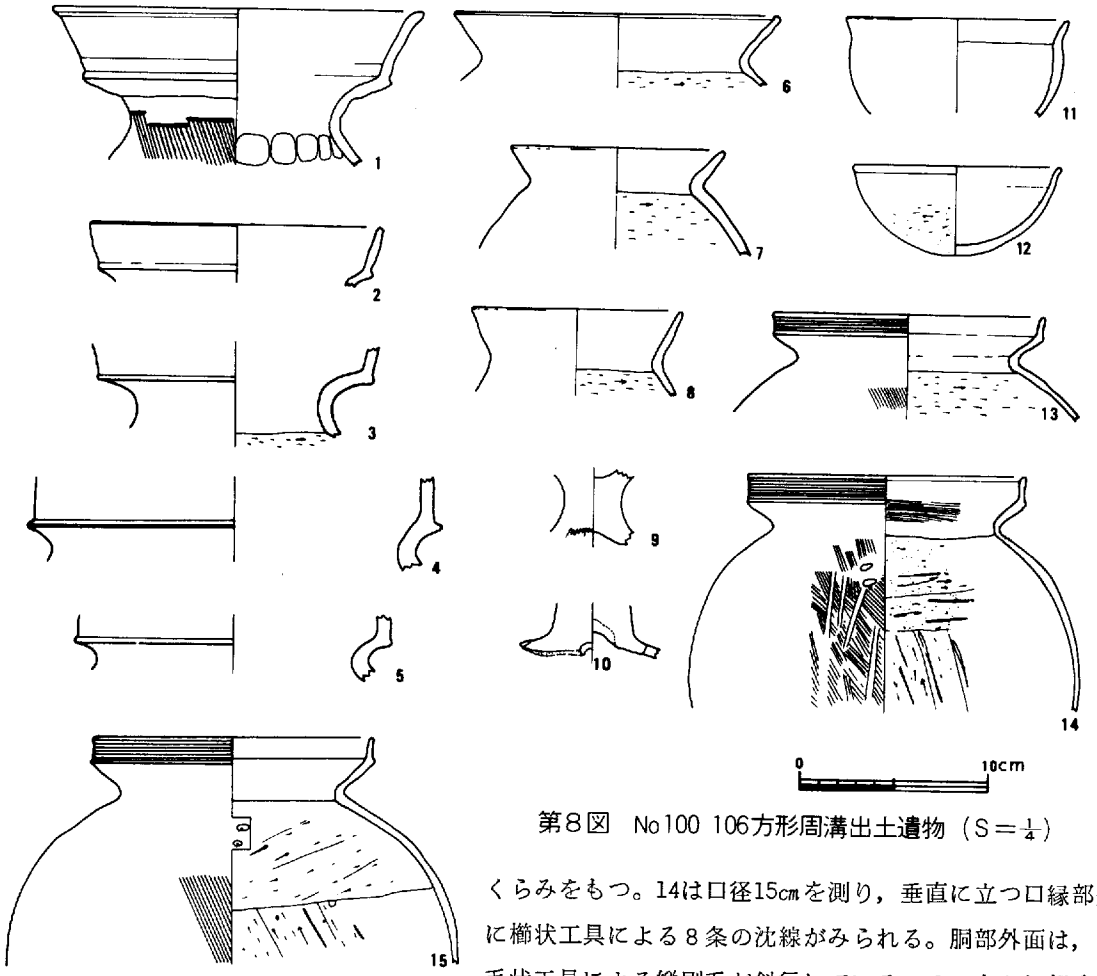


第7図　No104住居址出土遺物（S＝$\frac{1}{4}$）

のみがわかる程度である。脚部裾は，内側に明瞭な稜線がみられる。9は球体の胴部をもち，丸底を呈する甕形土器である。外面刷毛目，内面ヘラ削りを有する。胴下半はススが付着している。8は，内面ヘラ削りを持つ蓋形土器である。

No.100，M.106方形周溝出土遺物（第8図）

検出当初，別個の遺構として把えたが，その後，方形周溝状になると推定し同一に扱った。12・14は，M.100より出土したものである。12は口径11cm，器高4.8cmを測る。黄褐色を呈する碗形土器である。外面底部$\frac{3}{4}$位までヘラ削りが行なわれ，内面は丁寧な作りである。口縁端部は，小さいふ

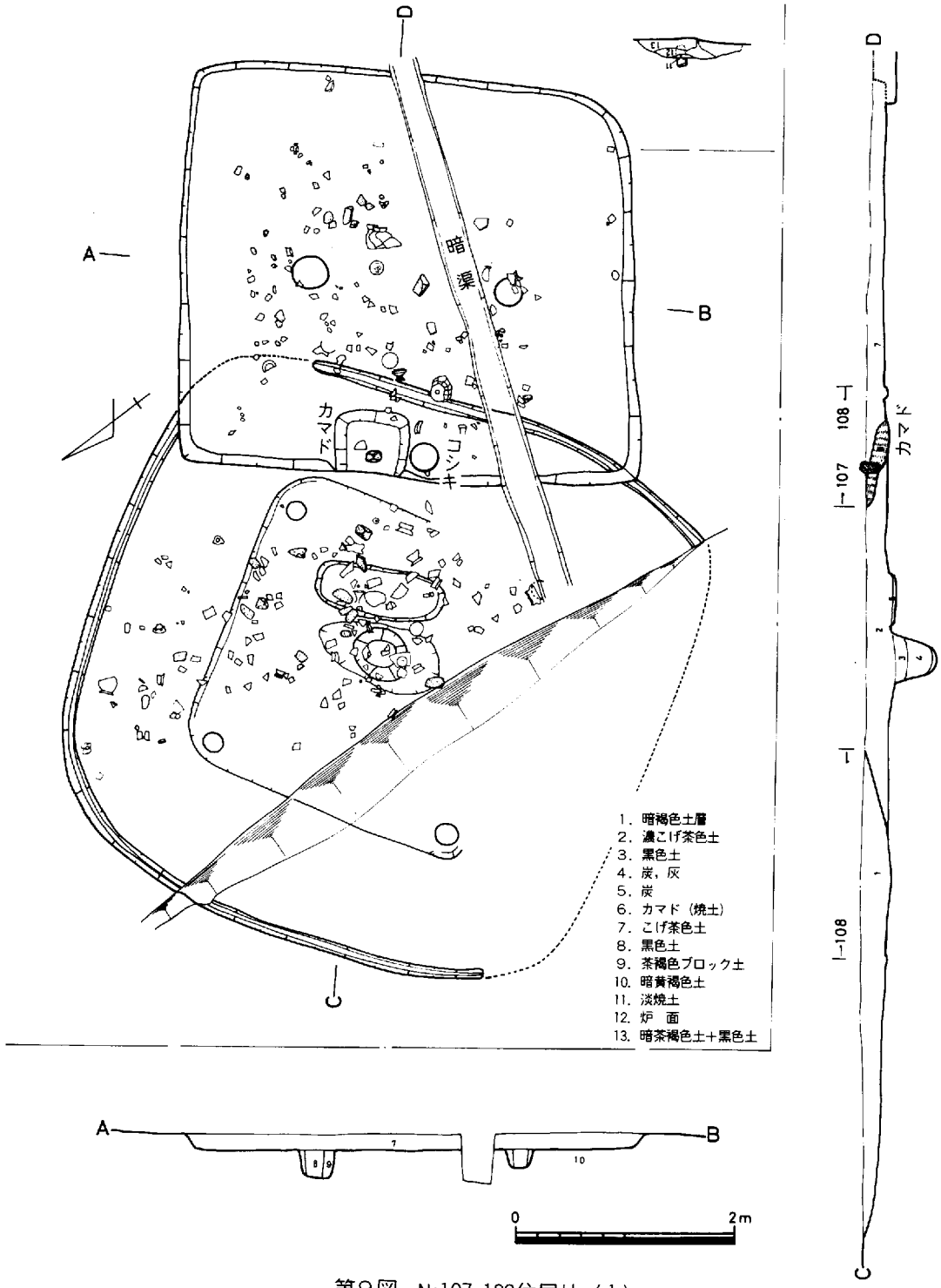


第8図 No100 106方形周溝出土遺物（S＝$\frac{1}{4}$）

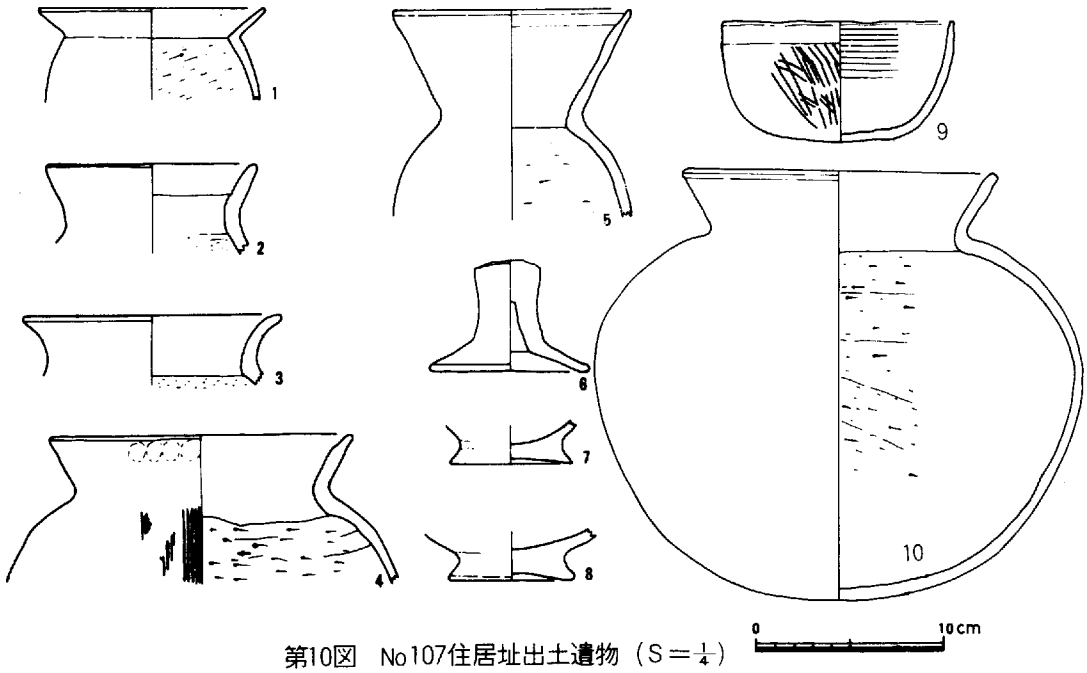
くらみをもつ。14は口径15cmを測り，垂直に立つ口縁部分に櫛状工具による8条の沈線がみられる。胴部外面は，刷毛状工具による縦刷毛が斜行している。その上より部分的にヘラナデが施され，肩部分には米粒大の押圧痕が平行して2ケ所付けられている。内面は，底より下半まで縦ヘラ削り，上半にて横ヘラ削りが行なわれ，非常に薄く仕上げている。№106より出土のものである。すべて破砕されて重なった状態での出土である。1～3は複合口縁をも壺形土器である。1は器外面頸部より刷毛工具の単位を明確にあらわす刷毛が施されている。内面は静止しぼり目がみられる。4・5は複合口縁をもつ甕形土器である。6・7・8は胴部より「く」の字状に折れまがる口縁をもつ甕形土器である。内面はくびれ部より横位の右ヘラ削りが施されている。9・10は中実の短脚を有する高杯形土器である。13・15については，前記した14と変らないものである。

No.107・No.108住居址（第9図）

№108住居址を№107住居址が切った状態で出土したものである。さらに№108住居址西半分は，中世溝№101により削られている。№108は隅丸方形を呈し，四辺にベッド状遺構を持つ。主柱穴4本，柱間2.3mと統一して作られている。中央に巾50×45cm，深さ31cmのピットを持ち，その東側にカヤ状の炭化物を充満させた長方形の浅い土壙をも併設する。両土壙内に土器片を含んでいる。



第9図 No107、108住居址 ($\frac{1}{60}$)



第10図　No107住居址出土遺物（S＝$\frac{1}{4}$）

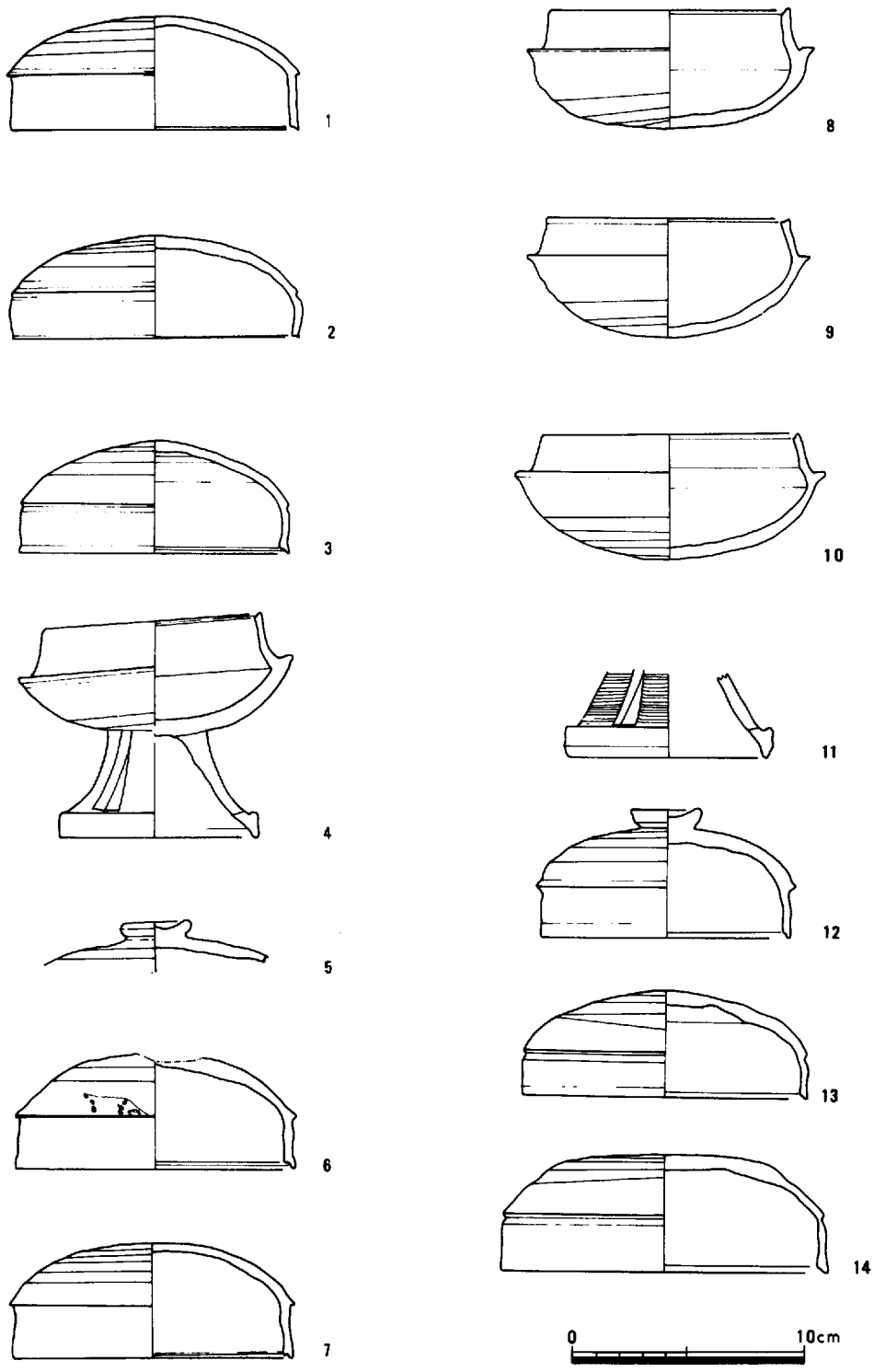
遺構の残存状態はよくない。№107住居址は，長辺4.m，短辺3.6m，面積14.4m^2を測る。東西に巾30cm，深さ50cmの近世暗渠が走り，住居址を横断している。主柱穴2本により棟が上げられていたようである。この柱穴主軸方位（N—43°—E）に直交する角度で西辺にカマドが付設されている。壁体の溝は検出できなかった。カマドは，本体中心より少し西に柱状の石を$\frac{1}{2}$位埋め込み，甕底を受ける支えとしている。その西南角にコシキを配置した状態で出土している。

No.108住居址出土遺物（第12図）

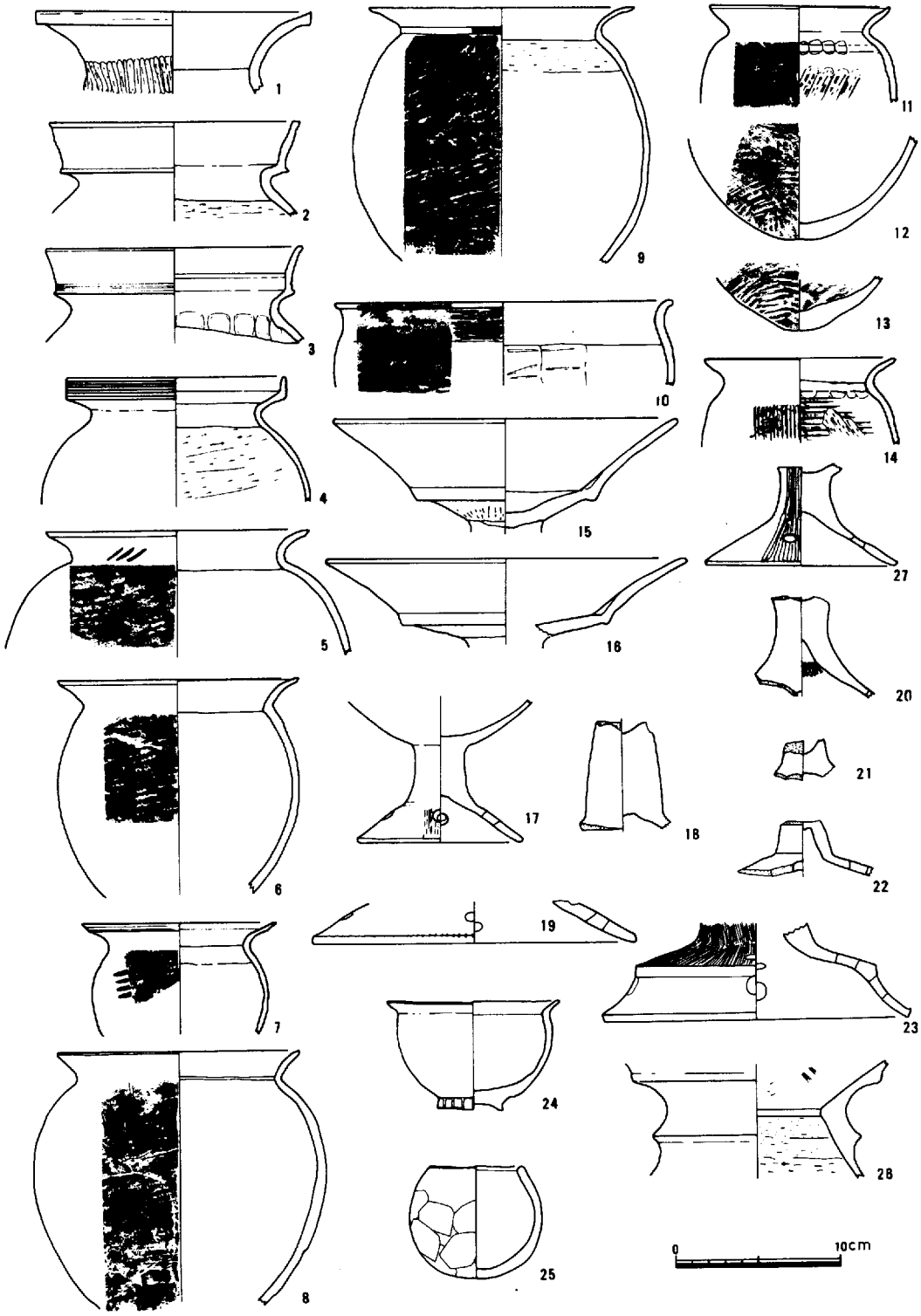
1は，頸部より丸みをもって外反する口縁を有し，シャープに口縁端部を仕上げた壺形土器である。2・3は，口径約16cmの複合口縁を持つ甕形土器である。口縁部内外面を非常にシャープなナデ仕上げを行ない，両者とも口縁端部に平坦面を持つ。4は，「く」の字状に外反する口縁に垂直な立上がりをもち，その外面に櫛描きによる6条の沈線をもつ甕形土器である。5～14は，外面に叩目の施された甕形土器である。叩目は左下より右上に向って施されており，胴部下半に平行叩目がみられるものもある。器形は肩が張り，胴部に最大径を有し，底部は不安定な丸底となっている。内面は指頭によるナデとみうけられる，所々に輪積みの痕跡をとどめている。15～23は，短脚，中実を主体とする高杯形土器である。24・25は手捏ねの感じが強い。26は，内面上半に刷毛が一部みられ，下半にヘラ削りの行なわれている丹塗りの鼓形器台である。

No.107・No.109住居址出土遺物（第11・13図）

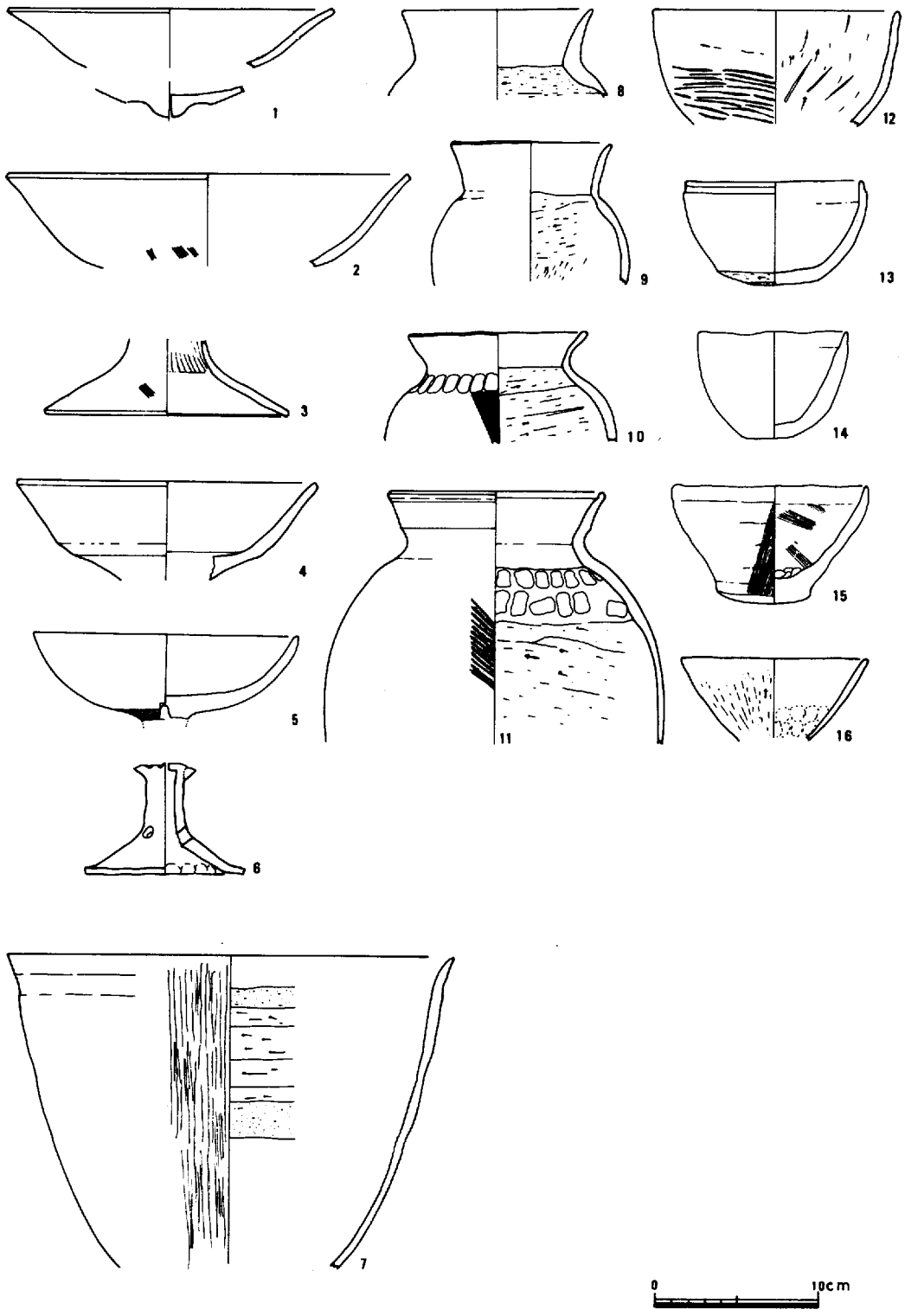
№107住居址出土遺物は，床面着のものと，遊離して上層にて出土したものとが接合したものもある。1～5・10は，非常に作りの荒い，鈍い感じのする甕形土器である。5を除いて，他は胎土・焼成・ヘラ削りにいたるまで雑な作りがうかがえる。胴部中央に器の最大径を有し，外面荒刷毛，内面ヘラ削りが施されている。6は，こじんまりとまとまり，重量感のある脚部で，内面に叩



第11図 No107 109住居址，1区谷出土遺物（S＝$\frac{1}{3}$）



第12図　No108住居址出土遺物（S＝$\frac{1}{4}$）



第13図　No109住居址出土遺物（S＝$\frac{1}{4}$）

須恵器計測値表（表10）

（単位 cm）

出土遺構	番号	器形	最大径	口径	器高	色調	ヘラ削り（中心より）	備考
No. 107 住居址	1	杯蓋	12.65	12.4	4.8	青灰色	右	
	2	〃	12.50	12.30	4.45	淡青灰色	右	口縁部歪
	3	〃	11.60	11	4.8	青灰色	右	
	4	高杯	11.835	9.495	9.7 (4.8)	淡青灰色	右	完形4窓
No. 109 住居址	5	杯蓋				青灰色		有蓋高杯片
	6	〃	12.095	12.095	5＋α	淡黒灰色	右	「つまみ」欠除
	7	〃	12.25	12.1	5.2	淡黒灰色	右	½破片
	8	杯身	12.6	9.95	5.05	青灰色	左	〃
	9	〃	12.20	10.3	5.1	青灰色	左	〃
	10	〃	13.4	11.285	5.37	淡灰色	右	完形
	11	高杯						脚部4窓
1区谷包含層	12	杯蓋	11.2	10.7	5.5	青灰色	右	重ね焼き痕
	13	〃	12.2	12.2	46	淡青灰色	右	
	14	〃	14	14	5.1	淡灰色	左	軟質
No. 180 住居址		杯身	13.0	10.6	5.3	青灰色	左	硬質
No. 107 （平均値）		杯蓋	12.25	11.9	4.68		右	
		杯身	11.84	9.5	4.8			
No. 109 （平均値）		杯蓋	12.17	12.1	5.2		右（3）	
		杯身	12.7	10.5	5.14		左（2）	

瞭な稜線を持っている。7・8は，器の台部分で砂粒を多く含み，外面底部は焼けている。9は，器面が凸凹しており，薄く仕上げられている。外面は叩目に類似しているが，太目のハケが考えられる。内面は指頭ナデによる。又，図示していないが，底部に2穴を有し，把手をもつコシキも出土している。№109住居址出土遺物も，前記№107と類似している。甕形・浅鉢形土器においては，荒さが目立つが，高杯形土器，特に5は非常に丁寧に仕上げられている。杯部外面底には0.8cm径の穴がみられる。7は，把手を有していないがコシキであろう。両住居址とも，古式の須恵器を伴出しており，コシキの出現などとからませて，普遍的な出土形態を呈している。

須恵器（第11図）

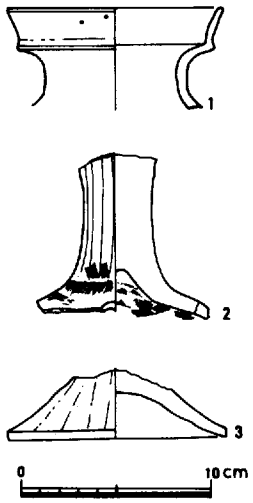
両住居址出土須恵器を比較すると，№107出土のものが，最大径・器高共に小型であり，ヘラ削りも中心より「右回り」に統一している。№109出土のものは，最大径・器高共に少し大型であり，ヘラ削りも「左回り」「右回り」のバラツキがあり，器形の大小にもそれがみられる。高杯は4窓を持つ短脚1段透しである。

＜1区谷部出土遺物＞（第11図）

12は，有蓋高杯の蓋にあたる。非常にシャープに仕上げられている。ヘラ削りは「右回り」で，口縁端部に「重ね焼き」痕跡がみられる。14は，ヘラ削り「左回り」にて，天井から体部にうつる稜線が鈍くなっている。

№115住居址出土遺物（第14図）

住居址内にベッド状遺構をもち，さらに一段下がった所に方形土壙を設け，その四隅に4本の棟上げの柱穴がみられる。遺物は，土壙内カヤ状の炭化物を除いた下より出土している。1は，口径



第14図　No115住居址出土遺物（S＝$\frac{1}{4}$）

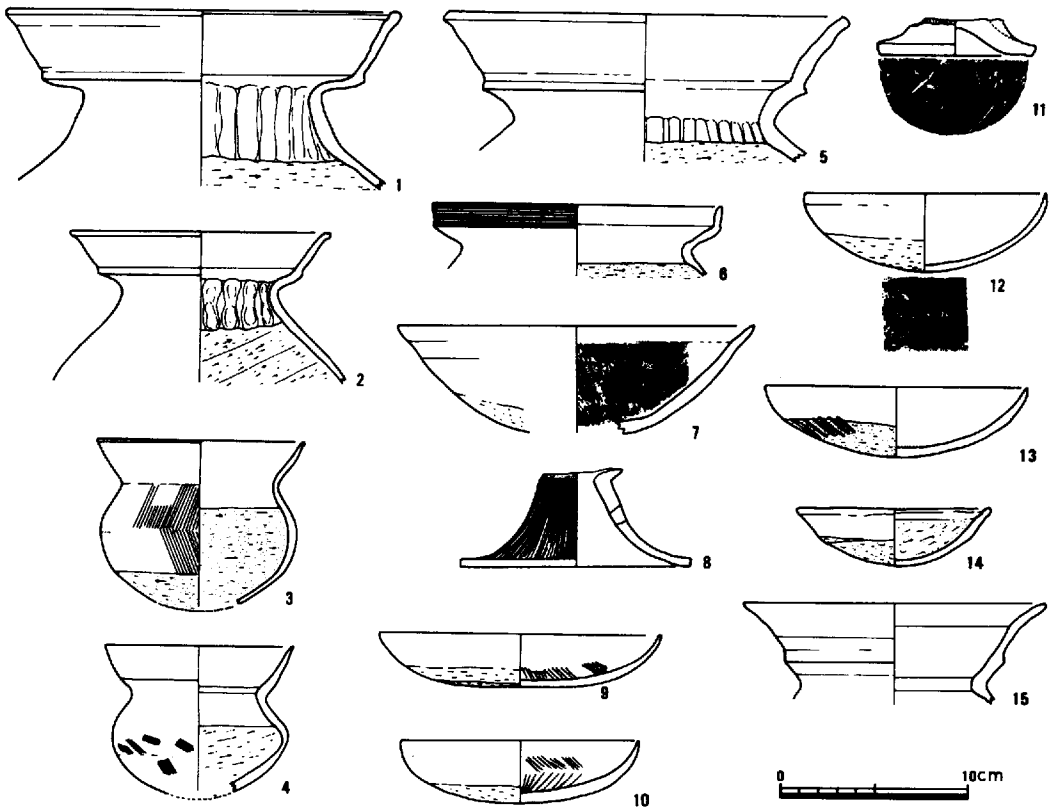
11.5cmを測り，複合口縁部分に外面よりの孔が２ケ所ある。２は，中実の高杯脚であり，４穴を有し，柱状部分はヘラ磨きにより丁寧に仕上げている。内面は，刷毛状の工具により仕上げ。３は，器の脚台部分であり，貼り付けがとれた痕跡をとどめている。

No.120住居址出土遺物（第15図）

本住居址は，No.130土壙を切り作られており，壁体の比較的残りが良い方であった。出土土器は２・５・11・15を除いて，比較的砂粒が多く目立つものが一括しているようであった。器壁は薄く仕上げており９・10・12等は外面底部ヘラ削り後，「十字」のヘラ記号がみられた。５は，非常にシャープに仕上げられている。６は，口縁部に櫛描きによる沈線が施されている。

No.130土壙

１区低位台地（海抜159.4m）ほぼ中央，南路線際にある縄文時代晩期の土壙である。北端部をNo.120住居址により破壊されている。表土下約15cm暗茶褐色粘土層を東西約５m，南北約5.5m（一部用地外）に掘り込んだ浅い土壙内よ



第15図　No120住居址出土遺物（S＝$\frac{1}{4}$）

第16図 No130土壙出土遺物（S＝$\frac{1}{4}$）

第17図 No130土壙出土遺物（S＝$\frac{1}{4}$）

り多量の土器，石器が出土した。整理の終了していない状態での報告故，土器の個体数を明確にはつかんでいないが，45点以上，石器60点，サヌカイト剝片多等である。

すべて一括資料として扱えるものとして掲載した。しかし破片にかぎられており，具体性に欠ける部分を免がれない。ここでは大きく粗製と精製の土器にわけて説明を加える。

＜粗製土器＞（第16図，第17図11～27，第18図）

器種は深鉢が多数をしめており，色調は灰黄色，灰黒色を呈し，胎土中に白色砂粒（3㎜）を多く含む。施文様は頸部より上に限られている。半截竹管による爪形文，刺突文，押引文，沈線文を主に施し，口縁端部には刻目を有するものが多い。

a—頸部に爪形文を有するもの（1・3・4・5・8・10・11・12・22）

b—aに口縁部にのびる爪形文，刺突文を構成したもの（1・2・3・4・5・10）

c—頸部に沈線文を有するもの（2・26）

d—頸部に押引文を有するもの（16・23・24・25・27）

e—二枚具条痕を有するもの（7・17・18・20），6・7・8・9各土器もbに入るものであろう。

口縁部径は40㎝～45㎝と大きいものから20㎝位のものまでみられ，器厚は平均してはいないが5㎜内外のものが大半をしめる。底部（第18図）を観てみると，平底よりやや上底になるものから1㎝位の上底のもの，そして丸底の三形態がある。中でも上底のものが大半をしめている。

＜精製土器＞（第17図，28～38）

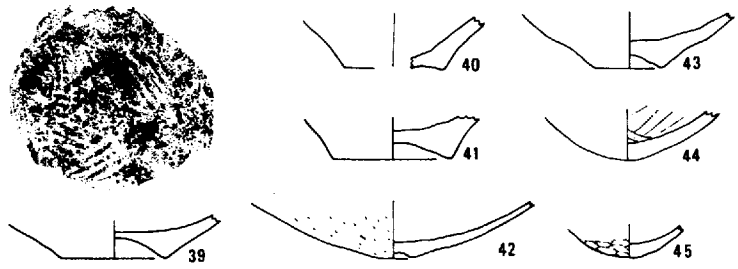
器種は浅鉢になると考えられるものが多く，表裏とも良く研磨されて滑沢をもっている。色調は淡黒色を呈し胎土中に白色砂粒（3㎜）を多く含む。口唇部裏面は粘土紐を貼りつけ断面三角形，及び断面半円形に肥大させているもののみが6点出土している（28～33）。他に口縁端部をやや突りぎみにシャープに仕上げたものがみられ，端部に刻目を有するものから（35・37）。裏面に沈線を有するものもある。（35～38）

＜石 器＞（図版59・60・61）（表8）

打製石斧32点，石鏃5点，スクレーパー17点，凹石2点，磨石1点，砥石2点，石皿1点と総数60点の石器が出土している。打製石斧は緑色片岩系の石材を利用している。平均長11.1㎝，平均巾5.3㎝，平均重量134.1ｇ，平均厚1.65㎝を測ることができる。スクレーパー，石鏃はすべてサヌカイトを利用しており，黒曜石によるものは見られなかった。石鏃の平均長1.72㎝，平均巾1.54㎝，平均重量0.84ｇを測る。凹石，磨石，石皿，砥石等は砂岩質のものを利用している。又，図版60—33は，薄い剝片の長辺に交互の剝離を加え，鋭利な刃部を作り出している。これは，原下層出土の剝片石器に類似点が見出される。

No.140住居址出土遺物（第19図）

長方形にて，若干内側に反るプランを持ち，主柱穴2本からなる住居址である。壁体溝は他の住居址のものと異り，非常に深い溝を有することから，板材が挿入されていた可能性を充分にうかがえる。遺物は，住居址中心部に向って浅い凹みになっている部分より出土している。1・2は高杯

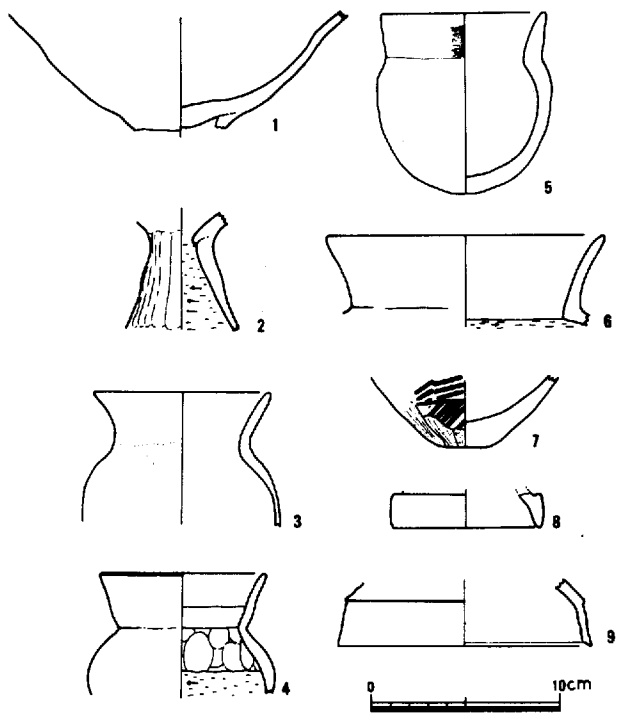


第18図　No130土壙出土遺物（S＝$\frac{1}{4}$）

の身部分と中空の脚部である。3～5は，器面が滑らかに仕上げられているが，器厚は均一してなく凸凹している。6は，茶褐色を呈し，シャープに仕上げられた甕形土器である。7は平底を持ち外面叩目が行なわれており，下部ではヘラ削りの面取りが施されている。8は，高杯短脚一段透しの一部である。底径8㎝を測り，焼成・胎土ともに良好である。9は，最大径を口縁部に持つ杯蓋である。口径13.4㎝を測り，口縁内側，及び天井部より体部に移る部分にシャープな稜線を持つ。7・8・9は含土中より出土したものである。

No.146住居址出土遺物（第20図）

長方形にて主柱穴2本からなる住居址である。No.140と同じく，住居址中心部に向って浅い凹みになっている。1は，口径15㎝を測り，胴部中位に最大径を有する丸底の甕形土器である。器外面を横の刷毛ナデが中心に行なわれ，内面は左回りのヘラ削りが行なわれている。2は，複合口縁を表わす鈍い稜線を持つ甕形土器である。3は，器面を滑らかに仕上げているが，シャープさに欠け，器厚は均一していない。4は，口径18㎝を測る大形の甕形土器である。精選された粘土を持ち，焼成も良好である。器内面は大きくえぐりとるようなヘラ削りが行なわれている。他の甕形土器にもいえる。他の甕形土器にもいえるが，胴部中位に最大径がくるようである。5～7は，周

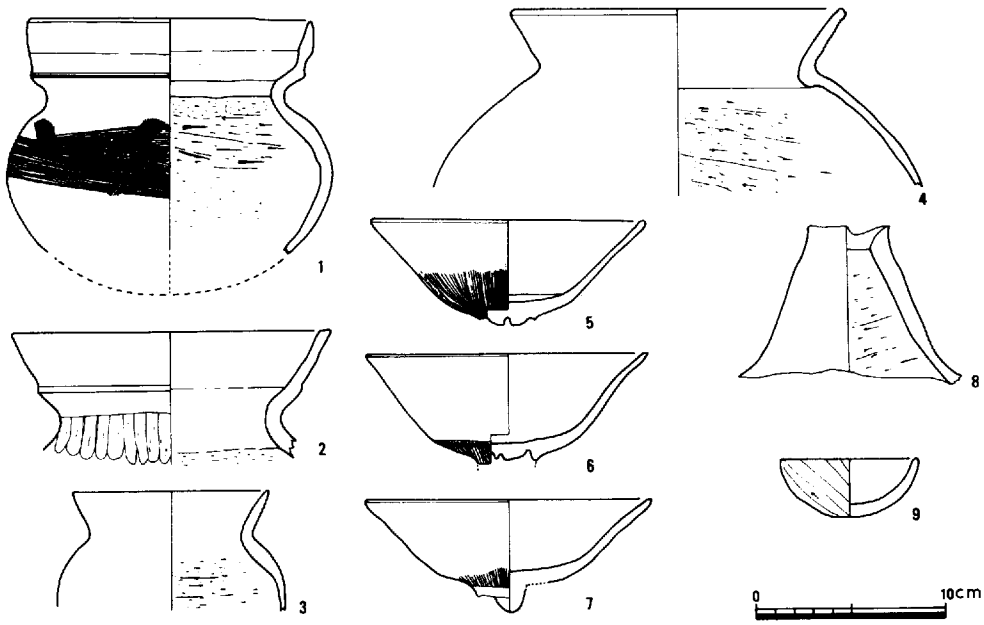


第19図　No140住居址出土遺物（S＝$\frac{1}{4}$）

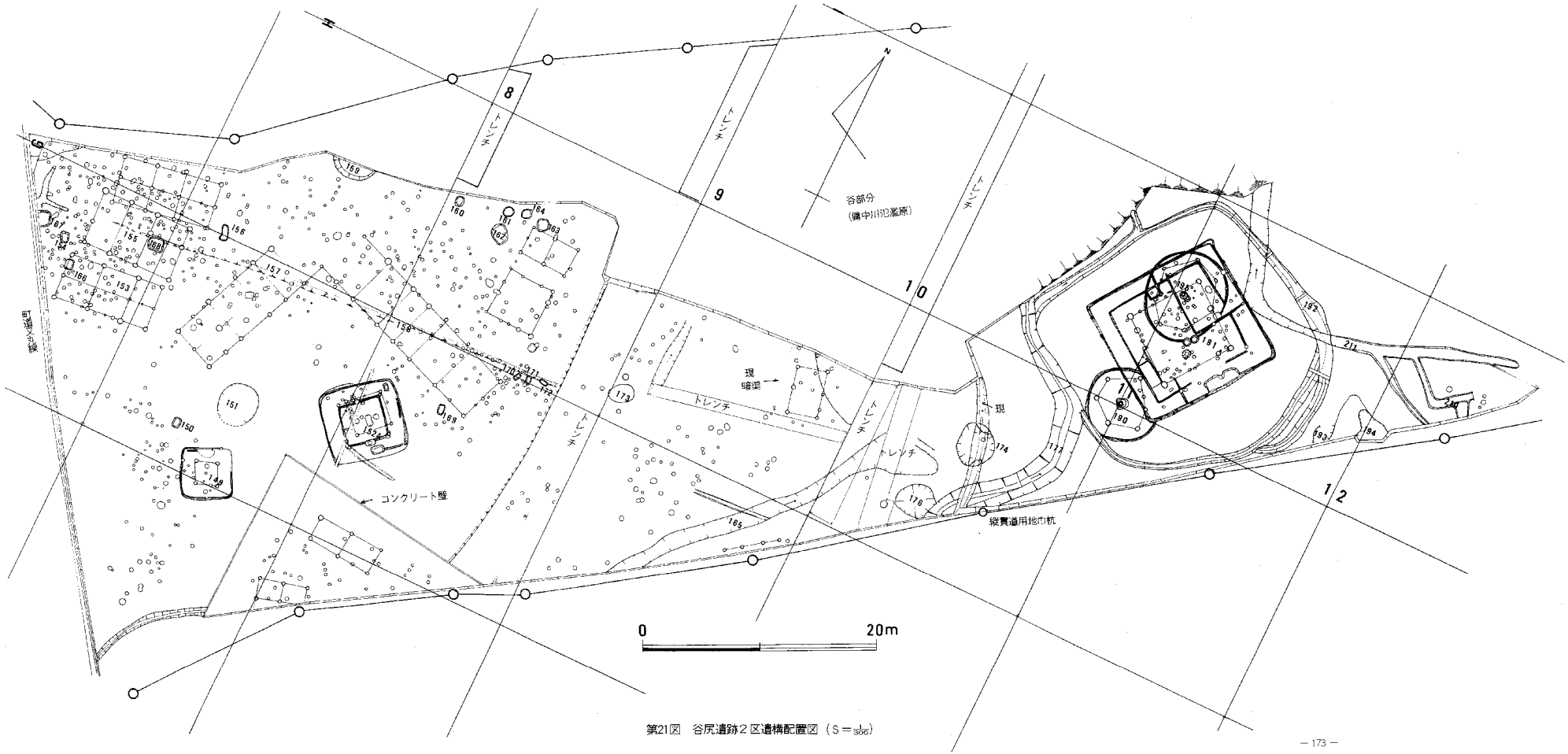
に接しても設けられた隅丸方形の土壙中より出土したものである。杯身部分のみが出土しており，器形・整形等に共通点が多い。口径約15cm，器高5cmを測り，器内外面ともにナデにより仕上げられている。外面下半には，刷毛状工具による縦ナデが施されている。高杯身の底部には，半球状のさし込み部分が作られており，脚部に挿入接着に大きい役割りを果しているようである。接合粘土紐がみられる。5・6には，半球状さし込み底に0.3〜0.4cmの穴がみられる。8は，高杯の中空脚部である。前記した身部分が，挿入されるのであろう。しかし，胎土・焼成が異なるものである。器面は滑らかに仕上げられており，外面はナデによる凸凹がみとめられる。内面は，右回りのヘラ削りが全面に及んでいる。孔を有していない。9は，口径7.4cm，器高3.1cmを測る小形の碗形土器である。内面は指頭ナデにより仕上げられている。外面は，底より見ると左に回転の跡を残す土の動きが存在する。底部に黒斑を有するところの手捏ねの土器である。

No.149住居址出土遺物（第22図）

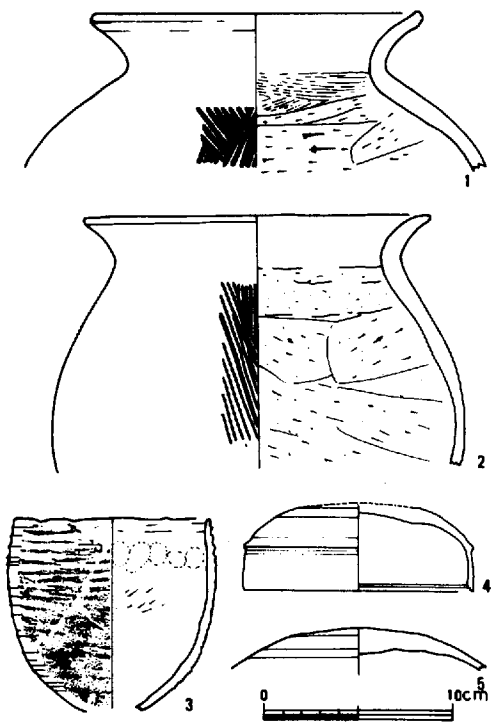
水田により，著しく削平を受けており，北東隅周辺は壁体溝が削滅している。一辺4.25mの方形プランを呈し，主柱穴4本からなる住居址である。北北西辺の壁体にそって焼土面が存在した。カマドかどうかは不明である。遺物は，床面より散乱した形で出土し，破片に限られていた。1は，「くの字」状に外反する口縁部を持つ甕形土器である。色調は赤黄褐色を呈する。器外面胴部は，荒い刷毛状の工具により調整されており，口縁内外面は回転によるナデにて仕上げられている。内面は，くびれ部に刷毛ナデがみられ，その下位よりスプーンでえぐり込んだような荒いヘラ削りが施されている。2は「くの字」状に外反し，胴下位に最大径を有する甕形土器である。色調は黄褐色を呈する。1と製作調整法は類似しており，内面くびれ部分に2本の接合粘土面を残すところが



第20図　No146住居址出土遺物（S＝1/4）



第21図　谷尻遺跡2区遺構配置図（S＝1/300）



第22図 No149住居址出土遺物（S＝$\frac{1}{4}$）

若干異るところである。外面には，刷毛上に黒斑がみられる。3は，口径10.3cm，器高10.5cmを測る深鉢形の土器である。色調は淡赤褐色を呈する。器外面は，口縁より底部まで平行叩目が行われている。口縁付近の凸凹が顕著である。下位にしたがって若干起伏が目立たなくなる。内面上部は指頭圧痕がみられ，その後ナデにて整形している。4は，全体に歪みをもつ須恵器杯蓋片である。ヘラ削りは「左回り」である。復元実測を行なったが，最大径は少し大きくなるかもしれない。

No.153建物（第23図）

桁行約8.31m，梁行3.92m，面積32.5㎡を有する。3×2間の掘立柱建物である。柱穴掘り方は円形を呈し，梁間の柱が若干小さく，浅い掘り方である。他の柱の基底は，ほぼ同一レベルであり，約40～60cmの深さを持っている。No.155建物とほぼ一致する棟方向をとり，備中川に対して並行する東西棟の建物である。

No.155建物（第24図）

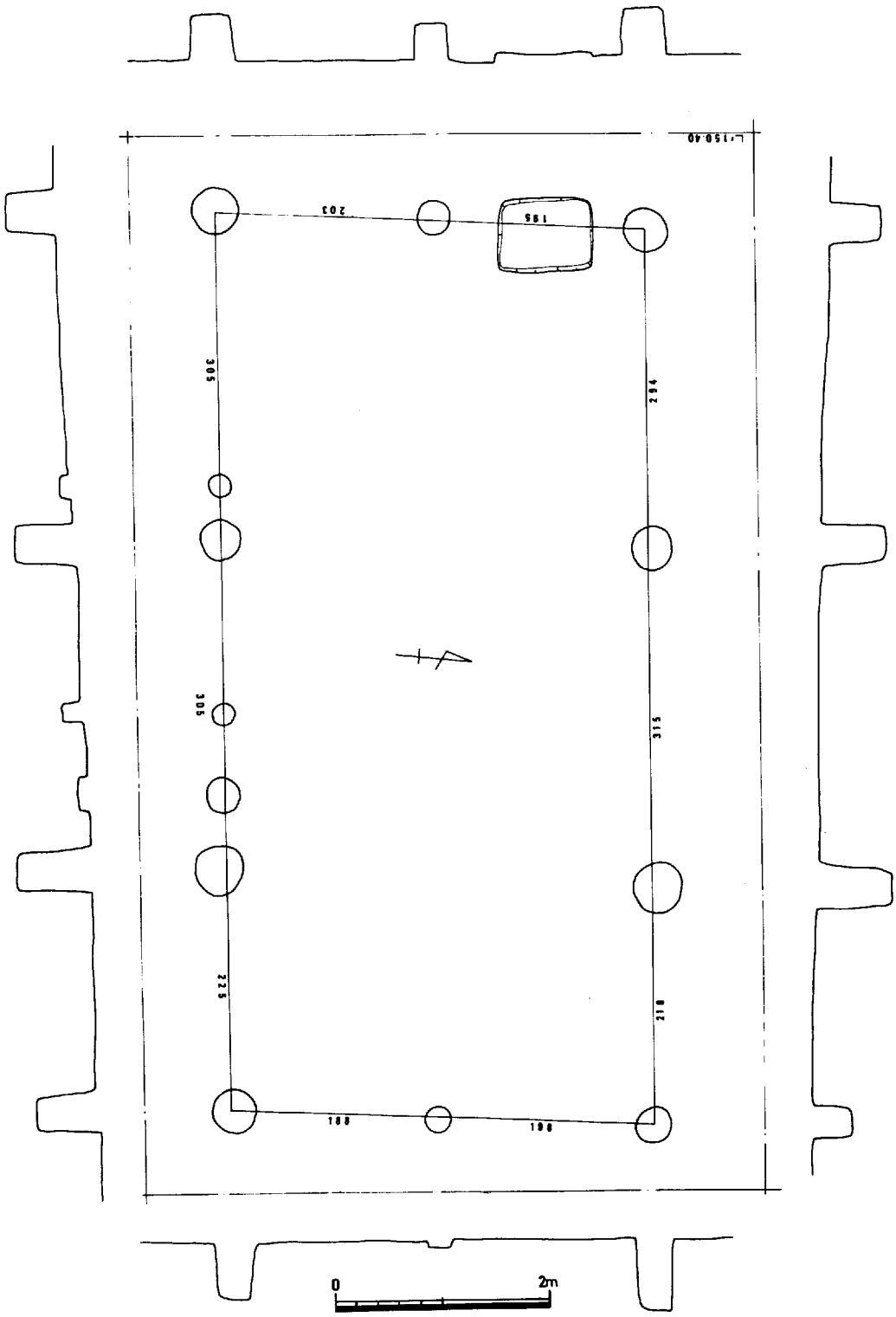
桁行約7.93m，梁行4.71m，面積37.3㎡を有する。3×2間の掘立柱建物である。柱穴掘り方は円形を呈し，西辺梁間の柱が小さく浅い掘り方である。他の柱の基底は，ほぼ同一レベルであり，約40～60cmの深さを持っている。No.153建物とは，東辺に仕切りのある点が異なる。棟方向は，同一方形をとる。すなわち両棟が並行し立っているわけである。

No.176土壙について（第27図）

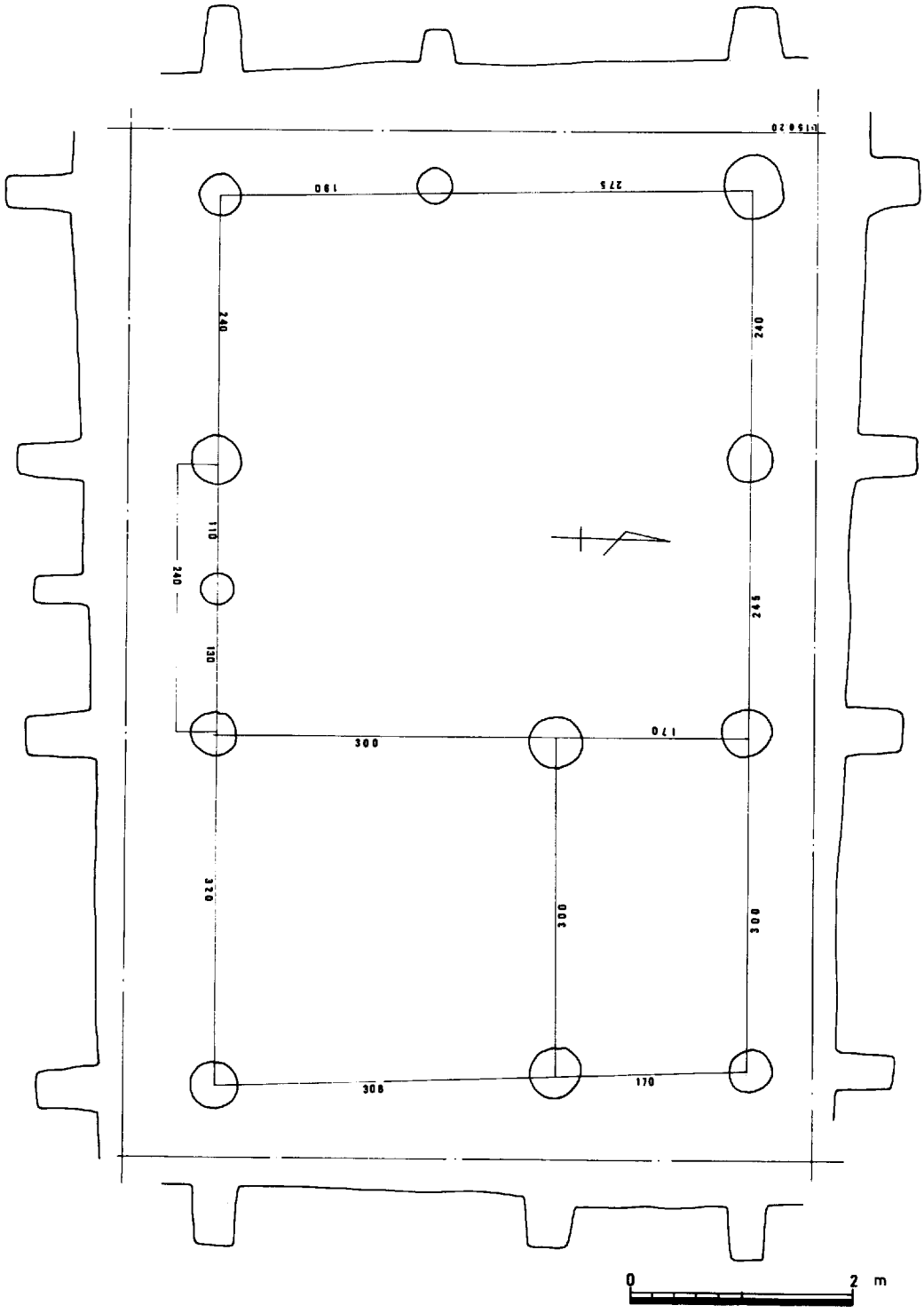
2区のほぼ中央，南側路線際にあり一部分が用地外に含まれる。東西巾約4m，南北巾約3.5mの楕円形を呈し，深さ1.2mの擂鉢状の土壙である。地表下約20～30cmにて遺構面にたっし，土壙内にはレンズ状の堆積が4層に別かれてみられる。無遺物の層（3・4層）遺物を含む層（2・5層）とに明瞭に分層された。5層は炭を多く含み，土器と混り合った状態で土壙傾斜にそって遺物がみられた。遺物の大部分のものが破壊されており，小型品の中に完形のものが数点存在した。大型品が土壙底に集中していたようである。

遺 物（第28・29・30・31図）

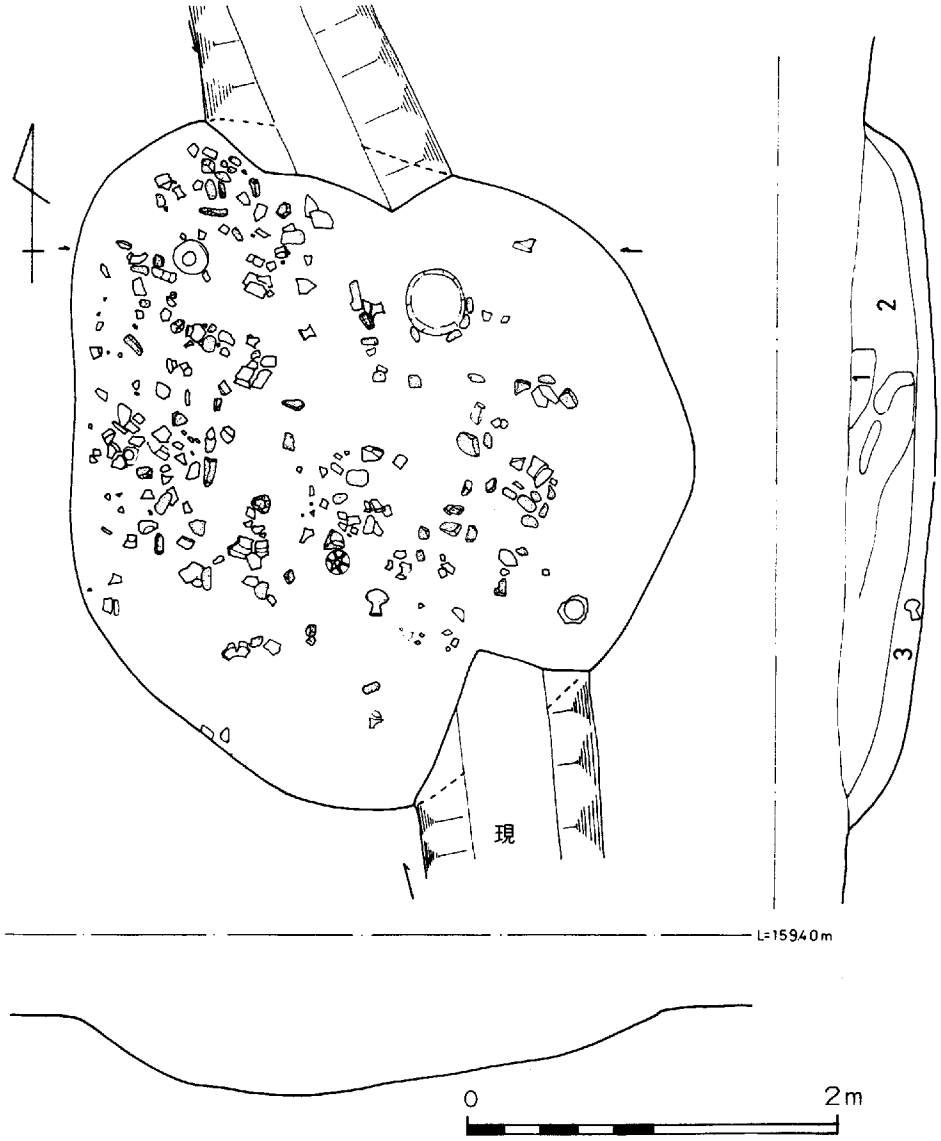
土器個体数約150点を数え，一括した生活土器を把握するのに非常にまとまったものである。ここでは，実測可能な94点に限り掲載した。壺形土器，甕形土器，高杯形土器は，丹塗りの施されたものがあり，特に高杯形土器に多く見られた。又，叩目を有する甕形土器も多く見られた。



第23図　No153建物（S＝$\frac{1}{80}$）

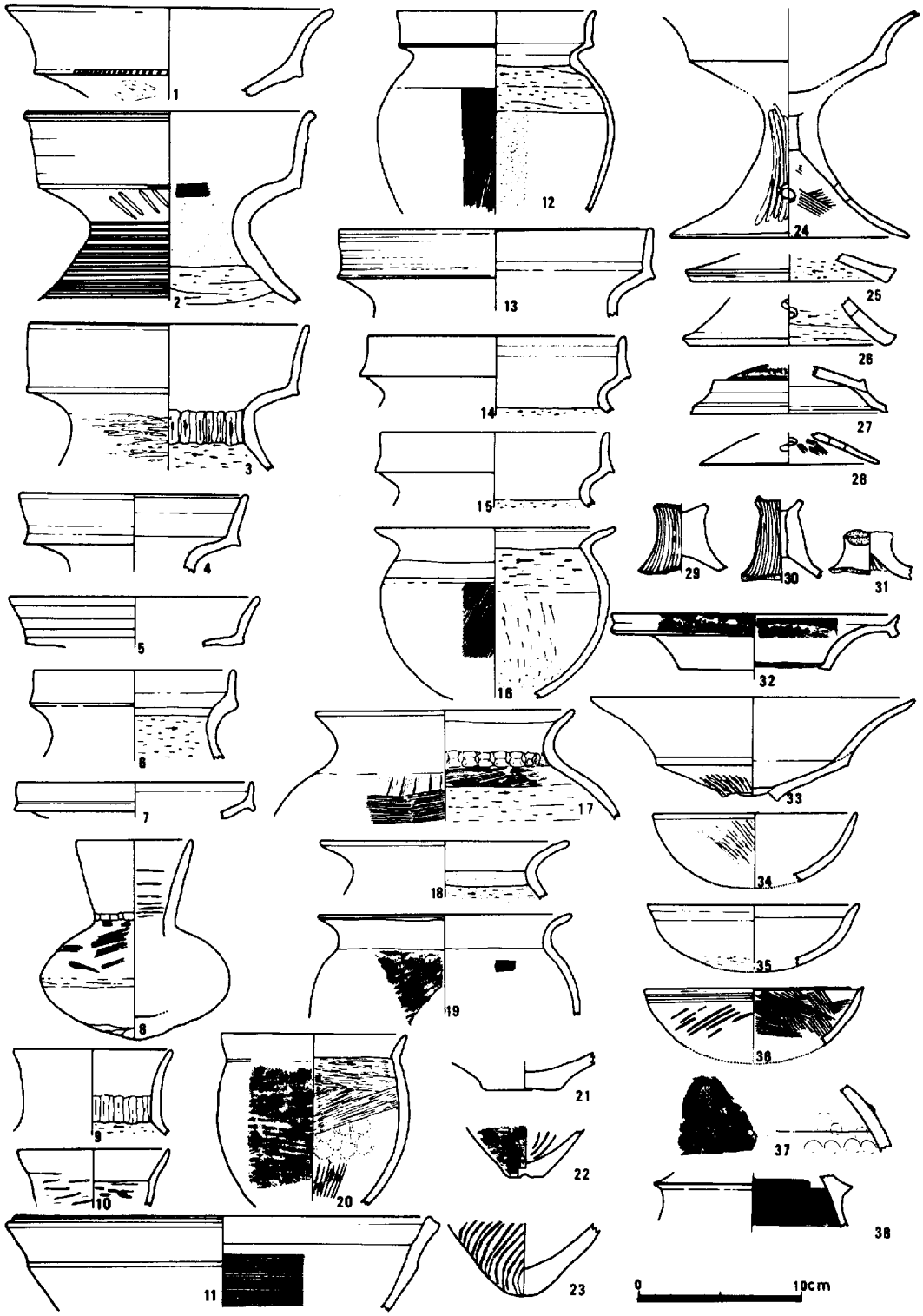


第24図 No155建物 (S＝$\frac{1}{60}$)

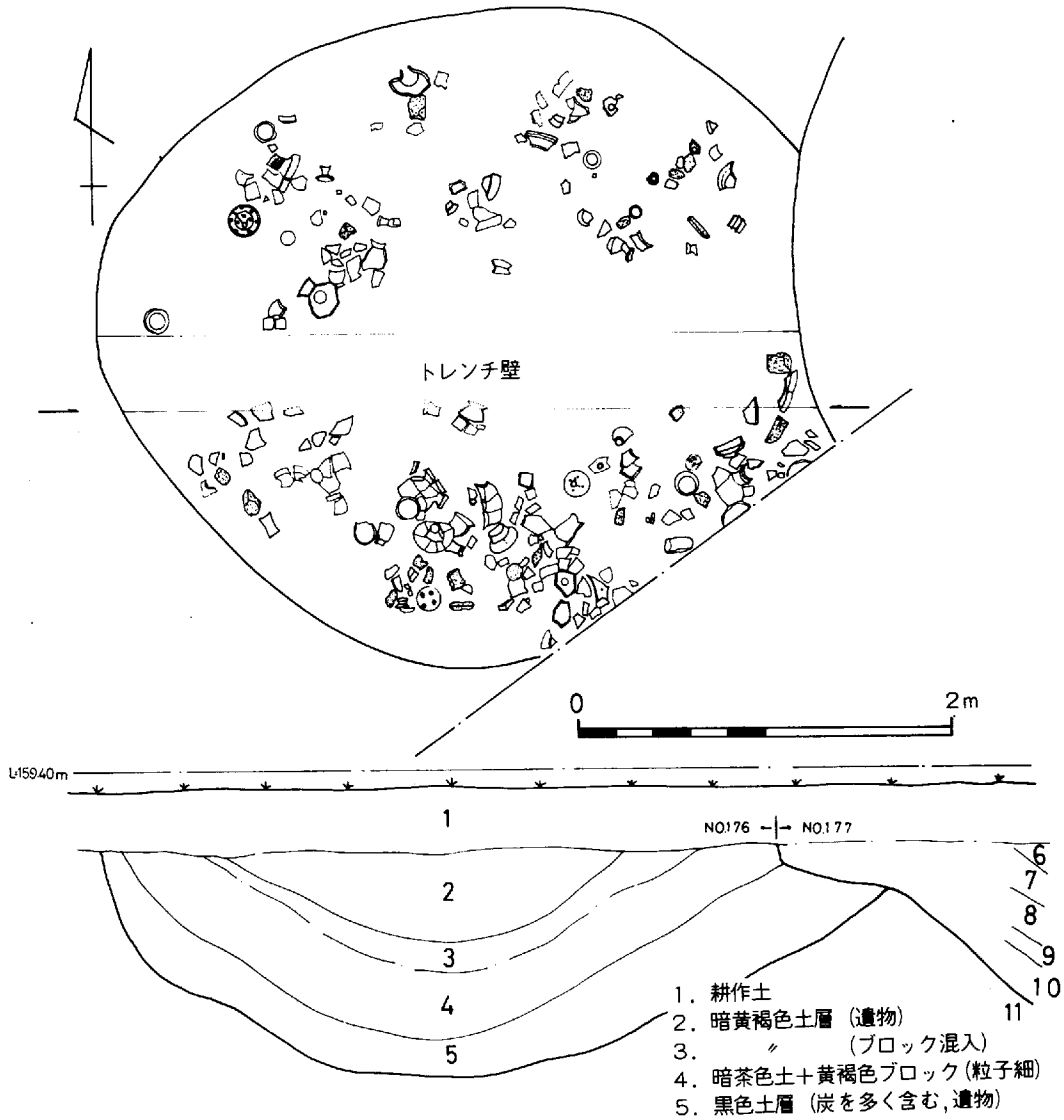


1．黒色土層＋暗黄褐色土層
2．暗黄褐色土層（砂質）
3．黒色土層（炭を多く含む遺物）

第25図　No174土壙（S＝$\frac{1}{40}$）



第26図　No174土壙出土遺物（S＝$\frac{1}{4}$）



第27図 No176土壙（S＝$\frac{1}{40}$）

壺形土器

Ⓐ 長頸にて，複合口縁を有するもの（1～6・18）

Ⓑ 若干広がり気味の直口を有するもの（48・49）

Ⓒ 長頸にて水平に広がる口縁を有するもの(94)の大きく三形態に別けることができる。

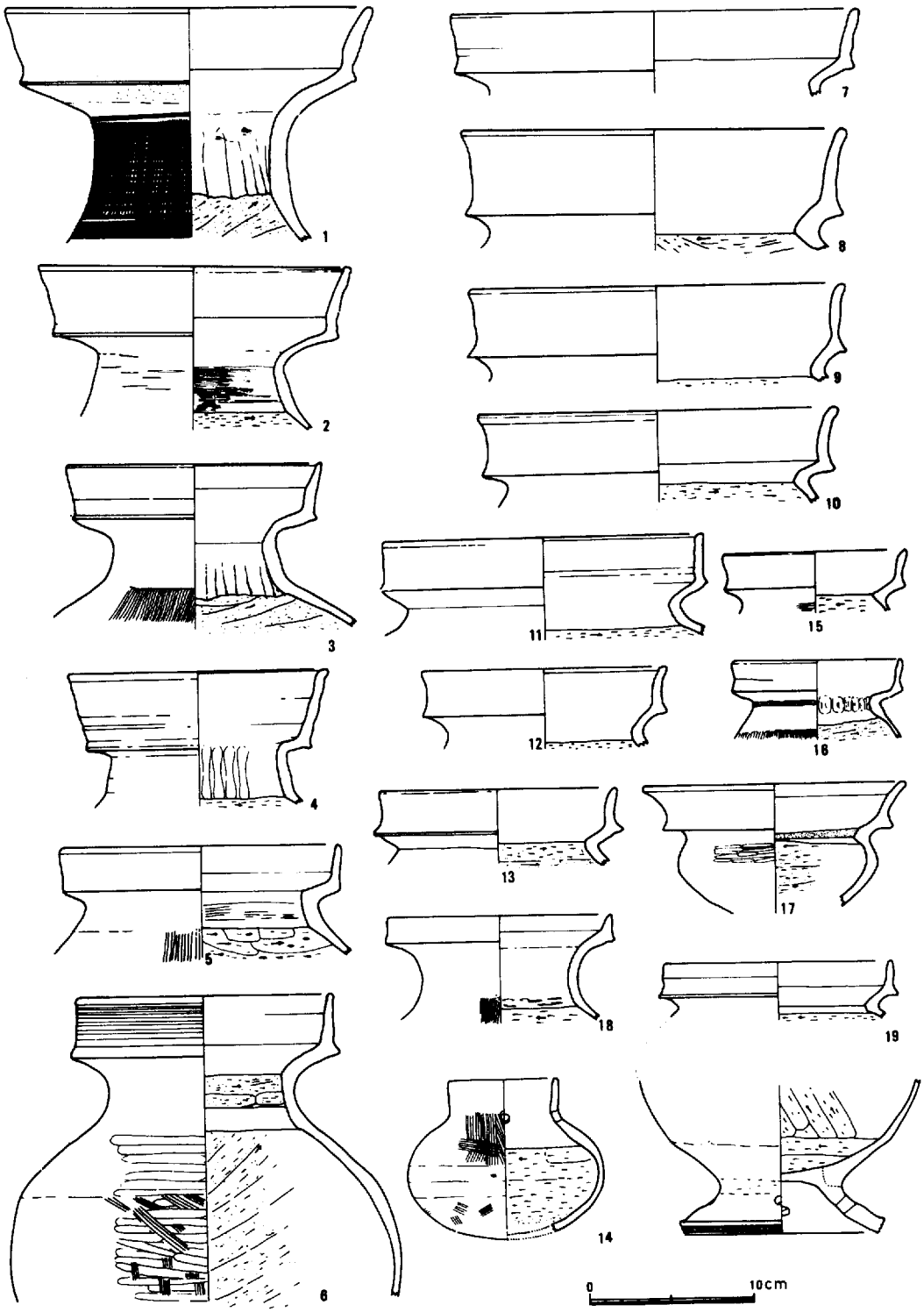
Aの口縁部内外面は，回転によるナデが行なわれており，頸部外面はナデによるものと，ヘラ磨きによるものがある。1は刷毛状工具による縦ナデ後に，回転を利用した沈線を行なっている。内

面は静止しぼり目が見られるものが多く，ヘラ磨き感のするもの，ごく細の刷毛ナデのものが若干ある。頸部下位はヘラ削りが行なわれており，右回りに削ったものが多数を示めている。外面胴部は，刷毛ナデ後にヘラ磨きしたものがある。最大径を胴部中位に有し，色調は赤褐色を呈する土器が多い。丹塗りは，内面しぼり目上位より外面の全体にみられる。3・4・6等がそれである。Bは，2点のみである。口縁端部に平坦面を持ち，そこに2本の凹線がみられ，内面ヘラ削り上位より外面にかけ丹塗りが行なわれている。49は，器壁が均一して作られており，内外面ともナデにより仕上げられている。内面くびれ部下位に輪積み痕跡を残す3本の粘土紐がみられ，その上を刷毛ナデにより調整している。外面全体に刷毛目がみられ，ススが付着している。Cは，1点のみである。整形技法，胎土，色調共に他の伴出土器と異なっている。まず，器壁が均一し，硬度に焼きあがっている。色調は明茶色を呈している。外面上半は，刷毛，下半はヘラ磨きにより仕上げ，内面上半は指頭圧痕が全面に目立ち，下半は圧痕の上をヘラ削りによって調整している。金雲母の混入が多い土器である。93も叩目を有する甕形土器。

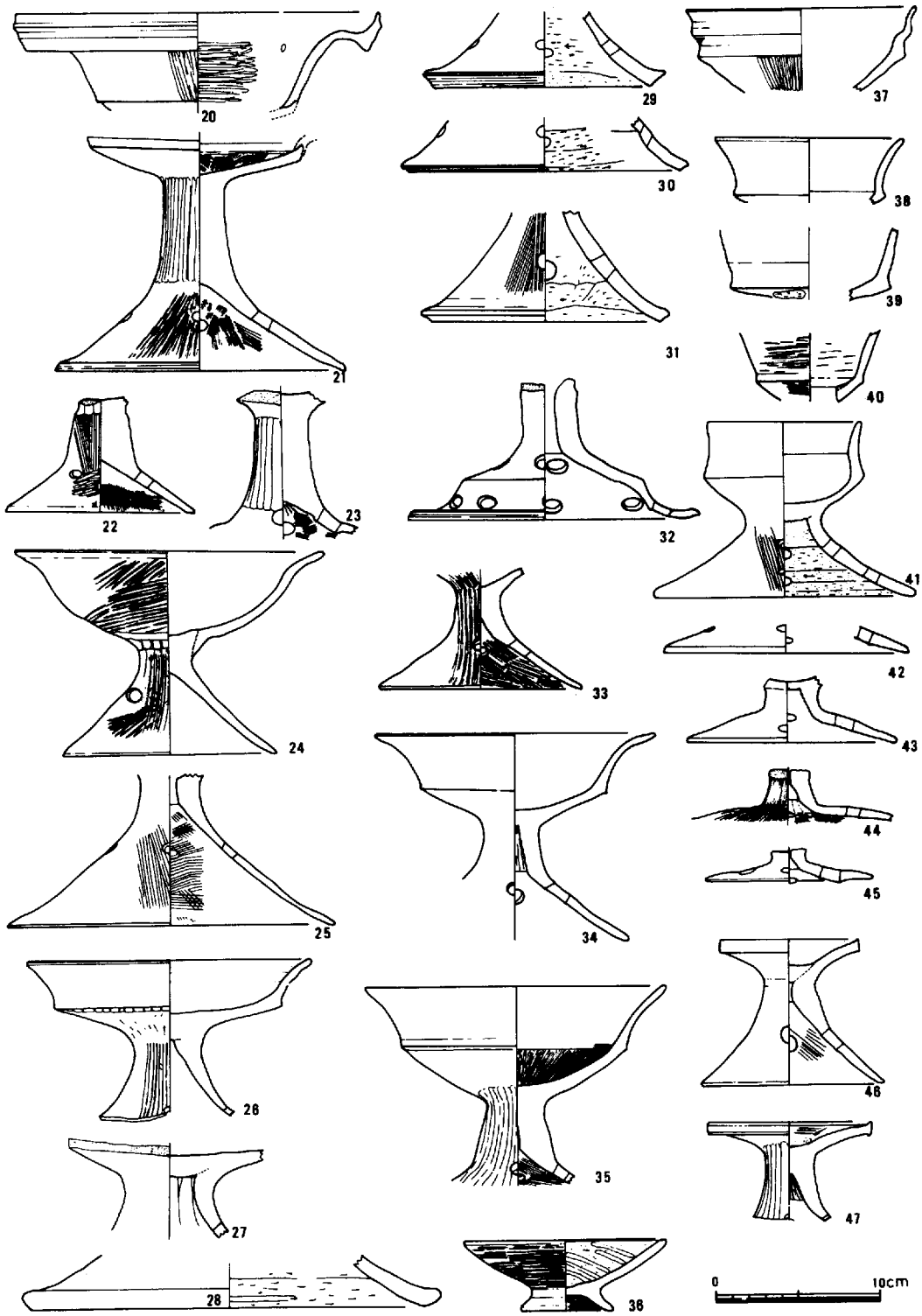
これらの土器は，全体に器面がすすけているものが多い。最大径を胴部中位上に有し，急に底部に向ってすぼまるものが多い。不安定な凹状平底を持つものが多いが，85のように丸底に近いものもある。口縁端部に稜線をもつ小さい口縁部と，丸くおさめてある口縁部の二種類がみられる。後者は，外面中位及び下位にかけてヘラ削り，刷毛かきとり等を行なっており，前者は74のみにヘラ削り後，ナデが行なわれている。叩目は，左下より右上に向って施文されているが，88のみにその逆がみられる。80・83・84等は上部に水平に施されている。内面は1～5条の粘土紐接合部分がみられ，その上に刷毛及び指頭によるナデがある。83は，非常に荒い刷毛ナデがみられる。胴部は穿孔されている。内面にヘラ削りが行なわれているものはみられず，88・90の内面底にヘラ削り後ナデにて消したと思われる痕跡をとどめるが，不明瞭である。

№190住居址（第32図，図版20—1）

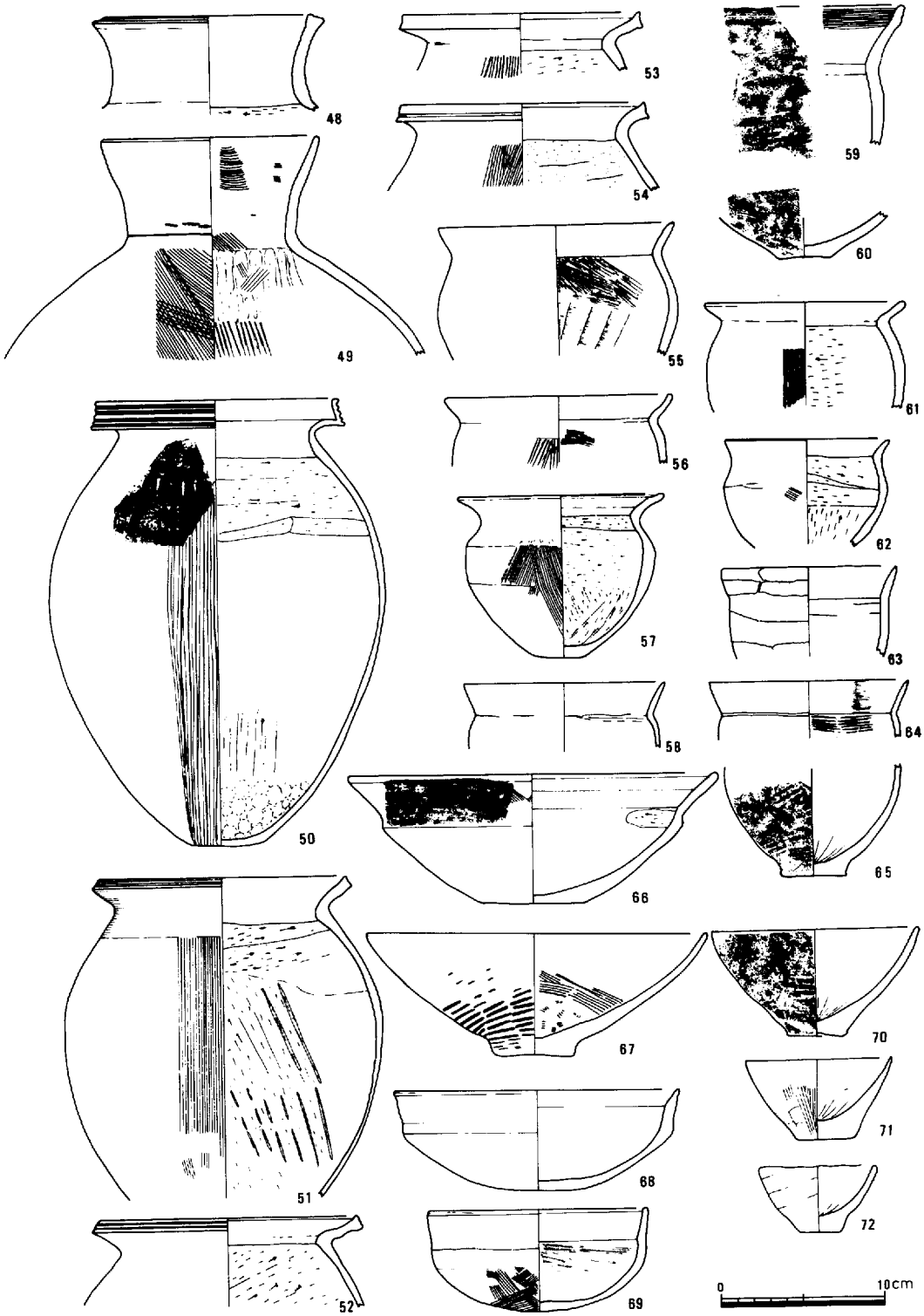
2区№191住居址及びそれを廻る周溝により一部を破壊され，さらに近年の水田耕作により壁体上部に削平を受け，表土より床面まで約30㎝位という状態であった。住居円形の掘り方は，川原石円礫（5×5㎝）の堆積している氾濫原平坦部に作られている。本遺跡出土住居址49軒中での，円形プランを有する7軒のうちの1軒である。火災にあい放棄された唯一のものである。壁体上端には，板状の炭化材が住居址中心方向に約18本残存していたのが見られる。それらは，南東，北西部分にまとまって残存していた。北東部にあっては，№191住居址を作る際に炭化材が取り除かれている。南西部においても，周溝掘開の際に取り除かれた可能性が考えられる。正円形と隅丸方形の中間の形を呈し，主軸方位（N—21—W）を中心に左右3本づつ計6本の主柱によりささえられたであろう穴を残している。柱穴の直径は約30㎝前後であり，柱間距離は北辺284㎝，南辺305㎝が最も長く，東西4辺がアンバラスではあるが，まとまっている。住居中央には，長軸110㎝，短軸95㎝，深さ45㎝の3段に掘られた方形ピットがあり，ピット内には下部に灰が，上部に炭が堆積している。その上面には，甕8が上からの力により破砕された状態で出土している。中央ピット西側には，70㎝×70㎝の焼土（長期使用を物語る灰色を呈している）がみられ，それと対称的に東側には



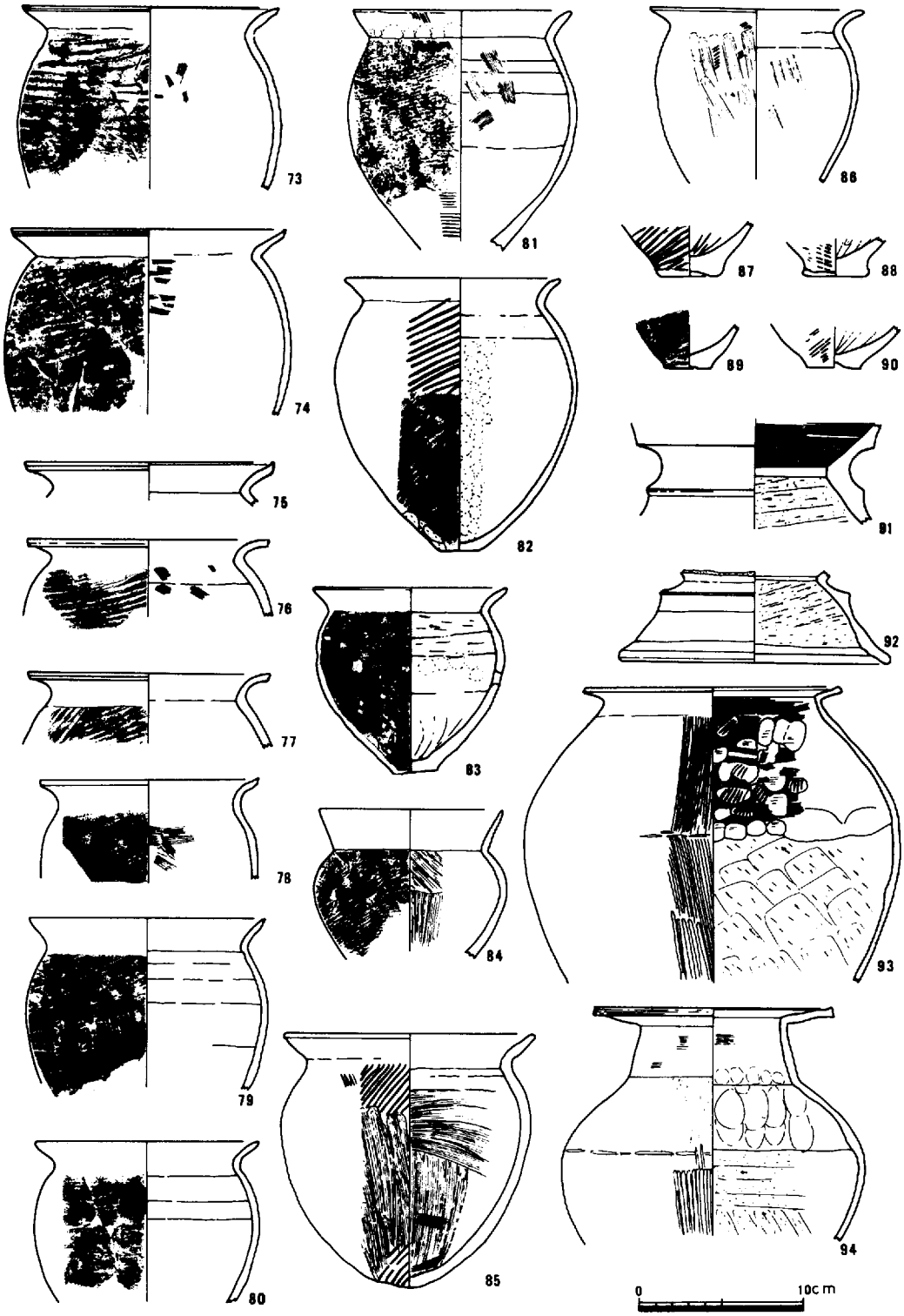
第28図　No176土壙出土遺物（S＝$\frac{1}{4}$）



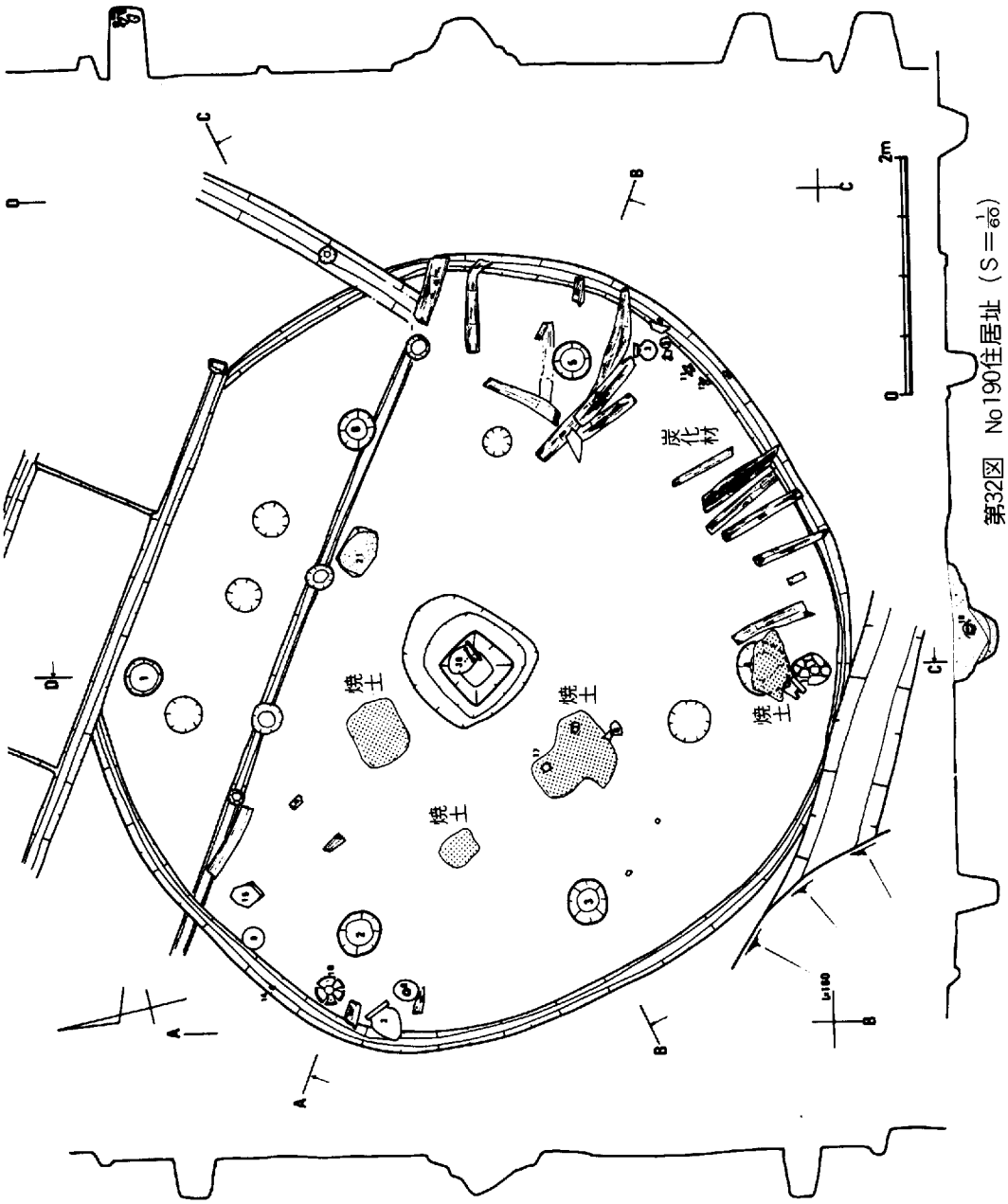
第29図　No176土壙出土遺物（S＝$\frac{1}{4}$）



第30図　No176土壙出土遺物（S＝$\frac{1}{4}$）



第31図　No176土壙出土遺物（S＝$\frac{1}{4}$）



第32図 No.190住居址（S＝$\frac{1}{60}$）

40㎝×26㎝の平坦面を持つ石が置かれていた。又，床面上には，焼土ブロックが炭化材と混って見られた。遺物については，火災を受け，崩れ落ちた状態下より出土し，破砕しているものの，出土地点，使用個体数を把握できうる点においては格好の一例である。

遺物出土状況

住居内床面より計21点の遺物が出土している。そのうち，6・17・17′・18・20・21を除き，すべて主柱穴の外側，壁体溝内側の帯状範囲での出土である。これらの遺物分布から，土器のしめるスペースを大きく4ブロックに別けることができる。

※第1のブロックは，pit 4の南側に，焼土をかぶり斜めにたっている**1**の大型甕形土器，完形品であったものであろう。

※第2のブロックは，pit 5の南側に集中している。**3・4・5・11・12・13・16**の小型のもの7点，そのうち砥石が1点含まれる。**4**のみが脚部を失っているが，他は完形品であったものであろう。

※第3のブロックは，pit 2の西側に集中している。2・8・9・10・14・15のやや中型のもの6点，すべて完形品であったものであろう。

※第4のブロックは，中央のピット内及び焼土を中心に，**6・7・17・18・21**の4点。このうち**18・21**は完形品であったろうが，**6・7・17**は1個体部をなさない。

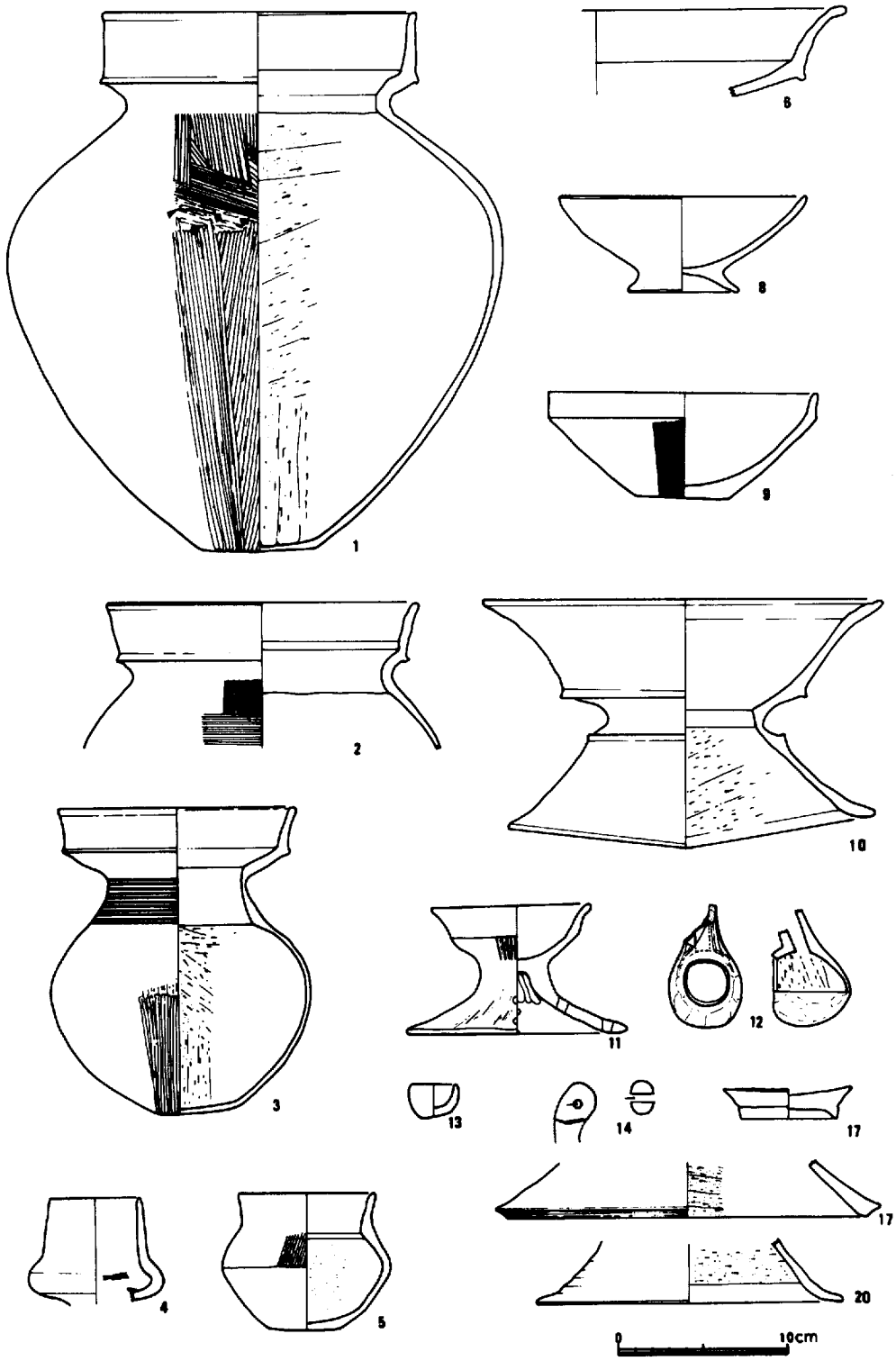
※他に pit 1の柱穴底より，**17・19・20**の3点，すべて小破片で，丹塗りが行なわれている。これらのうち，使用目的までは明確でないが，実用品（完形品）として可能と考えられるものに，土器13点，石器3点，計16点があげられる。なお，土器18点中丹塗りを行なっているものが，半数の9点を占める。

遺　物（第33・34図，図版67—1）

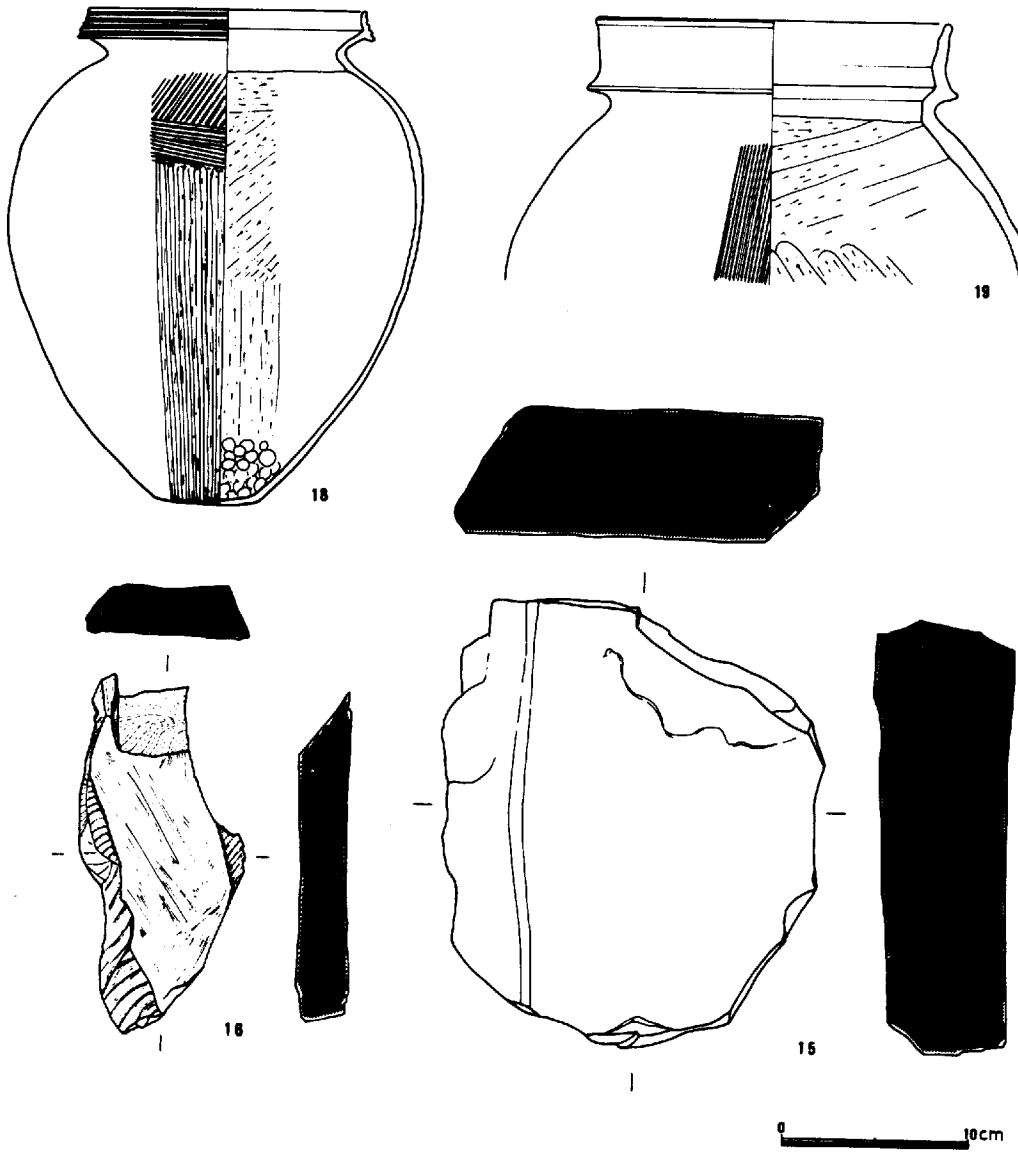
甕形土器（1・2・18・19）——胴部より「くの字」状に折れまがり，垂直に立ちあがるもの，少し開きながら外反するもの，すぼみながら外反し，ヘラ状工具による沈線をもつものとの3形態の二重口縁がみられる。胴部外面整形は，上部が刷毛状工具により，肩部から下はヘラ磨きにより仕上げられている。内面整形は，上部が斜行する右廻りのヘラ削り，下部は同じく縦のヘラ削りが行なわれ，器壁は薄く仕げている。18の内面底部には，指頭圧痕がみられ，1・18′の外面平底部は，胴部より継続したヘラ磨きが行なわれている。

壺形土器（3・6）——甕形土器の整形に類似している。長頸部に7本の凹線が施され，胴部内外面はヘラ削りと丁寧なヘラ磨きが行なわれている。又，平底部にも同じく胴部より継続したヘラ磨きがある。胴部厚は2～3㎜と非常に薄いものである。6は口縁部内面に丹塗りが行なわれている。

鼓形器台（1・10）——口径23.7㎝，器高14.7㎝，底径21.7㎝を測る。口縁部径が底部径より2㎝小さく，接続部は2段つくられている。その部分は非常にシャープにつくりあげられている。外面をナデ（火を受け剝離している）により，内面は上部ヘラ磨き，下部は右廻りのヘラ削りで仕上げている。外面，内面上部に丹塗りが行なわれている。器壁は，上下端部にゆくにしたがって肥大



第33図　No190住居址出土遺物（S＝$\frac{1}{4}$）



第34図　No190住居址出土遺物（S＝$\frac{1}{4}$）

し，丸くおさめられている。この器台上に置かれる土器は，本住居内出土品をみれば３のみが可能であろう。

高杯形土器（11・17′）――本品も，器台と同じ部分に丹塗りが施されている。全体に丸みを持ち，シャープさに欠けている。短脚部には，二段の穿穴が四方に，計八ケ所みられる。脚部外面はヘラ磨き，内面は，しぼり部分下にナデが行なわれている。

鉢形土器（９）――本品も，外面刷毛ナデ後に丹塗りが施されており，内面は丁寧なヘラ磨きで仕上げている。

低脚杯形土器（8）――口径14.6cm，器高5.7cmを測る。非常に薄く作られた土器であり，内外面全般に黒斑がみられる。脚部にのみ黄褐色部分を残す。内面に刷毛目が部分的にみられる。

小型土製品（4・5・12・13・14）――台付直口壺形土器，坩形土器，パイプ形土製品，手捏ね土器，勾玉等がある。パイプ形土製品は，球体を呈し，上部に2.4cmの穴を穿ち胴部に連絡する中空の柄状管がとりつけられている。外面は多面を持ち，ヘラ磨き後，丹塗りが行なわれている。内部は右廻りのヘラ削りが行なわれている。

砥石（15・16）――二点とも広口両面を利用しており，やや凹状になっている。16広口面には斜行する擦痕がみられる。16は15にくらべて小型で軽く，持ち運びの可能なものであろう。

石（21）――川原石そのものであり，40cm×25cmの平坦面を持ち，その部分を利用したものであろう。

No.177溝出土土器（第35図・36図）

1～4は，複合口縁を持つ甕形土器である。色調は乳灰色を呈し，硬質な感じを受ける。器外面は刷毛，内面はヘラの右削りが多い。6～10は，「くの字」状に外反する甕，壺形土器である。整形は甕形土器と同様であり，荒いヘラ削りである。10は胴部に内側からの穿孔がみられる。12～14は，碗形の身部，中空の脚部内面に明瞭な稜線をもつ高杯形土器である。身はナデ整形，脚部はヘラ磨き，ヘラ削りが行なわれている。挿入部に半球形の粘土がみられる。11は身に稜線を持つ，全体に大型品が多くみられた。第36図は，少し下位より出土したものである。

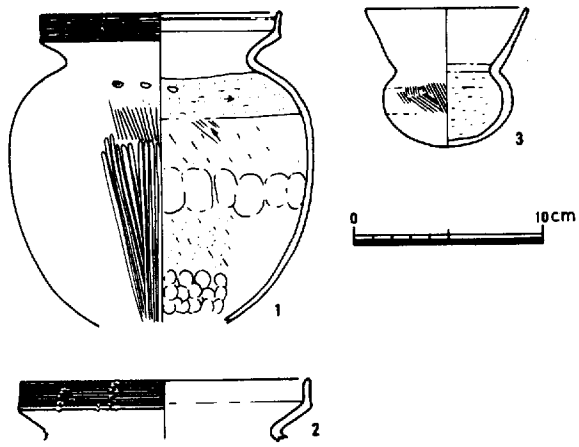
巴形銅器（第42図，図版70）

＜出土状況＞

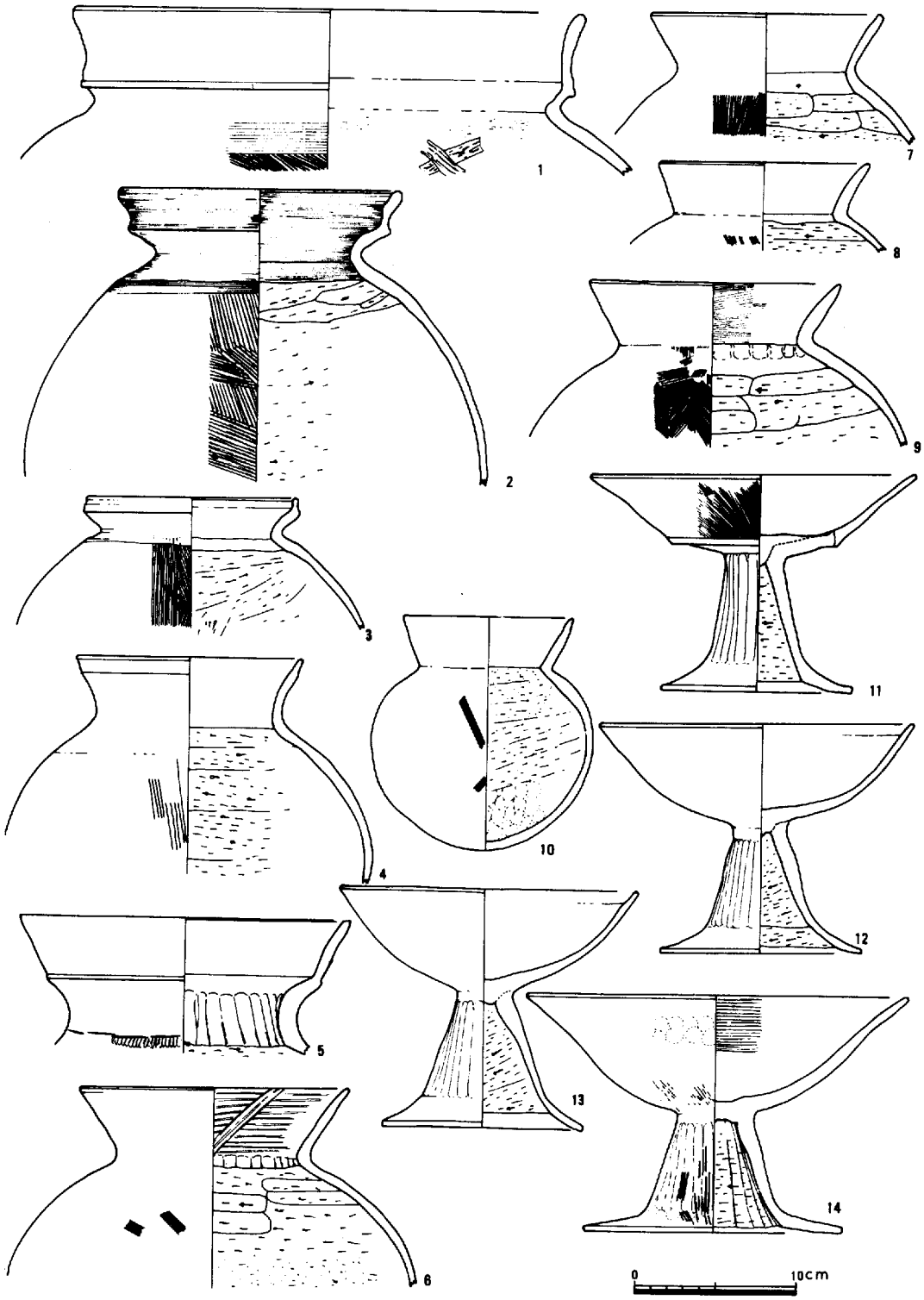
2区表土剝ぎの段階で，耕作土を除去した時，出土したものである。その地点をポイントして柱状に残し，作業を進めた結果，№191住居内に含まれることが判明した次第である。しかし，床面より約10cm遊離しており，住居内堆積土中に存在したことになる。

＜巴形銅器＞

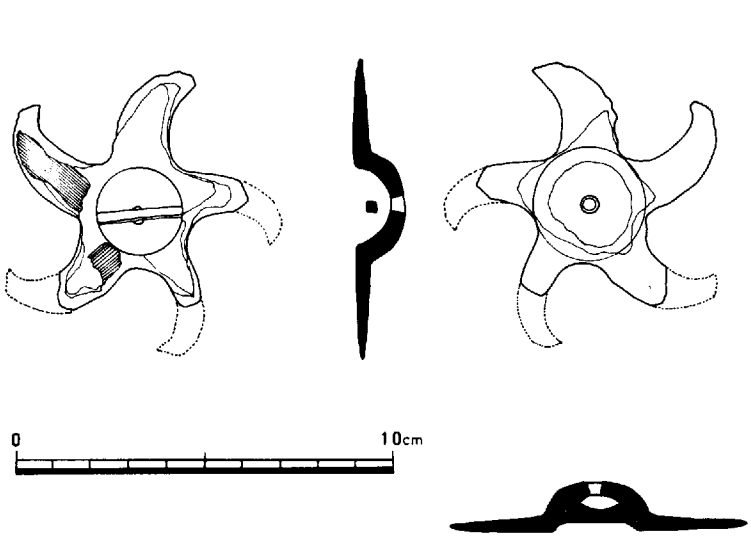
半球座五脚式に分類される（註1）。右捩りの五脚のうち三脚の先端部が欠損しており，全面に緑青がみられ，原品より着ぶくれの感がある。復原全径8cm，座径2.9cm，座高1.3cmを測る。欠損重量は42gあり，完形品では50g前後あったものと思われる。半球座の中央には，上から下に径0.4cmの貫通穴がある。半球座裏面は，空洞になっており中央に銅器を固定するための棒状の紐がついている。脚裏面には，有機物の付着痕跡があり，一度器物に着装していたことがうかがえる。



第36図　No177溝下層出土遺物（S＝1/4）



第35図　No177溝出土遺物（S＝$\frac{1}{4}$）



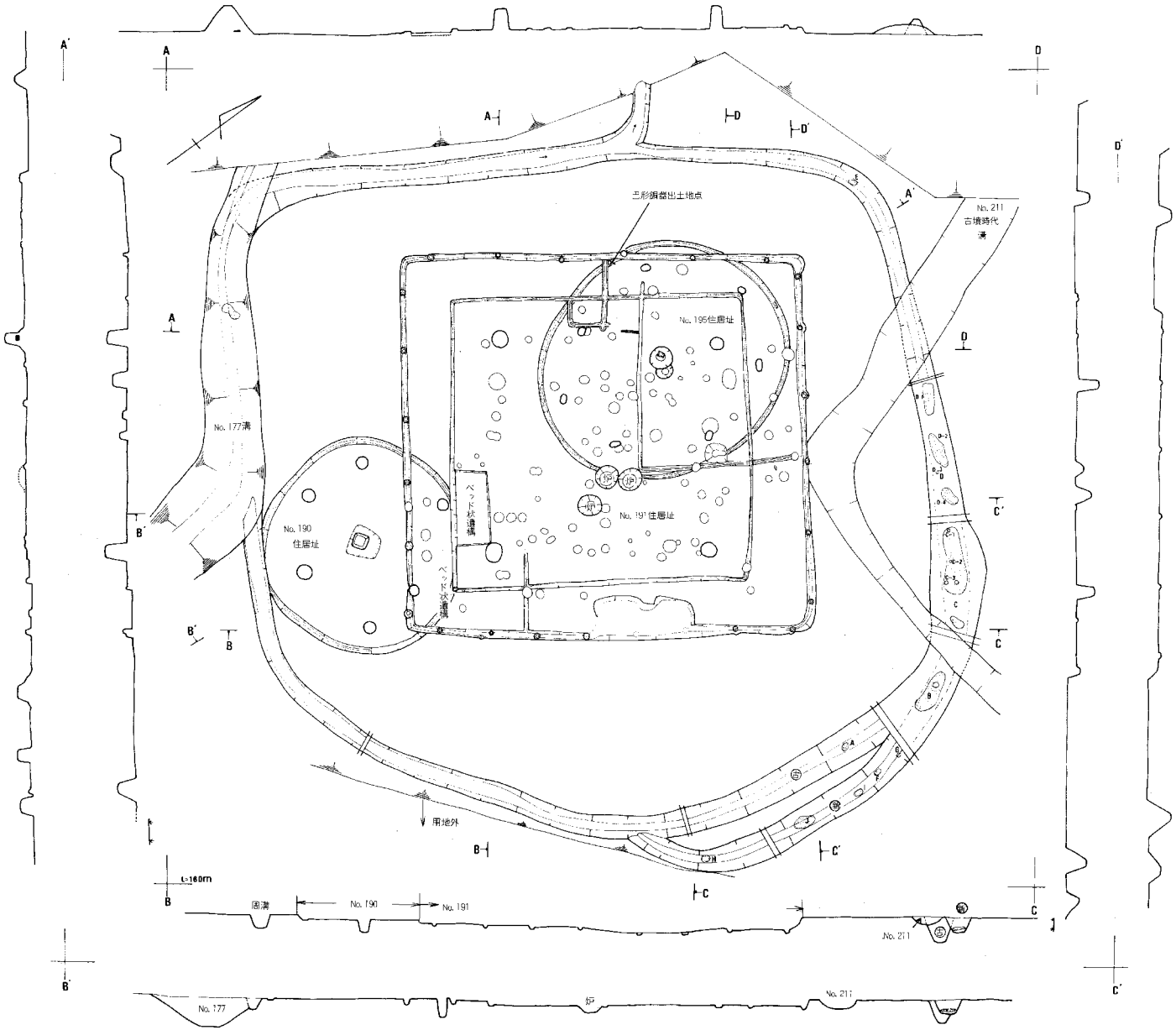
第42図 巴形銅器実測図（S＝1/2）

従来の概念では，弥生時代の巴形銅器は９脚あるいは７脚，６脚を有し，脚は左にまがり，中心部は截頭円錐形または半球形である。古墳時代の巴形銅器は４脚をふつうとし，まれに５脚がある。脚は右まがりを原則とし，中心部は円錐形である。（註２）

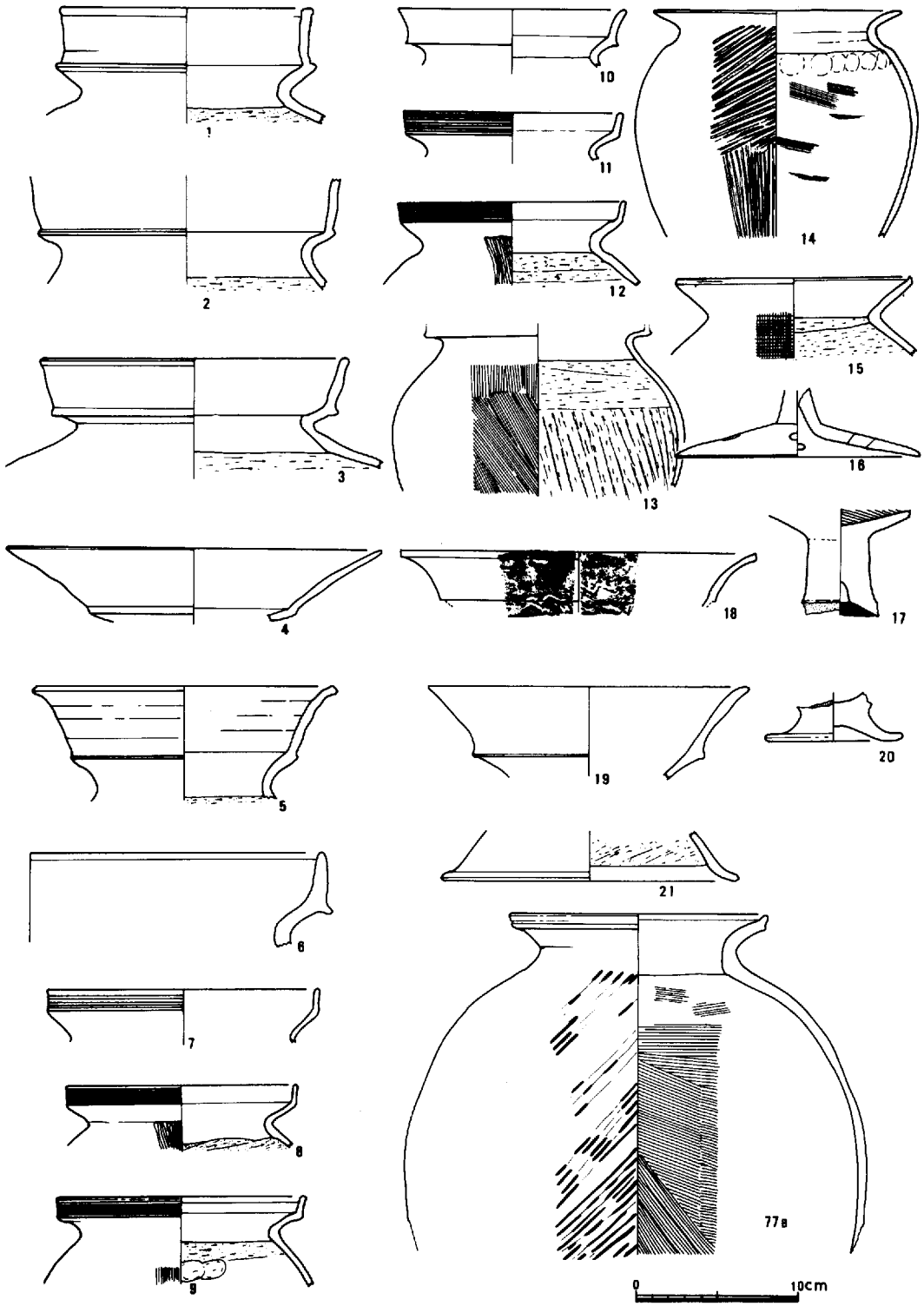
この点から比較すれば，本品の形態は５脚，脚は左捩りであり，どちらの部類にも属さない折中の形態を呈している。又，弥生時代64～50%，古墳時代55～33%に表わされる座径指数という点からみると，36～37%という本品は古墳時代に属することになる。（註３）

No.191住居址（図版25--２・第37図）

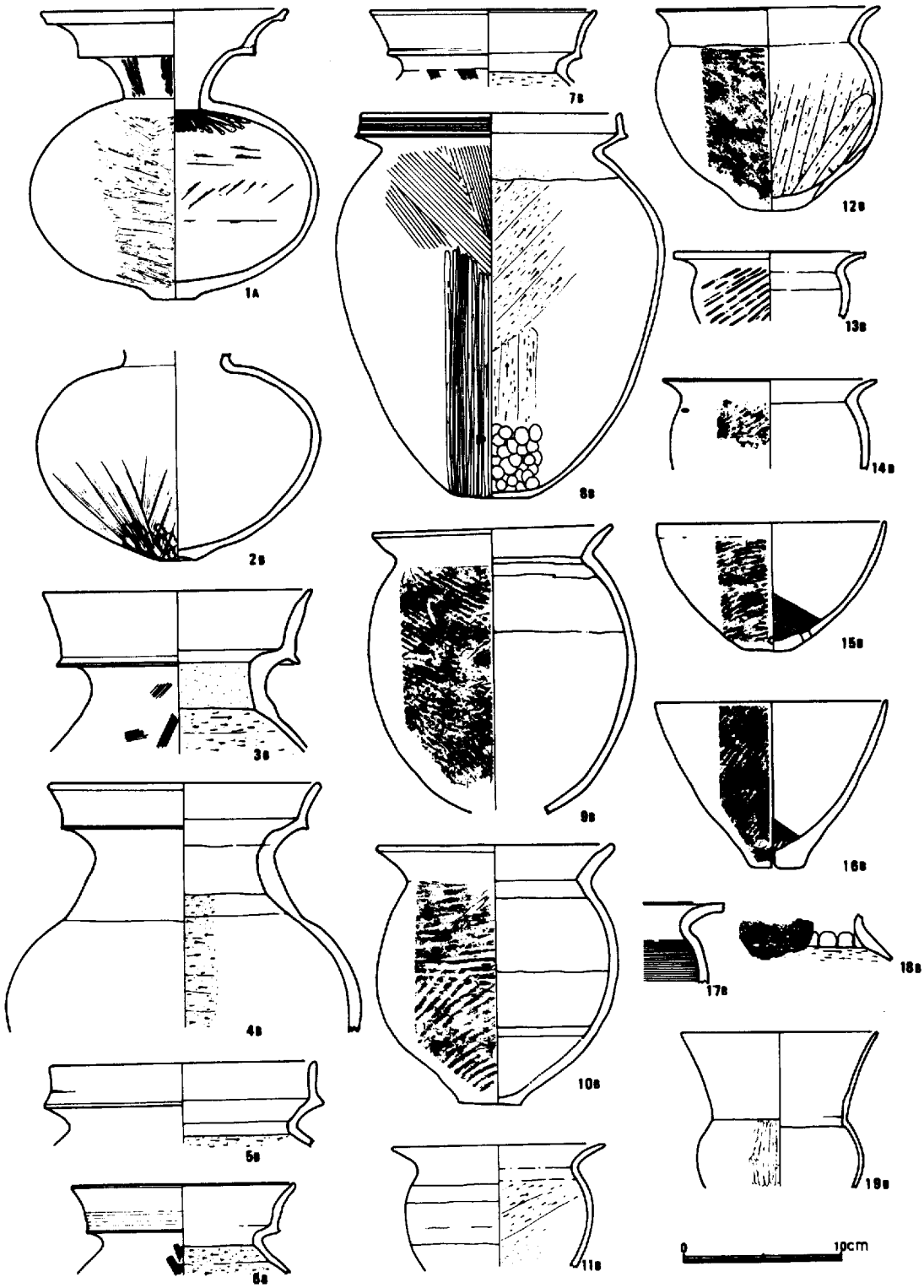
本遺跡中にあって，面積約140㎡という最大規模を有する方形住居址である。又，住居址を一周する巾70～130cmの五角形を呈する構No.192が伴っている。円形住居址No.190，No.195を切り作られており，南隅に２段のベット状遺構を，さらに内側に９m方形の周溝を配している。壁体溝内に約1.6～2.2mの間隔にて26穴が一周しており，北辺に６本，東辺に６＋α本，南辺に６本，西辺に６本，東辺のみが他と異なる配列となっている。主柱穴は４本からなり，柱間距離6.3～6.6m，内側方形周溝９m，住居壁東辺12.6mを測る。主柱穴の対角線が内側方形周溝につかわれ，方形周溝の対角線が住居壁東辺に使われており，30cmが基調になっているようである。東壁中央に不整方形の土壙が設けられている。住居内中央より若干東側に３ケ所の焼土壙（炉跡）があり，３ケ所とも時間的な差がうかがえる。すなわち，使用後のものを埋め戻し，あらたに土壙を掘り使用したようである。硬質に焼けあがっている。No.192溝は，五角形頂点部が浅く北西に向うにしたがって傾斜しており，五角形頂点反対地点に排水部分がみられる。排水部分と考えられる場所は，両側から掘り出した溝の延長である。No.177溝により一部破壊されている。No.192溝中出土遺物は，東側に限られ，溝底より上部にてみられた。遺物は，A～Jのブロックに別け取りあげを行った。破損状態，



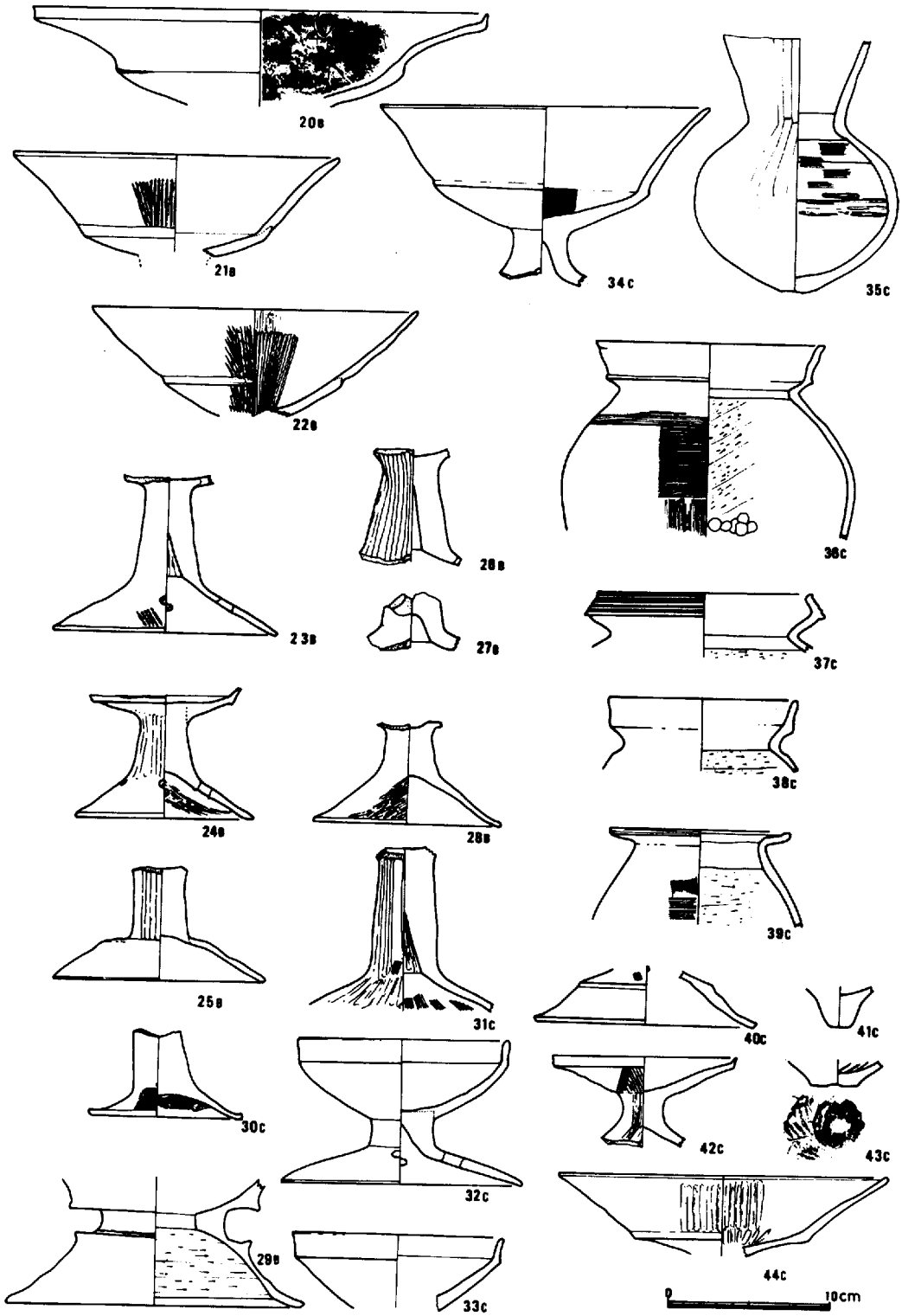
第37図　No.191住居址出土遺物（S＝1/100）



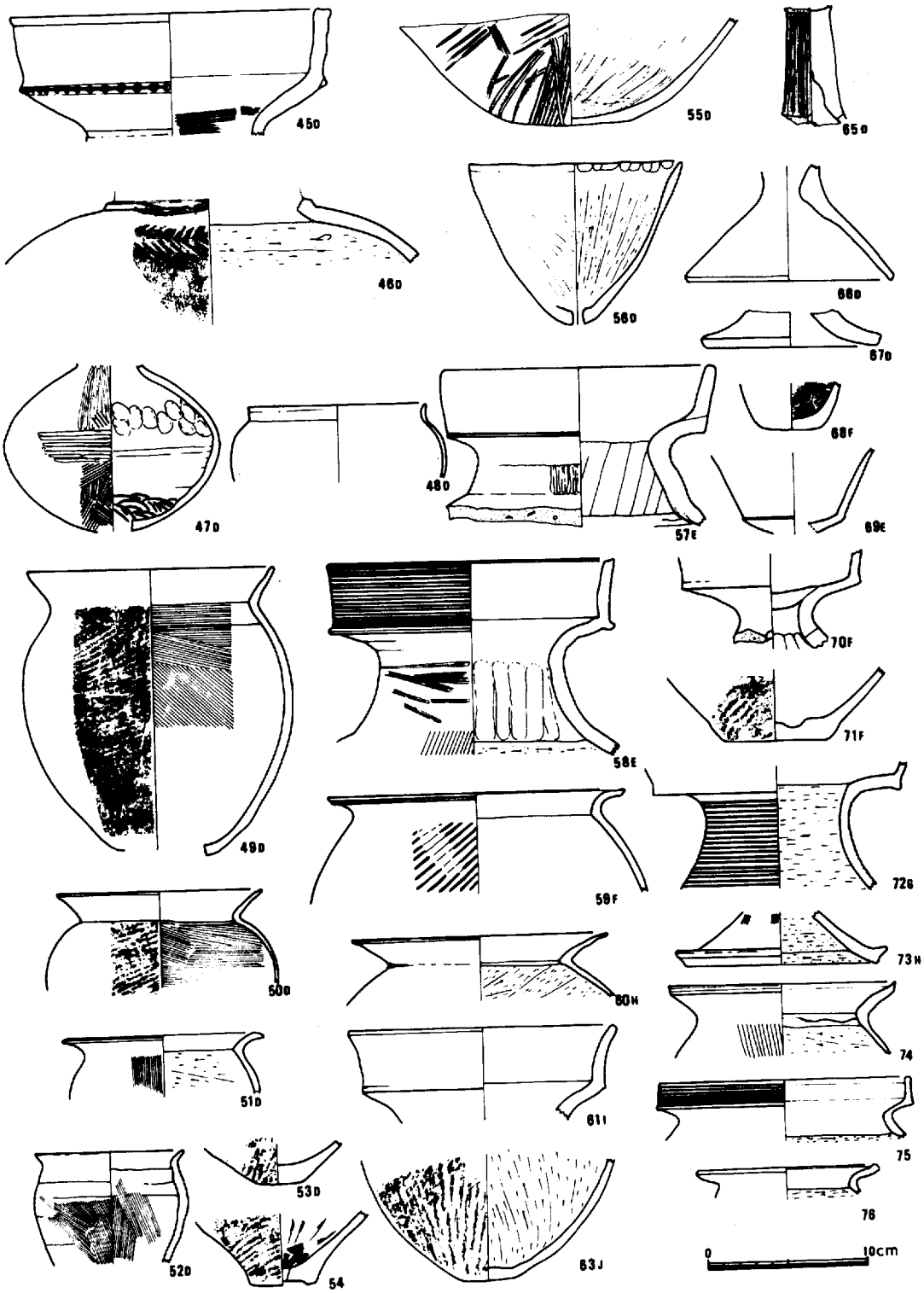
第38図 No191住居址出土遺物（S＝$\frac{1}{4}$）



第39図　No192溝出土遺物（S＝$\frac{1}{4}$）



第40図　No192溝出土遺物（S＝$\frac{1}{4}$）



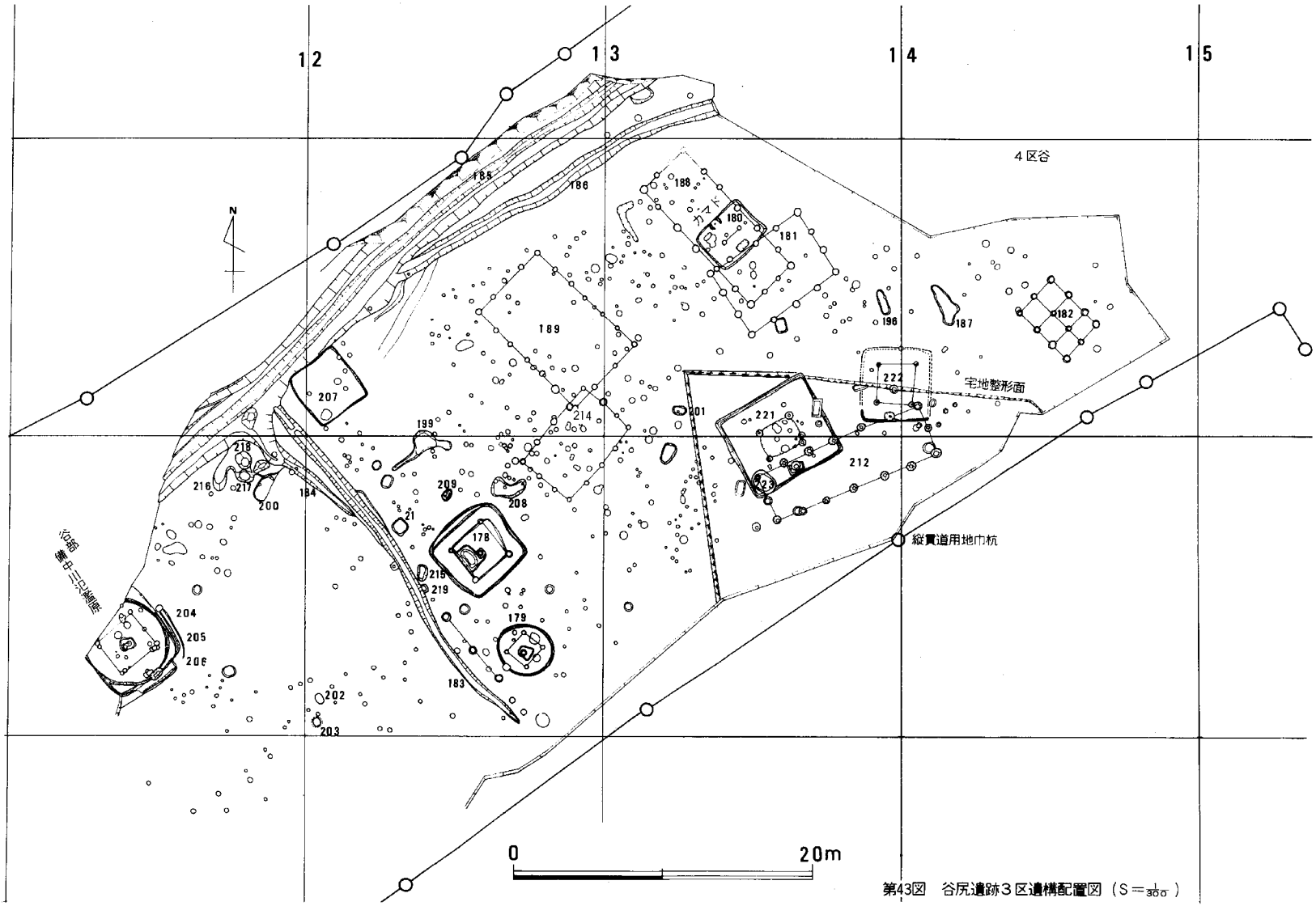
第41図　No192溝出土遺物（S＝$\frac{1}{4}$）

出土状態などにより，まとめて投げこんだ感じを受けた。

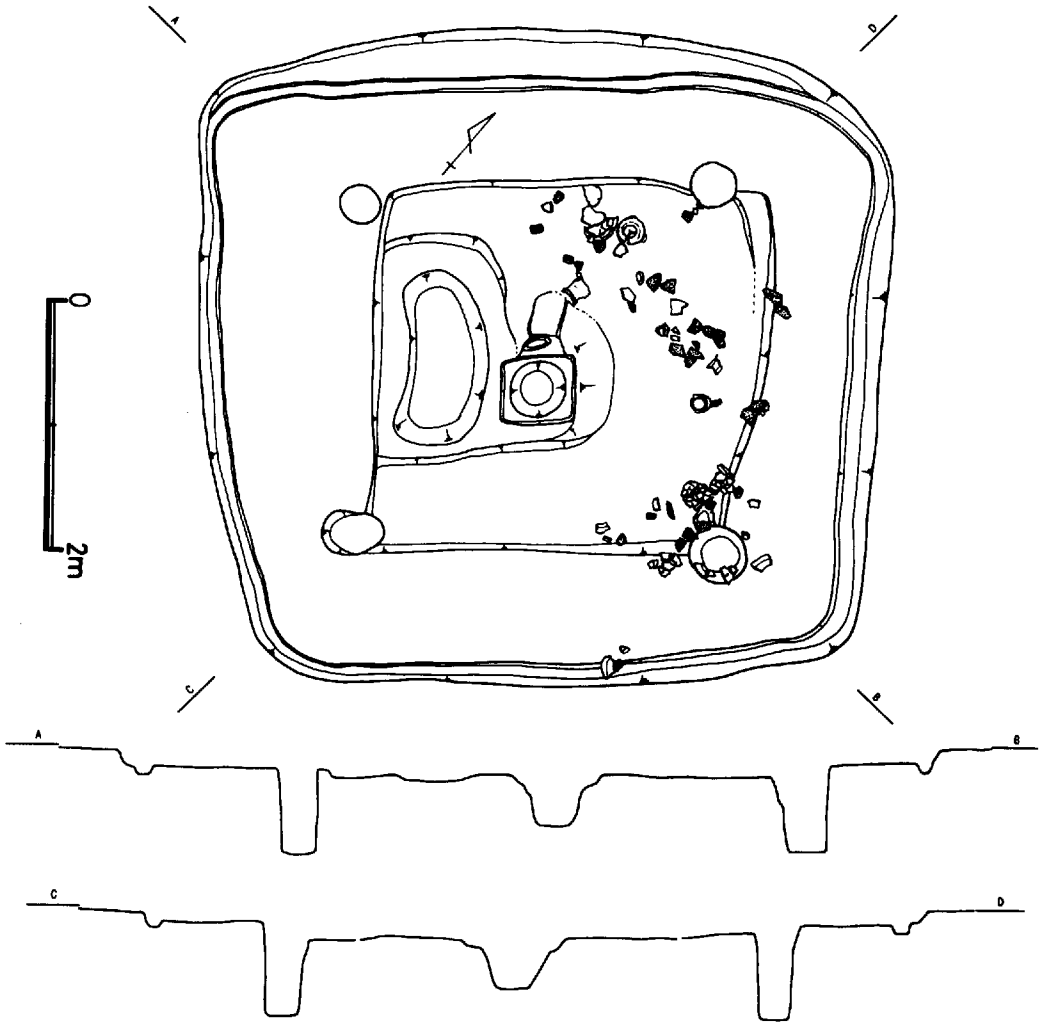
＜No.191住居址・No.192溝出土遺物＞（第38・39・40・41　図版68・69・70）

住居址内出土遺物は，すべて小片に限られた。複合口縁接合面が受部状に発達しているもの，口縁端部に櫛描きによる５～９条の沈線を有し，器壁を薄く仕上げた甕形土器がみられる。14は外面上部が右上りの叩目，下半刷毛ナデが行なわれ，内面は細かい刷毛ナデが行なわれている。高杯には短脚のものがみられる。溝出土のものは，一応すべて掲載した。Aブロックは１点みであり，溝底に近い位置より出土した。大きく広がる口縁部と，扁平球体状の胴部中位に最大径をもつ壺形土器である。口縁内外面ナデ，胴部ヘラ磨き，頸部縦刷毛が施されている。内面はくびれ下部に，しぼり目がみられ，胴部に刷毛状工具による整形が施されている。色調は淡灰色を呈する。Bブロックは，遺物が最も集中していた所である。８は，口縁部に櫛描きによる５～６条の沈線を有し，器壁を薄く仕上げた甕形土器である。外面上半に刷毛目，下半にヘラ磨きが施され，胴部内面上半は斜行する右回りのヘラ削り，下位に指頭圧痕がみられる。９は，右下より左上りに叩目が施されたものである。10は，胴部上半に平行叩目，下半に右上りの叩目がみられ，内面の輪積み接合面と一致するようである。12は，右上りの叩目が行なわれ，底部にもおよんでいる。その上から縦刷毛ナデがみられ，内面は顕著に縦のヘラ削りが底部より上部にかけて行なわれている。胴部下位に内側からの穿孔がある。高杯形土器には，脚中実のものより中空が若干多い。杯部は下位$\frac{1}{3}$位に接合面稜線をもつものと，杯部上位が垂直に立ちあがるものである。20は，内面２段に雑な櫛描き波状文がみられる。29は，明瞭な稜線を有する鼓形器台である。外面ナデが行なわれ，内面下半左回りのヘラ削りが行なわれている。外面丹塗りが行なわれている。Cブロックは，Bブロックには劣るが集中して遺物が見られた所である。32は口径12.8㎝，器高９㎝を測る短脚の高杯である。精選された粘土がつかわれ，内外面はナデにより仕上げられている。短脚に身部分を接合したようである。外面に丹塗りが行なわれている。34は，短脚にて４孔を有し，杯部内面には丹塗りが行なわれている。色調は黄褐色を呈する。36は，口径14㎝を測り，色調灰色を呈する復合口縁の甕形土器である。口縁内外面はナデにより仕上げており，外反するその部分に凸凹が生じているのが目立つ。胴部外面上半は，横位の回転による細かい刷目，下半は刷毛ナデが施されている。内面下半は，指頭圧痕，上半は斜位の右回りヘラ削りが行なわれている。６・７もこれに類似する所の多いシャープに仕上げた土器である。７の外面は丹塗りが見られる。37は，口縁端部にヘラ描きによる５条の沈線を有する。42は，口径11.5㎝を測る器台形の土器である。外面ハケ，内面ナデがみられ底部に砂粒が集っている。脚部に３孔を確認している。Dブロックも比較的集中していた。45は，口縁上端に凹状の平担面を持つ。口径20㎝を測る壺形土器である。立上がる口縁接合部に刻目を施こす。頸部に二条の凹線文がみられる。内面に刷毛ナデが行なわれている。46は，淡茶色を呈し焼成良好の壺形土器である。胴部と頸部の接合面外側に段を形成している。外面は刷毛目ナデが中心になっており，綾杉文状の文様が施されている。内面横位の右回りヘラ削り。47は，胴部中位に最大径13.4㎝を測る壺形土器であろう。色調は赤褐色を呈し，焼成良好である。外面は，上位刷毛ナデ，中位ヘラ磨き，下位刷毛ナデが行なわれている。内面は，頸部ナデから指頭圧痕文に移り，底では青海

波文ほど規則性はないが類似する圧痕文様がみられる。50は，口径13cmを測る甕形土器である。胴部より「くの字」状に外反するナデによる口縁部を持ち，胴部に右上りの細かい叩目が施されている。その上部に縦刷毛目ナデを行なっている。内面は整然と細目の横位刷毛目がみられる。57は，口径13.4cm，器高10cmを測る鉢形土器である。全体に作りが雑であり，外面はヘラ状工具により引っかいた感じがある。内面は，底より口縁部に向ってヘラ削りが行なわれている。口縁端部内面は，指頭圧痕がみられる。底に焼成前の径0.7cm孔がある。15・16が同形である。両者は外面に叩目，内面は回転によるナデが生じている。15の穿孔は底部になく，胴部下位に焼成前のものがある。16は底部の焼成前の孔が，焼成後に拡張されている。穿孔径は3点とも類似している。Eブロックは，3点のみが上層より出土している。58は，外面丹塗りが行なわれている。E～Jブロックは，小片が遊離し点在していたものである。59は，口径15.6cmを測り，外面に叩目のみられる甕形土器である。内面は指頭ナデにより滑らかに仕上げている。72は，頸部に18条の沈線が施された長頸壺であり，外面丹塗りが行なわれている。60は，胴部より「くの字」状に外反する薄い口縁部を有する。外面ナデ，内面は斜行するヘラ削りである。61は，口径16.8cmを測り，外面に丹塗りが行なわれている口縁部である。76は，口経11.5cmを測る壺形土器である。外面は細い刷毛目，内面は右廻りのヘラ削りが行なわれている。色調は明黄褐色を呈する。39も類似したものであり，口縁端部が蒲鉾状になる特長をもっている。3・7・54・57・58・69・74・75等はプラン内には入っているが上層より出土している。2・19・20・21・23・27・32・58・61・70・72・73は丹塗りが行なわれている。高杯に多いようである。（高畑）



第43図　谷尻遺跡３区遺構配置図（S＝$\frac{1}{300}$）

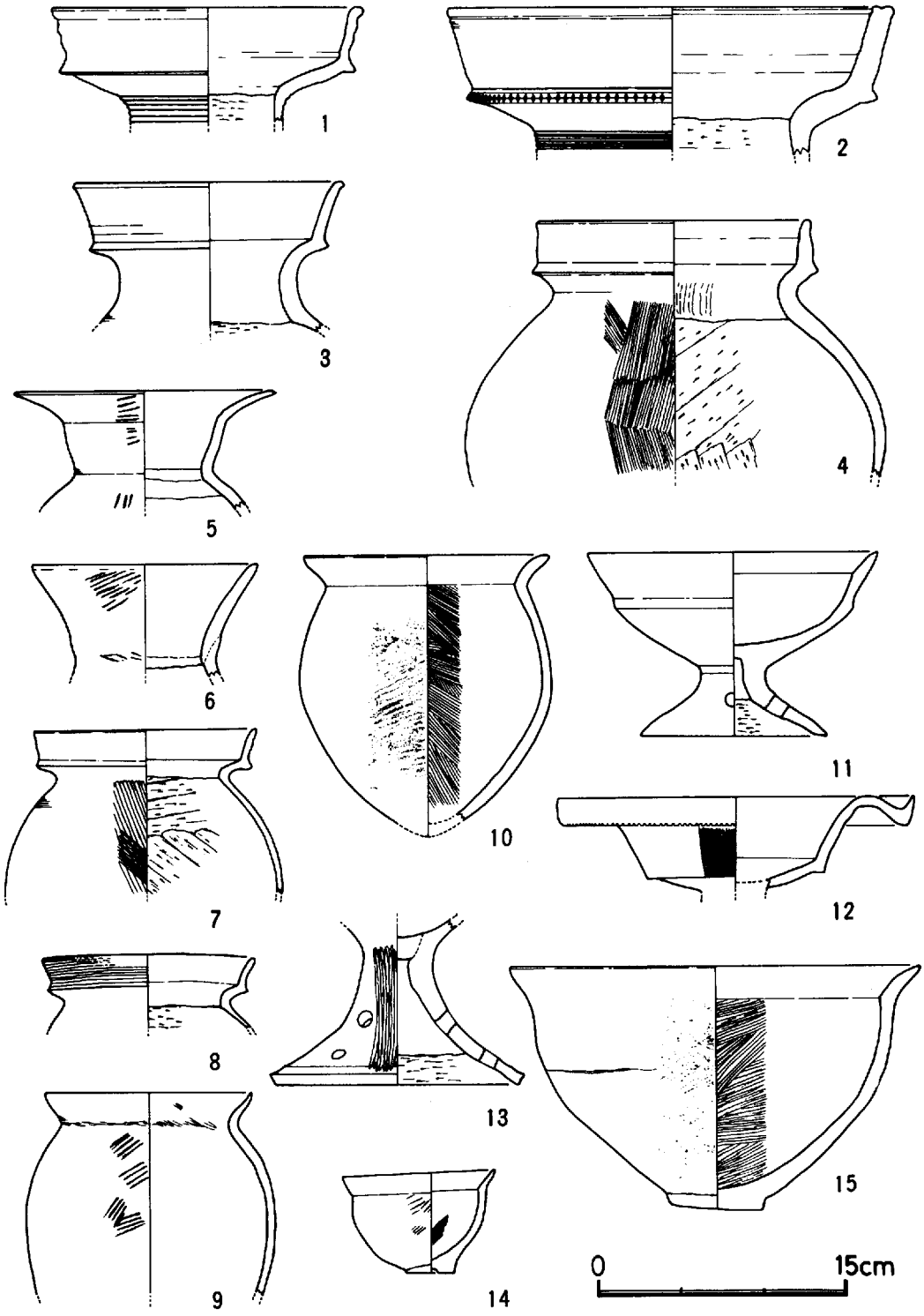


第44図　No178住居址（S＝$\frac{1}{60}$）

No.178住居址（第44図・図版31—1）

№179住居址の北側に1.5mの間隔を置き検出した。規模は一辺5.5，4.5，4.7，4.9mを測るやや台形の平面を呈す住居址である。住居址の掘込みは周辺で10～15cm中央で20cm前後を測る。住居址内周囲には巾0.8～1.3m，高さ5cm程度のベット状遺構を設けている。壁下の溝は一周しており，U字形又は逆台形の断面を呈している。柱は住居址掘込みの対角線上に検出した径30～46cm，深さ70cm前後を測る4個の柱穴を基本としたと考えられる。住居址中央には一辺60×55cmの方形の浅い掘込みを行いその中央に最大径45cm，上端よりの深さ45cmを測る円形の掘込みを持つ中央ピットを検出した。中央ピット底部には径4～5cm大の礫が30個程度堆積していた。中央ピットと西側ベッド間には長径1.35×短径0.65m，深さ4cm程度を測り不整長円形を呈す浅い落込みが認められた。中央ピットと浅い落込みの周囲には巾20～30cm高さ4cm程度の浅い高まりを設けている。

遺物は住居址の北東部に床面よりやや浮いた状態で礫とともにほとんどの土器が出土した。



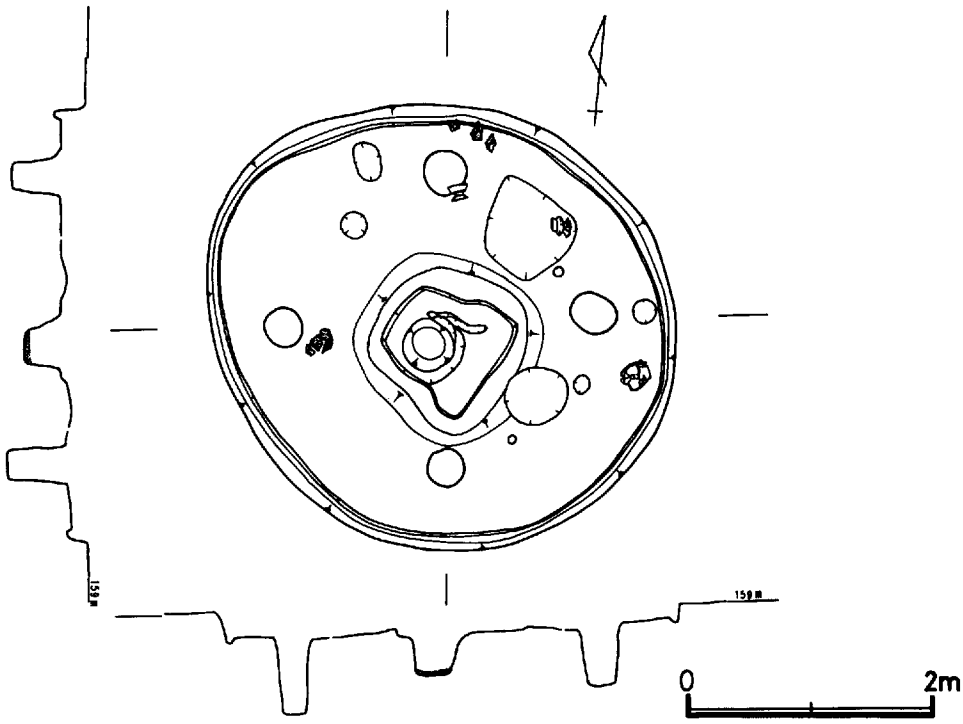
第45図　No178住居址出土遺物（S＝$\frac{1}{4}$）

出土遺物（第45図）

壺形土器(1)(2)(3)(4)はいずれも口縁部が上方に立上り，口縁部下端がやや突出している。(1)(2)の頸部には浅い沈線を巡らしている。(2)は口縁部下端の突出部にヘラ削り目文を施し，口縁端部上面がやや凹んでいる。内面のヘラ削りは(1)(2)では頸部上端より(3)(4)では頸部下端より下方に行っている。ともに丹塗りである。(5)は頸部より外傾し口縁部で大きく外反する器形である。(6)は頸部よりく字形に外反する口縁部を有する。(5)(6)はともに外面にタタキを施している。

甕形土器(7)(8)はく字形に外反する頸部を有し，口縁部が上方に立上る器形である。(7)の口縁部外面には櫛描状の沈線が認められる。内面は(7)(8)をもに頸部より下方にヘラ削りを行っている。(9)(10)は頸部がく字形に外反する器形でともに外面にタタキを施している。内面は(9)ではナデ調整，(10)では刷毛目調整を行っている。

高杯形土器(11)は杯部に稜線を持ち外反する器形である。短い脚を有し脚端はくせがなく拡がり3孔を穿つている。(12)は高杯形土器の杯部である。口縁部は大きく外反しながら下方に下り，口縁端部で再び上方に立上る器形である。口縁部下端にはヘラ刻目文を施している。(13)は高杯形土器の脚端で上下2孔一対の孔を3ケ所に穿っている。剥離が著るしいが外面にヘラ磨き，内面の下方にヘラ削りが認められる。鉢形土器(14)(15)は頸部がく字形に外反し，外面にタタキを施し内面に刷毛目調整を行っている。底部はともに平底である。(14)の底部中央は不整形に凹み，高台状を呈している。(15)の底部には木葉痕が認められる。

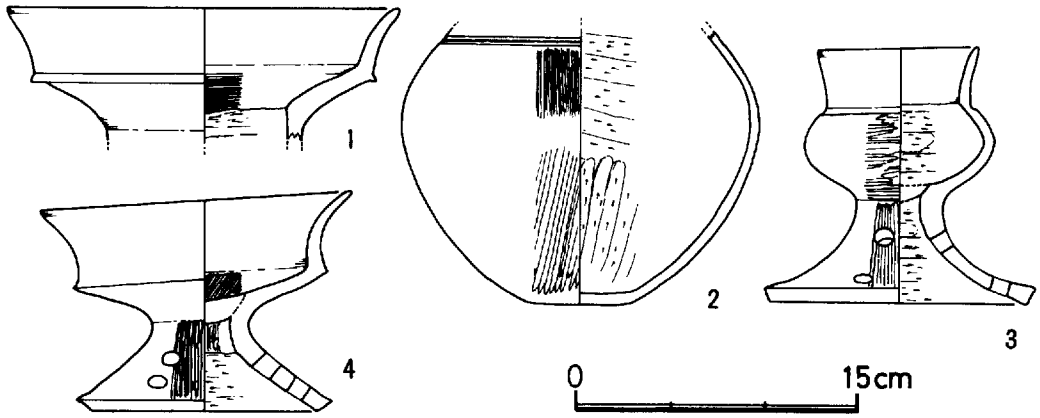


第46図　No179住居址（S＝1/60）

No.179住居址（第46図・図版32）

No.178住居址の南側に1.5mの間隔を置き検出した。規模は最大径3.95m，最小径3.5mを測り卵形の平面を呈す小形の住居址である。住居址の掘込みは床面まで15～20cm程度でかなりの削平があったと考えられる。壁下の溝はほぼ同規模の巾で一周し，U字形の断面を呈している。柱は等間隔に検出した径30cm前後，深さ40～50cmを測る4個の柱穴を基本としたと考えられる。中央ピットは不整形な浅い掘込みの中に径40cm，深さ30cmを測る円形の深い掘込みを持っており，さらにピットの周囲には最大径1.4m，高さ4cm程度の浅い高まりが設けられている。

遺物は住居址内の堆積土中からは比較的少なく，東半部の床面での出土が数点認められた。



第47図　No179住居址出土遺物（S＝1/4）

出土遺物（第47図）

壺形土器(1)は外反して立上る口縁部を有し，口縁部下端がやや突出している。内面の頸部より下方はヘラ削りを行っている。剥離が著るしいが外面及び内面の口縁部より頸部上端にかけて丹塗りが認められる。口縁部欠損の(2)は壺形土器の体部と考えられる。外面の体部上端には二本の沈線を巡らし，ここより体部最大径まで縦の刷毛目調整を行い，底部にかけて斜めのヘラ磨きを行っている。内面はヘラ削りを体部最大径を境に上半部で横方向に，下半部で縦方向に行っている。外面は丹塗りである。台付直口壺形土器(3)は頸部に一本の浅い凹線文を巡らし，やや外反して立上る口縁部を有している。口縁部は内外面ともヨコナデ調整である。体部と脚部の外面は丁寧なヘラ磨きを行い，内面にはヘラ削りを行っている。脚部は上下に2孔一対の孔を3ケ所に穿ち，くせがなく広がる脚部を有している。脚部内面を除き丹塗りである。

高杯形土器(4)はやや内傾して立上る口縁部を有し，口縁端部で大きく外反している。脚部は孔を(3)と同様に上下2孔一対に3ケ所に穿ち，くせがなく広がる脚端を有している。脚部外面，及び杯部内面の下半はヘラ磨きを行い，脚部内面にはヘラ削りを行っている。脚部内面を除き丹塗りである。

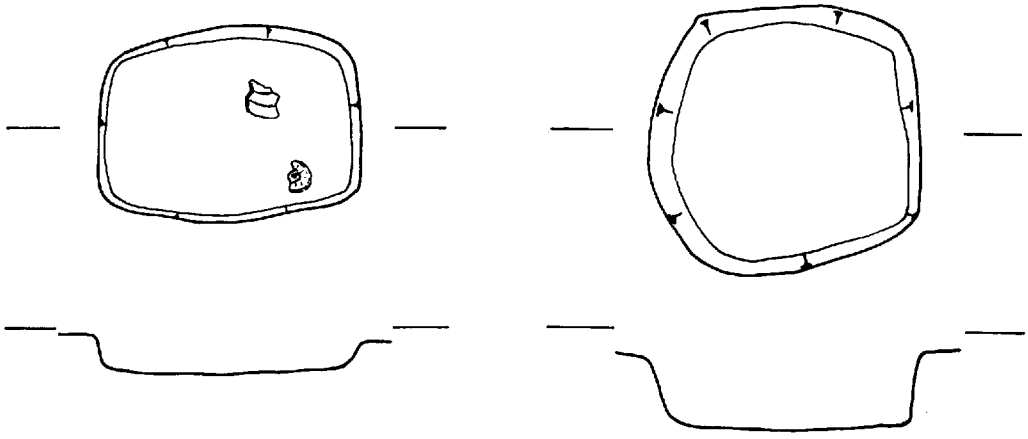
No.198土壙（第48図）

№189の北西側2mの位置に検出した。規模は長辺1.05×短辺0.8m深さ15cmを測り，長方形の半面を呈すピットである。床面はほぼ水平でピット内堆積土は黒褐色を呈していた。

出土遺物（第49図）

壺形土器(1)は口縁部がやや外傾して立上り，口縁部下端が下方に突出している。頸部は外面に細い凹線文を巡らし，内面にはヘラ削りを行っている。剝離が著るしいが丹塗りが認められる。(2)は小形の壺形土器と考えられる。口縁部は垂直に立上り，口縁部下端が(1)と同様に下方に突出している。体部内面はヘラ削りを行い器壁が薄い。外面に丹塗りが認められる。

脚台(3)は上下2孔一対の孔を3ケ所に穿ち，やや肥厚した脚端を有している。外面はヘラ磨き後に丹塗りを行っている。内面はヘラ削りである。



第48図 No198土壙（S＝1/30）　　第50図 No213土壙（S＝1/30）

No.213土壙（第50図）

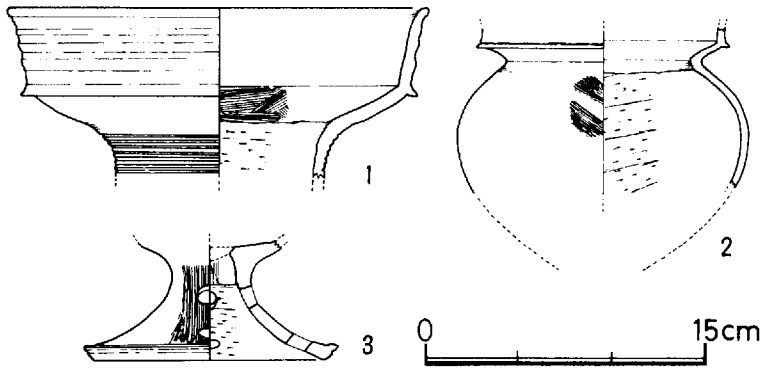
№178の北東側2mの位置に検出した。規模は一辺1.1m，深さ30cmを測り方形の平面を呈すピットである。ピット内底部には部分的に灰が多く堆積していた。

出土遺物（第51図）

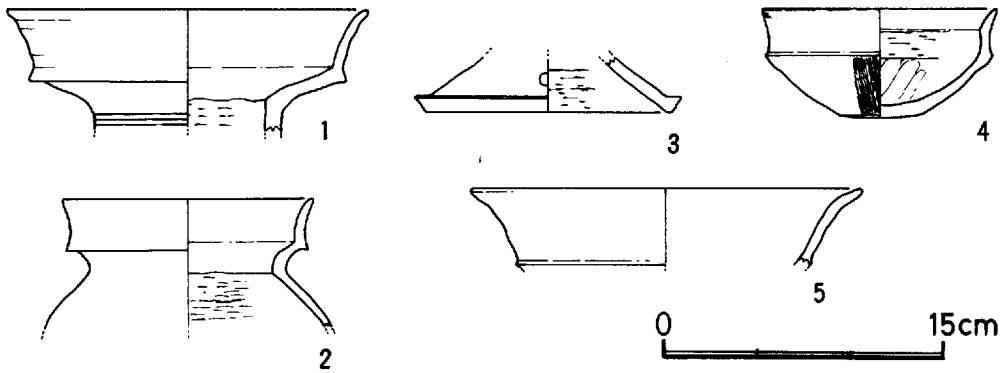
壺形土器(1)(2)(5)は外反して立上る口縁部を有し，ともに丹塗りである。(1)は頸部外面に浅い沈線を巡らしている。内面のヘラ削りは(1)では頸部上端より，(2)では頸部下端より行っている。(5)は壺形土器の口縁部として扱ったが他の器形も考えられる。

脚台(3)は脚端がやや肥厚している。破片のため数が不明であるが円孔が認められる。外面は丹塗りを施し内面にはヘラ削りを行っている。

碗形土器(4)は壺形土器の口縁部と同様に口縁部が外反して立上っている。底部はやや丸みを持つ平底である。丹塗りを施している。（山磨）



第49図　No198土壙出土遺物（S＝$\frac{1}{4}$）



第51図　No213土壙出土遺物（S＝$\frac{1}{4}$）

No.223土壙（第52図）

№221住居址検出途中で確認された隅丸長方形の土壙である。遺物は，土壙底より出土したものである。1・2は，「くの字」状に外反する複合口縁を有する甕形土器である。1は，2にくらべてシャープに仕上げられており，器壁も薄い。内面ヘラ削りである。3は，内面ヘラ磨き，外面丹塗りの行なわれている高杯形土器である。3・4は，内面ヘラ削り，外面縦ヘラ磨きが行なわれている高杯形土器である。杯部底は円形粘土板の貼りつけ，ヘラ磨きが行なわれている。4は，脚部に2段の孔がみられる。（高畑）

No.180住居址（第53図・図版35）

本住居址は長辺4.05×短辺3.2mを測り長方形の平面を呈しカマドを有す住居址である。住居址の掘込みは床面まで10㎝程度で削平が著るしく，上半部を破壊された土器も伴出している。壁下の溝は西側隅，北東側の短辺に部分的に認められたのみで他に確認できなかった。住居址内には後世の建物（№181・188）の柱穴が切合っているのが認められたが，住居址の基本となる柱穴は中央に1.1mの間隔を置き検出した2本と考えられる。2本の基本柱穴は径30㎝，深さ60㎝前後を測りほぼ同規模である。カマドは住居址掘込みの北西側壁に接して検出した。カマドは巾85㎝奥行60㎝の広がりを持ち，両側に巾20㎝高さ10㎝程度の壁が認められ内側は赤く焼けていた。またカマド中央には径10㎝高さ12㎝程度の支脚状の立石を検出した。

遺物は住居址掘込内全体に土器片が認められ，カマド内には数点が重なり合って出土した。

出土遺物（第54図）

壺・甕形土器(1)～(4)はともに頸部がく字形に外反する器形である。体部外面は剝離が著るしい土器もみられるが刷毛目調整を行っている。内面には頸部より下方にヘラ削りを施している。(3)は外面に丹塗りが認められる。(5)は丸底の底部である。外面はやや荒い刷毛目状の整形があり，内面の下半にはナデ及び圧痕が認められる。

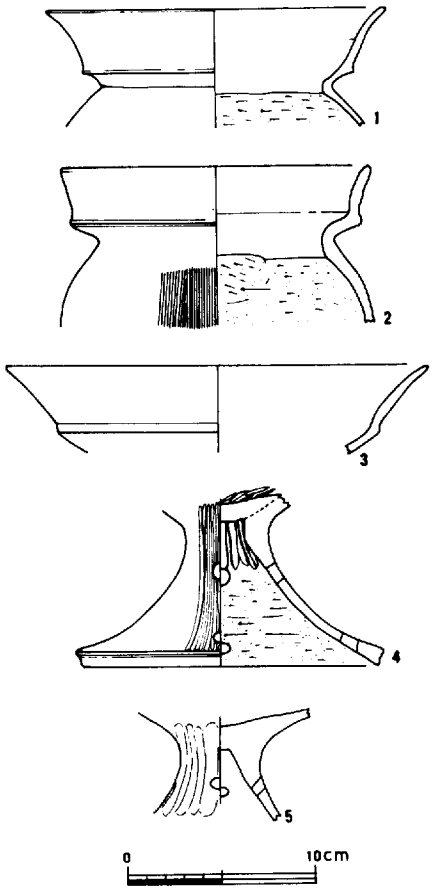
甑形土器(6)は底部に径約4㎝の孔を穿っている。外面はヘラ磨き調整を行い内面の下半にはヘラ削りを行っている。

碗形土器(7)はカマド内より出土した小形品である。内外面とも剝離が著るしく整形は不明である。

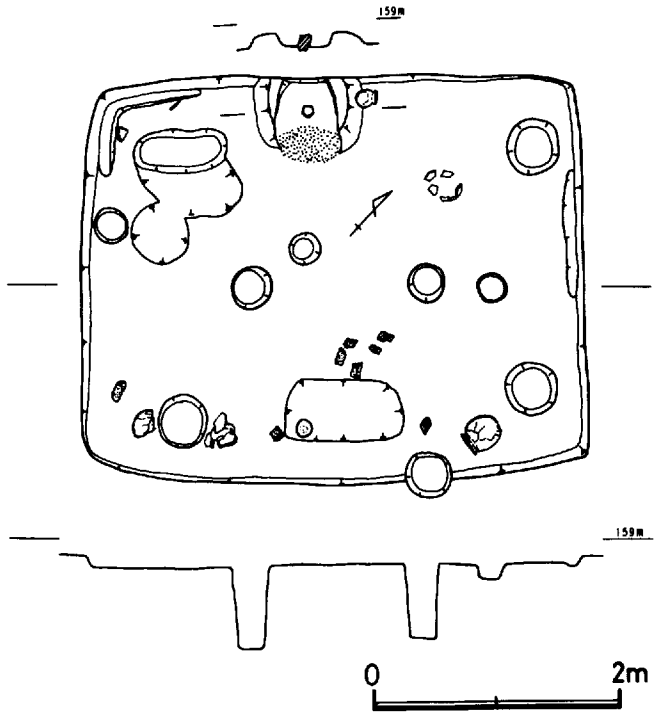
須恵器杯身(8)は口径約10.6㎝高さ5.3㎝を測りやや内傾して立上る口縁部を有す。立上りは1.5㎝を測り端部は内側に掘込みを持っている。ヘラ削りは左回りに行い赤褐色を呈した焼成良好な土器である。

鉄器刀子(9)は茎部及び刃部先端が欠損しているが刃部の最大巾1.7㎝，厚さ3～3.5㎜を測る。

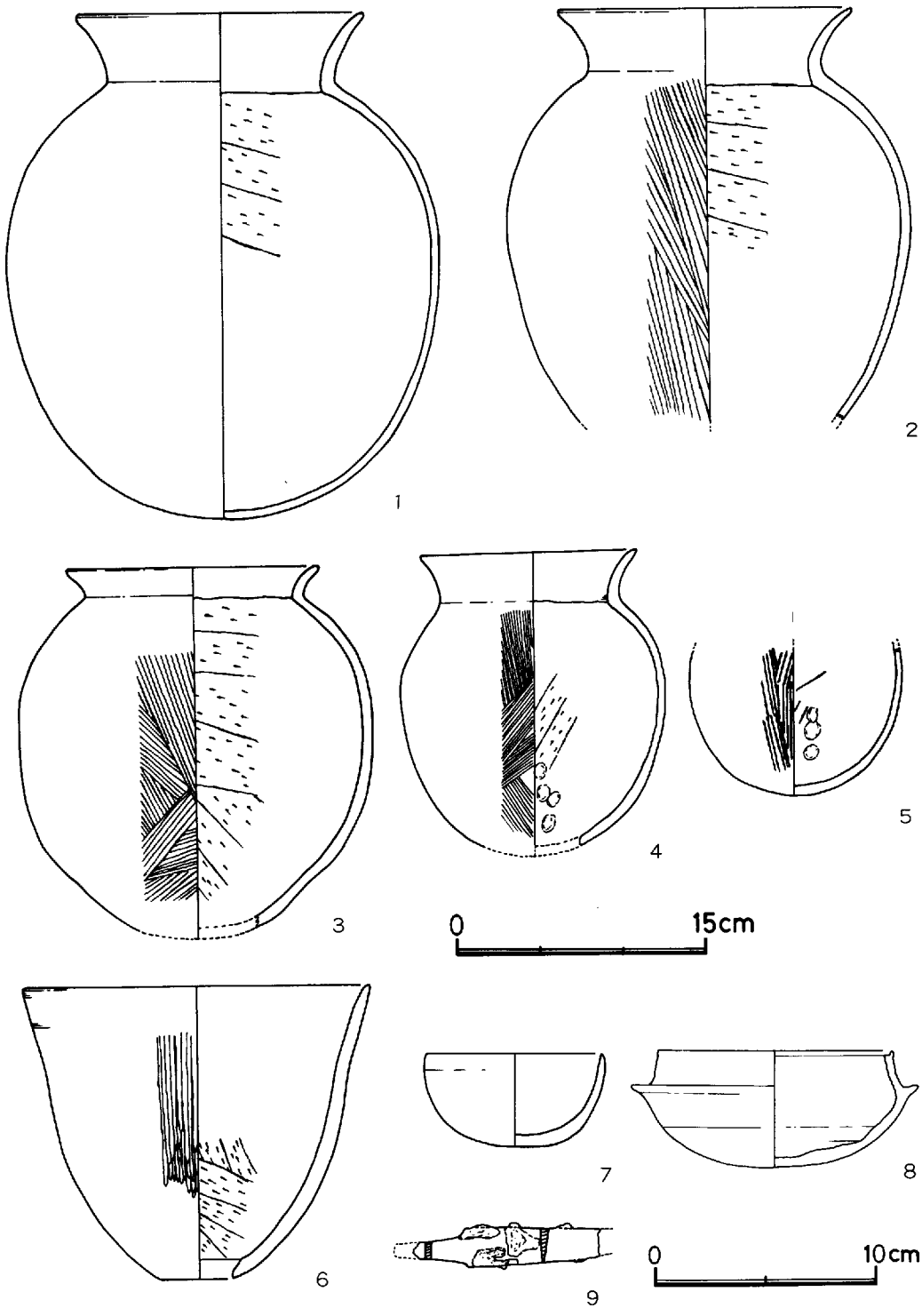
（山磨）



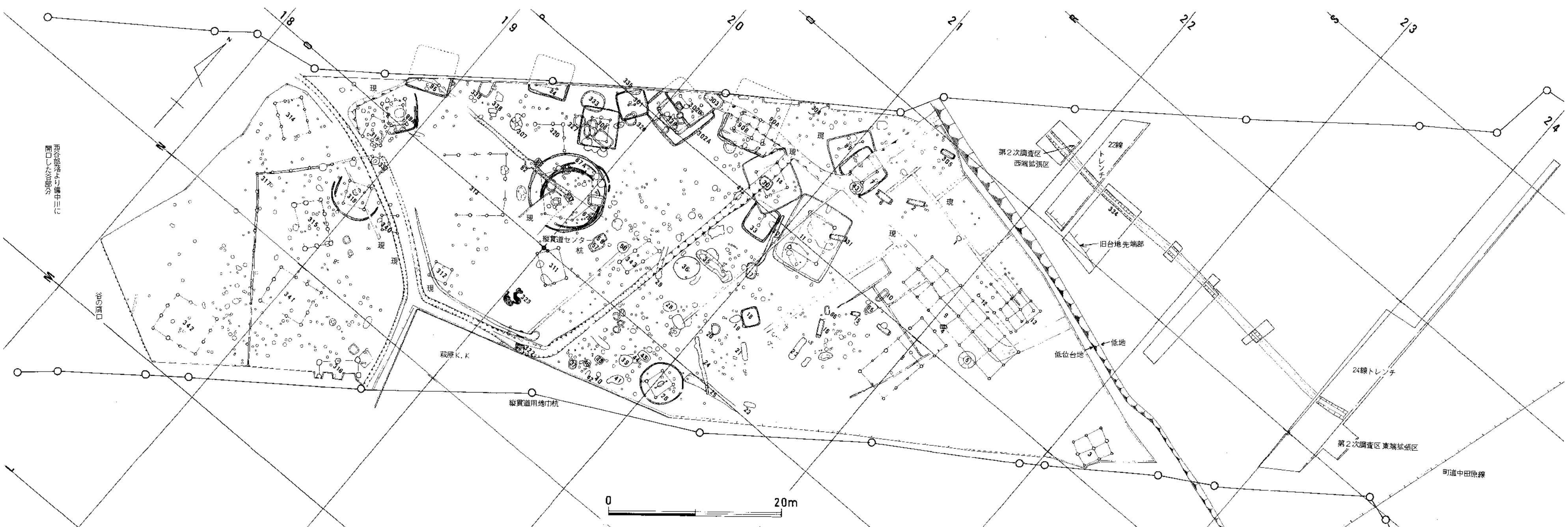
第52図　No223土壙出土遺物（S＝$\frac{1}{4}$）



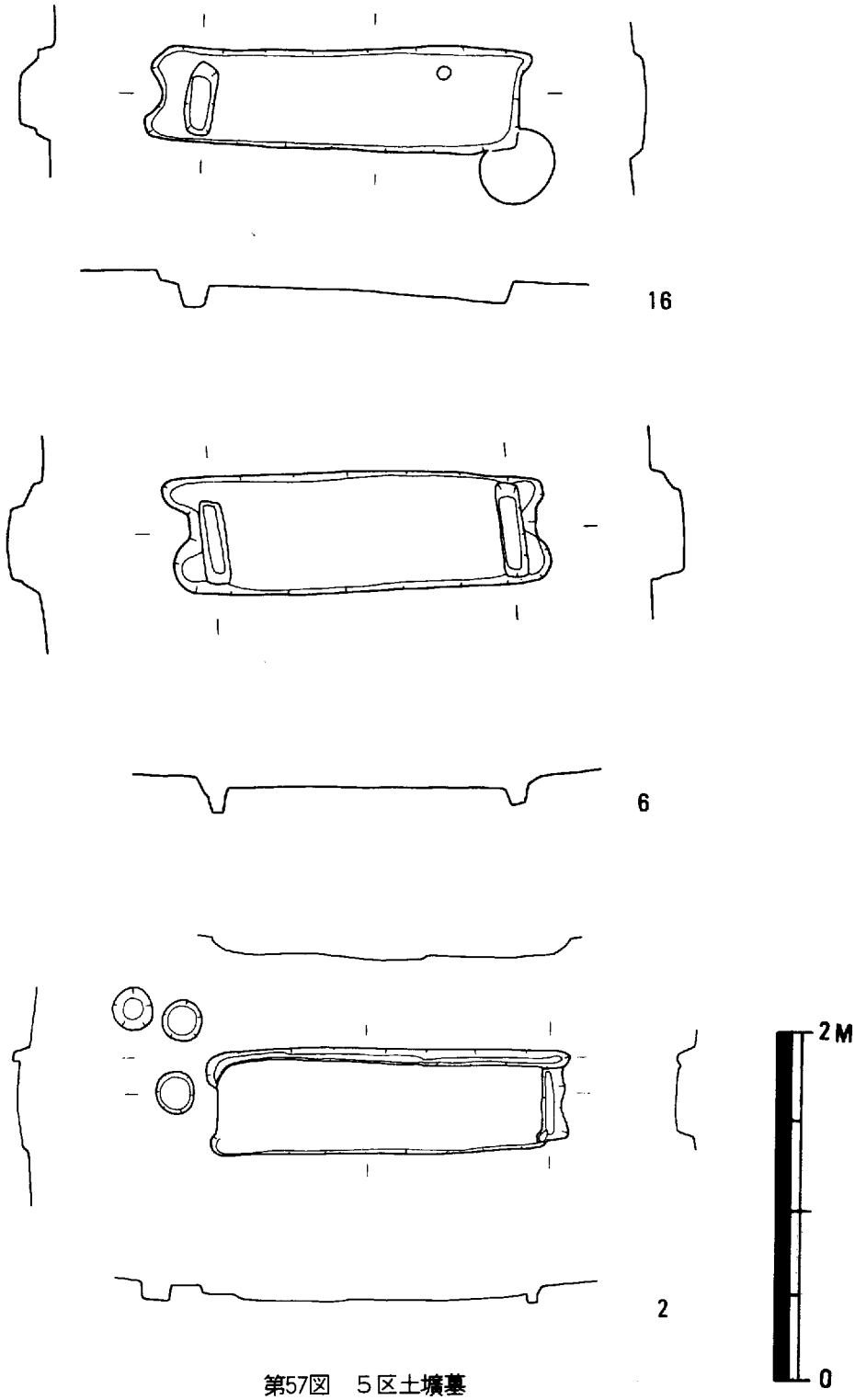
第53図　No180住居址（S＝$\frac{1}{60}$）



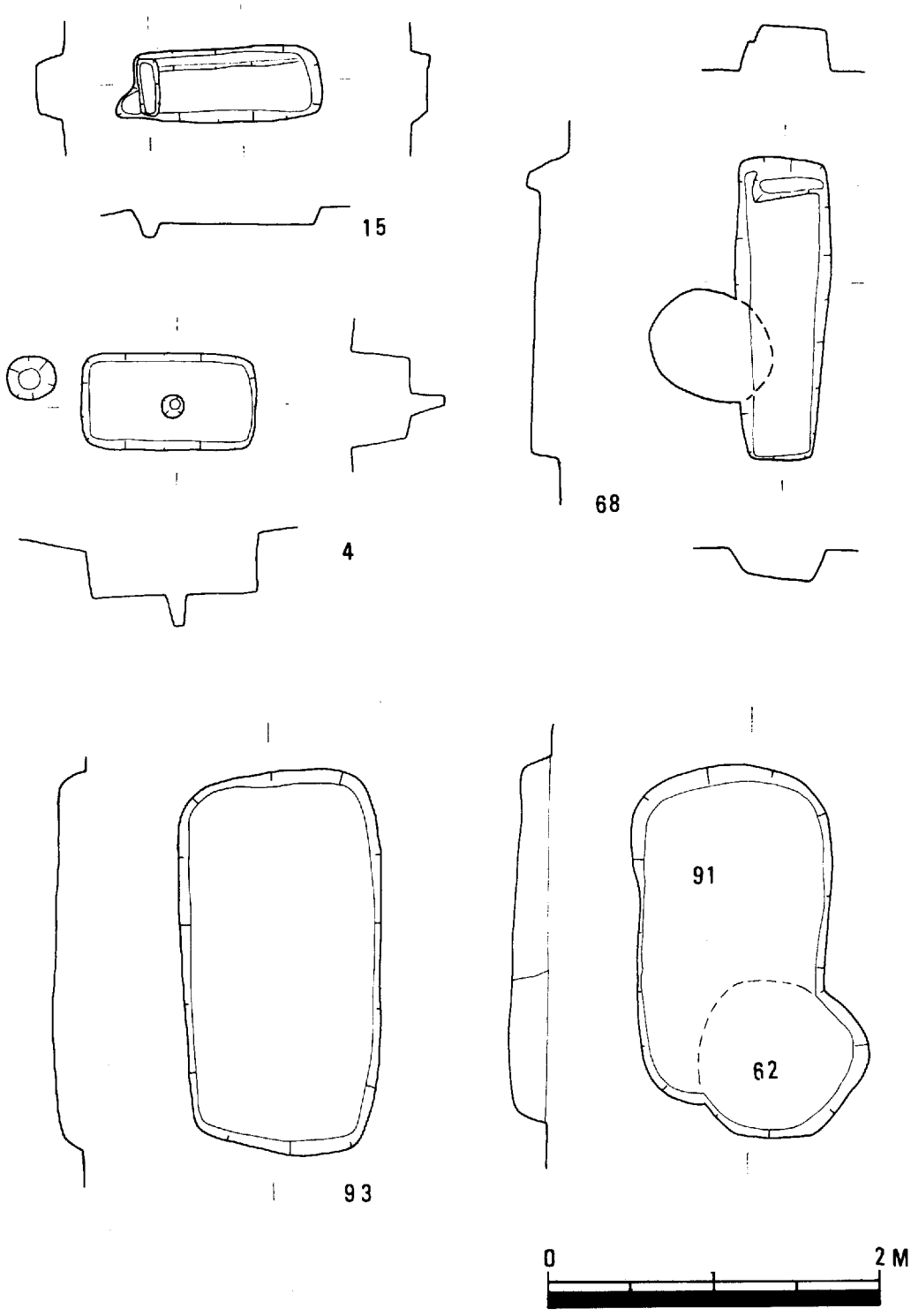
第54図　No180住居址出土遺物（1～6 S=$\frac{1}{4}$ 7～9 S=$\frac{1}{3}$）



第55図　谷尻遺跡５，６区遺構配置図（S＝1/300）



第57図　５区土壙墓



第58図　５区土壙墓（４は不明）

5区　土壙墓について

谷尻遺跡で検出した土壙墓の数は約60基である。それ等の形態及び規模は表12に掲示する通りであるが，以下にその概略を記しておきたい。土壙墓を検出したのは，谷尻遺跡において，5区と区画した地区であり，この地区に集中して見られる点に，注目すべきものがある。つまり，5区からも住居址を検出してはいるが，土壙墓と同時期と考えられるものは見られないのである。

土壙墓の形態であるが，それは，円形，小判形，長方形の三形態である。長方形のものには，小口板溝を持つものがみられる。その小口板構も，両側にあるものと，片方にのみ小口板溝を持つものとがある。また，小口板溝のある土壙墓からは土器の出土はなかった。土壙墓から出土する土器について記せば，床面に接して，出土するものは，非常に少なかった。このような土器出土のあり方は，注意しておく必要があろう。今回検出した土壙墓群は，その切り合いのみられるものが非常に少ない点でも注目すべきものがある。このことは，土壙墓群の中に，同時期の住居址がみられないことと共に注目すべきであろう。つまり，それは墓域の概念を思わせるものであり，埋葬後，しばらくの期間は，それを明示するような何かが存在していたことを推察させるようでもある。

土壙墓の時期であるが，土器については後で述べるが，それら出土遺物からすれば，弥生時代後期の前半とすることができるであろう。この時期は，土壙墓群が，平地から，丘陵上に移る変革期でもあり，地域によってはもはや丘陵上に造られている時期でもある。

＜遺　物＞

27は，高杯の脚部である。破片であるため杯部と，脚端の形状は不明である。外面はヘラ状工具によるナデであり，内面の上部は，しぼり込みの痕跡がみられる。下部はナデによる調整がみられる。胎土には，やや大粒の砂粒を多く含み焼成は良好であり，赤褐色を呈している。

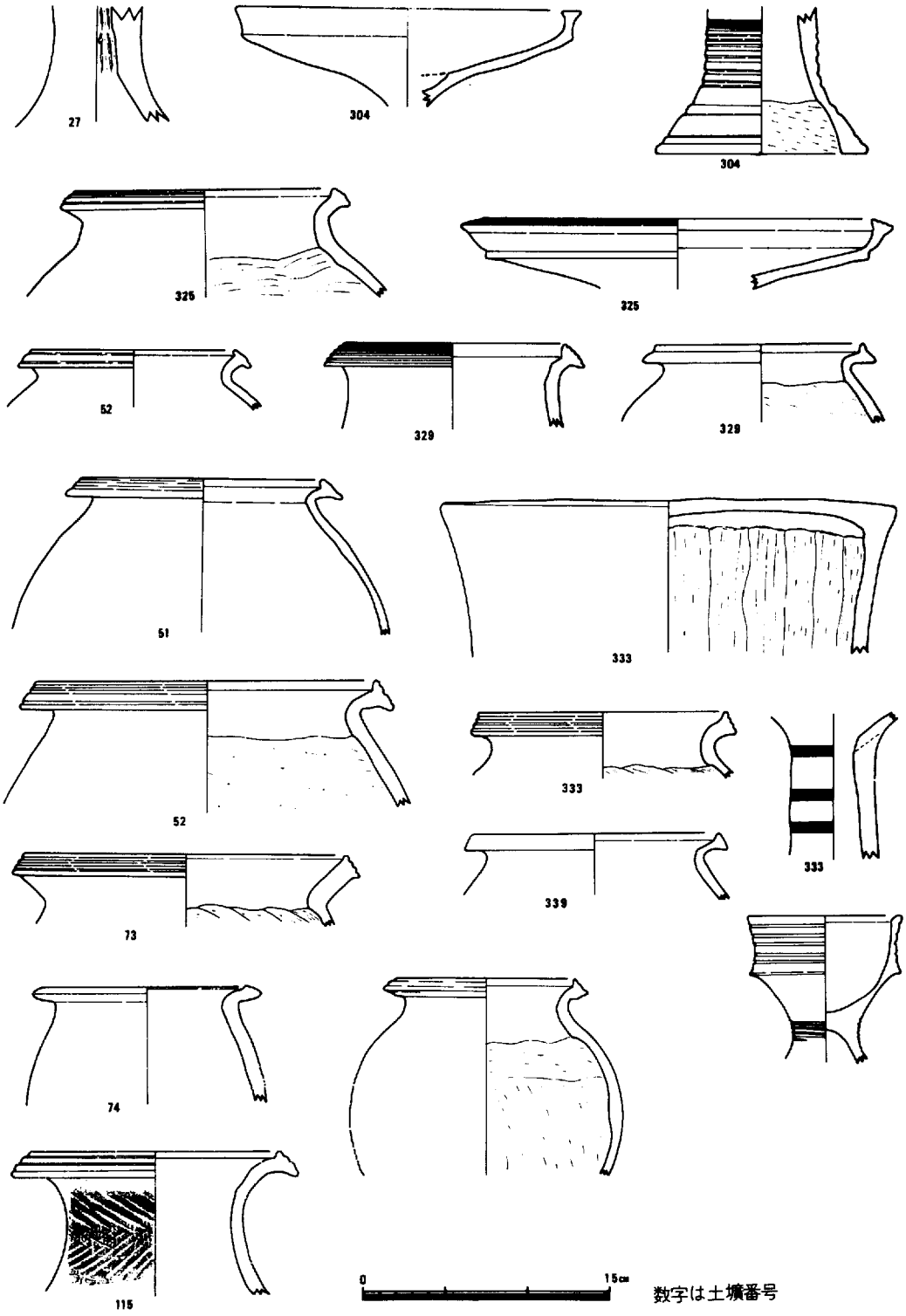
52は，両方とも甕である。上段のものは口縁端部は上下に大きく拡張し口縁部の内外面ともヨコナデによる仕上がなされており，端部の拡張部は明瞭な段をなす。胴部の内面は，ハケ状工具によるナデが見られる。下段のものは，口縁部の内外面の調整法は同一であるが，胴部内面には，ヘラ削りが見られる。削りの方向は，下方から，斜め上に向けての削りである。口縁端部内面には，部分的には，不明瞭ではあるが凹線がみられる。

51も甕である。口縁端部は，上下に大きく拡張しており，端部外面及び内外面は，ヨコナデによる調整がみられる。胴部外面には，クシ状工具による上下方向のナデがみられる。

73も甕である。口縁部は「く」字状に外反し端部において，やや拡張がみられる。端部外面には3本の凹線がみられる。口縁部の内外面は，ヨコナデがみられ，胴部内面には，ヘラ削りがみられる。削りの方向は，下方から斜め上方に向けてである。

74も甕である。口縁部は，大きく外反し，ほぼ水平に開くもので，その中央付近で上方に厚みをもち，端部は，やや尖る感じである。

115は，壺である。弧を描く頸部に大きく外反する口縁部の端部が，やや上下に拡張する。口縁端部外面には3本の凹線がみられる。頸部外面は櫛押斜線文を綾杉状に施文するものである。口縁部の内外面はヨコナデがみられる。



第59図　５区土壙墓出土遺物（S＝$\frac{1}{4}$）

304は，高杯の杯部と器台である。杯部は，ゆるやかに立ち上りながら，口縁部において，ほぼ垂直に立ち上り口縁端部がほぼ水平に開がるものである。器台は，やや太い胴部から裾に向けてゆるやかに開くものである。外面の文様は，櫛状工具による沈線と凹線とにより形成される。さらに，沈線の上部にヘラ描斜線文が見られるが，個体が破片であるため文様の形状は不明である。内面は，裾に向けて開く付近からヘラ削りがみられる。

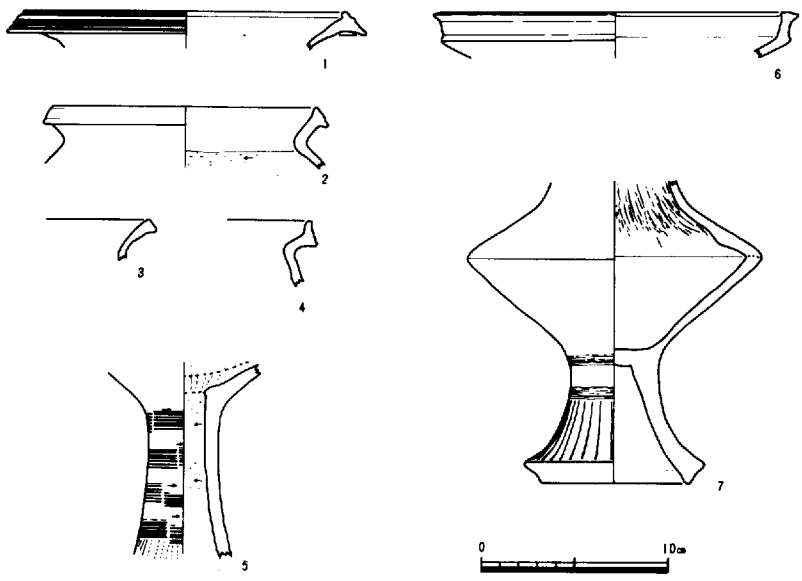
325は甕と高杯である。甕は外反する口縁部の端部が肥厚し，外面に擬凹線がみられる。高杯は杯部のみである。

杯部は，ゆるやかに立ち上りながら，口縁部でほぼ垂直に立ち上り，端部は広く肥厚し，外面には，凹線がみられる。

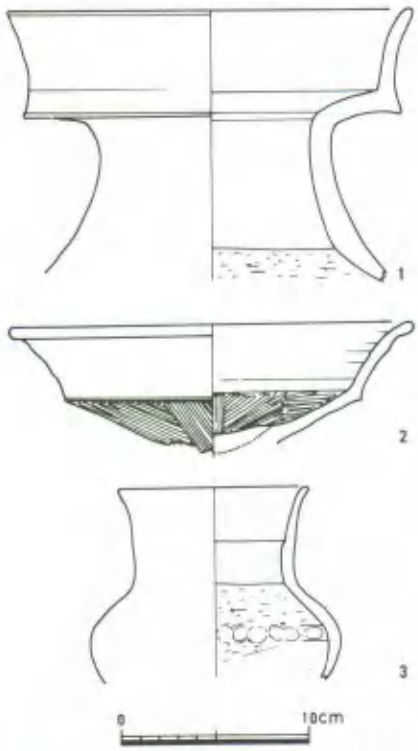
329は，壺と甕である。壺は弧状の頸部に，外反して開く口縁部が付くもので，口縁部は肥厚し上下に拡張し，外面には5本の凹線がみられる。

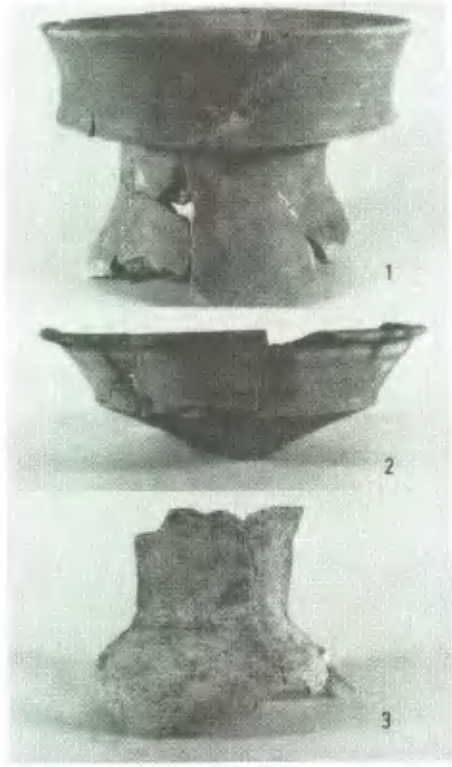
333は，回転台型土器と甕である。一般に回転台と考えられているこの土器は，復元径は，約28cmである。外面は，ヘラによる入念な成形がみられ，内面はヘラ削りがみられる。

甕は，外反する口縁部の端部は肥厚し，外面に3本の凹線がみられる。胴部内面には，ヘラ削りがみられる。3番目は，高杯の脚部である。外面は櫛状工具による平行沈線がみられる。内面はヘラ削りがみられる。（井上）



第66図　No30土　　壙





第56図　No67住居址出土遺物（S＝$\frac{1}{4}$）

＜No.67住居址出土遺物＞

本住居址は，4～5軒の重複関係にある上に，弥生時代土壙後につくられており，複雑な様相を呈していた。あきらかなものは主柱穴6本からなり円形プランを持つものがある。2～3個の中央ピット，壁体溝は5本が検出された。遺物は，表土剝ぎ時点で床面着のものが3点とりあげられた。1は，口径21.6cmを測る大形の壺形土器である。器外面をヘラ磨きした後ナデにより仕上げている。内面も頸部下位までナデが施され，胴部にうつるそこよりヘラ削りがみられる。面は外面，口縁内面に丹塗りが行なわれている。2は，口径21.4cm，身部分の高さ7cmを測る高杯形土器である。身部分中位の稜線をさかいに，上半ナデ，下半ヘラ磨きが施されている。内面についても同様である。底に円形粘土板を貼り付けている。器内外丹塗りである。3は，口径10.5cmを測る直口壺である。口縁内外面ともナデ，胴部内面はヘラ削りと指頭圧痕がみられる。これも器外面は，丹塗りが行なわれている。（高畑）

土壙（墓）計測値表（表12）

（単位 cm）

遺構番号	規模 長軸	規模 短軸	規模 深さ	形態	備考
2	203	61	11	方形	片方に小口板痕
4	105	58	34	方形	縄文の可能性もある
6	186	62	7	方形	両側に小口溝
10	188	59	36	方形	
15	113	43	11	方形	片方に小口溝
16	206	56	13	方形	片方に小口板溝 180（小口溝の中心からの内法）
19	144	54	10	小判	
20	139	98	24	円形	
21	229	52	14	方形	
22	292	83		方形	
23	149	52	6	小判	
30	153	136	25	方形	弥生式土器
32	192	119	33	方形	弥生式土器
36	300	251	15	円形	
40	143	70	42	方形	
41	109	69	38	円形	
42	109	54	9	方形	新 旧 42 → 41 － 40 →
48	116	103	17	円形	
49	498	(0.84) 103	42	方形	
51	188	203	18	円形	弥生式土器
52	143	110	8	円形	弥生式土器
53	216	148	18	円形(?)	53 64 切り合い
54	195	142	14	方形	
58	(推) 165	116	13	方形	73によって切られる
59	237	91	47～49	方形	ピットが両側に各1あり

谷　尻　遺　跡

遺構番号	規模			形態	備考
	長軸	短転	深さ		
60	146	130(?)	14	円形	No.59に切られる
61	133	96	26	円形	
62	102	121	21	円形	62が91を切る
63	131	96	31	円形	
64	101	100	17	方形(?)	弥生
65	130	56	19	円形(?)	
66	101	58	13	小判	
68	182	101	19	方形	片方に小口板溝
71	231	116		小判	
72	109	92	21	円形	
73	101	88	14	円形	弥生式土器
74	141	102	7	方形	弥生式土器
75	237	96	26	方形	
77	184	113	21	方形	
91	205	127	21	小判	
92	123	119	35	円形	
93	230	104	19	方形	
97	116	159	29	円形	
303	215	62	36	小判	
305	(188 (170)	124	28	方形	縄文水晶 小口枝両側
308	135	134	24	円形	
326	133	133	38	円形	
327	140	234	35	円形	
333	280	130	36	小判	
338	230	147	23	方形	
339	?				

6区　調査概要

6区は計7ケ所の掘開部分を設定した。第一次調査時の22線24線トレンチの拡幅・延長と，№334溝状遺構のコースを追求，及び遺物採集をするためのものである。

22線トレンチの西側に4m×4mグリッドを設定し，これを22線西拡張区と名づけ，縄文晩期土器片を多量に含む茶褐色粘土層，淡茶褐色粘土層を10cm間隔に分層して遺物のとりあげを行なった。

24線トレンチの東側に3.5m×2mのグリットを設定し，これを24線東拡張区と名づけ，表土層より分層発掘し，遺物のとりあげを行なった。

＜22線西拡張区＞（第60図，図版55—1）

色を基調に，表土層より砂層を含めて，1.9mを15層に分ける。表土より暗灰色粘土3層までには，須恵器杯身蓋，土師質高台付杯身，土師質擂鉢，白磁・後期弥生式土器の小片の磨滅したものが出土している。暗茶褐色粘土12層は，縄文時代晩期の出土遺物が大半を占めている。上面より－10cm・－20cm・－30cmと便宜的に分層し，遺物検出を行なった。－10cmより出土した遺物は，弥生代前期カメ形土器片，突帯文を中心にした縄文時代晩期深鉢形土器片等の粗製土器と，浅鉢形土器片等の精製土器がみられた。サヌカイト片多量及び打製石斧が2点みられた。

－20cmでは，遺物の包含量が減少し，小片が目立った。やはり突帯文を含むという点では，－10cmと変らぬものである。

－30cmでは小片のみである。又溝中よりは浅鉢形の黒色研磨土器片が出土した。後期の土器片はみられなかった。

＜遺　物＞（第61図3～27）

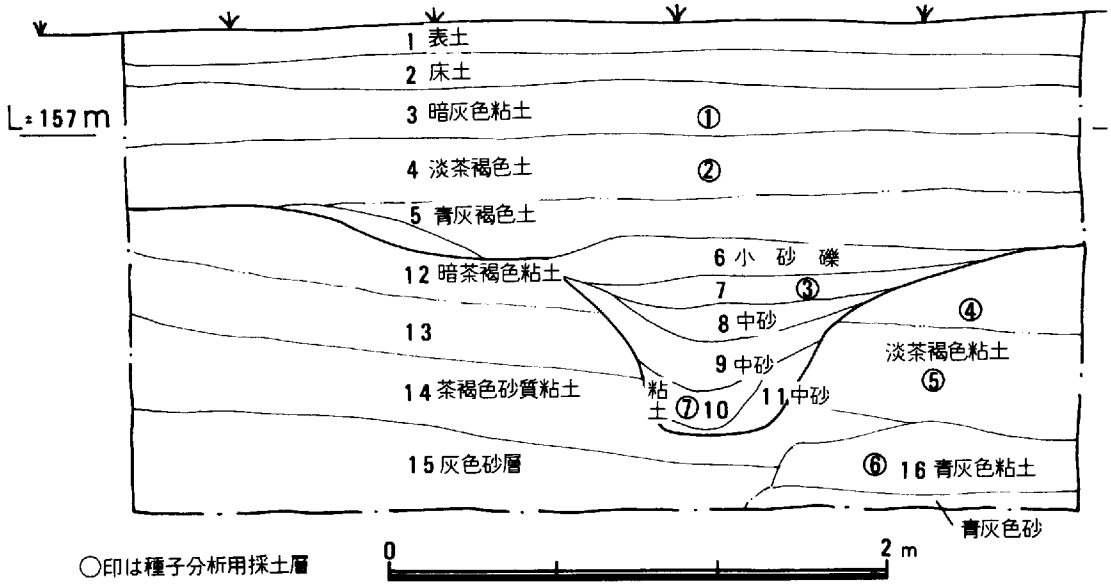
◦暗茶褐色粘土層出土土器（粗製土器）

（粗製土器）1・2は弥生時代前期の甕形土器口縁部である。灰黒色を呈し，2は屈曲部下位に2本のヘラ描き沈線が施されている。3～7は灰黒色を呈し，口縁直下に刻目貼り付け突帯文を有する。5は他の土器片とは異なり，器壁が薄く，シャープに仕上げている。10は刻目貼り付け突帯文が頸部にも施されていたものである。12・13は灰黒色を呈し，頸部に爪形文を持つ深鉢形土器片である。

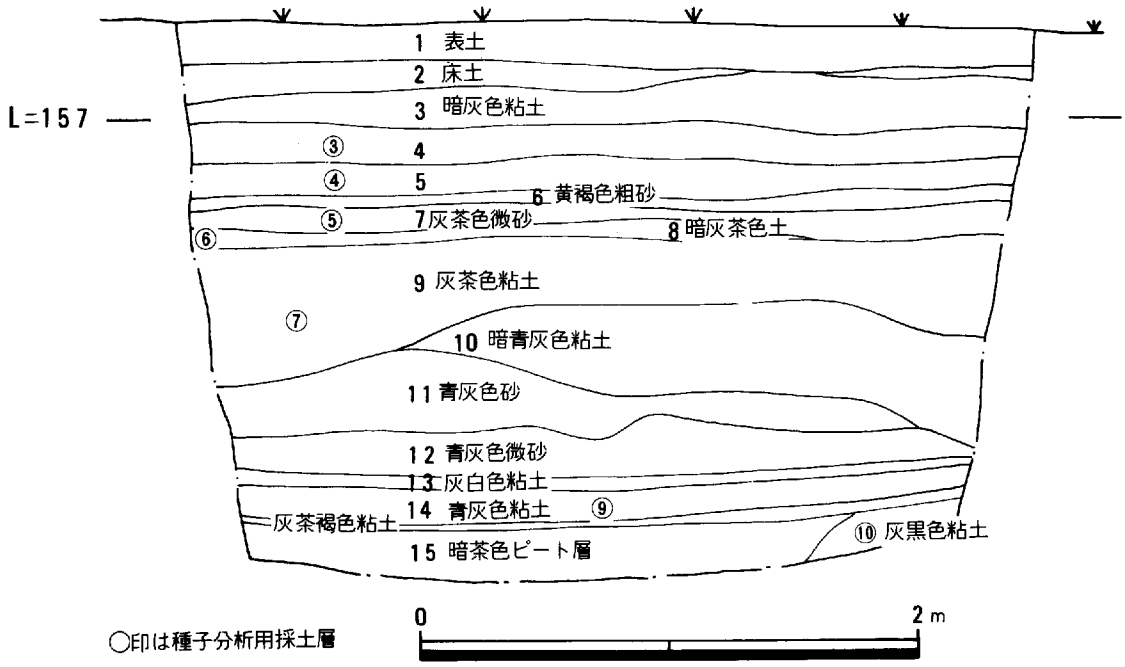
（精製土器）14～18は灰黒色系の色調をもち，器内外面ともよく研磨された，浅鉢形土器口縁部，及び頸部である。口唇部裏面に粘土紐を貼り付け，断面半円形に肥大させている。18は，やや整形が荒い感じがした。

＜遺　構＞

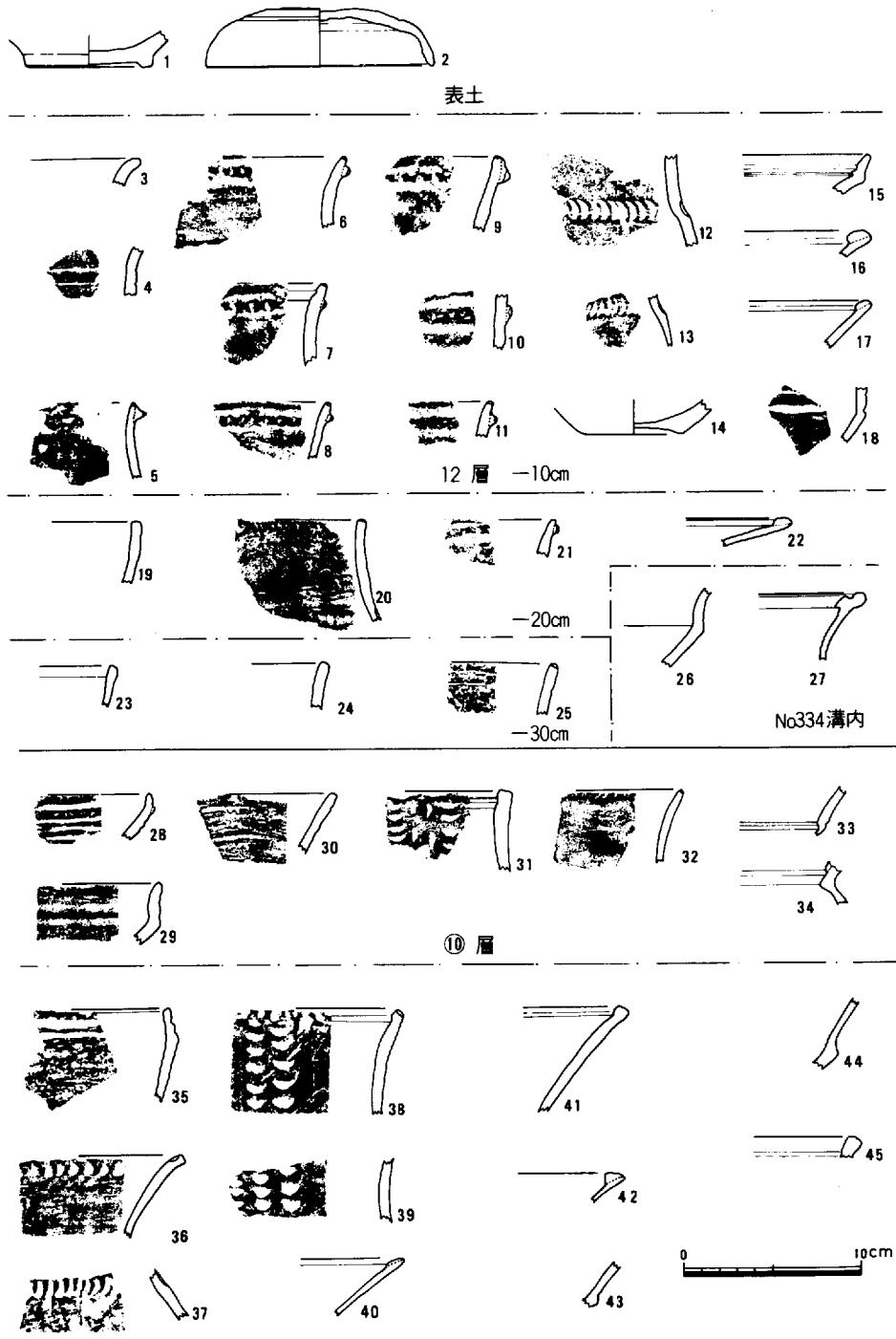
暗褐色粘土層上面から掘り込まれた巾1.2m・深さ0.8mの，肩部が幾分崩れたU字溝が検出されている。溝は，22線・24線のトレンチに断面をのぞかせており，遺跡内では全長約47mまでを確認した。溝底は，ほぼ同一レベルをしており，溝内下層に一部粘土が存在するのを除き，中砂がレンズ状に4層堆積している。水路というよりは，用水溝の可能性を考えておきたい。



第60図　６区22線西拡張区東断面実測図（S＝$\frac{1}{30}$）



第64図　６区25線東拡張区東断面図（S＝$\frac{1}{30}$）



第61図　６区西拡張区出土土器（1～27）
東拡張区出土土器（28～45）　（S＝$\frac{1}{4}$）

＜24線東拡張区＞（第64図・図版56—2）

色を基調に，表土より砂層直上まで2.2mを15層に分ける。

水田として利用されていた表土層中には，弥生時代中期後半・後期，古墳時代須恵器杯身片等，磨滅した面をもつ小破片のみが検出された。灰茶色系の7・8・9層からは，弥生時代土器片・縄文時代晩期土器片とサヌカイト小片が混在した状態で出土した。晩期土器片と比較して弥生の小破片が多いのが目立った。青灰色粘土14層には，黒色研磨の施された口縁部内面に，断面三角形の貼り付けをもつ浅鉢形土器片，及び爪形文をもつ甕形土器小片が出土している。又，サヌカイト製のスクレーパー小片もみられた。縄文式土器はこの層を境にし，下部より出土している。

灰黒色粘土⑩層は，15層と同時堆積状態を示すが，一線入るところがみられる。灰黒色粘土層，暗茶色ピート層中よりは，多量の晩期土器片，少量の打製石斧，後期土器片等が混在していた。特に暗茶色ピート層中は，これらの遺物にまじり，木片・どんぐり等の自然遺物が，生々しい色をして出土した。

暗茶色ピート層が堆積していた場所は，ゆるやかな凹状を呈し，河底を想定させる。この15層下，砂層中より木の葉の堆積したもの，全長約6mある二本の流木が，交叉した状態で出土しており，備中川川筋のかっての片鱗をうかがうことができる。その後，備中川は現在の位置方向へ落ちつくまでに，幾度となく姿を変えたようである。そのため，備中川方向の岸肩口部分は，北へ向うにつれて，次々とカットされ幅が狭くなり，生活の場が奪われていったようでもある。

＜遺　物＞（第61図28～43）

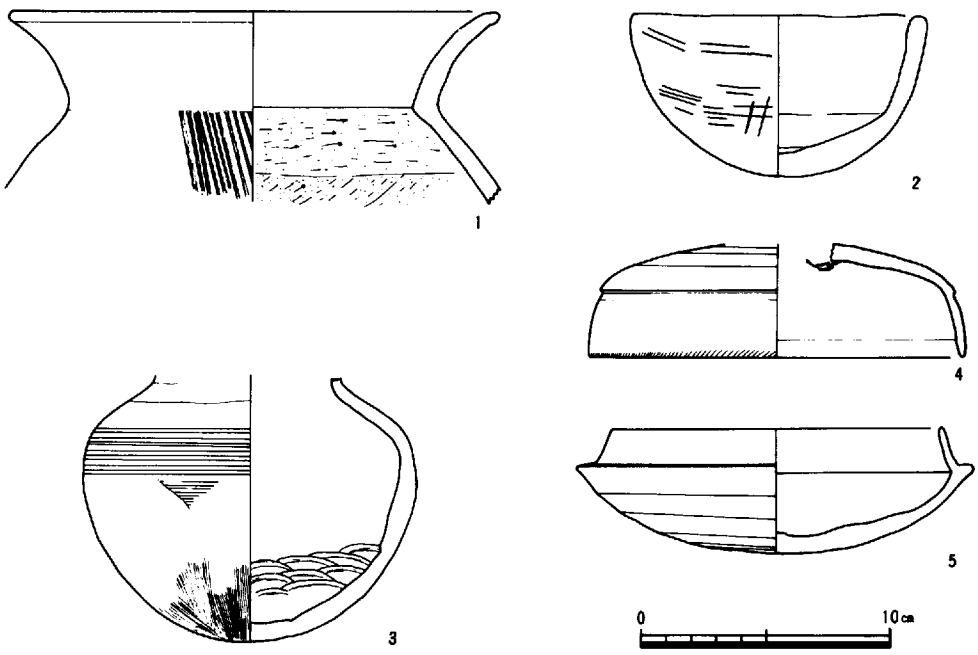
◦灰黒色粘土層出土土器（粗製土器）28・29は黄褐色を呈し，口縁部に凹線文を持つ浅鉢形土器と考えられる。29の口縁部に施された凹線は巻貝によるものである。28の凹線はヘラ状工具によるものであり，貼り付け突帯が口縁直下にみられる。30も胎土，焼成，色調等は28に近いものである。31は灰色を呈し，深鉢形土器の口縁部と考えられる。口縁から頸部にかけて爪形文が施されている。32は淡灰色を呈している。口縁端部に刻目を持ち，器外面は条痕の上にナデが施されている。器壁は薄く仕上げられており，胎土・焼成等は31に近いものである。（精製土器）33は外面淡灰色，内面黒灰色を呈する浅鉢形土器の屈曲部分である。器内外面伴によく研磨されており，0.2cm前後の砂粒がみられる。34は黒灰色を呈し，器内外面伴によく研魔されている。器形は，はっきりしない。全体を通しての色調は，灰色系のものが多いようである。他には凹状の底部，補修孔をもつ浅鉢形の精製土器がみられた。出土遺物は縄文晩期土器片が多数をしめるが，少量の後期後半土器片の混在がみられた。

◦暗茶色ピート層出土土器(粗製土器)35は暗灰色を呈し，口縁部に凹線をもつ土器である。器外面は横方向に条痕文が施され，内面にも細目の条痕がみられる。36は暗灰色を呈し，大きく開く口縁をもつ土器である。口縁端部内面には太目の爪形文がみられる。器外面は，細かい削り痕があり，その上にススが付着している。37・38・39は黒褐色，暗灰色，黒灰色を呈する深鉢形土器の頸部，口縁部分である。頸部に爪形文，頸部から口縁端部に向う2列から3列の爪形文がみられる。これらの爪形文は，1区№130土拡のものと同じものである。

（精製土器）40～44は灰黒色系の色調をもち，器内外面ともよく研磨された浅鉢形土器口縁部，及び頸部である。口唇部裏面に粘土紐を貼りつけ断面三角形，半円形に肥大させている。45も灰黒色を呈し，器内外面ともよく研磨された土器である。器形は，はっきりしない。

＜6区のまとめ＞

6区の出土遺物前後関係，及び古地形の検討に最も大きい役割を果すのは，№334溝である。この溝は，22線トレンチでは5区低位台地裾より北へ約15mの巾をもつ旧河川，川底に約1m堆積した土層を切ってつくられている。24線トレンチでは台地裾より北へ約10＋α mの巾をもつ旧河川，川底に約0.5m堆積した土層を切ってつくられている。すなわち，5区低位台地を川岸にして，巾約15mの川がかって存在し，やや広がりながら東流していたのであろう。№334は22線拡張区で，弥生時代前期土器片・突帯文を中心とする縄文時代晩期土器片を包含する暗茶褐色粘土層をカットしてつくられている。24線トレンチでは，爪形文をもつ縄文時代晩期土器片を包含する層をカットしてつくられている。この24線のピート層はこれらより40cm下にあり，22線暗茶褐色粘土層中より出土した遺物より古いことが理解できる。しかし，トレンチ間の距離が40mあり，その間の堆積状態の具体性はつかめていない。暗茶褐色粘土層をA，暗茶色ピート層をBとして説明を加える。Aは，いわゆる黒土BⅡ式と呼ばれる口縁部下に突帯文をもつものを多く含み，さらに前期弥生式土器片を少量ではあるが含んでいる。Bは原下層式と呼ばれる爪形文をもつものを含み，さらに縄文時代後期後半の福田KⅢ式をも含む。これらのことよりB層がA層よりも古いものであることがわかる。



第65図　No94住居址出土土器（S＝1/3）

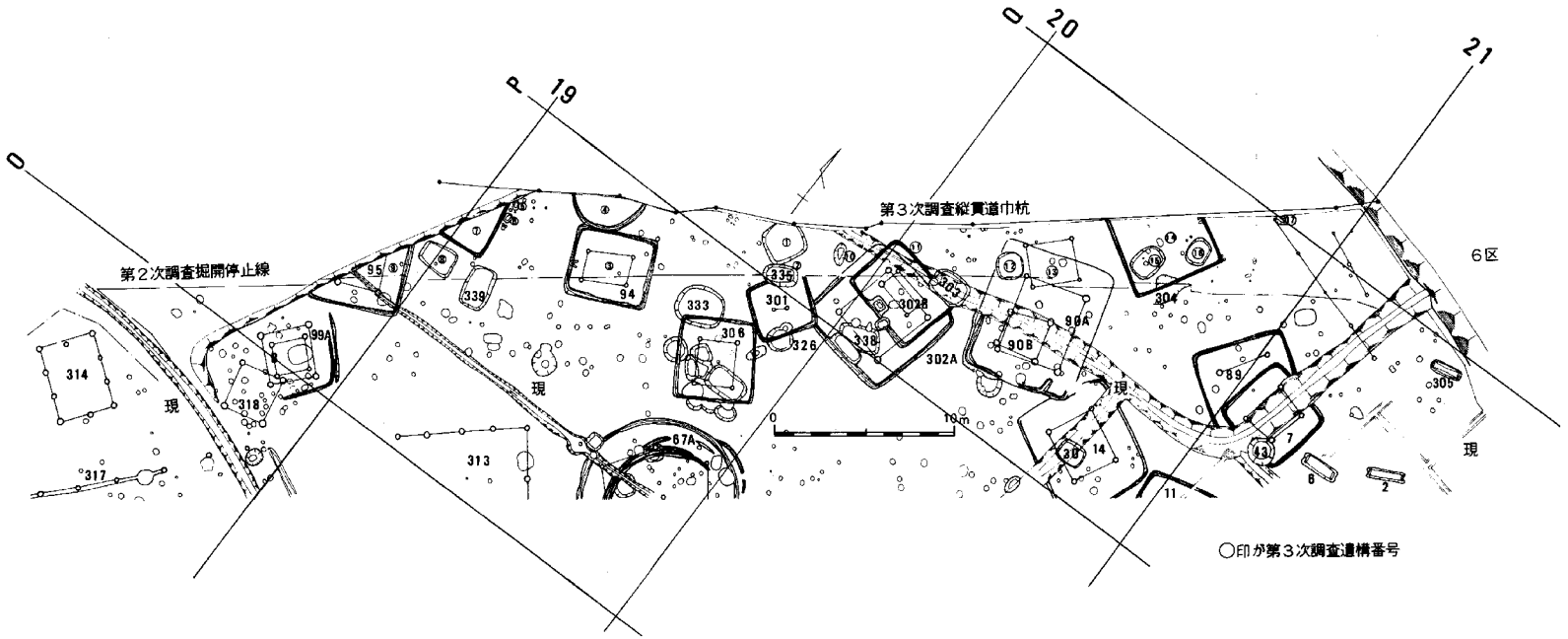
第6章 第三次調査の概要

＜概要＞（第62図）

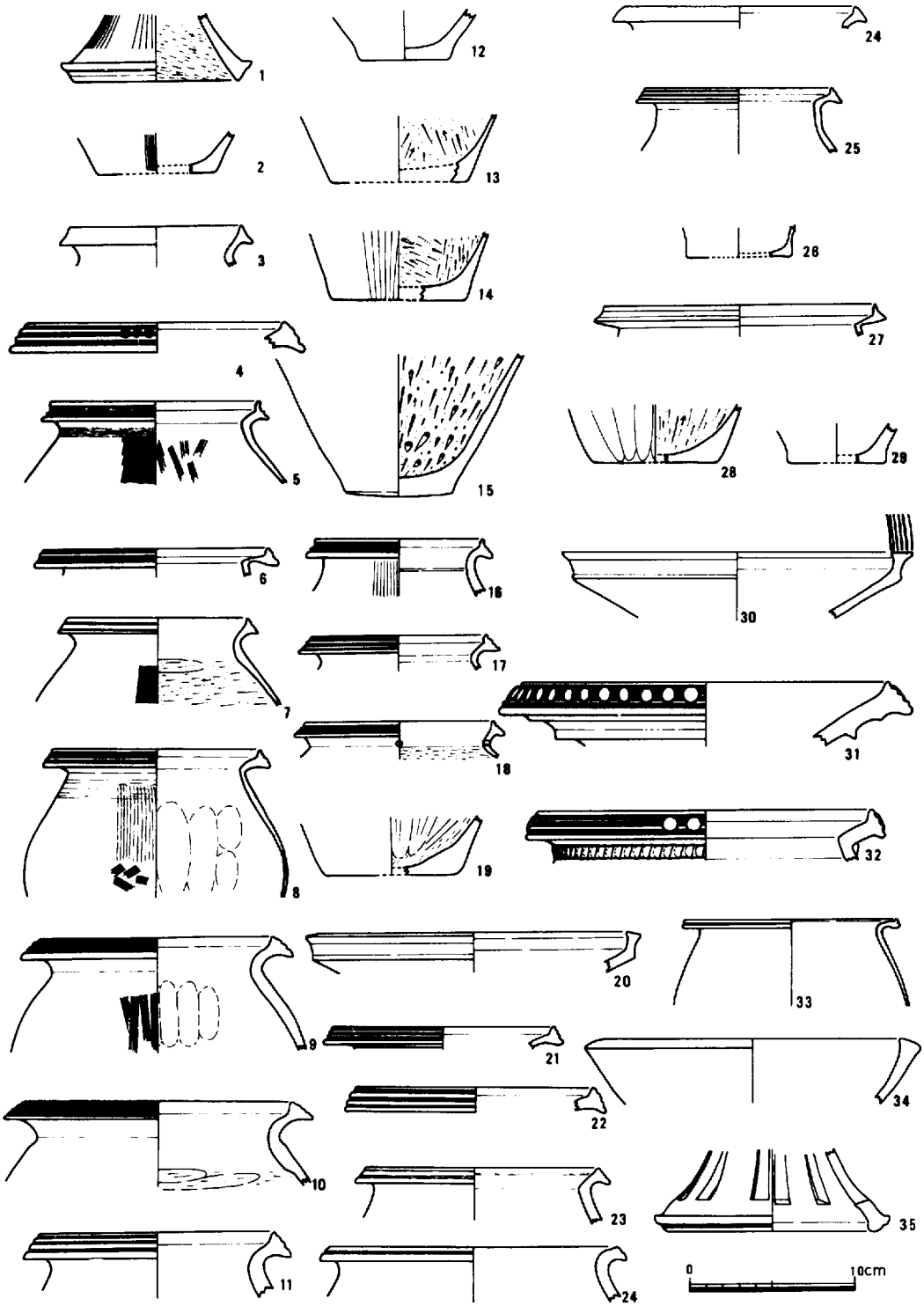
調査は，前記したように５区，６区一部に限定された。５区では，第二次調査時に一部検出されていた遺構の全体を確認することが中心になる。平均巾５ｍ拡張部に，新しい遺構13，一部検出から全体を出したもの９，計22遺構を調査した。舌状台地に，５区で検出された時期の遺構が同じように分布するところを確認する。弥生時代後期前半の土器をもつ土壙，古墳時代前半，後半の住居址が主体である。縄文時代晩期土壙，灯明皿を持つ土壙が各１基づつ出土している。新旧調査のものを含めて○印をつけた通し番号を設ける。⑰は，突帯文をもつ縄文晩期土器片を一点出土する。含土は，粒子の細かい淡こげ茶を呈している。①，②，⑧，⑫，⑮，⑯は弥生時代後期前半土器を含む。この土壙は，隅丸長方形，隅丸方形，円形に近いもの等の形態を呈する。遺物は，床面から出土したものより，含土中に存在するものが多く，供献の感じが強いものと考える。③，④，⑦，⑨，⑪，⑬，⑭は，古墳時代前半のものと，須恵器を持つ古墳時代後半のものがある。③は西辺にカマド状の焼土塊がみられた。⑦，⑨，⑬，⑭は削平が著しく遺物を持たなかった。⑥は，灯明皿等を持つ土壙で中世墓と考えられる。他に柱穴が多数検出された。東端では，柱穴例を確認したが，２間と４間までであった。５区路線南側拡張区調査では，柱穴数個と淡こげ茶色土のつまった土壙を検出した。

＜土壙出土遺物＞（第63図）

１は，高杯形土器の脚部片である。下位にゆくにしたがって肥厚する底縁を有し，外に櫛描きの沈線を持つ，内面はヘラ左削りを行なっている。２は，外面をヘラ磨きした黒褐色を呈する底部である。３は，内外面とも横ナデが行なわれている。４は，口縁端部に三本の凹線を有し，その上に刻線による三個一単位の円形文が施されている。５は，器壁の薄い，色調，明褐色を呈する甕形土器である。口縁端部に２本の凹線を有し，頸部より胴部にかけて櫛状の刷毛目，内面も縦の刷毛目が行なわれている。６～14は，⑫より出土したものである。６個の甕形土器口縁と，底部３個がある。口縁端部に２条から４条の凹線を有し，器外面は刷毛によるものが多く，内面はヘラ削りするものと，指頭圧痕後不規則なナデにより仕上げているものがある。底部は，平底を持ち，外面を縦ナデ，ヘラ磨き等により，内面は，ヘラ削りと不規則なナデによるものとがある。16～20は，⑭より出土したものである。甕形土器は口縁端部に２条～３条の凹線を持ち，外面刷毛ナデ，内面ヘラ削りがみられた。18は内側より貫通する0.3㎝径の穴がある。20は口縁端部に荒ナデ凸凹を有し，赤褐色を呈する高杯形土器である。21～27は，⑮より出土したものである。甕形土器は，口縁端部に１条～３条の凹線を持ち，口縁付近は横ナデが施されている。他部分の整形は小片ゆえ明確にできない。25は器内面ナデである。27～30は⑯より出土したものである。口縁端部にナデによる不明瞭な線をもつ甕形土器である。底部は，外面ヘラ磨き，内面ヘラ削りが行なわれている。30は，内外面とも



第62図　第３次調査５区遺構分布図（S＝$\frac{1}{300}$）



第63図　No 1 （1，2），No （3，4），No 7 （5），No12 （6～14），
No14 (16～20)　　No15 (21～26)，No16 (27～30)　土壙墓出土遺物
６区西拡張区弥生溝 (31～35) （S＝$\frac{1}{4}$）

横ナデにより仕上げられている。口縁平坦部に，浅く細い６条の凹線を持つ。31～35は６区の溝中より出土したものである。若干，古い様相を呈する。

＜No.94住居址出土遺物＞（第65図）

第二次調査にて$\frac{1}{3}$位を検出し，本調査で全掘をした。方形プランを呈し，主柱穴４本からなる住居址である。両辺にカマド状の焼土塊がみられた。中央にも焼土壙を有する。２は，焼土壙にふせて置かれていた。遺物は，破片のみに限られている。１は，「くの字」状に外反する甕形土器である。口縁内外面はナデにより仕上げている。頸部下外面は櫛状の太目刷毛にて整形され，内面は右ヘラ削りが施されている。色調は黄褐色を呈する。２は，口径12cm，器高6.4cmを測り，重量感のある碗形土器である。粗雑な作りにて，器面は凸凹状になっており，とくに口縁は著しい。内面底部は凹み，外面は丸く仕上げており安定性に欠ける土器である。３は，短頸壺である。口縁部を破損しており，二次，三次の調査で出土した破片が接合した例である。胴部最大径13.3cm，器高10.5＋αcmを測る。胴部は刷毛ナデにより，それより下位はヘラ削り後ナデにより調整し，底を丸くおさめている。器内面底は，青海波文が重さなるように施されている。大きく段がつく場所が内面$\frac{1}{3}$位のところにみられる。焼成，胎土とも良く，硬質の器である。口縁下位に，径9.8cm位の蓋をかぶせて焼いた痕跡がみとめられる。４は，最大径15.2cm，推定器高4.5cmを測る杯蓋である。色調は，濃い青灰色を呈する。天井部より体部に至る部分の稜線は鈍く丸みを持つ。ヘラ削りは，中心より「左回り」にて天井部$\frac{2}{3}$位まで及ぶ。口縁周縁は，回転による斜線がみられる。天井内面には青海波文をナデ消し痕がある。５は，最大径16cm，器高５cmを測る杯身である。ヘラ削り「左回り」。ヘラ削りは$\frac{2}{3}$位まで及ぶ。

第7章　谷尻遺跡の発掘植物種子分析について

（岡山大学農業生物研究所教授，農学博士　笠　原　安　夫）

はじめに

谷尻遺跡は標高159mの山間盆地の岡山県上房郡北房町上水田にあって，中国縦貫道路の建設予定地に当り，津山市より西方約30kmに位置して，旭川の支流で東流する備中川の南側の氾濫原となる低地と低位台地に存在している。

この谷尻遺跡は，1974年4月から岡山県教育委員会文化課によって発掘が開始され，75年6月までに，太古の縄文早期から弥生期，古墳，奈良，中世の遺構，遺物が発掘されている。また各時代から現代まで長年月にわたる2.2mの高さの地層がトレンチ調査で確認されている。

本稿の調査資料は，2回にわたって採集された。第1回目は1975年3月19日に本遺跡6区22線および24線トレンチ（図1・2・3参照）の各地層から採土された。それは文化課の栗野主事の指示によって当所藤沢技官が採土した。第2回目の採集は，同年6月18日に同22線トレンチの西拡張区と同24線トレンチの東拡張区（図1と4参照）の各地層で採土された土塊であり，一部は水洗い検出された出土種子である。それらは6月19日同所の田仲主事によって当所に持参された。

筆者は，数年来，岡山県下の津島，雄町，川入，上東，宮尾遺跡などで発掘された植物種実（種子または果実）の検出，分析を行なった。それらの遺跡では，主として農耕が開始された弥生期以後の栽培植物または耕地雑草種子と人家付近の人里植物種子などであり，ただ宮尾遺跡では水稲栽培の弥生期以前の地層から利用植物や樹木種子が比較的多く出土した。

この谷尻遺跡には，前述のように縄文期から各時代の一連の層位が発掘されているので，若し各地層から植物種実が検出されれば，古代人が利用した種類，また栽培植物種類が判明できるのではないか，とくに昨今，九州の西北各地の遺跡やその他の遺跡における縄文晩期でのイネ栽培やそれに先行する畑作農耕が問題にされている。

筆者は，弥生期以前に出土する植物種類のうち利用植物が単に採集のみに止まるのか，簡易な管理が伴う半栽培または焼畑農耕が水稲栽培と先行または同期に存在していたか，いわゆる縄文農耕の有無について強い関心が持たれるので，本遺跡での各土層の植物種子の検出分析を行なったので，ここに概要を報告したい。

なお，この谷尻遺跡の発掘担当し本資料を提供された岡山県教育委員会栗野克己・高畑知功両主事と土層の種子分析された当研究室の武田満子，木村美智子氏および土層採集と撮影に協力された藤沢浅技官などに，厚く感謝の意を表します。

調査の資料と方法

本遺跡の22線トレンチ（第68図および表１ａ）と同線西拡張区（図１，４および表３ａ）の地層によれば，地面から第７層以下は縄文晩期またはそれ以前の層であり，第２・３層は古墳期第３層また第４層から第６層までは弥生期と見られる。また24線トレンチ（第69図および表１ｂ）と同線東拡張区の地層によれば，表面から第13層の青灰色粘土層が縄文晩期の境界と見られ第14層は灰黒色粘土層で縄文晩期突帯文化を伴わない土器群が出土し，第15層は黒色粘土層で木の皮，木の葉が多数混入していた。それらの資料をポリエチレン袋に入れ研究室に持帰り，同年５月～９日にわたって300～500ｇの土をビーカーにとり水道の水を混ぜ砕いて，杓子状の金網にガーゼを敷き，水洗しながら有機物を取り去り，実体顕微鏡下で植物種実を種類別によりわけ，管ビンの水中に保存後，種類の同定を行なった。

また表３ｂの24線トレンチ東拡張区の茶褐色粘土層は，縄文晩期（中）突帯文化以前とされ，№９のみは土塊を持参されたが，他の№１～８と№10は，高畑知功氏が検出された種子をシャーレ内にぬらした脱脂綿上に保存して持参されたもので，その種実についても種類同定を行なった。

調 査 の 結 果

第１回調査の22線トレンチの採集試料の№１～６の調査結果は表１ａで示されるように古墳，弥生中期，縄文晩期またはそれ以前の時代における第２～10層の土層である。それらの土は一部を除いて茶褐色から青灰色の粘土である，№７～８は地表下第３～４層，№９は溝の下位，№10は同第４層で溝の西縁にあたり，№11は同第５層，№12は同第８層で灰色の砂混じりの粘土であった。表１ｂのように同24線のトレンチ調査では，№１・２が最下の15層で灰黒色粘土で縄文晩期中葉にあたり，木葉，木皮と多数の植物種実が検出された。それより上部の№３～８試料は，地表下の第５～11層でやや黄色，灰茶褐色のように明るい微砂混りの土層であり，その種実の種類同定は表２のようであった。

第２回調査は，22線および24線トレンチの拡張区の地層の採土試料は表３ａ・ｂで見られるように，22線では№１・２と№４～６は地表下の第３～８層であり，№３は溝中で第７層にあたった。また24線トレンチでは，縄文晩期（中葉）突帯文化以前で暗茶色ピート層からの採土から現地で高畑氏の検出である。そのうち№９に当るもののみ当所で土塊から水洗法で種子を検出した。それらから検出した種実の種類の同定結果は，表３ｂと表４に示されたようである。

以上表１・３のように各採土から検出土量は，原則として300ｇ，採土の少ないものは100～200ｇを用いて水洗法で分析した。その結果，24線トレンチの№１・２の地表下第５層で灰黒色粘土層と22線トレンチ№７の溝下層で青灰色粘土層を除いて，他の明るい土色で砂まじりの土層では種実の検出が全くなかった。おそらく，それらの土層には最初から種実が含まれていないのではなく，乾燥と空気の流通がよいために，長年のうちに分解消失し，灰黒色粘土層では未分解のまま残存したものと考えられる。

大形種実のクルミ，トチノキ，カシ類は食用のため集められたのであろう。しかしメビシは集め

たがこの遺跡が備中川の氾濫原に当るので沼地があって，そこで自然落下したとも考えられた。

つぎに植物種子が多数出土した24線トレンチの最下層の調査した表２と同線の東拡張区の表３ｂおよび表４では，縄文晩期と見られ溝最下層灰色粘土層の調査結果から考察を試みたい。

22線トレンチでは，表１ａに示されたように各地層とも全く種子が検出されなかった。また22線トレンチ西拡張区の表３ａで見られるように溝下層において僅かにマタタビ，ニワトコ，キビノナワシロイチゴ１粒ずつが認められたのみである。一方それより東方40mの24線トレンチでの種子検出分析では，表２と同24線トレンチの東拡張区表３ｂ，および表４に見られるようにきわめて多種類の種子および果実が出土した。そして表２では26科37種，土500g当り433粒が見られ，表３，４では18科30種，換算500gの土当り1228粒，両方で29料41種831粒の多数が見られた。

これらは何れも縄文晩期またそれ以前の土層である。この地層は現備中川の南側で泥炭層であり水生また湿生植物として22線トレンチでは僅少のホタルイ，ヤナギタデ，サナエタデが出土した。その東拡張区では多数のホタルイ，ヤナギタデが含有されている。現在の水田休耕田（湿田）には，この２種類はきわめて多出するが，典型的な稲田雑草のコナギ，キカシグサなどがなく，当時イネ作は考えられない。

ところで利用植物のうち生食したと見られるヤマグワ，カジノキ，マタタビ，クサイチゴ，ヒメバライチゴ，エビヅル，ブドウSP，サルナシの種子が多数出土しているのは注目せられる。また，シブ抜き加工で食用となる各種ドングリ，クルミ（一部は穴をあけて笛に加工している？），トチノキの果皮片と種子，その他若葉や若芽を食用したと考えられるニワトコ，カタバミ，タラノキと繊維の利用としてカラムシ，カジノキなどとトリモチに利用したのかモチノキなどかなり多く出土し，集められたと考えられる。その他，人里植物また現在の畑雑草として見られるコミカンソウ，カナムグラ，ヤエムグラ，ノミノフスマ，ザクロソウ，キランソウ，メナモミなどは付近からの落ち込みであろう。その他一部利用または森林および林縁植物としてヤブツバキ，アカメガシワ，ミズキ，カラスザンショウ，エゴノキ，コウモリカズラなどの種子とモミの木の葉が多数出土した。（描図および写真参照）

著者は先に宮尾遺跡の弥生期以前，また弥生前期で未だイネ作がなかったと推定した時代に，本稿で述べた利用植物の多くが出土したことを報告した。また別稿『岡山県埋蔵文化財発掘報告12』近刊で述べる宮の前遺跡の縄文晩期においてもこれらの種実が比較的多数出土している。

考　　察

私どもは人間と植物の生育立地とのかかわり合いの程度によって，そこに生える植物群を大きく山野草，人里植物，作物，雑草および帰化植物に区別している。すなわち，それぞれのところに棲み別れしているのであって人間の干渉の少ない山野の植物に対して古くから人間が時々破壊する人里の土地に生える人里植物，人間生活に役立たせるため栽培する作物，この作物は人里植物群から人間の経験と知恵によって選出されたものであり，その作物をつくる耕地に半自生的に生え，意識せずつくり出したのが雑草である。耕地がなければ雑草はないのであって，イネ田雑草も２・３年

休耕すれば消失し，付近の畦畔や新しい造成地に入ってきた帰化植物や山野草が代って休耕田に侵入してくるのである。

日本では山野草から直接雑草になったものは畑でのネザサ，ヨメナとイネ田のアギナシぐらいしかなく，他の種類は外国から渡来した帰化植物*である。このように本来の自生地から人間の仲介で他の地域に移動し，その地域で自力で生存するものをいうが，一見して識別できるような異国的な特徴をもつ新帰化**植物と歴史の古い時代に古い作物や農具などについて渡来したため外来種か在来種の判断つかない植物がある。日本の歴史以前や歴史の初期に来た史前帰化植物や旧帰化植物などの渡来した生育地は，その当時の文化の中心をなしていた村落および農耕地であったと考えられるので，現在の田畑の雑草や人里植物は主にこの時代に渡来したものであるといえる。東アジア原産の植物の他にはイネ田雑草は主として中国南部から東南アジア原産のものが多く，畑や人里植物で夏の一年生のものは同じく南方から，麦などと同じ冬の越年生のものはヨーロッパや西アジア原産物が主である。

また，ここで利用植物としたのは，古代人が生食した漿果類のイチゴ，エビヅル，マタタビの他に，イチイ，シイ，クリなどと簡単なアク抜きで食用できるドングリ，トチノキの他に若芽を食べるタラノキ，ニワトコ，アカメガシワと油がとれるツバキ，繊維を利用したと思われるカラムシなどもここに入れることができよう。しかし，薪炭，用材として利用したと思われる木材類は一応除外している。

ところで，焼畑となると伐採や火入だけであるから毎年耕起や中耕する畑や果樹園とは生育地が著しくちがってくる。したがって畑雑草とは異って山野草に近いものと予想していた。戦前では全国に7万*ha*もあった焼畑は，現在命脈を保っているのは高知県池川町椿谷と宮崎県椎葉村など2・3ケ所にすぎない。筆者は2・3年前から焼畑雑草を調査（未発表）しているが，表2および4に○印をつけたものは，それら焼畑に生えている雑草であった。それらは本遺跡よりは南方に位するが，標高が1000*m* もあるので，その気温はこの遺跡付近と大差がないと思われる。縄文晩期の気温が，現在と差ないと考えると，それらは当時の植生種類は本遺跡にもあてはまると思う。

本遺跡や先の宮尾遺跡で利用または人里植物と考えていたのが以外にも焼畑雑草とよく一致することがわかり，この遺跡の付近に当時焼畑農耕があったのではないか，または，そこの備中川のほとりに焼畑があって雑草種が落下して流れでて辿りついたとも考えられる。

縄文時代の食用植物や焼畑農耕については別稿の宮の前遺跡の発掘種子分析に紹介しているので参照を乞う次第である。ここには渡辺氏（1975）が全国208遺跡から食用したと確認された遺体として，カヤ，イヌガヤ，ヤマモモ，クルミ，ハシバミ，クリ，コナラ，カシ類，カジノキ，ヤマゴボウ，ハス，シャリンバイ，サンショウ，アカメカジワ，トチノキ，ノブドウ，マタタビ，ツバキ，ヒシ，ウリSP，マコモ，イネ，ササ，クログワイ，ノビルなどルなど39種が記述されている。これらは発掘中でも肉眼で識別できるような大粒，中粒の種実である。本遺跡で認めたイチゴ類やカジノキは小粒なのでそれらの遺跡では見迷したものと思われる。

最近西田氏（1975）が小粒のものも分析した結果，縄文期の舞鶴市桑飼下遺跡から54種を見出し

最多数はカジノキ，つづいてアカメガシワ，カラスザンショウ，トングリ類，トチ，クルミが多い。またフユイチゴ，タデ，アカザ，スゲ SP の外に少数のイネ，ムギの粒も検出したが，一部は発掘中に人の出入と最初川水で水洗したため汚染した心配があるともいう。

＊ 水田雑草には渡鳥による仲介の渡来植物もある。

＊＊ 一般にははっきり外国種として記録に明らかなもので狭義の帰化植物ともいう。古代出土物にはない筈である。

ま と め

本遺跡の22線トレンチ同西拡張区トレンチ断面の各地層から採集した試料からの種子の検出は，ただ縄文晩期以後の溝の下層から数粒の当時食用していたと考えられるマタタビ，キビノナワシロイチゴ，ニワトコの種子が出土したのみで，他の層から出土しなかったのは，その層が乾燥状態のため分解消失したと思われる。また同24線トレンチでは最下15層の縄文晩期中葉の灰黒色粘土層と同東拡張区のトレンチ縄文晩期(中)突帯文化以前の暗茶色ピート層からは，多数の種類と粒が検出された。すなわち大形のクルミ（一部は小さい穴があり笛に加工？）トチノキ，ツバキの果種子の外に，小，中粒のカジノキ，マタタビ，サルナシ，エビヅル，ノブドウ，クサイチゴ，ヒメバライチゴ，キビノナツシロイチゴ，タラノキ，ニワトコ，キハダ，アカメガシワがあり，一部は集められたものであろうか他には現在の休耕田に多いホタルイやヤナギタデなどが出土した。それらは耕作中イネ田にはほとんど生えないので本質的には水中，湿生植物である。とくにその東拡張区でホタルイ，ヤナギタデが多いのは，そこが湿地であったためであろう。また本遺跡では前述の利用植物の種類，粒数が多く，とくにヤマグワが多く見られ，つづいてカジノキ，マタタビもかなり出土した。なお現在の人里，畑地雑草での種類ではイヌタデの粒数がとくに多く，その他ザクロソウ，ヤブガラシ，ヤブタビラコ，ノブドウ，コミカンソウ，キランソウ，カタバミ，ギシギシ，ヤエムグラ，ヤブジラミ，ノミノフスマなども少数だが出土している。

それらのうち利用植物は集めて喰べられたものが残ったと考えられる。しかし，その利用植物を含めて，大部分が現在の焼畑雑草であり，しかも一度に多種類がセットで出土することが注目される。おそらく当時この遺跡のあたりには，既に焼畑農耕が存在していたのではなかろうか。そこの雑草種実が落下または流れ込んでこの最下層の灰黒色粘土から検出されたものと考えなれる。

後　　記

筆者は本遺跡において縄文晩期から弥生期，古墳期……現代と連続した地層が認められるところから出土種子によって時代的に種類の変遷を知りたいとの考えで調査を開始した。しかし下層の縄文晩期以外は消失分解のためか種子の検出ができなかったのは残念であるが，されど縄文晩期において利用植物の種類と現代の焼畑農耕の雑草種子が多数検出できたことは将来の縄文農耕研究進展にきわめて有意義な結果が得られ幸であった。

参 考 文 献

1. 笠原　安夫：日本雑草種子図説，養賢堂，1968
2. 笠原　安夫，黒田　耕作：宮尾遺跡（1区）より出土した植物種子の固定について，岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(4)，P232—242，1974。
3. 笠原　安夫：川入，上東遺跡より出土した作物および雑草種子の固定について，岡山県埋蔵文化財発掘調査報告第2集山陽新幹線に伴う調査ⅡP337—350，1974。
4. 笠原　安夫：宮ノ前遺跡からの発掘種子の分析について，岡山県埋蔵文化財発掘調査報告12。近刊
5. 里見　信生，鳴植　直弘：日本産キイチゴ属の種子Ⅰ形態金沢大学理学部付属植物園年報第4巻。1971。
6. 佐々木高明：稲作以前ＮＨＫブックス147，1971。
7. 塩見　　浩，近藤　義郎：岡山県山陽町南方前池遺跡，私たちの考古学七号考古学研究会，1956。
8. 西田　正規：植物種子の固定，炭化材の樹種固定。京都府舞鶴市桑飼下遺跡調査報告書。P244—256。P388—393，平安博物館。1975。
9. 渡辺　　誠：縄文時代の植物食，雄山閣考古学選書13，1975。

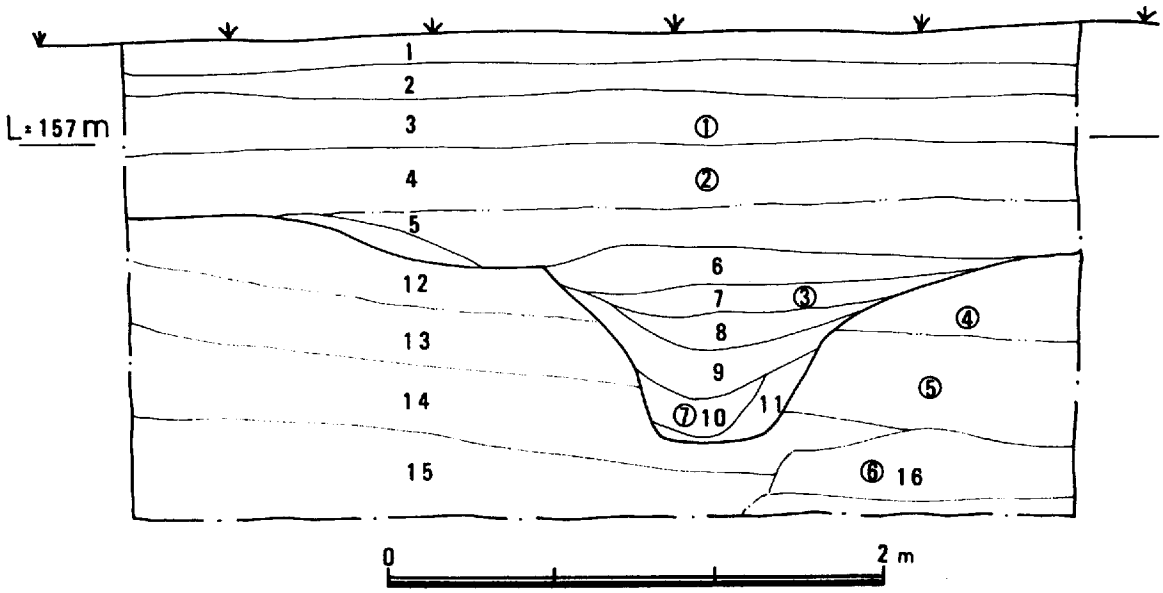


図4　6区22線西拡張区

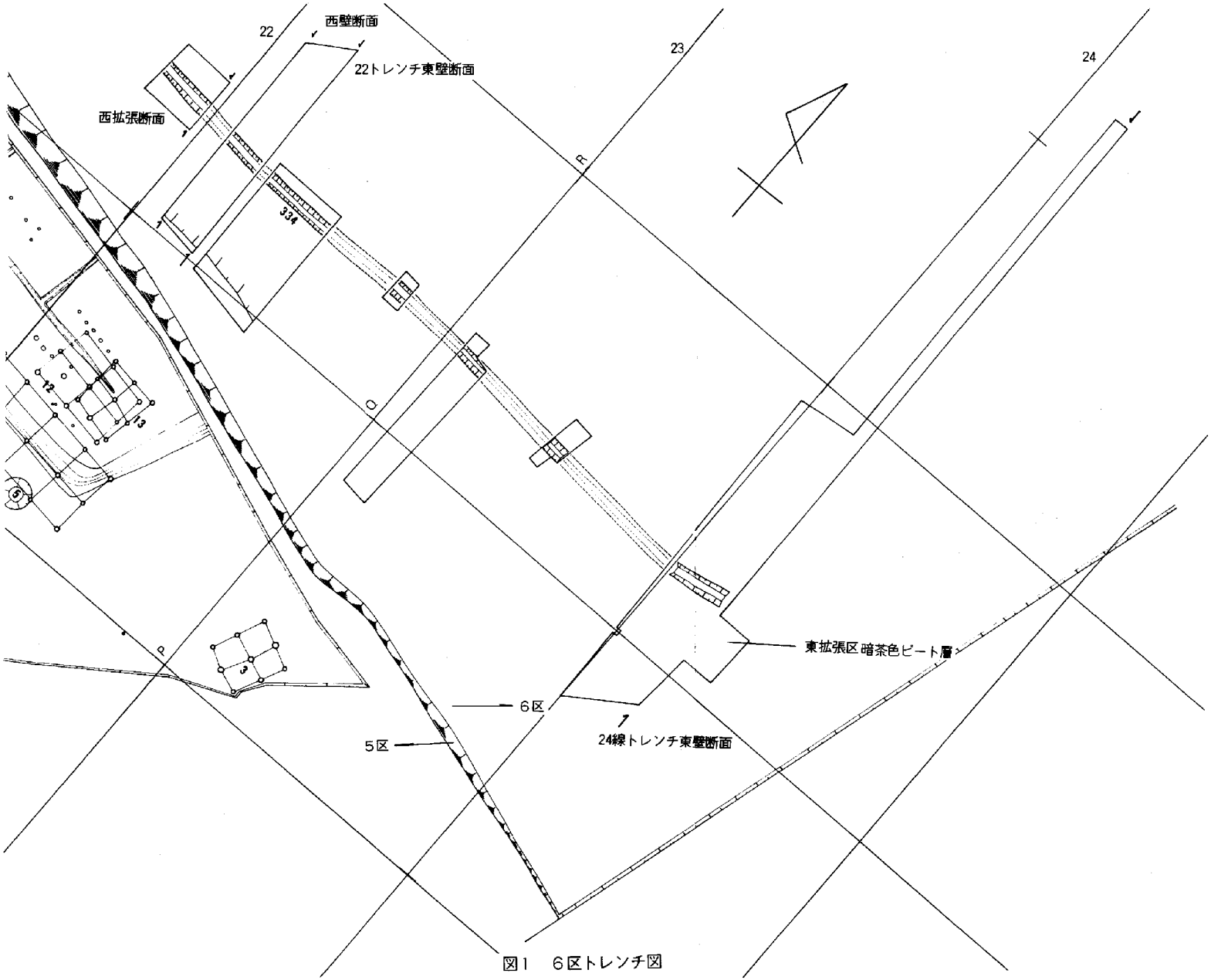
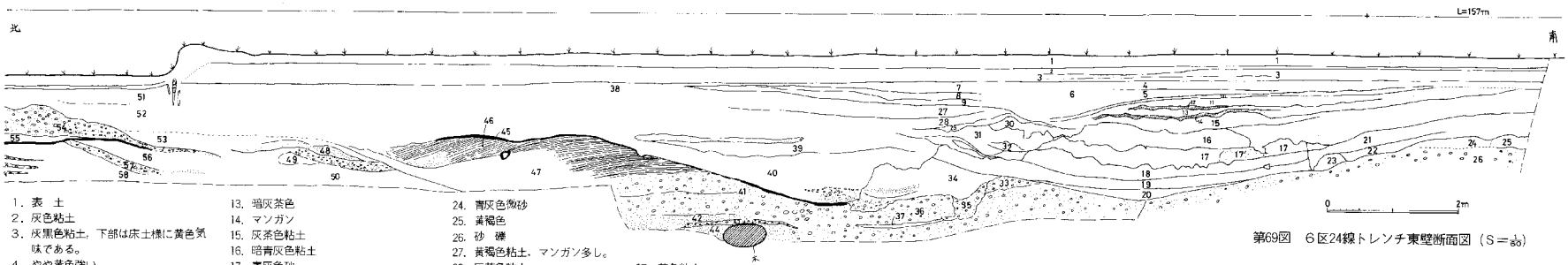
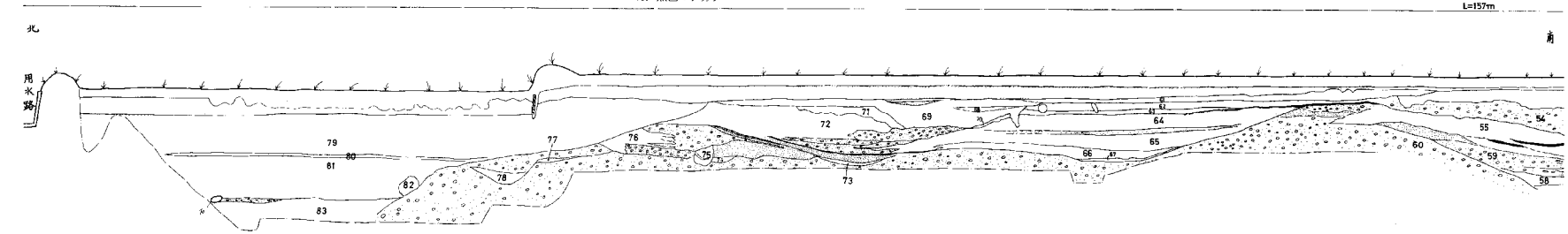

22
西壁断面
22トレンチ東壁断面
西拡張断面
23
24
334
12
13
5
3
東拡張区暗茶色ピート層
6区
5区
24線トレンチ東壁断面

図1　6区トレンチ図

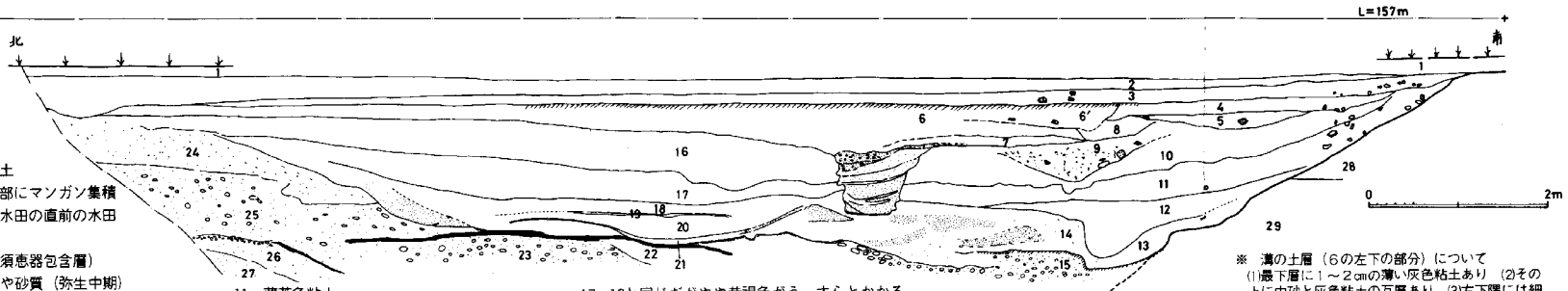


1．表　土
2．灰色粘土
3．灰黒色粘土，下部は床土様に黄色気味である。
4．やや黄色強い
5．やや灰色強い　6
6．灰茶色粘土，この付近は分離しがたい。
7．黄褐色粘土
8．黄褐色砂質土
9．灰黄色粘土
10．黄褐色粗砂
11．灰茶色微砂
12．マンガン
13．弱灰茶色
14．マンガン
15．灰茶色粘土
16．暗青灰色粘土
17．青灰色砂
17'．茶色に酸化した砂
18．青灰色粘土
19．灰黒色粘土　縄文晩期土器片
20．黒色粘土（西壁には存在しなかったピート層）土器片多い。
21．暗灰茶色，南は暗茶褐色
22．灰茶色粘土
23．暗灰青色粘土
24．青灰色微砂
25．黄褐色
26．砂　礫
27．黄褐色粘土，マンガン多し。
28．灰茶色粘土
29．淡灰色微砂マンガン多い。
30．淡灰色粘土
31．黄褐色粗砂
32．灰色粘土
33．青灰色砂礫
34．青灰色砂
35．青灰色砂礫
36．黄褐色粗砂と砂礫
37．茶色粘土
38．黄褐色土（ローム層のような感じ）
39．管鉄が多い（上はマンガン）
40．淡黄灰色細砂，下部に茶色砂礫
41．礫と粗砂
42．黄褐色粗砂
43．砂　礫
44．青灰色粗砂
45．黒色マンガン
46．黒色マンガンと黄褐色砂の互層
47．黄色砂
48．暗茶色粗砂
49．茶色砂
50．淡黄褐色砂
51．茶褐色土マンガン多し。
52．黄褐色土

第69図　６区24線トレンチ東壁断面図（S＝$\frac{1}{80}$）



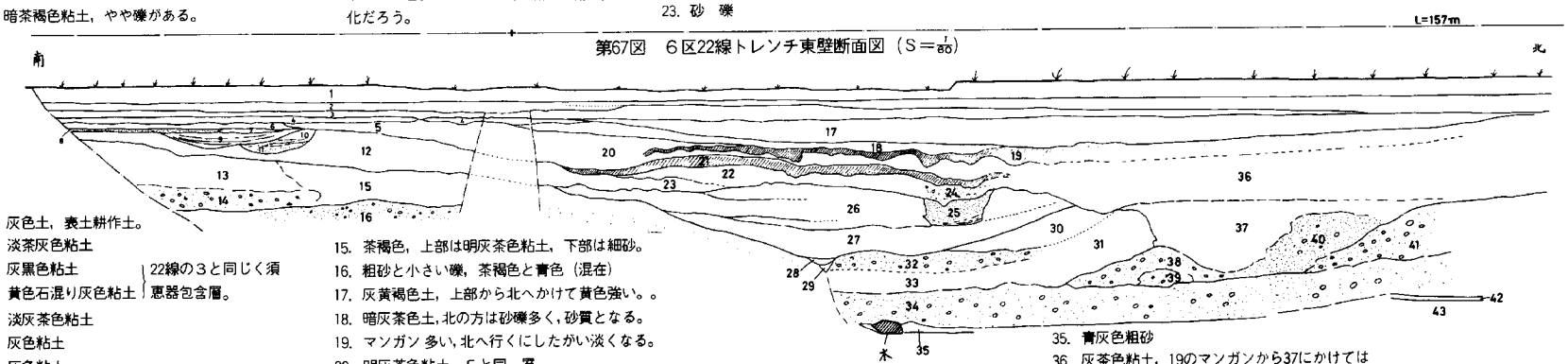
53．暗黄灰白色砂（51～53は下に砂上に粘土一連の堆積か）
54．暗茶褐色砂礫
55．　砂
56．暗黄灰色砂，粗砂もある。
57．茶褐色砂礫
58．黄白色砂
59．暗黄褐色砂礫
60．暗茶褐色砂礫
61．暗茶褐色土マンガン多い。
62．黄灰色土
63．黄色土
64．茶灰色微砂質土
65．茶灰色細砂
66．暗茶灰色細砂
67．灰黄色細砂（流路の底）
68．黄混灰色砂
69．灰色粘土
70．淡灰白色土
71．暗灰色粘土
72．茶灰色粘土
73．明茶色粘土（流路の底）
74．細　砂
75．上から灰白色砂，黒色土，黄褐色砂。
76．灰茶色中砂
77．中砂（弥生中期土器片存在）
78．中　砂
79．茶灰色土（須恵器片存在）
80．黄色鉄分多し
81．茶褐色土
82．黒灰色土
83．灰色粘土（やや茶色がかる色）



1．表土，灰褐色土
2．灰茶色土，上部にマンガン集積部分あり。現水田の直前の水田だろう。
3．灰色粘土層（須恵器包含層）
4．茶灰色土層やや砂質（弥生中期）
5．灰色砂に黄色礫多し，溝である。(弥生中期)
6．灰茶色，上部に鉄分集積。
6．凹みの底には砂礫が多く暗灰色。
7．6と同じと思われるがややマンガン多く黒っぽい。
8．灰色粘土
9．灰黒色粘土，やや礫多い。サヌカイト片や石器多い。(縄文晩期)
10．暗茶褐色粘土，やや礫がある。
11．薄茶色粘土
12．灰茶色粘土，凹みに小礫多くやや青灰色。
13．青灰色粘土
14．青灰色砂層，北の方は粗砂が集積とする部分あり。
15．茶色砂礫
16．暗茶色粘土マンガン多し。基本的には10連続する同一層。10に比べて礫が無く漸移的な変化だろう。
17．16と同じだがやや黄褐色がうっすらとかかるマンガン多し。基本的には11と連続する同一層
18．黄褐色微砂，マンガンやや少ない。
19．鉄分集積層
20．灰色微砂層
21．黄色がかった灰色細砂，流路の底の感じ。
22．粗砂（22および23の上部は鉄分集積し黒褐色で硬質。他にも黒色で示すもの同じ意）
23．砂　礫
24．砂礫，礫が小さい。
25．暗茶色砂礫，礫の大きいもの混る。
26．上部に小礫と鉄分集積あり，砂礫。
27．中　砂
28．黄色砂礫，硬い地山。
29．砂質，硬い地山。

※　溝の土層（6の左下の部分）について
(1)最下層に1～2cmの薄い灰色粘土あり　(2)その上に中砂と灰色粘土の互層あり　(3)左下隅には細砂が存在する。(4)これらの上に粘土・中砂の層が特に北へ低く傾斜して存在する(5)最上層には砂礫や粗砂と小礫などにより被われている。
溝の当初の断面は底巾50cm，上巾約90cm，深さ70cm～80cmの逆台形を呈していたと考えられる。
溝の壁面は直線ではなく，所々に侵蝕による凹みがあるが，木路の維持管理のための底ざらえによる侵蝕の可能性も考えられる。
溝の堆積土層は図では表現しきれないほどうすい堆積の状況がみられた。

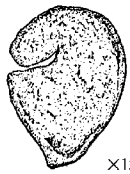
第67図　6区22線トレンチ東壁断面図（S＝1/80）



1．灰色土，表土耕作土。
2．淡茶灰色粘土
3．灰黒色粘土　｝22線の3と同じく須
4．黄色石混り灰色粘土　｝恵器包含層。
5．淡灰茶色粘土
6．灰色粘土
7．灰色粘土
8．粗　砂
9．茶色と灰茶色の粗砂が互層になっている。溝である（弥生中期）
10．灰色粘土　｝互層になる。溝（弥生中期）
11．茶色砂利　｝
12．暗茶褐色粘土，上部の方が黒っぽい。
13．茶灰色～茶褐色粘土
14．青灰色粘土と砂利
15．茶褐色，上部は明灰茶色粘土，下部は細砂。
16．粗砂と小さい礫，茶褐色と青色（混在）
17．灰黄褐色土，上部から北へかけて黄色強い。。
18．暗灰茶色土，北の方は砂礫多く，砂質となる。
19．マンガン多い，北へ行くにしたがい淡くなる。
20．明灰茶色粘土，5と同一層
21．マンガン
22．茶灰色粘土，やや明るい。
23．茶灰色粘土，やや暗い，
24．茶褐色，粗砂と礫混在。
25．青灰色粗砂，下部は砂と粘土の薄い互層になっている。
26．青灰色粘土，上はやや明るく，下はやや暗色（縄文晩期）
27．灰黒色粘土，炭多く土器が多い(縄文晩期?)
28．灰色粘土
29．暗灰白色粘土
30，明青灰色粘土
31．青灰色で上部は微砂，下部は細砂。
32．青灰色砂礫
33．明青灰色中砂
34．やや粗い砂礫，黒茶色～茶褐色。
35．青灰色粗砂
36．灰茶色粘土，19のマンガンから37にかけては漸移的な変化。
37．黄灰色細砂
38．青灰色砂礫
39．茶褐色砂礫
40．礫混り粗砂，茶褐色。
41．暗黄褐色砂礫，上部40との境はマンガン黒色
42．木の葉の集積層，びっしり木の葉。
43．青灰色中砂（木の葉と枝・種子混り）

第68図　6区22線トレンチ西断面図（S＝1/80）

利用植物（9）


ヤマグワ ×12

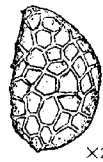
サルナシ ×10

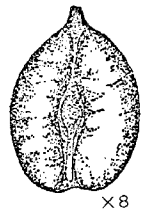
マタタビ ×13
カジノキ ×13

カラムシ ×20

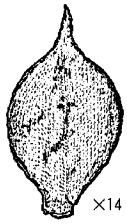
クサイチゴ ×15

ビッチュウナワシロイチゴ ×13

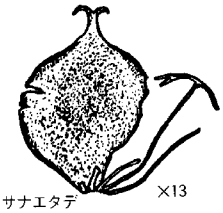

ヒメバライチゴ ×20


エビヅル ×8

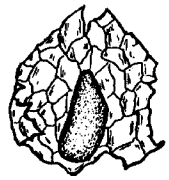
水生，湿生植物(6)


スゲSP ×14

ホタルイ ×13

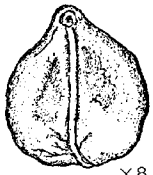

サナエタデ ×13

ヤナギタデ ×14


ギシギシ ×73

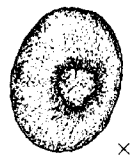
カヤツリグサ ×24

乾生，人里植物(19)


ノブドウ ×8

ヤブガラシ ×7

ヤブガラシ ×7


ヤエムグラ ×13

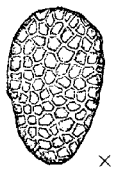
イヌタデ ×13

ヤブタビラコ ×11

ヤブジラミ ×20

カナムクラ ×60

キランソウ ×15


キランソウ ×18

カタバミ ×20

ノミノフスマ ×21

メナモミ ×13

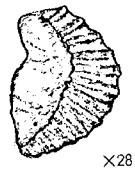
ハコベ ×30

シソSP ×15

イヌホオズキ ×11

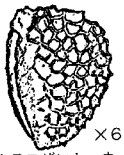
ヒユSP ×15

ザクロソウ ×30

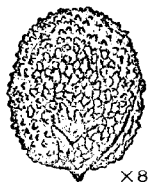

コミカンソウ ×28

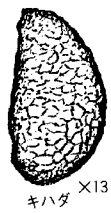
本木植物(8)

モミの葉 ×16

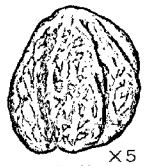

カラスザンショウ ×6

エゴノキ ×2.5


アカヌガシワ ×8

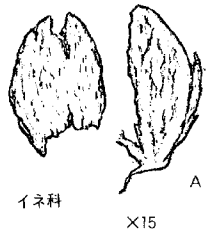

キハダ ×13

ニワトコ ×12

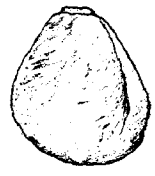

ミズキ ×5

モキノキSP ×10

その他の種子(3)


イネ科 A
エノコログサ イヌビエ ×15

スゲSP ×7.5 B


×4.5 C

谷尻遺跡6区22線トレンチ東壁（表1a）

	地層位	時代	土層の種類と皮	水洗土量	検出種子の有無	備考
No.1	2層	古墳	灰色粘土層	300g	なし	(1975. 3. 19)
2	3〃	弥生中期	茶褐色土層やや砂質	〃	〃	
3	7〃	縄文暁期	暗褐色粘土	〃	〃	
4	8〃		淡〃	〃	〃	
5	9〃		灰〃	〃	〃	
6	10〃		青灰色粘土	〃	〃	
No.7	3〃		暗黄色（鉄分）	〃	〃	
8	4〃		灰色粘土	〃	〃	
9	溝の下位		灰色粘土と砂	〃	〃	
10	4層、溝の西縁		灰茶色の土	〃	〃	上部鉄分集積
11	5層		灰茶色の粘土	〃	〃	マンガン多い
12	8〃		灰色微砂層	〃	〃	鉄分黄褐色

図1と2参照

谷尻遺跡6区24線トレンチ東壁（表1b）

	地層位	時代	土層の種類と色	水洗土量	検出種子の有無	備考
No.3	5層		やや黄色	300g	なし	(1975. 3. 19)
4	6〃		やや灰色黄褐色粗砂	〃	〃	
5	8〃		灰茶色微砂	〃	〃	
6	9〃		黒灰茶色	〃	〃	やや砂礫が多い
7	10〃		灰茶色粘土	〃	〃	
8	11〃		暗青灰色微砂層	〃	〃	
No.1	15〃	縄文晩期中葉	灰黒色粘土	400g	種子多数	最下層の下部
2a	15〃	〃	〃	500g	〃	枝、葉が多い
2b	15〃	〃	〃	500g	〃	
2c	15〃	〃	〃	500g	〃	

図1と3参照　No.1と2の種子種類は表2参照

谷尻遺跡6区22線トレンチ西拡張区（表3a）

	地　層　位	時　　代	土層の種類と色	水洗土量	検出種子の有無	
No.1	3　　層	古墳(スエキ土器)	暗灰色粘土	100g	な　し	
2	4　　〃	弥生期	淡茶褐色	150g	〃	1975. 6. 19 田仲氏ポリエチレン袋に土塊を入れて持参のもの
3	溝中(7層)	〃	赤茶褐色粗砂	200g	〃	
4	6　　層	縄文晩期(突帯文)		〃	〃	
5	7　　〃	縄文晩期		〃	〃	
6	8　　〃	縄文晩期以前	青灰色粘土層	100g	〃	
7	溝　下　層	〃		200g	マタタビ(1)、ニワトコ(1)、キビノナワシロイチゴ(1)	

図4参照

谷尻遺跡6区24線トレンチ東拡張区の暗茶色ピート層（表3b）
縄文晩期(中)突帯文化以前

No.				
No.	1	クルミ種子(2) 1つは人工で真中に穴をあけた笛、クルミの半片(9)	大 (シャレー)	大、小シャレーの大小
	2	トチノキの種実(2)　半片(4)　小片25	大 (　〃　)	高畑氏水洗検出のもの
	3	ヤブツバキの種実(9)と破片25	大 (　〃　)	
	4	ヤブツバキ　種皮の1片	小 (　〃　)	
	5	メビシ(1)	小 (　〃　)	
	6	ノブドウ(1)	小 (　〃　)	
	7	シブラジイ(1)　アラカシ(1)	小 (　〃　)	
	8	トチノキの果実片(2)	小 (　〃　)	
	9	種子、果実など多数	大 (　〃　)	
	10	種子、果実など多数		

No.9．No.10の種子の種類は表4参照

谷 尻 遺 跡 6 区 24 線 トレンチ (表2)

	利用植物										
	○ヤマグワ	○カジノキ	○マタタビ	○サルナシ	○キビノナワシロイチゴ	○クサイチゴ	○ヒメバライチゴ	○エビヅル	トチノキ幼果	○トチノキ	○カラムシ
No. 1 400g	7	15	5				1	1			3
No.2a 500	10	4	5	1	1	1	1		3		1
No.2b 500	44	18	15	1	1	1	2	1			
No.2c 500	28	5	8	5	1		3	1	1	4	1

	水中・湿生				
	ホタルイ	ヤナギタデ	タデSP	サナエタデ	スゲSP
No. 1 400g		2	2	1	
No.2a 500		2	1		2
No.2b 500	2	3	*1		1
No.2c 500	1	4	3		1

	乾生・畑生															
	メナモミ	ヤブタビラコ	ヤエムグラ	コミカンソウ	ノブドウ	○ヤブジラミ	カナムグラ	イヌホオズキ	○キランソウ	カタバミ	○ギシギシ	○ノミノフスマ	ヒユSP	ザクロソウ	カヤツリグサSP	ヤブガラシ
No. 1 400g	1	2	1	2	1	1		1	2	2	1	2		5		
No.2a 500												3				1
No.2b 500					1		1								**1	6
No.2c 500					2							1	1			

	木本											不明			合計
	○ツバキSP	○タラノキ	キハダ	○ニワトコ	モチノキSP	○アカメガシワ	ミズキ	カラスザンショウ	エゴノキ	コウモリカズラ	モミ葉	A	C	その他	
No. 1 400g			1		2			1		3		1		5	70
No.2a 500	***1	1		4		1		1			1	1	1	5	52
No.2b 500		2	2	5			1	1	2	1	9		2	11	135
No.2c 500	4			1		3		1	1	1	22		1	7	111

1) 26科 37種 土500g 平均433粒

2) *大形 3.2×2mm **2×0.7mmのもの *** サザンカの種子

谷尻遺跡 6区24線トレンチ東拡張区 (No.9．10) (表4)

	利用植物							水中・湿生				乾生・畑生												木本				不明その他	合計	備考
	○ヤマグア	○カジノキ	○マタタビ	○クサイチゴ	○キビノナワシロイチゴ	○カラムシ	○エビヅル	ホタルイ	ヤナギタデ	サナエタデ	スゲSP	○ノブドウ	カナムグラ	キランソウ、	メナモミ	○シソSP	カヤツリグサ	イヌタデ	ハルタデ	タデSP	ノミノフスマ	イネ科	キク科	○タラノキ	○ニワトコ	○カラスザンショウ	○コウモリカズラ	不明B				
No. 9 a	52	1					1	83	81	2								39	1	*8	10			1	3				282	高畑氏検出
No. 9 b	94	16	3	2	2	1		166	89	3	7		3	4	3	1	2	1	94	2	1	2	1	1	2	2	1			8	511	200g土水洗
No. 10	2						1	2	1				3	2					1								1			2	15	高畑氏検出
計	148	17	3	2	2	2	1	251	171	3	9		6	6	3	1	2	1	134	3	9	12	1	1	2	2	1	2		13	808	

1) ○印は現在宮崎県椎葉村高知県池上町椿谷などの焼畑雑草種類として見られる。
2) 土200gから511粒を500gに　　は1228粒となる。
3) 表3b　24線トレンチ東拡張区　暗茶色ピート層からクルミ，トナノキ，ヤブツバキ，メビシ，ツブラジイ，
4) 18科　30種
5) アラガシなど出土している。＊　ニオイタデ？

第8章 まとめにかえて

第1節 縄文式土器について

縄文式土器は，4区を除いて，1～6区の各地区より出土している。しかし，全体では散逸的な出土状態を呈しており，遺構に伴うものは稀である。

山形文，楕円文を有する早期押型文土器片は5区にかぎられており，表土剝ぎ時点のものと，土壙内より水晶剝片と伴出したものがある。前期・中期の土器片は検出されておらず，後期まで空白がある。後期土器片は，1・2・3・4・5区に1～2点が出土したのみで，他は6区包含層中に集中していた。これらも，長期間の生活を想定させる量には及ばない程度のものである。しかし，現在型式分類されているところの中津式に始まり，津雲A式，そして福田KⅢ式と考えられるものが見られた。なかでも後期後半のものが目立ち，注口土器の注口部分もみられた。

晩期では，1区に土器，石器等の総数約100点を出土したM130土壙がある。2・3区にも，含土中に小片を持った小土壙がみられた。さらに，6区暗茶色ピート層中より爪形文を主体にする多量の土器片が出土している。突帯文を主体とする，褐色粘土層中よりは，前期弥生式土器片が混在して出土している。

ここでは，M130土壙一括遺物を中心に，量的に多く出土している晩期の土器について考えてみる。従来，県内にて報告されている中で，M130土壙出土遺物（第16・17・18図）に類似しているものをとりあげると，御津町原遺跡にて出土している「原下層式」の土器群に近いことがうかがえる。（注1）又，打製石斧を多数出土したという点にかぎれば，ドングリ，トチの果等の貯蔵ピットで著名な山陽町南方前池遺跡をあげることができる。（注2）最近の資料では，同じ備中川水系にあって，ドングリの貯蔵ピット42基を検出した落合町一色宮の前遺跡をあげることができる。（註3）M130土壙出土土器が原，および前池の土器群と大きく異なる点は「突帯文」を伴なわない単一の土器群であり，半截竹管による爪形文，押引き文を主体とする土器群であるということである。爪形文をみると，爪形一単位の最長のもの1.48cm，最大巾0.43cm，最小長0.83cm，巾0.51cmを測る。一単位の長さ平均1.17cm，巾0.335cmとなる。他遺跡のものを実見していないので，単位の比較は困難である。縦貫道での調査した宮の前遺跡では，最長1.68cm，最大巾0.39cmを測り，爪形単位のみにかぎれば，宮の前P—002のものが，やや大である。器壁もやや厚く，0.6cm前後である。又，谷尻6区24線トレンチ東拡張区における，暗茶色ピート層出土の土器も爪形文を主体にする同類の土器である。爪形単位長0.81cm，巾0.32cmと小型の爪形文もみられた。ここでは，M130土壙，6区24線東拡張区暗茶色ピート層出土遺物は黒土B1式より原下層式に至る形態を呈し，より原下層式に近いものとしてとらえておきたい。

同じく6区22線トレンチ，両拡張区の暗茶褐色粘土層中より，突帯文を主体とする土器が出土し

ている。小片が多く，器体の具体的観察までは及ばなかったが，口縁外面直下に刻目貼り付け突帯を有するもの，頸部くびれ部分に刻目貼り付け突帯を有すものがみられた。いわゆる黒土BⅡ式（註4）といわれる土器群である。前期称生式土器が混在し出土していを。縄文式土器に籾痕を有するものは一点も発見できなかった。

（註1） 鎌木義昌，江坂進「岡山県御津町原遺跡Ⅰ縄文晩期の土器を中心として一」『瀬戸内考古学』第2号，瀬戸内考古学会昭和33年。
（註2） 塩見浩，近藤義郎「岡山県山陽町南方前池遺跡一縄文式末期の貯蔵庫発見一」『私たちの考古学七』昭和30年。
（註3） 二宮治夫，浅倉秀昭「岡山県埋蔵文化財報告5」，岡山県教育委員会，昭和50年。
（註4） 鎌木義昌，木村幹夫「中国地方の縄文文化」『日本考古学講座3縄文文化』昭和31年。

第2節 土師器について

住居址一覧表（表14）にもとづいて，各期より説明を加える。

Ⅰ期――M67住居址がそれにあたり，出土した3点の土器（図56）すべてに丹塗りが行なわれている。頸部は内傾している。高杯形土器の杯部下半内外面は入念なヘラ磨きがおこなわれている。

Ⅱ期――M178・179・206住居址，M174・176・189・223・213等の土壙がこれらにあたる。

壺形土器，甕形土器に複合口縁を有するものが多い。これらは，ほぼ垂直に立つものと，ヤヤ外傾するものとがある。胴部外面刷毛目，内面ヘラ削り，口縁部内外面はナデにより仕上げられているのが普通である。壺形土器の頸部にヘラ描きによる沈線がみられるものもある。これらは，器台に転用された可能性が考えられる。「くの字」状口縁を有する甕形土器には，叩き目がほとんどであり，左上がりが，多少混在している。甕底部は平底が多くみられるが，不安定な底部もある。叩き目には，細筋と太筋の荒いものとも二種類がみられる。器内面は，輪積み痕を残しており，その上に細刷毛，指ナデ等がみられる。高杯形土器には，脚部から杯下半までを同時につくり，上半を接合した稜線をもつもの・杯部と脚部を接合したもの・杯部・脚部を一挙につくり，円形粘土板をもちい栓をしたもの等がみられる。長脚・短脚が混合し，脚部内は中実・中空のものがある。甕形土器・鉢形土器底面には，木葉文がみられた。

Ⅲ期――M191住居址に切られているM190（図34），M195住居址をそれとした。M190住居址は火災にあっており，前記した通りである。Ⅱ期とは明らかに整形方法に変化がみられる甕形土器18を例にとってみる。「くの字」状に外反する端部に，内傾する口縁部をとりつけた肩部に最大径を有する甕形土器である。口縁部に4条のヘラ描き沈線を有し，口縁内外面はナデによる仕上げである。胴部外面は縦のヘラ磨きが肩部まで及び，頸部よりその部分間に斜行する刷毛目が行なわれている。内面上部は横位のヘラ削り，底部に指頭圧痕をナデ消したものがみられ，器壁は薄く仕上げられている。この甕形土器は，Ⅱ期としているM176土壙（図30）にみられるものと，Ⅳ期としているM192溝（図39）の中間形態・整形方法等を呈している。

すなわち，口縁部はヘラ描き沈線より櫛描きの沈線に変化し，器外面に施されるヘラ磨きもほぼ

全面に及ぶものから，胴部中位にまで下がり，それにかわり刷毛状工具による調整が行なわれている。器内面についても，上位のヘラ削りが上半にも斜行して荒く行なわれ，指頭圧痕も雑な感じに変化する。器形も胴部中位に最大径をもつ胴長のものから，胴部上位（肩部）に最大径をもつものに変化している。№176土壙の甕形土器肩部にみられる猫描きの文様が，№192溝等の甕形土器では米粒状の刺突文に変化しているようである。

Ⅳ期——№102・108・191住居址，№192溝をそれとする。

壺形土器，甕形土器等の胴部は丸みを持ち始め，底部は丸底に近いものが若干みられる。器形が全体的に丸みを持つようである。複合口縁は外傾するものが多くなり，端部は丸くおさめるものからシャープに角ばって仕上げるものに変化している。叩き目を有する甕形土器は，右上がりの太筋叩き目が施されており，細筋のものか多少混在する。器内面は輪積み痕跡をとどめ，その上部を刷毛，指ナデにより整形している。ここで内面縦ヘラ削りのものが出現している。高杯形土器は，長脚を有するものが少くなり，短脚を有するものが多数を示める。杯部稜線も下位に位置しているものが多い。鼓形器台は，Ⅱ期・Ⅲ期・Ⅳ期・Ⅴ期にみられ，内面上半の刷毛目が施されているものからナデに変化している。

Ⅴ期——№100，106の方形周溝状遺構，№112，120，204住居址がこれにあたる。

ここで，土器のもつムードが一変する感じを受けた。まず，器壁が薄くなり赤褐色から淡黄色，灰黄色の色調に変化し，胎土も精選された小砂粒が全面にみられ，「せんべい」のような感じを受ける。甕形土器，壺形土器の口縁部は，さらに外傾拡張され，器形は丸みをまし丸底化している。器外面は刷毛目が施され内面ヘラ削りである。高杯形土器は脚中空の均一した器壁のものがみられる。小型丸底壺，碗形土器がみられ，碗形土器外面下半はヘラ削りされヘラ記号をもつものがある。

Ⅵ期——№104，146住居址，№177溝状遺構がある。Ⅴ期の色調淡黄色・灰黄色のものから再び丸みをおびた器壁の厚い褐色，灰色のものに変化している。硬質の土器が多い。

甕形土器，壺形土器は複合口縁の退化するものと，「くの字」状に屈曲する口縁を有するものが多くなる。丸底化が完成しており，器形は球体になっている。器外面は刷毛目，内面は荒いヘラ削りが施されている。高杯形土器は，杯部に稜線をもつものがほとんどみられず，碗形に近くなるものが多い。脚部は長脚中空のものに内面ヘラ削りが施され，裾開きとなりそこに稜線がみられる。中空脚部に杯部の凸部分を挿入している。そして，Ⅵ期のあとにAタイプの須恵器を伴うⅦ期が続くわけである。

以上のように，住居址の変化，切り合い等を中心にして土器のもつ特長，変化を簡単にのべた。これらのうち，遺構の切り合いで明確に時間差の把握できうるものを記すと，Ⅱ期の№176土壙を切ったⅥ期の№177溝状遺構，Ⅲ期の№190住居址を切ったⅣ期の№191住居址及び№192溝状遺構，Ⅳ期の№192溝状遺構を切ったⅥ期の№177溝状遺状等の関係があげられる。

次に出土土器の「流れ」を各器種にみられる器形の変化，整形技法，土器のもつムード等から検討を加える。まず，壺形土器，甕形土器にみられる，複合口縁をもつものに限り観察すると，Ⅰ期

～Ⅲ期のものは口縁がほぼ垂直に立ち上がるもの，若干外傾するものが多数をしめ，端部においてもナデにより丸く仕上げたものが中心となっている。Ⅰ期にはヘラ磨きが施されている。Ⅳ期に，さらに拡張されたものが目立ち，口縁端部の整形は鋭く角ばって仕上げられている。

Ⅴ期ではⅣ期以上に拡張され頂点に達している。胴部においても，胴長のものから球形に変化をしている。叩き目のみられるⅡ期・Ⅳ期の甕形土器では，肩部に最大径を有し，ゆるやかな直線で底に向ってすぼまる平底から，胴部中位に最大径を有し丸みをもちながら不安定な平底・丸底への変化がみられた。

Ⅳ期の叩き目を持つ甕形土器に一例ではあるが，内面縦ヘラ削りが施されたものが存在した。いわゆる丸底的手法といわれているものはⅡ期の甕形土器にみられ，器胴外面から底面にかけて一貫したヘラ磨きが行なわれている。Ⅲ期の長頸壺にもみられ，Ⅳ期においては丸底化に入っている。そして，Ⅴ期以後は丸底が普遍的になっているものと考えられる。

高杯ではⅠ期の杯部中位にて接合する技法から，接合点をさらに下位に移し，深さを増す方向に進む。そして丸みを持つ杯部に変化している。脚部においても長脚中実・長脚中空内面刷毛，ヘラ削り混在から短脚に進み，さらにⅤ期以後では長脚中空の内面ヘラ削りをもつものに移っている。これらの変化を全般的にみて，Ⅰ期・Ⅱ期・Ⅲ期・Ⅳ期の土器は器壁が厚く鈍い感じをうけるものが多く，Ⅴ期の薄手のものと比較すると，まったく異った感じを受ける。Ⅴ期のものは，全体に丸みを有し器壁を薄く仕上げるのが特長である。Ⅳ期においては，再び器壁が厚くなり鈍い感じを受けるものが多くなる。しかし，硬質でしっかりしたものが目立つようである。

Ⅰ・Ⅱ期の土器のもつ特長は，県北では弥生時代後期末に比定されている天神原遺跡の丘陵周縁部を廻ると考えられる溝中より出土した一群の土器に同形態の甕形土器，長頸壺の頸部に凹線を有する共通点を見出すことができる。(註1) 県南に類例を求めば，酒津式より先出的な要素をもつとされている上東遺跡P一口円形土壙内出土の甕形土器口縁部に同形態をもつものがある。(註2) また，いわゆる酒津式より先出的なものとしている雄町遺跡の第1次調査区斜面堆積土中より出土した壺形土器（雄町11類）に酷似したものがある。(註3) 胎土，整形，色調に特長のあるもので他の伴出遺物と著しく異っている。これは，畿内第5様式から酒津式の新しい段階まで及ぶとされている川島遺跡20溝出土土器群中のB型技法と呼ばれている土器と同形態のものである。(註4) この土器は，谷尻では№174，№176土壙，№131住居址で検出されている。

Ⅲ期の土器のもつ特長は，前記の上東遺跡で酒津式の「古」の一群としてとらえられている。P一ト井戸内より出土した甕形土器に類例を求めることができる。若干，内傾して立ち上がる複合口縁部にヘラ描きにより3条～5条の沈線が施されているものである。この遺物をもった住居址はⅣ期の住居址により切られている。Ⅳ期の土器の特長は，県内では雄町12類～13類 (註3)，上東遺跡の酒津式「新」のへ群としてとらえられている，オノ元P一1・P一2の出土遺物に類似形態を有するものがみられる。山陰では，福市遺跡の吉塚Ⅲ式土器中，日焼山3号住居址出土の甕形土器に近い形態を見い出せる。(註5) 三刀屋町松本一号墳出土の壺形土器頸部下位に突帯の段がつき綾杉文の施されたもの (註6) に近い壺形土器片が出土している。

V期の土器が持つムードは前記したものと異る。県南では，いわゆる大泊六層（註7）期のものに類似形態をもつ甕形土器がみられる。雄町13類（註3）にみられる皿状の土器を伴う。甕形土器の形態は山田・原・品の作遺跡（註8）より先出的要素をもっと考えられる。

VI期の土器は，大泊五層の範中に入るものと考える。前記の山田・原・品の作遺跡と北川走出遺跡（註8）の中間形態を呈するものと考えられる。№120住居址，№104住居址，№177溝と土器の流れの変化がみられ，№104住居址はV期とVI期の中間形態を呈するものである。これらが，いわゆる布留式の最も純粋な形で出土した小若江北遺跡のものに近いと考える。（註7）

このように単純作業として，いままでに先哲が論じられた編年に距離的，時間的及び社会状況等の有機的背景を考え合わせることなく羅列したのみであり，今後の実動，考察により一貫したものに進めなければいけない。

（註1） 岡山県教育委員会「天神原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告7』昭和50年。
（註2） 岡山県教育委員会「上東遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告第2集』昭和49年。
（註3） 岡山県教育委員会「雄町遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』昭和47年。
（註4） 太子町教育委員会「川島・立岡遺跡」昭和46年。
（註5） 米子市教育委員会，米子市遺跡調査団『福市遺跡」昭和43年。
（註6） 杉原荘介，大塚初重「土師式土器集成本編I（前期）」昭和46年。
（註7） 坪井清足「岡山県笠岡市高島遺跡調査報告」昭和26年。
（註8） 間壁忠彦「岡山県笠岡市走出の祭祀遺跡」『倉敷考古館研究集報第2号』昭和41年
巴形土器についての（註1）古代史発掘⑤ 大陸文化と青銅器「弥生時代－2」
（註2）水野清一・小林行雄「考古学辞典」
（註3）註1と同様

第3節 須恵器について

本遺跡の須恵器は，1区・3区・5区住居址，2区・3区溝より出土している。表土剝ぎ時点で出土したものもあるが，特に1区・5区住居址，3区溝に集中してみられた。

ここでは，住居址12軒（重複も含めて），溝3本より出土した須恵器をとりあげ，従来の編年等（註1）と比較してみると，6軒が古式の須恵器を持ち，他の6軒はやや新しい須恵器を持っていることがわかる。しかし，これらは層位，切り合い等によって明確に把握できうる資料ではない。

そこで，従来の編年に順じて，これらの杯蓋，杯身をとりあげ，形状などから，古墳時代後半（須恵器を持つ）の須恵器の変化を観察してみる。

まず，杯蓋・杯身の最大径，器高，形等より，大きく3タイプに別けることができる。

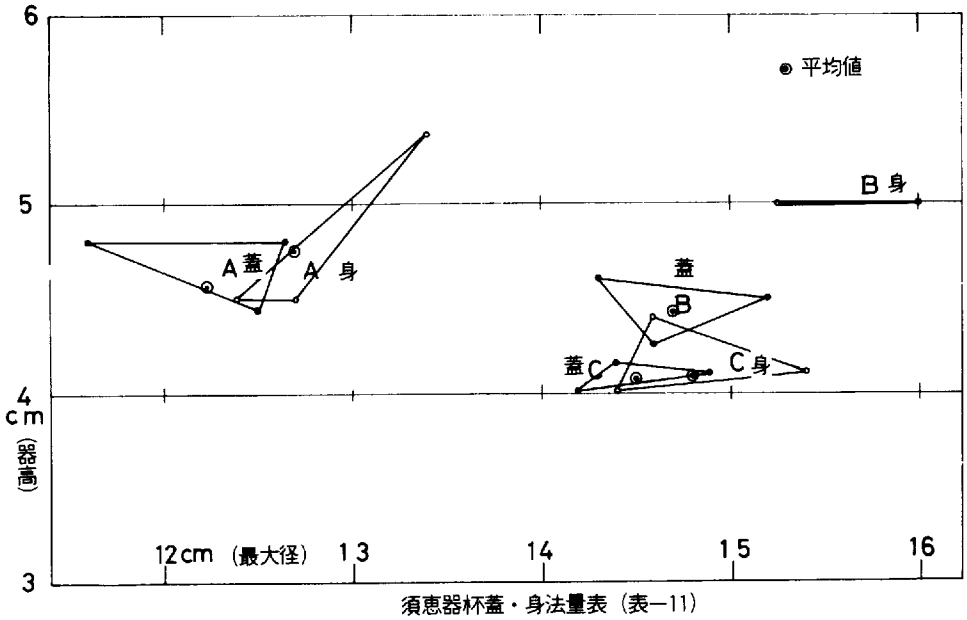
なお，Cタイプの土器は小片による復元実測によるため，正確差に欠ける。

Aタイプに入る遺構―住居址6軒（№107，№109，№110，№140，№180）

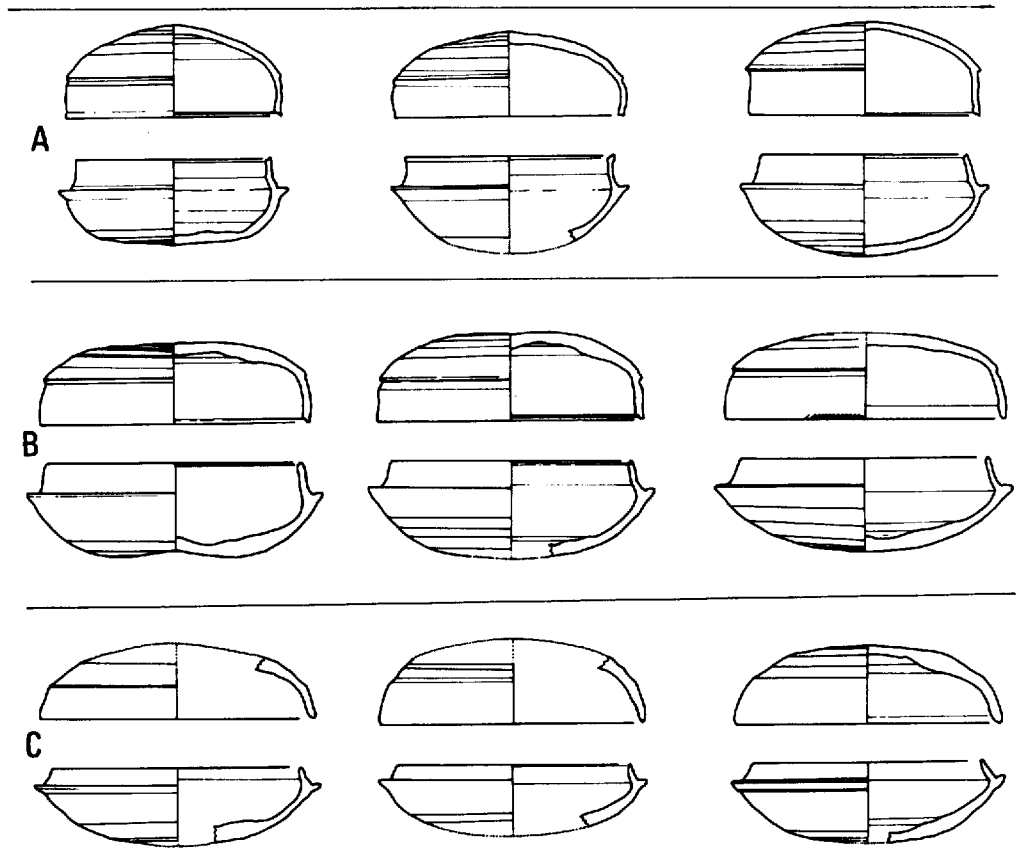
Bタイプに入る遺構―住居址3軒，溝1（№14，№94，№149，№185）

Cタイプに入る遺構―住居址3軒，溝2（№7，№11，№90，№185，№183）

表を参照していただき，各タイプの変化を説明してゆくと



須恵器杯蓋・身法量表（表—11）



須恵器杯蓋・身 編年表（S＝$\frac{1}{4}$）（表13）

＜Aタイプ＞

杯蓋の最大径平均12.25㎝・器高平均4.57㎝・杯身の最大径平均12.7㎝，器高平均4.75㎝を測る。天井部，底部より体部にかけてのヘラ削りは「右回り」のものが多数をしめ，「左回り」のものが混在している。ヘラ削りは，杯蓋中心部より天井部$\frac{3}{4}$位まで及んでおり，杯身では底部から体部にかけ$\frac{3}{4}$～$\frac{1}{2}$位におよぶ。口縁端部は，杯蓋・身ともシャープに仕上げられ，内側の凹状部分に鋭い稜線を持つ。杯身受部は平坦に仕上げ，その上に接合された立ち上がりは，やや内傾しながら外反するものと，内湾する二者がみられる。立ち上がりと体部内面の接合面には，明瞭な稜線はみられないが，補修をもたない，しわ状の線が入るものがある。大半が丸く仕上げている。また，受部に正常の形での重ね焼き痕跡をとどめるものがある。杯蓋の天井部より体部にうつる部分は明瞭な稜線がみられる。焼きあがりは硬質であり，暗青灰色，青灰色を呈し，胎土中にも砂粒大を多く含まず，精製粘土を利用していると思われる。器壁は0.4～0.5㎝と薄く，シャープで丁寧な造りで仕上げられているのが特長である。

＜Bタイプ＞

杯蓋最大径平均14.7㎝，器高平均4.5㎝，杯身の最大径平均15.46㎝，器高平均4.81㎝を測る。Aタイプとは，杯蓋・身の最大径が大きく変わり，平均２㎝広くなり，器高はやや高くなる傾向をしめている。天井部・底部より体部にかけてのヘラ削りは「左回り」のものが多数をしめ「右回り」のものが混在する。ヘラ削りは杯蓋中心より天井部の$\frac{3}{4}$から$\frac{1}{2}$位に及んでおり，杯身では底部から体部にかけ$\frac{1}{2}$から$\frac{3}{4}$位におよぶ。Aタイプとはまるっきり土器の回転が異り，大きな変化を示している。ヘラ削りは範囲が拡大され，単位が広くなっているようである。

口縁端部は，杯蓋・身ともに甘く仕上げられ，内側の凹状部分に甘い稜線が入るものと，丸くおさめてあるものがある。杯身受部の平坦部分は丸みを持ち，立ち上がり接合部分に浅く細い凹みがみられる。ここよりの立ち上がりは，内傾しながら外反するものが多数をしめるが，ほんの少し内湾ぎみのものもみられる。立ち上がりと体部内面の接合面には明瞭な稜線が入るものと丸く仕上げているものとがあり，前者が多くなるようである。又，受部に正常の形での重ね焼きの痕跡をとどめるものがある。杯蓋の天井部より体部にうつる部分の稜線は甘くなり，やや垂れ気味の感がする。内面底部には青海波文のナデ消しの部分がみられるものがある。杯身内面底部にもその感がするものがみられた。

＜Cタイプ＞

杯蓋の最大径平均14.5㎝，器高平均4.8㎝，杯身の最大径平均14.8㎝，器高平均4.8㎝を測る。Aタイプより杯蓋最大径2.5㎝大きく，器高も0.5㎝位低くなっている。ということは，AタイプよりBタイプは最大径が大きくなり，Cタイプでは小さくなってゆく傾向がみられる。器高においてもBタイプで高くなり，同じくCタイプで低くなってゆくようである。

天井部，底部より体部にかけてのヘラ削りは「左回り」に定着しており，「右回り」のものはみあたらなかった。

ヘラ削りは杯蓋中心より天井部$\frac{3}{4}$から$\frac{1}{2}$位に及んでおり，杯身も底部から体部にかけ$\frac{3}{4}$位におよ

須 恵 器 計 測 値 表 (表15)

(単位 cm)

A タイプ	No. 110	杯 身	12.7	11.2	4.5+α	暗 灰 色	右(ヘラ削り)	
	〃	杯 身	12.4	10.5	4.5	〃	左	かさね焼き
	No. 107	杯 蓋	12.5	12.3	4.45	淡青灰色	右	
	〃	杯 蓋	12.65	12.4	4.8	青 灰 色	右	
	〃	杯 蓋	11.6	11.6	4.8	青 灰 色	右	
	No. 109	杯 身	13.4	11.285	5.37	青 灰 色	右	内面底押圧痕
B タイプ	No. 94	杯 身	16	13.3	5	青 灰 色	左	
	〃	杯 蓋	15.2	15.1	4.5+α	青 灰 色	左	
	No. 185	杯 蓋	14.3	14.3	4.6	〃	左	
	〃	杯 身	15.25	12.8	5+α	〃	右	
	No. 14	杯 蓋	14.6	14.4	4.25	〃	左	
	〃	杯 身	16.0	14.4	5	〃	左	
C タイプ	No. 11	杯 身	15.4	13.6	4.1	淡青灰色	左	
	〃	杯 蓋	14.9	14.7	4.1	〃	左	ヘラ記号
	〃	杯 蓋	14.2	13.8	4	〃	左	
	No. 90	杯 蓋	14.4	14.2	4.15	青 灰 色	左	
	〃	杯 身	14.4	12.6	4.0	〃	左	
	No. 165	杯 身	14.6	12.4	4.4	〃	左	
A タイプ (平均値)		杯 身	12.7	10.995	4.75		右が多	
		杯 蓋	12.25	12.1	4.57			
B タイプ (平均値)		杯 身	15.75	13.4	5.0		左が多	
		杯 蓋	14.7	14.6	4.45			
C タイプ (平均値)		杯 身	14.8	12.8	4.1		左	
		杯 蓋	14.5	14.2	4.08			

ぶ。Bタイプに非常に近い感じである。口縁端部は，杯蓋・身ともに丸みを持ち，内側の凹状部分は皆無となる。杯身受部の平坦部分は丸みを持ち，立ち上がり接合部分に浅く細い凹みがみられるものがある。又，接合部分は非常に太く仕上げられているものがある。ここからの立ち上がりは，内傾しながら，外反するものが多数をしめるが，内湾ぎみのものもみられる。立ち上がりと体部内面の接合面には明瞭な稜線が入るものと，丸みをもって仕上げられているものがある。杯蓋の天井部より体部に移る部分の稜線は，さらに甘くなり，肩が丸くなっている。焼き上がりは，硬質が多数をしめ，青灰色，灰色を呈する。胎土中に白色砂粒大を含み，器壁は0.7～1㎝と厚く，さらにシャープさに欠げ，丸みをおびた造りである。

A・B・Cの3タイプについての変化を，かならずしも決定してはいないが，全体の流れとしてまとめてみると，

1. 器の規模が小形品から大形化に進み，再び小形化に向っている。

2. ヘラ削り方向が「右回り」から「左回り」に移っている。
3. 受部平坦面をもつものから丸みを持ち，接合部に細い凹みがみられるものへ。
4. 立ち上がりがやや内傾しながら，外反・内湾の混在するものから，外反するものへ。
5. 口縁端部内側の凹状部分に鋭い稜線をもつものから，鈍い稜線，丸みをもつものへ。
6. 器内底部に青海波文を有しないものから有するものへ，さらに有さないものへ。
7. 器壁を薄く仕上げるものから，厚く仕上げるものへ。
8. ヘラ削りの丁寧なものから，荒いヘラ削りへ。

変化しているのが理解される。

＜考 察＞

これらを，縦貫道の調査による出土須恵器等から変遷を追ってみる。

Aタイプは，天神原遺跡（註2）pit 2008・3号墳周溝内出土（5c後半～6c初め）に近似している。Bタイプは，領家24，26号住居址（6c中葉）（註3）に近似しており，住居址時期の在り方も谷尻A・B・Cタイプに類似している。Cタイプは，小中古墳群6号第Ⅱ主体部（6c後半）（註4）に近似している。A・Bタイプ間に北山古墳1号墳第2主体部の土器が入ると考える。AをⅠ期後半，BをⅡ期前半，CをⅡ期後半に比定できうる。（註1）

（註1）平安学園「陶邑古窯址群Ⅰ」昭和41年。
（註2）岡山県教育委員会「天神原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告7』昭和50年。
（註3）岡山県教育委員会「領家遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告8』昭和50年。
（註4）岡山県教育委員会「小中古墳群」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告7』昭和50年。

第4節 住居址について（表7）（表14）

住居址は，単一で出土しているものから，2軒の切り合い，3軒の切り合い，2軒の重複，4軒の重複しているもの等総数61軒が出土している。隅丸方形，方形を呈するものが多いなかで，全体の$\frac{1}{3}$にあたる12軒が円形のものである。

時期の具体性欠如もあるが，住居址の形，柱穴数，付属施設，遺物等からの検討が表14である。

1. 円形の住居址は，住居内中央に深い円形ピットを有し，主柱穴4本からなるものが多い。また，6，7，8本とバラツキがある。
2. 隅丸方形の住居址も，住居内中央に深い円形ピットを有し，主柱穴は4本からなる。ベット状遺構を有するものがある。
3. 方形の住居址は，須恵器を持つものと，持たないものとに区別される。後者は，住居内中央に深い円形ピットを有するものがなくなり，壁体溝に並行して方形土壙を設けるものが出現してくる。主柱穴は4本が主流をしめるが，2本のものがみられる。ベッド状遺構はほとんど見られなくなるが，住居中心部分が円形凹状になるものがあらわれている。焼土壙をもち始める。前者も，深い円形ピットはみられない。壁体溝に並行して方形土壙を設けるものがほとんどみ

表14 住 居 址 一 覧 表

時期	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	XI
住居址	No 67	No 178 No 179 No 206	No 190 No 195	No 108 No 102 No 191	No 120 No 204	No 104 No 146	No 107 No 109 No 110 No 140 No 180	No 94 No 14 No 149	No 7 No 11 No 90
方形		■		■	■	■	■	■	■
円形	■	■	■						
柱穴数 2					■	■	■		
4		■		■	■		■	■	■
6	■								
7			■						
8			■						
中央ピット	■	■	■						
ベッド状遺構		■		■					
方形土壙				■	■	■			
カマド							■	■	
焼土壙				■	■	■	■	■	■
土師器	■	■	■	■	■	■			
須恵器							■	■	■
壁体溝	■	■	■	■	■	■	■	■	■

られなくなり，主柱穴は２本から４本に変化してゆく。主柱穴２本のものは，カマドが付設されているものがある。４本のものには，明瞭ではないが，カマド焼土面のみ残存と考えられるものがある。中央に焼土壙をもつものが多い。

全体的にみると，Ⅲ期～Ⅳ期間，Ⅵ期～Ⅶ期間を境に住居址の変化がとらえられる。

住居址プランの円形から方形・主柱穴の４，６，７，８本のバラツキから４本の定形・中央ピットの有無・方形土壙の有無・焼土壙の有無等が大きく変化するのはⅢ期～Ⅳ期間である。

住居プランの方形，主柱穴４本の定形・方形土壙の有無・カマド，コシキの出現・須恵器の出現等と変化するⅥ期～Ⅷ期間である。

参考に切り合い関係をみると，Ⅲ期とⅣ期が２個所，Ⅳ期とⅥ期が１個所，Ⅳ期とⅦ期が２個所，Ⅷ期とⅨ期が２個所存在した。

重複関係にあっては，Ⅱ期とⅣ期重複１個所，Ⅲ期とⅤ期の重複１個所，Ⅲ期とⅦ期の重複１個所がみられた。

第5節 おわりに

この上水田盆地を中心にして，各時代の生活の跡が多数現存している。縦貫道用地内約14000㎡を発掘調査した段階でも，周辺の遺跡と有機的な関係をもつであろう遺構，遺物が多量に検出された。

これらのことは，あらかじめ予想できたことではあったが，低位台地部が全面利用されており，あらためて遺構密度の高いのにおどろかされた。

それだけに，この報告では谷尻遺跡のもつ内容は，盆地内の今後の諸開発，及び遺跡保存，考古学研究等の同時的現存に対応できうる遺跡そのものの具体性を表出させなければいけなかった。

しかし，今回も充分に結果を公表できる状態ではなく再び埋蔵文化財を作りつつあるようである。昼は発掘現場にて調査を行い，夜は事務所にて報告書作成を行うというパターンが貫習化しつつあるのが現状なのである。

ここでは，谷尻遺跡出土の遺構，遺物を北房町内の遺跡，とくに縦貫道路線内で近隣の，宮の前遺跡，備中平遺跡，桃山遺跡，空古墳等と比較しながら遺跡全般についてのべてみる。（註１）

各遺跡は，備中川の河岸，及びその支流周辺を占地するという共通点を有している。中でも宮の前遺跡は，本遺跡に最も近似した地形を持ち，河岸を利用した遺跡の類似性を多くみいだすことができる。

年代順にみてみると，各遺跡及び北房町内にあっては，今日旧石器時代に属すると考えられる遺構，遺物は発見されておらず，楕円，山形等の押型文で代表される縄文時代早期の遺物は，谷尻遺跡で数点検出されている。遺構に伴うものとして，谷尻，備中平遺跡等の○状土壙内（註２）よりの出土例がある。空古墳墳丘盛土内からも検出されている。後期は桃山遺跡８区にて比較的まとまった地点より出土しており，中津式，福田ＫⅠ式に近い形態を呈するものである。谷尻遺跡６区でも堆積土中より少量が出土している。

谷尻遺跡

現在，縄文時代早期～後期の遺物は非常に希薄な分布状況であり，まして遺構にあっては皆無に近い状態である。しかし，縦貫道の発掘調査が西に進行するにしたがい，縄文時代の遺構，遺物が増加の途をたどるようである。又，忘れてならないのは阿哲台等石灰岩台地の周辺に分布する洞穴遺跡の存在である。（註3）

谷尻，宮の前遺跡の低位台地では，後期までの遺構，遺物の希薄な分布状況とはうって変わり，晩期中葉（原下層式）の時期には，遺物の出土量が急増する傾向をしめしている。又，遺構においても明確な土壙が検出されており，従来の時期との間に相異を表出している。谷尻遺跡では，爪形文を主体にする土器をもつ№130土壙，それより後出的なもので突帯文を主体にし，弥生時代前期土器を混在する6区堆積土等がそれにあたる。さらに，宮の前遺跡では，ドングリ・クルミ等を貯蔵したと考えられるピットが42基検出されており，№130土壙に近い形態の浅鉢形土器片がピット上層でみられた。これらのことは，晩期中葉において美作北西部・備中北東部に比較的共通の生活手段が開拓，実施された可能性を考えさせる。この時期を谷尻の第1展開期と考えている。その後，弥生時代前期の遺物は希薄になり，谷尻，宮の前遺跡で数点がみられるのみである。宮の前遺跡では，櫛描文を主体とする中期前半の遺構，遺物が量的に増加し，灰穴（註4）等が検出されている。

谷尻遺跡の第2展開期は，5区に限定して出土した約60基からなる土壙墓群である。中期前半の小土器片を数点混在するものもあるが，大半は後期前半に比定できうるものである。遺跡内では，土壙墓をつくった人々の住居址（集落）を検出することはできなかった。若干後出的要素をもつ土器は，桃山遺跡において斜面に構成された住居址内より出土している。

谷尻第3展開期にあたるものは，№67住居址に始まり，Cタイプの須恵器をもつ住居址までの大巾な期間があてられる。Ⅲ期においても若干みられた様相ではあるが，Ⅳ期にあたる№192溝内では岡山県南，兵庫県，島根県等の遺跡でみられる土器が混在している。叩き目を有する甕形土器の内面整形にのみかぎれば，県南でみられる胴部内面ヘラ削りの普遍化（註5）にくらべて内面刷毛ナデという畿内的技法を多く表出している。又，上水田盆地の山麓に分布する前方後円（方）墳等のいわゆる北房町の大型古墳群の形成期を谷尻遺跡ではⅤ・Ⅵ期間に想定できる。（註6）

古墳群中の大半をしめる横穴式石室墳は，Cタイプ，及び後出的要素をもつ須恵器（註9）の出土が確認されている。Cタイプに後出すると考えられ，まとまった出土例をもつものに空古墳（横穴式石室）があげられる。3～4回の追葬が考えられるものであろう。須恵質陶棺をもつ大谷1号墳の切石積み石室等のように唐尺使用を思わせるものもある。A・Bタイプの須恵器をもつ古墳はあまり確認されていない。

そのうち桃山遺跡8区土壙墓内，山の城古墳群1号墳組合せ箱式石棺上部等（註7）ではAタイプよりヤヤ後出的要素をもつ杯蓋・身が出土している。備中平遺跡の火災を受けた住居址内からもAタイプに近いと思われる高杯が出土している。又，時期は不明であるが比較的新しいと考えられる小殿池東斜面9基の横穴等は山陰地方からの影響を受けたものと考えられ，備中北部，美作北部，いわゆる県北に点在している。

奈良期と考えられる遺構は，遺跡東南に英賀廃寺が存在するにもかかわらず小規模の建物が２～３棟と少量の須恵器が検出されたのみであった。そして長期のブランクが遺構の上からみられ，古銭（北宗銭）を柱穴内にもつ，12世紀後半以後と考えられる中世建物群（註８）が第４展開期としてあらわれる。

以上が谷尻遺跡についての概略であるが，根本的に統一した思考の続行がなく非常にまとまりのないものになったことが残念である。

参 考 文 献

（註１）岡山県教育委員会「(2)中国縦貫自動車道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査」『岡山県埋蔵文化財報告５』1975．3

（註２）岡山県教育委員会「小中遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告７』昭和50年。平面形で黒色土が輪のようになっており，その中に黄色土がみられ，すり鉢状になっている土壙，弥生時代住居によって切られているものである。

（註３）1975年３月，北房町内川崎地蔵ケ渕洞穴入口付近にて縄文晩期黒土ＢⅡ式に近い押引き，突帯文の組合せの深鉢形土器が，坂本彰氏において表採されている。近日発表予定。

（註４）岡山市教育委員会「賞田廃寺発掘調査報告」1971年

（註５）倉敷考古館「玉野市田井深山遺跡」『倉敷考古館研究集報６号』1969年10月。

（註６）1975年７月～９月に岡山県教育委員会文化課が調査した中国縦貫自動車道建設に伴う発掘で類似土器が出土している。これは，光坊寺古墳群１号墳第Ⅰ主体部竪穴式石室内よりのもので谷尻Ⅴ期に比定できるであろう高杯である。伴出した壺形土器は播磨・権現遺跡，いわゆる庄内併行期に比定されている第３類土器153に類似している。宮の前遺跡の円方形周溝墓中にも谷尻Ⅴ～Ⅵ期に比定できうるものがみられる。

（註７）（註１）に発掘届が出されているものである。供献用にシスト上部に破砕された状態での出土であった。（実見）杯蓋天井部に穿孔をうけているものもみられた。

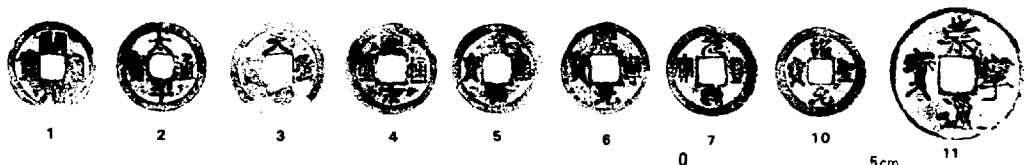
（註８）森克己「宋銅銭流通への基盤」『日本歴史』第300号参考文献，1973年５月西川宏「吉備の国」学生社。

（註９）岡山県教育委員会「中国縦貫自動車道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査」『岡山県埋蔵文化財報告11』1976

（註）８章２節「土師器について」にとりあげた土器は，従来の弥生式土器～土師器を通して書いたものである。ここでは谷尻Ⅴ期からを古墳時代の土器「土師器」として考えている。

谷尻遺跡出土古銭一覧表（表9）

	古銭名	初鋳年（西暦）	地区	遺構	備考
1	開元通宝	唐 成徳4年 (621)	2区	No. 162 土壙墓	灯明皿伴出
2	太平通宝	北宋 太平興国2年 (977)	2区	柱穴中	灯明皿伴出
3	天聖元宝	北宋 天聖元年 (1023)	1区	柱穴中	
4	皇宋通宝	北宋 宝元2年 (1039)	2区	柱穴中	
5	嘉祐通宝	北宋 嘉祐元年 (1056)	2区		
6	熙寧元宝	北宋 熙寧元年 (1068)	2区		
7	元豊通宝	北宋 元豊元年 (1078)	1区	柱穴中	
8	元豊通宝	北宋 元豊元年 (1078)	1区	No. 145 土壙墓	灯明皿
9	元豊通宝	北宋 元豊元年 (1078)	1区	柱穴中	
10	紹聖元宝	紹聖元年 (1094)	1区		
11	崇寧通宝	北宋 崇寧元年 (1101)	1区	No. 160 土壙墓	人骨 短刀
12	寛永通宝	日本 寛永年間 (1624～1644)	1区		表土剝ぎ
13	寛永通宝	日本 寛永年間 (1624～1644)	1区		



第62図 古銭拓本

図版1

1．谷尻遺跡調査前全景（西より）

図版2

1．谷尻遺跡全景（南西より）

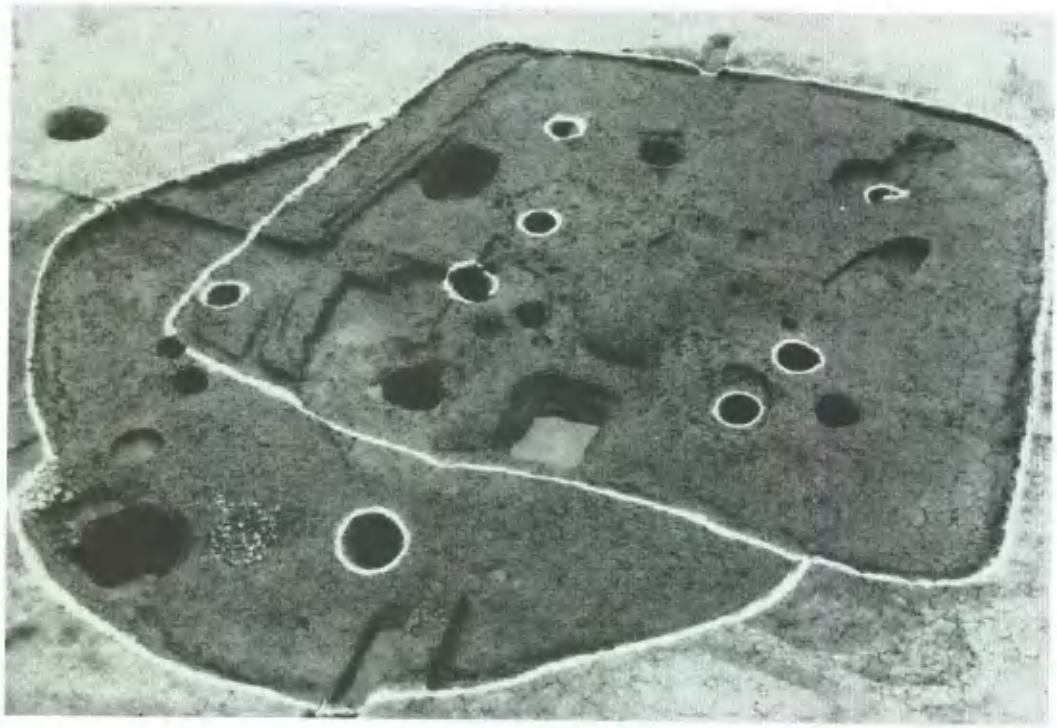
１．１区調査前全景（北東より）

２．１区谷部（旧台地先端）（西より）

図版４

１．１区西部掘り上げ全景（東より）

２．１区東部掘り上げ全景（東より）



1．1区No102.104住居址（東から）

2．1区No104住居址付属土壙内（南より）

図版6

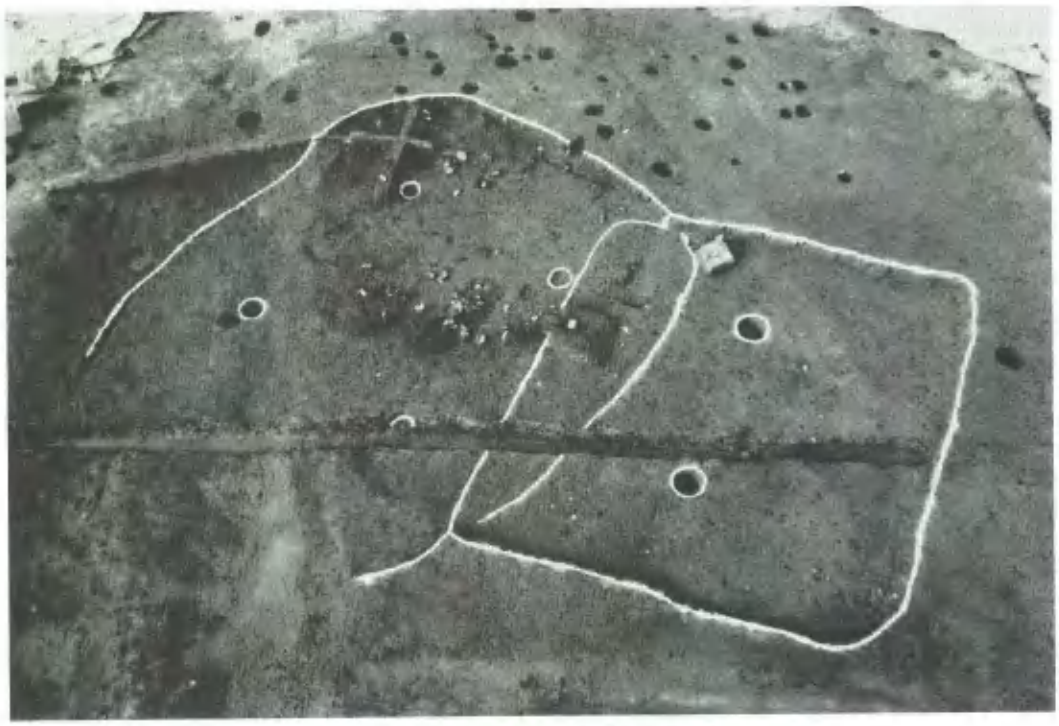
1．1区No107住居址（南西より）

2．1区No107住居址遺物出土状態（南西より）

1．1区No107カマド（南東より）

2．1区No107カマド横断面（南東より）

図版８



１．１区No107住居址（南西より）

２．１区No106方形周溝遺物出土状態（東より）

1．1区No109住居址（南東より）

2．1区No109住居址遺物出土状態

図版10

1．1区No120住居址（西より）

2．1区谷部（旧台地先端）（北より）

1．1区No115住居址（南東より）

2．1区No140.141住居址（南より）

図版12

1．1区No140住居址（南より）

2．1区No146住居址（北西より）

1．1区No130土壙（南西より）

2．1区No130土壙（北より）

図版14

1．1区No130遺物出土状態

2．1区No130遺物出土状態

1．1区No130土壙内遺物出土状態

2．1区No130土壙内遺物出土状態

図版16

1．1区No130遺物出土状態

2．1区No130遺物出土状態

1．1 区 柱 穴 遺 物

2．1区No145土壙

図版18

1．2区，3区調査前全景（南西より）

2．2区，3区掘り上げ全景（南西より）

1．２区No149住居址（南西より）

2．２区No152住居址（北西より）

図版20

1．２区No190住居址炭化材（北西より）

2．２区No190住居址遺物出土状態（北西より）

1．２区No191,192遺構（東より）

2．２区No191住居址（南東より）

図版22

1．２区No192溝状遺構（北東より）

2．２区No192溝状遺構遺物出土状態（北東より）

1．2区No191住居址遺物出土状態（北東より）

2．2区No192溝状遺構遺物出土状態（北西より）

図版24

1．２区No192溝状遺構遺物出土状態（南東より）

2．２区No191住居址上面巴形銅器出土状態

1．2区No176土壙（西より）

2．2区No176土壙（北西より）

図版26

1．２区No174,176遺物出土状態（北より）

2．２区No174遺物出土状態（南東より）

1．２区No177溝（北より）

2．２区No177溝（北より）

図版28

1．２区No177遺物出土状態（東より）

2．２区No177遺物出土状態（東より）

1．２区No160～No164土壙墓（南より）

2．２区No165溝状遺構（西南より）

図版30

1．２区No153,155,157,158建物（南より）

2．２区No157,158建物（南西より）

1．３区No179住居址（南西より）

図版32

1．３区No178住居址（北東より）

2．３区No178住居址出土遺物（北東より）

1．３区No207住居址（南東より）

2．３区No204,205,206住居址（南東より）

図版34

1．３区No181住居址（南西より）

2．３区No212.221住居址（北東より）

1．３区No188,180住居址（南東より）

2．３区No180住居址カマド（南東より）

図版36

1．３区No183を中心に全景（南東より）

2．３区No183溝（南東より）

1．３区No185溝の断面（南西より）

2．３区No185,186溝（南西より）

図版38

1．3区No198土壙遺物出土状態

2．3区No203袋状ピット

1．3区No219土壙（南東より）

2．3区No202袋状ピット（南西より）

図版40

1．３区No209配石の土壙（北西より）

2．３区全景（南東より）

1．５区調査前状態（北東より）

2．５区調査終了（北西より）

図版42

1．５区東側全景（西より）

2．５区西側全景（南東より）

1．５区No33住居址（南より）

2．５区No36土壙（西より）

図版44

1．５区No67住居址（北東より）

2．５区No67住居址（北東より）

1．５区No338住居址（南より）

2．５区No99住居址（北北東より）

図版46

1．5区No301住居址（南東より）

2．5区No89住居址（南東より）

1．５区No９建物（西より）

2．５区発掘終了時点（西より）

図版48

1．５区No４土壙（北東より）

2．５区No305土壙（東より）

1．５区No30土壙墓（西より）

2．５区No11床面焼土（南より）

図版50

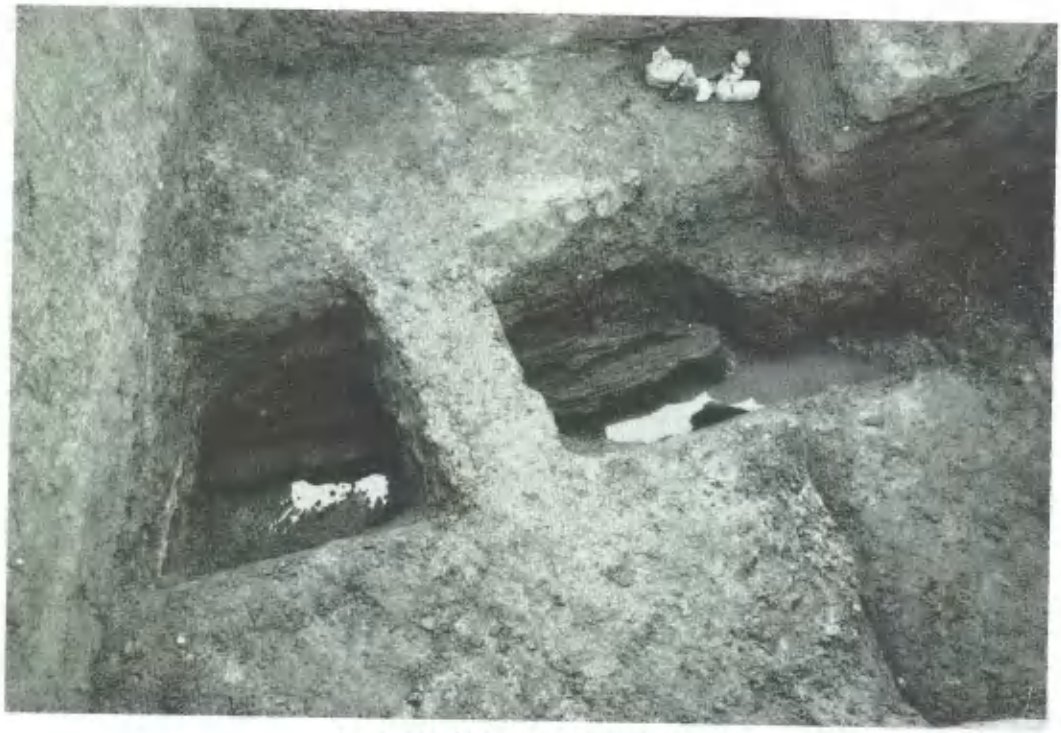
1．5区No6，2土壙墓（南東より）

2．5区No6土壙墓（南東より）

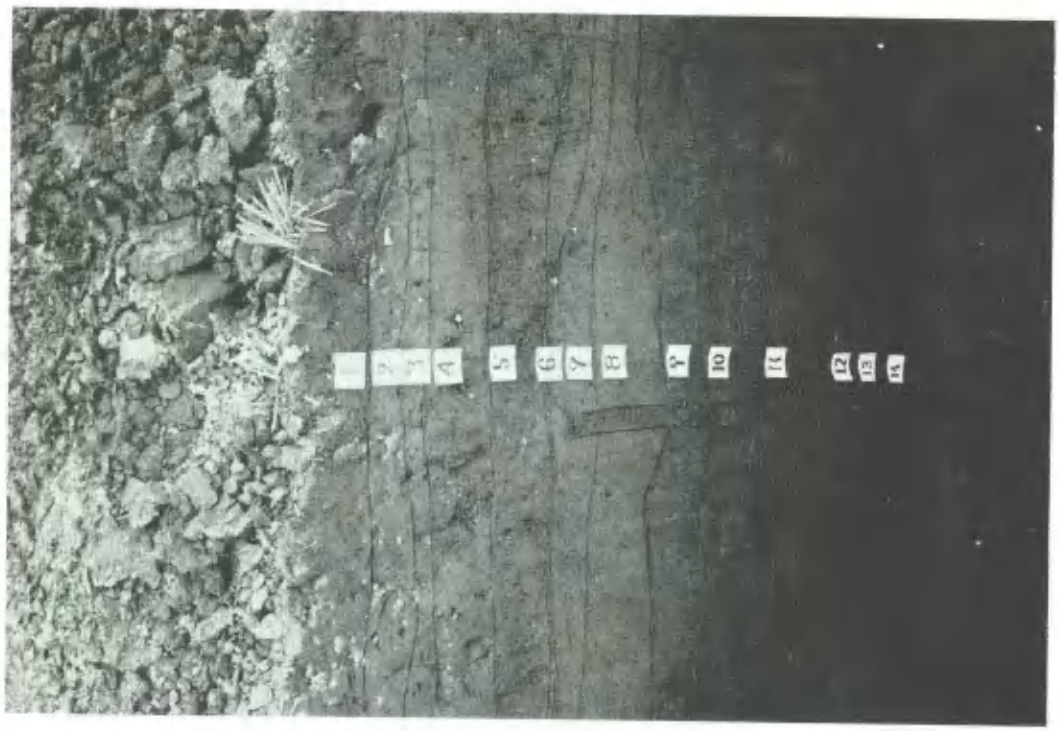
1．６区第一次調査グリッド（西より）

2．６区22線トレンチ土層断面（西より）

図版52



1．6区24線トレンチ流木（西より）



2．6区22線トレンチ土層断面（西より）

1．6区弥生時代 溝

2．6区西端拡張区溝土層断面（西より）

図版54

1．6区22線トレンチ土層断面

2．6区22線トレンチ土層断面（西より）

1．6区西端拡張区溝土層断面（西より）

2．6区24線トレンチ溝土層断面

図版56

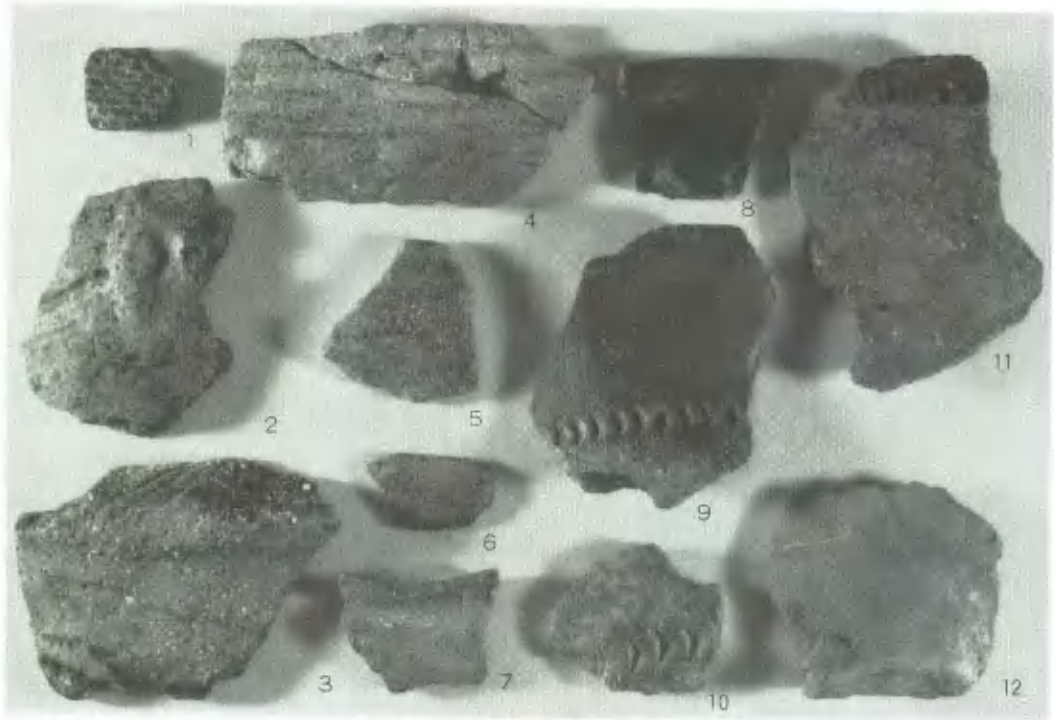
1．６区24線トレンチ土層断面

2．６区東端拡張区北壁断面

1．６区24線トレンチ内遺物出土状態

2．６区24線トレンチ内流木出土状況

図版58

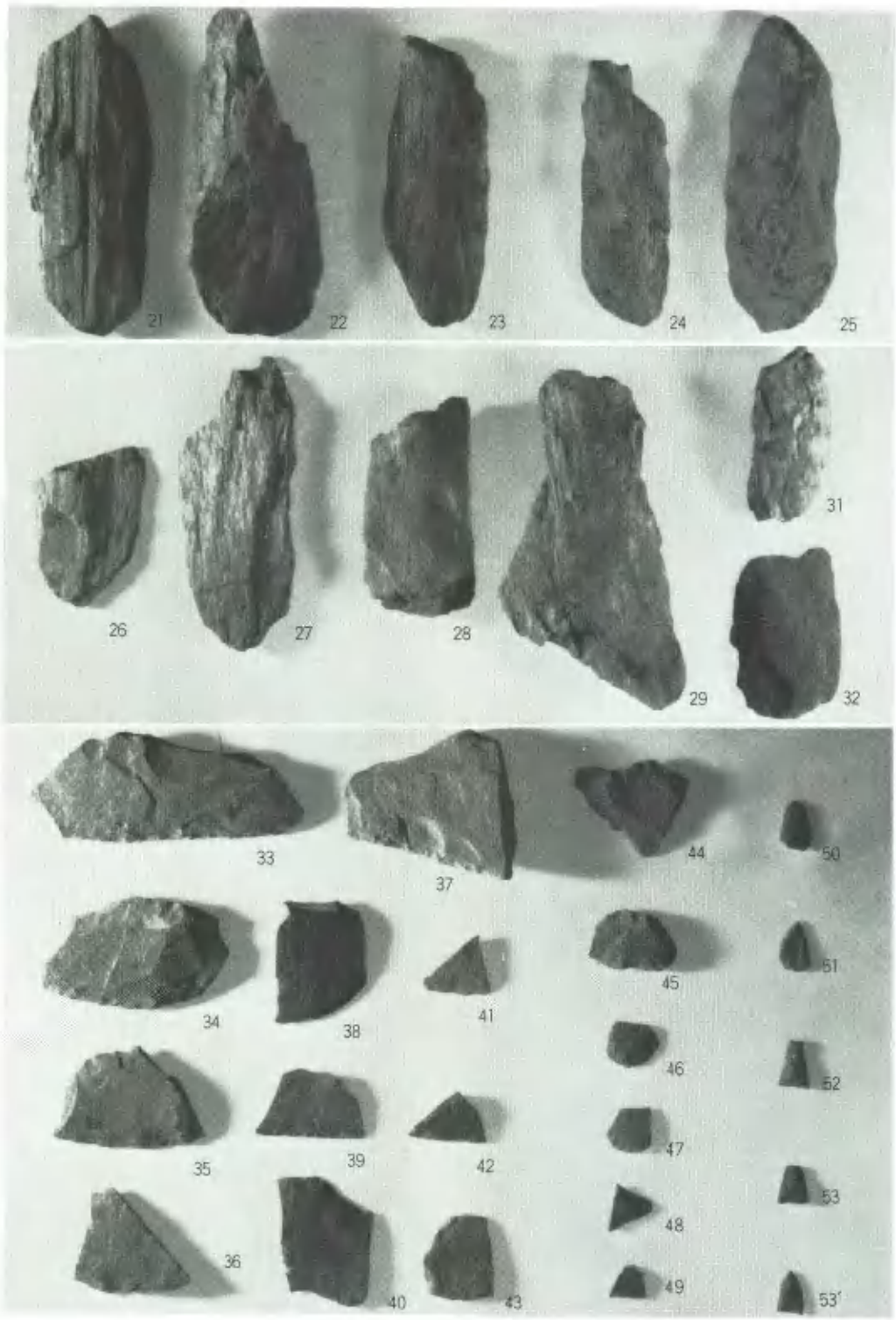


1．第1次調査22線トレンチ出土遺物

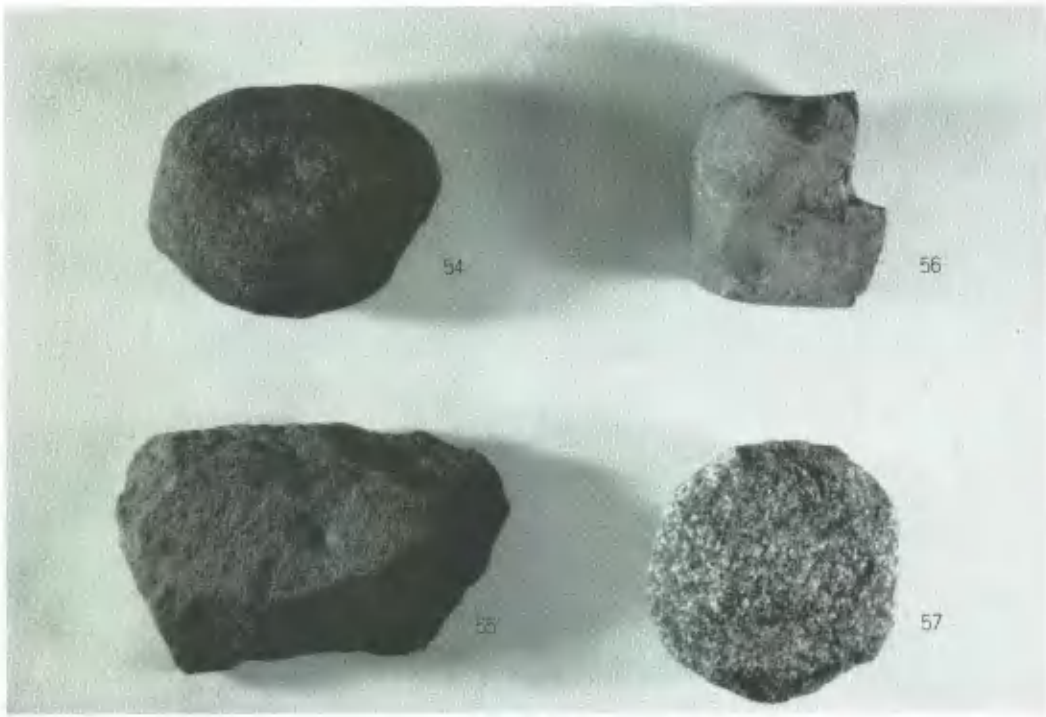
2．第1次調査22線トレンチ出土遺物

1．No130土壙出土打製石斧

図版60



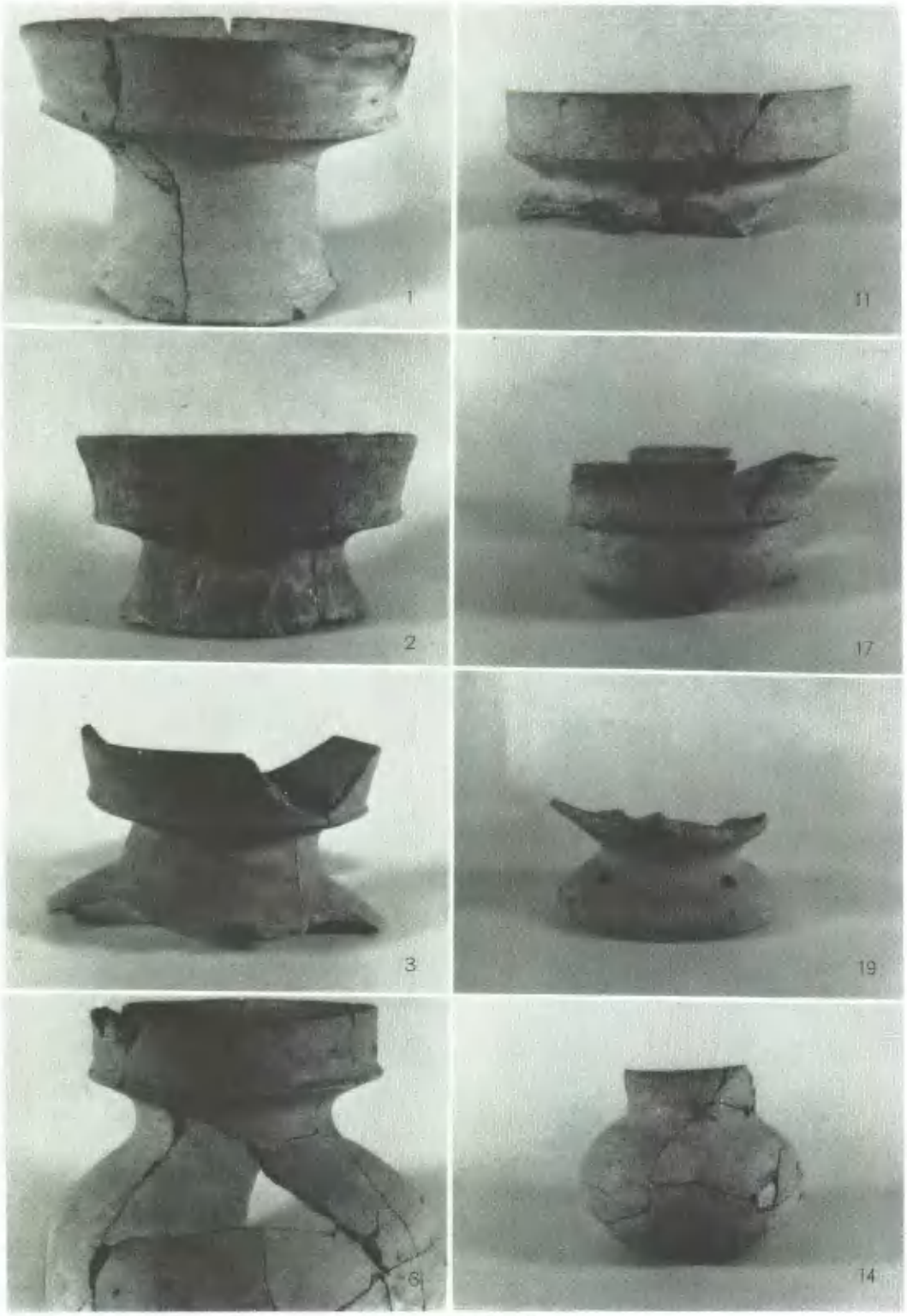
1．No130土壙出土打製石斧，スクレーパー，石鏃



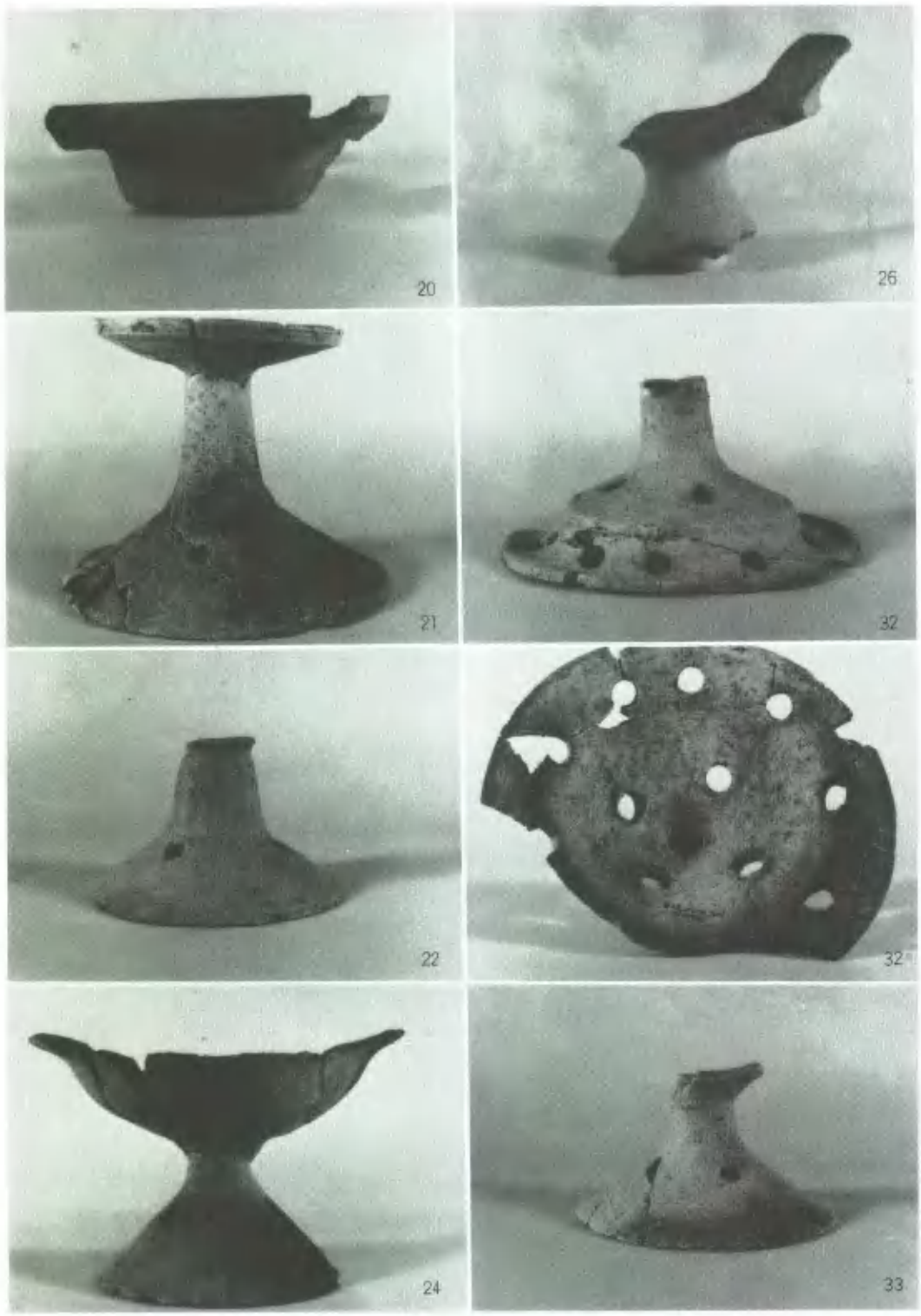
1．No130土壙出土凹石，磨石

2．No130土壙出土石皿，砥石

図版62

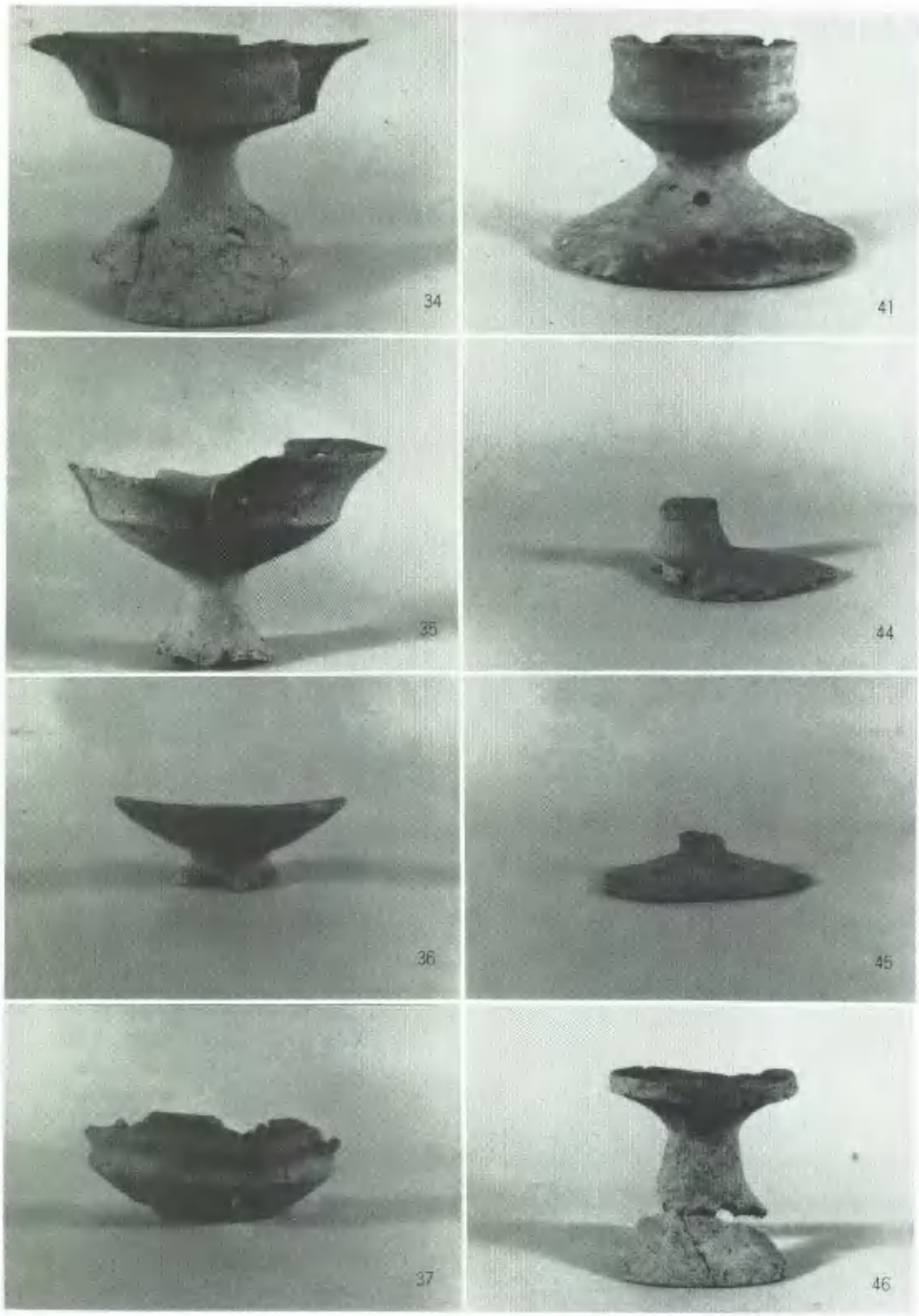


1．No176土壙出土遺物

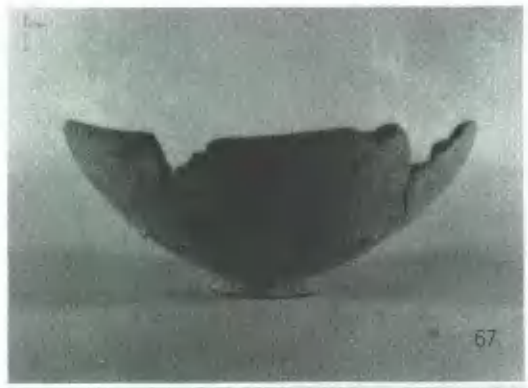


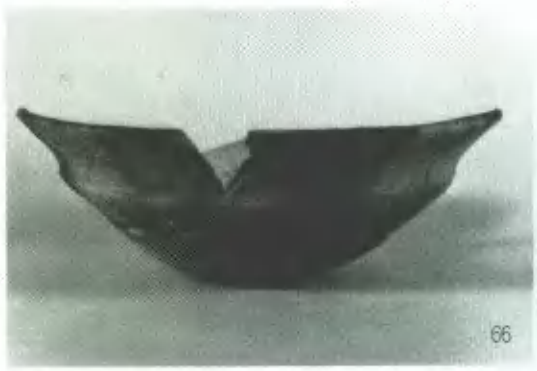
1．No176土壙出土遺物

図版64



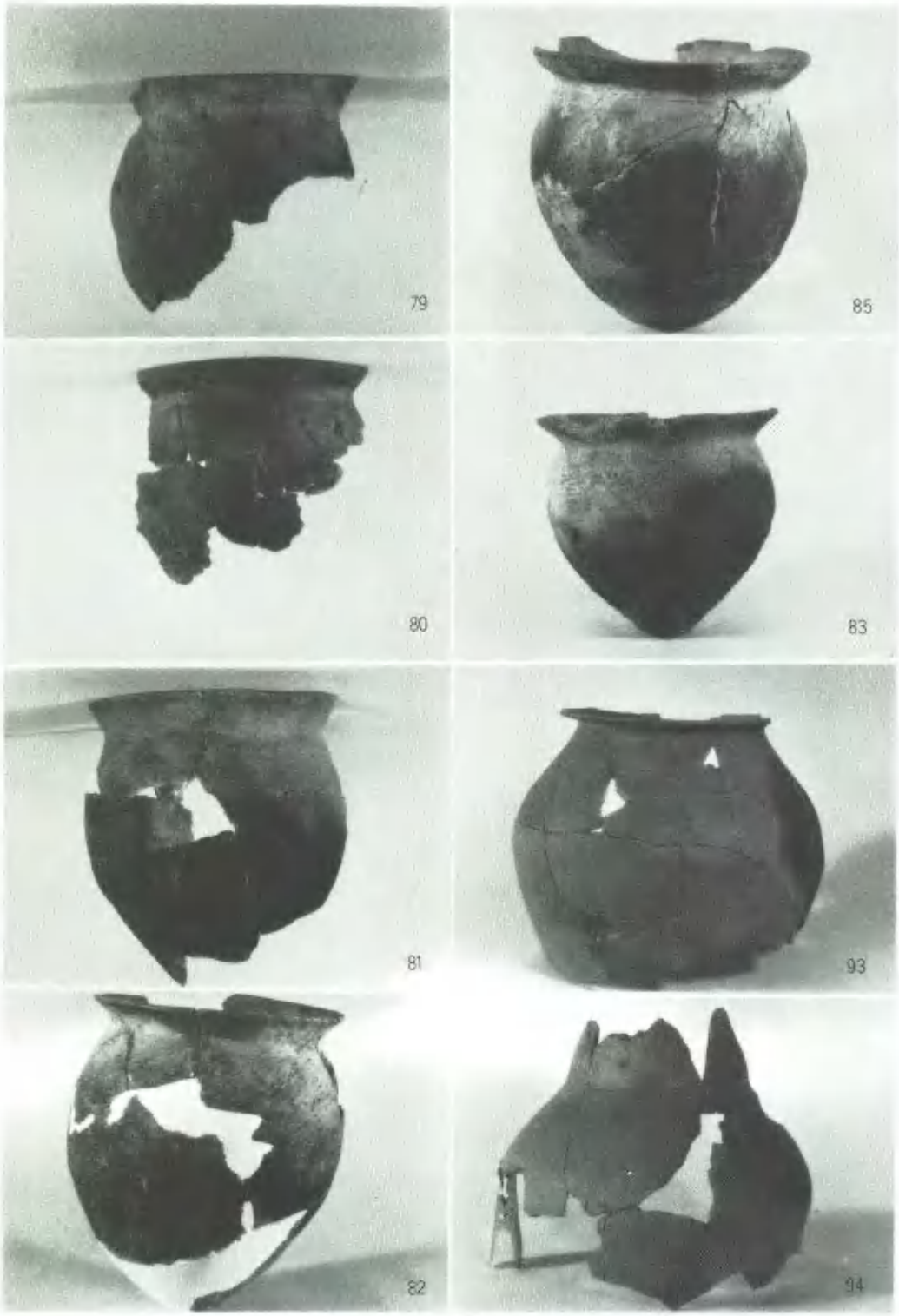
1．No176土壙出土遺物





1．No176土壙出土遺物

図版66



1．No176土壙出土遺物

1．No190住居址出土遺物

図版68

20

21

22

34

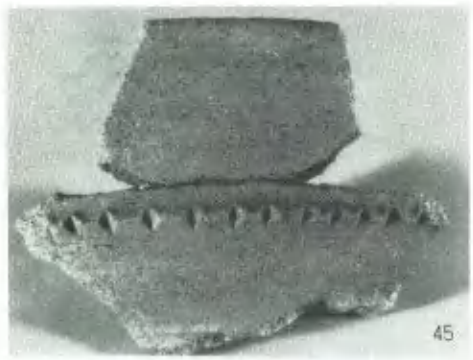
32

35

36

42

37

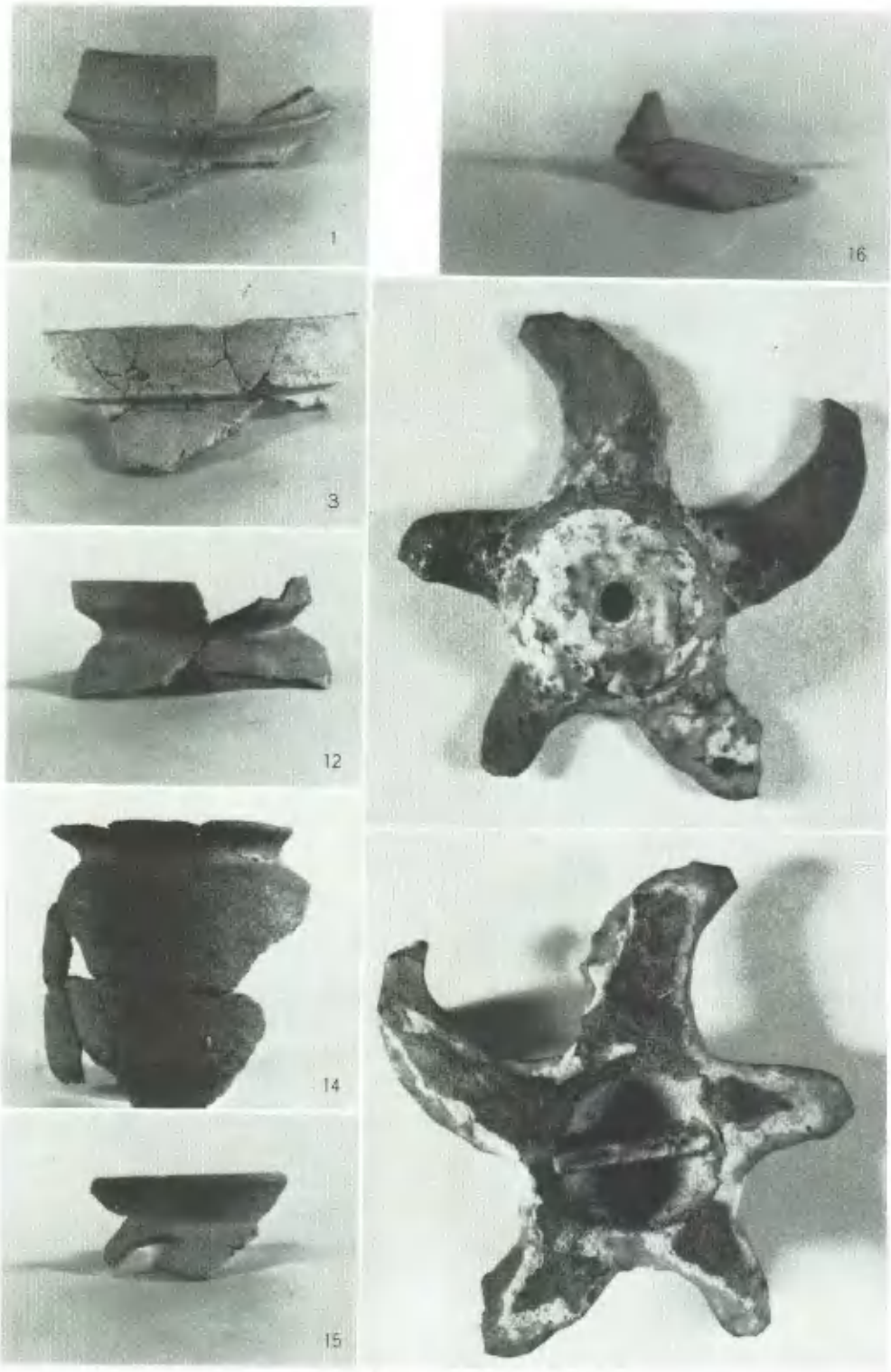

45

46

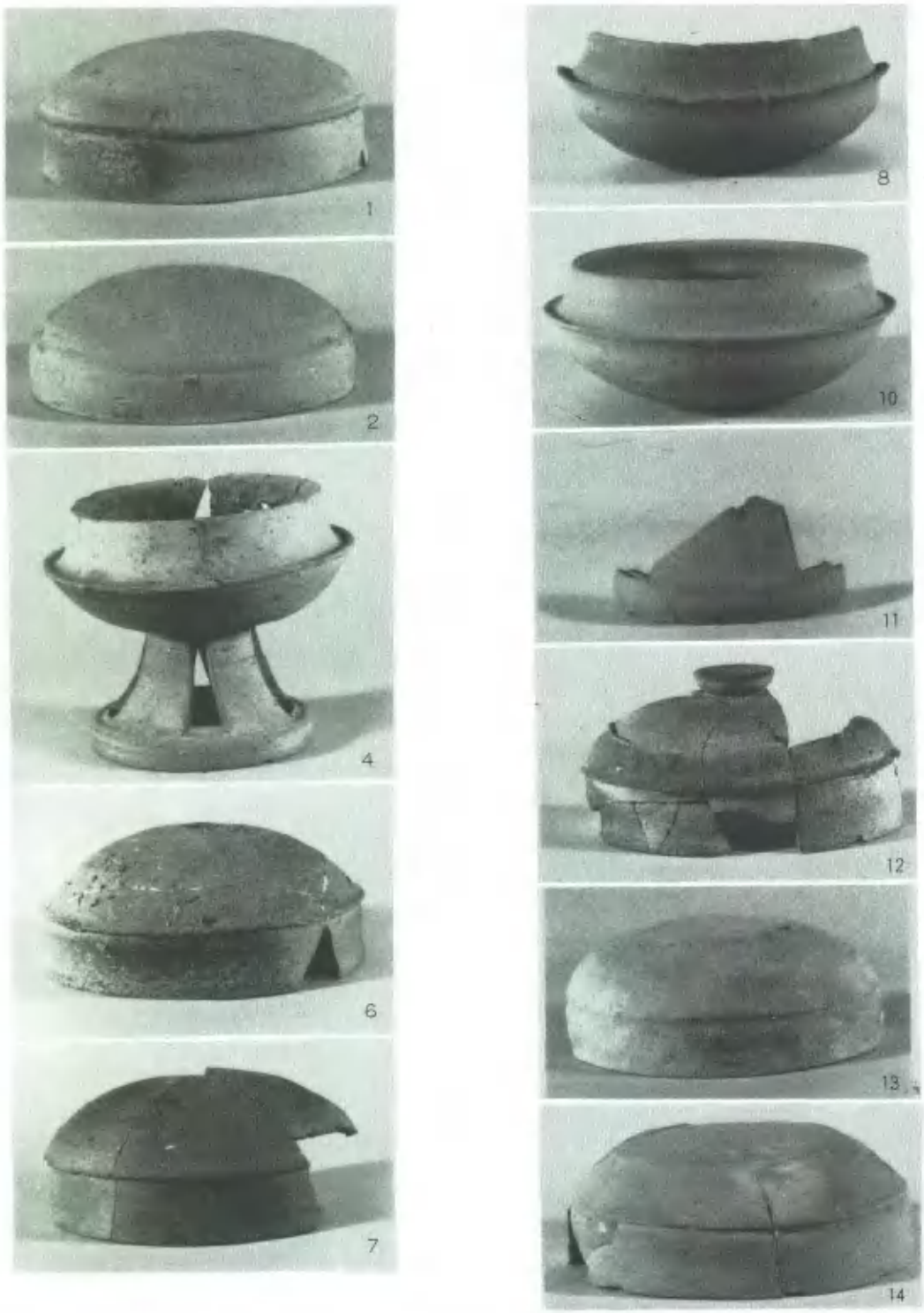
1． No192周溝出土遺物

1．No192周溝出土遺物

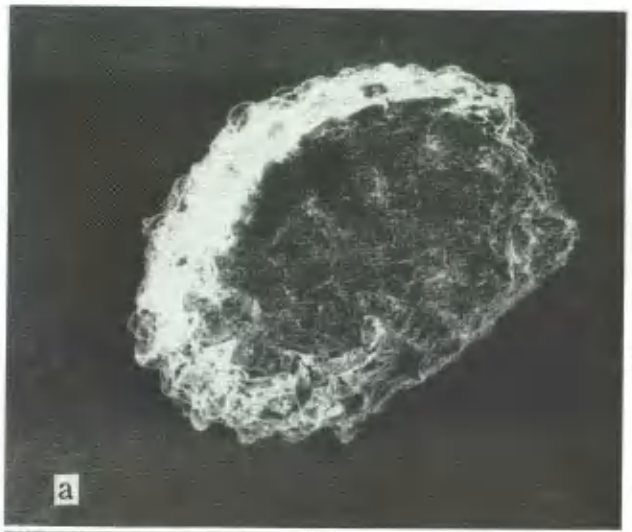
図版70



1．No191住居址出土遺物，巴形銅器

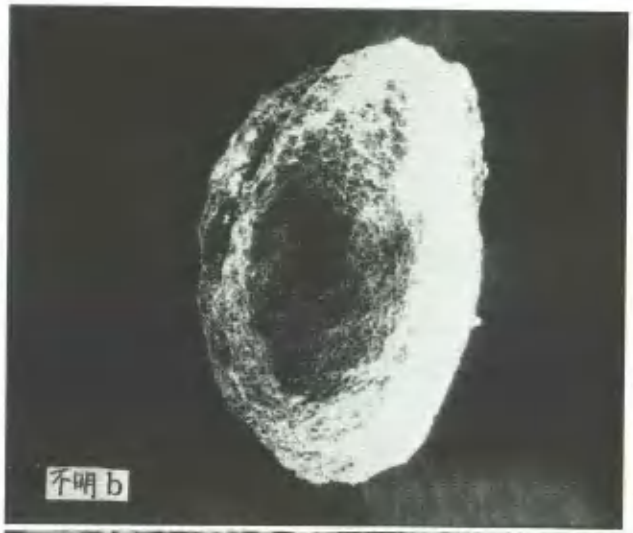


1．No107住居址出土須恵器（1～4） No109住居址出土須恵器（6～11）
1区谷部出土須恵器（12～14）

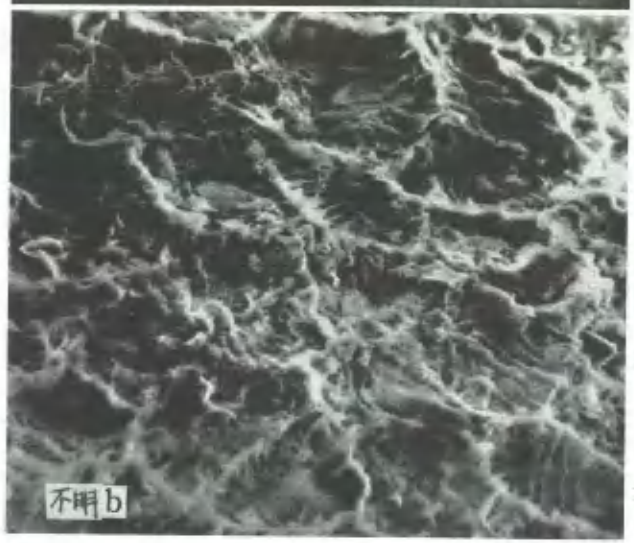


ノミノフスマ
×100
a

ノミノフスマ
×400



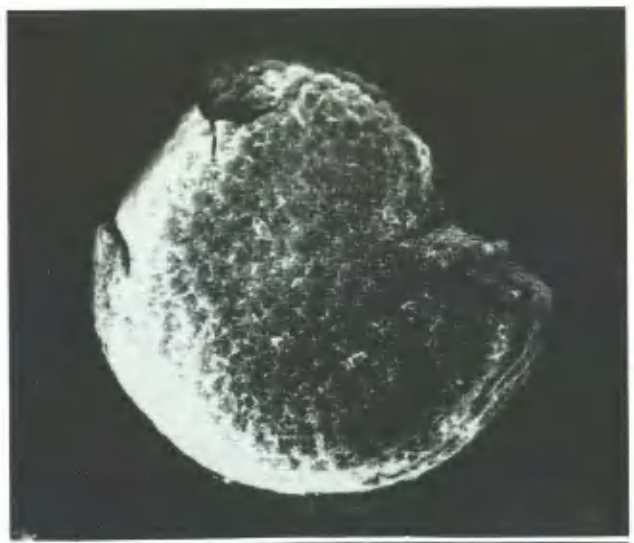
不明×85
不明 b



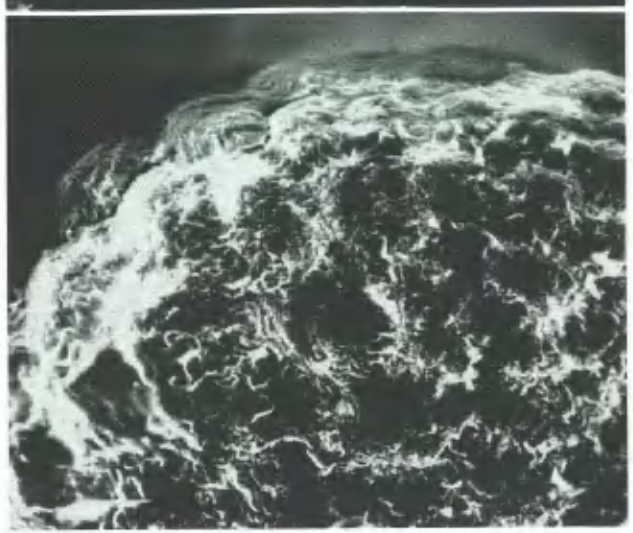
不明×1500
不明 b

ザクロソウ ×120 b 2

ザクロソウ ×500 b 2



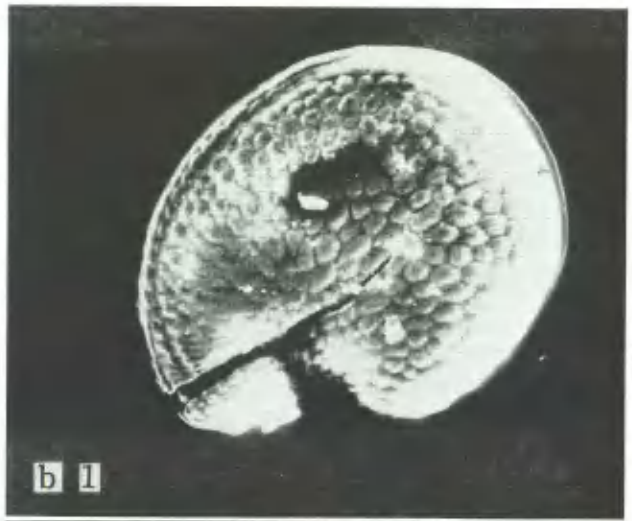
ザクロソウ ×150



ザクロソウ ×600

18

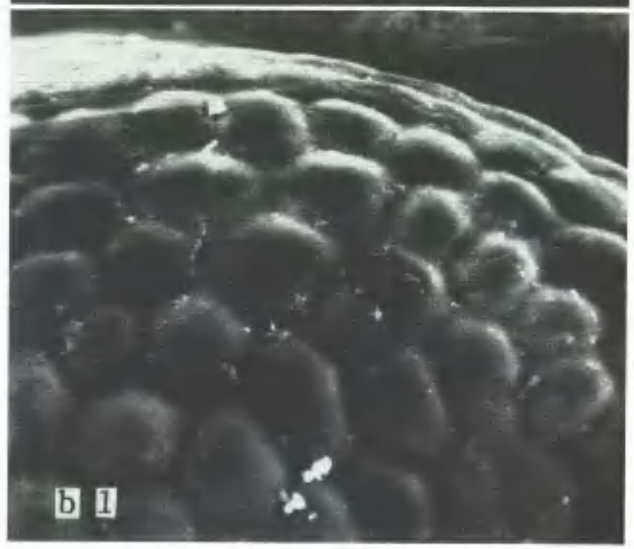
カラムシ　　×50



ザクロソウ

×90

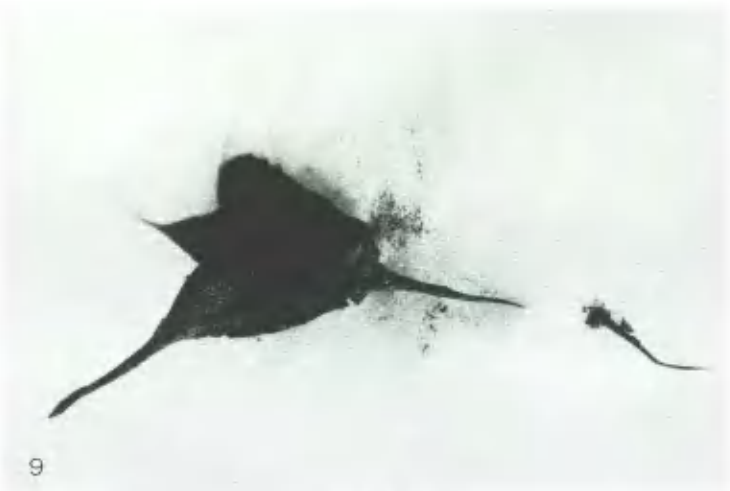
b 1



ザクロソウb一

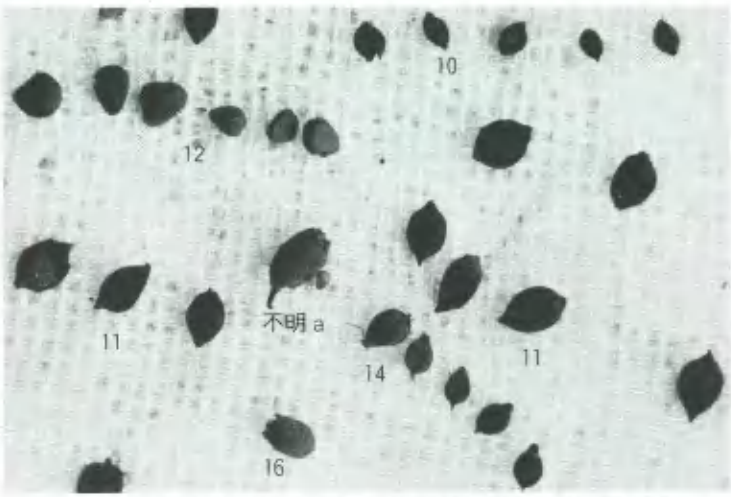
×500

b 1



メ ビ ジ

8．コウモリカズラ　15．カラスザンショウ　17．キハダ
17．キハダ　12．ヤマグワ　16．エゴノキ



10．イヌタデ　12．ヤマグワ　11．ヤナギタデ　16．サルナシ
11．ヤナギタデ不明a　14．ホタルイ

ザクロソウ　　宮の前

4

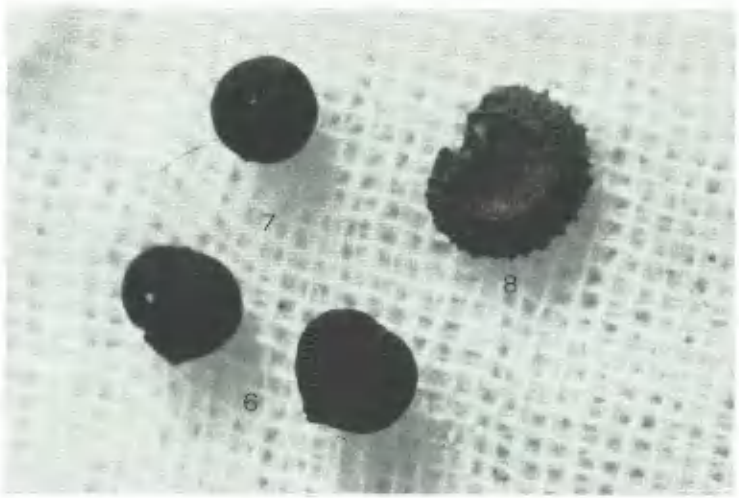
トチの木の果 種皮片

6

ノブドウ

5

カシSP



7

8

6

6、ノブドウ　7、エビヅル　8、コウモリカズラ

1

クルミ

2

クルミの果皮片

1

クルミ（右の穴は円形であったが取扱中に欠けた）

3

ツバキSP

植木遺跡(32)

目　　次

1 はじめに…… 346
2 調査の経過…… 347
1）調査に至るまでの経過…… 347
2）調査の経過…… 347
3）整理の経過…… 351
3 遺跡の概要…… 352
1）遺　　構…… 352
2）遺　　物…… 371
4 まとめにかえて…… 393

図　目　次

第1図 植木遺跡付近地形図…… 346
第2図 トレンチ配置図…… 348
第3図 遺構配置図……折込1… 353
第4図 建物Ⅰおよび溝平面図・断面図……折込2… 355
第5図 建物Ⅱおよび土器溜り平面図……折込3… 357
第6図 建物Ⅱの柱穴断面図…… 359
第7図 建物Ⅲ平面図・断面図…… 360
第8図 堀平面図・断面図……折込4… 361
第9図 建物Ⅳ平面図・断面図……
第10図 建物Ⅴ平面図・断面図…… 折込5… 363
第11図 建物Ⅷ平面図・断面図……
第12図 建物Ⅶ平面図・断面図……
第13図 建物Ⅵ平面図・断面図…… 折込6… 365
第14図 建物Ⅸ平面図・断面図……
第15図 建物ⅩおよびⅪ平面図・断面図……
第16図 井戸平面図Ⅰ（井戸放棄時）……
第17図 井戸平面図Ⅱ（井戸底部）…… 折込7… 369
第18図 井戸東西断面図……
第19図 井戸南北断面図……
第20図 土師器実測図Ⅰ（坏その1）…… 373

第21図　土師器実測図Ⅱ（坏その２）…… 374
第22図　土師器実測図Ⅲ（鍋・すり鉢・灯明皿）…… 375
第23図　青磁・白磁実測図…… 376
第24図　古　銭　拓　影…… 378
第25図　鉄器実測図Ⅰ（鏃）…… 380
第26図　鉄器実測図Ⅱ（たがね・火打鎌）…… 381
第27図　鉄器実測図Ⅲ（短刀・刀子・その他）…… 382
第28図　鉄器実測図Ⅳ（釘その１）…… 383
第29図　鉄器実測図Ⅴ（釘その２）…… 384
第30図　鉄器実測図Ⅵ（釘その３　井戸枠固定のもの）…… 385
第31図　砥 石 実 測 図…… 386
第32図　硯　実　測　図…… 391
第33図　土 錘 実 測 図…… 391

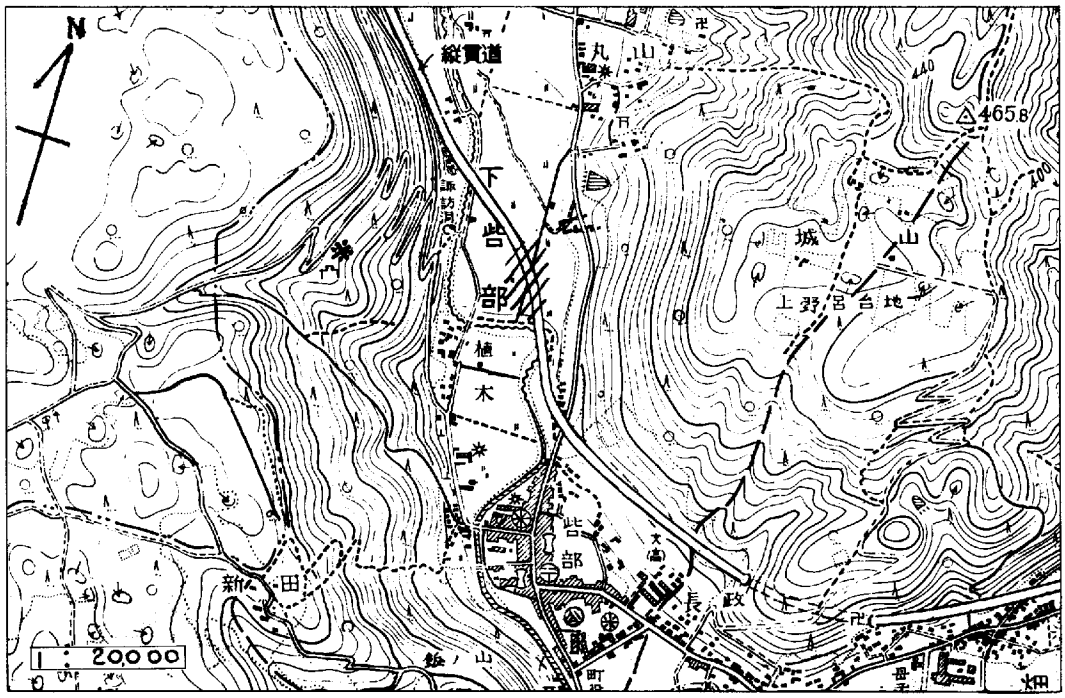
表　目　次

表１　古 銭 一 覧 表…… 377
表２　井戸枠残存木材計測表…… 387
表３　遺 物 一 覧 表……折込８… 389

図　版　目　次

図版１　1　遺跡の遠望Ⅰ…… 397
　　2　遺跡の遠望Ⅱ…… 397
図版２　3　建物Ⅰ及び溝…… 398
　　4　建物Ⅲ…… 398
図版３　5　建物群…… 399
　　6　建物Ⅳ…… 399
　　7　建物Ⅵ…… 399
図版４　8　建物ⅤおよびⅦ…… 400
　　9　建物ⅨおよびⅩ・Ⅺ…… 400
図版５　10　トレンチ調査時に確認した井戸…… 401
　　11　井戸を放棄する時に入れた礫…… 401
図版６　12　井戸を放棄する時に入れた礫を取り除いた状態…… 402
　　13　井戸堀り方および残存木枠…… 402
図版７　14　井戸底部および漆塗り木製品の底部の出土状態…… 403
　　15　井戸底部の配石状態…… 403

図版7 16 井戸底部の配石を取り除いた状態…… 403
図版8 17 土器溜りⅠ…… 404
9 18 土器溜りⅠ細部その1…… 404
図版10 19 土器溜りⅠ細部その2（木組み）…… 405
20 土器溜りⅠ細部その3（曲物出土状態）…… 405
図版10 21 土器溜りⅡ…… 406
22 土器溜りⅡ細部その1（短刀および砥石出土状態）…… 406
図版11 23 土器溜りⅡ細部その2…… 407
24 漆塗り椀出土状態（pit 57）…… 407
図版12 25 柱穴内の炭化米検出状態（pit 38）…… 408
26 柱根の残存状態（pit 49）…… 408
図版13 27 鉄　鏃…… 409
28 鉄　釘…… 409
図版14 29 火打鎌および銅製品…… 410
30 たがね・帯金具・錠前…… 410
図版15 31 短刀および刀子…… 411
32 羽口および鉄滓…… 411
図版16 33 古　銭…… 412
図版17 34 土師器（坏）…… 413
図版18 35 土師器（灯明皿・鍋・すり鉢）…… 414
図版19 36 土師器の底部および灯心燃焼痕…… 415
37 土　錘…… 415
38 硯…… 415
図版20 39 青磁・白磁・天目・灰釉…… 416
図版21 40 井戸枠固定の釘…… 417
41 漆器・乾漆・竹筒・木製品…… 417
図版22 42 砥　石…… 418
43 馬 の 歯…… 418



第1図植木遺跡付近地形図（北房町教育委員会提供）　植木遺跡　※ 植木城址

1. はじめに

植木遺跡は，岡山県上房郡北房町大字下告部字植木小字古城に存在する。

この遺遺は，告部川（備中川の支流，備中川は東に流れて真庭郡落合町で旭川に合流する）の東岸の河岸段丘的な平坦面（現水田）に立地している。この水田地帯の東と西は，それぞれ北房町大字阿口にある龍王山に発する山系の一支脈で，西の支脈は阿哲郡大佐町丹治部との境界で，また，南に続く新見市豊永との境界でもあり，豊永の愛宕山に連なり，更に南走して下告部飯山に至る。東の支脈は上告部の高畝山に連なり，真庭郡落合町美川及び北房町水田・上水田との境をなし，下告部上野呂山に終る。この二つの支脈の間を告部川が南流して告部の町の西部を巡り東折して北房町上水田で北流してきた中津井川と合流して備中川の源となっている。

植木遺跡周辺の水田地帯は俗に「植木原」と呼ばれており，植木原から北の大字下告部字上合地にかけては告部川畔にひらけた肥伏な水田地帯となっている。この水田には，畦畔・小道が等間隔に東西・南北に直交している。これらは告部川が氾濫しても，元の様に修復されて現在に至っている。直交する小道などは一見，条里地割のなごりのように見える。

2. 調査の経過

1）調査に至るまでの経過

この遺跡が世に知られたのは約20年ほど前に，当時の地主であった村上輝一氏が水田の排水のため暗渠を堀られたときにはじまる。これより以前から水田耕作中に土器（時には完形の杯）が出ていたということである。暗渠を堀られたときにもかなりの量の土器片が堀り出された。これに注目された当時の呰部小学校長であった山根隆志氏は，この土器の出土した水田の一部を試堀された。その後，この遺跡は，『全国遺跡地図岡山県版』（文化財保護委員会・昭和42年発行）に散布地（№1713）として登録され，世に知られるに至ったものである。

『全国遺跡地図』にも記載された周知の遺跡でありながら，この地を中国縦貫自動車道（以下縦貫道という）が通過することとなった。日本道路公団（以下公団という）作成のルート・マップ（2500分の1，道路中心予定線のみ記載）をもとにして北房町地内については同町教育委員会を中心に，分布調査が行なわれた。

その後，昭和48年5月に，公団と調査契約を結ぶ資料作成のため岡山県教育委員会（以下県教委という）文化課職員3名が現地の確認を行なった。その際は，1片の土器片も採集できなかったが，土器が出土していることは明白であり，遺跡地図にも記載されている地点でもあるので，調査対象地の一つとした。

昭和48年6月，公団と県教委との間で契約が結ばれた。昭和48年7月から1次調査（トレンチ調査）を行ない，その結果によって再度契約を結びなおすというものであった。この契約時に，水田への作付は行なわないということであったので，県教委は昭和48年7月からの調査を計画した。ところが，縦貫道用地内の調査対象地は全域にわたって稲の作付が行なわれており，公団・県教委は急拠協議を行ない，次の点を双方が了解した。

・現時点では，作付もいたしかたない。（土地代金の一部のみ支払われ，残金は9月末日までに支払われる。）
・調査開始は，稲の刈り取り後とする。したがって調査終了期限もこれに伴なって繰り延べる。

2）調 査 の 経 過

昭和48年10月20日，遺跡の性格・範囲・密度等を把握するために，県教委文化課の田仲満雄が担当してトレンチによる調査を開始した。

トレンチ設定にあたり，仮原点を条理のなごりと考えられる南北の線上（現在「学校道」と呼ばれている小径）に決め，この仮原点の南9mの地点に巾2mのトレンチを「学校道」の仮基線に直角に設定した（2図，T1）。以後，このトレンチに並行して18m間隔に南へトレンチを設定していった。遺跡の予想される範囲の南半分にトレンチを設定し終えた段階で，測量業者にグリッドの

杭打ちを依頼し，公団の打った道路中心杭（ＳＴＡ471＋20）を原点に磁北を基線として一辺20mの正方形のグリッドを設定した。20mグリッド設定後は遺跡の予想される地域の北半分において20m毎にトレンチを設定していった。このため，南半分と北半分とでは間隔に差があり，方向も若干異なる結果となった（２図）。

当初，18m角のグリッド設定を予定して，トレンチを設けていったのは，条里制の遺構の存在も予想されたので，１町＝108mとしてその６分の１つまり18mを１グリッドの一辺の長さとしたものである。

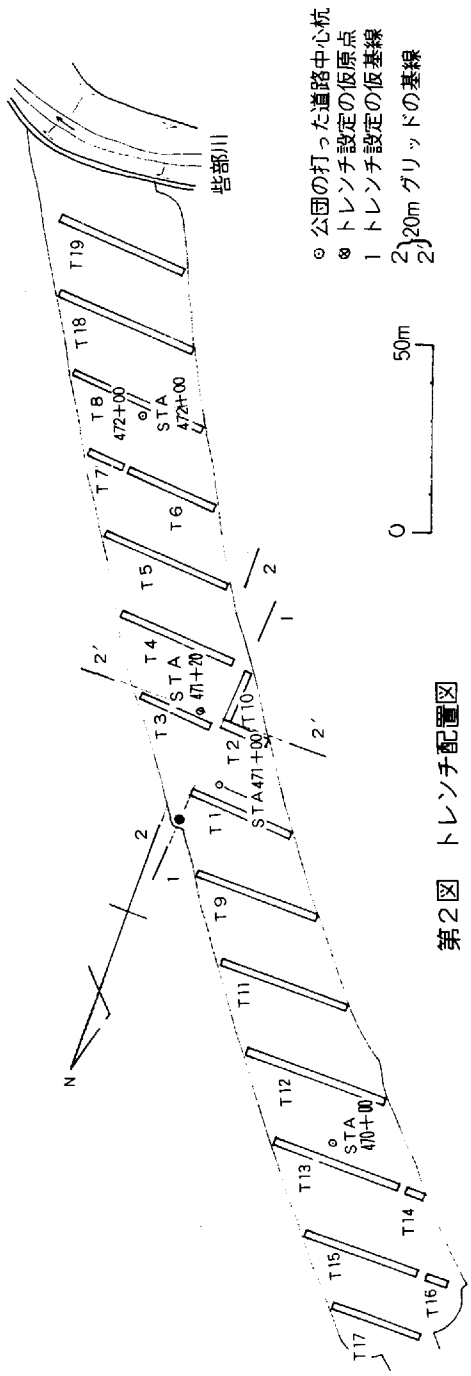
昭和48年10月20日に調査を開始して以来，同年11月13日までの間に図２に示す通り19本のトレンチを設定し，堀り下げを行なった（トレンチの総延長は830m，総面積は1660㎡）。

19本のトレンチのうち，６本のトレンチにおいて遺構（井戸・柱穴・池状遺構）を確認した。残り13本のトレンチでは，遺構はまったく確認できなかった。

層序は，表土から順に記すと次のようになる。表土（水田耕作土）約20cm，客土10～15cm，暗褐色粘質土約30cm，白黄色粘土約50cm以上であり，南端の２本のトレンチでは客土の下は礫と砂の互層が１m以上続いている。「植木原」の東半分においては，暗褐色粘質土は厚さが少し薄くなっていて，この土層の上に黒色火山灰が堆積しており，その厚さは30cmに達する所もある。遺構は，暗褐色粘質土および黒色火山灰の上面において確認した。遺物は，耕作土中および遺構面上で出土し，遺構面よりも下層においてはみられなかった。

トレンチ調査の結果から次のような予測をした。

・遺構の範囲　公団の打った道路中心杭ＳＴＡ470＋40からＳＴＡ472＋00までの延長160mの間と考えられる。（ＳＴＡ470＋40以北においては，



第２図　トレンチ配置図

遺構は確認できず，また遺物もほとんど出土しなかった。ＳＴＡ472＋00以南は，皆部川の度重なる氾濫のために遺構はまったく流失している。

遺跡の性格及びその時代　数棟以上の建物が建てられていたと考えられ，これら建物群の間には池状遺構もつくられている。出土遺物の中には実戦用の鉄鏃（図25の１など）も見られ，また，この地の小字名は「古城」である。これらから考えて武装集団（武士団）の住居ないしは武将の居館址と考えられ，その敷地は１町×1.5～２町と想定される。この建物群の使用された期間は，遺物からみて15～16世紀のうちの非常に短期間であったと考えられる。

植木遺跡の１次調査は，当初昭和48年12月末日まで行ない，それに基づいて昭和49年４月から２次調査（全面調査）を行なう予定であったが，11月中途に上記の予想ができ，昭和49年３月末日までに調査完了の見通しが立ったので，トレンチ調査に引き続いて本調査を実施することとなった。そこで，昭和49年11月14日全面調査を開始した。

調査範囲を３分して，仮にＡ・Ｂ・Ｃ区として調査を進めていくこととした。Ｃ区は，以前から土器がよく出土していた地点で（Ｔ２とＴ10にかこまれた三角形の部分），Ｂ区はＣ区の東（仮基線の東側），Ａ区は残りのＣ区の北側の部分である。面積の上で狭い広いがあるが遺物の出土量などから判断して設定したものである。

Ａ区から表土はぎを開始した。調査範囲の北端と南端においては土捨て場はそれぞれ調査範囲外に求めることができるが，中央部の土捨て場の確保は困難であった。ところが，北房町大字下皆部字空の谷口清氏の御好意により，縦貫道隣接の同氏所有地を土捨て場として利用させていただけることになった。また，Ａ区の調査を中断してＣ区の調査を先に終らせ，この地点を土捨て場とすることとした。

Ｃ区においては，建物１棟（三間四方か？縦貫道用地外にその一部がかかっている）と土器溜り５ケ所を確認した。この建物は数度火災のため焼失しているが，その度に殆んど同じ場所に建て直している。

Ｃ区の調査終了後，Ａ区の調査を再開し，建物９棟及び堀（トレンチ調査時に池状遺構としたもの）を確認した。

Ｃ区・Ａ区の調査後，Ｂ区の調査を行なった。この区においては，建物１棟及びこの建物をとりかこむ溝・木枠の残存する井戸を確認した。なお，Ｂ区には，遺物を伴なわず建物にまとまらない性格不明のピット（径50～150㎝深さ20～70㎝）が数十個検出された。

Ａ～Ｃ区全域で，建物11，堀１，溝１，井戸１，土器溜り５を確認調査し，調査対象面積5,500㎡のうち畦などを残して5,120㎡を発掘し，昭和49年３月28日調査を終了させた。

日 誌 抄

昭和48年10月20日　調査を開始する。Ｔ１からＴ８まで設定し，Ｔ１からＴ３まで掘り下げを行なう。

10月22日　T２・３の堀り下げを行なう。20mグリッドの杭打ちを行なう。

10月24・25日　T５・６の堀り下げを行なう。

10月26・27日　T５～７の堀り下げを行なう。

10月29日　T４・７・８の堀り下げを行なう。T９からT19までトレンチを設定する。

10月30日　T８・９の堀り下げを行なう。

10月31日　T９・11・12の堀り下げを行なう。

11月１日　T11～14の堀り下げを行なう。

11月２～７日　T13・14の掘り下げを行なう。

11月８日　T12・14・15の堀り下げを行なう。

11月９日　T15・16の堀り下げを行なう。

11月11日　T16の堀り下げを行なう。

11月12日　T15～19の堀り下げを行なう。

11月13日　T17～19の堀り下げを行なう。トレンチ調査を終了する。

11月14日　全面調査を開始する。

11月14日～12月11日　A区の表土剝ぎを行なう。

12月12～22日　C区の表土剝ぎを行なう。

12月22日～１月６日　C区の遺構検出を行なう。

昭和49年１月８日　C区の平面図を作成する。A区の表土剝ぎを再開する。

１月９～11日　C区の遺構の堀り下げを行なう。

１月12～16日　A区の表土剝ぎを行なう。

１月17日　A区の表土剝ぎを行なう。C区の平面図を作成する。

１月18日　A区の表土剝ぎを行なう。C区の写真撮影および遺物の取り上げを行なう。

１月19日　２月13日　A区の表土剝ぎを行なう。

２月14～18日　A区の遺構検出を行なう。

２月19～21日　A区の遺構の堀り下げを行なう。

２月22日　A区の遺構の堀り下げを行ない，平面図を作成する。

２月25日～３月９日　B区の表土剝ぎを行なう。この間にA区の写真撮影を終る。

３月13～15日　B区の一部遺構を検出する。

３月16～18日　B区の一部遺構および井戸の堀り下げを行なう。

３月19日　B区の表土剝ぎおよび遺構検出を行なう。井戸を実測する。

３月20日　B区の残り部分の遺構を検出する。井戸の実測および写真撮影を行なう。B区の平面図を作成する。

３月22～23日　B区の遺構の堀り下げを行なう。井戸枠を取りあげる。

３月25日　器材の徹収・搬出を行なう。

３月28日　遺構のレベリングを行なう。本日で調査を完了する。

3）整 理 の 経 過

縦貫道建設に伴なう遺跡の発掘調査は，その開始以来，遺物の整理は一部しか行なわれず，また，報告書は作成れないままに発掘調査優先で進められてきた。昭和48年度以降は，発掘調査を進める一方，報告書もそれに並行して作成していくこととなり，調査員１人に対して１年間に３ケ月の整理期間が設けられることとなった。

昭和48年度に調査を行なった遺跡の整理・報告書作成は，昭和50年度に行なうという方針がとられたが，植木遺跡の出土遺物の中には鉄器など処理の急がれるものも含まれているので，調査と並行して整理を行なうこととした。

植木遺跡の調査終了時までに，鉄器の実測・トレース，古銭の採拓を実施した。

調査終了後，北房町大字下呰部にある桃山にある桃山遺跡の調査開始までの10日間，植木遺跡の整理に専念し，鉄器以外の遺物の実測・トレースを行なった。

昭和49年４月，トレース図の縮尺・遺構の写真の引伸しを行なう（専門業者に外注）。６月には遺物の写真撮影を行ない，図版・写真版の印刷原稿ができあがる。

６～７月には，実測しなかった遺物の再点検を行なった。

本文の原稿については，４～８月にかけて随時，執筆していき，８月９日に脱稿した。この原稿をもとに発掘調査対策委員（縦貫道用地内に関わる）及び調査員の諸氏に御検討いただき，それによって加除訂正を行なったものである。

3. 遺跡の概要

この遺跡は冲積地につくられている。その層序は，表土から順に記すと次のようになる。耕土約20㎝，客土10～15㎝（遺跡の北半分のみ），暗褐色粘質土30㎝，白黄色粘土50㎝，青灰色砂礫層50㎝以上である。暗褐色粘質土は遺跡の東半分では少し厚さが薄くなっていて，この土層の上に黒色火山灰が堆積しており，その厚さは30㎝に達する所もある。

遺構は，水田の耕土直下ないしは客土直下つまり黄褐色粘質土及び黒色火山灰の上面で検出し，建物11棟，堀１，井戸１及び建物のうちの１棟をめぐる弧状の浅い溝１を確認した（図３）。

遺物は，表土及び遺構面上で検出し，土師器・須恵器・青磁・白磁・その他の焼き物・古銭・鉄器・木器などが見られ，これらの遺物のうちの約半分は建物Ⅱ周辺から出土したものである。

遺構面下の各層は，無遺物・無遺構であった。

1）遺　　構

建物Ⅰ及び溝（図４）

この建物は，東西２間×南北１間の建物である。柱穴中心間の距離は2.40mであるが，西の１間は南側が2.00m，北側が2.10mである。柱穴径は16～22㎝で，深さは現存20～32㎝である。

溝は，建物Ⅰをとりまくように東側と南側に存在し，東側の長さは10m，南側は９mあり，巾は広い所で1.90m，深さは現存0.10～0.20mを測かる。南側には別の巾40㎝の溝がさらに南へ延びている。

建物Ⅰの柱穴および溝を埋める土はまったく同質の暗褐色粘質土であり，同時期に埋まったものと考えられる（井戸・堀を除く各遺構の柱穴等には，建物Ⅰと同様に暗褐色粘質土が詰まっていた。これらの間において，質的な差は認められなかった）。柱穴および溝からは遺物は出土しなかった。

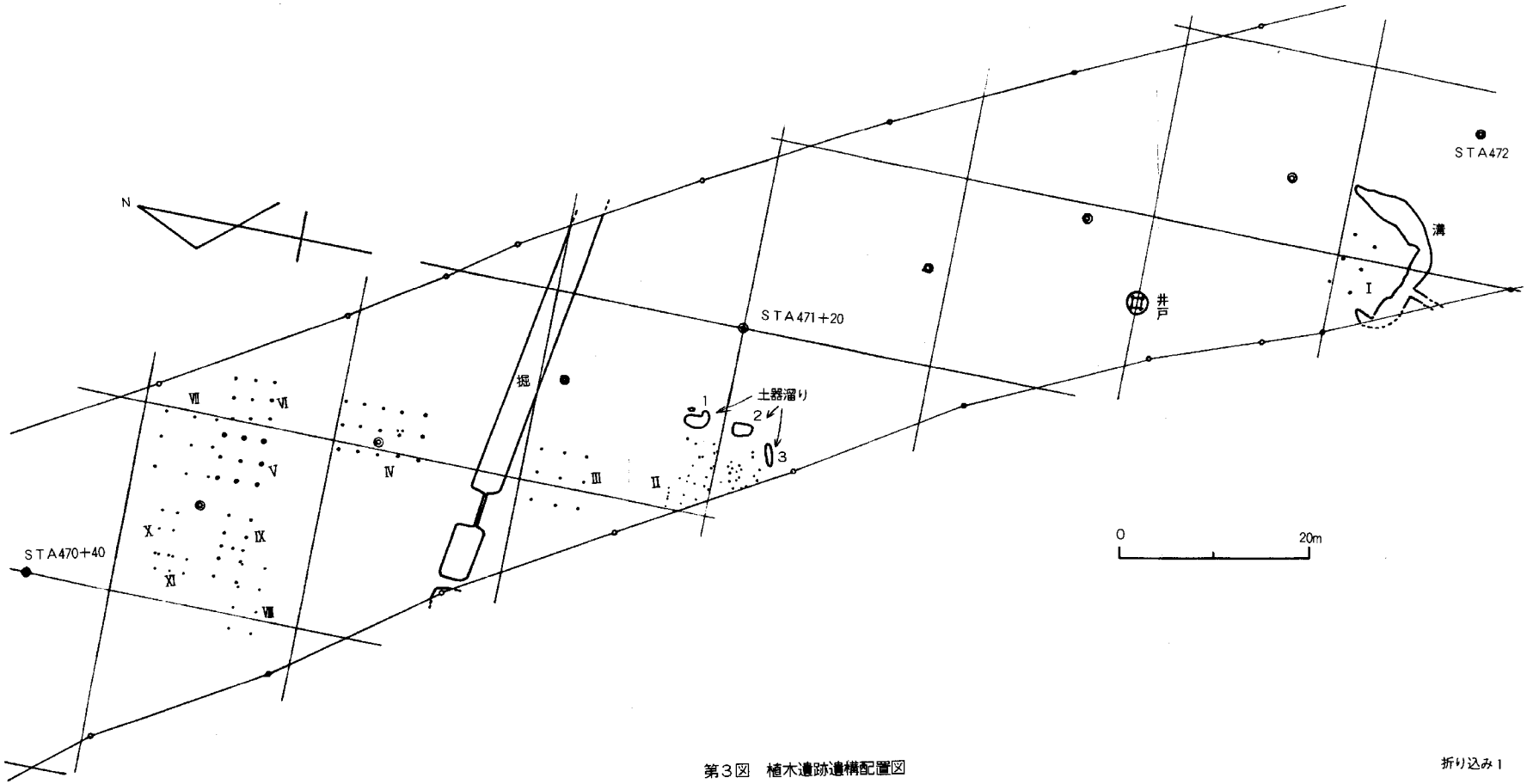
この地点は，植木遺跡の最南端にあたり，また，小字「古城」の南限でもあり，すぐ南の一段低い水田は，坐部川の氾濫原となっている。この一段低い水田の部分は，客土の下は砂と礫が互層をなしており，現在の小字名は「大入河原（だいにゅうがわら）」と呼ばれている。

建物Ⅱ（図５）

この建物は，３間四方のもので，関連のある柱穴73個を確認した。

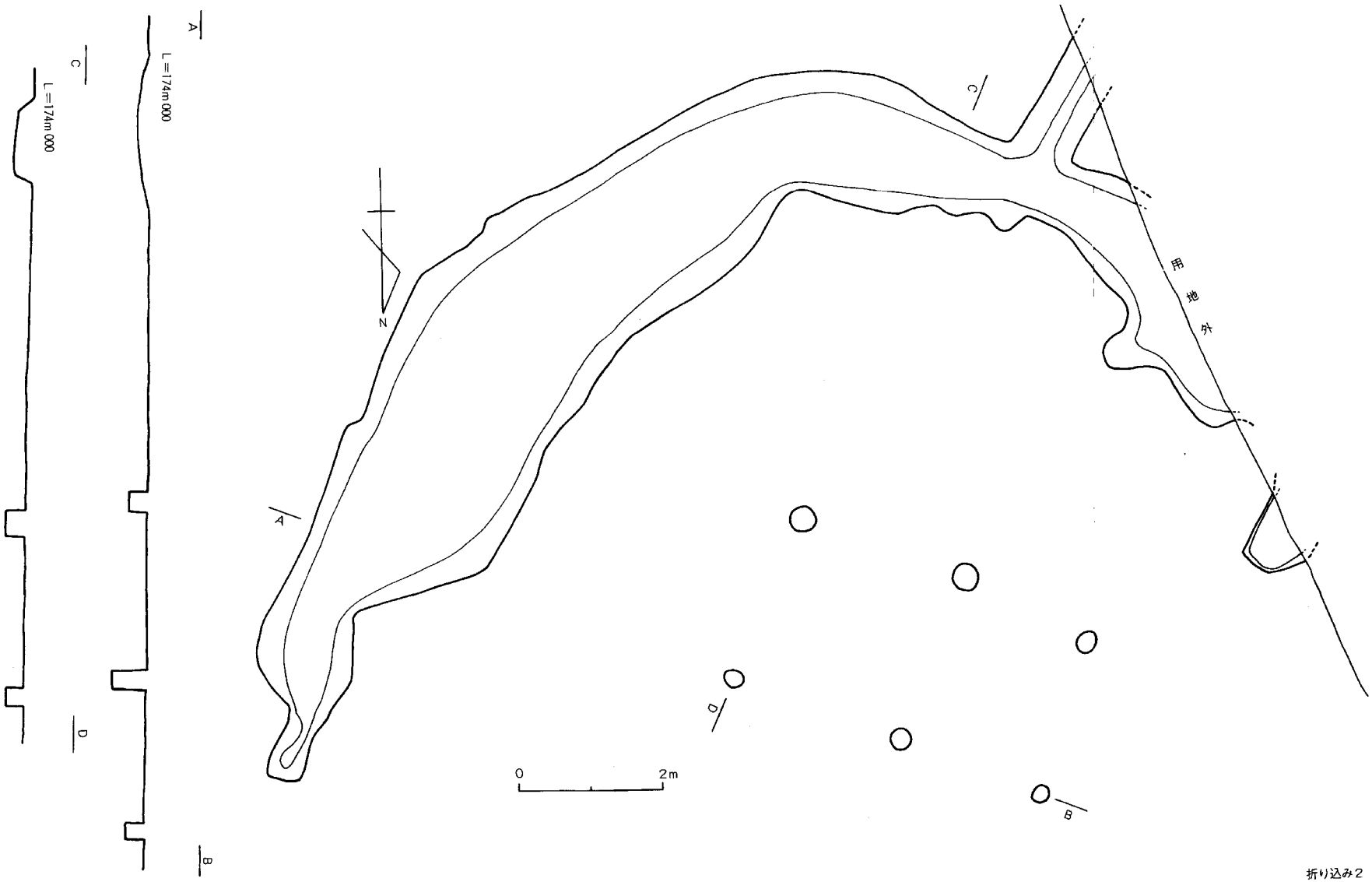
57個の柱穴には，炭化物（木材？）と土師器が入っていた。柱穴を深さ３分の２程炭化物（木材の焼けたもの？）を混じえた土を埋めた後，柱穴の中央部に土師器（杯・灯明皿）を上向きに入れていた。これらのうち２個の柱穴には北宋銭が入っていた（図６の１）。

pit 39には炭化米が約0.9リットル（約５合）が入っていた（図６の２）。pit 49には，柱根が残存していた（図６の３）。この柱は径12㎝の丸太で，長さ35㎝残っていた。下端の切り口は鋸で切



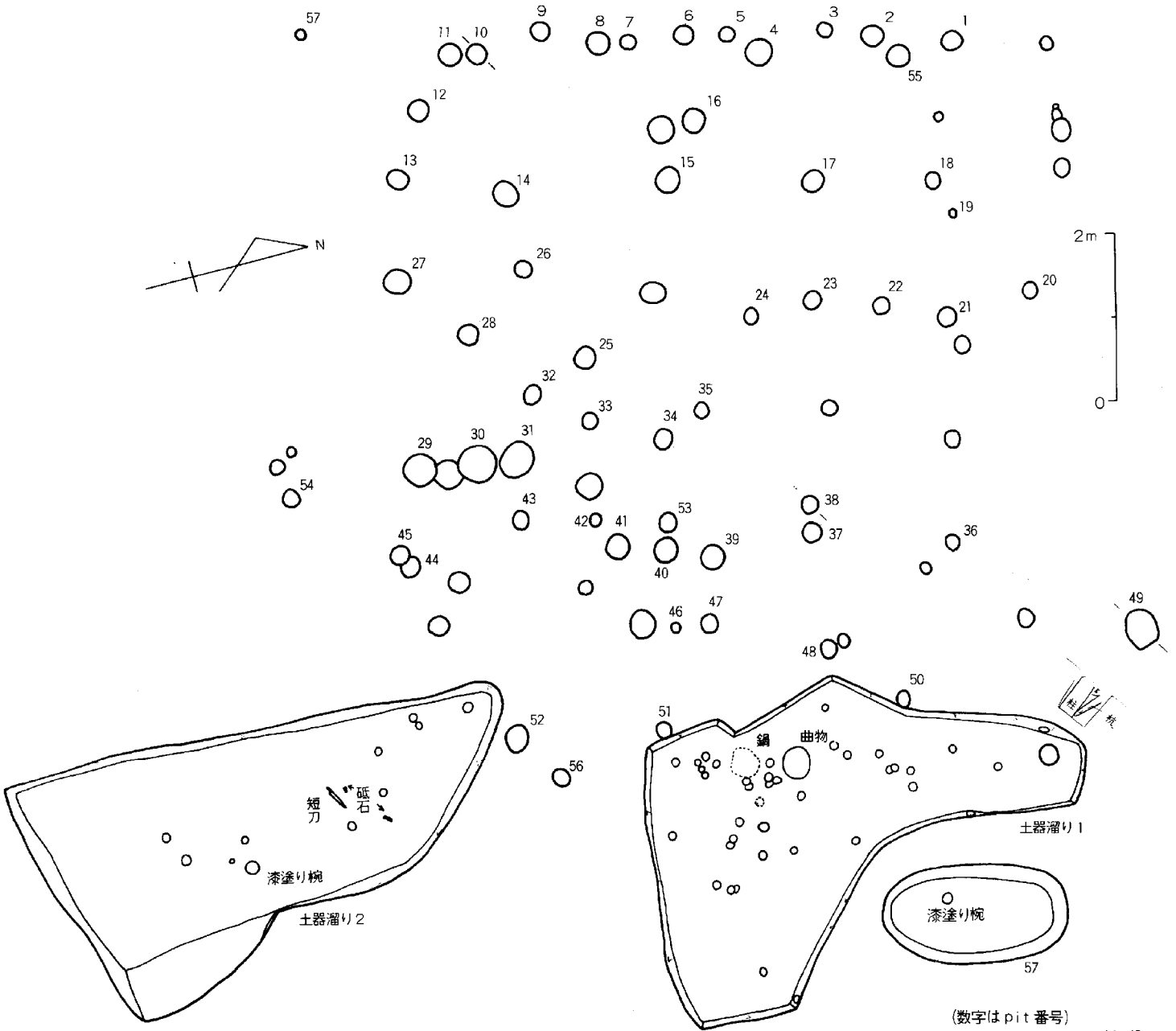
第3図　植木遺跡遺構配置図

折り込み1



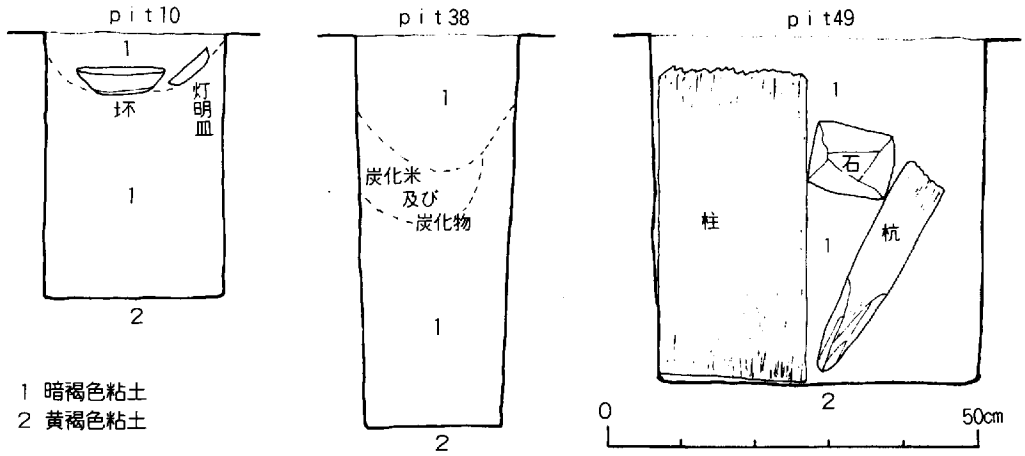
折り込み2

第4図　植木遺跡建物Ⅰ及び溝，平面図，断面図



折り込み3

第5図　植木遺跡建物Ⅱ及び土器溜り平面図



第6図　建物Ⅱの柱穴断面図

断したものではなく，刀巾３㎝のノミ状工具で削った痕跡がみられる。

残り12個の柱穴からは，遺物も炭化物も検出されなかった。

この建物は焼失し，焼失の度にほぼ同じ場所に建替えられている。焼失・建替えのくりかえしは３～４回あったと考えられる。

なお，この建物の西南隅の一部は縦貫道用地外の私有地に拡がっていたが，土地所有者である南條豊氏の御好意により建物全域を調査し得たものである。

この建物の東側には，不整形な浅いくぼみが２ケ所，楕円形の浅いくぼみ１ケ所が検出された。

楕円形のくぼみは，長径２m，短径1.2m，深さ0.15mを測り，漆塗り椀（黒漆地に赤漆で花柄を描いている）の残片（写真24），北宋銭，若干の土師器片を検出した。

２つの不整形なくぼみはどちらも土器溜りである。

土器溜りⅠ（北側のもの）からは，30数個の土師器（杯・灯明皿・鍋），径30㎝深さ６㎝の曲物１及び障子の木組様のもの（15㎝間隔に細い角木が組んである）１組を検出した（写真17～20）が曲物・木組様のものは水田の地獄割れのため元形では取り上げ得なかった。

土器溜りⅡ（南側のもの）からは，土器溜りⅠよりも出土遺物は少ないが，11個の杯・灯明皿，１本の短刀，３個の砥石を検出した（写真21～23）。

土器溜りⅢ～Ⅴは建物の南側に存在していたが，pit 等の遺構は確認できなかった。遺物が集中的に出土したものである。

建物Ⅱ周辺及び５つの土器溜りからの遺物の出土量は非常に多く，調査した全域からの遺物の出土量の約半分を占めている。

建物Ⅲ（図７）

この建物は，２間×２間の大きさである。柱の中心間距離は３mを測るが，東側１間の巾は少

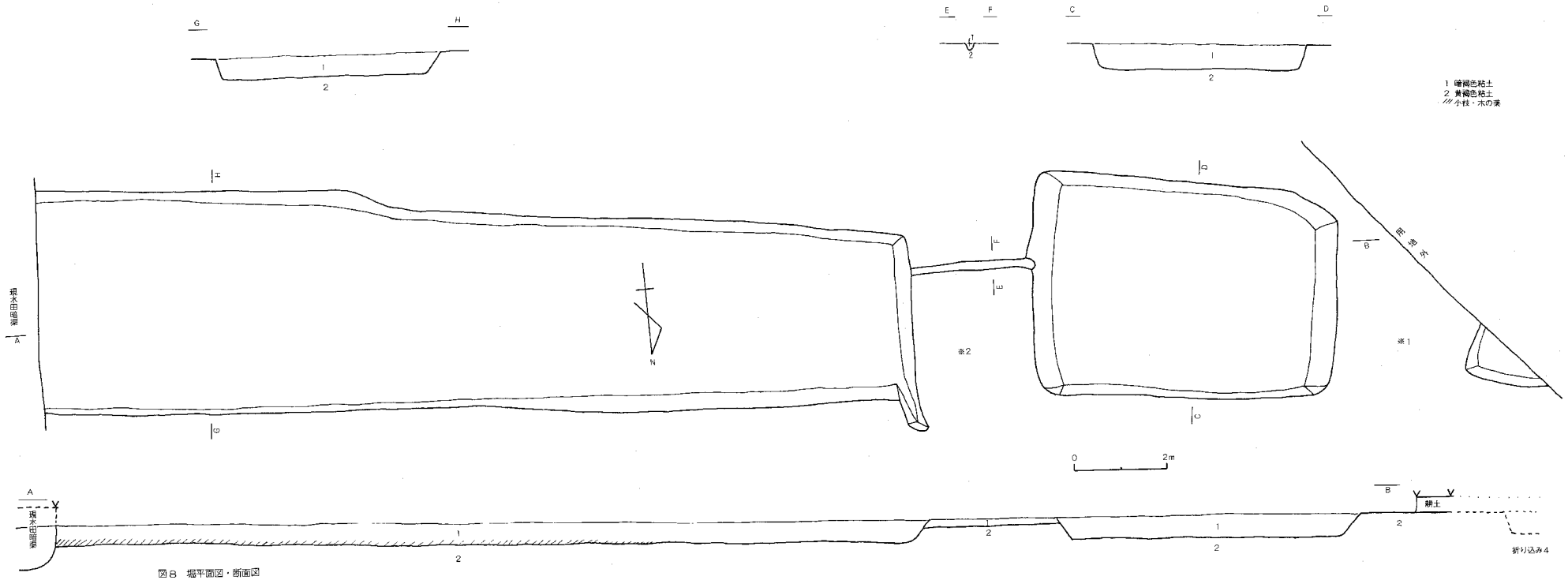
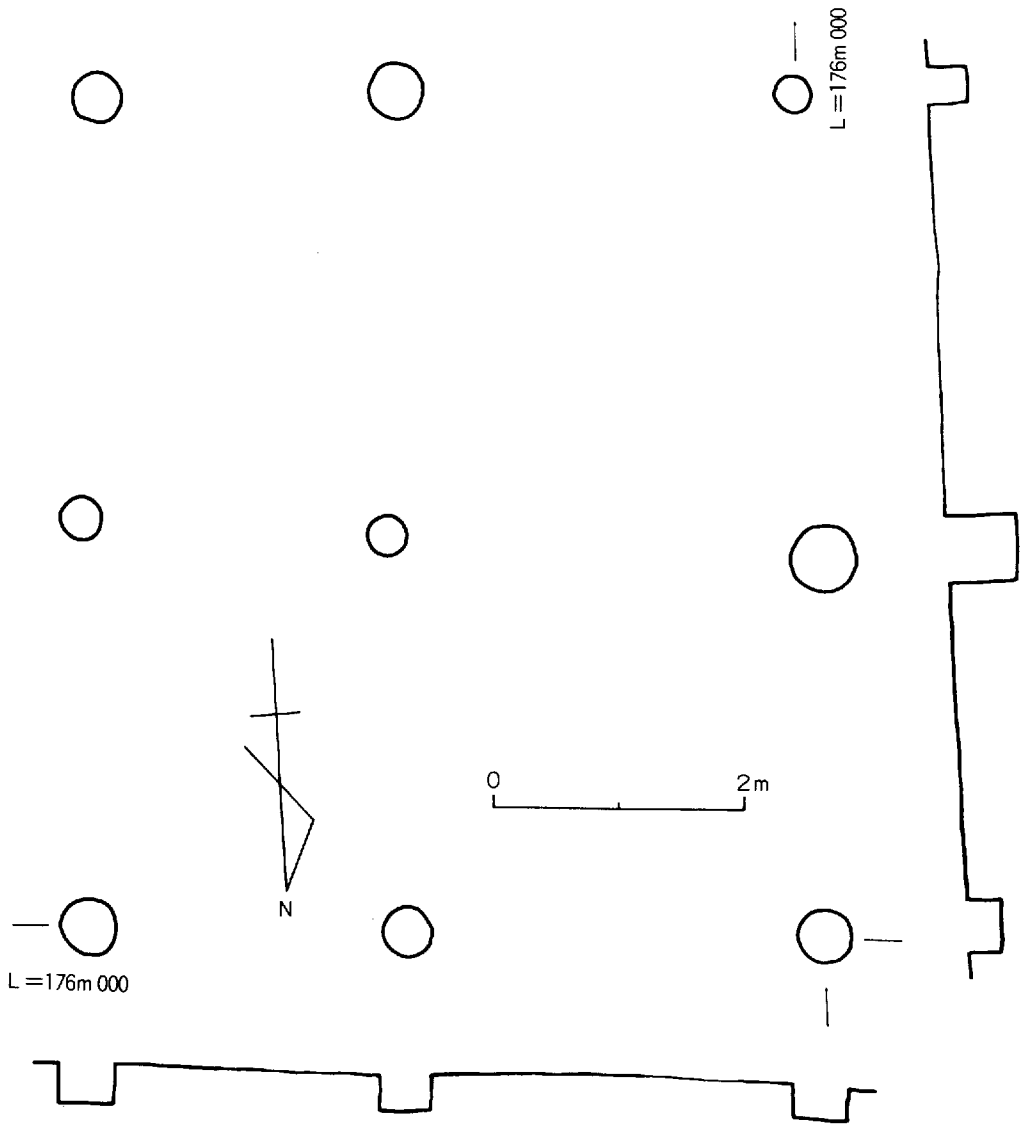


図8　堀平面図・断面図



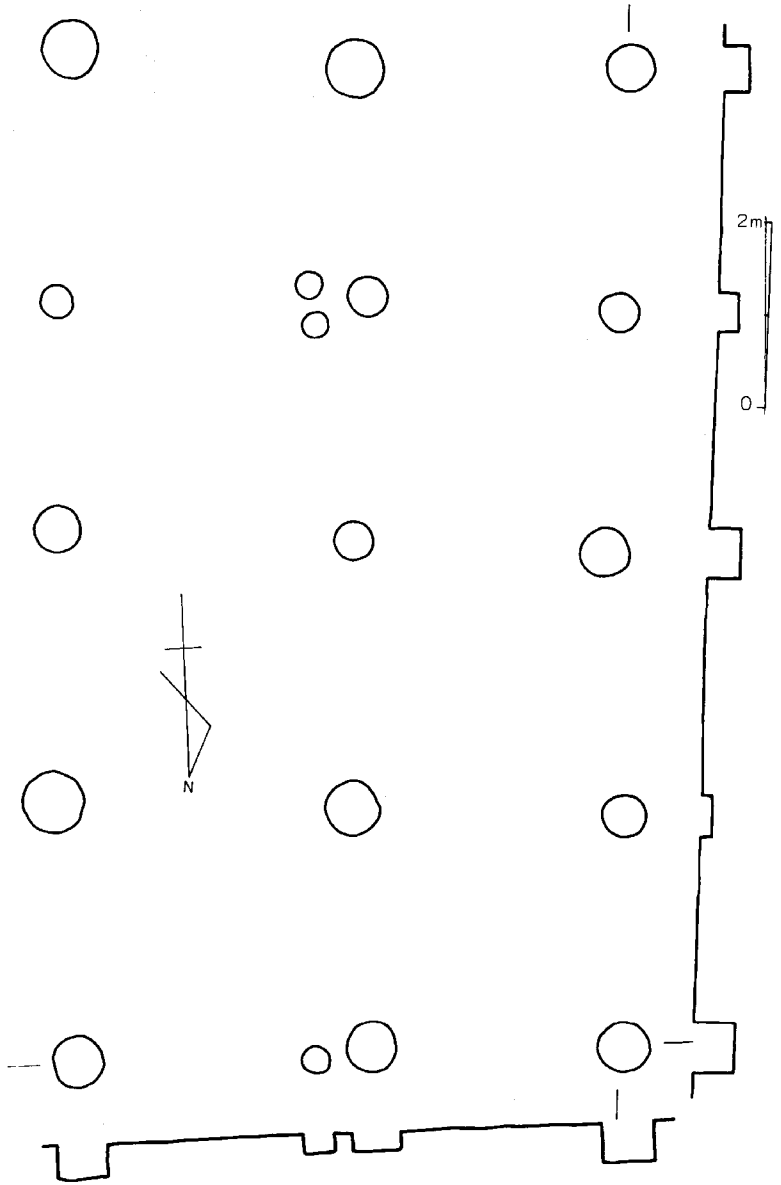
第7図　建物Ⅲ平面図，断面図

し狭く2.5mである。この建物の柱穴からは，遺物は出土しなかった。

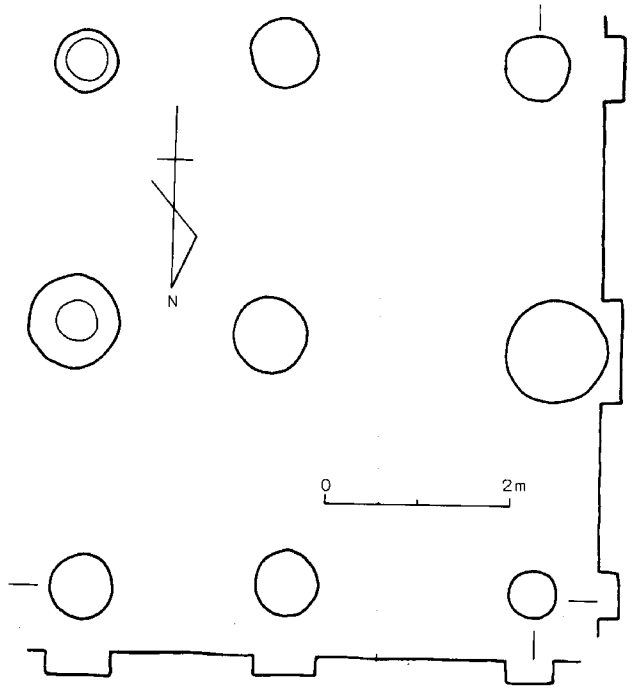
堀（図8）

これは，トレンチ調査時において，池状遺構と考えていたものである。

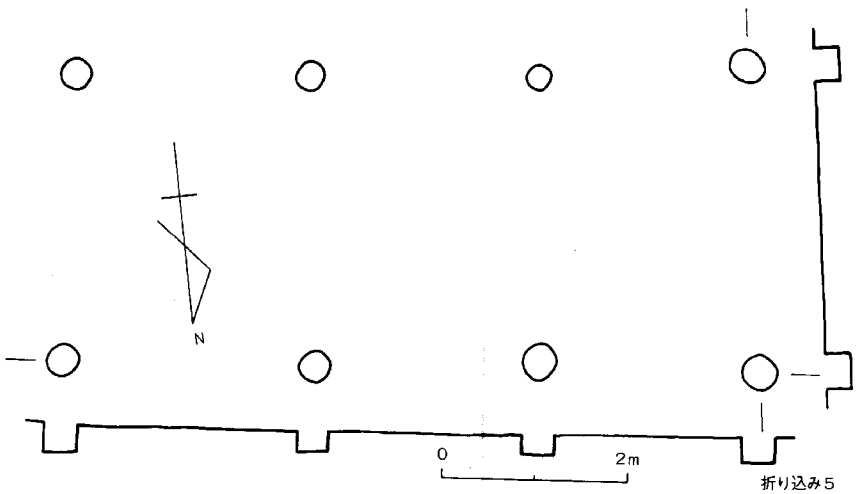
堀は，建物ⅢとⅣの間にあって，遺跡地域を南北に二分しているかのように東西につくられており（建物ⅢとⅣの中心を結ぶ線とは直交していない），縦貫道用地の西端に東西6.5m，南北4.5m，深さ0.5mの「堀Ⅰ」をつくり，2.8m東へ離れた所から，同じ巾・深さの「堀Ⅱ」を東へ向けて掘



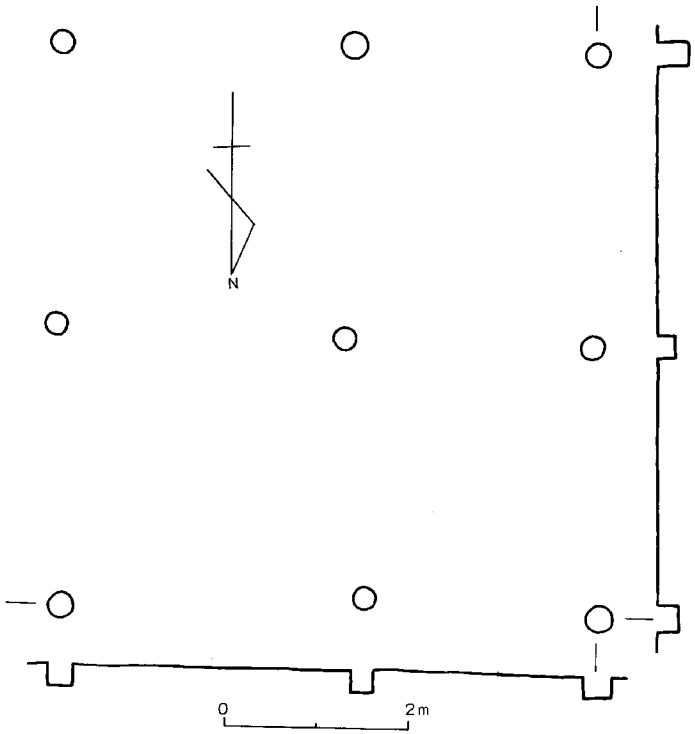
第9図　建物Ⅳ平面図，断面図



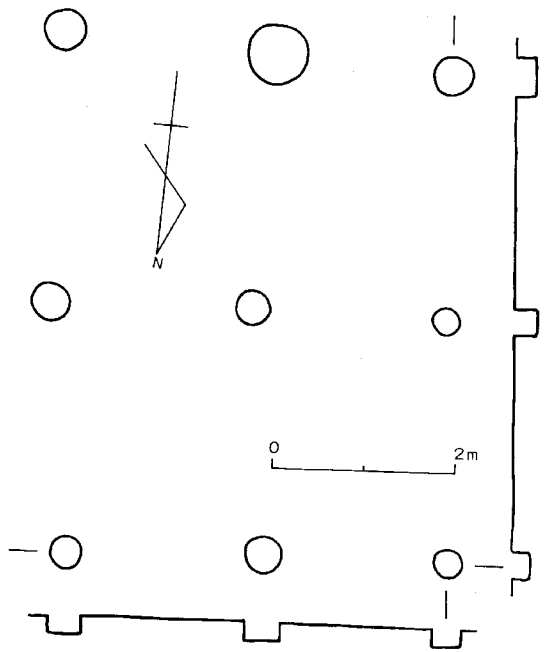
第10図　建物Ⅴ平面図，断面図



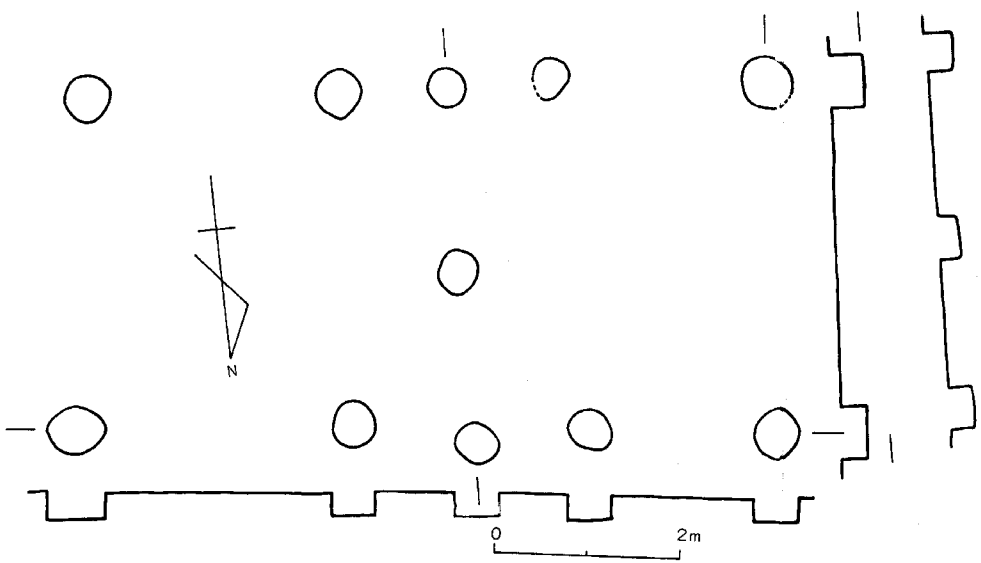
第11図　建物Ⅶ平面図，断面図



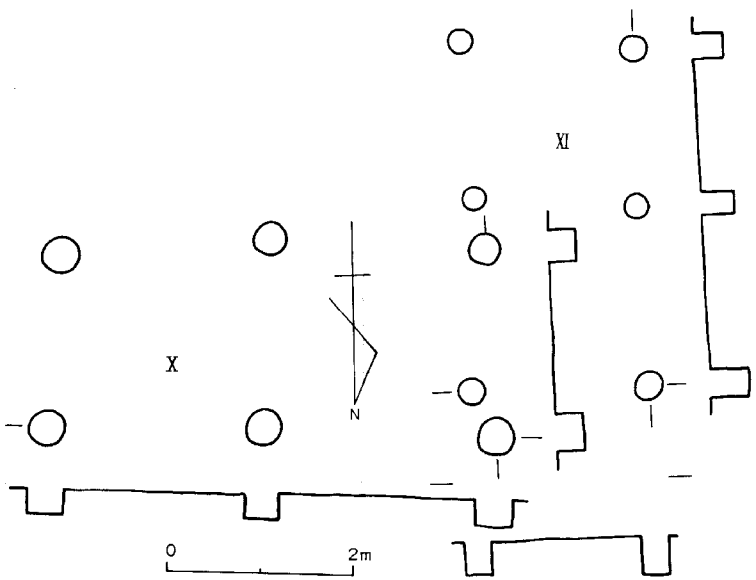
第12図　建物Ⅶ平面図，断面図



第13図　建物Ⅵ平面図，断面図



第14図　建物Ⅸ平面図，断面図



第15図　建物Ⅹ・Ⅺ平面図，断面図

っている。この「堀Ⅰ」と「堀Ⅱ」とは掘搾方向および堀巾などは同一形態を示し，その間は，巾0.15m，深0.2mの細いU字溝によってつながっている。

堀の中は，底から約10cmの深さまで小枝や木葉がつまっており，その上に暗褐色粘土と黄褐色粘土が混入した状態で埋められていた。

また，「堀Ⅰ」の西には，その西端から3m離れた所を起点として，さらに新たな「堀Ⅰ」と同様の遺構が存在するが，東北隅の一部が縦貫道用地内にかかっているだけで，他の大部分は用地外の私有地にあり，その全容を明らかにしえない。用地の西側にも「堀一溝一堀」という関係で遺構が存在すると予想される。

「堀Ⅱ」の底部からは矢柄の一部が残存する鉄鏃（図25の1）が出土した。堀Ⅰ・溝・堀Ⅱのいずれの部分にも水が流れた痕跡は認められなかった。

植木遺跡で生活した当時の人々が，この地を去った後にも堀Ⅰ・堀Ⅱは存在し，やがて水田化する時点に，現在，湿田に小枝などを踏み込む風習があるのと同様に，松やかん木の小枝を踏み込みながら埋めていったものと思われる（この小枝などは，現在の地下水面よりも下位にあったのでよく残存していた）。

建物Ⅳ（図9）

この建物は東西2間×南北4間の大きさで，植木遺跡では最大の規模のものである。柱の中心間の距離は東西3.0m，南北2.7mを測る。この建物の長軸の中心線上の柱のうち1番北のものと南から2番目の柱には，やや小形の柱穴が付属している。補強用のものとも見える。

4本の隅柱及び東と西の面のそれぞれの中心の柱の計6つの柱穴は，他の柱穴よりも15～20cm深くなっている。つまり四つの面の柱が一本置きにしっかり埋められていたようである。

建物Ⅴ（図10）

建物Ⅴは2間×2間の大きさである。柱の中心間距離は，西の1間は2.1m，他は2.7mで，柱穴の直径は0.3～1.1mまでまちまちであり，深さは0.2mを測る。東の列の南2本には柱痕跡が確認でき，それによると柱は径35cmの円柱であったであろう。

建物Ⅵ（図13）

この建物は，2間四方の大きさで，柱の中心間距離は東西2.1m，南北2.7mを測る。柱穴の径は0.3～0.65mを測る。

建物Ⅶ（図12）

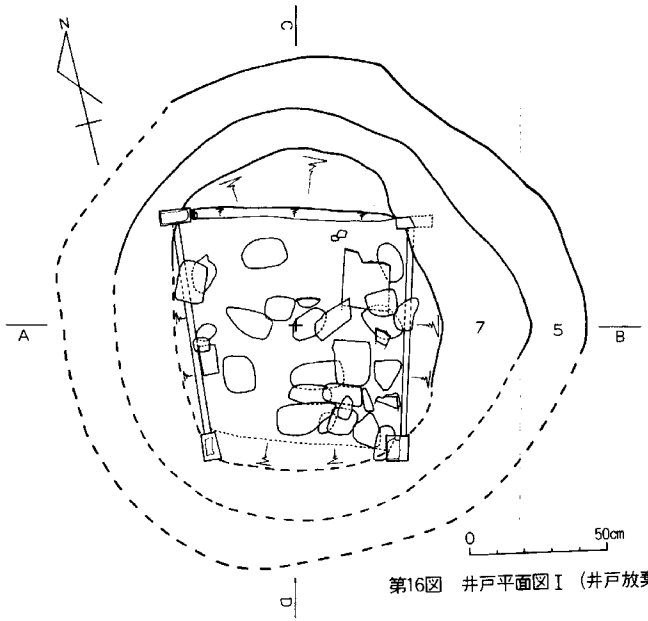
この建物も，2間四方の大きさである。柱の中心間距離は東1間は3.15m，西の1間は2.7mを測る。柱の中心間の距離に比し，柱穴は小さく，径25～27cmを測る。

建物Ⅷ（図11）

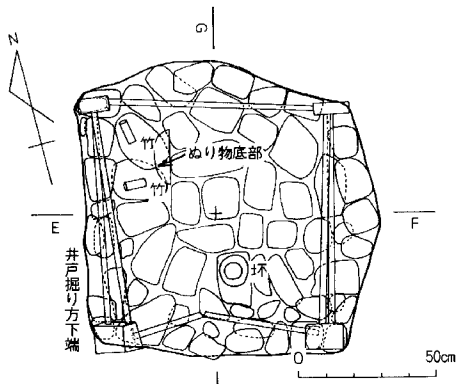
建物Ⅷは，東西3間×南北1間の大きさで，柱の中心間距離は東西2.4m，南北3.2mを測る。現在の「後家蔵」と呼ばれている蔵のつくりに似た柱間隔となっている。

建物Ⅸ（図14）

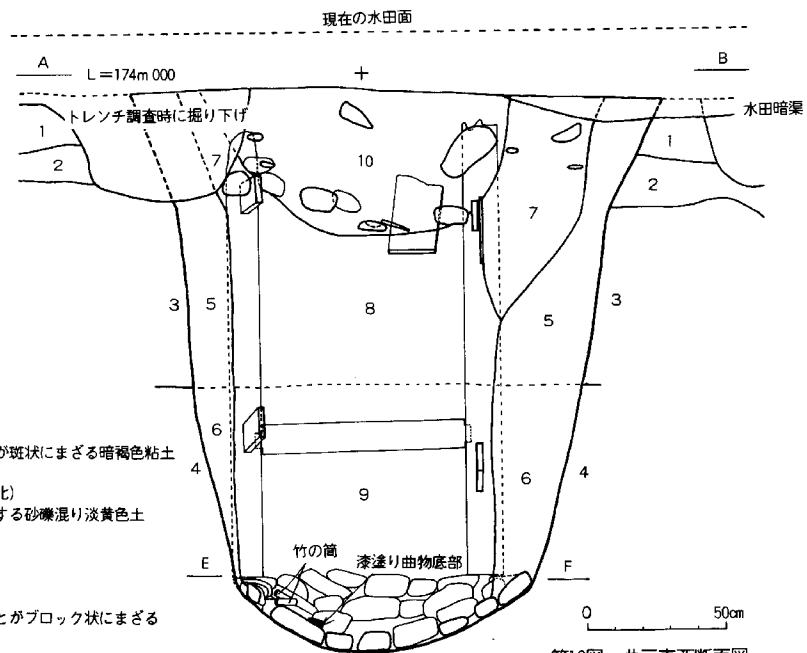
この建物は東西3間×南北1間の大きさで，長軸に直交して3本の中柱が見える。柱の中心間距



第16図　井戸平面図Ⅰ（井戸放棄時）

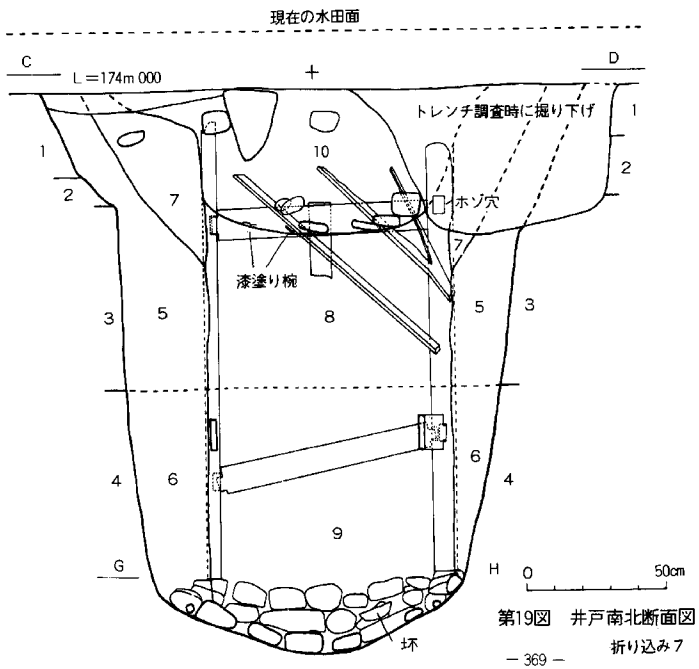


第17図　井戸平面図Ⅱ（木枠は投影）（井戸底部）



第18図　井戸東西断面図

土　質　注　記
1．黒色粘土
2．白黄色粘土と黒色粘土が斑状にまざる暗褐色粘土
3．白黄色粘土
4．青灰色砂礫層（グライ化）
5．白黄色粘土を少し混入する砂礫混り淡黄色土
6．5と同質（グライ化）
7．礫まじり暗褐色粘土
8．暗褐色粘土
9．8と同質（グライ化）
10．黒色粘土と暗褐色粘土とがブロック状にまざる



第19図　井戸南北断面図

折り込み7

離は東西2.1m（東の１間は2.7m），南北は3.8mを測る。建物Ⅷの柱間隔に似ている。

建物X（図15）

この建物は，東西２間×南北１間の大きさで，柱の中心間距離は2.4m，柱穴の径は0.4mを測る。

建物XI（図15）

この建物は，東西１間×南北２間の大きさで，柱の中心間距離は東西は1.8m，南北は南１間は1.8m北１間は2.1mを測る。柱穴の径は，建物Xよりも少し小さく径0.27mである。

井戸（図16～19）

トレンチ調査時にT16の堀り下げ中に確認したものである。

井戸の付近では，耕土（厚さ30cm）の下に白黄色粘土層（厚さ60cm）があり，その下層にグライ化した砂礫層が存在する。井戸の底部は，この砂礫層を１m掘り下げてつくられている。

直径２mの円形の穴を掘りはじめ，40cmの深さまでは壁の傾斜は約60度になっている。それ以下は壁の傾斜を約80度にしてU字形に掘り下げ，一番深い所で深さ2.05mを測る穴をあけている（深さは井戸検出面から計ったものである）。底部は円形ではなく図17に示す通り四角形に近い形をしている。

この底に，川原石を底の中心に１個置いて，左廻りのらせんを描きながら順に並べている。その後，四隅の石の上に４本の柱が立てられた。井戸底部では，井戸の堀り方と，柱の堀り方に接する面との間にほとんどすき間もなく，柱は堀り方の壁でささえられている。

井戸枠は，四つの面とも，上下２本の桟木を入れている。これら桟木にはホゾがつくられ，柱にはホゾ穴を穿ち，これを組み合わせた後にかみ合う部分に釘を打ち込んで木枠を固定させている。その後，桟木及び柱の外側に板を密着して立てかけている。板と板の合せ目は外側に更に板を置くか割った竹を置いて目をふさいでいる（これらの側板は釘等によっては固定されていない）。

側板と井戸堀り方とのすき間には，白黄色粘土を少し混入する砂礫混り淡黄色土（当地方では「マサ土」と呼んでいる）をつめこんでいる（図16・18・19の５及び６の部分）。最後に木枠のまわりに礫まじり暗褐色粘土をつめている。

井戸枠は，地上にのぞいており，井戸の覆い屋・排水用の溝等が当然あったと思われるが，これらについては後に削平を受けたのか現存していなかった。

この井戸がどのくらいの期間使用されたかは不明であるが，井戸の放棄された時期は，建物群を放棄して他の地に居住地を求めた時と同じと考えられる。

井戸の底から，竹を輪切りにしたもの２，土師器（杯）１，漆塗り曲物の底１，漆塗り椀残片１を検出した。竹は真竹で，節を中心に長さ12cm及び13cmに輪切にして節を抜いてあった(写真41)。土師器の杯（図20の18）は，他の地点から出土した坏と全く同一形態のものである。

これらの遺物を底部に残したまま，井戸は底から1.5mの所まで暗褐色土で埋められている。この埋め土中からは，厚さ３mmの板に切れ目を入れた曲げ物の残片１，漆塗り椀残片１が出土した。

埋め土の上には，大人の頭大からその数倍大の礫が放り込んであり，これらの礫の間からは漆塗

り椀２（共に残片）が検出された。これら礫の上に暗褐色土を入れることによって井戸は完全に埋没されていた。

２）遺　　物

かなりの量の遺物が出土したが，遺物の伴なう遺構は，建物Ⅱの柱穴群・土器溜り及び井戸のみである。それらの遺物と，遺構面及びその直上の土層から出土した遺物とは形態的にも差は認められなかったので一括して記述していくこととした。

遺物の種類は，土師器・須恵器・青磁・白磁・備前焼などの陶磁器類，鏃・たがね・火打鎌・釘などの鉄器類，南唐銭・北宋銭・南宋銭・明銭などの古銭類，椀や乾漆などの漆塗り製品，井戸枠などの木製品類（竹を含む），砥石，硯，ふいご口，馬の歯，炭化米等々である。

土師器（図20～22）

千個をこえる土師器が出土し，その大部分は図20・21に示すような杯であり，灯明皿（図22）は，全体の２割ほど出土し，鍋は数個体検出した。土師器の器形は，杯・灯明皿・鍋に限られる。

杯（図20・21）

杯には，やや薄手で底は平につくられ，胎土にかなり砂粒を含むもの（図20の１～３）と，やや厚手で砂粒を殆んど含まず底が丸く盛りあがっているもの（杯のうち前記３例を除く残り全部）の２種類が認められた。

前者の底部には網代目がついており，後者のそれはヘラ起し，ヘラ切り・糸切りによって作出されている。中には，‘灯明皿’として使用され灯心の燃焼痕のついているもの（図20の３・12・15；図21の１）もある。径は12cm前後，高さは３cm前後である。

灯明皿（図22の３～22）

灯明皿は，坏の後者と同一技法をもって作られていて，底が丸く盛りあがっている。６と22には灯心の燃焼痕が付いている。他のものが灯明皿として使用されたか否かは不明である。径は７～８cm，深さは1.7cm前後を測る。

鍋（図22の１）

鍋は数個体出土したが，復元しえたものは２個体である。図示したものは，径35cm深さ14cmである。他の１例は径32cm深さ14.5cmである。どちらも同一形態で，前者は土器溜りⅠから出土し，かなり使用されていて口縁部近くまでススが付着し，内面には「こげつき」がみられ，後者の底部は二次的な火のために赤く変色していて使用を示すものであるが，殆んどススの付着は認められない。

すり鉢（図22の２）

このすり鉢は土師器とするよりも瓦器とした方が適切かもしれない。口縁端部は片仮名の「ク」の字形をしており，整形後端部の一部を下方に押して片口としている。５本の櫛目を上から下へ12組つけているが底部には櫛目はついていない。この種のすり鉢は，植木遺跡では他に例を見ないが同じ焼成法でつくられた鍋は１例（復元不能）出土している。

須 恵 器

図示しうるものはなかったが，甕・鉢・杯の破片が見られる。甕は口縁径が60cmをこえる大型のものであろう。鉢は，片口がついていてすり鉢の破片とも思われる。

なお，他の遺跡からの流入と考えられる返りのある杯身（６世紀後半のもの）が１例堀の埋め土中から出土している。

青磁・白磁（図23）

十数片の青磁・２片の白磁・１片の天目・１片の灰釉が出土している。

青磁・白磁・天目はいずれも中国製で，13～14世紀のもの（図23の２，写真39の１），14～15世紀のもの（図23の３・５・14，写真39の３）およびこれらの間に入るものに分類でき，いずれも一級品ではないということである（恵京国立博物館の長谷部楽爾氏の御教示による）。青磁・白磁・天目・灰釉ともに碗であろう。

古 銭（図24）

銭は南唐（五代十国の一つ）の「唐国通宝」から明の「永楽通宝」まで16種27枚（いずれも銅銭，内４枚は種類不明）が出土した。表１は，銭造年代順に，また同種のものは出土順にならべてまとめたものである。初めの番号は図24及び写真33のそれと一致する。

鉄 器（図25～30）

鉄器は錆による崩壊が早く，時間が経過するほど，初現の形態を失なっていくものである。そこで，鉄器については出土直後に，全て錆落しを行ない実測することにした。現に図26の13に示した火打鎌は，出土後２ケ月もたたない内にバラバラに崩壊してしまった（鉄器は，錆落し後，自然乾燥を長時間行ない，ポリエチレン製の袋に入れて保存している）。

鉄器の種類は，鏃・たがね・火打鎌・短刀・刀子・帯金具・釘・錠前・板状鉄片・その他用途不明の鉄器をあげることができる。

鏃（図25）

鏃は15本出土し，すべて鉄製である（内２本は穂先はなく茎のみである）。

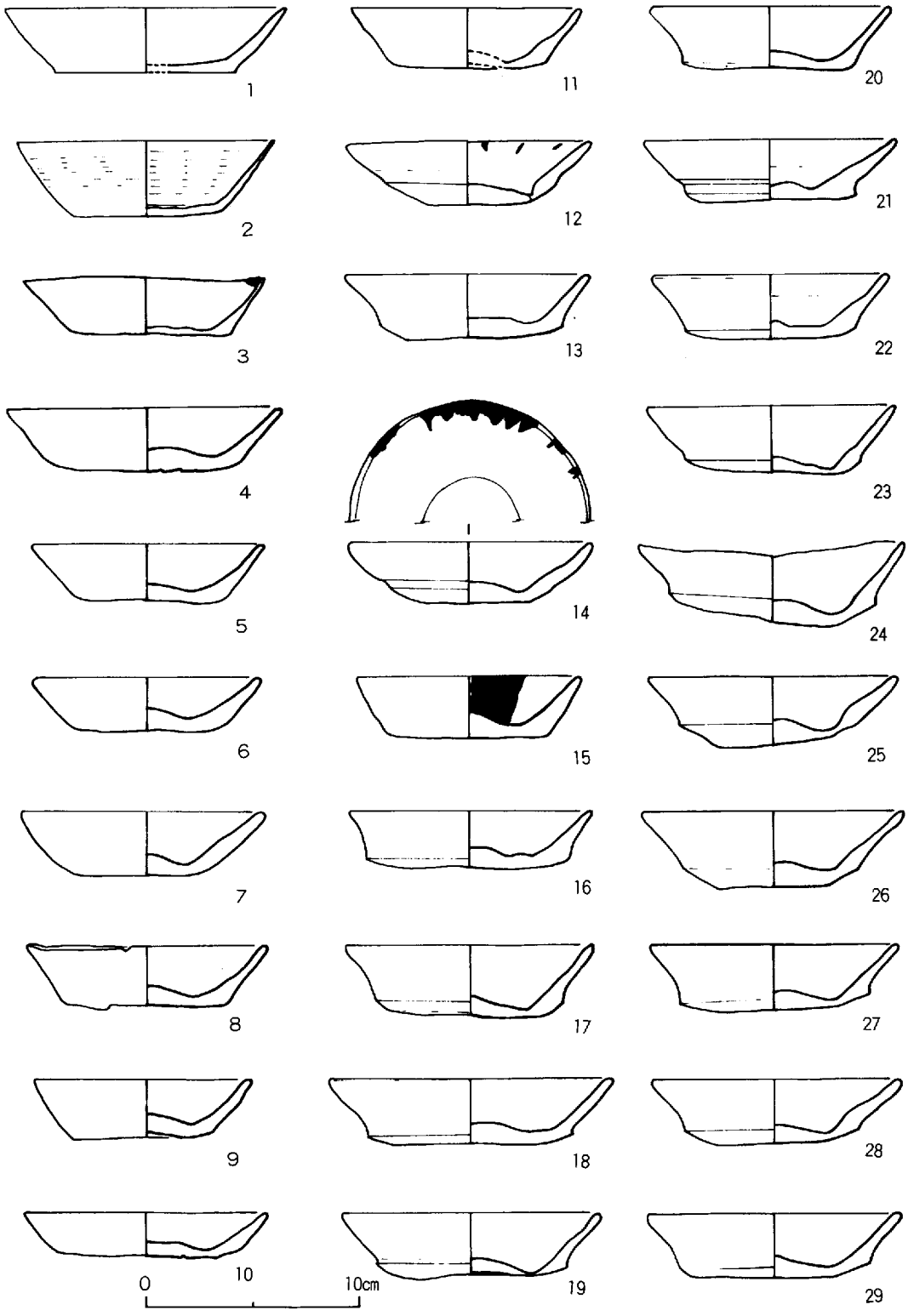
鏃は形態的に，２種類に分けられる。その１は図25の10に示すもので，その２は図25の６・10・15を除く残り全部である。

前者のタイプに属するものは１例の出土を見たのみである。尖根であり，穂と茎の境から先へ３分の１いった所に肩を持ち，断面の片面は丸，他の面は平である。片丸双肩柳葉形有茎尖根である。

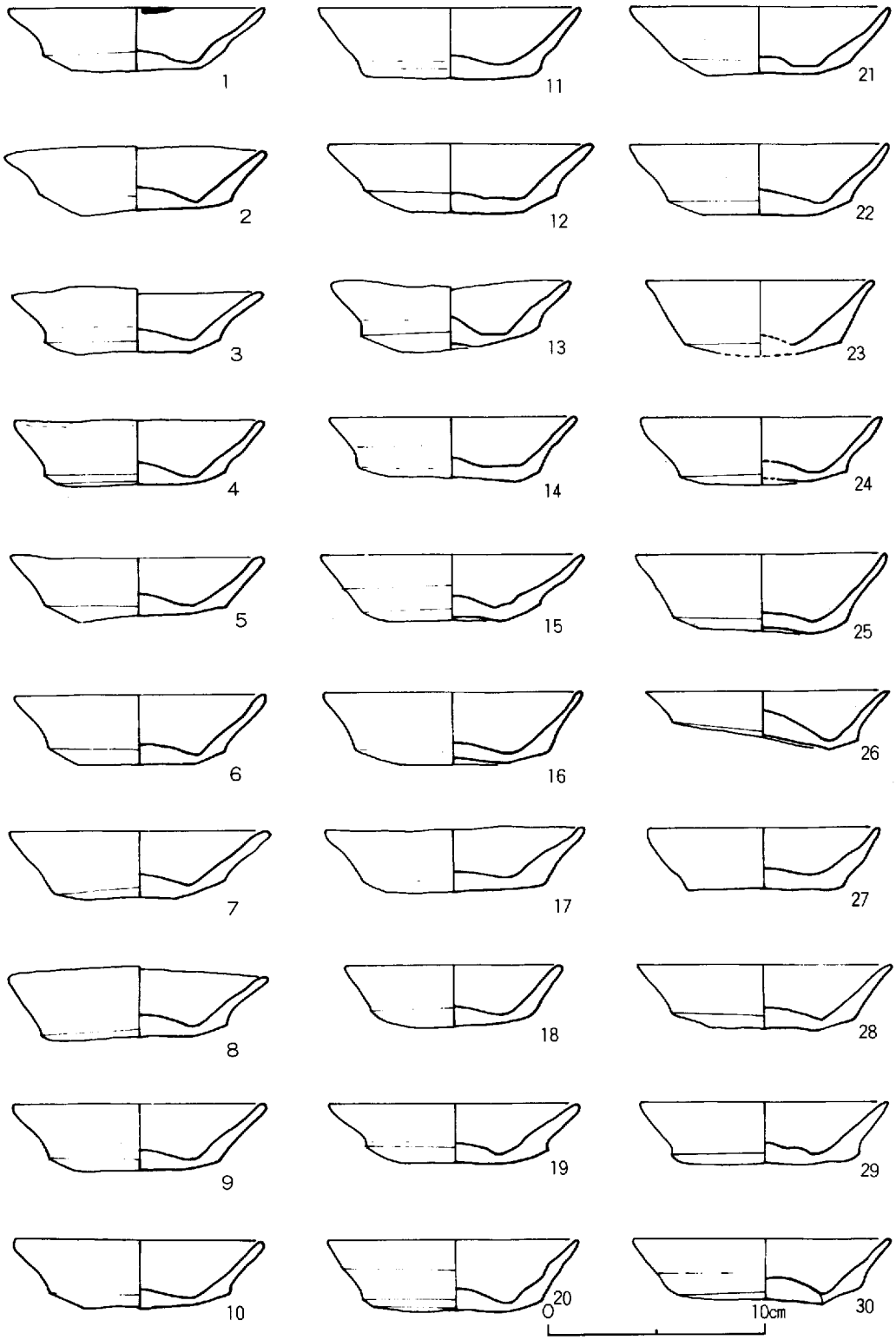
後者は，茎はかなり長さのある四角すいで，穂はこれまた非常に長い円すい形をしている。穂の長さには，13cm以上のもの，９cm前後のもの，７cm前後のものの３種が見られるが，機能的には差異はないと思われる。いずれもこの矢を射ちこまれると傷口は小さいが深手を負うものである。

１と９の茎には，針金様のものを巻きつけている。茎と矢柄との固定をさらに強くするものであろう。

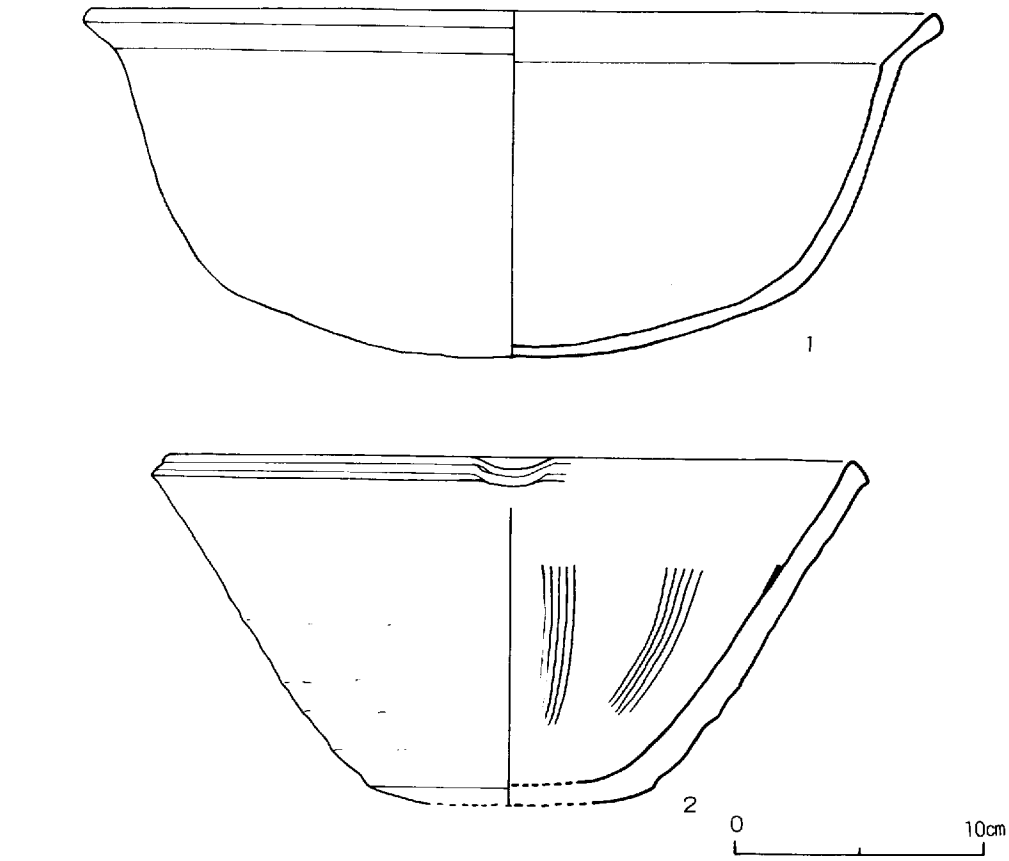
１・８・９には矢柄の一部が残っている。矢柄の径は９ではさだかでないが，１と８は８mmを



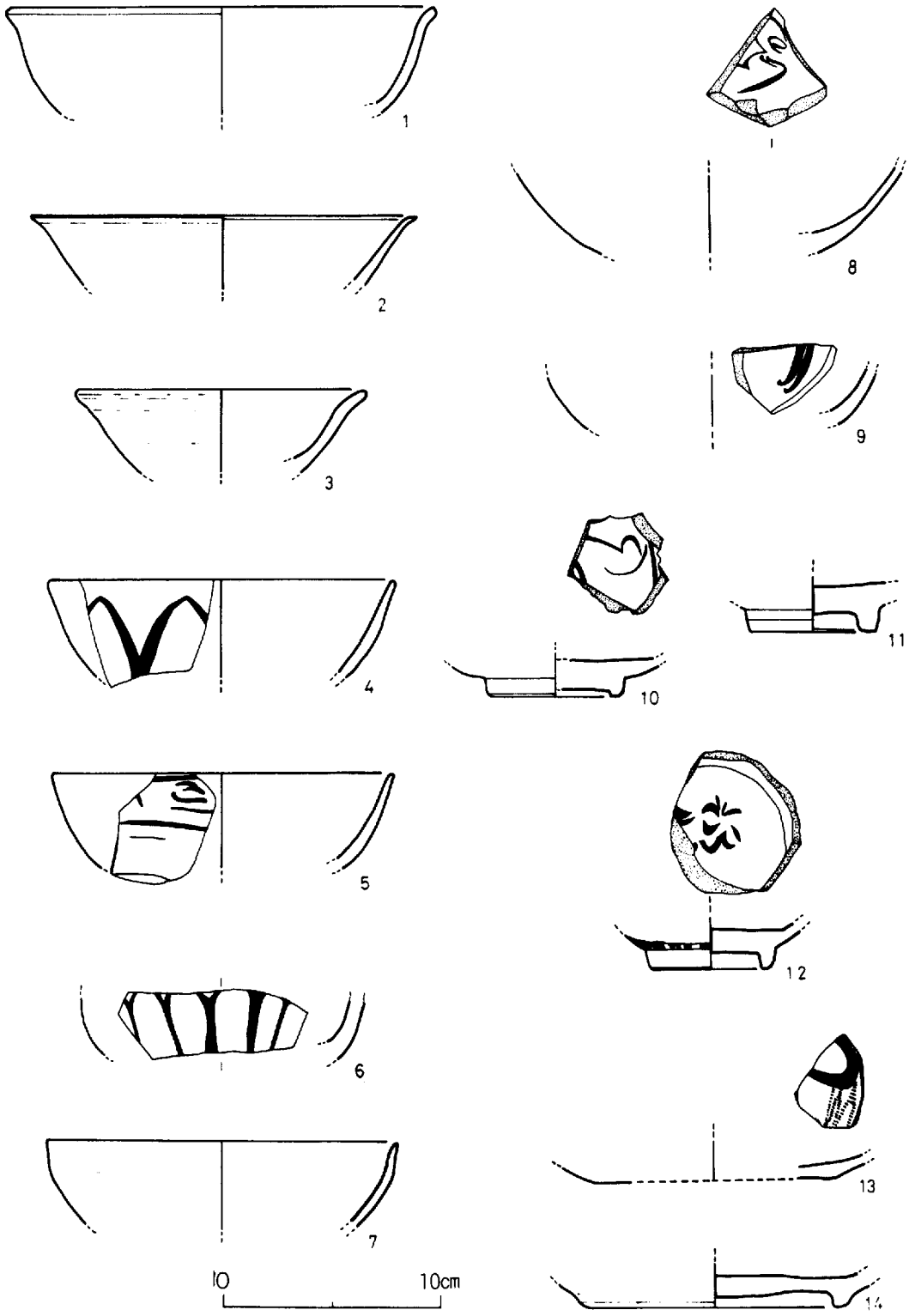
第20図　土師器実測図Ⅰ（坏その１）



第21図　土師器実測図Ⅱ（坏その２）



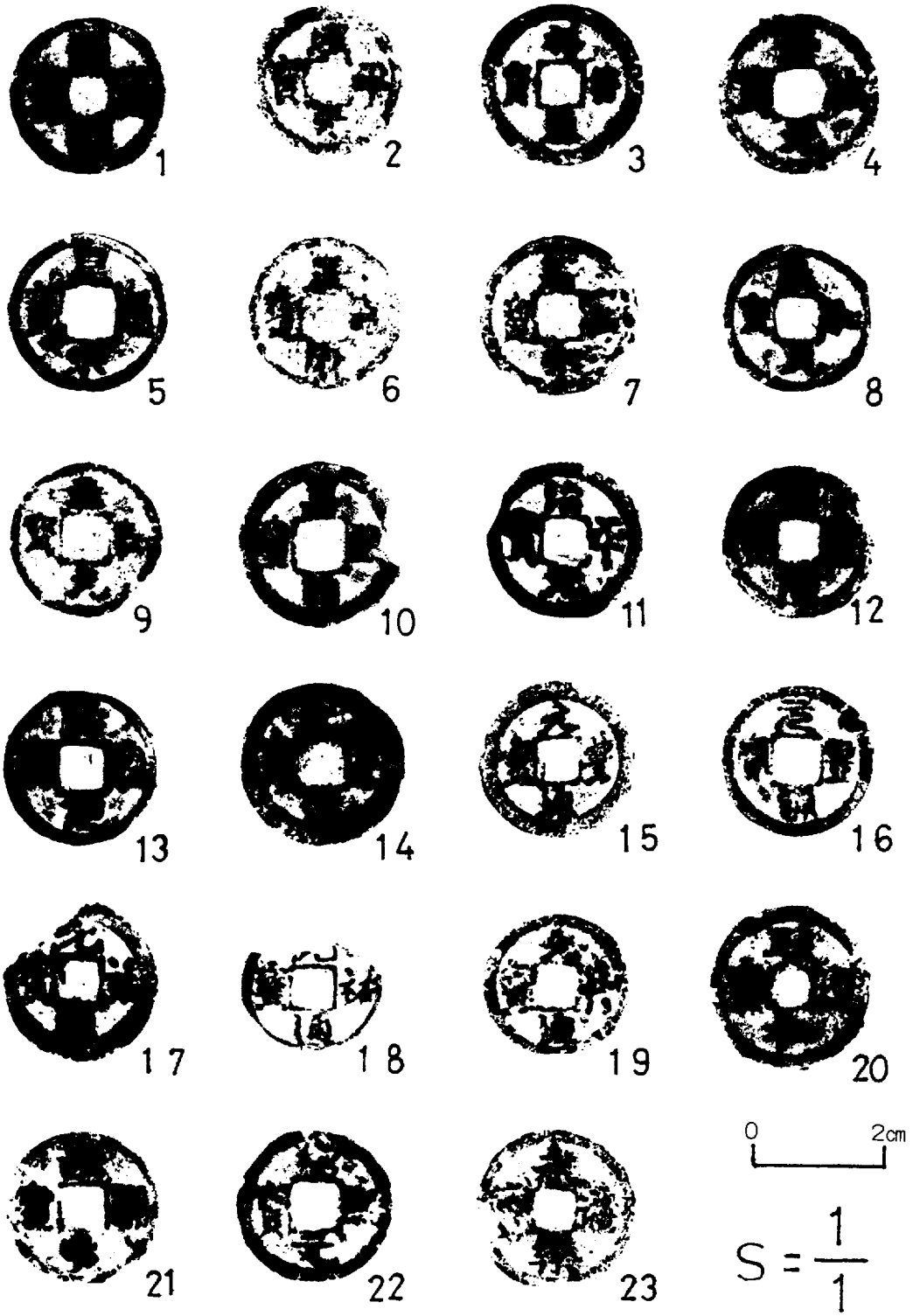
第22図　土師器実測図Ⅲ（鍋，すり鉢，灯明皿）



第23図　青磁，白磁実測図

表1 古銭一覧表

番号	種類	鋳造時期	時代名	直径	出土地点他
1	唐国通宝	AD985～	南唐	24㎜	B区
2	咸平元宝	998～1003	北宋	23	C区
3	祥符通宝	1008～1016	北宋	24.8	C区 pit 60
4	景祐元宝	1034～1037	北宋	23	B区
5	皇宋通宝	1039～	北宋	24	B区
6	皇宋通宝	1039～	北宋	23.5	C区土器溜りⅠ
7	皇宋通宝	1039～	北宋	24.2	C区土器溜りⅢ
8	至和元宝	1054～1055	北宋	22.2	B区
9	至和元宝	1054～1055	北宋	23	C区土器溜りⅢ
10	嘉祐通宝	1056～1063	北宋	25	A区
11	治平元宝	1064～1067	北宋	23.8	B区
12	熙寧元宝	1068～1077	北宋	23.2	B区
13	熙寧元宝	1068～1077	北宋	23.5	B区
14	元豊通宝	1078～1085	北宋	25.2	B区
15	元豊通宝	1078～1085	北宋	23.5	C区 pit 8
16	元豊通宝	1078～1085	北宋	22.8	C区土器溜りⅢ
17	元祐通宝	1086～1093	北宋	23.5	C区
18	元祐通宝	1086～1093	北宋	21.3	C区土器溜りⅡ
19	元符通宝	1098～1100	北宋	22	C区土器溜りⅢ
20	政和通宝	1111～1117	北宋	24	C区土器Ⅱと共に焼けた。これの裏に別の3枚（種類不明）が焼けついている。
21	政和通宝	1111～1117	北宋	23.5	B区
22	紹熙元宝	1190～1194	南宋	24	B区
23	永楽通宝	1403～24	明	24	A区
番号なし	不明	不明	不明	23.5	B区腐蝕のため文字読めず



第24図　古　銭　拓　影

測る。

後者は，両丸錐形有茎尖根である。

たがね（図26の１～５）

１～３はたがねとするには刀の部分が丸味を持ちすぎている。使用による磨耗か。

５は，他の４例に比し，やや小型のものである。長さ6.6㎝で，木質の一部が残存している。木質は柄の一部と考えられ，巾は３㎝で木質の繊維の方向はたがねと直交しており，針金で固定されている。また，このたがねの頭は，かなりたたかれてつぶれている。

火打鎌（図26の６～13）

６～８・10・12はかなり使用され，９・11・13は殆んど使用されていないと思われる。

13は，出土時にすでにその一部が破損しており，出土後２ケ月も経過しない内にバラバラに崩壊してしまった。

短刀（図27の１）

土器溜りⅡより出土したもので，刃渡り19.5㎝茎10.7㎝をはかる。峯は直線で，刃は関から11㎝の所までは峯と平行し，それより先は角度をかえて切先に向けて狭くなり，関から18.5㎝の所から少しカーブして切先となっている。茎は刃の側は刃を延長した線と平行になっていて背の方が刃側にしだいによってきてしだいに細くなり端部を三角形に切っている。関から茎の長さの３分の１の所に径3.5㎜の目釘穴が１つつくられている。

全体に錆による破損が目立つ。

手　鎌（27の２）

これは全体を曲げてカーブをつけ，一端を折り曲げているのは着柄のためと思われ，刃と柄との角度は110度である。工具の一つであろう。

刀　子（図27の３～６）

３は刀子の茎で，目釘穴が１つある。４～６は刃部で，４は刃の中央部分，５は切先近く，６は切先の部分の残片である。６は峯と刃のそれぞれのカーブの度合は，峯の方が大きくなっている。

帯金具および不明鉄器（図27の７～15）

７・８は，径0.4㎝の円柱の一端をおしつぶし穴をあけて，鋲を打ちこんでいる。

９は，径0.9㎝長さ5.2㎝の円柱で両端はやや丸味をもっている。

10・11はどちらも刀子か何か工具類の茎のようにも見える。

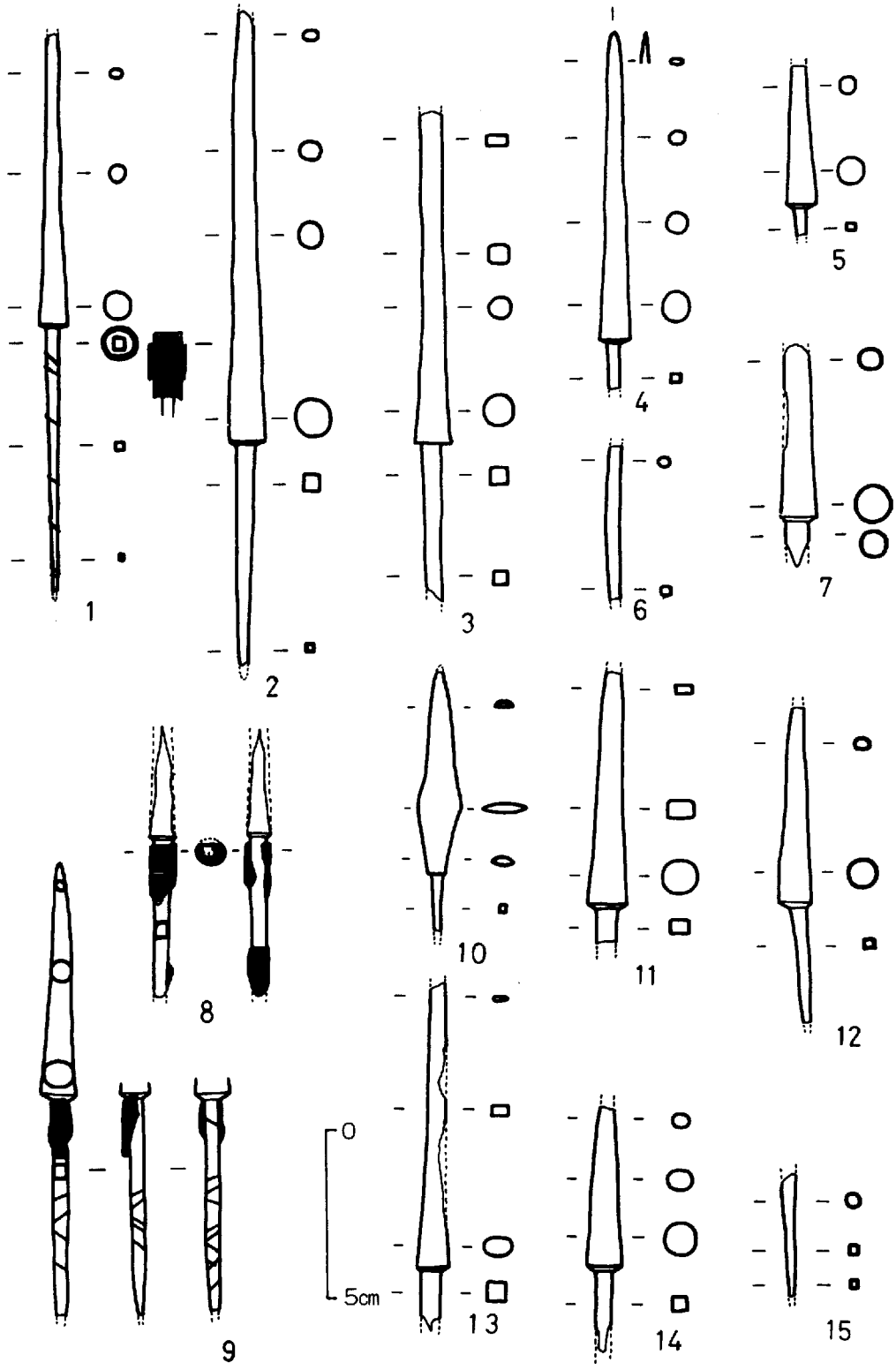
12は，断面が三角形で刃物類の残片か？

13は，８の字に近い形をした鉄板に，３つの穴があけてあり，そのうちの２つの穴には鋲が残っている。中央の穴のまわりには放射状に刻み目をつけている。

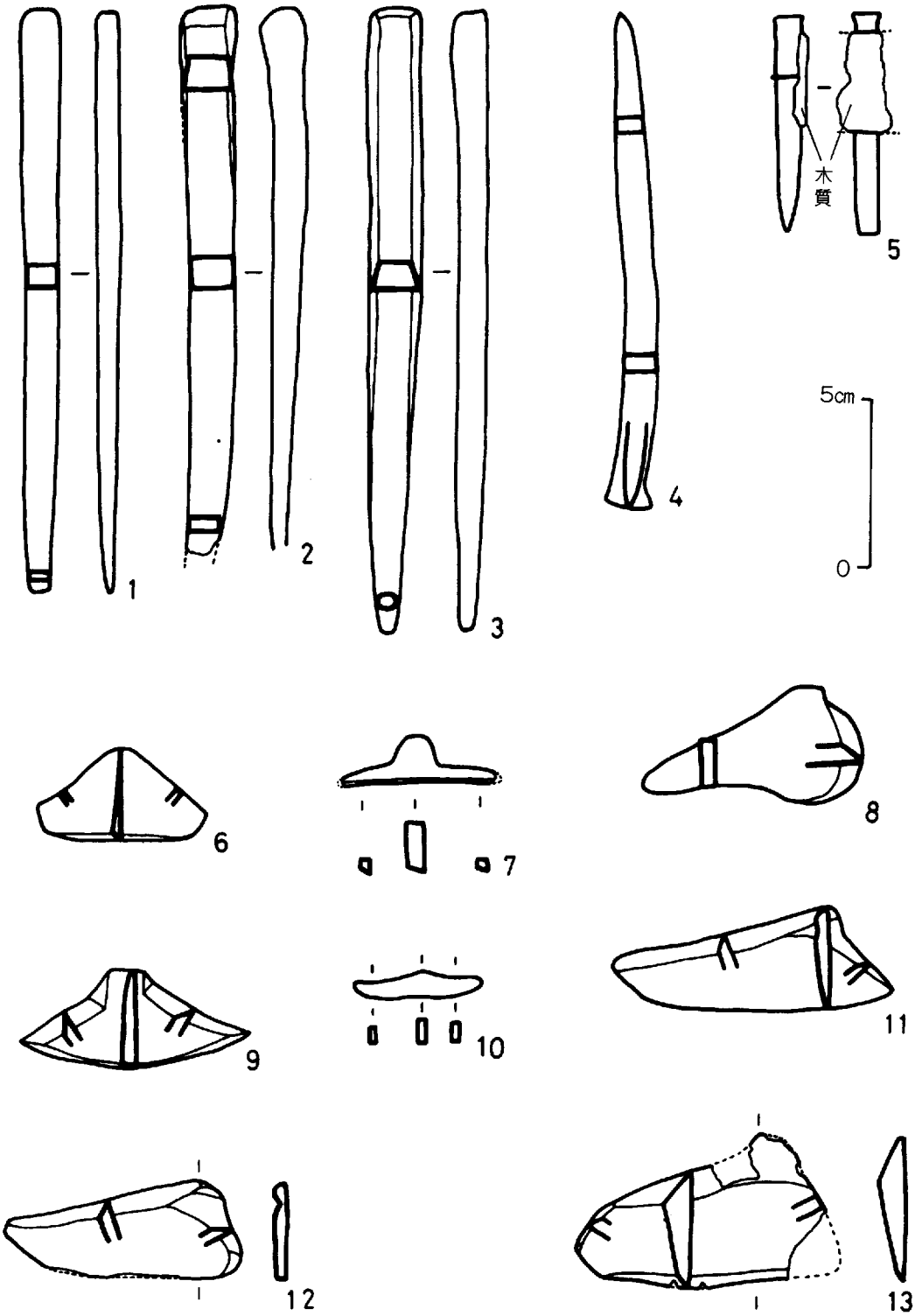
14は，唯一の銅製品（銭を除く）である。厚さ0.8㎜の小銅板の一端の両側を少し折り曲げたものである。

15は，半円形の鉄板に二つの耳をつけたもので，この二つの耳を同じ側に折りまげたものである。

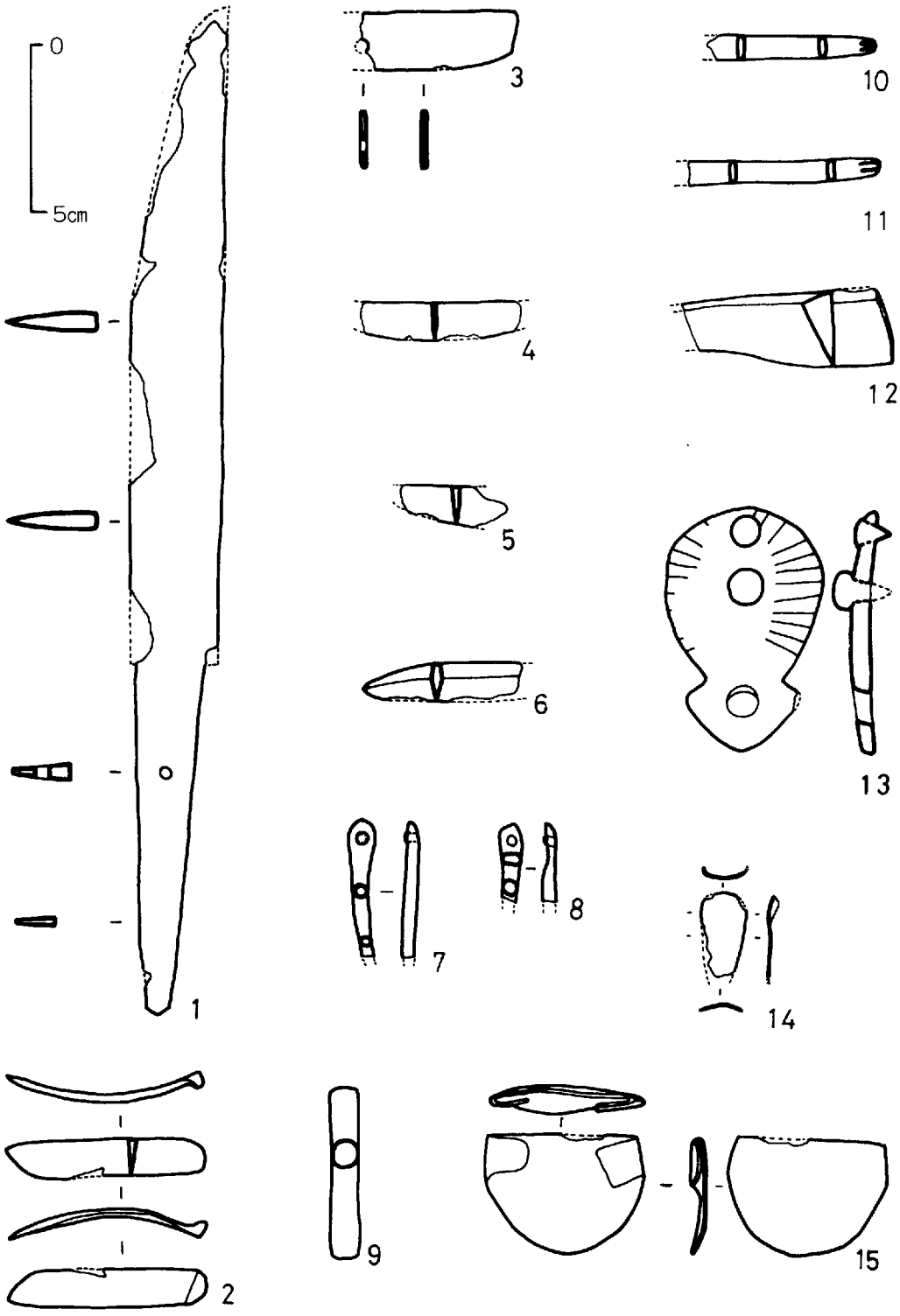
13～15は帯金具であろう。



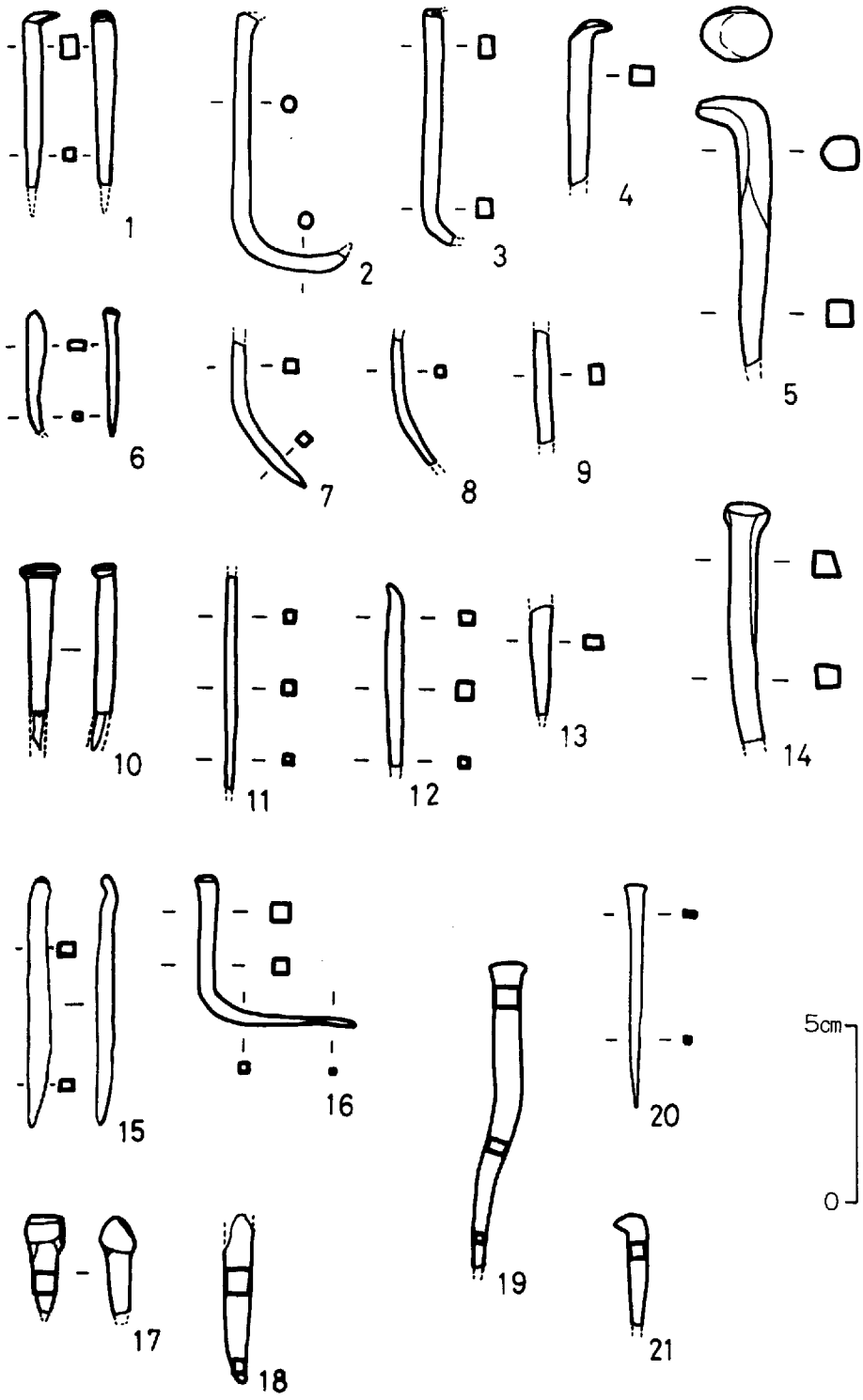
第25図　鉄器実測図Ⅰ（鏃）



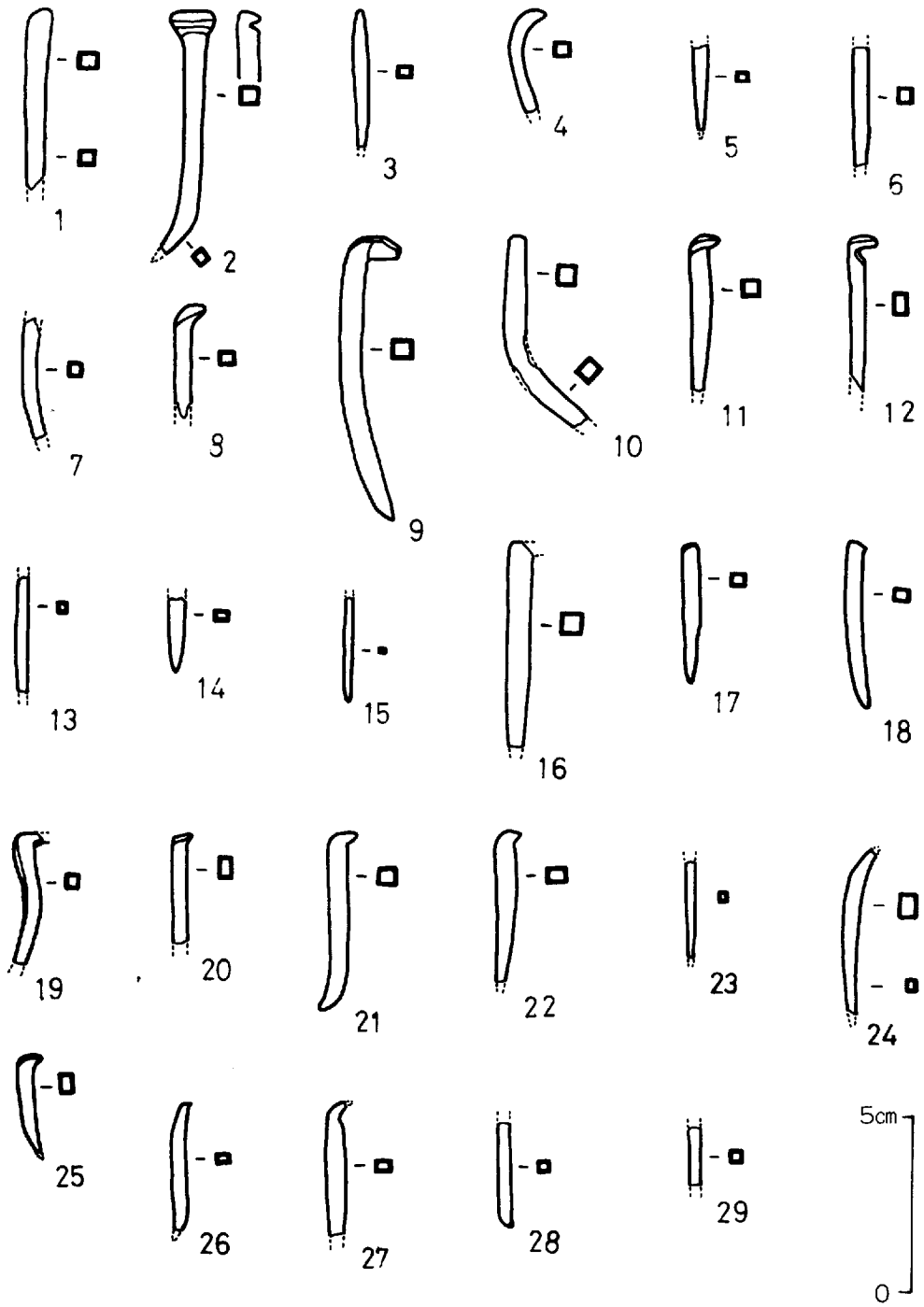
第26図　鉄器実測図Ⅱ（たがね，火打鎌）



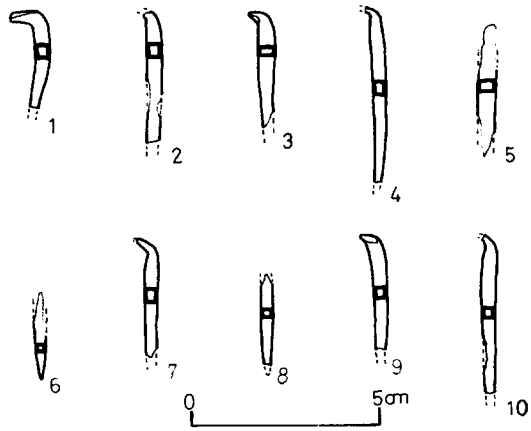
第27図　鉄器実測図Ⅲ（短刀，刀子，他）



第28図　鉄器実測図Ⅳ（釘その１）



第29図　鉄器実測図Ⅴ（釘その２）



第30図　鉄器実測図Ⅳ（釘その３，井戸枠固定）

釘（図28～30）

釘は図示した60本を検出した。そのうち，図30に載せた10本は井戸枠を固定していたもので，井戸枠の木材に打ちこまれたまま残存していた。

いずれも断面は四角形で，太さは0.8～1.0㎝のものと0.5㎝前後のものとがみられる。井戸枠固定用の釘は，他のものに比しやや細身である。

図28の２は，断面が円形で，釘とするよりも釣針と見る方がよいものである。釣針とすればかなり大型の部類に属する。

木製品（井戸枠木材を除く）

木製品は，土器溜りⅠ及びⅡpit 60と井戸から出土した。土器溜りⅠからは，曲物１・乾漆・木組，土器溜りⅡからは漆塗り椀１，井戸の底部から漆塗り曲物の底１・竹の筒２，井戸の埋め土中から漆塗り曲物残片１・漆塗り椀３を検出した。

曲　物

曲物は３個出土した。土器溜りⅠから出土したものは，径35㎝深さ５㎝で，曲げ部分の厚さは，出土時点で２㎜，底の厚さは３㎜を測りスギ製である。これは，現水田面から30㎝の所に存在していたが，「地獄割れ」のためバラバラにひび割れており，元形のまま取り上げることはできなかった。

井戸から出土したのは，曲物の底板の一部と曲げ部分の一部で，共に黒漆塗りである。底板は６㎜の厚さの板でつくられており，底の径は25㎝である。曲げ部分は厚さ２㎜の板に約１㎝おきに切れ目を入れている（現存の大きさは10㎝×1.5㎝）。

漆塗り椀

椀は５個出土し，いずれも漆塗りである。しかし木地は殆んど残っておらず，漆の膜が残存するのみである。５例のうち pit 60 から出土したものは黒漆の上に赤漆で花柄をえがいている（写真24）。

乾　漆

土器溜りⅠから出土したもので，麻布に黒漆を塗ったもので，数片の破片が残っていただけで形態は不明である（写真41）。

木　組（写真19）

土器溜りⅠに倒れこんでいたもので，20㎝間隔に約１㎝角の細い木を組んであった。障子の組み子とも見える。

竹　筒

竹筒（竹の輪切り）については井戸の項を参照されたい。竹は，皮と繊維質のみ残存していたが

表面にはわずかに青味が残っていた。青竹を切ったものであろう。

その他木質遺物

井戸埋め土中から厚さ2㎝巾9㎝の板にホゾ穴をあけているものや，ナタで切った小枝，先端の焼けている小枝などが出土している（写真41）。

砥　石（図31）

3個の砥石が出土したが，いずれも土器溜りⅡより出土したもので，1・2は短刀（図27の1）の近くから出土した（写真22）。かなり緻密な黄色の石材を切って砥石としている。3例とも擦り傷がついており，1は砥石の角を利用して研いでいる。

硯（図32）

須恵器と同じ焼成法でつくられている硯で，陸の一部のみ出土した。陸のまわりには高さ2㎜巾5㎜の縁がついている。墨をすったところが凹んでいて，凹みは2ケ所見られ，深い方には擦り傷がついている。

土　錘（図33）

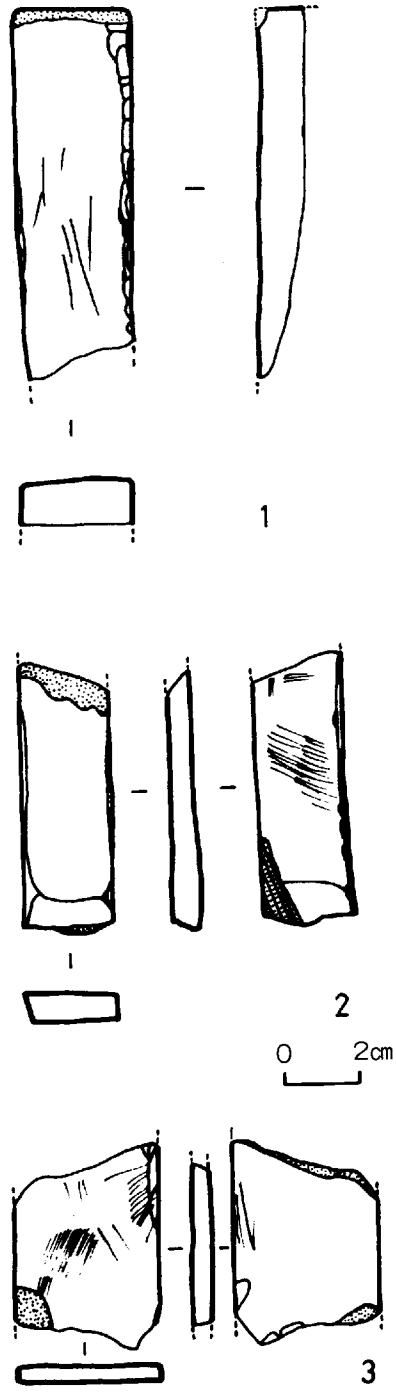
5個の管状土錘が出土した。径は1.3～1.8㎝，長さは3.5～6.0㎝を測り，断面はいずれも円形で，径0.38～0.6㎝の穴があいている。

井戸枠の木材

井戸枠は，柱4本・桟木6枚・側板14枚（いずれも材質はスギ）及び側板の目止めに使われていた割竹1本が残存していた。これらの木材の面は，割っただけで仕上げをしていないものと，蛤刃の手斧による仕上げが行なわれているものとがあり，小口（桟木のホゾを含む）は鋸で切ったものと折ったもの（側板にあり）とが認められた。ホゾ穴はノミで穿ったものである。

柱・桟木・側板とも他の建築用材を転用したものと思われる。柱にあるホゾ穴は底からの高さが一定でなく，桟木の長さも不ぞろいである。また，井戸枠には不必要な余分のホゾ穴があったり釘穴が残っているものもある。

柱と桟木はホゾ・ホゾ穴によって組合され，その部分を釘で固定していた。木枠を固定していた釘は図30に示す通



第31図　砥石実測図

表2　井戸枠残存木材計測表

柱	長さ	巾	厚さ	面	ホゾ穴の高さ	ホゾ穴 横	ホゾ穴 縦	ホゾ穴 深さ	備考
NE	148.0	15.5	21.0～22.3	①	15.5	2.5	6.3	抜け	割り　対面
					108.5	2.4	6.5	3.0	SE②
				②	21.0	2.4	6.5	4.0	割り
					100.0	2.3	7.0	3.0	NE②
				③	15.5	2.3	6.6	抜け	割り
				④	22.3	2.3	5.7	4.0	手斧
NW	143.0	11.5～12	5～6.5	①	26.4	2.7	6.8	抜け	割り
					119.2	2.7	8.0	3.0	SW②
				②	34.0	2.6	7.0	4.0	割り
					120.5	2.5	9.5	2.3	NE②
				③	26.0	2.7	6.6	抜け	割り　釘穴(1)あり
				④	31.0	2.3	7.0	3.0	手斧
SW	142.6	10～10.5	6.2～6.8	①	26.4	2.5	7.0	抜け	割り
					120.4	2.7	7.2	2.0	SE①
				②	34.3	2.4	5.7	3.0	手斧
					119.0	2.0	6.5	3.0	NW①
				③	25.0	2.5	8.0	抜け	割り　一部手斧
				④	34.5	2.4	6.0	3.5	手斧
SE	133.6	10.0～13.3	6.5	①	13.0	2.7	6.1	抜け	割り
					106.1	2.6	7.5	2.2	SW①
				②	14.5	2.0	5.7	3.5	割り
					105.7	2.5	7.5	3.0	NE①
				③	12.0	2.7	6.5	抜け	割り
				④	19.0	2.2	6.3	3.5	手斧

桟木	長さ	巾	厚さ	ホゾ	縦	ホゾ 長さ	備考
W上	84.0	10.0	2.0～1.0	N	6.5	3～3.5	割り
				S	4.0	2.5	
E上	81.0	11.1	2.5～1.4	S	6.5	1.5～2.6	割り
				N	5.8	2～2.5	
N下	81.7	12.2	2.2～1.3	E	5.5	4～3.5	手斧　上面にホゾ穴(2)あり
				W	5.0	3.5	

桟木	長さ	巾	厚さ	ホゾ 縦	ホゾ 長さ	備考
S下	90.0	12.0	2.4～1.8	W 6.0	7～7.5	割り
				E 6.0	5～5.2	
E下	89.0	8～8.2	2.5～1.5	S 5.0	4.2～4.3	割り　上面にホゾ穴(2)あり
				N 4.7	7.5	
W下	81.0	11.3	2.4～1.4	N 4.6	4.5～5	割り　上面にホゾ穴(1)あり
				S 5.5	2.4～2.5	

側板	長さ	巾	厚み	備考	
N①	115.0	12～11.5	0.4～0.5	割り	NE柱の外側
N②	106.0	10.5～11.5	0.6～0.7	割り	
N③	15.0	5.5	0.4	割り	
N④	37.0	6.5	0.8～1.2	片面割り，片面手斧	
N⑤	110.0	11.0	0.4～0.5	割り	NW柱の外側
N⑥	58.0	11.5	0.4～0.5	割り	一釘穴(5)あり
W①	88.0	7～7.3	0.3～0.5	割り　竹あり（現存35.0）	一竹は側板の外側
W②	66.0	5.5	0.2～0.4	割り	W桟木の外側
W③	94.0	13.0～12.0	0.2～0.3	割り	SW柱の外側
S①	126.0	24.0	2.0～2.5	手斧	S桟木の外側
S②	144.0	18.0	1.5～2.0	手斧	
E①	115.0	6.0	0.6	割り	E桟木の外側
E②	106.0	5.5～6.0	0.6	割り	
E③	101.0	9.5	0.15～0.2	割り	

注 1. 計測値の単位はcm。
2. 柱，側板の長さは現存長
3. 柱，桟木の略号については右の図参照のこと。
4. 桟木については，例えばW上というのは西の面の上の桟木という意味である。
5. 「割り」というのは木材を割っただけで面としているもので，「手斧」というのは蛤刃の手斧による仕上げが施してあるものである。
6. ホゾ穴の高さは，柱の下端からホゾ穴の下端までの長さである。

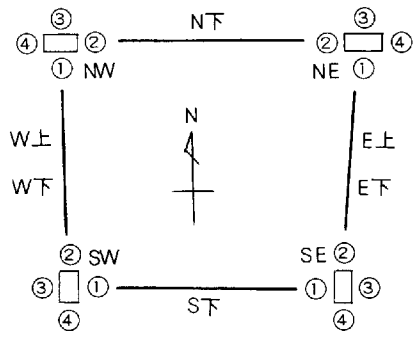


表3　遺物一覧表

○この表からは，古銭・井戸枠残存木材・椀等の木製品・乾漆・竹・木の焼け残り・小枝等は除外している。
○表中の数字は，出土時における破片の数を示す。ただし，完形のものも含む。
○杯・灯明皿の底の数字だけのものは底の盛り上がったものの数である。
○特に，土師器の杯と灯明皿については，底部が½以上あるものを数えて再掲した。½以下の破片は個体数の上にあらわれていないが，実際の個体数はもっと多いと思われる。
○陶磁器その他には，備前焼・法曽焼・その他の焼き物等を含む。

		陶磁器									鉄器						その他										
		土師器					須恵器	亀山焼	青白磁	その他	鎌	たがね	火打鎌	短刀子手鎌	釘	その他	炉壁	羽口	鉄滓	馬の歯	獣骨	硯片	砥石	土錘	桃の種子	炭化米
		杯及び灯明皿			鍋	その他																					
			杯の底	灯明皿の底																							
A区	T 1	21	5		3	6	3	1	1	6							1										
	T 9	19	1		3	2	1			5																	
	T 11	43	2	1	7		1			2																	
	T 12	97	糸切 1/4		30	3	3	1		12																	
	T 13	40			13	57	3			9															1		
	T 14	79	3		15	8	2	1		13																	
	A	1,010	糸切14/53	8	304	203	51	37	9	224	5	3	3	2	11	6	1			1	5	1		1			
	Pit 2	24	3		4		7	1		4	1				2	1											
	Pit 3	3	1																								
	堀	4	2	1							1				1												
	池	1	1								2																
	合計	1,341	糸切15/75	10	379	279	73	41	10	275	9	3	3	2	14	7	2			1	5	1		1	1		
B区	T 3	40	糸切 1/5	1	2		1		1	5																	
	T 4	54	糸切 1/2		11			1		10																	
	T 5	80	2		8		2			6	2					1											
	T 6	10	2	1	7		4			9			1				2							1			
	T 7	13			1		1			5																	
	T 8	45			15		1			1	2														2		
	B	1,173	糸切 7/61	11	307	34	51	30	9	175									3	8	1		1	1	1		
	Pit 2	7			4																						
	Pit 3	1			3	1																					
	Pit 4	3	1		4																						
	Pit 5				1																						
	Pit 6					1																					
	井戸	12	1												10												
	合計	1,438	糸切 9/74	13	363	36	60	31	10	211	4		1		10	1	2		3	8	1		1	4	1		
C区	T 2	40	2		3			2		5					1												
	T 10	277	平1糸切 1/13	3	9		1	2		13							2										
	C	1,675	糸切 3/128	27	31	6	11	30	1	48				1	6	3								1			
	土器溜りⅠ	556＋α	平1糸切 1/50	2	59（2個体56）			1																			
	土器溜りⅡ	2,065	平2 124	106	23	2		16		16				2	8		1						3				
	土器溜りⅢ	3,528	平3 250	101	64	8	9	31	1	41					5	1	4	2									
	土器溜りⅣ	898	糸切 2/42	18	11		12	9		3		1			7		1						1				
	土器溜りⅤ	88	8	1			1			1																	
	Pit 1	12	1	1													1										
	Pit 2	21	3																								
	Pit 3	27	2	3																							
	Pit 4	22	3												1												
	Pit 5	13	1																								
	Pit 6	47	3	1																							
	Pit 7	1																									
	Pit 8	60	10	2	2			2																			
	Pit 9	29	3	2																							
	Pit 10	12	1																								
	Pit 11	44	1	3																							

表3の続き

		陶磁器										鉄器						その他										
		土師					須恵器	亀山器	青白磁	その他		鎌	たがね	火打鎌	短刀・刀子・手鎌	釘	その他	炉壁	羽口	鉄滓	馬の歯	獣骨片	硯	砥石	土錘	桃の種子	炭化米
		杯及び灯明皿			鍋	その他																						
			杯の底	灯明皿底部																								
C	Pit 12	1																										
	Pit 13	6	1	1																								
	Pit 14	52	2	2																								
	Pit 15	28	2	3																								
	Pit 16	28	2	1	1	1																						
	Pit 17	28	2																									
	Pit 18	10																										
	Pit 19	6																										
	Pit 20	3																										
	Pit 21	21	5	7														3										
	Pit 22	12	1	1	7													9										
	Pit 23	11																										
	Pit 24	25	1	2	8																							
	Pit 25	18	1	2														1										
	Pit 26	12	1	1						2								1										
	Pit 27	22	3	1																								
	Pit 28	6	2	1						1																		
	Pit 29	39	3																									
	Pit 30	11	1																									
	Pit 31	7	1		3													3										
	Pit 32	13	2	3	2																							
	Pit 33	15	1																									
	Pit 34	63	1																									
	Pit 35	27	1																									
	Pit 36	2																2										
	Pit 37	8																2										
	Pit 38	4	1																									
	Pit 39	56	平2 2																									
	Pit 40	8	1	1																								
	Pit 41	43	平1 1	2																								
	Pit 42	2																										
	Pit 43	13																										
	Pit 44	22	1	1	1																							
	Pit 45	4	3																									
	Pit 46	4																										
	Pit 47	6																										
	Pit 48	16		1																								
	Pit 49																											約0.9g
	Pit 50	6																										
	Pit 51	10																										
区	Pit 52	25	平1 2	2																								
	Pit 53	26	2	1	3											1												
	Pit 54	24	1																									
	Pit 55	3																										
	Pit 56	11																										
	Pit 57	17		1												1												
	Pit 58	8																										
	Pit 59	3			1																							
	Pit 60	180	9	10	5	1																						
	合計	10,380+α	平11糸切 7/701	307	246	17	35	72	2	130		1		3	30	4	30	2					4	1		約0.9g
総計		13,159+α	平11糸切 31/850	329	988	332	168	165	22	616	13	4	4	5	54	12	34	2	3	9	6	1	5	6	2	約0.9g

りである。

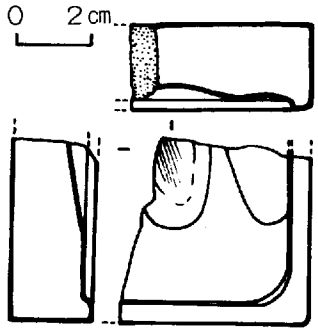
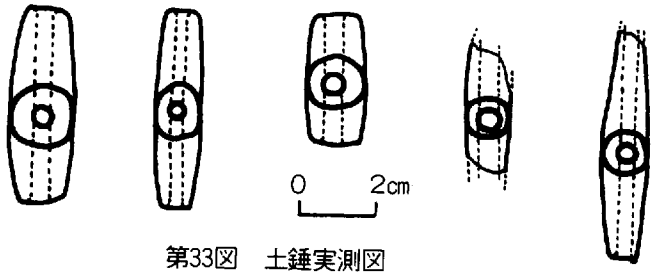


図32 硯実測図



第33図 土錘実測図

4. まとめにかえて

『上房郡誌』・『呰部村誌』（いずれも大正の初めごろ発行）や現存の古文献・系図等から見ると12世紀後葉に，山田重英が北房町上呰部から中津井の地域を支配しており，15世紀後半から16世紀にかけて，植木（ウエキ）・庄・津々（ツツ）という姓の武将が活躍し居住していたことが知られる。植木・庄・津々は一族であるとする記録と，３者は別の系統であるとする記録とが見られる。いずれにしても，３氏の姓は，それぞれ居住地の地名から付けられたものであろう。

『上房郡誌』才田城の項に

才田城（斉田,又,佐井田）中津井村字才田にあり。文治年中山田氏の居住せし所なりと云ふ。後年植木美作守藤資居城す。子下総守秀長継ぐ，秀長初め植木の城主たり。

永正十四年美作守藤資代官として三好長基が加勢となり，大内の軍と淀境にて戦ひし時，秀長十八歳にて一番鑓を入れ敵を退けしかば，長基感状と持鑓とを添へ，水田庄を宛行はれ，佐井田城を与ふ，天正二年庄為資大松山城主上野伊豆守を攻むる時，庄が一族なる秀長，庄と力を合せ，横合より攻めかかり上野が勢を追崩し，伊豆守を討取り，大松山を乗取る。其一族若林次郎右衛門，小松山の右衛門尉を討取る。是より秀長全く才田城主となれり。

とある（中津井村は，現在北房町大字中津井となっている）。

これによると，植木下総守秀長は，初め植木城主で，やがて才田城主となったことがうかがえる。しかも，植木に居住したのは，16世紀の初めの数年から十数年の間のわりに短期間であったであろう。

植木遺跡の西にある豊永台地（石岩台地）の斜面の起伏の一部に「呰跡」と伝える場所がある。四方を堀り切りで囲み，頂部は平垣で広さは約20アール（約２反歩）ある。堀り切りの巾は，西側で６m，他の三方は1.5mを測る。これが植木城の一部であったと考えられる。豊永台地の頂上東端から東斜面にかけて城を築いていたとすると，植木遺跡の一帯は居館をかまえるのに最適の地といえる。

元禄８年の「下部呰村検地帳」（北房町教育委員会保管）によると，「植木原（エキバラ）」（植木遺跡及びその周辺の水田地帯の現在も使われている呼び名）の一部に「堀之内」という地名がみられるが，「堀之内」という呼び名は現在伝わっていない。しかし，「植木原」の一部の現在の小字名は「古城」といわれている（古城の中に植木遺跡全域が含まれる）。

「古城」の南，呰部川をへだてて南側，つまり現在の植木部落の東側には「馬場」という地名がみられる。

土器・陶磁器（明らかに近世のものと分かるものは除く）を器形によって分類すれば，杯・灯明皿・鉢・椀・壺・甕に分けられる。量的には，杯が圧倒的に多く，次いで灯明皿で（共に土師器），鉢以下はそれぞれ20数個から数個が確認されたにすぎない。杯・灯明皿は量も非常に多く，しかも

同一技法で作られているものがそのほとんどを占めている（底は平担なものは糸切底を含めて杯・灯明皿の総数の３％以下の数である）。同一時期に量産されたものであろう。杯・灯明皿のほとんどの底は，ヘラ起しあるいはナデ仕上げでほぼ平担につくられているが，底部の内側は丸く上方に盛り上がっている。このような技法をもつ坏・灯明皿は，あまり例を見ない（同じ縦貫道地用地内の北房町谷尻遺跡で坏が１個出土しており，また，高梁市美袋で，最近，亀山焼の壺やすり鉢に伴なって同種の灯明皿が数個見いだされている――後者は高梁市図書館蔵）。一つの地方的な窯で焼かれたものと思われるが，現在までこの種の土師器を焼いた窯は発見されていない。

青磁・白磁・天目は22片の出土を確認したが，いずれも13～15世紀に中国で焼かれた碗の破片である。

古銭は，10世紀末から15世紀初めにかけて中国で鋳造されたものばかりである。

鏃は13本検出したが，いずれも鉄製で実戦用の鏃といえよう。植木遺跡出土の鏃と同形のものを着装した矢は，瀬戸内海大三島の大山祇神社の鎌倉時代の武将が奉納したものの中に見られる。両丸錐形有茎尖根は，戦国時代の鏃の一般的な形態の一つであったのであろう。

遺構は，建物11棟・掘１・井戸１・溝１が確認された。建物Ⅱ～Ⅳ・Ⅵがほぼ南北にならび，建物Ⅴ・Ⅶ～Ⅺが二列になって建建物Ⅵの西に東西に並んでいる。建物ⅡからⅪの10棟はＬ字形に配置されている。建物ⅢとⅣの間にはこれらの建物群を二分するように池・堀がつくられている。Ｌ字形に並ぶ建物群から少し離れた地点（建物Ⅳの南西隅から南へ約90m東へ約40mの所）に建物Ⅰがある。井戸もＬ字形に並ぶ建物群から少し離れた地点（建物Ⅳの南西隅から南へ70m東へ30mの所）に存在する。

杯・灯明皿は，この遺跡では日常の食器として使われ，杯・灯明皿のそれぞれの一部のものがいわゆる灯明皿として利用されたもののであって，一般に灯明皿と呼ばれるものすべてが灯明をともしたものではない。この遺跡では杯及び小皿として使われ，たまたま，これらの一部が灯明皿として使われたにすぎない。

土師器は，一般に形態的変化の少ないものであるが，この遺跡のものは非常に短い期間につくられたものばかりである。

建物群はいずれも堀立柱のものであるが，建て替えは行なわれていない（建物Ⅱは除く）。

出土遺物全般やこれらを考え合わせて，この遺跡が使用された時期は15～16世紀のうちの非常に短い期間と限定できる。

植木下総守秀長（1500年生）が植木城を居城としたのは1517年までと考えられる（1517年以後は佐井田・植木両城の城主となるが，大きい方の城つまり佐井田城を居城としたと考えられ，植木城及び館を放棄したものであろう）。佐井田城に移った秀長は，やがて毛利勢に追われて山陰にのがれるが，再び，この地（現在の植木部落）に居を構えることになった。

発掘調査によって知り得た事実と文献を結びつける直接的な材料は存在しないが，この遺跡の建物群は植木下総守秀長が植木城を居城とした時点の館址とする可能性が生じる。もし，この推論が許されるとすれば，館として使用された時期は1510年代となる。

（田仲満雄）

1．遺跡遠望Ⅰ（南から）

2．遺跡遠望Ⅱ（西から）

図版2

3．建物Ⅰ及び溝（北から）

4．建物Ⅲ（東から）

上から
5．建物群（南から）
6．建物Ⅳ（西から）
7．建物Ⅵ（南西から）

図版4

8．建物Ⅴ（中央）及びⅦ（Ⅴの北）（南から）

9．建物Ⅸ（中央）及びⅩ・Ⅺ（南南西から）

10. トレンチ調査時に確認した井戸（南西から）

11. 井戸を放棄する時に入れた礫（南西から）

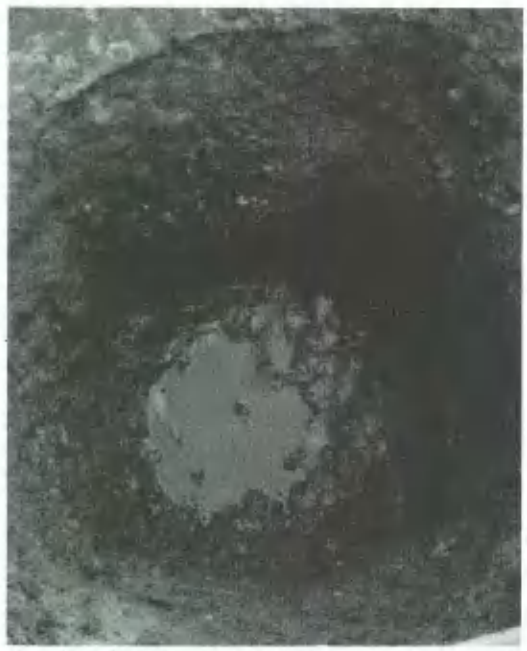
図版6

12. 井戸を放棄する時に入れた礫を取り除いた状態（北西から）

13. 井戸掘り方及び残存木枠（北から）

14. 井戸底部及び漆塗り木製品の底部の出土状態（南から）

15. 井戸底部の配石状態（北から）



16. 井戸底部の配石を取り除いた状態（北から）

図版8

17. 土器溜り1（東から）

18. 土器溜り1細部その1（東から）

19. 土器溜り１細部その２（木組み）（北から）

20. 土器溜り１細部その３（曲物出土状態）（西から）

図版10

21．土器溜り２（東から）

22．土器溜り２細部そほ１（短刀及び砥石出土状態）（南から）

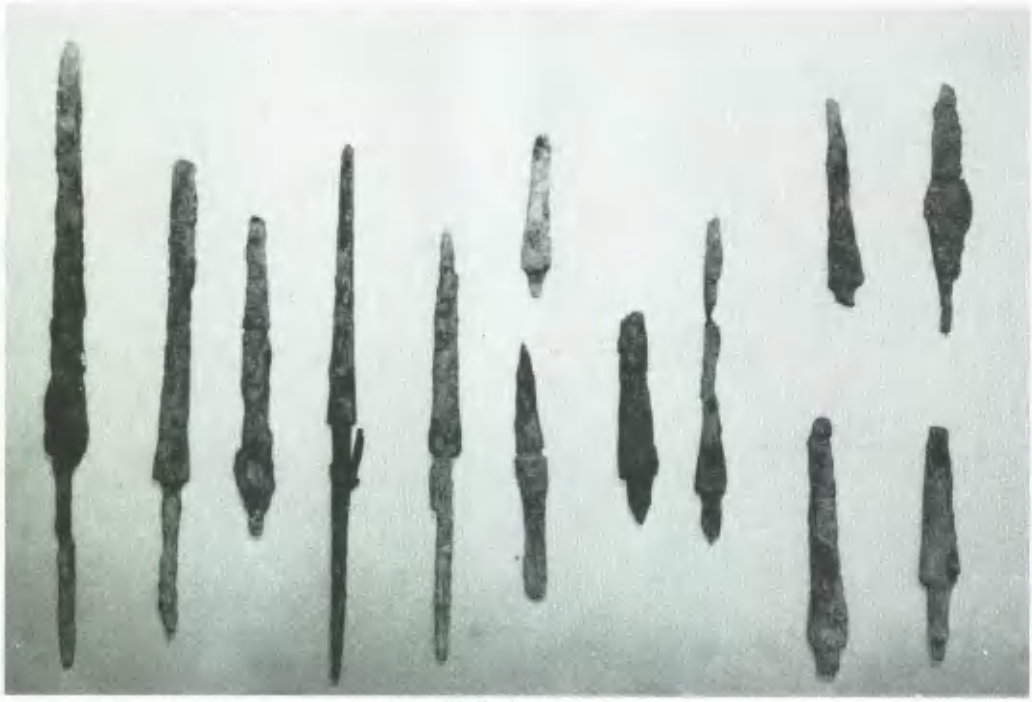
23. 土器溜り２細部その２（東から）

24. 漆塗り椀出土状態（pit 57）（南から）

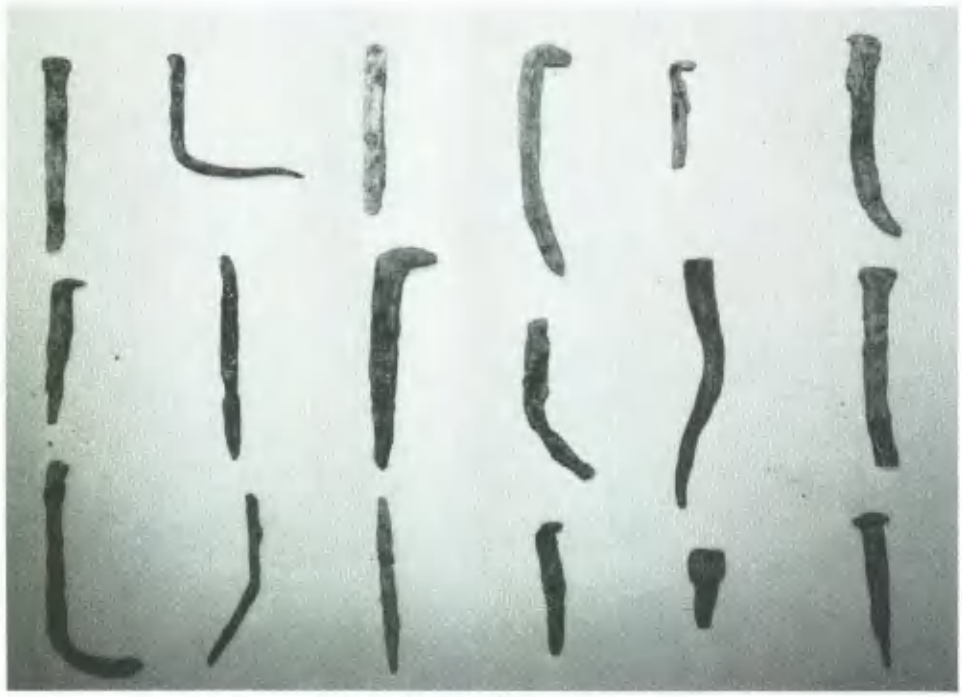
図版12

25. 柱穴内の炭化米検出状態（pit 38）（東から）

26. 柱根の残存状態（pit 49）（東から）

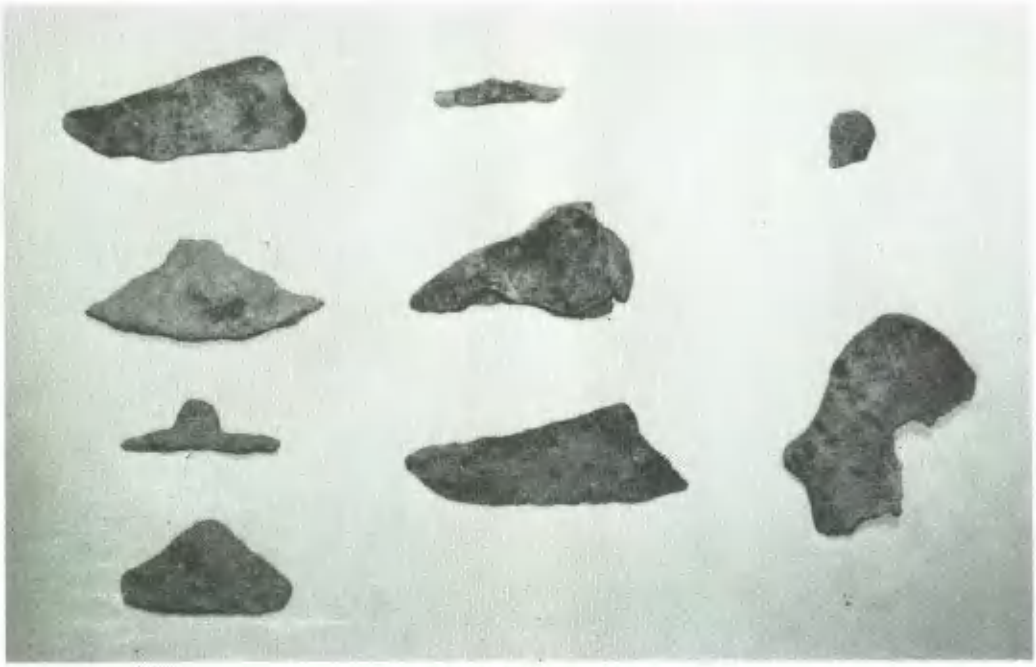


27. 鉄鏃（約$\frac{1}{2}$大）

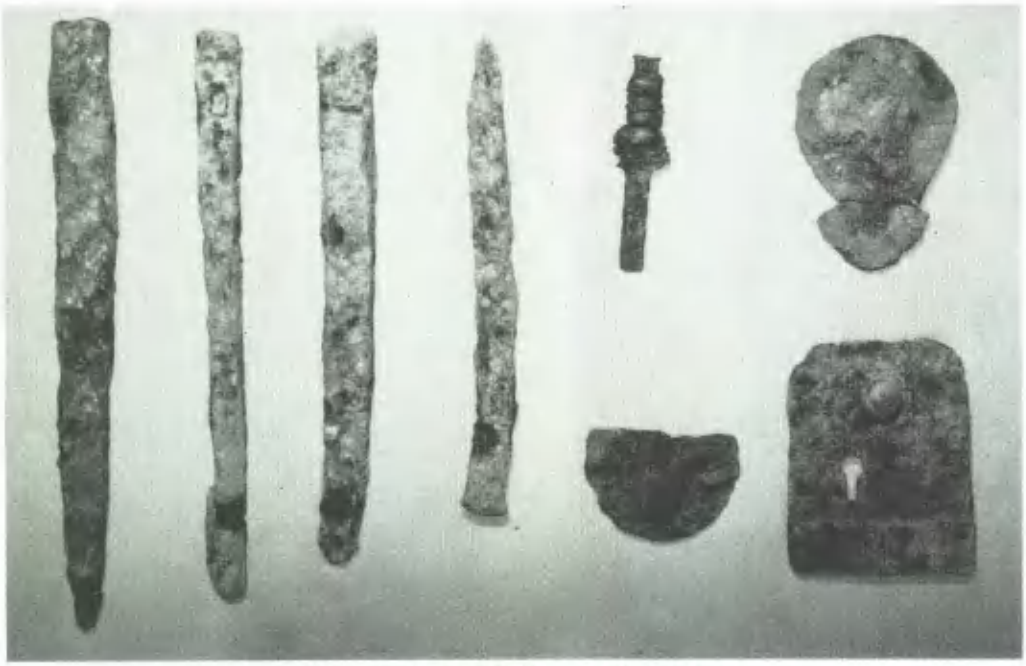


28. 鉄釘（約$\frac{1}{2}$大）

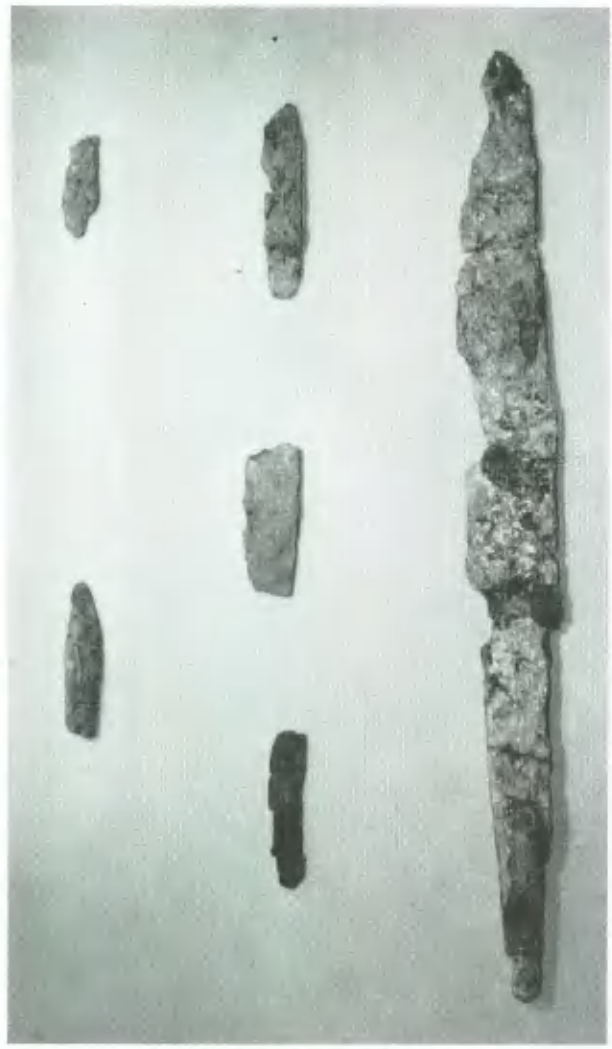
図版14



29. 火打鎌 銅製品 (約$\frac{1}{2}$)



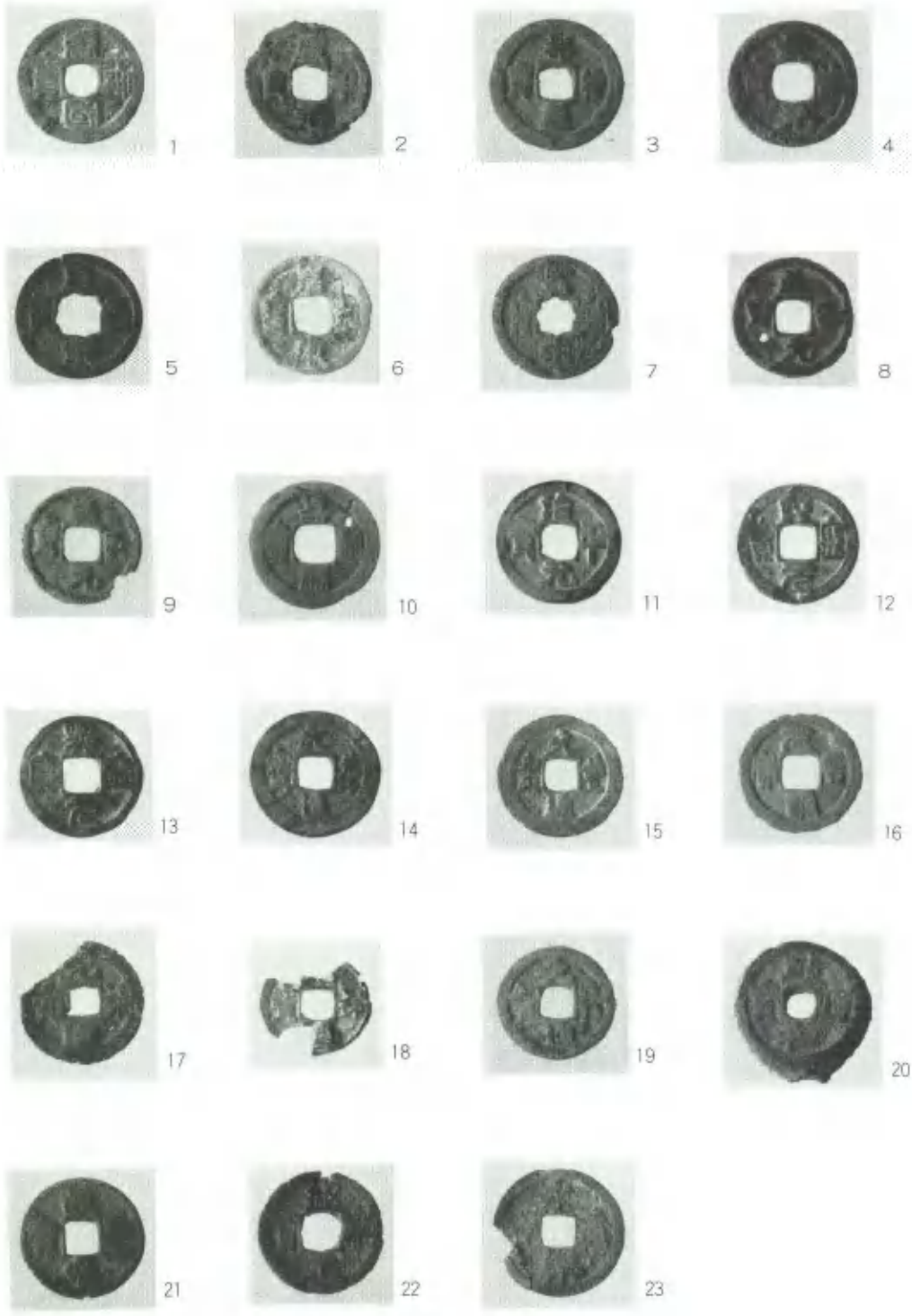
30. たがね 帯金具(?)　錠前 (約$\frac{1}{2}$大)



31．短刀及び刀子（約½大）

32．羽口及び鉄滓（約½大）

図版16



33. 古　銭（約⅔大）

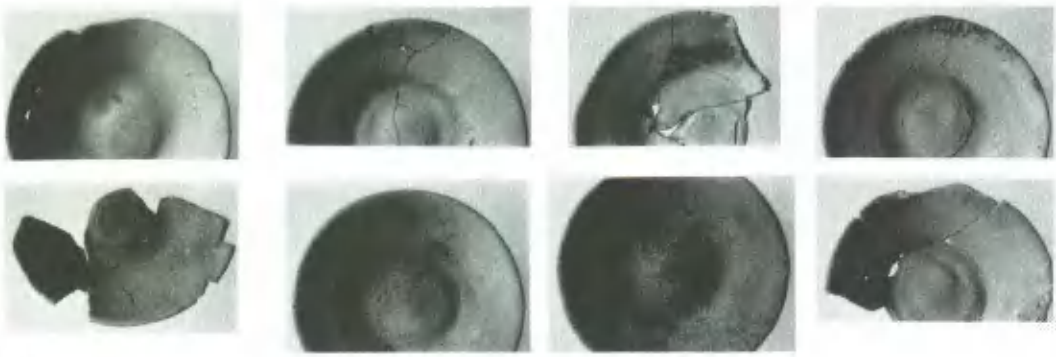
34. 土師器（杯）（約$\frac{1}{2}$大）

図版18

35. 土師器（灯明皿・鍋・すり鉢）（約$\frac{1}{3}$大）

1

2



3

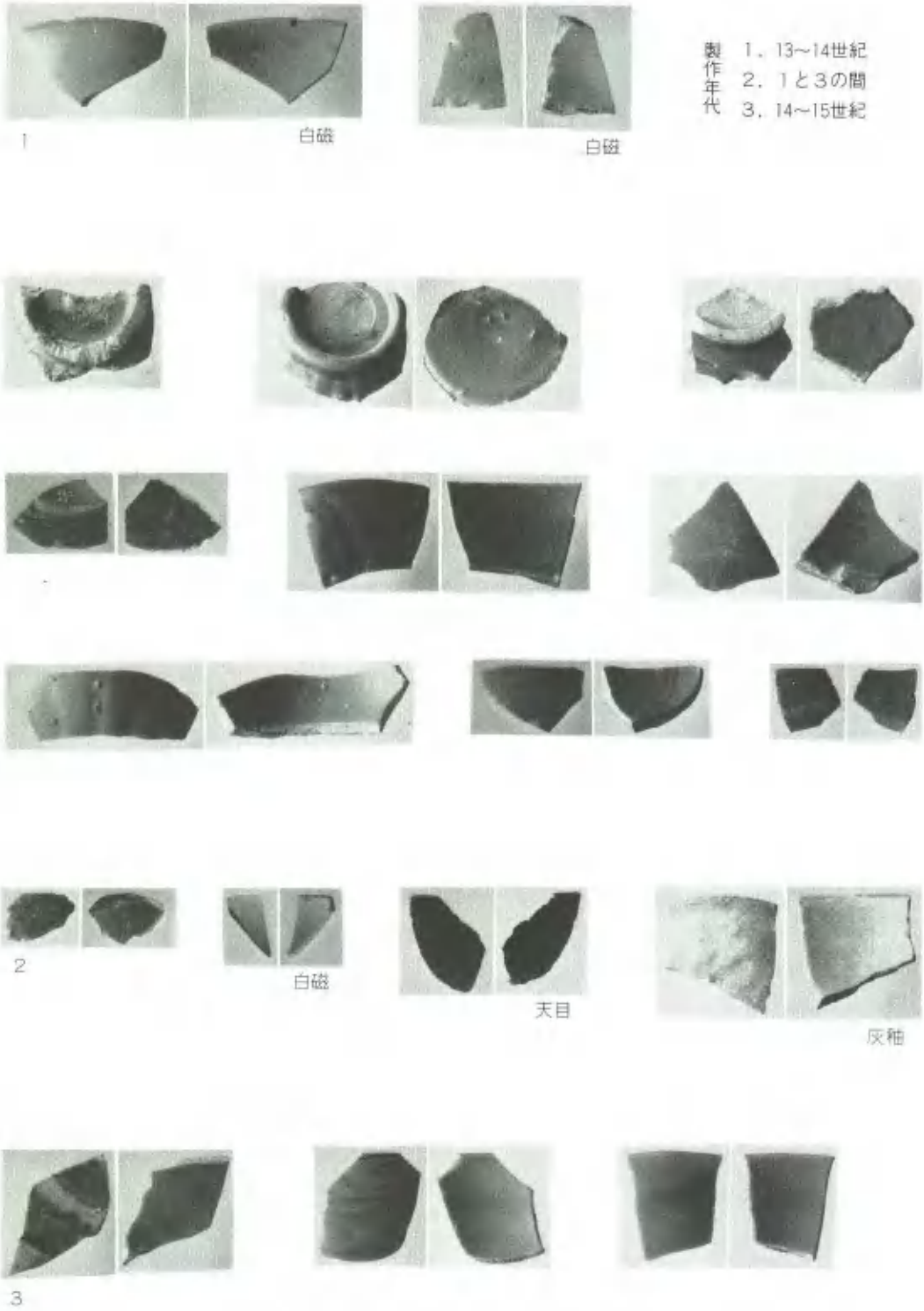
4

36. 土師器　　(杯約$\frac{1}{4}$大)
1. 杯底部　(灯明皿約$\frac{1}{3}$大)
2. 灯明皿底部
3. 杯の灯心燃焼痕
4. 灯明皿の灯心焼焼痕

37. 土　錘 (約$\frac{1}{3}$大)

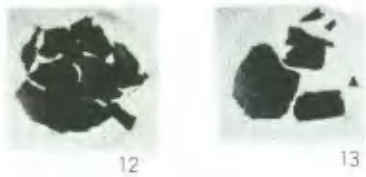
38. 硯 (約$\frac{1}{3}$大)

図版20



39. 青磁・白磁・天目・灰釉（約$\frac{1}{3}$大）

440. 井戸枠固定の釘（約$\frac{1}{2}$大）



41.

1 漆器底部（井戸底部出土）
2 竹筒　（　〃　）
3 〃　（　〃　）
4 丸太　（　〃　）
5 〃　（　〃　）
6 〃　（　〃　）
7 漆塗り椀（井戸埋め土内出土）
8 乾漆　（土器溜り１出土）
9 曲物　（井戸底部出土）
10 ホゾ穴のある板（　〃　）
11 杭　（　〃　）
12 漆塗り椀（井戸放棄時に入れられたもの）
13 〃　（　〃　）
14 〃　（土器溜り２出土）

（１は約$\frac{1}{6}$大，２～14は約$\frac{1}{4}$大）

図版22

1

2

3

42. 砥　石

1

2

3

43. 馬 の 歯

空（そら）　古　墳 (33)

目　　次

第一章　調 査 の 経 過…… 424
第１節　調査に至るまでの経過…… 424
第２節　調 査 の 経 過…… 424
第３節　日　　誌　　抄…… 425
第二章　空古墳の概要…… 426
第１節　立　　地…… 426
第２節　古 墳 の 構 造…… 426
1. 墳　　丘…… 426
2. 堀 り 方…… 429
3. 石　　室…… 429
第３節　遺構・遺物の出土状態…… 430
1. ピ ッ ト…… 431
2. 土　　壙…… 431
3. 棺　　台…… 431
4. 寄　　墓…… 441
第４節　出 土 遺 物…… 441
1. 装 身 具…… 441
2. 鉄　　器…… 443
3. 須 恵 器…… 446
4. 土 師 器…… 463
5. 貝　　殻…… 464
第５節　古墳築造以前の遺物および遺構…… 464
1. 縄文式土器…… 465
2. 弥生時代の遺構と遺物…… 465
第三章　まとめにかえて…… 470

図　目　次

第１図　空古墳付近地形図（北房町教育委員会提供）…… 427
第２図　空古墳付近地形図（日本道路公団作成図より）…… 428
第３図　墳丘測量図…… 429
第４図　石室残存上端および石室掘り方平面図……折り込み１… 433
第５図　石室展開図……折り込み２… 435

第６図　石室断面図……折り込み３… 437
第７図　遺物配置および前庭部遺構平面図……折り込み４… 439
第８図　装身具実測図…… 442
第９図　鉄器実測図１…… 444
第10図　鉄器実測図２…… 445
第11図　須恵器実測図１…… 447
第12図　須恵器実測図２…… 448
第13図　須恵器実測図３…… 449
第14図　須恵器実測図４…… 450
第15図　須恵器実測図５…… 452
第16図　須恵器実測図６…… 453
第17図　須恵器実測図７…… 454
第18図　須恵器実測図８…… 455
第19図　須恵器実測図９…… 457
第20図　須恵器実測図10…… 458
第21図　須恵器実測図11…… 459
第22図　須恵器実測図12…… 460
第23図　須恵器実測図13…… 461
第24図　土師器実測図…… 463
第25図　縄文式土器実測図…… 464
第26図　石室下弥時代遺構平面図……折り込み５… 467
第27図　弥生式土器実測図…… 469

図　版　目　次

図版１　1　発堀前の石室（南東から）…… 473
　　2　石室および堀り方（西から）…… 473
図版２　3　上から見た石室（南東から）…… 474
　　4　羨道および袖（北西から）…… 474
図版３　5　玄室奥の石積み状態（南東から）…… 474
　　6　石室根石の状態（北から）…… 475
図版４　7　石室堀り方および側壁の石積み状態…… 475
　　8　奥壁石積みおよび墳丘の土盛り状態…… 476
図版５　9　遺物の出土状態（玄室奥）…… 476
　　10　棺台および遺物の出土状態…… 477

図版6　11　玄室奥の床面の人骨および須恵器・貝殻（白く写っているもの）…… 478
　　12　人骨および装身具出土状態（土壙4）…… 478
図版7　13　前庭部ピット群…… 479
　　14　羨門根石直下の土壙…… 479
図版8　15　石室下の弥生時代遺構（手前は№176）…… 480
　　16　石室の一部および石室下の弥生時代遺構…… 480
図版9　17　装身具および貝殻…… 481
図版10　18　鉄　　器…… 482
図版11　19　須恵器1…… 483
図版12　20　須恵器2および窯印…… 484
図版13　21　須恵器3および土師器…… 485
図版14　22　須恵器4…… 486
図版15　23　弥生式土器および縄文式土器…… 487

第一章　調　査　の　経　過

第1節　調査に至るまでの経過

中国縦貫自動車道（以下縦貫道という）が岡山県北部を通過することとなり，日本道路公団（以下公団という）は岡山県教育委員会（以下県教委という）に対して，巾1kmの縦貫道予定路線図を示した。これを受けて，県教委は，上房郡北房町教育委員会を主体にして，予定路線内の埋蔵文化財の分布調査を昭和46年度に実施した。その後，昭和47年5月に，公団作成の路線図（一部未買収地を除いて用地巾の記入されたもの）をもとに，県教委文化課職員の手によって用地内の埋蔵文化財の確認調査を実施した。この際に示された路線図では，上房郡北房町大字下呰部字大滝に存在する空古墳は，古墳の一部（周溝があればその一部のみ）が用地内に入っており，古墳の部分は工事からはずれ現状のまま残ることを確認した。

昭和48年度の事業開始にあたって，公団と県教委の間で契約がとりかわされ，空古墳については昭和48年10月に調査（地形測量）を行なう計画がつくられたが，北房町大字呰部字植木の植木遺跡の調査が同年10月から実施されることとなり，これとの関係から，空古墳の地形測量は，土地所有者の滝上要次郎氏の承諾を得て，用地外も含めて古墳全体の地形の測量を行なうことができた。

この時点において，公団（津山工事事務所）に対して『工事現場のすぐ近くに古墳があり，工事中に破壊・盗掘等を行なわないように工事関係者に充分指導されたい』旨申し入れた。

ところが，昭和50年3月になって，橋脚工事に伴なう設計変更で用地拡巾が計画され，この拡巾によって空古墳の墳丘の大部分が用地内に含まれることになった。橋脚工事のために，この古墳を保存することは不可能であり，拡巾部の用地買収が済んだ段階で，発掘調査に着手するという契約が，公団と県教委との間で結ばれた。

昭和50年6月に結ばれた発掘調査契約書に基づいて，空古墳の発掘調査を昭和50年7月15日に開始した（調査担当　田仲満雄）。

第2節　発掘調査の経過

昭和48年9月19日から25日までの間，公団の当初計画に基づいて草刈りおよび地形測量を実施した。公団の打った中心杭（ＳＴＡ456+80）を仮原点として20cm間隔に等高線を入れて測量図を作成した。

昭和50年4月に，橋脚部分の設計変更により道路建設用地が拡巾され，古墳の保存は不可能となった。このために，公団と県教委の間で発掘調査に関する契約が取りかわされ，7月15日に発掘を開始した。2～3回盗掘を受けていたが，石室内に落ち込んでいる土の除去と墳丘の表土剝ぎを並

行して実施した。盗掘は床面には達してなく，７月19日には副葬遺物はその全様を現わした。金環・勾玉・管玉・鉄器・須恵器・土師器など150点を越えるものが存在する。

７月23日に遺物を取り上げる。副葬鉄器に刀および馬具が含まれてなく，鑿状鉄器が含まれている。遺物の半分以上は，数次にわたる追葬の際に玄室の奥に寄せ集められたものである。副葬品を寄せ集めた部分の最下部（床面上）には，かなり大きな二枚貝の貝殻の破片５個があった。これらは注目すべき事柄であろう。

７月25日からは前庭部の調査を行なった。前庭部には，径20～35㎝深さ25～40㎝の柱穴状のピット群と，不整形な深さ30㎝のやや大型のピットを確認した。これらのピットの中には須恵器が入っていた。その須恵器の中には石室内から出土した破片が接合するものがあり，これらピット群は石室内の埋葬と同時につくられたことを確認した。これらピット群は埋葬時のいわゆる墓前祭に伴なう遺構と考えられる。

８月１日以降，墳丘および石室の解体を行なった。墳丘の盛り土中から縄文時代早期の楕円形押し型文土器片が５片出土した。また，石室直下には，弥生時代中期の pit（径５～30㎝，深さ20～25㎝）群と，側壁根石直下に石によってつぶされた弥生式土器１個（遺物番号 No. 176）を検出した。縄文時代の遺構は全く存在していない。弥生時代の遺構は柱穴であろうが，建物等まとまりのあるものは確認できなかった。

８月19日，補足調査を行ない，調査を終了する。８月21日～９月25日の間，津山収蔵庫において遺物の復元・実測・写真撮影，図面のトレースを実施した。遺物は昭和50年10月31日現在，津山収蔵庫に保管している。

第３節　日　誌　抄

昭和48年９月19・20日　墳丘全体の草刈りを行なう。

９月24・25日　ＳＴＡ456＋80を仮原点として地形測量を行なう。

昭和50年７月14日　器材を搬入して，明日からの調査にそなえる。

７月15日　墳丘の草刈り後，鍬入れ式を行なう。出席者は，日本道路公団・岡山県教育委員会・施行業者の各関係者。

７月16～18日　墳丘表土剝ぎおよび石室内落ち込み土の除去を行なう。18日には副葬遺物が姿を現わしだす。

７月19～22日　墳丘盛り土の状態を調べるために墳丘を縦横断するトレンチを掘り下げる。石室内の除土・清掃に引き続いて，石室内の写真撮影および実測を行なう。

７月23日　遺物を取り上げ，近くの谷川で水洗いする。この日は見学者が多数あった。

７月24・25日　石室内を清掃する。玄室奥の副葬品が寄せ集めてあった部分の最下部（床面）に貝殻が副葬品と共に残存していることを確認する。

７月25～30日　前庭部の二次堆積土および表土を除去する。

8月1～8日　墳丘の解体を行なう。墳丘の解体と並行して，墳丘の縦横断面・石室の実測を行なう。

8月8～11日　前庭部の遺構の掘り下げを行ない，実測する。

8月9～12日　石室の取りこわしを行ない，石室下の弥生時代の遺構の検出・掘り下げ・実測を行なう。

8月18～19日　調査の補足を行なう。

8月20日　津山収蔵庫へ器材を運び，調査を終了する。

8月21～9月25日　津山収蔵庫にて，遺物の復元・実測・トレース・写真撮影を行なう。

第二章　空古墳の概要

第1節　立　　地

空古墳は，行政的には，岡山県上房郡北房町大字下呰部字大滝2942番地および2945番地に存在する。

この古墳は，呰部川（備中川の支流，備中川は東に流れて真庭郡落合町で旭川に合流する）の西岸の「豊永台地（石灰岩台地）」東斜面の中腹から東にのびる小さな尾根の稜線から少し南に下がった斜面にある。

豊永台地の東斜面は，石灰岩地帯特有の急崖となっており，安田の小田鼻前方後円墳，空古墳，空2号古墳，蟹川古墳群（4基），植木城址が知られているだけで遺跡の数は少ない。一方，東側の西向き斜面には緩斜面が丸山・上合地に存在し，ここには丸山古墳群・上合地古墳群などの古墳や遺物散布地もかなりの数のものがわかっている。また，呰部川も豊永台地のすそよりを流れており，水田の面積も西岸は東岸の5分の1ほどしかない。

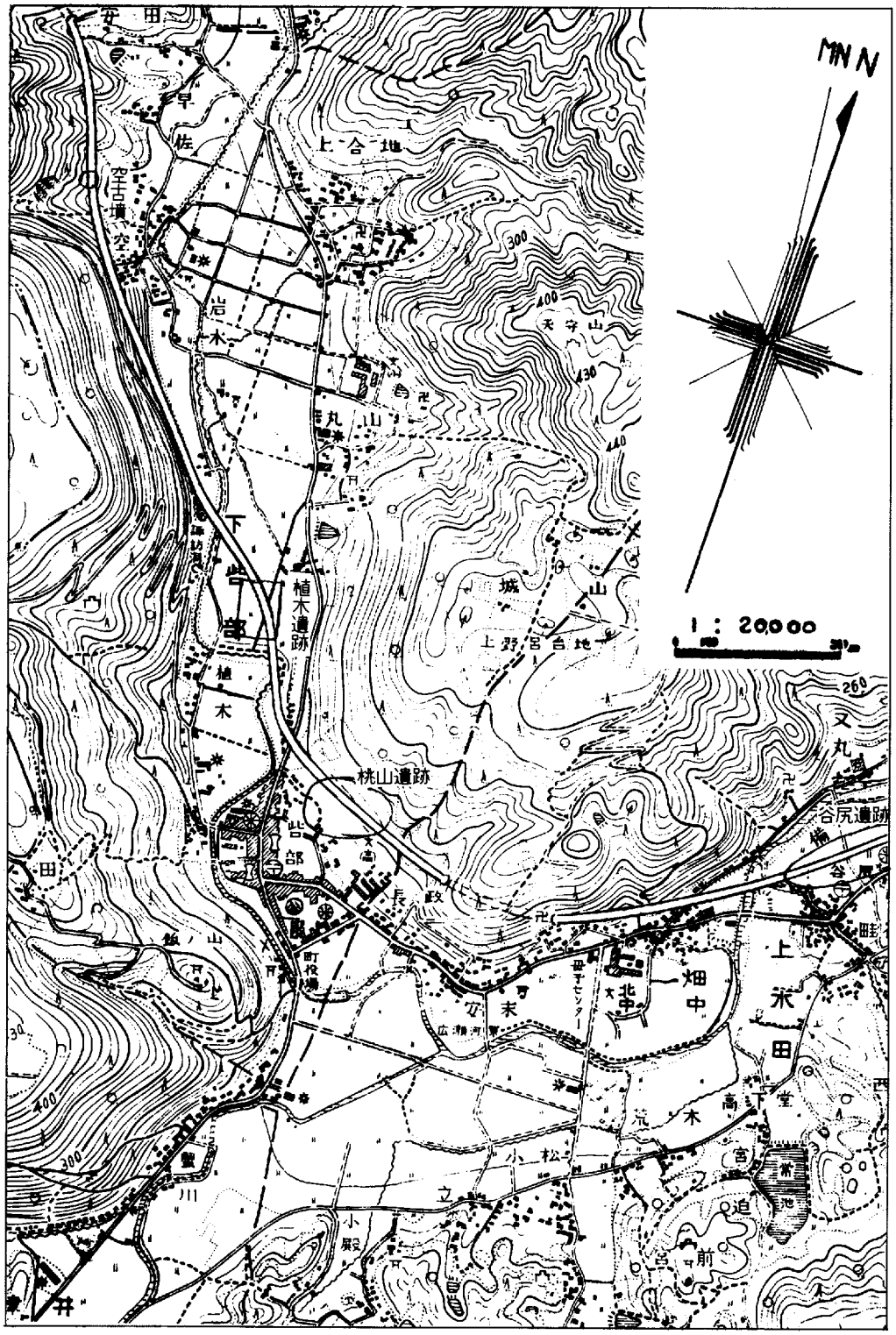
呰部は，東は備中川を下ると旭川へ，南は山越えして高梁川へ通じる交通の要にあたる所に位置している。

空古墳は，呰部の北2.5kmの所にあり，この他に北房町内の縦貫道用地内では，植木遺跡（中世）・桃山遺跡（縄文～平安時代）・谷尻遺跡（縄文～中世）・備中平（ヒラ）遺跡（縄文～中世）の調査が行なわれた。

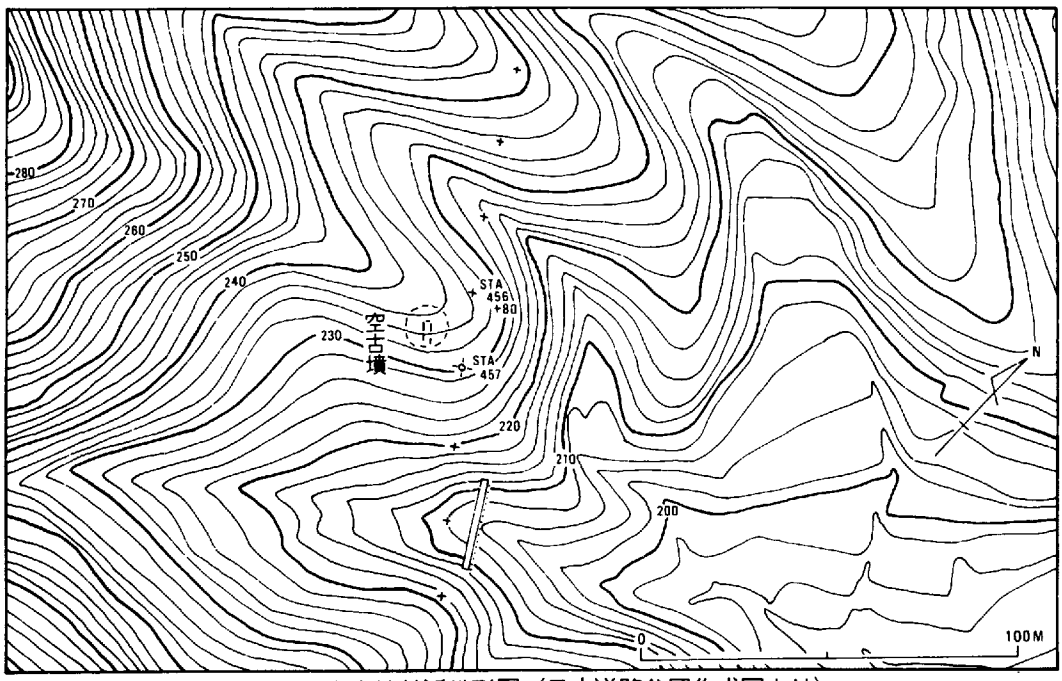
第2節　古墳の構造

1. 墳　　丘

この古墳は，斜面に築造されているために墳丘の流失はかなりひどく，天井石・石室が露出して



第１図　空古墳付近地形図（北房町教育委員会提供）



第2図　空古墳付近地形図（日本道路公団作成図より）

おり，天井石は奥２枚を残すのみで他のものは斜面の下方に転落していた。

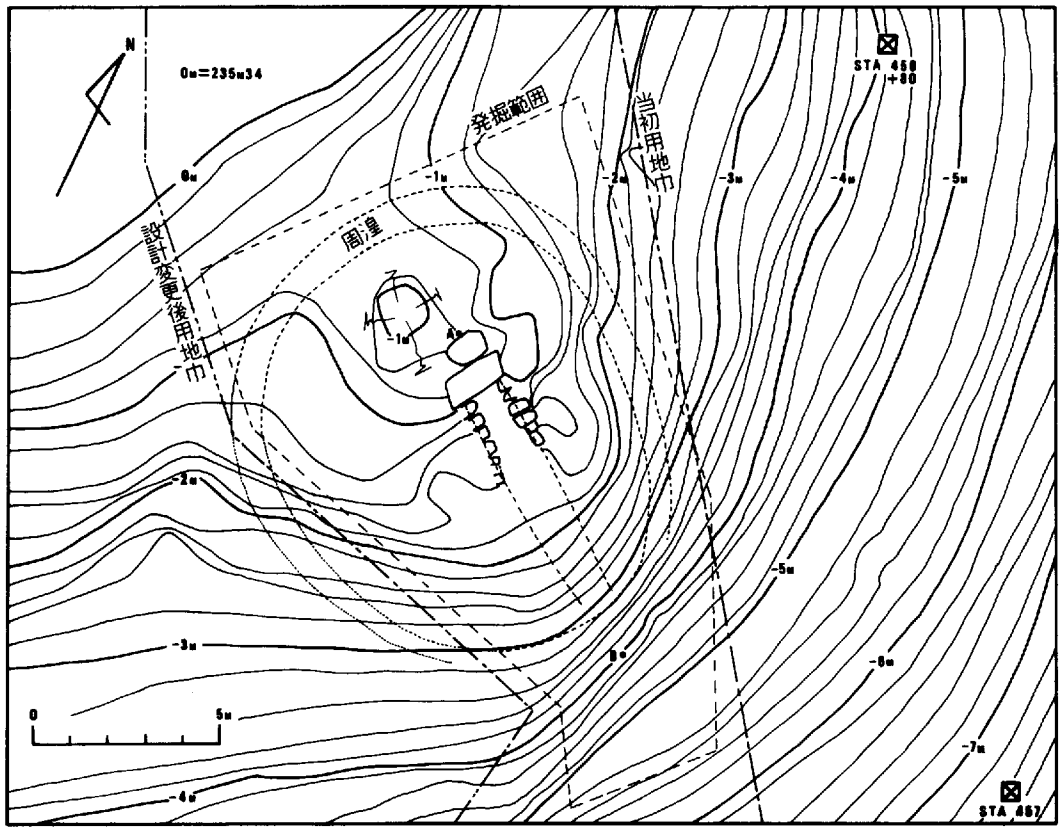
旧地表から，奥行10m，巾３～４m，奥の深さ1.5m のU字形の床面のほぼ平担な掘り込みを行ない，石室を築造している。U字形の掘り方と側壁の石との間は，石を一段並べるごとにその高さまで土を入れて埋めている。

掘り方より上位の墳丘盛り土の方法に，石室の側方と奥壁の後方とでは，若干の差が認められる。側方では，石室の高さの約半分の高さまではほぼ水平に石積み一段ごとに土を入れているが，それより上方においては石積みを行なっても土を入れず，石積みの最終段階において一度に裏ごめを行なっている。一方，奥壁の後方では，奥壁の石を一段積むごとに土をほぼ水平に積んでおり，それは墳丘外となる部分（周湟の外側）にまでおよんでいる。天井石より上位の盛り土の様子は，封土流失のため不明である。

こうした盛り土の方法は，石室の上に天井石を載せる方法を考える手段を示唆するものであろう。

地形に制約された結果と思われるが，墳丘を完成した後に周湟を掘っている。

墳丘の大きさは，東西11.5m，南北推定９mを測り，やや楕円形を呈し，高さは現存0.5～1.5mを測る。周湟は，巾1.0～1.5m，深さは0.4～0.5mを測り，斜面に沿って傾斜している（第２・５図）。



第3図　墳丘測量図

2. 掘　り　方

石室を築くための掘り方は，地表面を整形することなく，地表面に直接掘り込みをつくっており入口巾2.5m，奥行10m，最大巾４mを測るU字形を呈するものである。床はほぼ平担になっていて，奥の深さ1.5mを測る。この掘り方の長軸の方向は斜面に直交していて，その方位はN—54°—Wを測る（第３図，第３図は，石室掘り方の図に，発掘前の石室残存上端部の平面図および石室床面の平面図を加えたものである）。

3. 石　　室

第３・４図に示すように，封土流失と共に天井石の大部分および側壁の一部は転落していたが，石室の全長は8.9m，玄室の長さ4.2m，玄室の高さ2.1～2.15m，玄室奥の巾1.65m，玄室の最大巾２m，玄道口の巾1.5m，玄室天井巾（現存部）0.7m，袖は右片袖で袖の巾0.3m，羨道の長さ4.7m，羨道の最小巾0.9m，羨道口の巾推定1.4mを測る。羨道の高さは，天井石転落のため計測し得ない。

玄室の床面はやや舟底形を呈し，側壁は持送り積みとなっている。羨道の入口はややひろがって

いる。玄室の側壁の根石は，石の一番広い面を壁として利用しており，側壁の他の石は小口積みになっている。側壁の石の奥行は0.4～0.6mのもので，根石は他のものに比し少し大きい石である。羨道は，玄室のように大きな石を根石に利用していない。側壁はどの部分にも控え積みはなされていないが，中に長さ0.9～1.1mと少し長いものが入れてある。これは控え積みと同様の効果を持つものである。持ち送り積みでしかも長さが0.4～0.6mのために，側壁全体の重心は根石から完全にはずれている。その重心のずれは天井石でささえられている。

奥壁の最下段の石をすえるために床面に深さ0.2mの窪みを掘っている。この石の奥行は0.65mを測り，掘り方いっぱいに置かれている。

第3節　遺構・遺物の出土状態

石室内には床面から1.0～1.5mの土砂が落込んでいた。この落ち込み土を除去して，装身具15，鉄器39，貝殻片5群，須恵器91，土師器4，（弥生式土器3）を検出した。これらの大部分は，追葬（複数）の際に玄室奥に片付けられたものである（寄せ墓）。当初の埋葬は，箱式石棺か棺台をもつ木棺葬であったと考えられるが，その石材を利用して玄室の奥壁寄りに二つの区画をつくっていた。西隅の区画（玄室主軸方向0.3m×主軸直交方向0.7m深さ0.3m）内にはぴっしり人骨が集められており，頭蓋骨1・骨盤1・太腿骨6・背骨数個・肋骨10数本・歯牙15本・下アゴ1を確認したが，その他の骨は識別不能となっていた。この骨溜りの中から金環1・鉄器8個が伴出した。北隅の区画は1.0m×0.9mの大きさで，半数以上の遺物が集められていた。この遺物群の最下部にはかなり大型の二枚貝の貝殻が5群存在した。これは最初の埋葬の供え物であろう。

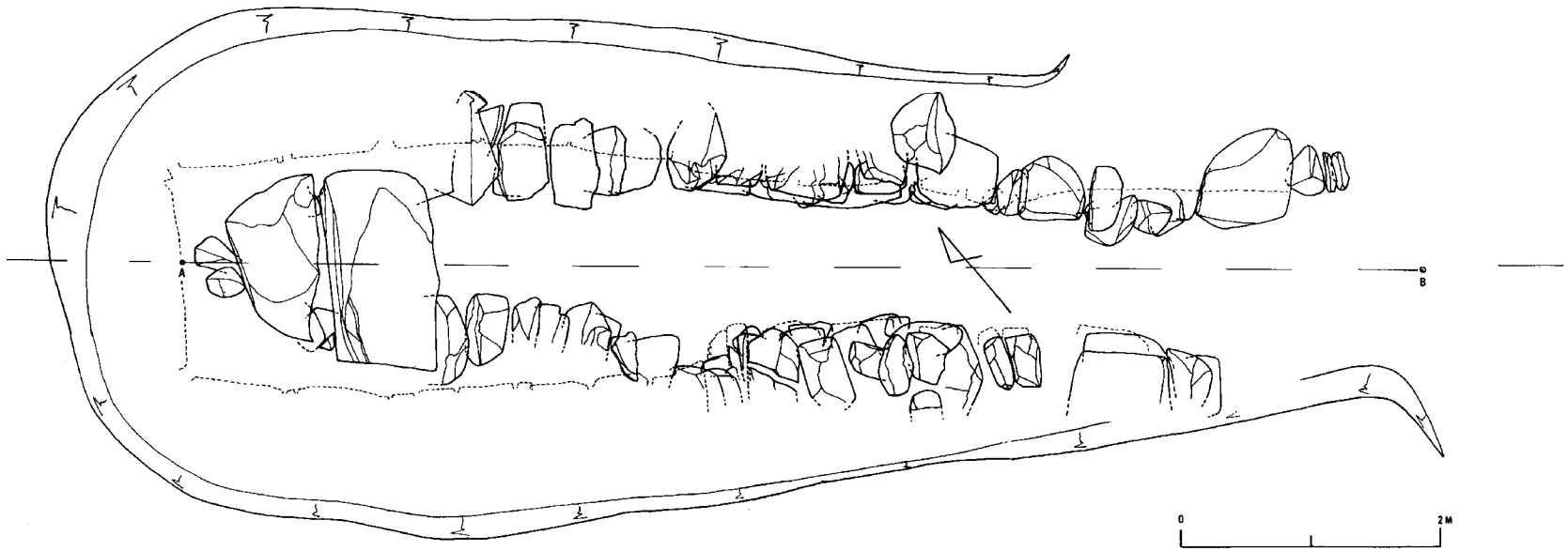
石室中央には，棺台と考えられる奥から1列が2個・3個・4個から成る石の列が並んでいる。いずれの石も上端はほぼ水平で，その高さは床面から16～18cmを測る。木棺を置いたと思われるが，釘の出土は見られなかった。

羨道部には，切り合い状態で2つの土壙があった。土壙4が古く土壙5の方が新しい。土壙4には人骨（大人および幼児）・装身具が残っていたが，土器（弥生式土器は除く）は伴出しなかった。

遺物の中には，寄せ墓部分出土の破片と玄室内出土の破片が接合するものや，前庭ピット内出土のものと玄室内出土あるいは寄せ墓部分出土のものが接合する例がある。前者は，追葬のために石室内を片付けたときに壊されたものであろう。後者は，葬送儀礼の一端を知る手がかりになろう。

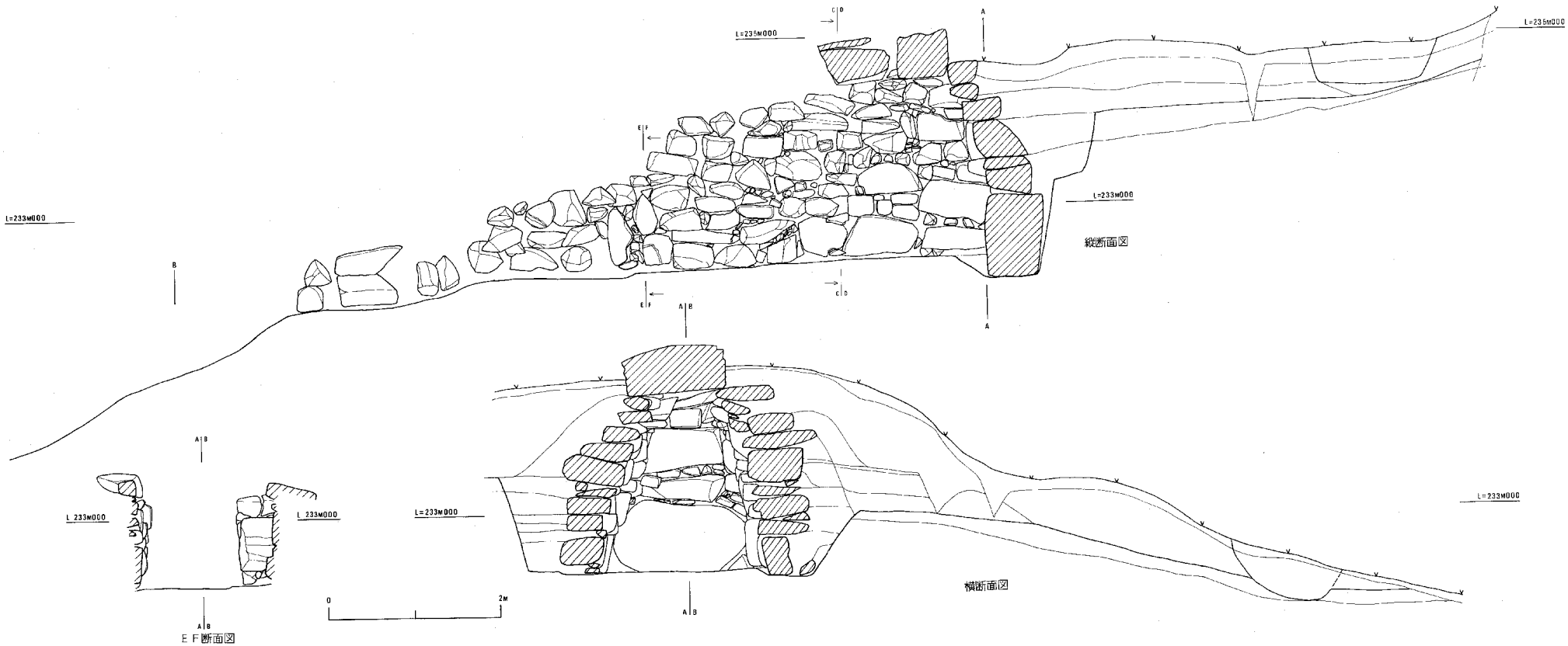
前庭においては，表土（厚さ0.3～0.4m）を除去するとすぐに地山面が現われた。地山面に土壙および柱穴状ピットが検出された。これは墓前祭等葬送儀礼に伴なう遺構であろう。また，地山面で3個の鉄器を検出し，表土層出土の破片と寄せ墓部分出土の破片が接合した例がある。これらは，石室内を片付けたときに投げ出されたものであろう。

鉄器の一つ（遺物番号№50）は石室解体中に側壁の石の間（袖部――玄室と羨道の境）から出土した。

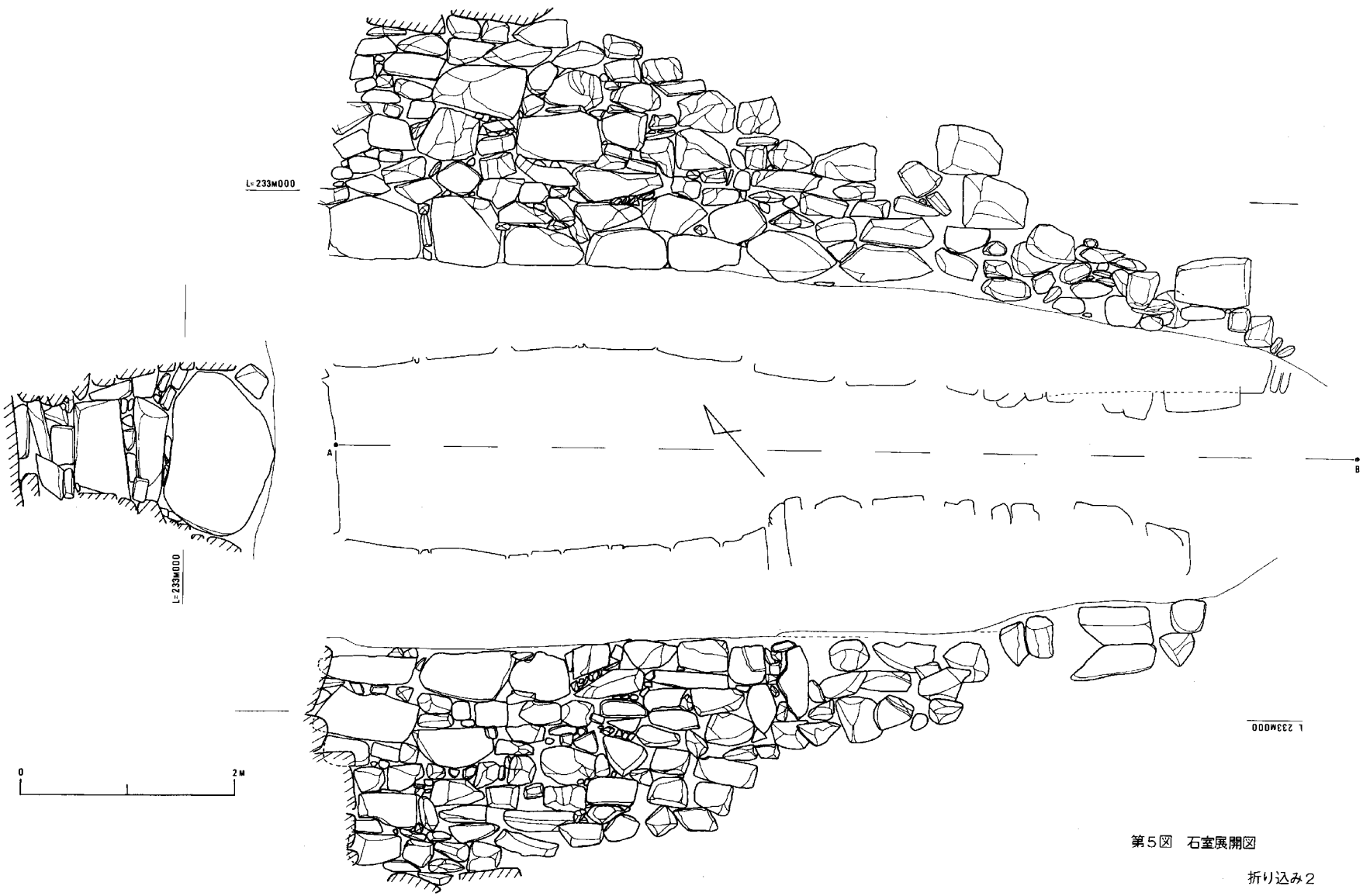


第４図　石室残存上端および石室掘り方平面図

折り込み１

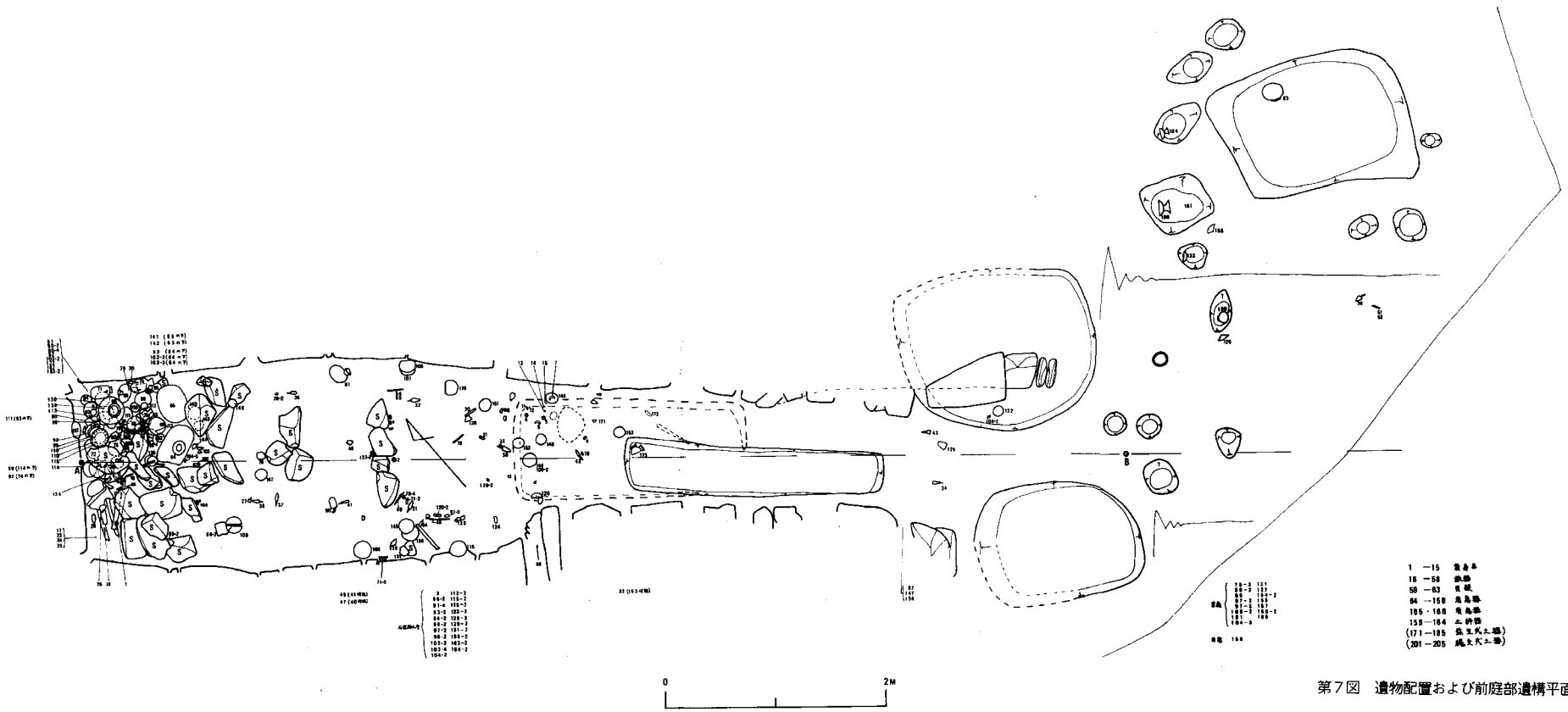


第6図　石室断面図
折り込み3



第5図　石室展開図

折り込み2



第７図　遺物配置および前庭部遺構平面図

折り込み４

1. ピ　ッ　ト

石室前庭部は，第５図の縦断面図でわかるようにかなり傾斜している。この斜面は黄褐色土によって形成されており，この部分で暗黒褐色粘質土の詰まった柱穴状のピットを14個確認した。形は円形・隅丸方形などと一定してなく，径は15～60㎝で，深さは15～35㎝を測る。ピットの内８個は土壙３を取りかこむように掘られている。また，４個のピット内には，須恵器・土師器が１ないし２個入っていた。遺物№104（須恵器の高杯）は，ピット内出土であるが，これの脚の破片は石室内より出土した。いずれの遺物も石室内の埋葬と同時に入れられたものである。遺物のあるピットとないピットを埋める土に差異は認られないので，埋葬とほとんど同じ時期に掘られ，埋まったものであろう。土壙３にも須恵器が入っており，これを埋める土はピットのそれとまったく同じ質のものである。

前庭部のピット群および土壙３は，葬送儀礼（墓前祭等）に伴なう遺構と考えられる。

2. 土　　壙

土壙は，羨道入口の側壁下に２，前庭部に１，羨道部に２個を確認した（第６図）。

羨道口側壁下の土壙１は，1.7m×1.3m，深さ0.3㎝を測り，中に須恵器の小片が入っていた。この土壙には暗黒褐色土が詰まっており，土壙１が埋まってから羨道側壁の石を築いている。

土壙２も，土壙１とほぼ同じ状態である。ただし，この上には側壁の石は存在しない。側壁の一部が転落したものと思われる。大きさは1.5m×1.1m深さ0.35mで，遺物は存在しない。

土壙３は，前庭部において，柱穴状ピット群にとりかこまれている形で検出された。大きさは1.7m×1.1mで，ほぼ方形に近い形をしており，深さは0.5mを測る。中にほぼ完形に近い短頸壺が１つ入っていた。この須恵器も石室内の遺物と同時期のものであり，ピット群と共に埋葬に伴なう葬送儀礼の遺構であろう。

羨道部には，土壙４・５が存在する。どちらも石室の床面を長方形に掘り込んでいる。土壙４は2.2m×0.9mとややの巾の広いものであるが深さは５㎝しかない。この土壙の中には，人骨・装身具（勾玉・金環）および弥生式土器片が入っていた。人骨は羨道入口側に太腿骨があり，玄室口近くに大人の頭蓋骨・背骨・歯および幼児の歯がいっしょに残っていた。この土壙には大人と幼児が合葬されたものであろう。装身具は，玄室口近くの一群の骨の周辺で検出された。この土壙はその後，石室の床と同一レベルまで暗褐色土で埋められ，その上には追葬の際の副葬品が載っている。土壙４が埋められた後に，羨道西壁沿いに，長さ2.2m，巾0.3m～0.5m，深さ0.3mの土壙が掘られた。これも土壙墓であろうが，副葬遺物は存在しない。ただ，この土壙５を掘ったときに出土したと思われる弥生式土器の破片（石室直下に弥生時代の遺構がある）が，土壙の北隅においてある。土壙５は，土壙４の太腿骨を切って掘っているので，土壙５は土壙４よりも新しい。

3. 棺　　台

棺台と考えられる石は，石室中央にあって石室主軸に直交する形で３列並んでいる。いずれも石

灰岩で，奥から２個・３個・４個で形づくられており，巾はそれぞれ0.7m・0.7m・1.0m，床面からの高さは16～18cmを測る。間隔は0.75mを測り，長さは1.7mである。成人用の木棺が載せられていたと思われるが，釘は検出されなかった。棺台の奥から３列目の石の羨道側床面において金環（№２）を検出した。

4. 寄　　墓

石室内の最初の埋葬は，箱式石棺かあるいは棺台をもつ木棺葬であったと思われるが，追葬のときにこれらを奥に片付けている。片付けるときにこれらの石を利用して玄室の奥に二つの区画をつくっている。

西隅の区画は，石室の主軸方向0.3m×主軸直交方向0.7m・深さ0.3mを測り，二方は石室の奥壁・側壁を利用しており，この区画の中には人骨が集められていた。この区画の中は，骨でいっぱいになっていたが，形態のわかるものは頭蓋骨１・下顎骨１・骨盤１・太腿骨６・背骨数個・肋骨10数本・歯15本で，その他の骨は織別不能な骨片あるいは土壌化していた。識別した骨はいずれも成人のものであり，太腿骨から考えて３～６人あるいはそれ以上の埋葬遺体を寄せ集めたものと考えられる。これらの遺体が片付られるときに，副葬品の大部分は東隅に集められ，一部は石室の外にかき出されている。西隅の骨溜りの中から，金環１個（№１）・鉄器８個が伴出した。

北隅の区画は，石室の主軸方向1.0m・主軸直交方向0.9mの大きさで，追葬のときに以前の埋葬の副葬品の大部分をこの区画内に集めている。この区画も二方はそれぞれ奥壁・側壁を利用しており，羨道側は２個の横瓶を置いて区画としている。奥壁よりの所では，下から順に93・99（共に須恵器高杯）・159（土師器坩）・110・116（共に須恵器杯）が重なっていた。64・65は横瓶で，64は上向き，65は下向きになっており，102—2・103—3（共に杯片）は64の下にあり，141・142（共に杯）は65の下から出土した。これらの遺物の最下位（床面）において，５群の貝殻片を検出した。これらの貝殻片（写真17）は，いずれも海水産の二枚貝の破片で，丁番を欠損しているので殻の高さや巾は不明であるが，かなり大型のものである。最初の埋葬時の供え物で，供え物として海からわざわざ運んで来たものであろう。

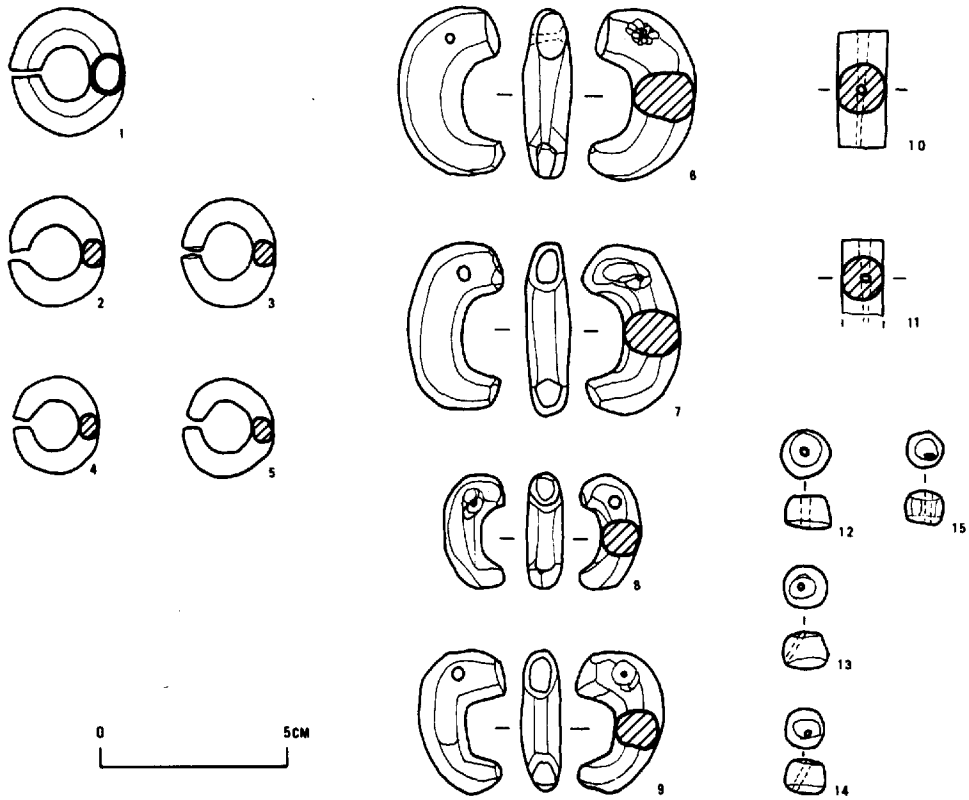
第4節　出　土　遺　物

1. 装　身　具

装身具として，金環（銅地金メッキ）５・勾玉（赤メノウ製）４・管玉（青メノウ製）２・練り玉（土製）４の計15点を検出した。

金　環（第８図の１～５・写真17）

１は，玄室奥の骨溜りの中から出土した。径９㎜×11㎜の銅管を曲げて環とし，両端部分は銅の円板をはめてふさいでおり，金メッキを施こしている。30㎜×34㎜の楕円形を呈する。緑錆が全面



第８図　装身具実測図

をおおい，金メッキ部分はわずかに残っているのみである。

２は，棺台の側から出土し，３は石室の排土中から採集したものである。この２つはセットであったと思われる。銅地に金メッキしたもので，銅線（径６～７㎜）を曲げて環としている。どちらも径26㎜×29㎜の楕円形を呈し，かなり金メッキ部分が残っている。

４・５は，共に羨道に存在する土壙４から出土した。この２つもセットであり，径５～７㎜の銅線を曲げて環とし，金メッキを施している。どちらも径24㎜×26㎜の楕円形を呈し，かなり金メッキ部分が残っている。あまり緑錆はふいていない。

勾　玉（第８図の６～９・写真17）

６～８は，土壙を埋めた後の埋葬に伴うものであり，９は土壙４の埋葬に伴うものである。６～９共に赤メノウ製で，６・７は原石の心に近い部分を利用して作出しており，８・９は皮に近い部分から作出されている。

６・７はほぼ同じ大きさで，長さ45㎜・巾25㎜・・厚さ13・12㎜を測り，片側から穿孔されており，裏側の孔のまわりは削って仕上げられている。

８は，６・７より小型で，長さ30㎜・巾16㎜・厚さ10㎜を測る。６・７とは反対側から穿孔されている。

9は，6・7と8との中間に入る大きさで，長さ39㎜・巾24㎜・厚さ11㎜を測る。6・7と同じ側から穿孔されている。

管　玉（第8図10・11・写真17）

10は，6～8と一連の出土であり，11は9に伴なう（土壙4）ものである。共に青メノウで作られている。

10は，一部欠損しているが，ほぼ完形に近く，長き31㎜・直径13㎜を測る。片側から穿孔していて，孔の大きい方（穿ち初め）はその径3.5㎜，小さい方は径1.5㎜である。

11は，欠損のため全長は不明であるが，現存長20㎜・直径11㎜を測り，穿ち初めの孔の径は3.5㎜である。

錬り玉（第8図12～15・写真17）

錬り玉は4個出土した。いずれも土壙4から出土し，9・11と一連のものと考えられる。高さは9～10㎜・やや不整形であるが径10～12㎜で，上下に貫通する径1.5～2.0㎜の孔をあけている。13・14の孔は上面から下面に貫通するのでなく斜めにあけられ，側面に口をあけている。

2. 鉄　　器

鉄器は，前庭部・羨道部・玄室内および寄せ墓の各部分から，合わせて39点出土した。鏃24，刀子6，ノミ5，その他4に分けられる。

鏃（第9図・第10図46～52，写真18）

28は，両丸造りの広鋒式広根である。巾33㎜，現存長76㎜，厚さ2.5㎜を測る。

29～34は，両丸造りの広根である。茎の断面が円形のもの（29）と方形のもの（30・31・33）とがある。広根部の巾は28～33㎜，長さ50～63㎜，厚さ3～4㎜，茎の長さは50～55㎜を測る。

35・36は，両丸造りの圭頭形広根である。広根部の長さは35が68㎜，36が56㎜，巾は共に30㎜を測る。茎の長さは，欠損のため不明である。

37～39は，両丸造りで抉りのある広根である。37・39は広根部の長さ62・65㎜，巾は35・32㎜を測るが，茎は欠損のため長さは不明である。38は，広根部の長さが50㎜で抉りが少し大きい。茎の長さは50㎜，全長121㎜である。

40～43は，方頭斧箭式の広根である。方頭の巾は30～32㎜，広根部の長さ65～72㎜を測り，41の茎の長さは推定36㎜，42では65㎜である。

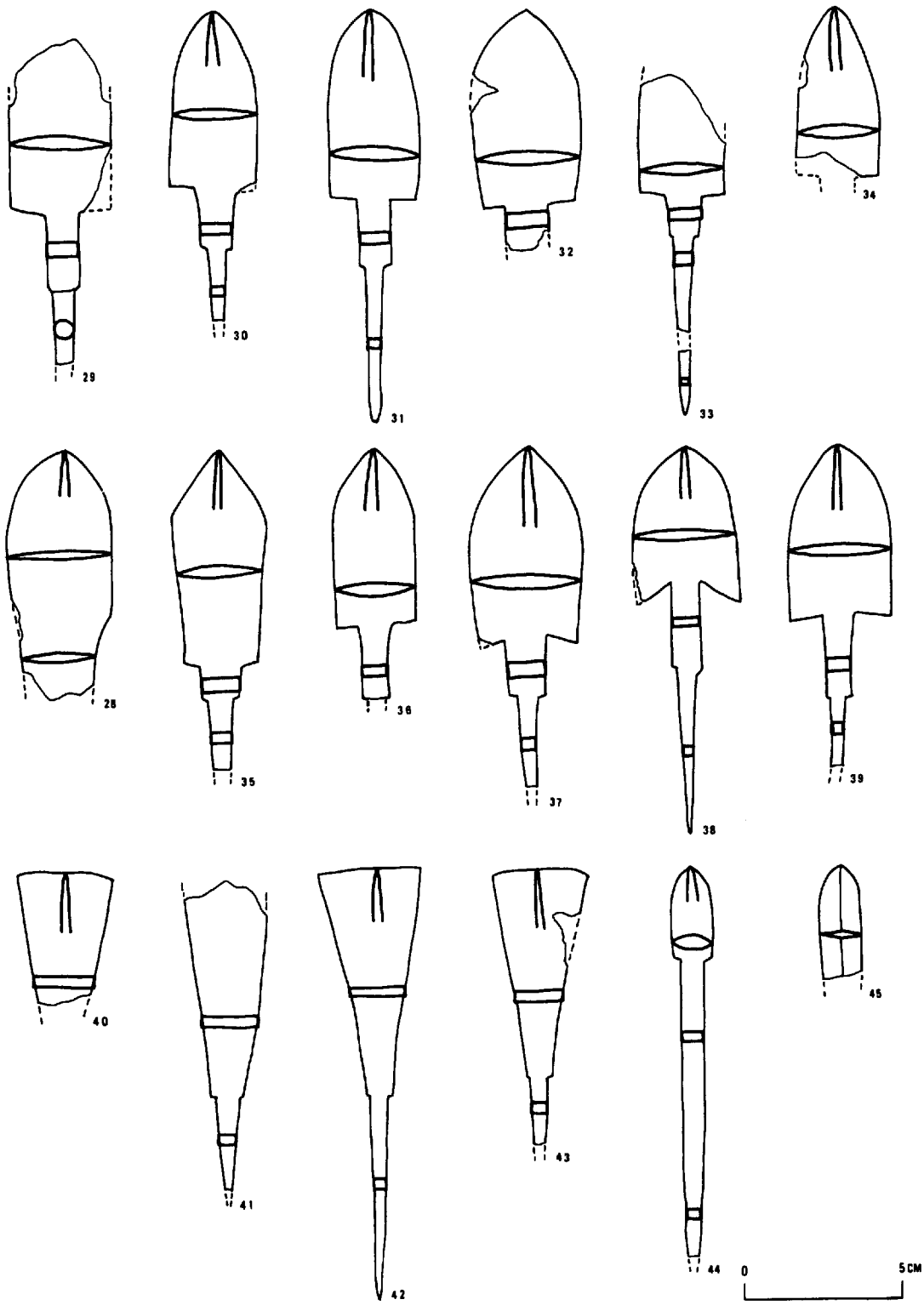
44～52は鏃箭式の細根である。44は両丸造り，45は鏑造り，47・48（同一個体）および50は片鎬造り，52は関無し片丸造りである。46・49・51は，この形式の茎であろう。47～50は鏃とも見える。

刀　子（第10図16～22，写真18）

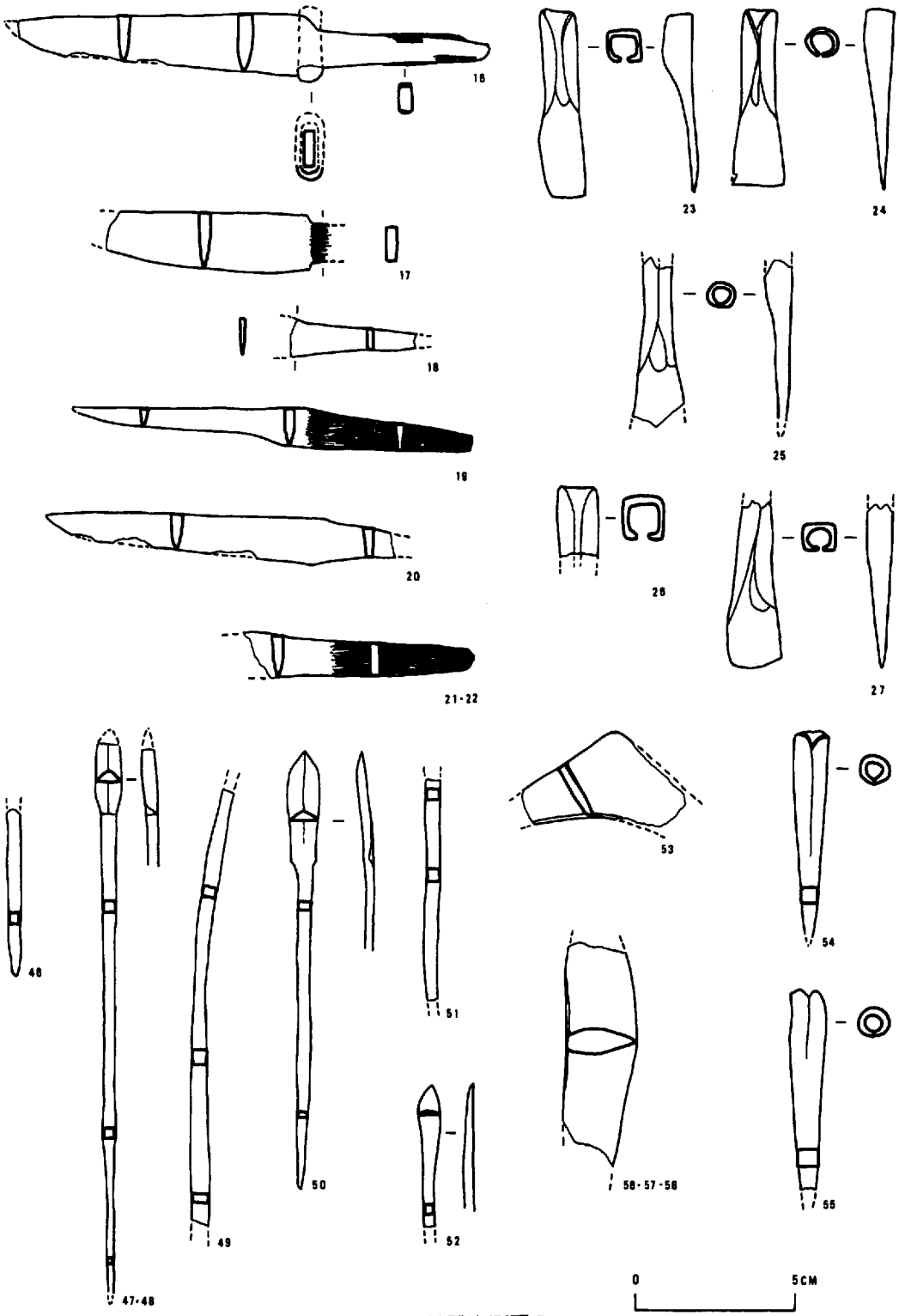
16の刃の長さは推定93㎜，巾は12～18㎜，茎の長さは60㎜で，茎には木製柄の一部が残存し，鍔の一部が錆付いて残っている。鍔は，巾8㎜，厚さ2㎜の鉄を曲げて作っている。

17は，木製柄の一部が残っており，刃先および茎の大部分を欠損している。

18は，茎の一部のみが現存する。



第９図　鉄器実測図１


16
17
18
19
20
21・22
23
24
25
26
27
46
47・48
49
50
51
52
53
54
55
56・57・58
0
5CM

第10図　鉄器実測図2

19は，木装柄をもち，刃部の長さ68㎜，茎の長さ60㎜を測る。刃部はよく使用されており，磨ぎ込まれている。これの茎の断面は，刃の一部を切り落とした形をしている。

20は，茎の一部を欠損しているが，刃部の長さ85㎜を測る。これには木質は残存していなかった。茎の断面は，19に似ている。

21・22は，接合した同一個体である。刃部を欠損しているが，茎の長さは62㎜を測り，茎の端部は圭頭形に切っている。

16～22の6例は，いずれも工具の一つと考えられる。

鑿（第10図23～27，写真18）

23～27のいずれも，鉄板の一部を曲げて，着柄のための袋をつくっている。袋の形態は断面が方形のもの（23・26・27，但し27の柄は円形）と円形のもの（24・25）とがある。長さは，計測不能のものもあるが，概収60㎜，刃巾は10㎜・16㎜を測る。いずれも片刃状に作られている。

その他の鉄器（第10図53～58，写真18）

53は，への字形を呈し，内側に刃（片刃）がつけられている。両端欠損のため，形はさだかでないが，火打鎌とも見えるものである。

54・55は，共に着柄のために一部を曲げて円形の袋をつくっており，先端（あるいは末端）の断面は方形となっている。長さは70㎜（推定），袋の外径は9㎜・内径は5㎜を測る。槍の石突に似た形をしているが，工具の一部と思われる。

56～58は，接合して同一個体となったもので，両端を欠損していて全形は不明であるが刀の一部とも見える。刀巾22㎜，厚さ7㎜を測る。

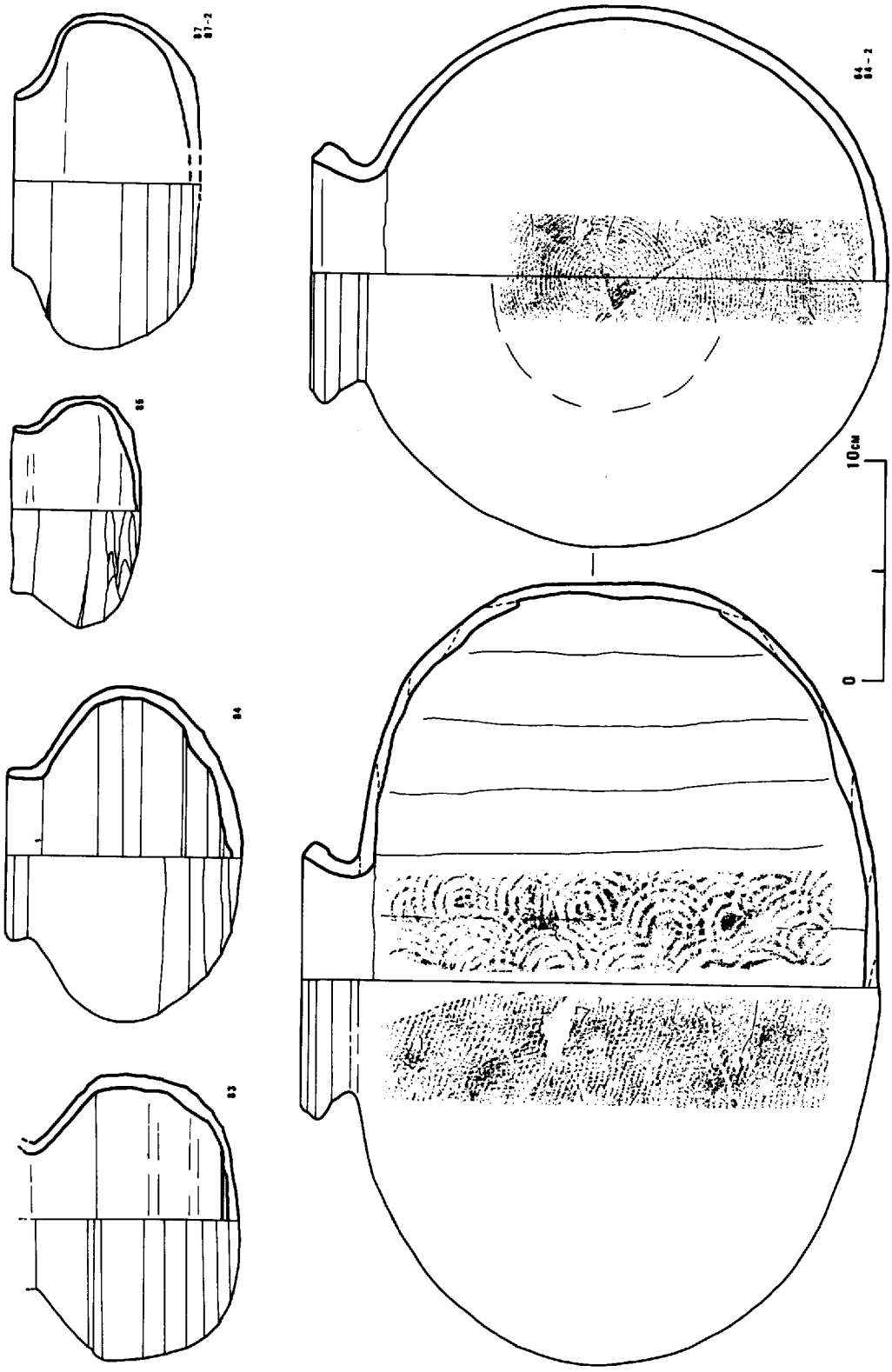
以上39個の出土地点は，前庭部（39・51・52），羨道口（34・43），棺台の南西玄室内（31・32・38・19～22・44・49・54・55），棺台の横（35～37・40・41・45・27・47），側壁の石の間（50），土壙4を埋めた上（33・42），寄せ墓部分（残り全部）である。

3. 須　恵　器

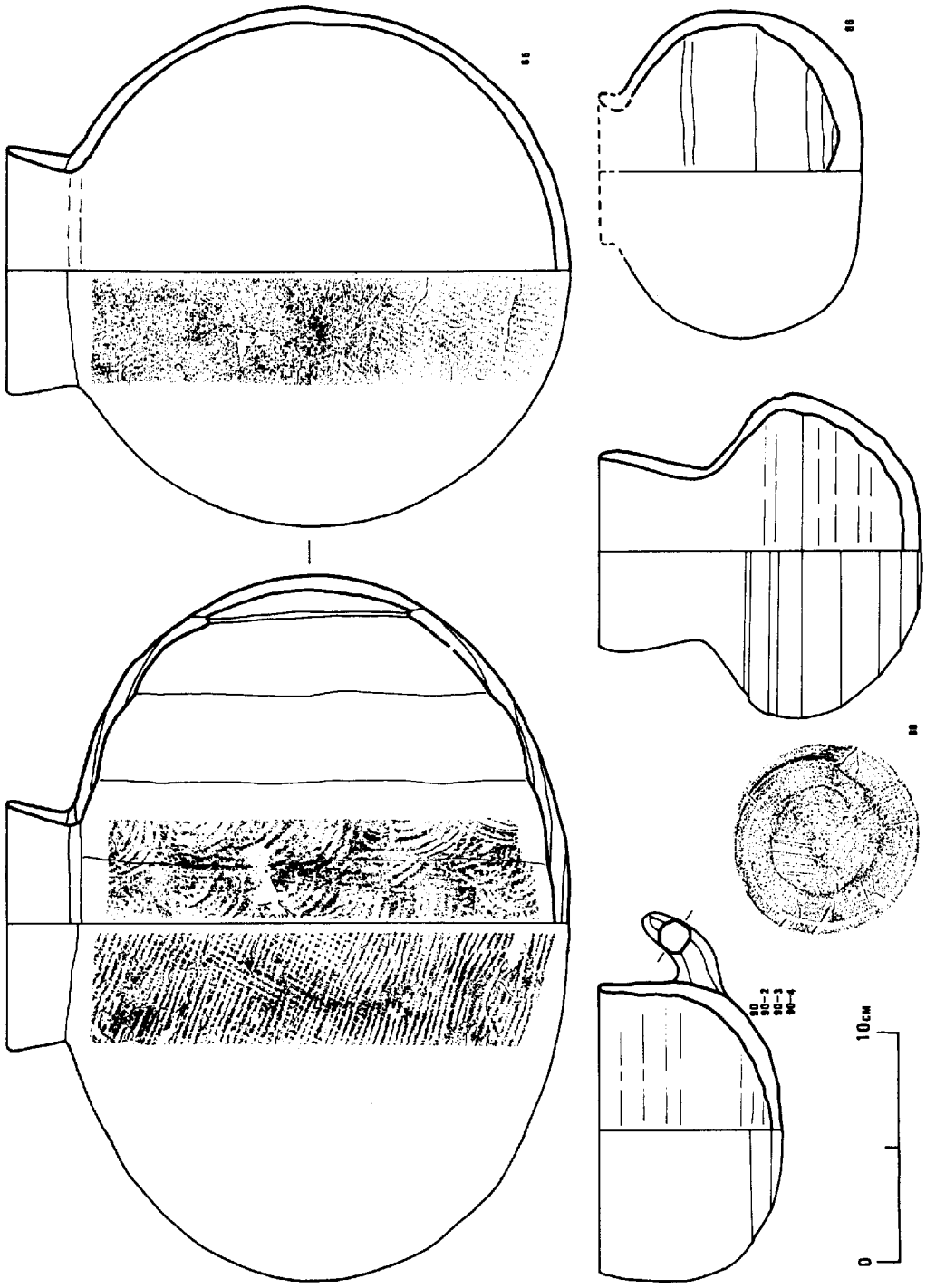
須恵器は前庭部・羨道部・玄室内・寄せ墓部から出土し，その大半は，玄室奥の寄せ墓部に集められていたものである。器形は，横瓶・壺・無頸壺・大形壺・把手付埦・平瓶・提瓶・甕・高杯・杯身・杯蓋・蓋に分けられる。

横　瓶（第11図64，第12図65，写真19）

64は，玄室奥の土器溜りの境に置かれていたもので，その一部の破片は棺台の横にあった。胴の径24.5㎝，胴の長さ36㎝，口縁径11.5㎝，頸の高さ2.2㎝を測り，胴部は楕円形を呈す。図の左側を下にして巾3㎝の粘土帯を輪積みにし，外側は上に，内側は下に粘土を引き延して粘土帯をはりつけ，最後に径9㎝の穴を残している。この穴を利用して，内外面をたたき締めている。外面は平行文，内面は同心円文である。たたき締めた後に，胴の中央に径9㎝の穴をあけ，口縁部をはりつけている。口縁部は，やや外に開いた形で，外側に台形の粘土をはりつけている。頸の切り取った粘土を利用して，横の穴をふさいでいる。このふさいだ側は，土器を回転させながら，くしでなでて



第11図　須恵器実測図1



第12図　須恵器実測図2

いる。

65も土器溜りの境に置かれていたもので，これは，他の須恵器にくらべ焼成が悪く，瓦器に近いものである。胴の径22.8㎝，胴の長さ31.2㎝，横の穴の径9㎝，頸の穴の径8.8㎝，頸の高さ2.5㎝，口縁径10.9㎝を測り，胴は楕円形を呈す。技法的に65と違う点は，円板張りつけ後に回転なでを行なわずに軽くたたいており，口縁が直口となる点だけである。

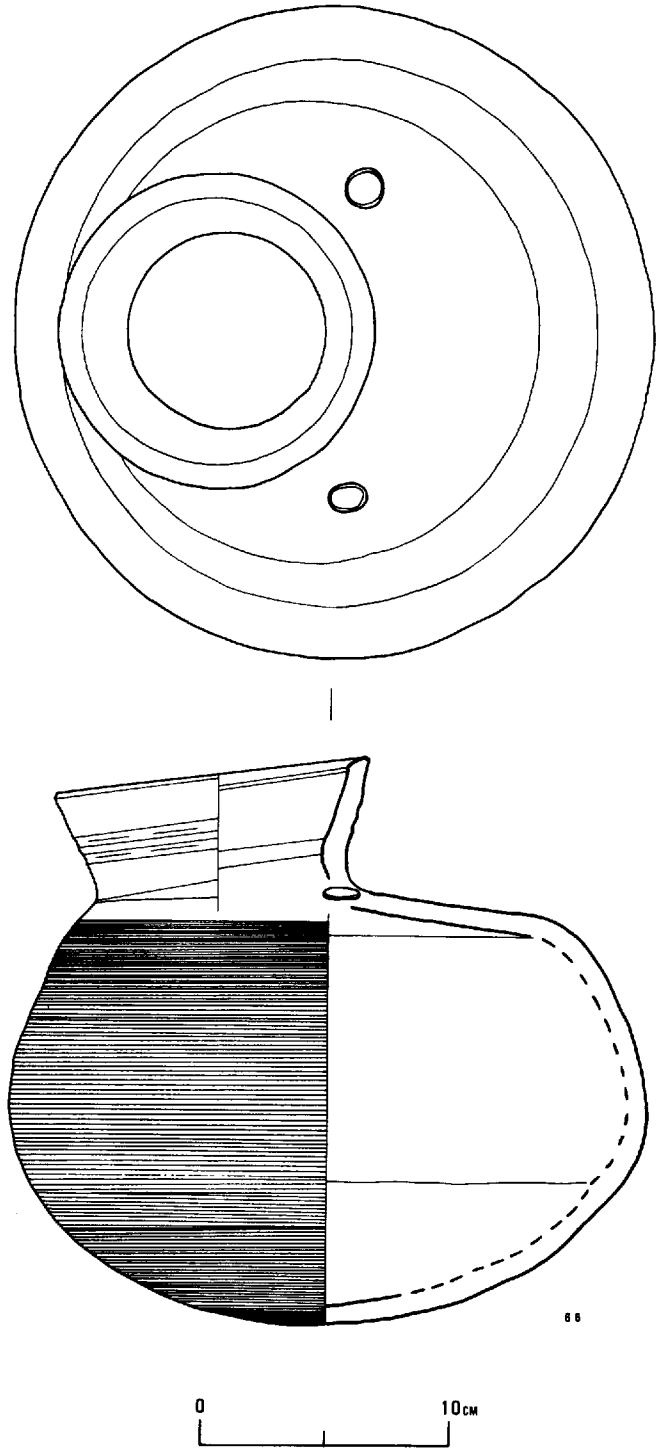
壷1（第11・12・18図83～89，写真20）

83～87は短頸壷，88は長頸壷，89は台付長頸である。83は前庭部は土壙3から，84・85・88・89は土器溜りから，86および87の半分は前庭部から，87の残り半分は羨道口から出土した。

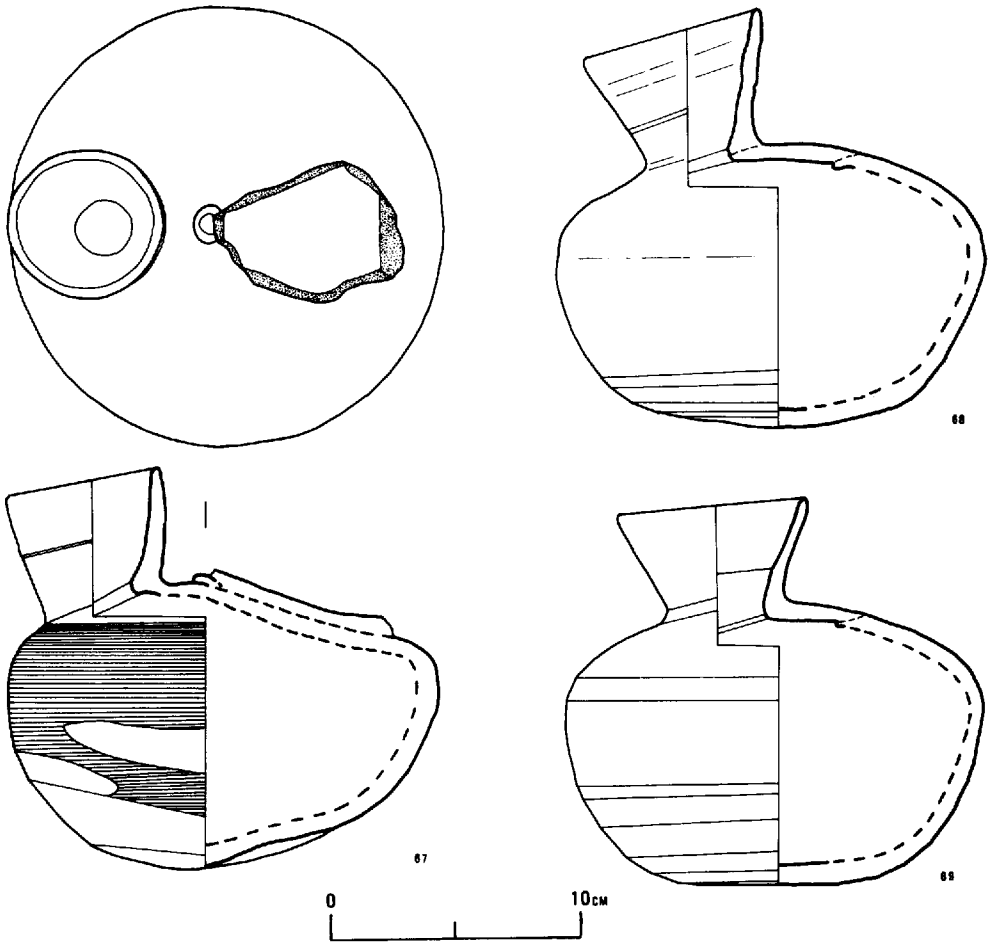
83は，丸底で肩が角ばっており，口縁部はやや外に開いているが口縁端部を欠損している。最大径13.2㎝，頸の径6.7㎝，現存高9.5㎝を測る。

84は，横から見た形が楕円形に近く，頸はほぼ直立している。最大径15.4㎝，口縁径7.3㎝，高さ10.8㎝を測る。

85は，整形が粗で，外面は静止状態においてヘラで削っている。最大径10.6㎝，口縁径7.6㎝，高さ6㎝を測る。



第13図　須恵器実測図3



第14図　須恵器実測図4

86は，口縁部を欠損している。やや平底に近い底を持ち，胴が他の壺に比して高い形をしていて外面の整形でヘラ削りは行なっていない。断面の厚さも他の壺にくらべ厚く，6～12㎜を測る。最大径14.4㎝，現存高10.6㎝を測る。

87は，約½欠損している。これは蓋付壺であったが，蓋は存在しない，焼成時に蓋をした状態で重ね焼きされ，やや高温になりすぎて蓋が焼けついたために蓋をこわして壺のみを利用したものである。平底を持ち，頸はやや内傾している。最大径15.4㎝，口縁径7.8㎝，高さ8.6㎝を測る。

88は，平底で，肩に二条の凹線を持ち，頸はやや外に開いている。底には4本の平行なヘラによる刻線があり，窯印と考えられる。最大径13.4㎝，高さ14.3㎝，口縁径8.5㎝，頸の高さ4.5㎝を測る。

89は，かなり高温で焼かれており，焼きひずみが生じ，自然釉がかかっている。直口壺で，肩にヘラによる刺突文が施こされている。台は，蹤の頸を切って張り付けたような形をしており，長方

形の透しが３個つくってある。壺の最大径16.4cm，壺の高さ16.8cm，頸の高さ6.5cm，口縁径9.6cm，台の径14.4cm，台の高さ6.6cm，全体の高さ23.5cmを測る。

碗手付椀（第12図90，写真20）

くの種の形態を示すものは，この１例のみである。これは，土器溜りおよび石室内の計４カ所に別れて存在していた。追葬のとき壊されたものであろう。丸底で，肩はなく，胴から口縁にかけて直立していて，への字に上方に曲がる把手を一本つけている。最大径13.2cm，口縁径12.6cm，高さ8.1cm，把手の長さ４cmを測る。

平　瓶（第13・14図66～69，写真19）

67は棺台の横の側壁寄りの所にあり，残り３個は土器溜りから出土した。

66は，肩から底にかけては，回転させながらくしで整形しており，胴の上面はやや平担になっていて，２つの円板（径1.4cm）を張りつけている。最大径 25.5cm，胴の高さ17.3cm，頸の高さ4.7cm，頸の径10cm，口縁径12.5cm，全体の高さ22.5cmを測る。

67は，肩から底にかけて回転させながらくしで整形し，その後ヘラでやや雑に削っている。胴の頂部には，径1.5cmの粘土円板をはりつけている。高温焼成のため，焼きひずみを生じ，重ね焼きした別の個体の破片が胴頂部にこびりついており，自然釉がかかっている。最大径17.2cm，胴の高さ11.4cm，頸の長さ５cm，口縁径6.1cm，頸の径５cm，全体の高さ16cmを測る。

68は，回転くしなでを行なっておらず，底部をヘラ削りしている。胴頂部を粘土板でふさいだ後に，頸部の穴をあけ，口縁部をはりつけている。最大径17.3cm，胴の高さ11.3cm，頸の長さ５cm，口縁径７cm，頸径4.cmを測る。

69はやや平底で，ヘラ削りを行なっている。胴頂部を粘土板でふさいだ後に，頸の穴をあけ口縁部をはりつけている。口縁部は他の３例にくらべてやや中央よりにつけられていて，外に大きく開いている。最大径16.7cm，胴の高さ11.2cm，頸の長さ４cm，口縁径7.5cm，頸の径4.9cmを測る。

提　瓶（第15～17図70～75，写真19）

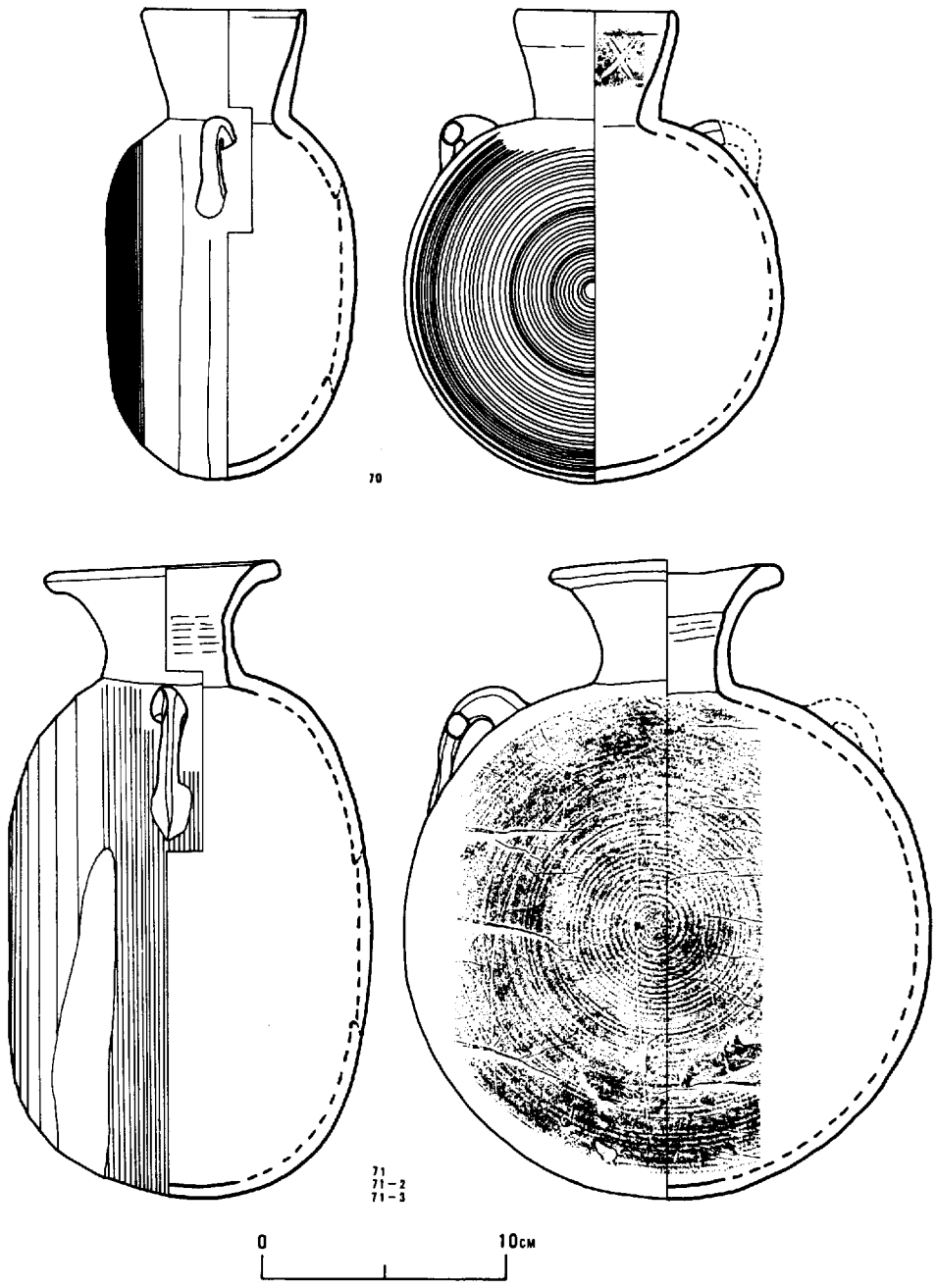
８例出土したが，その内２例（76・77）は破片のため実測しえなかった。

70・71―１・72・73・74・75は土器溜りから，71―２・71―３・74―２・76―１・76―２・76―４・77―１・77―２は石室内で破片として，76―３・77―３は前庭部からそれぞれ出土した。

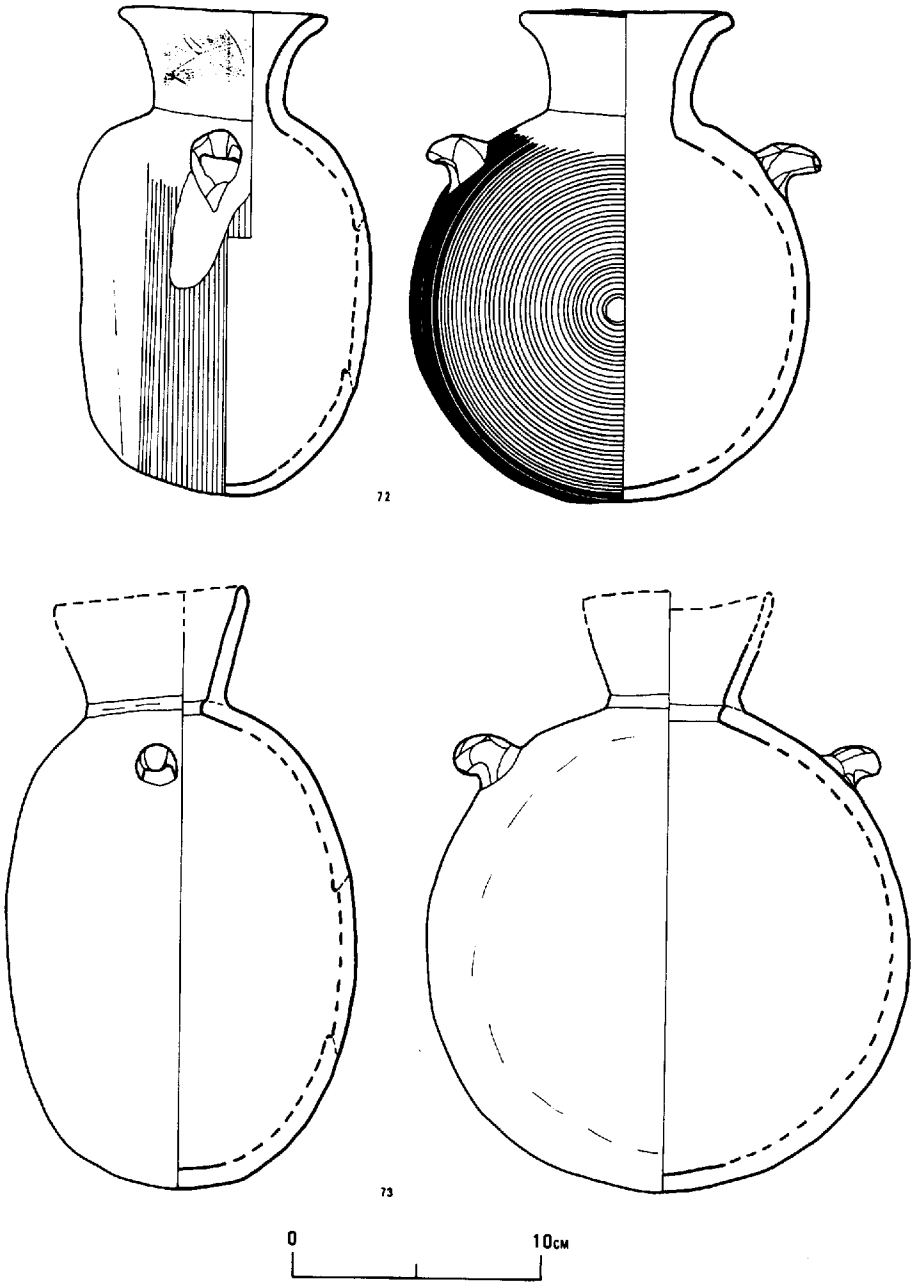
70は，胴横の穴をふさいだ後に両側を回転させながらくしで整形している。直口する口縁部をもち，口縁部内側に×印が刻まれており（写真19），窯印と考えられる。両端が器壁に張りつけられている把手が２つついている。胴の径15.6cm，胴の厚さ10.1cm，頸径５cm，頸の長さ4.4cm，口縁径6.3cm，全体の高さ19.1cmを測る。

71は，胴横の穴をふさいだ後に，この穴側は回転なをでを行ない，反対側はヘラ削りがなされている。70と同様の把手がつけられており，外に大きく開く口縁部がついている。胴の径21.5cm，胴の厚さ14.8cm，頸径5.8m，頸の長さ4.8cm，口縁径９cm，全体の高さ25.7cmを測る。

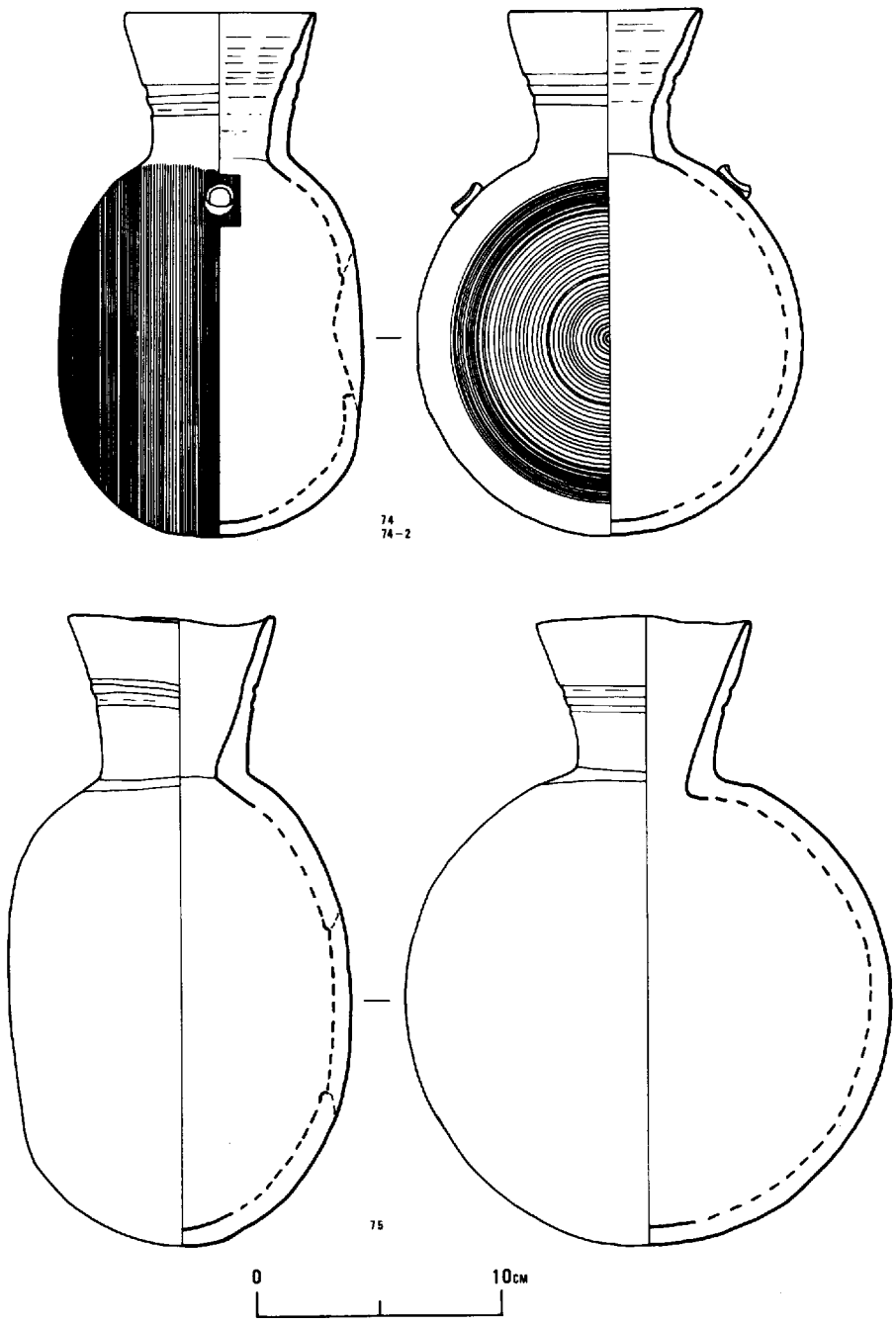
72は，胴の横の穴をふさいだ後に穴の側を回転なでしている。胴は粘土帯を積み重ねるときに少しずれている。把手は，紐がかけられる程度に凸起をはりつけている。口縁部はやや外に開いて



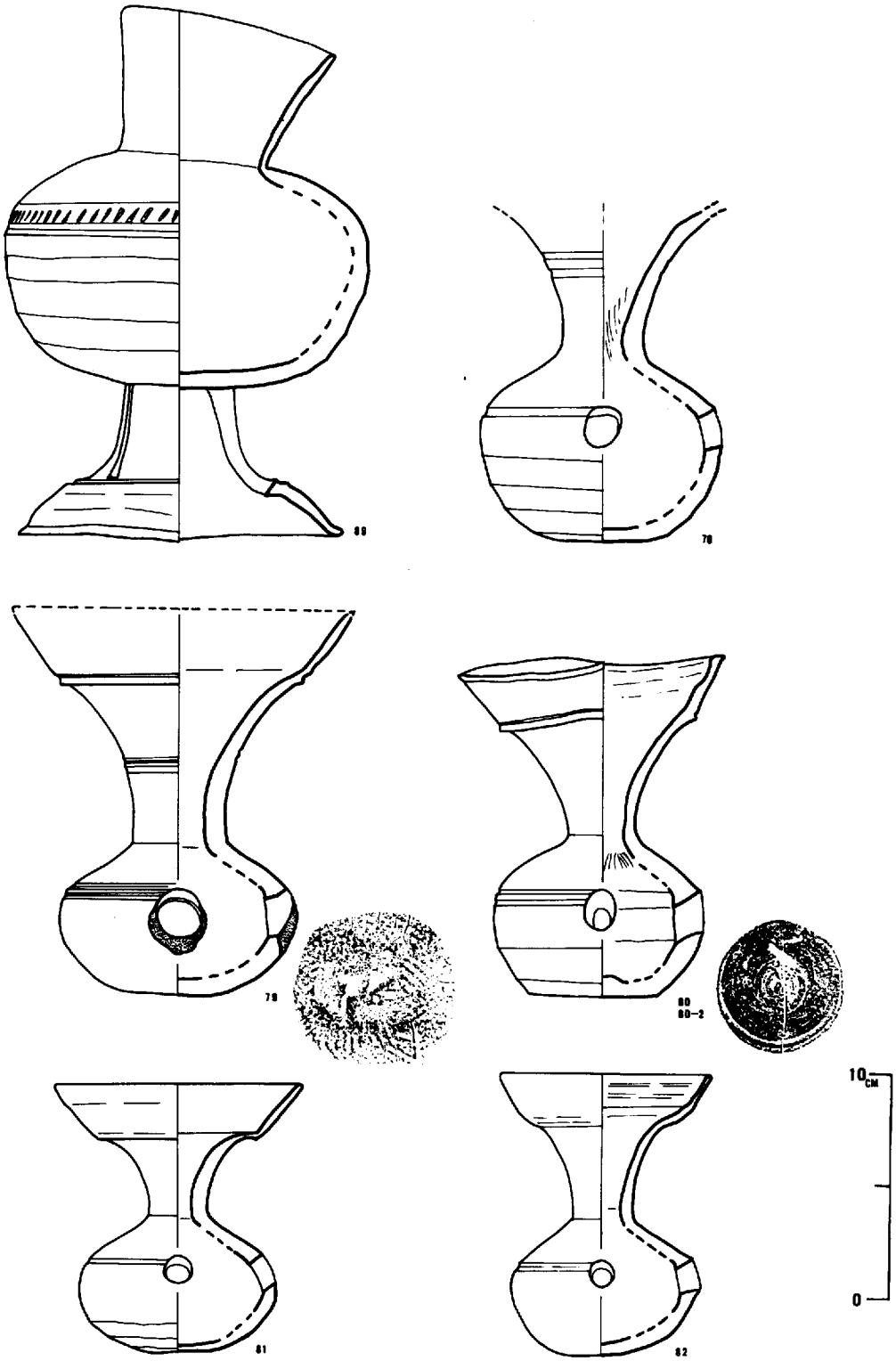
第15図　須恵器実測図５



第16図　須恵器実測図6



第17図　須恵器実測図７



第18図　須恵器実測図8

おり，頸の外側に×印が刻まれている（写真19）。窯印であろう。胴の径15.2cm，胴の厚さ11.6cm，頸径5.3cm，頸の長さ，3.3cm，口縁径7.7cm，全体の高さ19.4cmを測る。

73は，回転くしなで・ヘラ削り共に行なわれていない。72と同様の把手が取りつけられ，直口する口縁部がついている。胴の径19.4cm，胴の厚さ14cm，頸径5.2cm，頸の長さ推定4.6cm，口縁径推定7.4cm，全体の高さ推定23.8cmを測る。

瓶（第18図78～82，写真20）

いずれも土器溜りから出土したが，80の一部の破片は前庭部から出土した。

78は，顎から口縁部にかけて欠損している。頸に2本の凹線，肩に1本の凹線があり，胴から底部にかけては回転ヘラ削りを行なっている。胴の最大径10.8cm，胴の高さ8.4cm，頸の現存長6cm，頸の径4cm，穴の径1.6cm×1.8cm（隅丸方形）を測る。

79は，口縁端部を欠く。胴はやや扁平で，口縁はかなり大きく開いている。底部は平行文による叩き締めが行なわれている。肩および頸に2本ずつの凹線が刻まれていて，顎は三角形に凸起させている。胴の最大径10.8cm，胴の高さ6.7cm，頸の径4.2cm，頸の長さ推定10.5cm，顎の径10.9cm，口縁径推定15.4cm，穴の径2cmを測る。

80は，平底で，胴下半はヘラ削り，底は回転なでを行ない，肩に2本の凹線をもつ。底面に窯印と考えられる1本のヘラによる刻みがある。口縁部は焼きひずみを生じている。胴最大径9.4cm，底の径5.8cm，胴の高さ7.2cm，頸の径3cm，頸の長さ7.6cm，顎の径8.9cm，口縁径12cm，穴径1.4cm×1.8cm（楕円）を測る。

76～80には自然釉がかかっている。

81は，肩に1本の凹線をもち，底部はヘラ削りを行なっている。胴の最大径9cm，胴の高さ6cm，頸の径2.7cm，頸の長さ5.8cm，顎の径7.2cm，口縁径11.1cm，穴の径1.2cmを測る。

82は，肩に1本の凹線をもち，顎は丸味を持っている。胴の最大径8.5cm，胴の高さ6.1cm，頸の径2.8cm，頸の高さ6.5cm，顎の径6.4cm，口縁径9.4cmを測る。

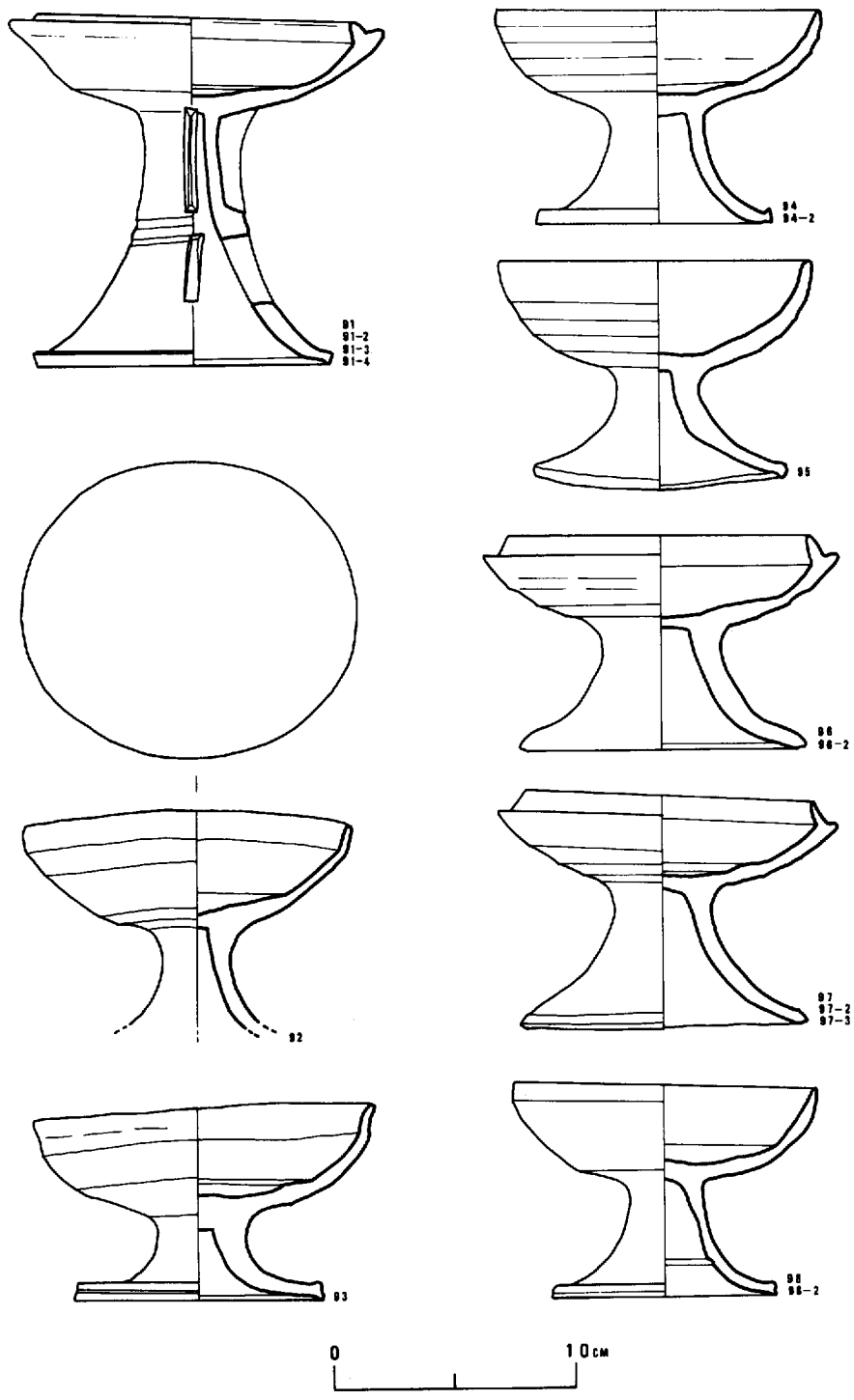
高　杯（第19・20図91～104，写真21）

91—1・91—2・92・93—1・94～99・102—1・102—2・103—1・103—2は土器溜りから，91—3・91—4・93—2・94—2・96—2・97—2・98—2・102—3・103—3・104—2は石室内から，100—1・104—1は前庭のピットから，97—3・101・100—2・104—3は前庭部からそれぞれ出土した。

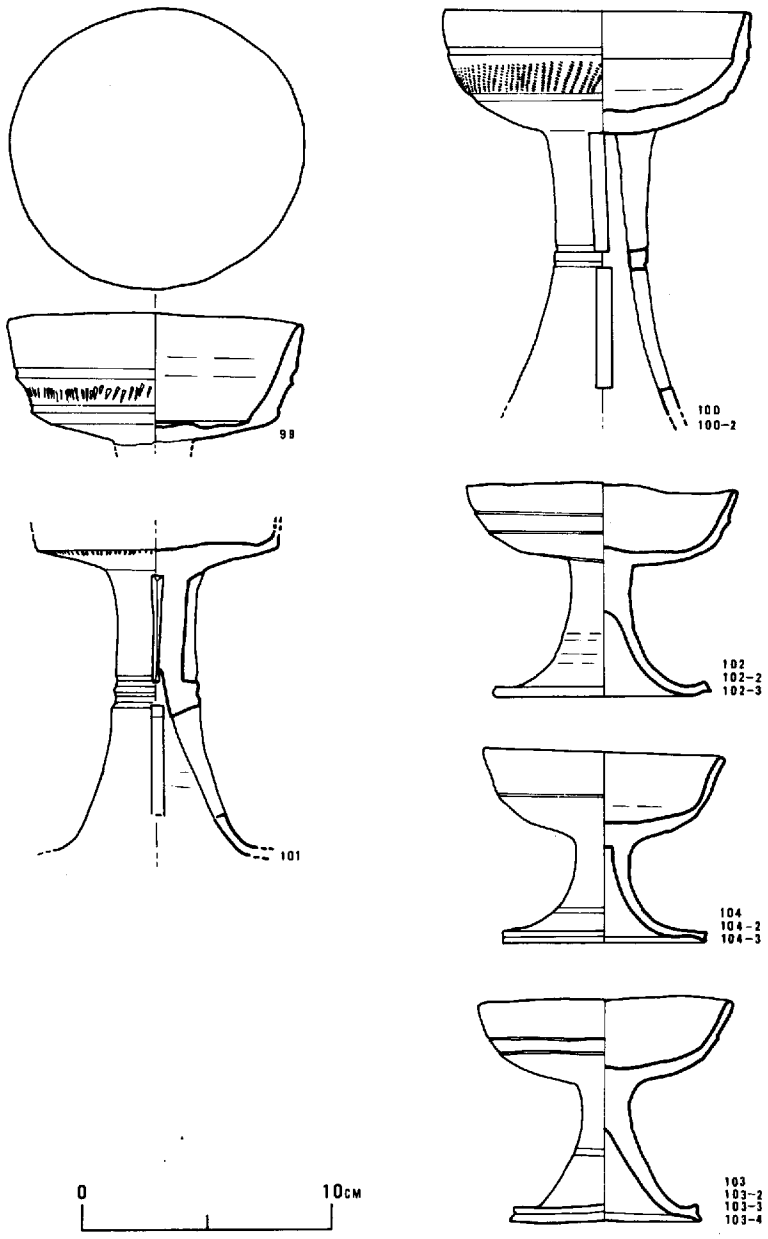
91・96・97は蓋付のもので，91・99・101・102の脚には2段の長方形の透しがあけられ，92～98・102～104の脚は無透しで，99～101にはくしあるいはヘラによる刺突文がつけられている。

91の脚は左右対称ではなく，透しはフリーハンドで切られ，上段のものは抜けていない。脚には2本の凹線がある。口縁径13cm，最大径15.6cm，かえりの高さ0.4cm，杯の高さ3.9cm，脚の高さ10.4cm，脚の付け根径4.8cm，すそ径12cmを測る。

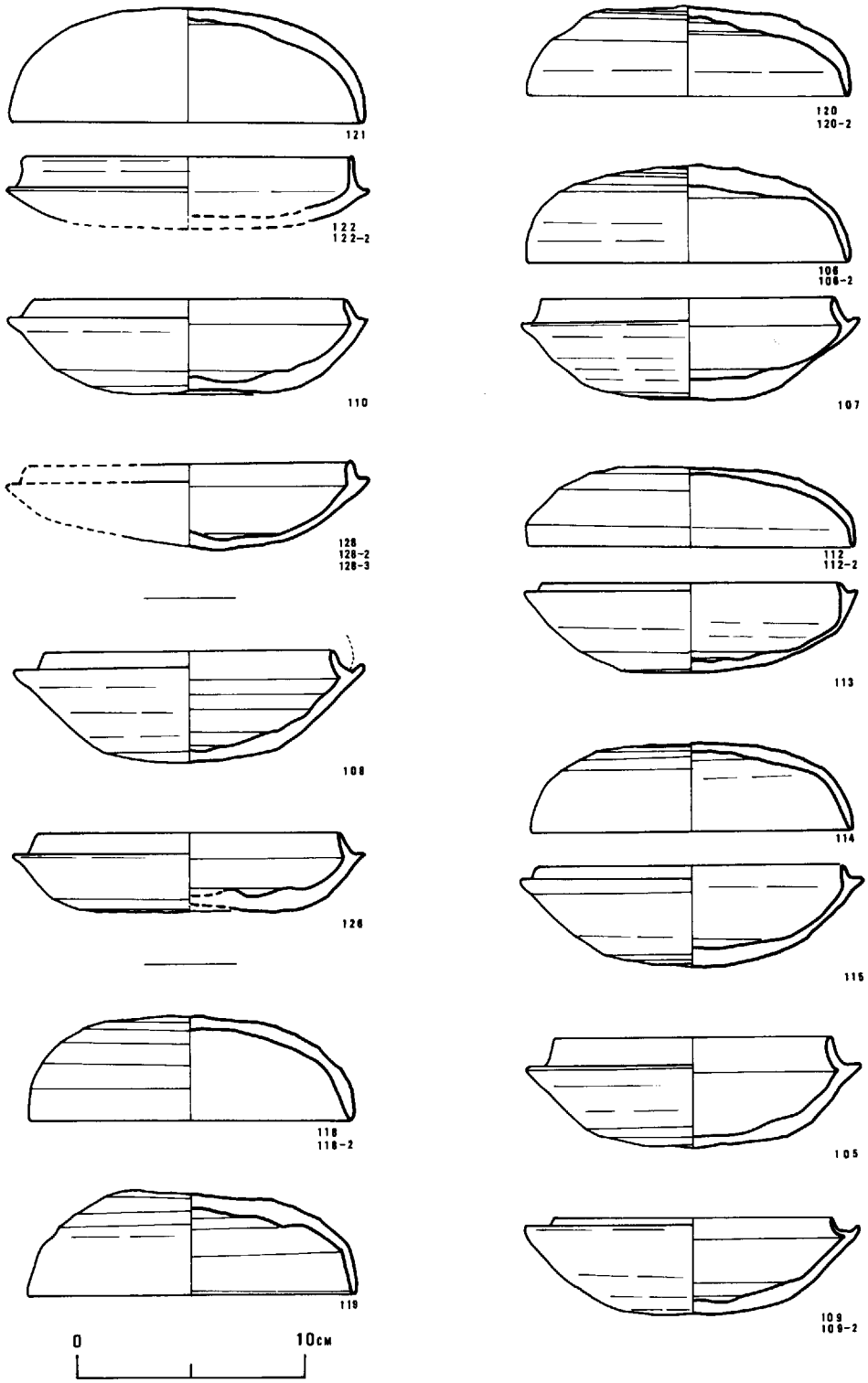
92は脚すそ部を欠損している。杯部は焼きひずみのため口縁は楕円形（14cm×12.2cm）になっている。脚付け根径は3.5cm，現存高は8.9cmである。



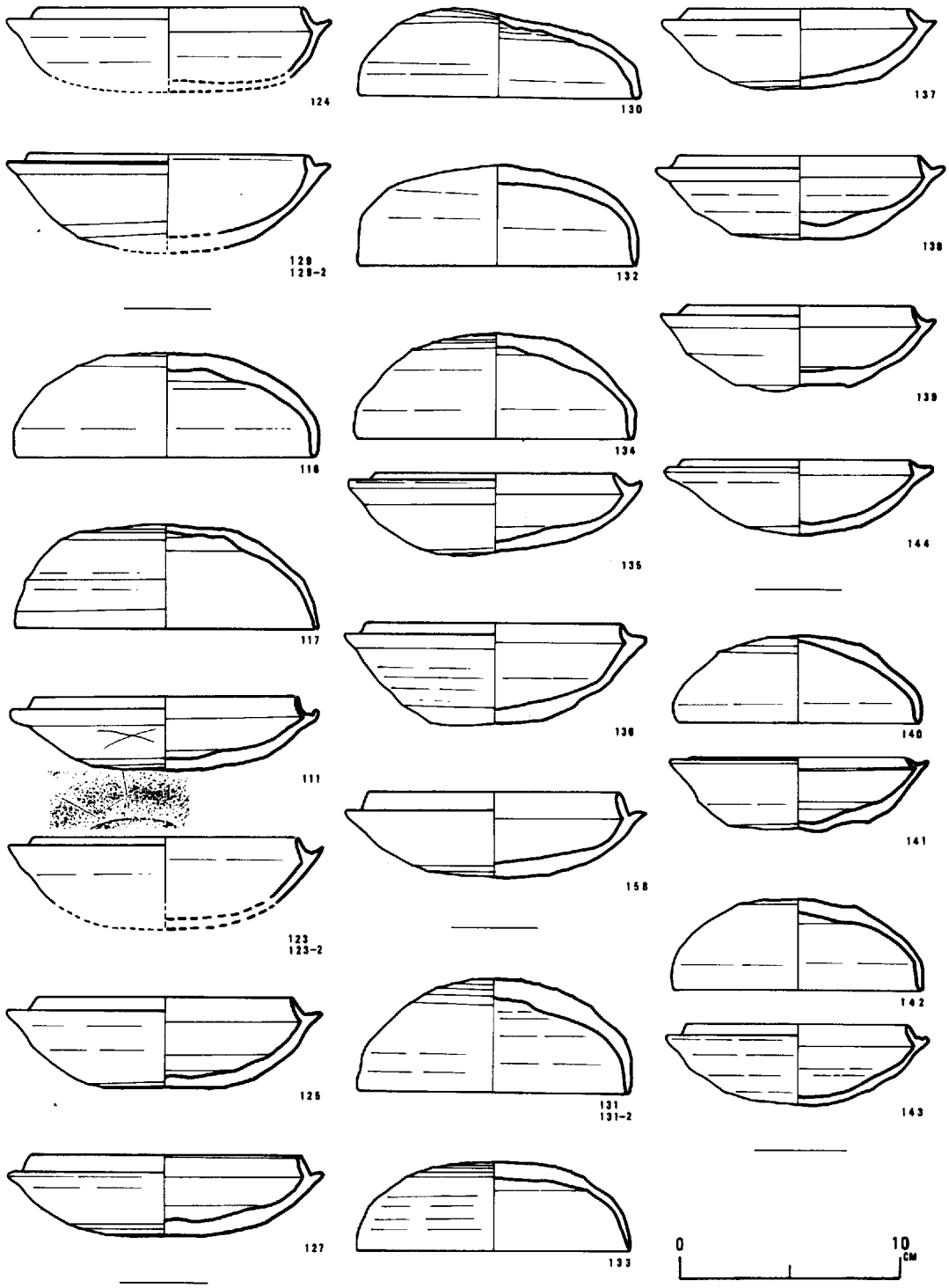
第19図　須恵器実測図９



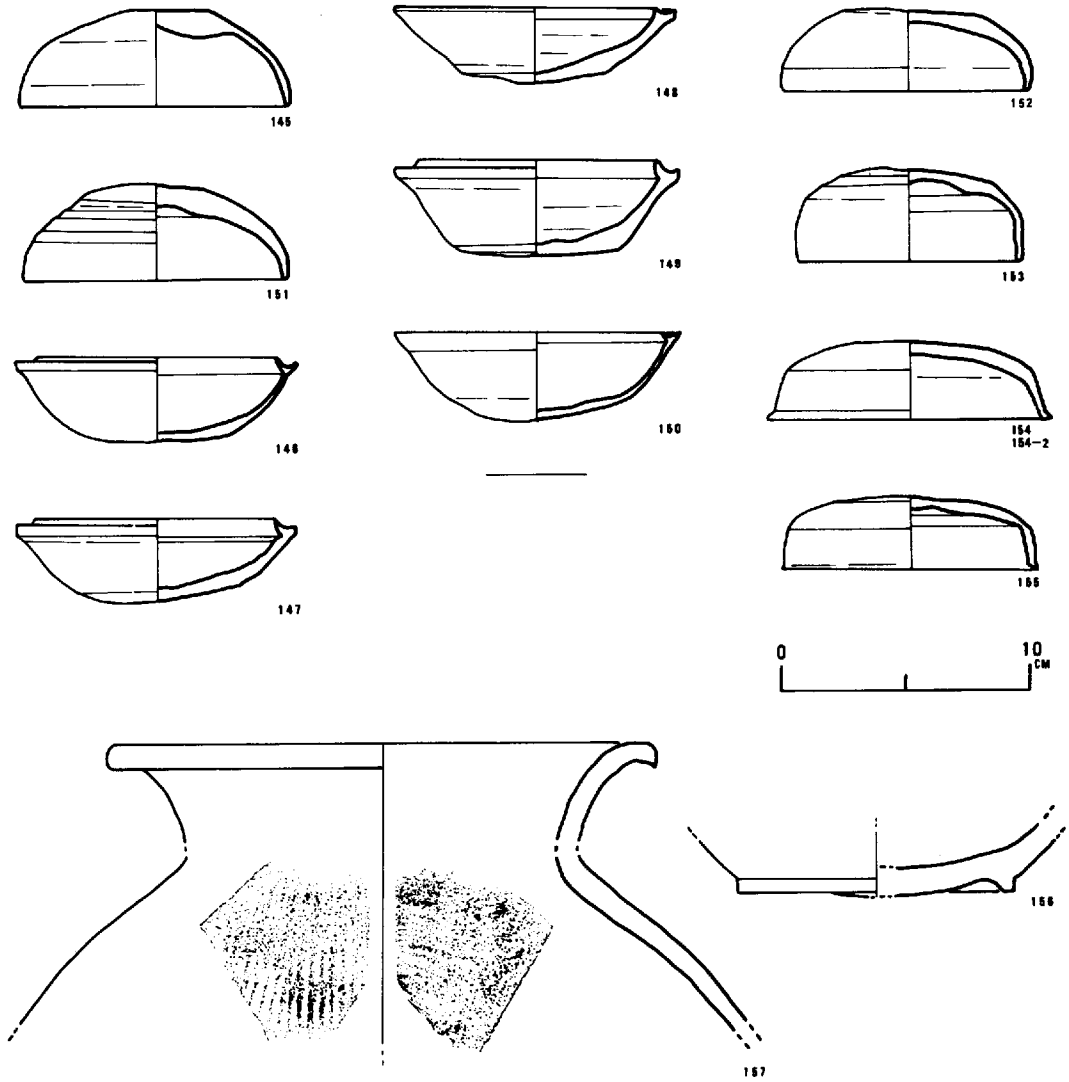
第20図　須恵器実測図10



第21図　須恵器実測図11



第22図　須恵器実測図12



第23図　須恵器実測図13

93は，脚部にくらべ杯部の整形はやや粗雑である。脚のすそには１本の凹線がある。口縁径14㎝，杯部の高さ4.3㎝，脚付け根の径４㎝，脚の高さ3.4㎝，すそ径10.3㎝を測る。

94の杯部は口縁部近くまでヘラ削りが行なわれている。口縁径13.5㎝，杯部の高さ4.2㎝，脚付け根径4.5㎝，脚の高さ4.4㎝，すそ径9.8㎝を測る。

95の杯部はヘラ削りが底から杯部の高さの$\frac{2}{3}$の所までなされており，脚部には焼きひずみがみられる。口縁径12.9㎝，杯部の高さ4.5㎝,脚付け根径4.3㎝，脚の高さ4.6㎝，すそ径10.4㎝を測る。

96と97は胎土・焼成が同じで，一つの窯で焼成されたものである。

96には，どっしりした脚がつけられている。口縁径12.5㎝，最大径14.8㎝，かえりの高さ0.8㎝，

杯部の高さ3.3cm，脚付け根径5.8cm，脚の高さ5.5cm，すそ径11.2cmを測る。

97は，杯と脚とは少しかたむいて取りつけられている。口縁径12cm，最大径14.1cm，かえりの高さ0.8cm，坏部の高さ3.6cm，脚付け根径５cm，脚の高さ６cm，すそ径11.4cmを測る。

98の脚の内側には１本の凹線が刻まれている。口縁径12.5cm，杯部の高４cm，脚付け根径3.4cm，脚の高さ4.8cm，すそ径9.4cmを測る。

99は脚部をまったく欠損する。高杯の脚を欠いた後は，杯として利用したとも考えられる。坏の胴の中央および杯の胴と底の境とにはそれぞれ巾 0.3cmの凹線があり，この２本の凹線の間にはヘラ先で刻み目が無雑作につけられている。焼きひずみを生じている。口縁径11.8cm，胴と底の境の径9.8cm，杯部の高さ5.1cm，脚付け根径3.1cmを測る。

100は胴部に２本の凹線があり，この間はくし先による刺突文が施こされている。脚中央には２本の凹線が刻まれている。すそ部を欠損している。口縁径 12.3cm，杯部の高さ 4.8cm，脚付け根径 4.5cm，脚の高さ現存11cmを測る。

101は杯部とすそを欠損している。杯部は99と同様な形態であったと考えられるが，胴と底の境の稜線の下側にヘラ先による刺突文が施こされている。脚には２本の凹線があり，上段の透しは抜けていない。杯部の胴と底の境の径9.6cm，脚付け根径４cm，脚現存の高さ11cmを測る。

102～104は，他の高杯にくらべ，やや小型である。

102の杯部の胴には，２本の沈線があり，一部焼きひずみを生じている。口縁径10.8cm，杯部の高さ3.1cm，脚付け根径2.6cm，脚の高さ5.4cm，すそ径8.6cmを測る。

103には，杯部に２本，脚に１本，すそに１本の凹線がある。口縁径10.1cm，杯部の高さ3.3cm，脚付け根径2.5cm，脚の高さ5.6cm，すそ径7.7cmを測る。

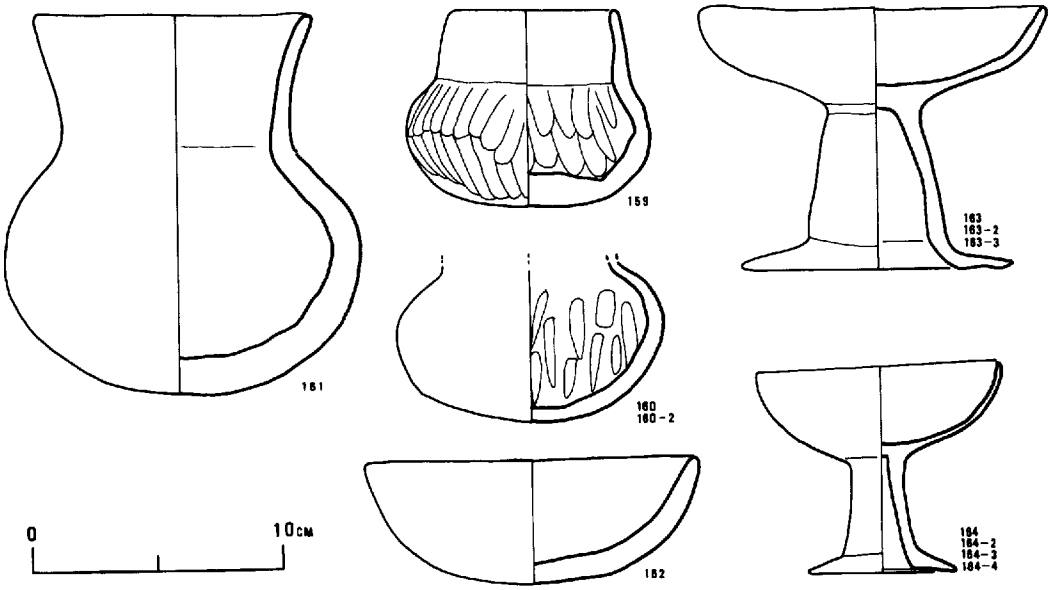
104には，杯部に１本，脚に１本，すそに１本の凹線がある。口縁径9.8cm，杯部の高さ3.4cm，脚付け根径2.6cm，脚の高さ4.2cm，すそ径8.1cmを測る。

杯（第21～23図105～151，写真22）

杯には，杯蓋と杯身とが存在する。その総数は49個で，その内48個体について図示した。第21図の121から第23図の158まで直径の大きいものから順に並べた。杯蓋の口縁径は15.5cmから10.4cm，杯身は最大径15.8cm・口縁径 14.5cmから最大径11.2cm・口縁径 9.5cmまでいろいろな大きさのものが含まれているが，杯蓋の口縁径を基に分類すれば，121～128，108～126，118～129，116～127，130～158，131～144，140～143，145～150の８群に分けられる。杯蓋の口縁径は，１群が15.4cm，２群に属する蓋はないが推定14.4cm，３群が14.0cm，４群が13.7cm，５群が12.8cm，６群が12.4cm，７群が11.2cm，８群10.6cmである。図示しなかった１例は，杯蓋であるが小片のため実測できなかった。

杯身のかえりは，122のように高さ1.2cmでほぼ直立するものから，148・150のようにかえりが横から見えないものもある。

111は片仮名のクの字型の断面をもつ蓋受けをつくっている。外面には×印（窯印）が刻まれている。



第24図　土師器実測図

121・122，106・107，112・113，114・115，134・135，140・141，142・143はそれぞれセットとなるもので，その他のものについてはセット関係ははっきりしない。

蓋（23図152～155，写真22）

蓋は，短頸壺などの蓋と考えられ，図示した4例が出土した。152・153は，土壙4を埋めた後その上に置かれていたもので，154—1は羨道入口，154—2・155は前庭部より出土した。

152は，口縁径9.8cm，高さ3.2cmを測り，153は，口縁径9.0cm，高さ3.6cmを測る，この2例は，杯蓋に似たつくりとなっている。154は，口縁径11.4cm，高さ3.1cmを測り，155は，口縁径10.3cm，高さ2.9cmを測る。この2例は肩に稜線を持ち，口縁端部を外に張り出させている。

壺2（第23図156・157）

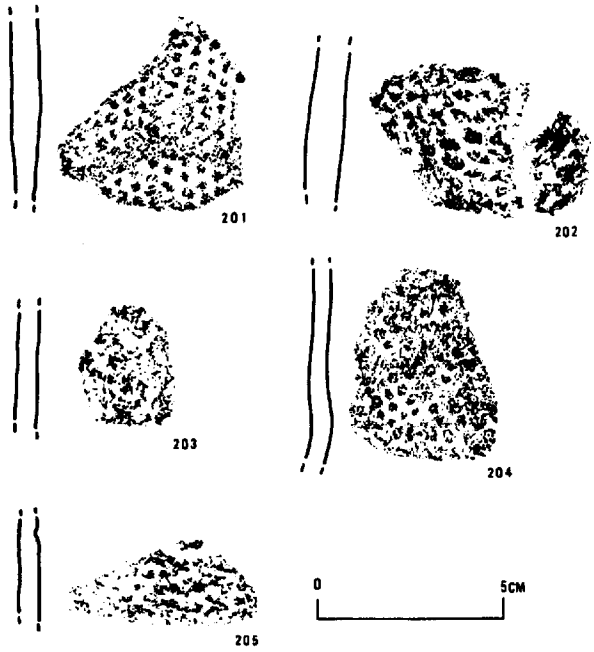
大型壺は前庭部から2例の口縁部が，周湟の底から底部が1例出土した。

大型壺の2例の内1例は，図示したものとよく似た大きさ，形のものであるが小片のため実測できなかった。157は，口縁径21.5cm，頸の高さ4.2cm，頸の径15.7cmを測り，胴の最大径は29cm以上である。外面は平行文・内面は同心円文でたたき締めてあり，内面は同心円の上をなでている。

158は，壺の底部で，径11.1cm・高さ0.4cmの高台をもっている。底は高台よりも低い位置にありやや不安定なものである。

4. 土　師　器

土師器は，壺3，杯1，高杯2の計6個が出土した。前庭部ピット内から161・160—1が，前庭部から160—2が，玄室奥の土器溜りから159—1・162・163—1・163—2・164—1・164—3が，石室内から159—2・163—3・164—2が，土壙5内の弥生式土器(174)の中に混ざって164—4



第25図　縄文式土器実測図

が出土した。

159は，口縁径6.6㎝，頸の高さ2.9㎝，胴の最大径9.8㎝，高さ7.8㎝を測り，胴の内外はかなり荒くヘラ削りを行なっている。

160は口縁部を欠損している。胴の最大径10.7㎝，頸の径7㎝，現存高6㎝を測り，内面を指で荒くなでている。

161は，須恵器の高杯（100）と共に前庭の一つのピットから出土した。口縁径10.8㎝，頸の高さ5㎝，頸の径9.2㎝，胴の最大径14.2㎝，高さ15㎝を測る。

162は，杯であって，内外ともにかなりきれいに仕上げてある。口縁径12.2㎝，高さ4.9㎝を測る。

163は，杯部の整形にくらべ脚部の整形はやや粗雑である。口縁径14㎝，杯部の高さ3.7㎝，脚の付け根の径3.9㎝，すそのくびれ部の径5.6㎝，すその径11㎝，脚の高さ6.6㎝を測る。

164は，163にくらべやや小形で，整形はかなりきれいである。口縁径9.8㎝，杯部の高さ3.6㎝，脚の付け根の径2.2㎝，すそのくびれ部の径3.2㎝，すその径6㎝，脚の高さ4.6㎝を測る。

159～162にはかなり砂粒が含まれているが。163・164は精製粘土を利用してつくっている。

5. 貝　　殻

玄室奥の土器溜りの須恵器群の最下部（床面）において，5群の貝殻片を検出した（写真11）。これらは写真17（約2分の1大）の59～63に示す通りである。いずれもかなり大型の二枚貝のものである。丁番を欠損しているので殻の高さや巾は不明であるが，59の中で最大のものは45㎜×45㎜，61の中で最大のものは47㎜×43㎜，62の中で最大のものは50㎜×36㎜，63の最大のものは60㎜×58㎜を測る。剝離したものを除いた破片の厚さは2.5～3.0㎜である。これらの貝殻は，石室内の最初の埋葬に伴なうものであろう。

第5節　古墳築造以前の遺物および遺構

1. 縄文式土器

縄文式土器は，5片検出し，その内201～204は墳丘盛り土の中から，205は石室掘り方の中から出土した。

201・204には，3㎜×2㎜の楕円形の押し型文が施され，202・203・205には5㎜×3㎜の楕円形の押し型文が施こされている。これらは縄文早期のものであるが，この時期の遺構は検出しなかった。

2. 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は，第26図に示すように，石室直下および石室前庭部の斜面において柱穴・ピットを検出した（図中のA・Bポイントは，石室に関するA・Bポイントと同位置にある）。いずれも黄褐色土の地山に掘り込まれており，その中には淡灰褐色土が詰まっていた。柱穴・ピットの中には，前庭斜面の一つの柱穴を除いて，遺物は含まれていなかったが，178の入っていた柱穴内の土質と他の柱穴・ピットを埋めている土質との間にまったく差が認められず，これら遺構直上の土層の中には弥生式土器以外には含まれていなかったので，すべて弥生時代の遺構と断定した。

石室直下の部分には，柱穴が多く，径5～30㎝，深さ5～25㎝を測る。これら柱穴は，建物等にまとまるものではない。石室前庭部の斜面には，径80～150㎝・深さ30～50㎝のピッ群が存在し，その間に数個の柱穴（径30～40㎝・深さ30～40㎝）がある。

178は，前庭部斜面の柱穴から，176は石室直下の遺構面上で押しつぶされた状態で出土した。171・172は，石室羨道部の土壙4の床面にあり，174・175は同じく土壙5の北隅に164—4（土師器高杯片）と共に存在した。

172—2・179・180は石室下において出土し，173・181—2・183～185は石室掘り方の中から出土し，172—3・181は墳丘盛り土の中から出土した。

他に破片が数十片あるが，これらは石室直下・石室掘り方内および墳丘盛り土の中から出土したものである。

壺（第27図172・173・176・181・183・185，写真23）

176は，羨道右測の側壁の根石がこの上に載っていたためか，押しつぶされた状態で検出した。口縁径21.6㎝，胴最大径32.8㎝，底径9.5㎝，高さ41.5㎝を測る。外面はくしなでを縦方向に行なって整形していて，口縁部に3本の凹線を施こしている。胴下半分に二次的な火を受けており，内面には炭化物が付着している。

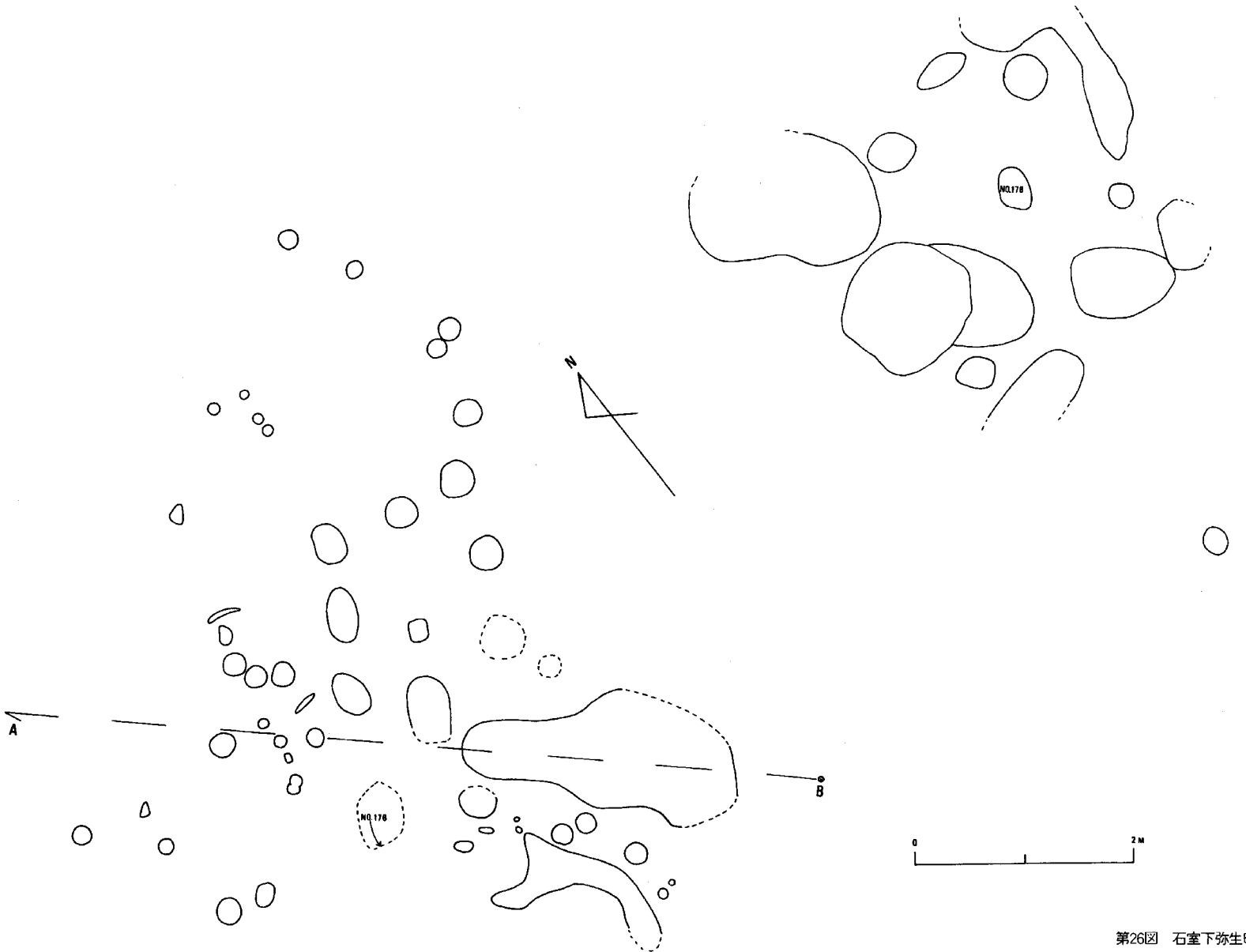
172・181・185は長頸壺の一部で，172・181は大きく外に開いた口縁部の上面に波状文が施され，口縁端部に2本の凹線がある。185は頸部下半に4本の凹線をめぐらしている。

甕（第27図174・175・178～180，写真23）

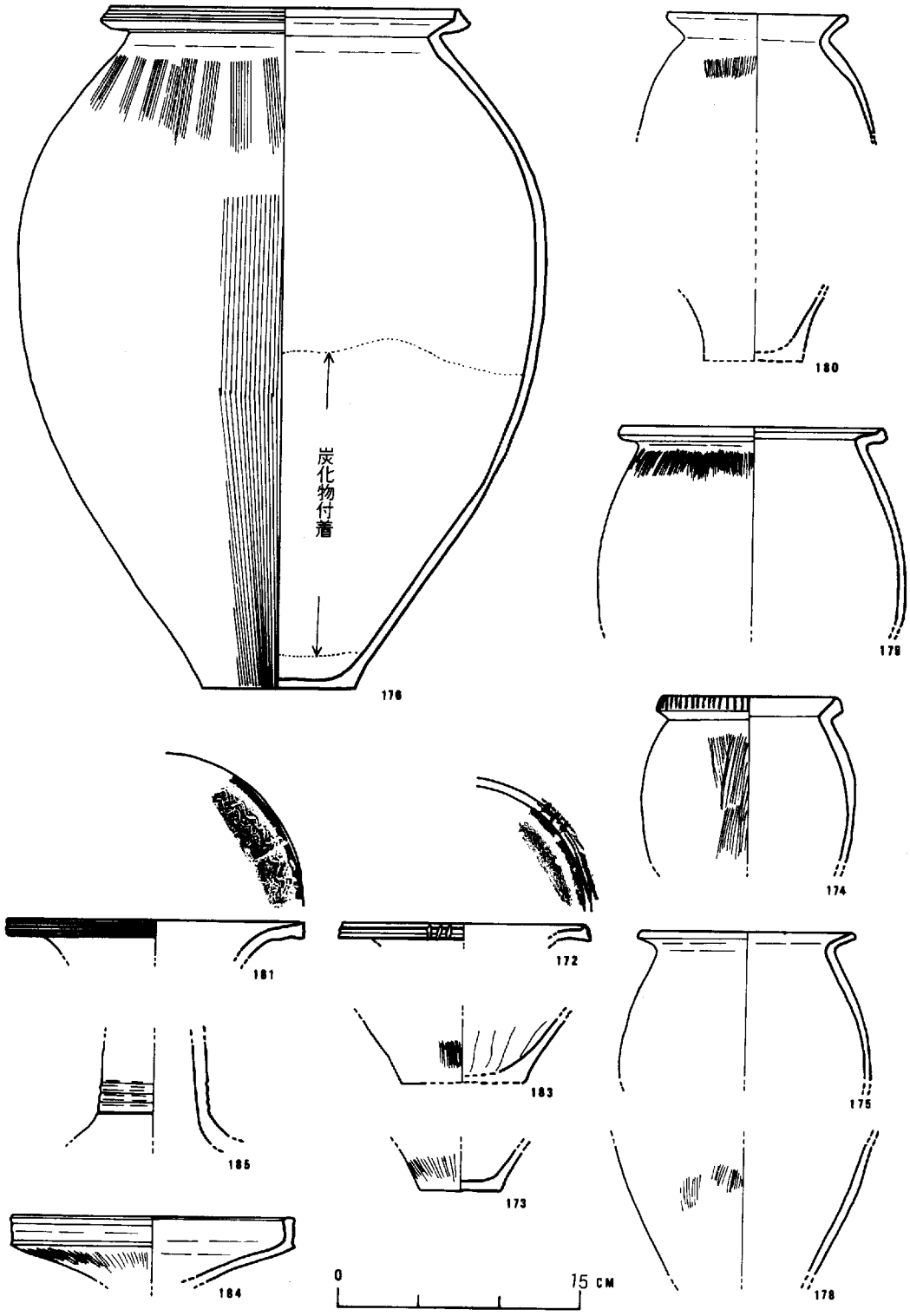
いずれも頸部でくの字形にくびれる口縁部がついている。174の口縁端部にはくし先による刺突文がついている。

高杯（第27図184，写真23）

図示したものの他に脚部の破片が2片出土している（いずれも別個体）。184は直立する口縁部



第26図　石室下弥生時代遺構平面図
折り込み５



第27図　弥生式土器実測図

をもち，２本の凹線がみられる。脚は欠損している。口縁径17.6cm，立ちあがり高さ1.9cm，現存高４cmを測る。

第三章　まとめにかえて

海抜高235m（比高35m）のかなり急な斜面に人間の足跡が残されていたのは，３つの時期に分けることができる。すなわち，縄文時代早期・弥生時代中期・古墳時代後期の３つである。

縄文時代早期では，５片の押し型文土器片が墳丘盛り土内から出土したが，遺構はまったく検出できなかった。遺構が存在せず，遺物も少量という点から考えて，狩猟に伴なう移動の途中のキャンプ的要素をもつ材料であろう。

弥生時代中期では，柱穴およびピット群が存在し，十数個の土器が出土した。遺構は建物等にまとまるものではないが，土器の種類（壺・甕・高杯）や柱穴やピットが存在することから考えて，土器型式の上に変化を生じない若干の期間，この地で生活したのであろう。稲作を生活の中心としていた人々が山の上に生活の場を求めたのは，自然的環境の変化（大雨後の大洪水等）に伴なうものと考えられる。岡山平野の一部では，弥生前期包含層と後期包含層との間に短期間に推積した無遺物層（厚さ３～５m）が存在する事実が知られている（岡山市南方・上之町・百間川川底の各一部などの建築現場の掘り下げ中に確認されている）。沖積地において３～５mの土砂が推積するためには長期間の大雨・大洪水が大量の土砂を上流から押し流すことが絶対の条件である。平地（低地）に生活していた人々が洪水を避けて山に登ったと考えられ，空古墳下の遺構もその一つであろう。

６世紀中ごろに，小口積み・持ち送り式の横穴式石室をもつ古墳がつくられた。この石室の玄室～羨道部にかけて数回の埋葬がなされ，その一部では，以前の埋葬遺体・副葬品を奥へ片付けている。奥の寄せ墓部分には成人３～６人以上の遺体が集められていることが残存していた太腿骨の数（６本）からわかる。玄室奥の寄せ墓部分のすぐ南側には棺台が設けられ，玄室と羨道の境には，６～８・148・151などを副葬品とする埋葬がなされている。６～８などをもつ埋葬よりも古い時期に，羨道に土壙（土壙４）を掘って成人と小児を併葬している。羨道部には土壙４よりも新しい土壙５がつくられている。棺台の上には１遺体のみが埋葬されたとすれば，８～11人以上の埋葬が６世紀の中ごろから末にかけて行なわれたことになる。副葬須恵器のうち杯（蓋・身）から８回の埋葬が取り行なわれたと考えたい。８～11人以上の遺体を８回の埋葬で安置したとすれば，１回の埋葬で複数の遺体が埋葬された時もあるのであろう。

石室の埋葬に関して特に注目すべき点は，貝殻の出土と土壙５である。貝殻は，玄室奥の寄せ墓部分の土器群の最下部（床面）に残存していもので，大型二枚貝の貝殻の一部で海水産と考えられる。埋葬に際してわざわざ運んできたもの（死貝とは考えられない）で当時の交通（あるいは交易）の一端がうかがえる。土壙５は，土壙４を切って掘られており，土壙４よりも明らかに新しい時期につくられた。ところがこの土壙には埋葬に伴なう副葬品は入れられずに，土壙を掘ったとき

に出てきた弥生式土器をあたかも副葬品を置いたようにその一隅に納めている。

石室の前庭部はかなり傾斜をもつ斜面であるが，土壙３の周辺に14個の柱穴状ピットを掘っている。これらのピットの中には,石室内出土の破片と接合する遺物（104）を出したものがある。これから考えて，前庭部のピット群は石室内の埋葬と同時に掘られたものであり，埋葬時の「墓前祭」に伴う葬送儀礼のための遺構と考えられる。一人の埋葬の時に１つの柱穴状ピットが掘られたという考えが許されるならば，石室内には14人の埋葬が行なわれたことになる。

遺物については，実測不能の小破片（数個体）および貝殻を除く他のすべてを定測し，その図が載せてある。また写真撮影可能なものについてはすべて撮影し，杯（蓋・身）は一部の写真のみを，その他の遺物はすべての写真が載せてある。

最後になりましたが，北房町教育委員会をはじめ地元の多くの方々の御協力をいただき調査を終ることができました。記して感謝の意を表します。　（文責　田仲満雄）

1．発掘前の石室（南東から）

2　石室および掘り方（西から）

図版2

3．上から見た石室（南東から）

4．羨道および袖（北西から）

5．玄室奥の石積み状態（南東から）

6．石室根石の状態（北から）

図版4

7．石室掘り方および側壁の石積み状態

8．奥壁石積みおよび墳丘の土盛り状態

9．遺物の出土状態（玄室奥）

10．棺台および遺物の出土状態

図版6

11．玄室奥の床面の人骨および須恵器・貝殻(白く写っているもの)

12．人骨および装身具出土状態（土壙4）

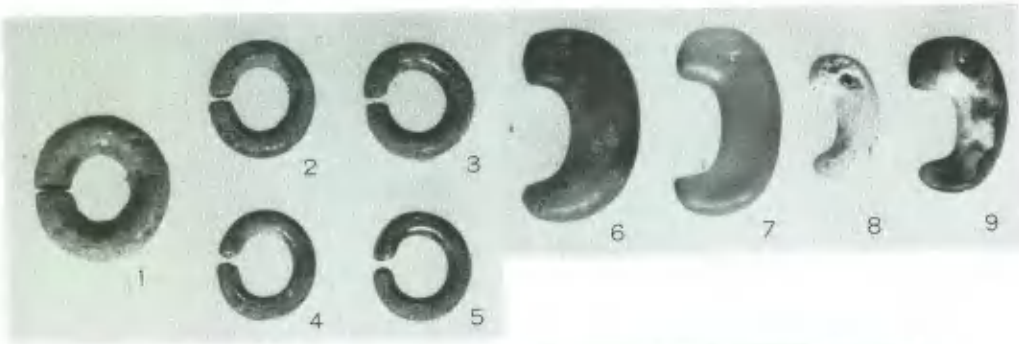
13．前庭部ピット群

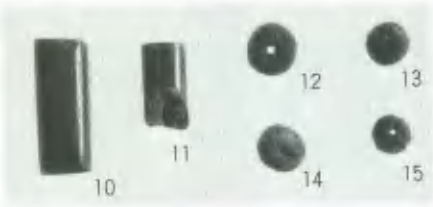
14．羨門根石直下の土壙

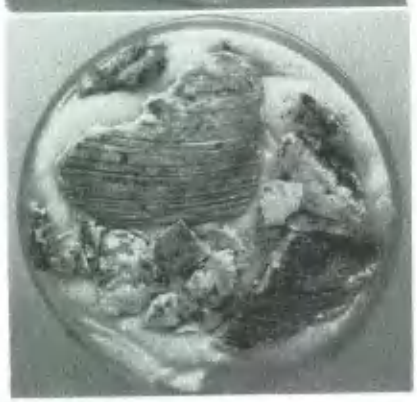
図版8

15. 石室下の弥生時代遺構(手前の土器はNo. 176)

16. 石室の一部および石室下の弥生時代遺構



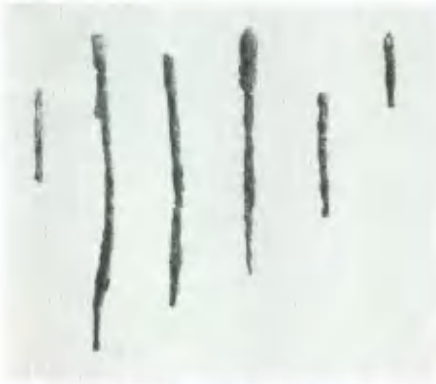




17. 装身具および貝殻

図版10

16 17 18 19 20 21・22



46 47・48 49 50 51 52

28 29 30 31 32

33 34 35 36 37

38 39 40 41 42

43 44 45

23 24 25 26 27

54 55 53 56・57・58

18. 鉄 器

64
64－2

70

71

65

72

73

66

74
74－2

75

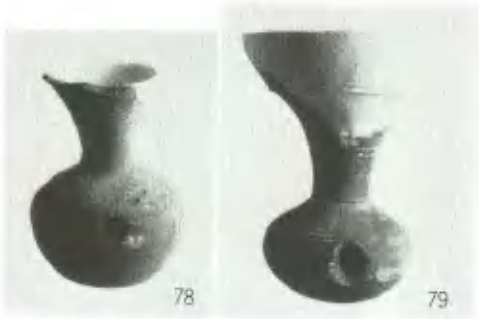
67

68

69

19. 須恵器

図版12


78

79

83

84

85

87
87－2

80
80－2

88

89

81

82

90
90－2
90－3
90－4

72頸部外側

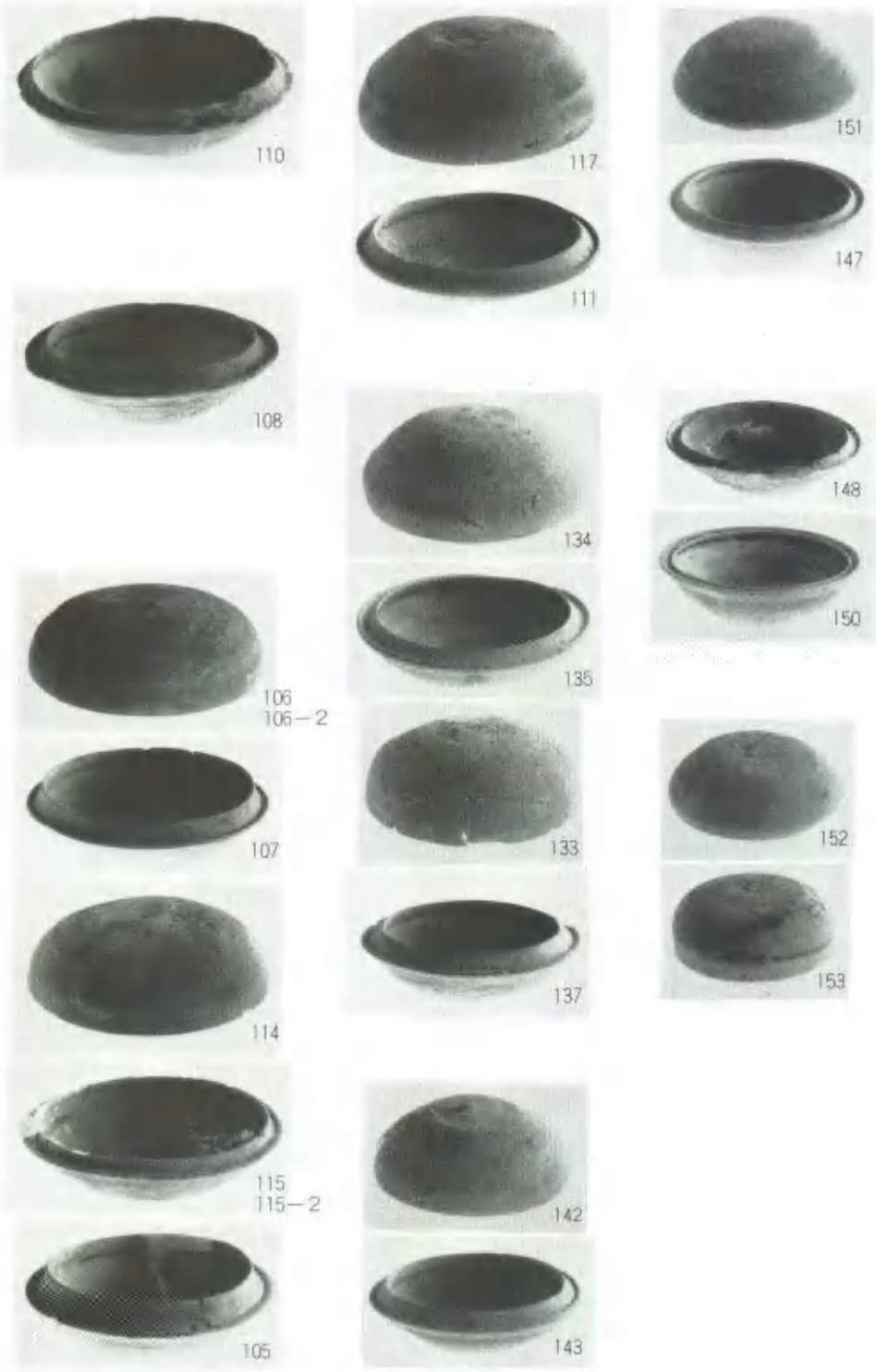
70頸部内側

88の底部

20．須恵器２および窯印

21．須恵器３および土師器

図版14

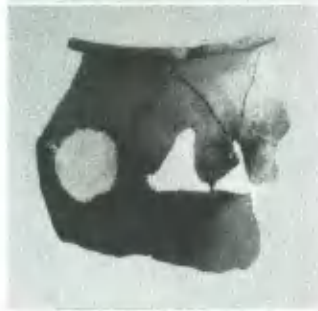

110
117
151
111
147
108
134
148
150
135
106
106－2
133
152
107
137
153
114
115
115－2
142
105
143

22．須恵器4

176

174

175

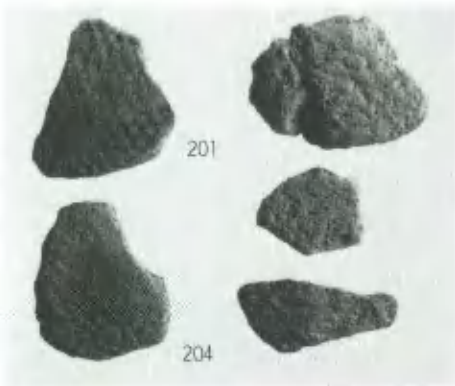

179

172

180

181

185


201
202
203
204
205

184

23. 弥生式土器および縄文式土器

戸谷（とだに）遺跡 (34)

目　　次

1. 調査の経緯…… 492
2. 遺跡の位置…… 493
3. 調査の概要…… 496
4. 出土遺物…… 496
5. まとめにかえて…… 499

図　目　次

第1図　遺跡の位置図　1/50,000…… 493
第2図　遺跡周辺の地形　1/1,000 …… 494
第3図　トレンチ配置図　1/400 …… 495
第4図　住居址平面図　断面図…… 497
第5図－1　住居址出土遺物実測図…… 498
第5図－2　住居址出土遺物実測図…… 499

図版目次

図版1－1　遺跡全景…… 501
　　2　遺跡全景…… 501
図版2－1　住居址全景（東より）…… 502
　　2　住居址全景（北より）…… 502
図版3　　出土遺物…… 503

1. 調査の経緯

昭和45年に行なわれた分布調査で近接の台地上から土師器細片が採集されていた。本調査地が同様な地形であることから，遺構の存在を想定し調査対象地とした。（調査に先だって数ケ所にグリッドを設けて包含層等の確認をしたが，遺物・遺構は全く認められなかった。したがって調査対象から除外すべしの声もあったが，重機によってでもトレンチを入れてみることにした。）

調査は昭和49年９月20日から開始し，４～５ｍ間隔に重機でトレンチを掘り，谷部分には傾斜に直交するトレンチを入れた。その結果，台地の西斜面にかかるトレンチで竪穴式住居址１を検出し拡張した。台地上のトレンチでは表土が約20㎝で地山に達し，遺物とも皆無であった。谷部分のトレンチも包含層はなかった。本調査で検出した遺構は，住居址以外にはない。なお調査・整理・報告書作成は橋本が担当した。

日　　誌

昭和49年９月18日（水）ユンボによるトレンチの掘削，東より第１～第７トレンチとする。第６までは遺構・遺物はなかったが，第７トレンチで黒褐色土を検出，須恵器・土師器片出土，住居址と断定した。北東隅を一部破壊した。

９月19日（木）　住居址の検出作業，床面より須恵器片・土師器出土。

９月20日（金）　土層断面の実測，柱穴４本検出，住居址西辺には後世の削平により残っていない。

９月21日（土）　住居址床面清掃，写真撮影，床面の東半部分は貼り床になっている。ユンボによる周辺部の試掘，住居址の北側，南側には遺構なし，西側谷には水田の跡もなく，約２ｍで地山粘土が出る。さらに西側の台地上には遺構はなかった。

９月24日（火）　平板測量，貼り床を除去すると，古い床面に直径５㎝前後の杭あとを多く検出した。

９月25日（水）　古い床面検出，写真撮影，住居址実測

９月26日（木）　住居址断面実測，調査補足

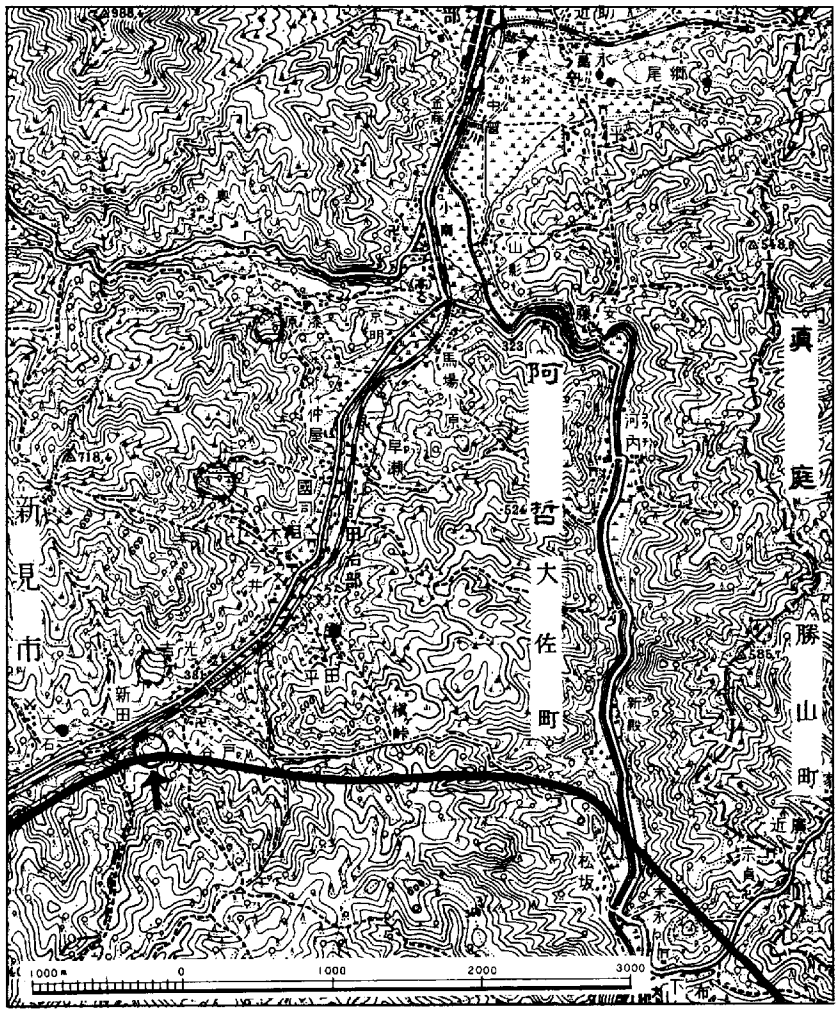
2. 遺跡の位置

行政的には，岡山県阿哲郡大佐町田治部に属する。中国山地と連なる標高1,000m 級の山々の南辺に，小阪部川によって形成された小阪部盆地の南に位置する。小阪部川の支流田治部川と高梁川の支流の熊谷川の分水界付近には，比高10～20mの小起伏の第三紀丘陵が分布している。

本遺跡も山麓北斜面の国鉄姫新線を眼下にみおろす舌状の丘陵に位置する。付近には類似する地形がみられ，東丘陵上に土師器が散布しており，本遺跡もその可能性が大きいとして遺跡としたものである。丘陵の末端は，熊谷川の侵食で急崖をなし，東は谷水田をもつ谷，西に浅い谷をなしている。背後には貝化石等を含む泥岩よりなる丘陵に高さを増してつながる。

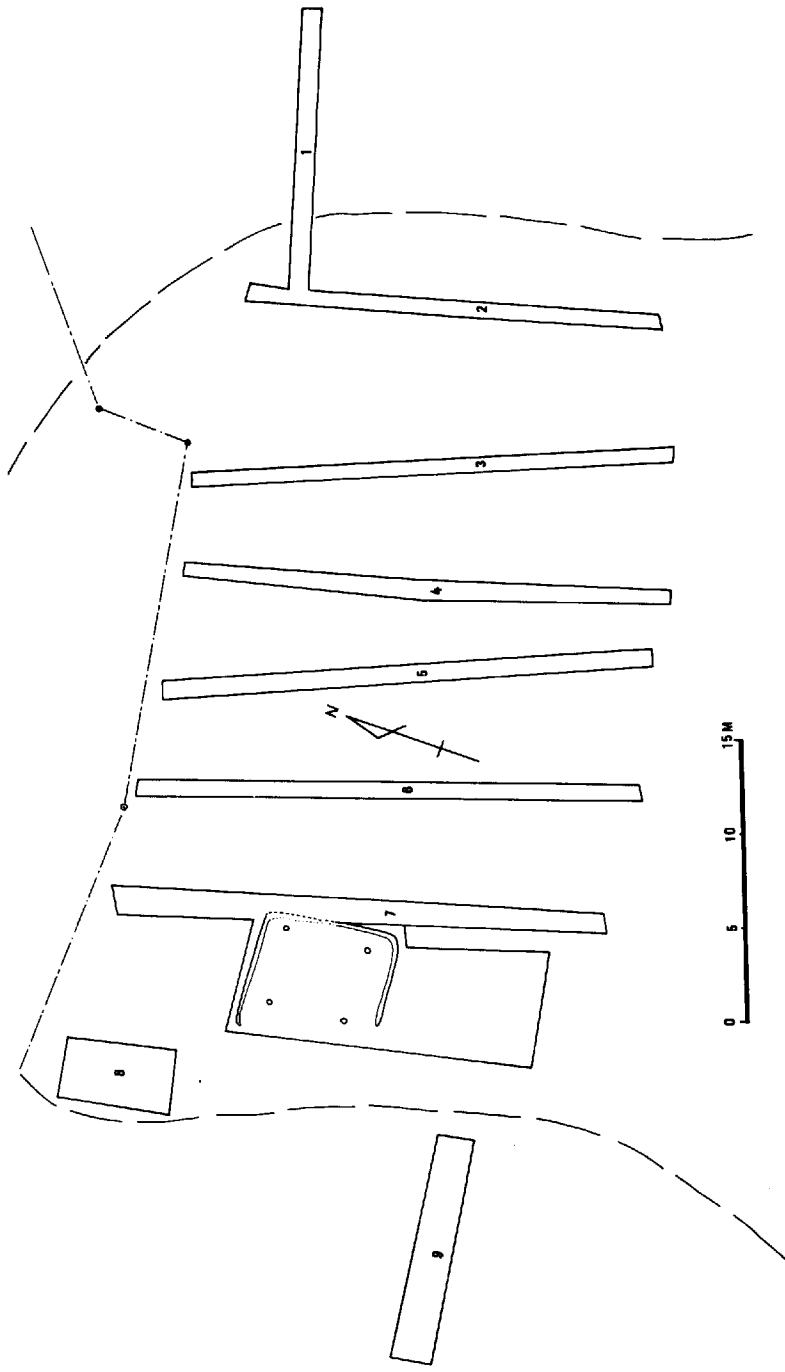
本遺跡の周辺には，大山古墳群，焼田山古墳群，大石古墳，国司遺跡などがある。(注)

(注) 岡山県埋蔵文化財報告１　1971　岡山県教育委員会



第１図　遺跡の位置図

第２図　遺跡周辺の地形図



第3図 トレンチ配置図

3. 調査の概要

検出した竪穴式住居址は約6.5m×約6mの隅丸長方形を呈し，長辺を北に向けている。これは舌状にのびる台地の方向とほぼ一致する。重機によるトレンチ掘削時で北東隅が消失した。住居址の東半部では壁高60～70cmで埋土内からは土師器片が少量出土した。西半部は後世の畑地で削平され，壁高は次第に高さを減じ，西辺は壁溝も検出できなかった。

柱間はいずれも4mで，柱穴の深さは20～40cmを測る。壁溝は巾25cm・深さ10cm前後で北辺と南辺では削平により消失している部分もある。床面は北辺部を除いて貼り床をして平坦面としている。

床面からは須恵器大甕片，杯片・土師器片・砥石，中央部のピットから須恵器蓋が出土した。これらの遺物はいずれも奈良時代に比定できる。

この貼り床を除去して，コの字形をなす2条の溝，焼土・木炭片で埋積されたピット2，直径50cm，深さ80cmのピット1，2条の溝に伴うと思われる杭あとがかなり検出された。なおこれらの貼り床土から縄文式土器（前期）が数点出土した。

4. 出土遺物（第5図）

須恵器

杯身 (1) 復元口径11cm，器高4.7cmで体部口縁部は直線的に外傾する。シャープなつくりで，内外面に仕上げナデがみとめられる。灰色を呈する堅い焼成である。

杯身 (2) 復元口径12cm，器高4.7cmで体部，口縁部とも直線的に外傾する。灰白色を呈しやや軟質である。

杯蓋 口径17cmを測り，天井部は低く，口縁端部がわずかに下がり，器高は1cm前後である。つまみが付されていた状態はない。灰色の堅い焼成である。

壺口縁部 口径4.5cm，高さ3.5cmの口縁部で，口縁端部が上にのびるくせがある。自然釉が一部かかり堅い焼きである。

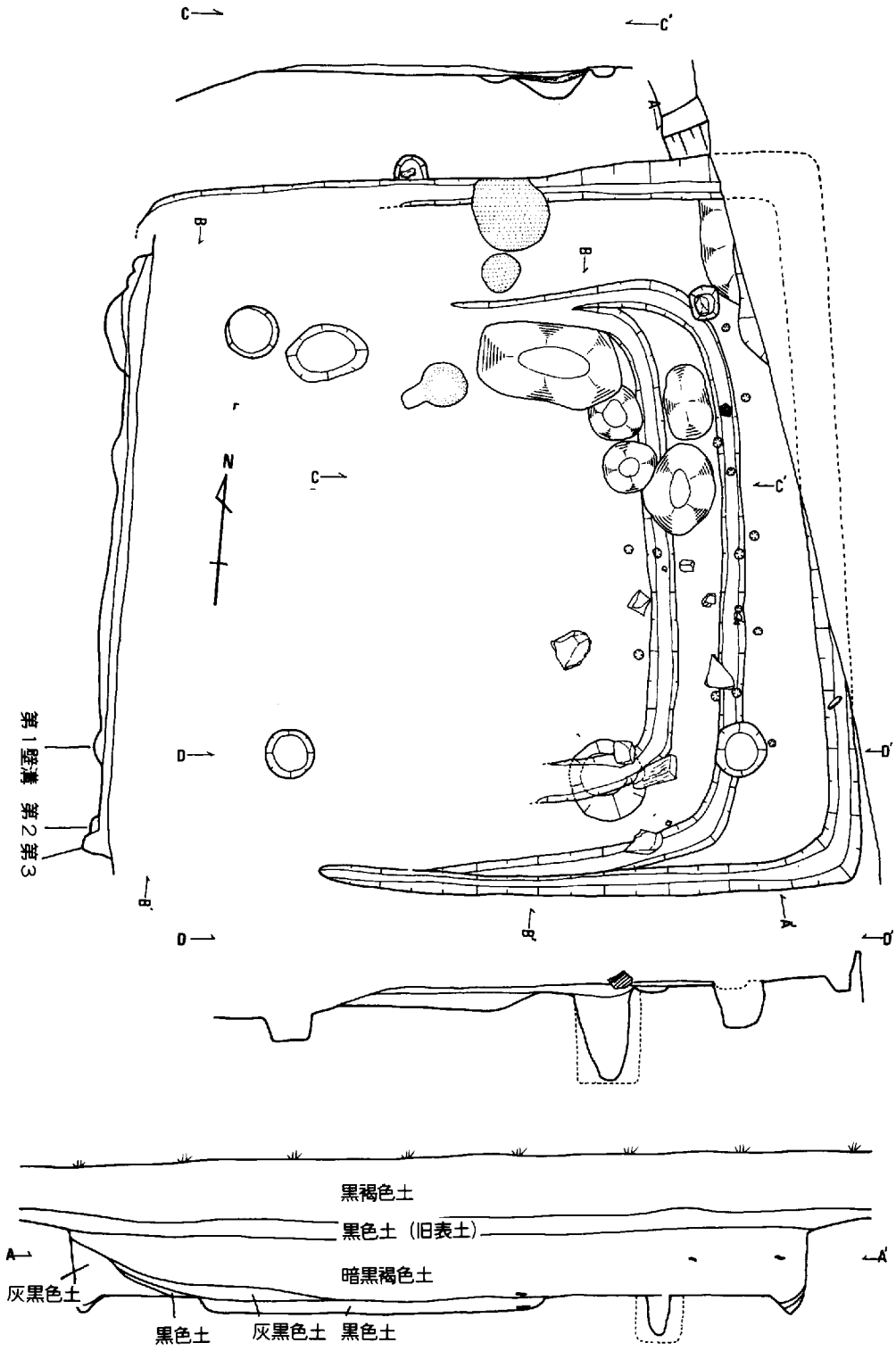
大甕片 床面から出土した。外面は斜格子状のタタキ目，内面は青海波文がみられる。

土師器 住居址内から出土した土師器片のうち，実測可能なものは少なかった。いずれも，口径19～20cmを測る甕の口縁部である。口縁部は外反し，内外面とも横ナデによる仕上げで，胴部内面はヘラ削りの手法が，外面は粗いハケ目が観察できる。

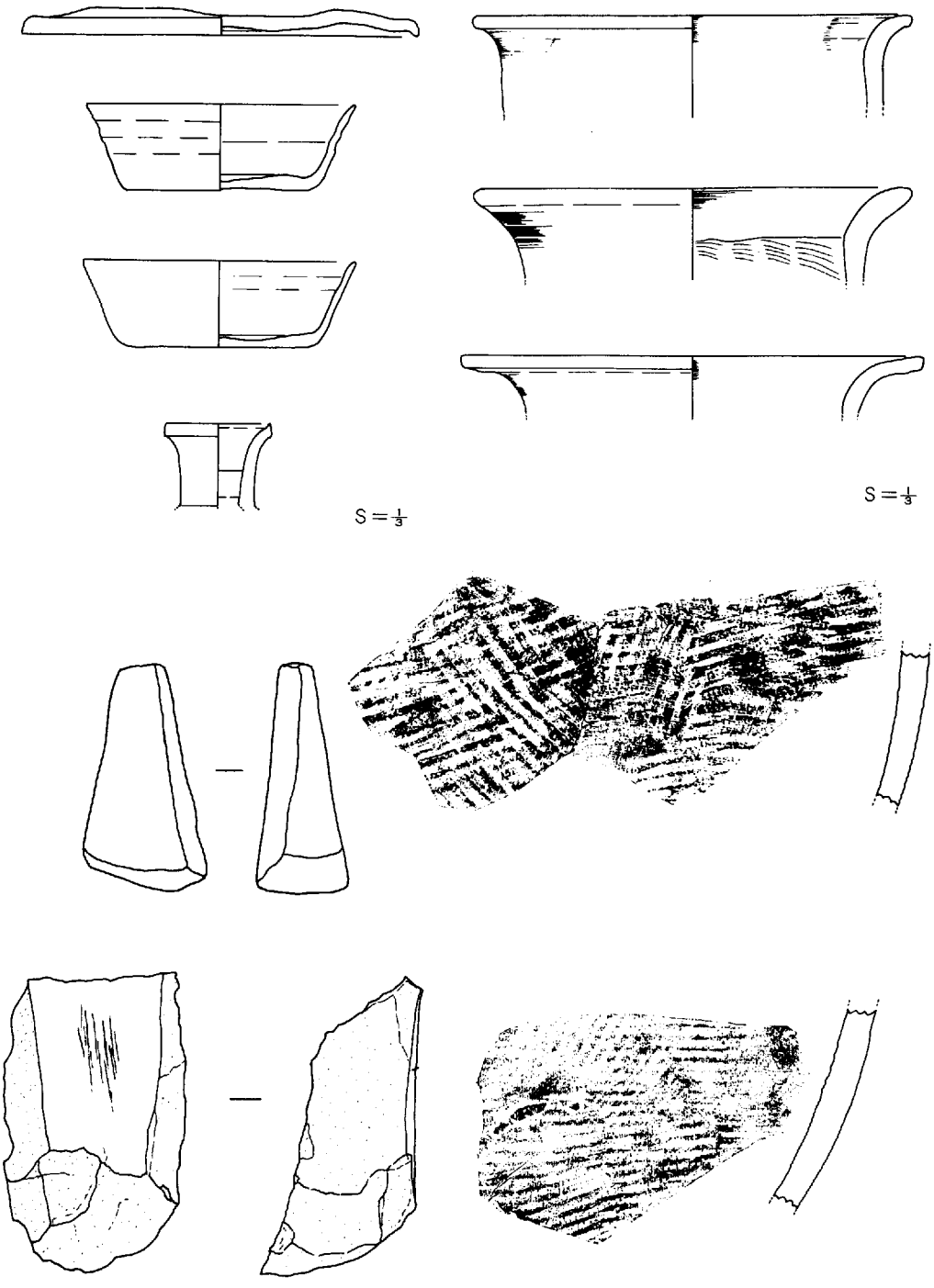
砥石 硬砂岩製で，よく使われており，使用痕が著るしい。

縄文式土器

住居址の貼り床から出土した。いずれも凹線が施こされ左は口縁部に刻み目を施こし凹線と刺突



第4図　住居址平面図，断面図



第５図―１　住居址出土遺物実測図

第5－2　縄文式土器

文を配している。内面はヘラでていねいに研磨されている。瀬戸内沿岸の縄文遺跡として著名な，羽島下層の土器に類似している。胎土には砂粒を含み黒色を呈する。本遺跡は熊谷川の最上流に位置するが本流高梁川に合流する付近の青地遺跡（本書後掲）から出土した縄文式土器とも酷似する。

（注）鎌木義昌編　日本の考古学Ⅱ　縄文時代　1965　河出書房

5. まとめにかえて

古代集落の発掘例は次第に増加しているなかでそれまで竪穴式住居がそのほとんどを占めるという通念に大幅な修正がせまられている。すなわち掘立柱住居が採用されはじめるのは畿内とその周辺で7世紀前半と考えられているのである。さらに竪穴から掘立への動きは地方へ波及し，関東地方では平安時代後半まで貧困者の住居として竪穴が使われていたようである。（注）

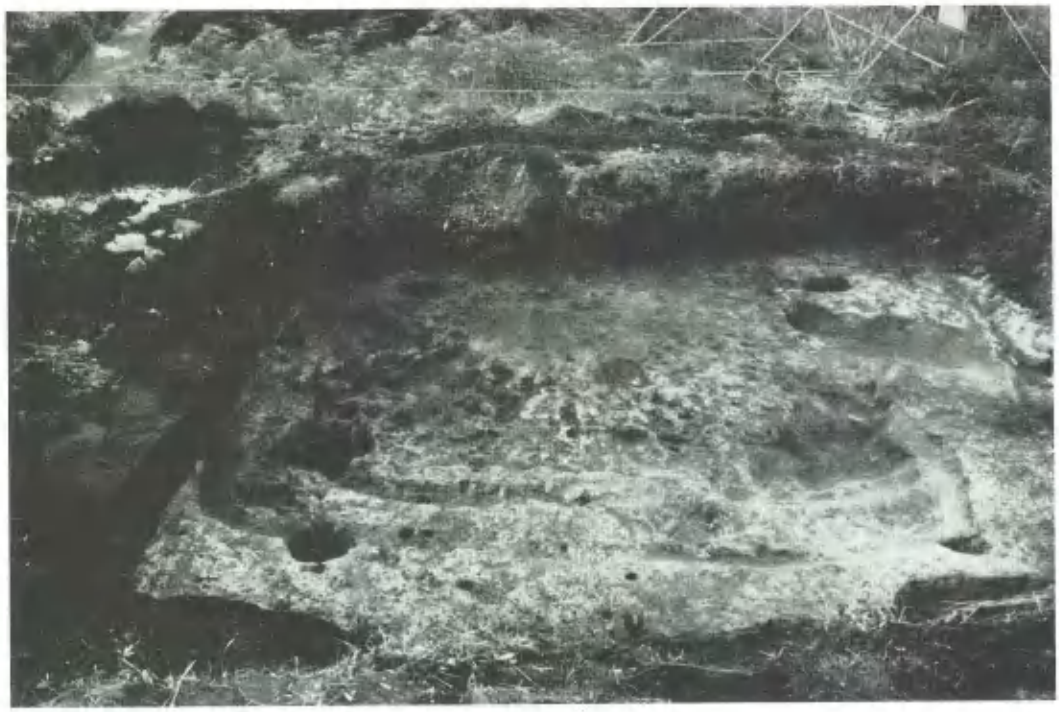
本遺跡の竪穴式住居址は出土遺物からみて，8世紀と考えることができる。しかし住居内にかまどはなく，地辺に焼土面が遺存しているのみであった。また，単一の立地で集落を形成していないことなどに多くの疑問を残している。

岡山県北部において，奈良時代と考えられる一般住居址の検出例はきわめて少ないため，不明な点が多い。本遺跡は和名抄に従えば，備中国英賀（あが）郡丹部（たじべ）郷に属すると思われる。地方における律令体制の下部組織である里（郷）の実態，一般農民の生活など詳かでないが，山間の一地域に竪穴式住居が奈良時代まで存続していることの一資料となるであろう。（橋本惣司）

（注）古代史発掘　10　都とむらの暮し　歴史時代2　講談社

戸谷遺跡遠景

図版２



戸谷遺跡住居址（北より）

砥　石

縄文式土器

住居址内出土遺物

塔の畝遺跡(35)

目　　次

立　　地…… 508
遺構・遺物…… 508
ま と め…… 511

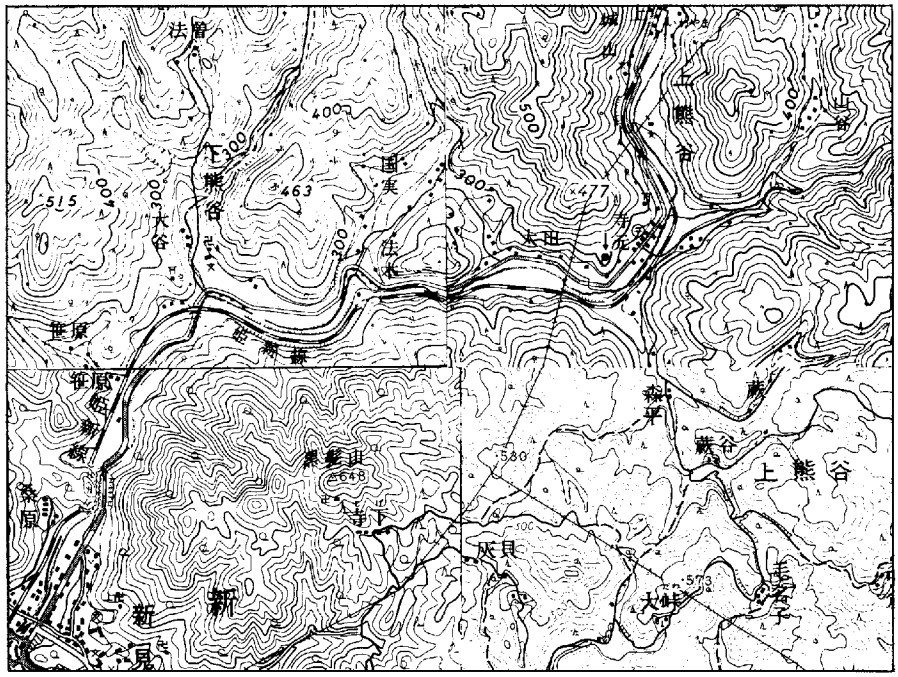
図　目　次

第1図　地　形　図（1/5万）…… 508
第2図　塔の畝遺跡地形図（1/1,000）…… 509
第3図　出土遺物実測図…… 511
第4図　遺 構 実 測 図…… 515

図 版 目 次

図版1　1調査前の状態（南より）…… 517
　　2基壇の検出状態（南より）…… 517
図版2　1遺構の検出状態（南より）…… 518
　　2壇と溝の状態（西より）…… 518
図版3　1石組みの状態（南面）…… 519
　　2石組みの状態（西面）…… 519
図版4　1遺跡の航空写真（東方より）…… 520
　　2遺跡の航空写真（南方より）…… 520

立　　地

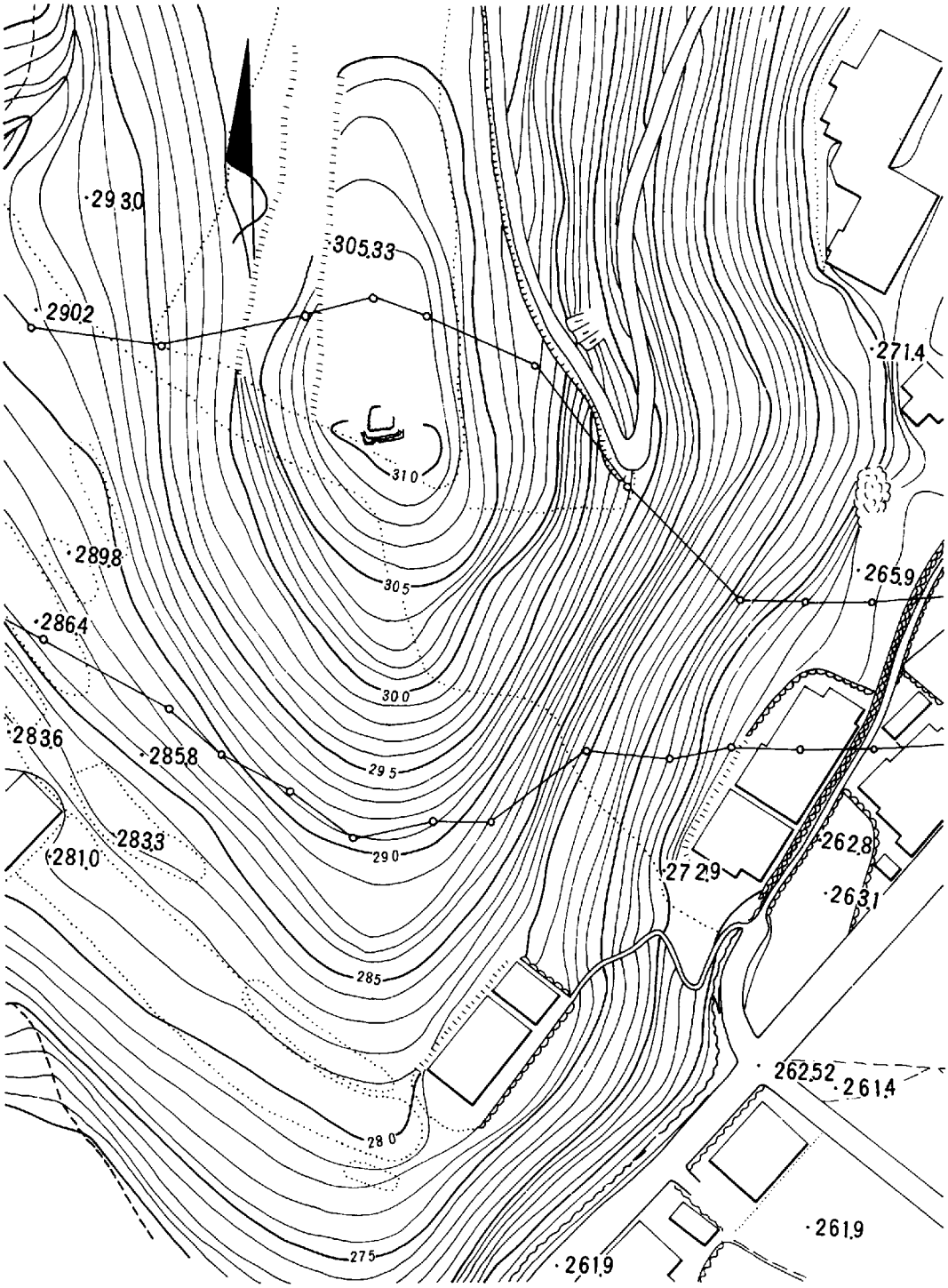


第1図　地　形　図（$\frac{1}{5}$万）

塔の畝遺跡は，新見市上熊谷寺元に所在する。同遺跡は，熊谷川により開かれた帯状の平地の南側の丘陵上にあり，付近一帯を見通せる位置にある。この帯状の平地は，同遺跡の付近を終点とし，川に沿ってさらに上流の大佐町刑部付近まで続き，岡山県北部における一つのまとまりある平地を見せる。この平地も，下熊谷の竜頭を境に，新見市街地との断絶を見せる。また，丘陵の裾には県道新見一勝山線があり，さらに，ほぼ平行して国鉄姫新線が走っており，この一帯は東西を結ぶ交通上の重要な経路でもある。

遺　　構

検出した遺構は，石積の壇と，地山の岩盤を掘り込んだ溝である。石積遺構は，発見当初は，石が散乱していたものである。それは長年の風雪等により崩壊したことにもよるであろうが，一つには，同地が桧の植林地であること，そしてもう一つには，遺構のある丘陵の裾に，寺があるが，昭和の初期に，同寺の石垣を造るのに，その石を一度利用したことがあるとのことである。しかし，それは祟を恐れて，再び元の場所に持ち帰ったと言うことである。そのため，発見時の遺構は，ただ石が散乱する状態であった。



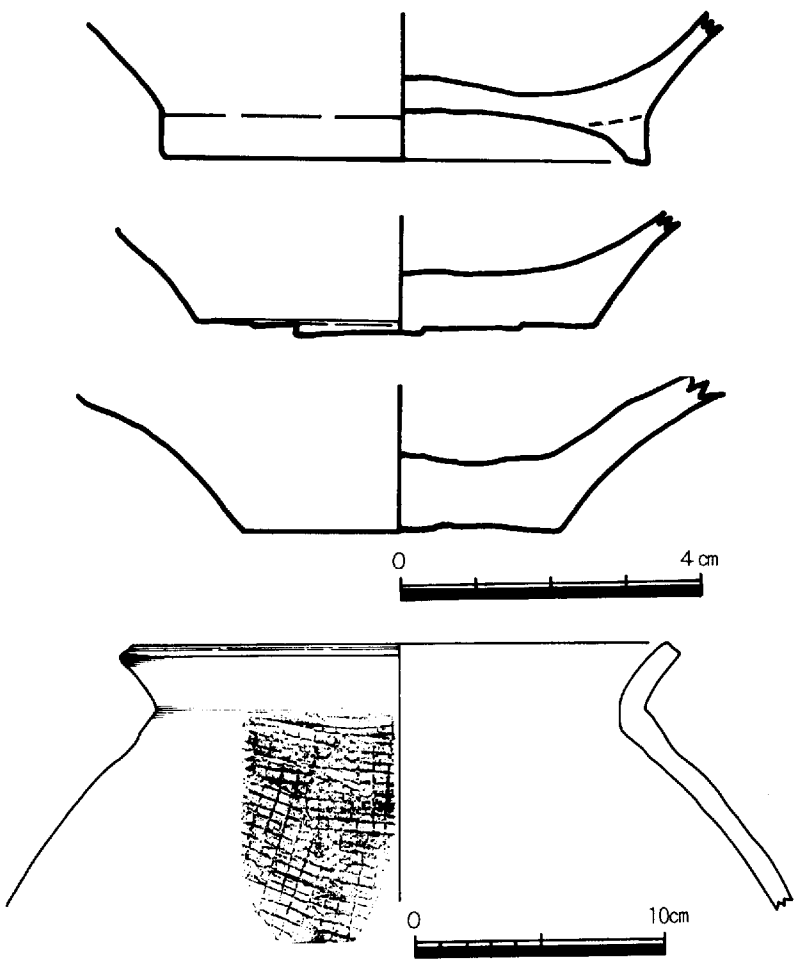
第２図　塔の畝遺跡地形図　　1：1,000

散在する石で，遺構から離れていると考えられるものを除いてゆき，各々の石が組み合った状態で残ったものが，検出した遺構である。それは，3.3m×3.4m四方の石積の基壇であり，その最下段のみを検出した。その壇も，四辺が完全に残存するのではなく，北東の一部は，完全に破壊されておりすでに残存しなかった。発見当時に散乱していた石が，すべてこの遺構に関係するものと考えれば（むしろ，そう考えるのが自然であるが）その石の数量からして，この遺構は，石積による壇を数段推定することができる。壇は50～80×40～50cmの石を一列に並べて，それを組み合せて四方を囲み，その中にも，同程度の石で間をふさぐものである。そして，石の上面および前面はほぼ平らにそろえられている。この初段の内部を埋める石を除くと，石組みのほぼ中央に，2～3cmの厚さで炭の層を検出した。それが何を物語るのかは不明であるが，この遺構に関係することは確実である。そのように推察する根拠は，炭の層と石とが密着しており，さらに炭の一部は，その上部にある石組みの間にも混入していたことから，その関係を考えるものである。つまり，そこに炭層が形成された直後から，遺構の築造が開始されたと考えるのである。これら石積遺構をとりかこむように掘搾された溝は石積遺構をほぼ中心にして石列線と若干のずれをもって，岩盤に掘り込まれていた。発掘当時は，用地買収の関係で，その全体を明らかにすることはできなかったが，遺構を取り囲むことは推定できる。しかし，西側の一部は，丘陵の斜面にかかり，岩盤に掘り込んだ溝は検出できなかった。これは，地形が，それの築造当時と大きく変っていないとすれば，当初からその部分には存在しなかったと考えられる。溝の規模は，その巾が0.8～1.1mで，内法が4.8～5.3mのうちにあり方形に廻るものと考えられる。

出土した遺物のほとんどは，遺構の南面からである。須恵質の甕は，上層の腐植土を取り除いた面に散在していた。また若干のものは，散在する石組みの間からも出土した。土師質の土器は，溝の埋土中からの出土である。溝は遺構に関連して掘られたものと推定するものである。しかし，石積遺構の各辺と溝の方向には，若干のずれがある。また，土層断面図から見れば無関係とも考えられるが，岩盤の上層の土層は，表層の腐植土を除いて，判別の困難な土層である。そのため中間に一層あることも考えられる。いずれにしても，溝を埋める土もさらに上層の土も，土質的には非常によく似た土層ではある。しかしながら，方形に区画する溝のほぼ中央に石積遺構があること，溝の埋土中より出土した土師器から見て，大きく時期的にへだたりのあるものとは考えられないことからして，一応の関連性は考えておきたいが，その溝は比較的に早い時期に埋まり，その溝が完全に埋って後に甕がこの位置に持ち来られたものであろう。そうすれば，遺構は，出土した甕が作られた時期よりも，若干は溯るものと考えることができる。

遺　　物

遺物としては，須恵質の甕と土師質の灯明皿が出土している。須恵質の甕は，口縁部が「く」字状に外反するもので，端部は平らに造っている。口縁部の内外面はヨコナデであるが，外面の肩部から下部は格子目の叩きである。内面はナデにより形成している。胎土は須恵質であるが，緻密で



第3図　出土遺物実測図

堅く焼きしまった状態ではない。土師質の土器はその全形を示すものは出ていないが，出土している底部からして，灯明皿状のものと考えられる。底部は二種類あり，高台を貼付したものと，底面ヘラ切りのものとである。いずれも淡褐色で，胎土は比較的良質であり，若干の黒雲母を含んでいる。出土遺物の時期であるが甕は平安時代の後半に比定できるものと考える。

なお，遺跡の調査は，昭和48年９月13日に着手し，同月30日に終了した。

ま　と　め

遺跡のある地域の，古代の郡郷名を『和名抄』に求めると，英賀郡丹部郷がそれに相当すると考えられる。つまり，『和名抄』（刊本）（註１）に見られる英賀郡の各郷名は，現在の地名とそれ等を対応させることが可能である。英賀郡の郷名を『和名抄』に拾うと，中井，水田，告部，刑部，丹部，林郷である。中井の訓は「奈加都井」であり，現在の北房町中津井と対応する。水田の訓は「美都多」であり，同じく北房町上水田と対応する。告部の訓は刊本では「安多」であるが，高山寺本では「安作へ」とある。（註２）いずれにしても，北房町上告部・下告部が相当する。刑部の訓は「於佐加倍」であり，現在の大佐町上刑部，同町小阪部が対応する。丹部の訓は「多知

註１『和名類聚鈔』風間書房

註２　池辺弥『和名類聚抄郷名考證』吉川弘文館

倍」であり，現在の大佐町田治部がそれに対応する。林郷であるが，『和名抄』にはこの訓を記していない。そのため，その訓は推定せざるをえないが，結論から言えば，菅生が相当すると考える。つまり，菅生の訓は「すごう」である。林郷の「林」の訓は不明であるとしても，「郷」は「ごう」であろう。「林」も漢和辞典（註3）によれば，「しゅ」の訓が考えられる。つまり，林郷の訓として，「しゅごう」が考えられるのである。これは，文字は異っているが，菅生に対応させることができるであろう。以上のように対応させると，丹部（たじべ）を現在の大佐町田治部に求めることが可能である。遺跡の存在する上熊谷は，現在の行政区分によると新見市になるが，合併前は阿哲郡であり，大佐町とともに同一郡内である。阿哲郡は古代の英賀郡と哲多郡の合併したものであり，大佐町付近は，古代の英賀郡に相当する。

丹部郷を新見市熊谷及び大佐町田治部を含む範囲に求めるとすれば，この郷の中心部分を形成する地域は，熊谷川沿に展開する帯状の平地が，それに相当するであろう。そして，遺跡の存在する付近は，熊谷川流域にみられる狭く細長い平地の端部にちかい。また遺跡の南面には，備中南部から新見市唐松市場を経て，この地に到る通路があり，その付近には古代末から中世にかけての国衙領の政所が推定されている。（註4）

古代の丹部郷に西接して，哲多郡新見郷が存在していた。古代末期には，この新見郷を中心とした荘園が成立している。（註5）この新見庄は成立当初は京都の最勝王院がその領主であったが，後に教王護国寺（東寺）の領有するところとなった。そして東寺百合文書には，この新見庄に関係する多量の史料が存在する。その文書によれば，丹部氏の横領振りが繰り返し述べられている。その丹部氏は，丹部郷を中心にその勢力を伸張してきた武士団である。

塔の畝遺跡は，その出土遺物が平安時代の後期に比定されるものと推察した。そして，遺構はその出土遺物と同時期，もしくは若干溯るものと考える。つまり，古く考えれば平安時代の中期以後のある時期にそれが築造されたものと推測するものである。この遺構のある尾根の裾に，小さな寺がある。松雲寺（万福寺）である。現在は，そのたたずまいは質素であるが，その本堂に古い一体の阿弥陀如来仏がある。現在では新見市の重要文化財に指定されている。その仏像の製作年代は，鎌倉時代初期と考えられている。仏像の製作年代は，鎌倉時代初期であるが，伝承によれば，その仏像の安置されていた寺院は，平安時代の中頃に建立されたとの寺伝がある。この阿弥陀如来仏の開眼供養が行なわれた場所は，現在安置されている所ではないであろう。しかし，この近辺にかってその阿弥陀如来仏を本尊とする仏殿の存在したことは推察できる。その正確な場所は不明としても，遺跡の存在する付近の字名を『寺元』とするのは，過去にこの付近に寺院の存在したことを暗

註3　『字源』（台湾，商務印書館）によれば，林の字義を，衆也，盛也，繁也としており，同義語であることを述べている。『角川漢和中辞典』（角川書店）によれば，リンの音は，衆木の衆の音が変って平声になったもの。」と解説しており，さらに同辞典には人名の訓として，「しげ」と読む例を揚げている。いずれにしても，林に「し」・「せ」の音があったことを窺わせるものであろう。

註4　松尾惣太郎『新見市史』

註5　松尾惣太郎『新見市史』　杉山博『荘園解体過程の研究』東京大学出版会

示していると云えるであろう。つまり，新見市上熊谷の小字名を地籍台帳（註6）の地番に拾うと，4012，4040に「寺元」があり，4025，4035，4040に「寺ワキ」，4007，4019に「蓮下寺脇」，4054，4060，4063に「大門」の地名がある。4007番地から4063番地の間に，寺院に関係する地名が存在する。以上のように，比較的狭い範囲内に寺院に関連する地名が集中することは，これ等の小字名の在する付近に，寺院が存在したことの名残りと考えることもできるであろう。

この遺跡の名称は，遺構の存する丘陵の小字名によった。その字名による『塔の畝』の発音は『トウノウネ』もしくは『ドウノウネ』である。ここに言う「ウネ」は，一つの高まりを示した普通名詞であり，この場合は丘陵を示したものである。この地名で注意したいのは「トウ」の方である。この「トウ」は数ある建築物の内の一種類を示す名詞である。その言葉がここの地名で使用されていることである。このことは，かってこの場所に，この地域の人々によって，「トウ」と意識され，またそう呼ばれていた構造物のあったことを示唆していることを窺わせるものであろう。

石積遺構の類例を他に求めることは，非常に困難である。この種の遺構の報告は皆無といってもよいほどである。そういう状況の中で，これに類以するものを求めれば，兵庫県箕面市勝尾寺（註7）の牓示がある。この場合は寺に牓示に関する史料があり，それに付合するものであり，勝尾寺の四至の境堺を示すものである。塔の畝遺跡の場合は，検出できたのが最下段のみであるが，その形態に類似点を見い出すこともできるであろう。しかし，この地域にあって，他にこの種の遺構が発見されていない点は，牓示とするには不充分であろう。

岡山県熊山町の熊山の山中には，国指定の石積遺構を中心に，多数の小石積遺構が存在する。（註8）それ等の実体は，最近明らかにされつつあるが，いまだ確定した説はないのが現状であろう。ここでは，それ等の中の小石積遺構に，その形態が酷似する点に注目しておきたい。しかし，その遺構の持つ性格が共通するか否かは，現状では不明である。ただ，熊山石積遺構群の場合には，それが群全体としての意味を持つものであることを考慮に入れる必要がある。遺構の位置する場所を見れば，塔の畝遺跡は，丘陵の尾根にあり，付近が一望できる場所であり，占地の位置としては最も有利な場所である。そのことに関しては熊山の小石積遺構との違いを感じさせる。塔の畝遺跡の例では，それが単一で発見されているところに特徴があり，他の遺跡との相違点がみられる。しかし，塔の畝遺跡付近の精密な遺跡分布調査は実施されておらず，今後とも，これに類似した遺跡・遺構が発見されないともかぎらない。その点は考慮しておく必要があろう。そのことは，今後の重要な課題と考える。いずれにしても，それが「トウのウネ」と呼ばれていることは暗示的である。

勝尾寺の牓示の場合は，述べるまでもなく，熊山遺跡の場合も，仏教に関係して説かれることが多い。熊山遺跡の場合は，いまだ確定しない部分が多いが，やはり考慮する必要はあろう。ところで，塔の畝遺跡であるが，この遺跡に関しては，先にも述べたが，この遺構が築造されたのと非常

註6　新見市地籍台帳，同台帳の閲覧にあっては，新見市税務課，及び，新見市役所熊谷支所の便宜を得た。記してその謝意を表わします。

註7　『新版仏教考古学講座』寺院　雄山閣

註8　『熊山遺跡調査報告書』熊山町教育委員会

に近い時期に作られた仏像が，この遺構に近い場所に存在する。この点は全くの偶然であるかも知れない。むしろ，それを関連づけて考えることは早計に過ぎるかもしれない。しかし，それ等が非常に接近した時期に造られたものであることは注目しておく必要を感じるものである。(註9)

(井上)

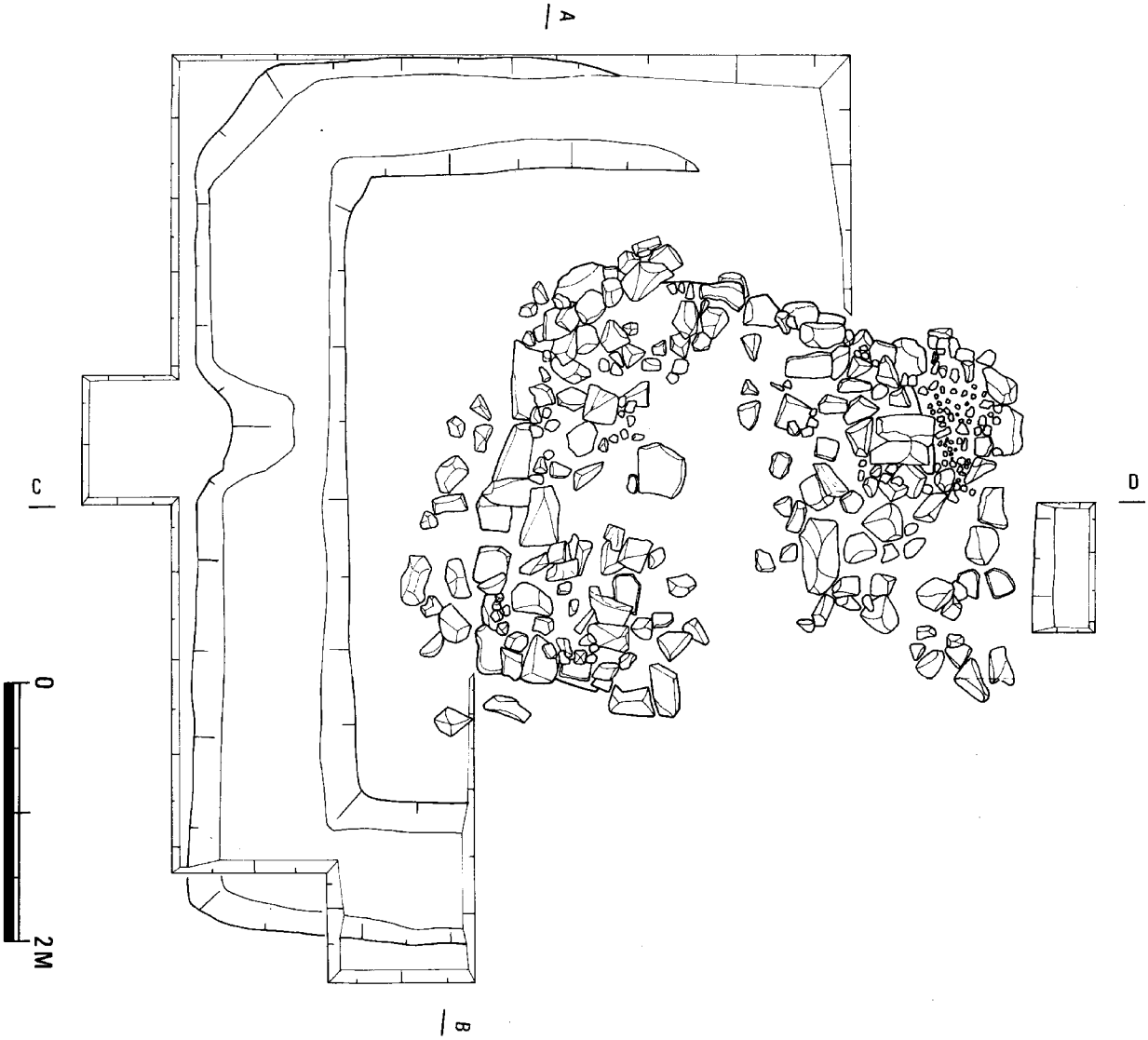
註9　インド，セイロンの寺院の周囲には，ストッパーが林立する例が多く見られる。また，アサヒグラフの1月30号には，チベットにおける，同類の写真の掲載が見られる，そのように寺院の周囲に小ストッパーを建立することは，日本にも伝来したと考えられる旨の教示を難波俊成氏より得た。

記

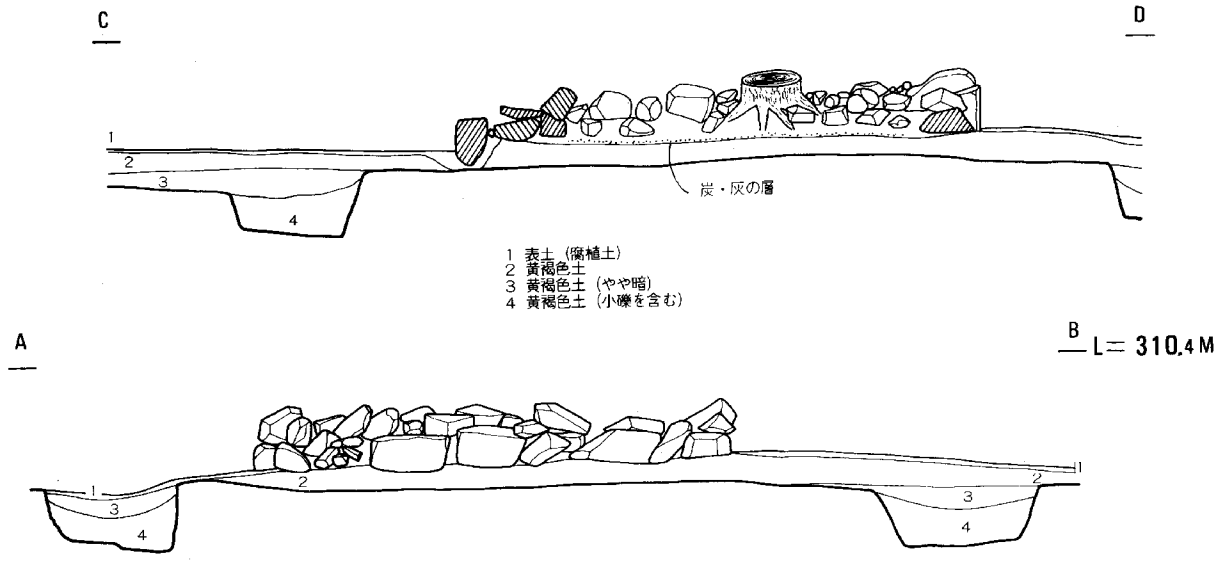
塔の畝遺跡発掘作業員

山上薫，竹崎英春，戸田雅由，田中千恵子，富谷梅野，富谷千枝子

調査中は，上記の人々の協力と助力を得た。また，難波俊成氏からは，多くの御教示を得た。さらに松雲寺住職小林勇氏には種々のお世話になった。記してその謝意を表わします。


A
B
C
D
0
2M

第4図　遺構実測図


C
D
1
2
3
4
炭・灰の層
1 表土（腐植土）
2 黄褐色土
3 黄褐色土（やや暗）
4 黄褐色土（小礫を含む）
A
B
L＝310.4M
1
2
3
4

1．調査前の状態

2．基壇の検出状態

図版2

1．遺構の検出状態

2．壇と溝の状態

1．石組みの状態（南面）

2．石組みの状態（西面）

図版４

１．遺跡の航空写真（東方より）

２．遺跡の航空写真（南方より）

青地遺跡 (36)

目　　次

第１章　遺跡の立地と調査経過…… 525
第２章　遺　　構…… 531
(1)　土壙出土遺物…… 531
(2)　住居址及び出土遺物…… 537
(3)　周溝及び出土遺物…… 542
第３章　遺構に伴わない遺物…… 545
第４章　まとめにかえて…… 549

図　目　次

第１図　青地遺跡地形図（1/1000）…… 529
第２図　青地遺跡遺構配置図（1/500）…… 530
第３図　(1)　土壙実測図　№2，4，6，7（1/20）…… 533
(2)　土壙実測図　№14，15，21，22（1/50）…… 534
(3)　土壙実測図　№27，30…… 537
第４図　(1)　土壙№27出土縄文式土器…… 535
(2)　土壙出土縄文式土器…… 536
(3)　土壙出土弥生式土器…… 537
(4)　土壙№30出土土器…… 558
第５図　(1)　１号住居址実測図…… 539
(2)　１号住居址出土遺物…… 540
第６図　(1)　２号住居址実測図…… 541
(2)　２号住居址出土遺物…… 542
第７図　周溝１出土遺物…… 544
第８図　周溝２に伴う遺物…… 545
第９図　(1)(2)　遺構に伴わない縄文式土器…… 546
第10図　その他の遺物…… 548

表　目　次

表１　土 壙 一 覧 表…… 532

図 版 目 次

図版１－１　青地遺跡周辺航空写真（北東上空より）…… 551

2　青地遺跡周溝及び住居址（西より）…… 551
図版２－１　青地遺跡全体写真（南西より）…… 552
2　土壙№７（東より）…… 552
図版３－１　１号住居址（東より）…… 553
2　２号住居址（南より）…… 553
図版４－１　周溝１土器出土状況（北より）…… 554
2　周溝２（南より）…… 554
図版５－１　周溝・住居址検出状況（南より）…… 555
2　発掘風景（南西より）…… 555
図版６　遺構に伴わない縄文式土器…… 556
図版７－１　土壙№20出土縄文式土器…… 557
2　土壙№21出土縄文式土器…… 557
図版８　土壙№27出土縄文式土器…… 558
図版９－１　H－１，２　周溝１埋土出土縄文式土器…… 559
図版10　土壙№30及び出土土器…… 560
図版11　周溝１，２出土遺物…… 561
図版12　住居址１，２出土遺物…… 562
図版13　石器，その他…… 563

第1章　遺跡の立地と調査経過

青地遺跡は，新見市下熊谷青地に所在する。高梁川の支流である熊谷川とその沖積平野を見下す山裾のゆるやかな斜面に遺跡は位置する。谷平野とこの遺跡との比高は約17mである。この山陵の南東側には，横穴式石室墳数基とタタラ，窯状遺構等を有する遺跡が認められる（備北青年の家周辺）。

本遺跡は，中国縦貫自動車道建設工事に先がけて，昭和49年7月30日より約3.000㎡を対象に調査を開始した。8月9日までに南急斜面にトレンチ5本を設定し掘り下げを実施したが，遺構を確認することができなかったため 8月10日より 北側緩斜面の全面調査を開始した。この緩斜面には「七人塚」と呼称される近世墓があり，市道の断面に住居址が確認されていた。12月末を調査終了の目途として調査を進めたが，11月13日で終了することができた。これは，遺構検出面までの土量が少なく，表土下約20cmで生活面に当たることと，土質が黒ぼこと呼ばれる火山性土壌であったこと，さらに遺構が予想外に少なかったためである。

なお調査には，7月30日から9月15日まで，井上，浅倉両名が当ったが，井上が，塔の畝遺跡へ専従したため，9月16日から調査終了まで浅倉が専従となった。発掘面積は約2,800㎡。

日　誌　抄

7月30日（火）　津山収蔵庫，落合町一色宮の前遺跡から器材搬入。
7月31日（水）　宮の前から木材搬入。
8月1日（木）　グリット割，草刈り，市教委，公団へあいさつ。
8月2日（金）　グリット割，草刈り，トレンチ設定。
8月3日（土）　会議（津山）
8月5日（月）　トレンチ掘り下げ開始。
8月6日（火）～9日（水）　トレンチ掘り下げ。

8月10日（土）　トレンチ掘り下げ，表土除去開始。
8月12日（月）～13日（火）　表土除去。
8月14日（水）～16日（金）　盆休み。
8月17日（土）　表土除去，発掘風景写真撮影。
8月19日（月）　表土除去，住居址？検出。
8月20日（火）　表土除去，遺構検出。
8月21日（水）～24日（土）　表土除去，遺構検出。
8月26日（月）　２G遺構検出，１G柱穴１段掘り，３G表土除去（縄文式土器片採取）
8月27日（火）　３G，４Gトレンチ設定掘り下げ。
8月29日（木）　トレンチ掘り下げ。
8月30日（金）　トレンチ掘り下げ，３G表土除去。
8月31日（土）　３G表土除去（土壙５～６個確認）
9月２日（月）　３G表土除去。
9月３日（火）　３G表土除去，２G遺構掘り下げと平板実測（１/50）。
9月４日（水）　１G，２G遺構掘り下げ，平板実測，写真撮影，３G遺構検出。
9月５日（木）　１G，２Gレベリング（調査終了）３G遺構検出，写真撮影（検出状態），遺構掘り下げ，撹乱土（ごぼううね）の排除。
9月６日（金）　３G遺構掘り下げ（土壙，ピット）。
9月７日（土）　会議（津山）。
9月10日（火）　４G表土除去。
9月11日（水）　４G表土除去。
9月12日（木）　４G表土除去，３G土壙写真撮影。
9月13日（金）　４G遺構検出。
9月14日（土）　５G表土除去。
9月17日（火）　５G表土除去。
9月18日（水）　５G表土除去，３G土壙群プラン・セクション実測。
9月19日（木）　５G表土除去，３G土壙群掘り下げ。
9月20日（金）　３G土壙群実測，４G土壙掘り下げ，５G表土除去。
9月21日（土）　５G表土除去，遺構検出，溝状遺構掘り下げ。
9月24日（火）　５G遺構検出（周溝，住居址，土壙，縄文式土器，土師器，黒曜石）。
9月25日（水）　５G周溝検出（山形押型文出土）土壙，溝状遺構セクション線引き，６G表土除去。
9月26日（木）　６G表土除去，７G表土除去開始，土壙№10～20調査完了，溝状遺構掘り下げ。
9月27日（金）　７G表土除去，溝状遺構掘り下げ。
9月28日（土）　７G表土除去，溝状遺構掘り下げ。

青　地　遺　跡

9月30日（月）　7G遺構検出。

10月1日（火）　溝状遺構割り付け。

10月3日（木）　1G，3G平板実測。

10月4日（金）　4G平板実測（G1～4調査完了）

10月7日（月）　7G表土除去。

10月9日（水）　会議（各遺跡）。

10月11日（金）　5，6，7G遺構検出，スナップ写真，掘り方割り付け(サヌカイト製石鏃出土)
調査員疲労激しく病院通い。

10月12日（土）　住居址掘り下げ開始（砥石出土）。

10月14日（月）　住居址1掘り下げ，周溝1掘り下げ（縄文，弥生，土師，須恵器など出土）。

10月15日（火）　周溝1掘り下げ。

10月16日（水）　周溝1住居址1清掃，周溝2掘り下げ開始，その他土壙掘り下げ，写真撮影。

10月17日（木）　周溝1実測，住居址1実測，周溝2実測，ピット掘り下げ，住居址2掘り下げ。

10月18日（金）　住居址1，周溝2清掃，ピット写真，実測,土壙1～6実測,住居址2掘り下げ。

10月21日（月）　住居址2掘り下げ，周溝1，2，住居址1写真撮影。

10月23日（火）　H－1平板実測レベリング，H－2写真，実測，8G表土除去。

10月24日（木）　H－2写真，実測，8G表土除去。

10月24日（木）　H－2写真，実測。

10月25日（金）　H－2実測レベリング，9G検出，G10表土除去。

10月26日（土）　G5～8全体写真撮影，10G表土除去，H－1，H－2写真撮影。

10月28日（月）　G5～8平板実測（1/50），10G表土除去。

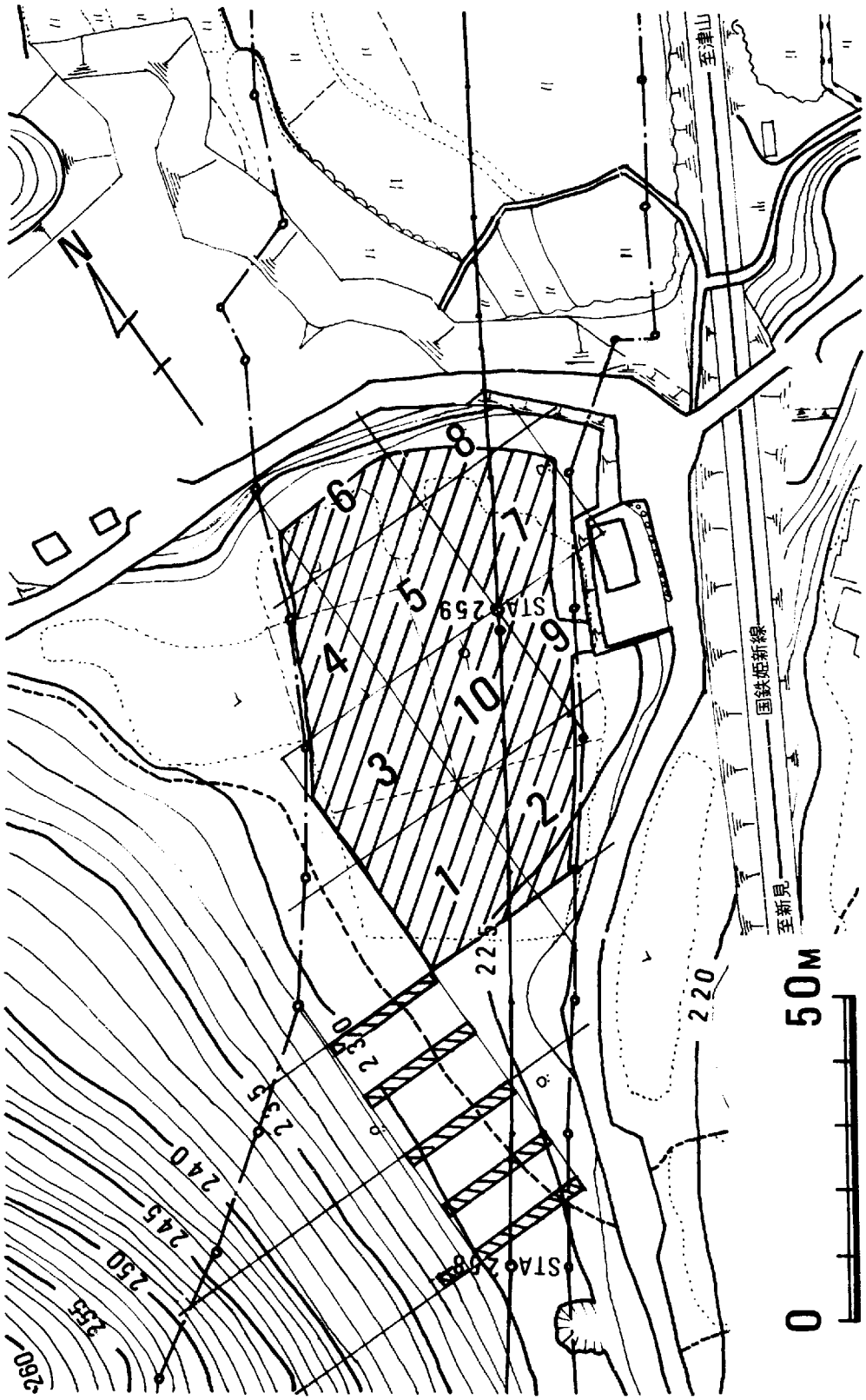
10月29日（火）　10G表土除去，遺構検出，縄文式土器，弥生式土器若干出土。

10月30日（水）　10G表土除去，遺構検出，土器洗い。

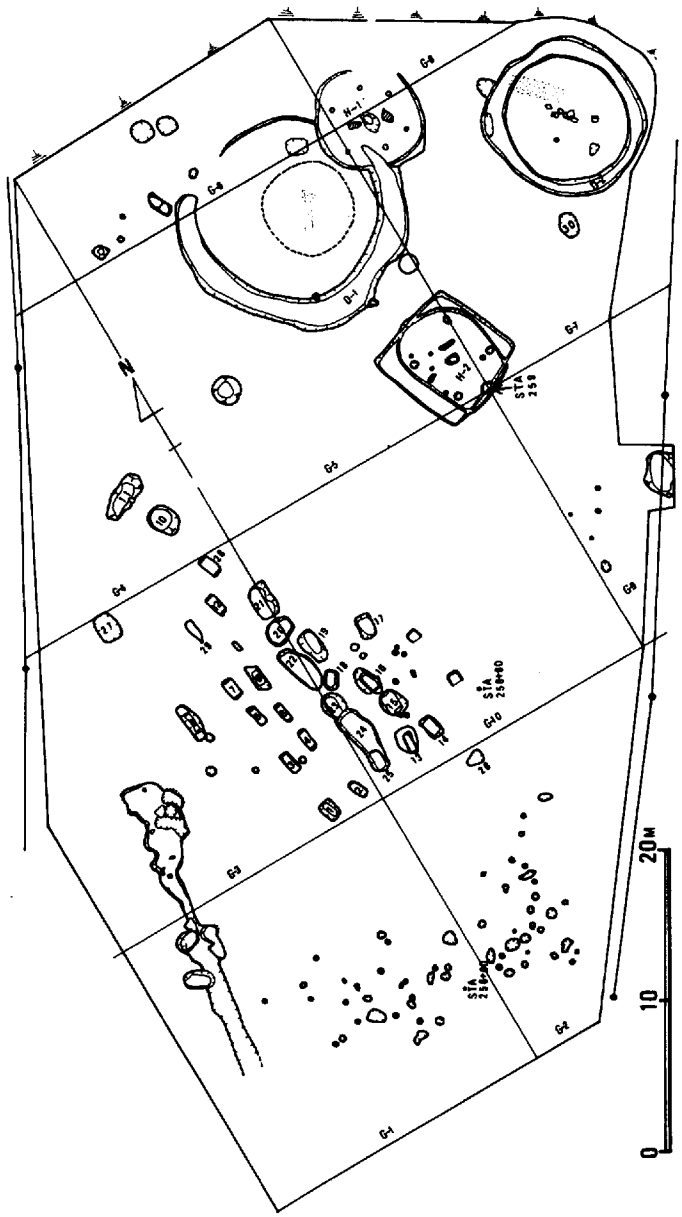
10月31日（木）　10G表土除去，発掘風景，全体写真撮影。

11月1日（金）　10G遺構検出，土壙群10個確認，遺構検出状態写真撮影，土壙掘り下げ開始。

11月２日（土）　土壙群掘り下げ，縄文式土器多数出土。
11月５日（火）　土壙セクション実測。３Ｇ掘り下げ，４Ｇトレンチ設定，掘り下げ。
11月６日（水）　土壙群畔取りはずし，セクション実測，清掃，全体写真，部分写真，４Ｇトレンチ掘り下げ。
11月７日（木）　会議（津山）
11月８日（金）　土壙群平板実測，４Ｇトレンチ掘り下げ。
11月９日（土）　その他のピット実測，レベリング，４Ｇトレンチ，セクション実測，10Ｇトレンチ設定掘り下げ，レベリング，１Ｇトレント再掘り下げ。
11月11日（月）　１Ｇトレンチ掘り下げ，写真，実測，４Ｇトレンチ，セクション写真，10Ｇトレンチ，セクション写真，実測，器材洗い。
11月12日（火）　器材搬出，打ち上げ。


N
至津山
国鉄姫新線
至新見
STA 259
STA 268
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
220
225
230
235
240
245
250
255
260
0
50M

第1図　青地遺跡地形図



第２図　青地遺跡遺構配置図Ｓ＝１：500

第2章 遺　　構

本遺跡では，次のような遺構が検出されたが，遺構検出面は表土直下である。土壙（墓）群，住居址，周溝，その他である。

1　土壙（墓）群（第2，3図，表1）及び出土遺物。

遺跡の西方に列状に群集して検出された。これら土壙は，ほとんどが，数年前までゴボウを植えた畑に位置するためにズタズタに切断されており，たまたま土壙の長軸方向と，畝の方向が，ほぼ直交していたために，やっと残っていたものである。土壙の埋土は，黒ぼこが上層となっており，下層は暗褐色土で，地山は黄色土である。いずれの土壙も北側の方が残りがよい。これら土壙は，形状で2つに分けることができる。1つは，長方形土壙であり，他は楕円形あるいは不定形土壙である。長方形土壙は，さらに2種に分けられる。すなわち1つは小口溝を有するものであり，他は小口溝の無いものである。この長方形で小口溝を有する土壙は，弥生時代に墓として使用される例がある。長方形土壙の大きさは，一定の数値を示している。長さ170～130cm，巾88～43cmである。№9は2段作りになっており，下段は長さ137cm，巾55cmで上記の数値内に入る。この数値から，小口溝の有無に関係なく長方形土壙は，墓として使用された土壙であると考えてよいのではなかろうか。この長方形土壙からは遺物としては，弥生式土器の細片と縄文式土器の細片が出土しているが，縄文式土器片は，上層の黒ぼこからの出土であって後の埋積と考えられる。したがってこの土壙の時期は弥生時代と考えている。

不定形あるいは楕円形土壙は，深さが平均25cmで，浅鉢状の底を示していて，そのほとんどが縄文式土器片を多少出土している。№21は上層の黒ぼこから弥生中期の壺形土器の口縁部を出土し，下層の褐色土層から条痕文土器の口縁部及び縄文土器を出土している。№27は，褐色土層から，明らかに1個体と思われる押引文と沈線文からなる土器を出土し，№22は，条痕文土器のみを出土している。№19も同様である。このように不定形あるいは楕円形土壙の中には，縄文時代の土壙と考えられるものがある。

長方形土壙と楕円形土壙との切り合いを№25と№24で確認したところ，№25の長方形土壙が新しいことが判明した。したがって長方形土壙の時期は，弥生中期よりも新しく，不定形土壙は弥生中期～縄文時代に比定できる。

№30は，弥生式土器のみを出土する土壙であるが，他の土壙と位置的に離れており，住居址との関連性の方が強い。

土壙出土遺物

土壙出土の遺物は前述したように縄文式土器，弥生式土器である。量的には非常に少ない。以下図示したものについて若干説明を加える。

表1　土壙一覧表

	長さ	巾	深さ	形	小口溝	遺物
1	135	65	76	長方	無	無
2	135	53	33	〃	〃	〃
3	160	71	26	〃	〃	〃
4	145	60	34	〃	有	〃
5	140	55	24	〃	〃	〃
6	135	43	38	〃	〃	〃
7	130	77	23	〃	〃	〃
8	170	83	43	〃	無	〃
9	266	88	55	〃	〃	〃
10	215	180	22	ダ円	〃	縄文
11	332	134	38	〃	〃	縄弥
12	145	60	5	長方	有	無
13	150	60	70	〃	無	〃
14	145	88	50	〃	〃	〃
15	170	142	72	〃	有	縄文
16	145	72	68	〃	無	無
17	165	108	42	不定	〃	縄文
18	135	86	23	ダ円	〃	〃
19	230	120	27	〃	〃	〃
20	195	155	21	〃	〃	〃
21	240	146	25	不定	〃	縄弥
22	350	150	37	ダ円	〃	縄文
23	190	140	26	〃	〃	無
24	470	170	40	〃	〃	縄弥
25	150	85	59	長方	〃	無
26	110	90	27	ダ円	〃	〃
27	190	145	10	〃	〃	縄文
28	148	75	23	長方	有	無
29	150	56	10	〃	無	〃
30	155	120	20	ダ円	〃	弥生

土壙№27出土縄文式土器（第4図(1)）は，1個体と思われるが，直接，接合できたのは体部の1部だけである。口縁上面には凹凸が見られ，口縁端部には刻み目をつける。口縁外面には曲線的な沈線文と押し引きした刺突文が施され，その下には貼り付け突帯を作り，突帯に押し引きがある。その下には波状の沈線（推定）がある。その下は横方向の沈線があり，つづいて縦方向の沈線が見られる。縦方向の沈線は体部上方は明瞭であるが，下方はしだいに浅く不明瞭となっていき，やがて底部に近くなると，無文となる。土器の厚みは1.3cmと極めて厚く，胎土に繊維は含まない。焼成は良好で硬く，色調は外面褐色で内面は黒褐色を呈している。この土器に極めて類似しているものが，早風（はやかぜ）遺跡C地点（註1）にみられる。時期は，縄文時代早期末と考えられる。

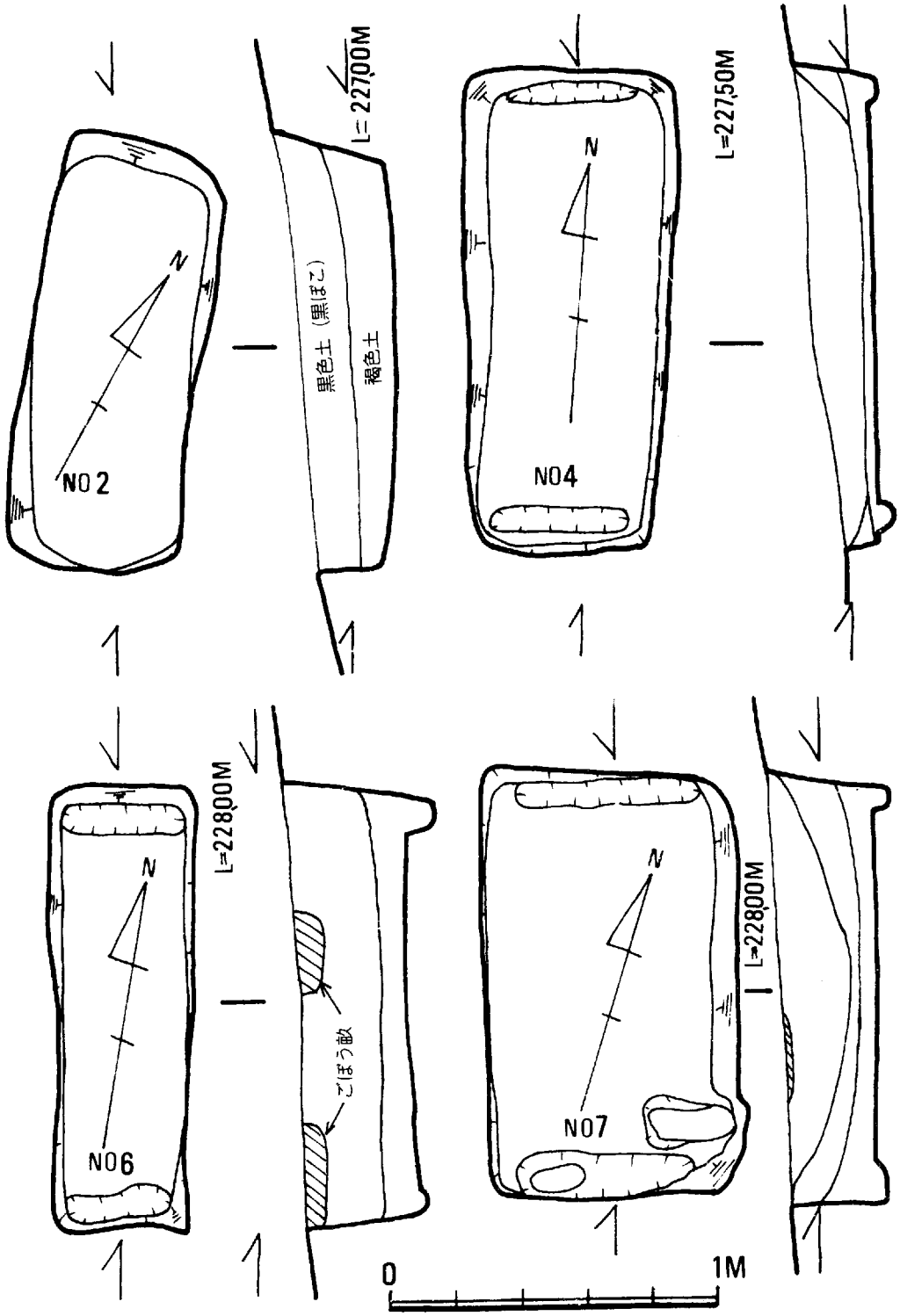
土壙№20出土縄文式土器（第4図(2)）は，すべて条痕文土器で，(1)はやや厚手で厚み0.8cmあり胎土に砂粒を多く含み，焼きの良い褐色の土器である。(2)～(4)・(7)は同一個体と思われ，厚さ0.6cmと薄く，胎土に砂粒は少なく，焼きは良いが黄褐色を呈する。(5)は内面が黒色のほかは(2)と同じ。(6)は外面褐色，内面黒色で，黒母を多く含む。

土壙№22出土縄文式土器（第4図(2)）は，いずれも条痕文土器である。(1)は表裏条痕文土器である。

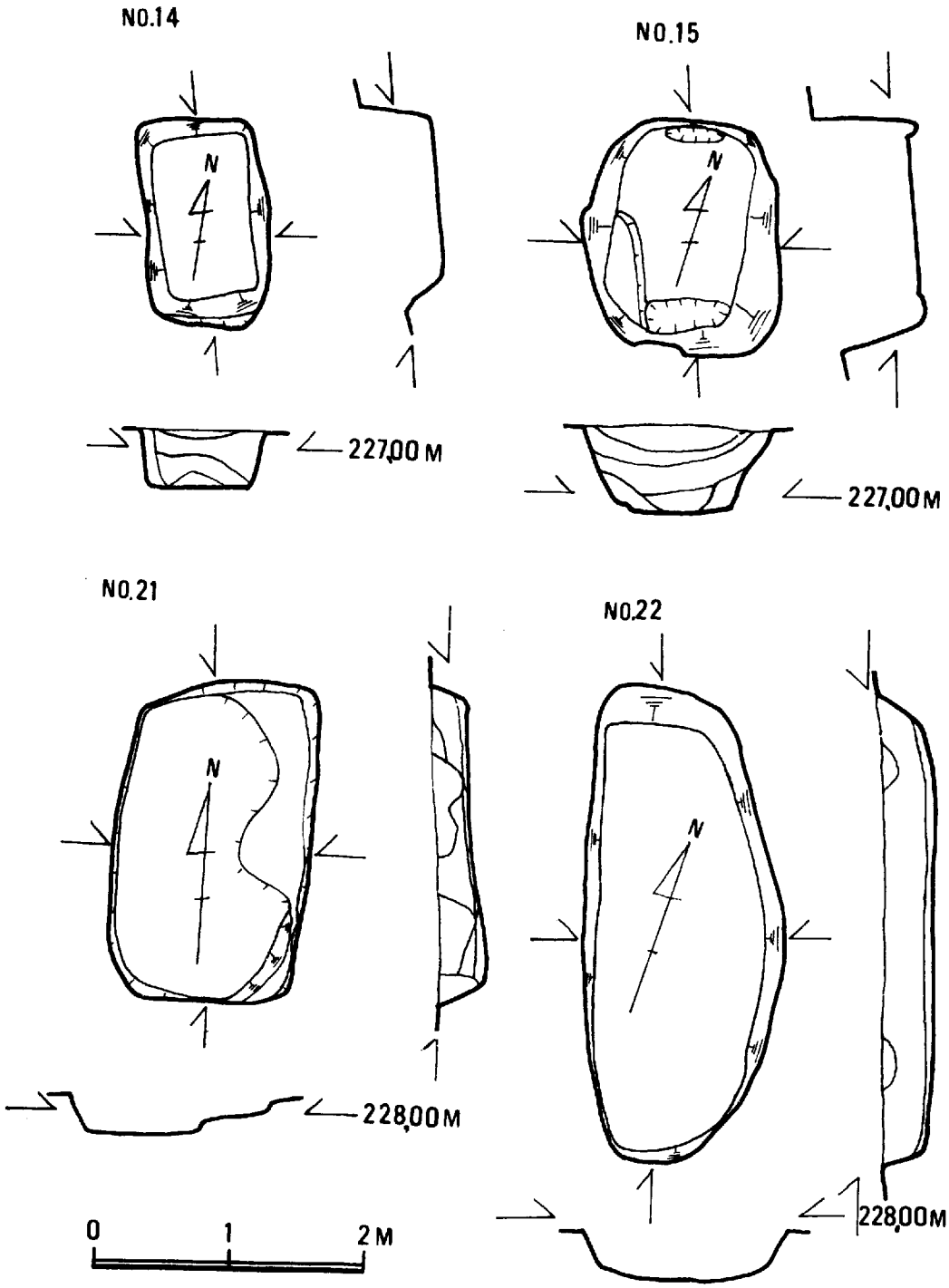
土壙№21出土縄文式土器（第4図(2)）の(1)・(2)は，条痕文土器の口縁部である。(1)は口縁端部が平らに作られ，部分的に細かい刻み目が見られる。(3)は縄文ある土器，(4)は条痕文土器，(5)は沈線文土器である。

土壙№19出土縄文式土器（第4図(2)）は，条痕文土器の口縁部であり，沈線文が見られる。

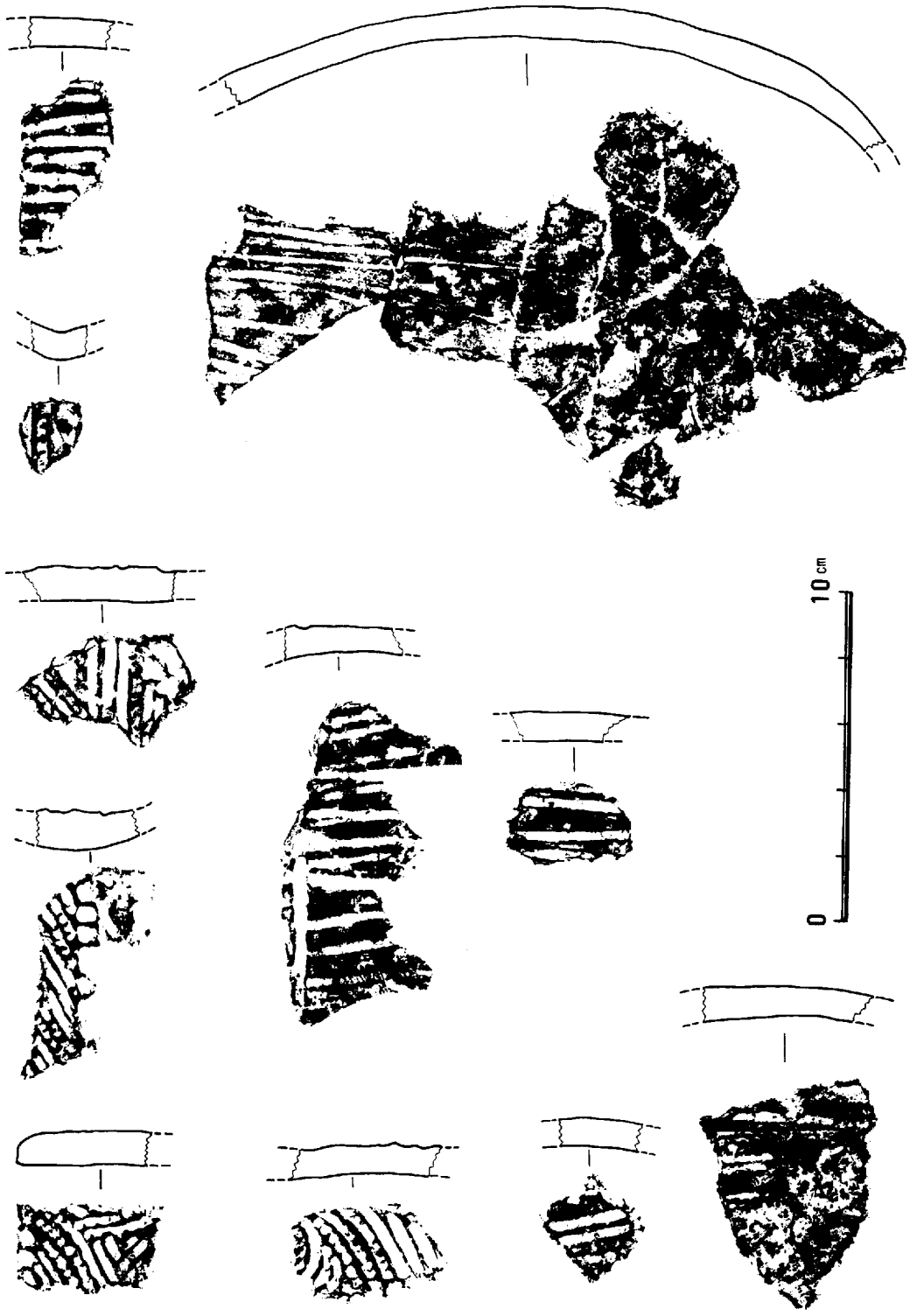
土壙№21出土弥生式土器（第4図(3)）は，壺形土器の口縁部から頸部にかけての破片で，口縁端上面には細かい線の波状文，口縁端外面には，刻み目，その下には指頭圧痕がつく。つづいて断面三角形の四条の突帯が貼り付けられ，それらには刻み目が施こされる。その下には櫛状工具による縦方向の直線文を施こし，その後に横方向の直線文と波状文とを交互に施こしている。推定口径は25cm，胎土は砂粒が少なく，焼きは良好で，茶褐色を呈する。時期は弥生中期に比定できる。


L=227.00M
黒色土（黒ぼこ）
褐色土
N
NO2
L=227.50M
NO4
L=228.00M
ごぼう畝
NO6
NO7
L=228.00M
0
1M

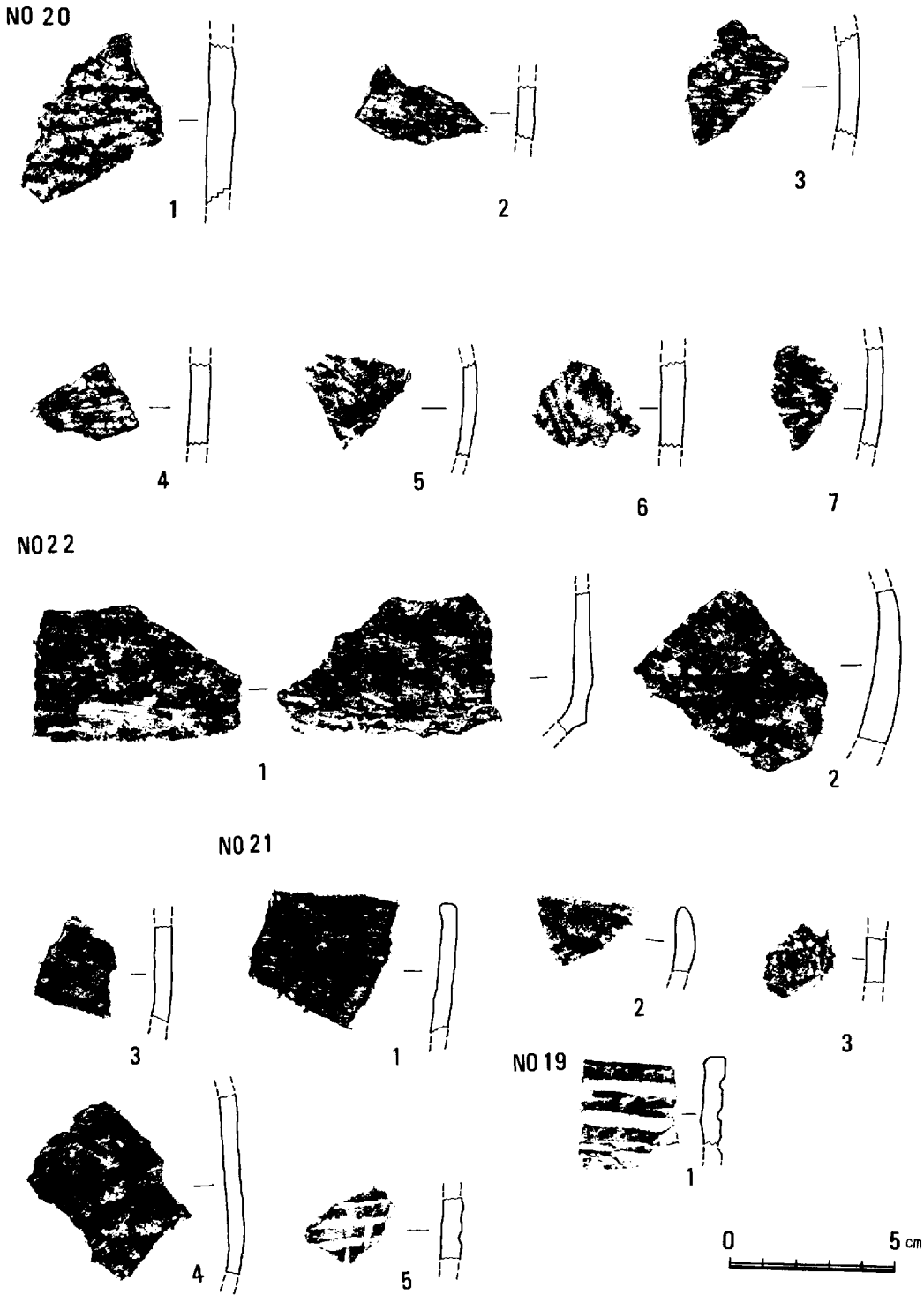
第３－１図　土壙実測図



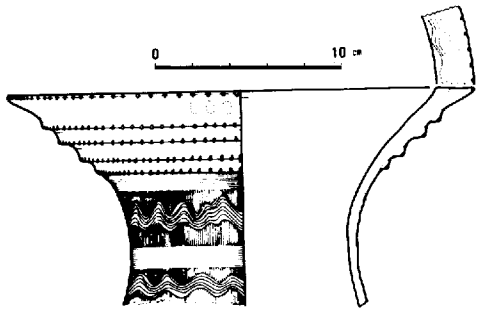
第３－２図　土壙実測図



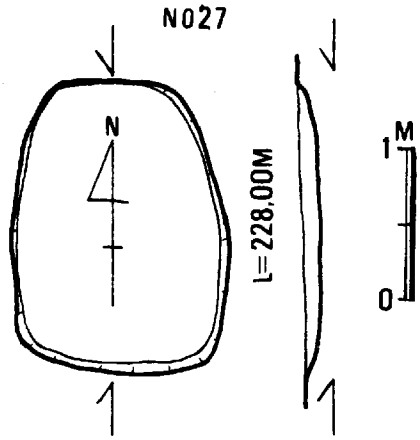
第４－１図　土壙No27出土縄文式土器（１個体）

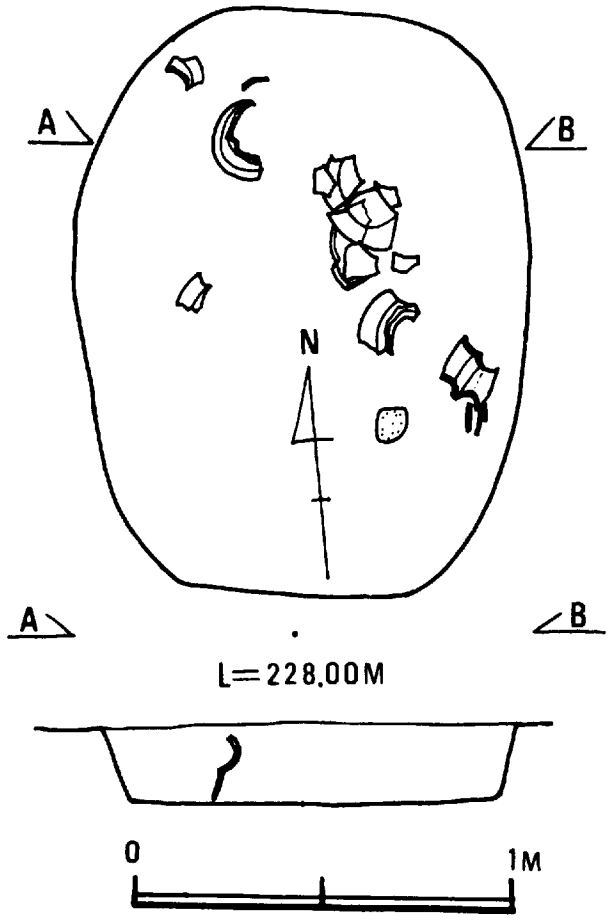


第４－２図　土壙出土縄文式土器



第4－3図　土壙No21出土土器





第3－3図　土壙実測図

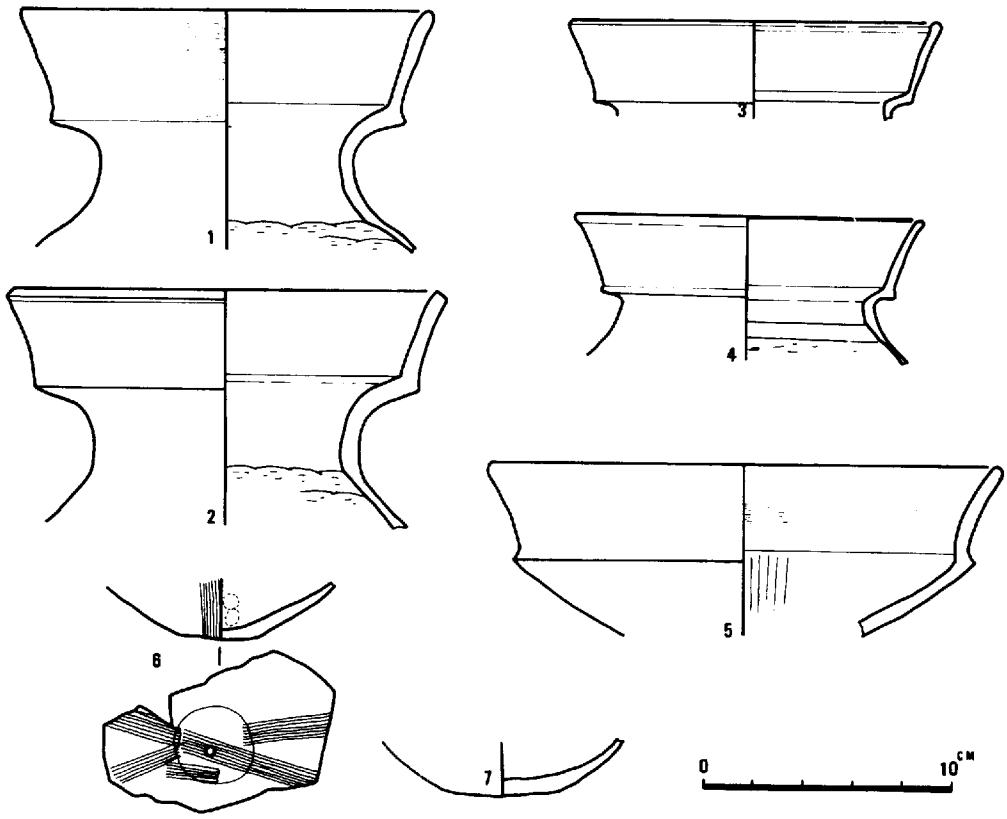
（第4図－4）

1は甕形土器で上方に拡張する口縁をもち，体部内面にヘラ削りがみられる。**2**も上方に拡張する口縁を持ち，体部内面ヘラ削りであるが，口縁端部を平にされている。**3・4**は，**1・2**に比べて器壁が薄手に作られている。**5**は，高杯形土器で上方に外反しながら拡張する口縁をもつ。**6**は，甕形土器の底部で平底ではあるが，櫛目は，体部の続きである。底部中央には円孔があき，こしきとして使用されたのであろう。

7も甕形土器の底部である。以上の遺物から土壙№30の時期は弥生終末に比定できる。

2　住居址及び出土遺物

本遺跡では，3軒の竪穴式住居址が検出された。



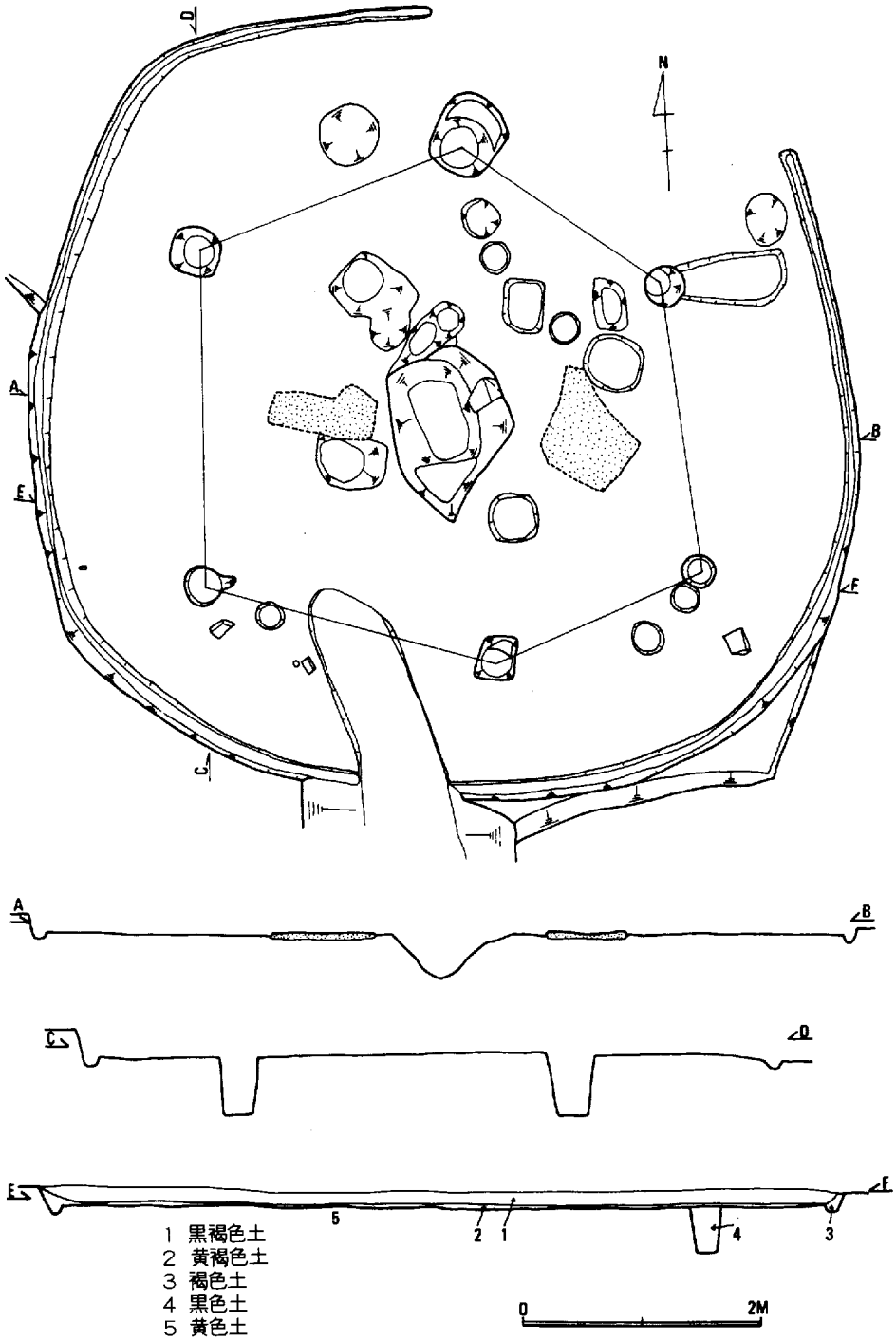
第４－４図　土壙No30出土弥生式土器

1号住居址（第５図―１）

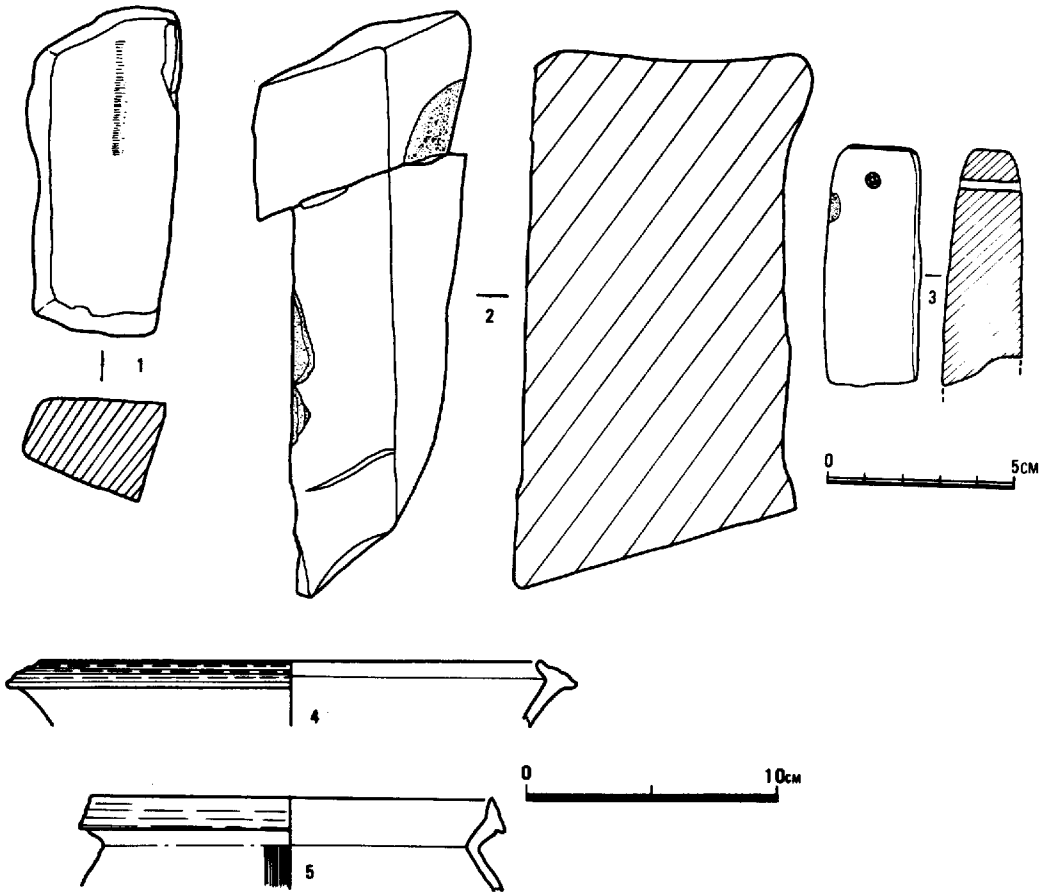
遺跡の北端に検出された東西約７m，南北約6.8 m の不整円形の竪穴式住居址である。残りは南西隅が最も良く，北東隅が最も悪い。深さは26cm～０cmで，壁帯溝は北東隅で消えているほか全部巡っていて，その深さは７～０cmである。柱穴は６本で，直径27～50cmの円形，深さ37cm～47cmである。柱間は，北から時計回りで200，245，185，250，280，235cmと，まちまちである。中央にはピットがあり，大きさは長さ150cm，巾100cmの長方形で，深さは37cmである。炉址は２ケ所検出され，いずれも赤褐色に焼けしまっており，大きさもほぼ同じぐらいである。その他数個のピットが検出されたが，いずれも柱穴と比べて浅い。床面から出土した遺物から弥生中期の住居址と考えられる。

1号住居址出土遺物（第５図―２）

住居址からは，縄文式土器片も出土しているが，ここでは床面付着の遺物のみ図示した。**1**は，黄灰色の軟質の砥石である。**2**は，灰褐色の砥石で80cmほど離れていたものが接合したものである。**3**は，黄白色のきめの小さい軟質の粘板岩製砥石で，円孔を有す。携帯用と思われる。**4**は，口縁部が，内傾し上下に拡張し，口縁端面に３条の凹線を有した甕形土器である。**5**は，口縁端部が上下に肥厚し，口縁端面には退化した凹線を有し，「く」の字状口縁部をもつ甕形土器である。



第５－１図　１号住居址実測図（レベルは228.00m）



第５－２図　１号住居址出土遺物

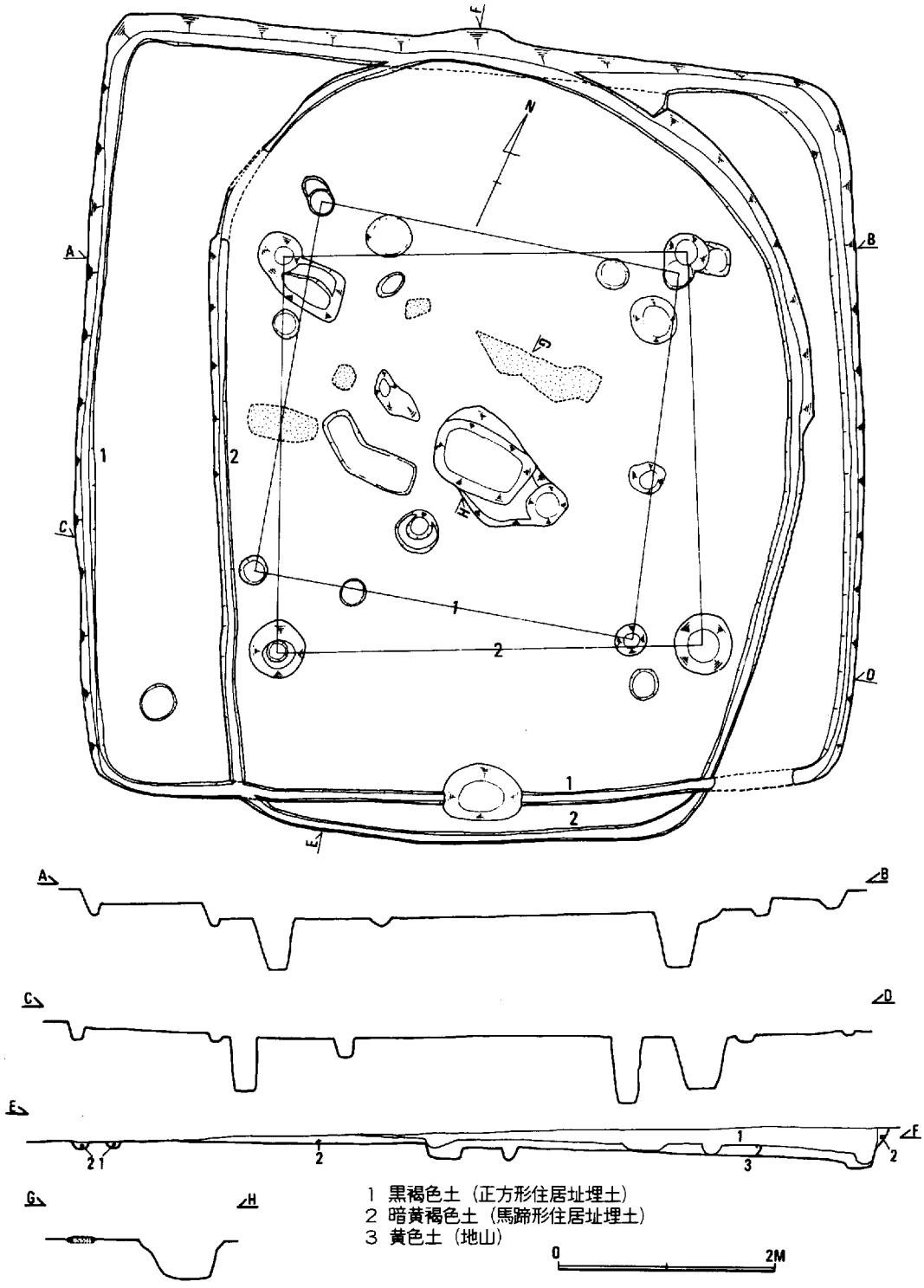
２号住居址（第６図―１）

１号住居址の南９ｍで検出された竪穴式住居址で,長さ7.5ｍ，巾 5.5～4.2ｍ深さ０～30㎝を測る不定形な馬蹄形状の プランを呈す。壁帯溝を有し，巾約10㎝深さ約５㎝で 断面形は逆台形をしめす。柱穴は明らかでない，長さ1.2ｍ巾0.7ｍの長方形プランの中央ピットを有する。炉址は，平坦な火所として４ケ所に認められた。遺物からみて弥生中期末に比定したい。

３号住居址（第６図―１）

２号住居址を切って同じ位置で検出された方形プランの竪穴式住居址であり，一辺 6.5ｍ 深さ０～25㎝を測る。壁帯溝を有し，巾約10㎝深さ約５㎝で断面形は逆台形をしめす。柱穴は４本あり直径43～55㎝深さ約50㎝を測る。炉址は，ほぼ中央に平坦な火所として認められた。中央ピットは長さ0.9ｍ巾0.6ｍ深さ35㎝を測る。また南端には長径0.8ｍ短径0.5ｍ深さ30㎝の楕円形ピットが検出された。遺物から時期は弥生終末に比定したい。

なお他に４本の柱穴が検出され直径25～28㎝深さ約45㎝を測り，大きさ・深さ・柱間などから１つのまとまりをもつことからもう１軒の住居址が存在した可能性もある。



第6－1図　2，3号住居址実測図（レベルは227.00m）

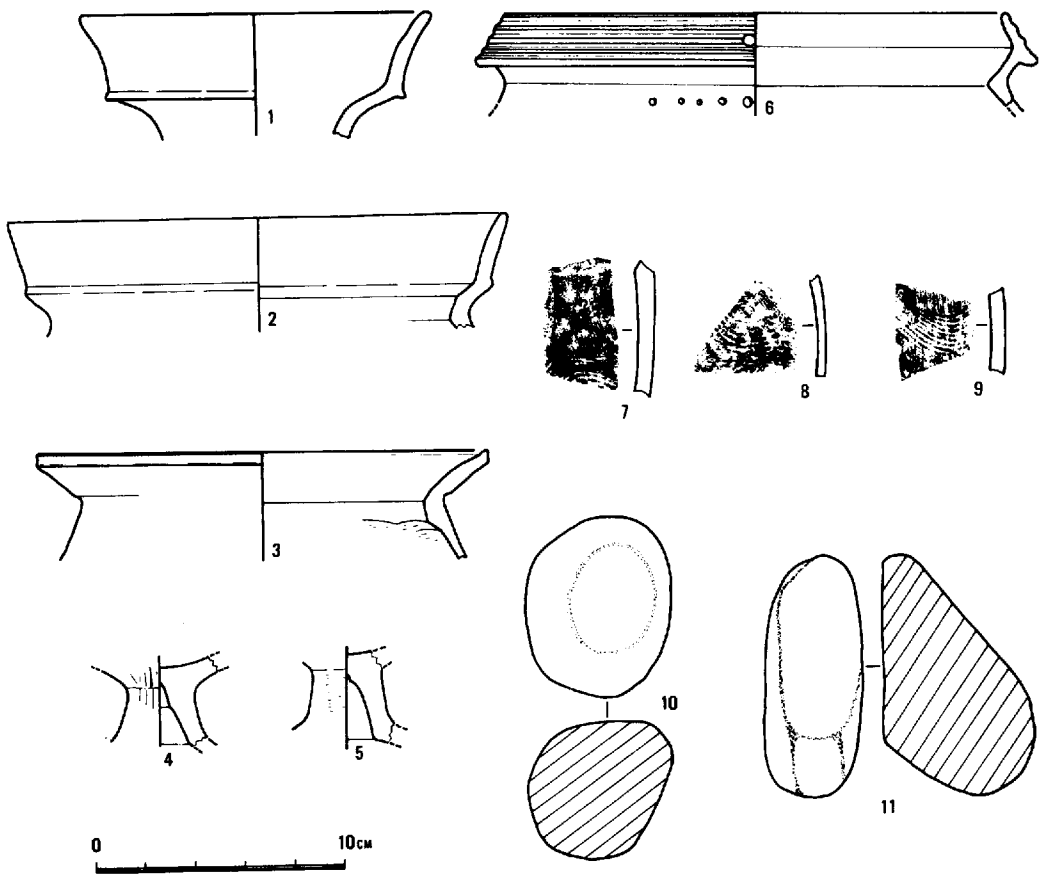
2・3号住居址出土遺物（第6図—2）

2・3号住居址出土の遺物はわずかしかない。**1～5**は，正方形住居址埋土から出土した遺物で**6～9**は，馬蹄形住居址埋土からの遺物である。**1**は，口縁部が外反しながら上方へ拡張された甕形土器で，胎土は良質粘土であり，焼きのよい丹塗りの土器である。**2**も甕形土器で，黄白色の焼きの良くない土器である。**3**は頸部から急に外反する口縁部をもち，口縁端部を少しつまみあげている。**4・5**は，短脚の高杯形土器の脚である。**6**は，口縁端部を上下に肥厚させ口縁端面に4条の凹線文を施し，円形浮文をつけ，頸部には刺突文がみられる。**7～9**は，波状文のついた土器片である。**10・11**は，滑石と思われる。

3　周溝及び出土遺物（第2図）

2本の円形周溝が発掘区北端に検出された。いずれも主体部の削平された円墳である。

周溝1は，1号住居址を切って西に位置する。内径12mの円形溝で巾1.3～2.3m，深さ0～0.5mを測る。その中央部には「七人塚」という近世の史跡があった。「七人塚」が作られた時にはま



第6－2図　2，3号住居址出土遺物

だ墳丘があったと思われる。溝の埋土は大きく２層に分けられる。上層は黒色土（黒ぼこ）で，下層は黒褐色土である。溝中から検出された土師器壺・須恵器甕などの遺物からみて後期古墳と考えられる。

周溝１出土遺物（第７図）

最も残りのよい南側と東側の底部から土師器２点と須恵器１点が出土した。上層の黒ぼこ層からは縄文式土器も出土しているが，ここでは，取り扱わない。**1**は，土師質甕形土器で，口径28㎝，器高31㎝のずんぐりした器壁の厚い土器である。胎土に，砂粒を多く含み，焼成は良く茶褐色を呈する。**2**も土師質甕形土器で，口径16㎝，器高23㎝，胎土に砂粒を多く含み，焼成は良く褐色を呈する。**3**は須恵器甕で，口径10㎝，器高11.4㎝で，口縁端部内面に陵線をもち，口縁部外面に波状文を施こし，頸部には細かい波状文，体部と肩部との境に鈍い凹線をもち底部は円く作られている。円孔は体部の最大径の所にあいている。６世紀前葉の時期にあたるであろう。

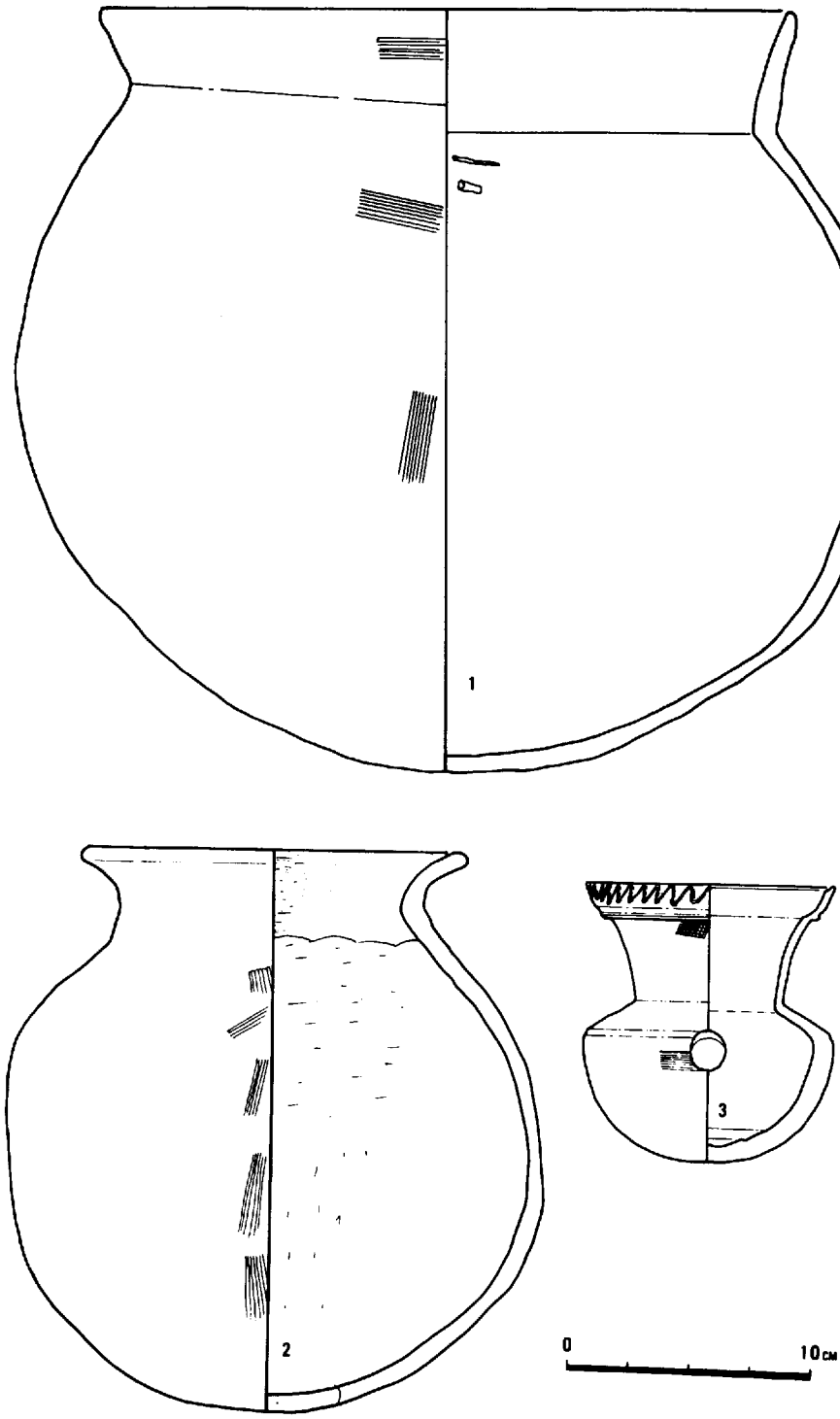
周溝２（第２図）

周溝１から東に６ｍ離れて検出した内径８ｍ，巾120～170㎝，深さ10～25㎝の円墳で，主体部は削平されている。しかし中央部には径10㎝～50㎝大の河原石が散乱しており，箱式石棺があったようである。河原石の下から出土した遺物からみて６世紀前葉と思われる。

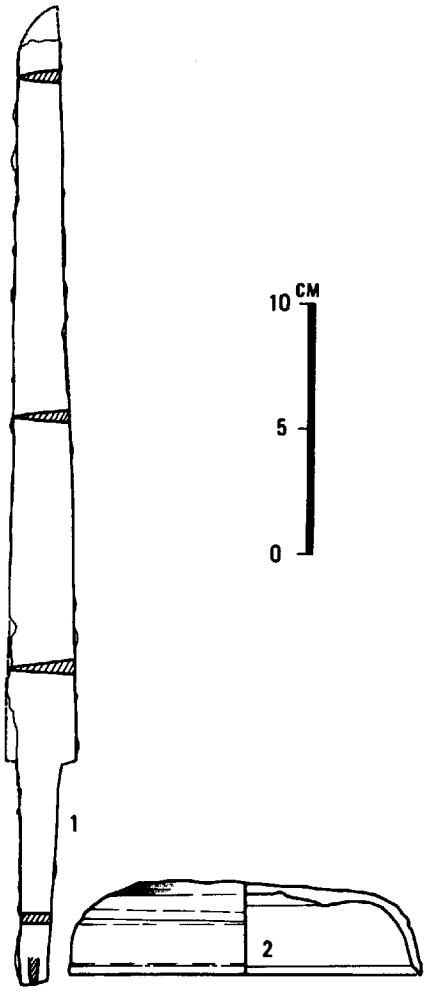
周溝２に伴う遺物（第８図）

溝の中から出土した遺物は皆無である。ここに載せた図は，発掘調査終了後に河原石の下で地元の人が採集したものである。**1**は，鉄製直刀で長さ39㎝，巾2.9㎝，厚さ0.6㎝である。**2**は，須恵器杯蓋で，口径14㎝，器高3.8㎝，口縁端内面に稜線を持ち，体部と天井部との境に鈍い凹線をもつ。

その他発掘区の南東に溝状遺構が検出されたが，遺物は皆無である。時期も用途も不明。



第7図　周溝1出土遺物



第8図　周溝2に伴う遺物

第3章　遺構に伴わない遺物

遺構に伴わない遺物としては，縄文式土器が最も多く，つづいて弥生式土器，石器及び剝片がある。

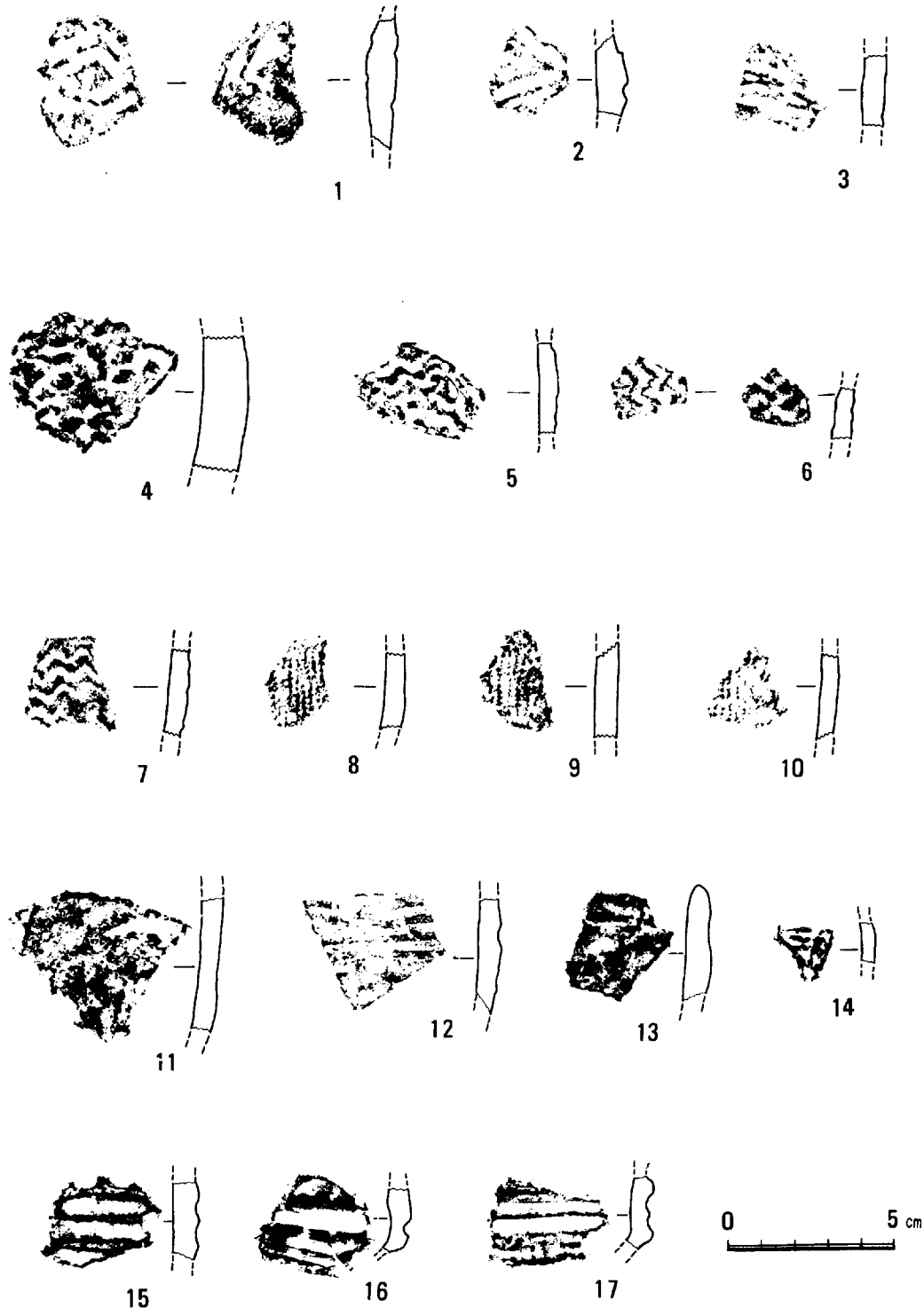
縄文式土器（第9図—1・2）には押型文土器，縄文土器，沈線文土器，条痕文土器等がみられ，すべて繊維を含まない。押型文土器には，楕円文，山形文の二種がある。以下第9図—1の説明を加える。**1・2**は粗大楕円で，**3**は楕円，**4**も楕円文であるが器壁は1.4cmもある。**5**は山形文，**6**は表が山形文で裏は楕円文である。**7**は山形文。**8～10**は縄文ある土器で，**11**は無文，**12，13**は条痕文土器である。**14**は綾杉文のようである。**15～17**は凹線文が見られる。

第9図—2は1号住居址と周溝1の埋土上層から出土したもので，条痕文土器が多い。**14**は二列の刺突文，**12・15・16**は凹線が見られる。

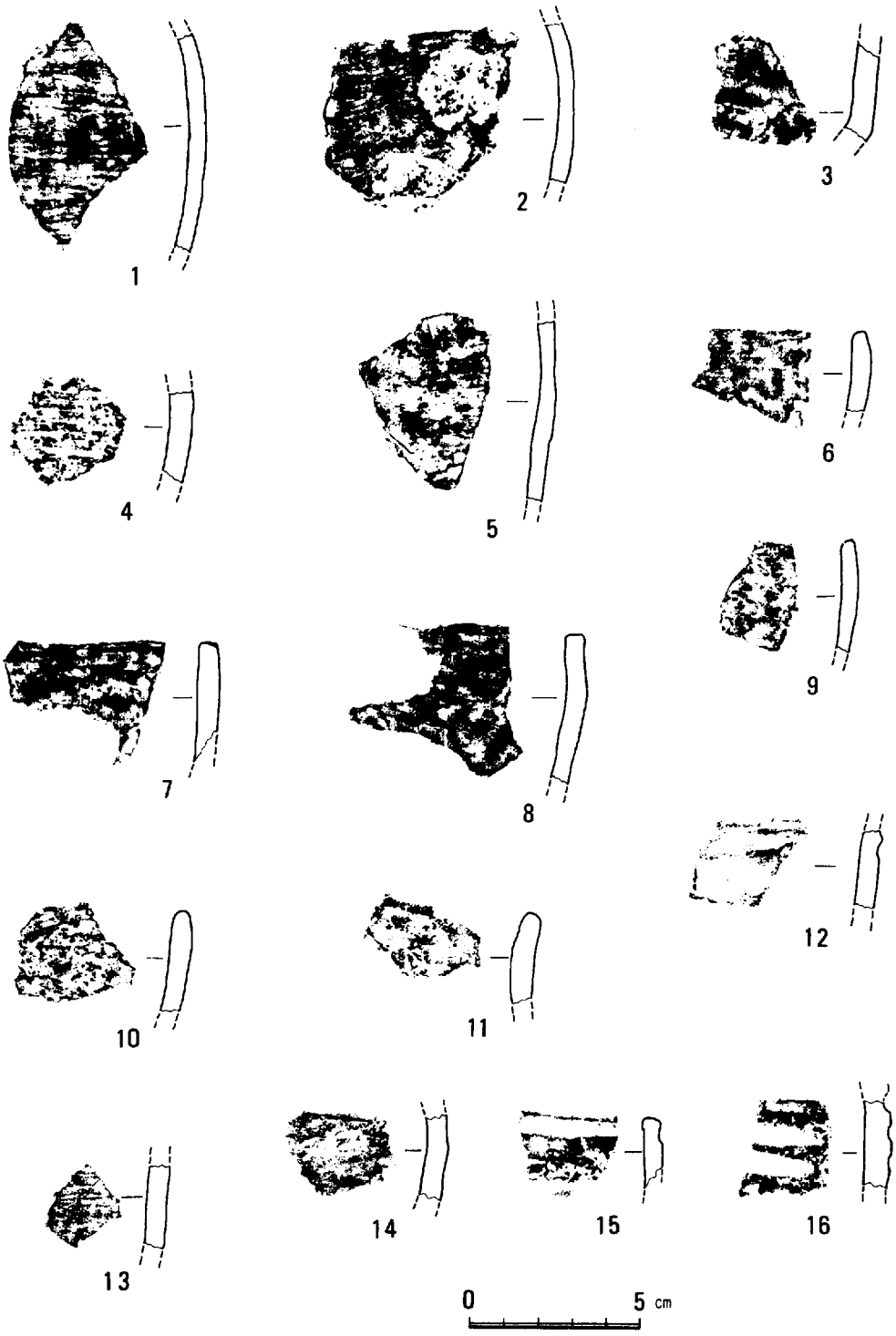
以上縄文式土器の条痕文土器は土壙周辺でも1号住居址周辺でも出土しているし，縄文ある土器も同様両地区から出土している。しかし押型文土器は，1号住居址周辺でしか出土していない。土壙と1号住居址との距離は約30mある。これら縄文式土器は，前述した早風（はやかぜ）遺跡出土のものときわめて類似している。時期は縄文時代早期末に比定したい。

弥生式土器は，中期のものと考えられる内外クシ目整形のある破片が若干出土している。

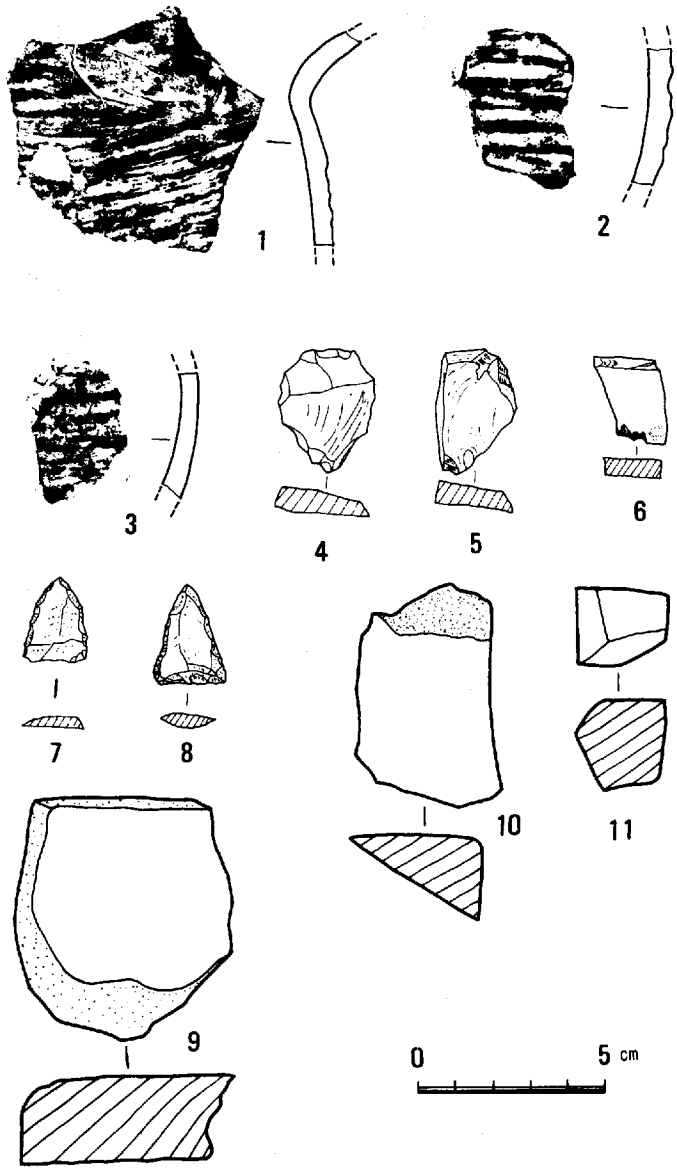
第10図の**1～3**は2号住居址埋土から出土したタタキ目のある土器である。**4**は赤色チャート片，**5・6**は黒曜石片である。サヌカイト片も数片出土しているが，石鏃は2点のみである。その他砥石が若干見られる。



第９－１図　遺構に伴わない縄文式土器



第９－２図　遺構に伴わない縄文式土器



第10図　その他の遺物

第4章 まとめにかえて

青地遺跡では，以上の遺構，遺物が見られたが，遺構については調査前に予想していたよりも住居址が少なく，予想外の古墳，土壙が検出され，遺物については，縄文式土器が最も多く出土し，遺物総量は極めて少ないという結果になった。これらの遺構，遺物から次のようなことが考えられる。縄文時代早期には，帝釈一野原一青地など中国山地は縄文人の生活の舞台になり得たと，そして弥生時代中期～古墳時代には，この地に定住した人々があったと，さらに古墳は，東の舌状台地にもあったかもしれない。したがって，この遺跡は，縄文遺跡時代にはじまり，弥生時代を経て古墳時代にわたる複合した遺跡であると言える。しかし最も注目できるのは，縄文式土器の出土であろう。縄文式土器の資料は新見市内では草間台地で見つかっているということ以外にはほとんど知られていない。なおこの発掘調査と併行して調査した大佐町の戸谷遺跡では，土壙№27出土の縄文式土器と同じ文様のものが見られる。これから西方へ行くに従い，縄文式土器の資料は増加してくるものと思われる。

新見市内では，埋蔵文化財の発掘調査は，今回が初めてであり，地域の人々の関心も低かったが今後しだいに高まって行くと思われる。この調査を契機として，埋蔵文化財に対する意識が高まれば幸いである。

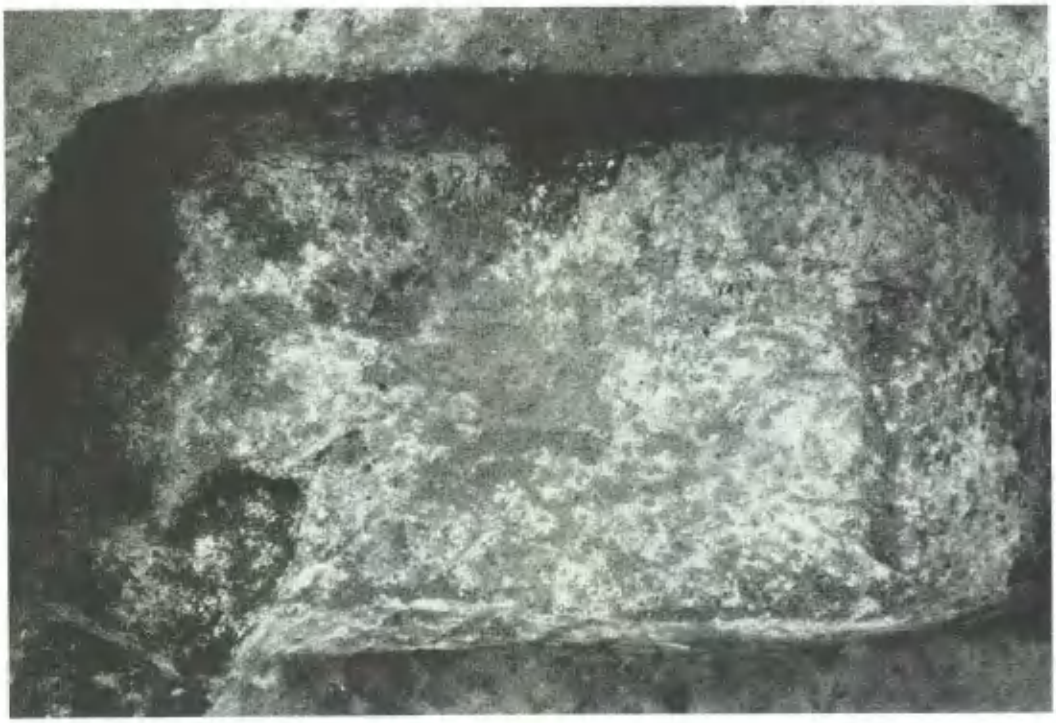
なお，この発掘調査に協力して下さった人々に感謝し，御礼申し上げる。

1．青地遺跡周辺航空写真（北東上空より）

2．青地遺跡住居址及び周溝（西より）

図版2

1．青地遺跡全体写真（南西より）



2．土壙No7

１．住居址１（東より）

２．住居址２（南より）

図版4

1．周溝1土器出土状況（北より）

2．周溝2（南より）

1．周溝・住居址検出状況（南より）

2．発掘風景（南西より）

図版６

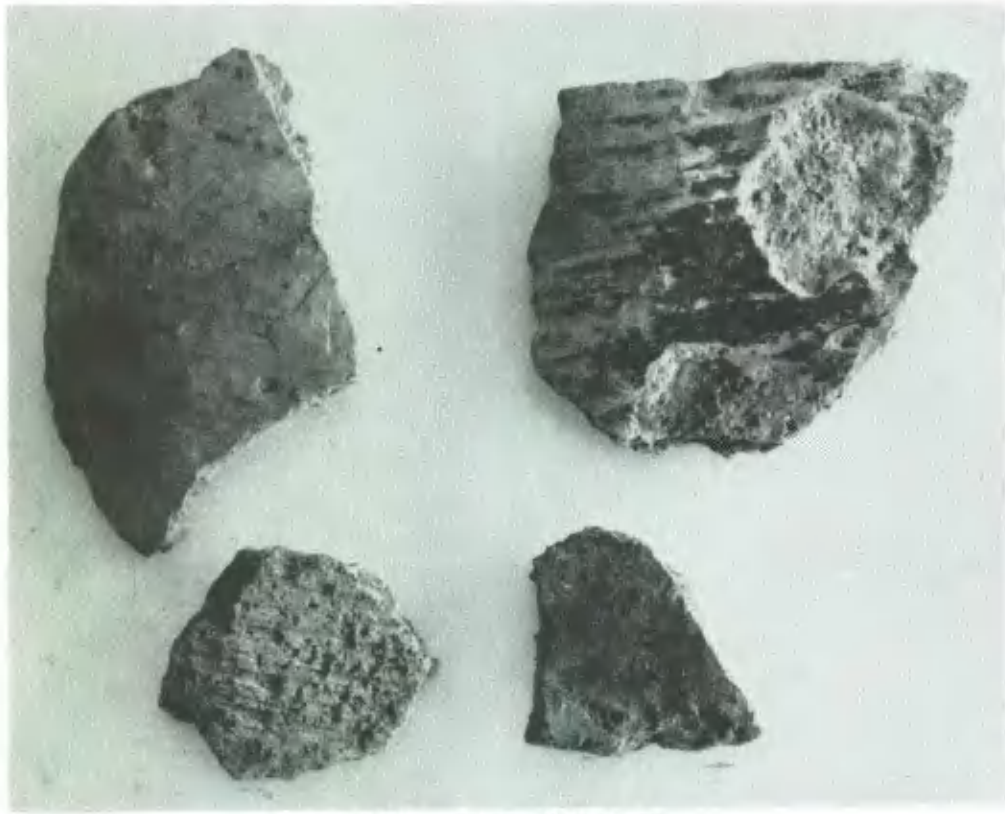
遺構に伴わない縄文式土器

1．土壙No20出土縄文式土器

2．土壙No21出土縄文式土器

図版8

土壙No27出土縄文式土器



1．住居址1埋土出土縄文式土器

2．周溝1埋土出土縄文式土器

図版10

土壙No30と出土遺物（$\frac{1}{3}$）

周溝1、2出土遺物（$\frac{1}{3}$）

図版12

(½)

(½)

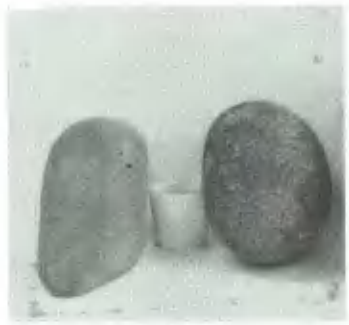
(1)

(½)

(½)

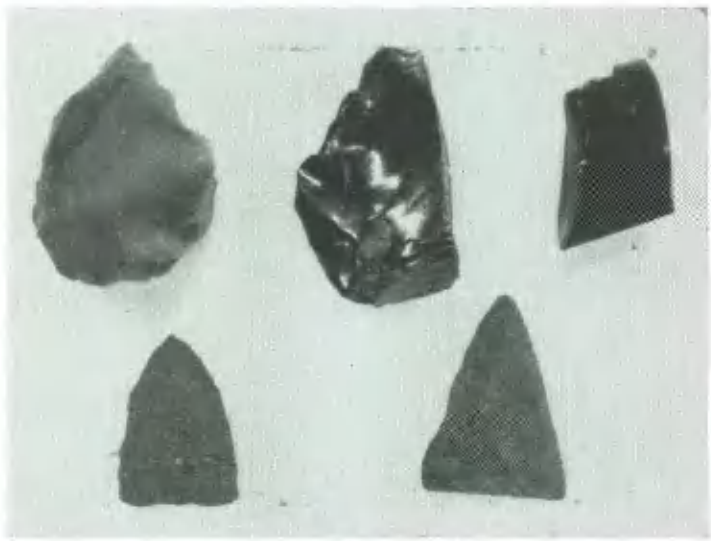
(½)

(½)

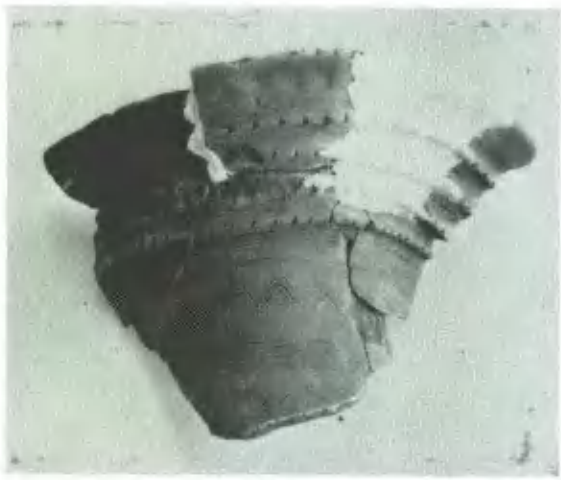


(½)

住居址1出土遺物



(1)



(1/2)

(1/2)

(1/2)

石器，その他

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 (11)

中国縦貫自動車道
建設に伴う発掘調査 6

昭和51年3月 印 刷
昭和51年3月 発 行

発 行 岡 山 県 教 育 委 員 会
印 刷 西尾総合印刷㈱野田支店